

巨摩・若江北遺跡発掘調査報告

— 第4次 —

都市計画道路大阪中央環状線立体交差
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995.3

(財)大阪文化財センター

巨摩・若江北遺跡発掘調査報告

— 第4次 —

都市計画道路大阪中央環状線立体交差
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(財)大阪文化財センター



3号方形周溝墓全景（西から）



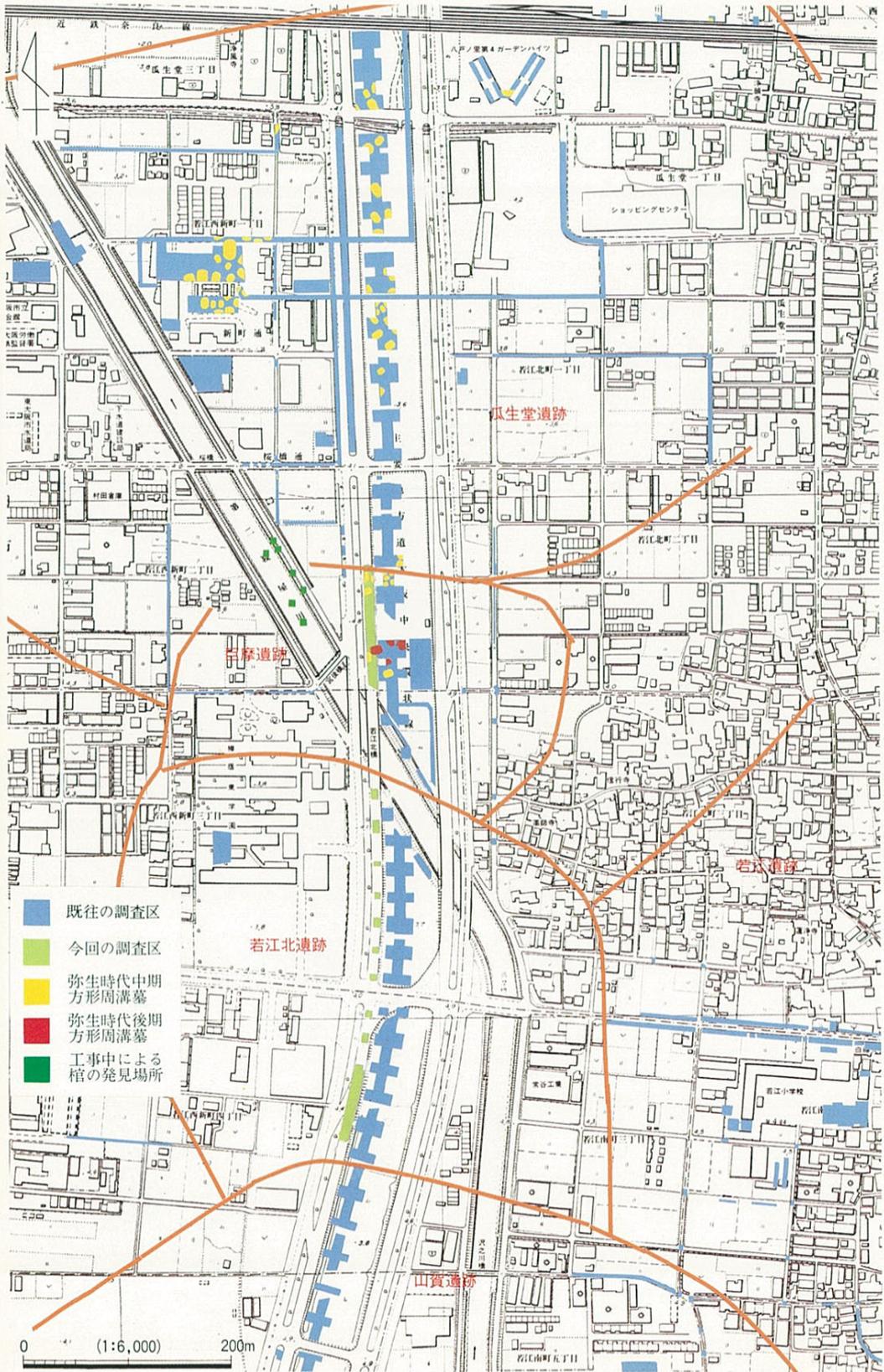
3号方形周溝墓第2主体部（北東から）



10号方形周溝墓第4主体部（南から）



10号方形周溝墓第3～5主体部（東から）



周辺の調査地と方形周溝墓の分布



はじめに

当センターは近畿自動車道天理～吹田線に伴う発掘調査を1976年から開始して以来10年間を費やして全ての調査を終了した。この後、近畿自動車道天理～吹田線に隣接する調査としては、さる1992年に巨摩・若江北遺跡を調査した。この調査は、都市計画道路大阪中央環状線仮設迂回路建設に伴うものである。

そして、この巨摩・若江北遺跡の第4次の発掘調査を実施することとなる。これは、大阪中央環状線と大阪東大阪線の立体化工事に伴う発掘調査である。周知のとおり中央環状線は多大な交通量であることから、北行と南行車線を同時に計画工事することは不可能であり、北行車線が先に計画された。ゆえに、この北行車線に位置するトレンチは近畿自動車道天理～吹田線で発掘調査した部分の西側に隣接することとなる。

今回の調査においては、巨摩遺跡側で弥生時代中期末の方形周溝墓を3基新たに検出したが、このうち11号方形周溝墓は周溝を含めた規模で南北約16m、東西は現存部だけでも約13mにおよぶ。これは瓜生堂遺跡の小阪ポンプ場で検出された学史上著名な2号方形周溝墓に次ぐ規模のものであった。

また、弥生時代後期の方形周溝墓は既往の調査における3号方形周溝墓の西側を発掘したことにより、墓の全貌を明らかにできた。埋葬施設は新たに土器棺が2基、木棺墓が4基確認されている。特に木棺内の人骨4体を大阪市立大学医学部の多賀谷昭先生が分析され、その結果をみると、被葬者は男女の2組であり夫婦であった可能性が高い。

方形周溝墓の被葬者は夫婦などの家族墓・世帯墓であった例は多いが、今回の調査では男性は西頭位、女性は東頭位に埋葬するという。これは、当時の葬制についての重要な発見となろう。

また、自然科学における各専門分野の研究者の協力を得ることができ、「自然科学分野からの成果」という章を設けることが出来た。これらは低湿地遺跡研究に貴重な資料を提供できたものと自負してもよいであろう。これはひとえに諸先生方のご協力の賜物であり、厚く御礼申し上げる。

当センターでは、大規模な発掘調査については概報・正報告の二本立ての報告書作成業務を実施してきた。本報告は概報ではなく、正報告として刊行するものである。今後、このスタイルのものが多くなるであろうことは時代の流れである。このことから、本報告が今後刊行されていくであろう報告書のひとつの見本となることは疑いがない。

最後に、調査の実施ならびに報告書作成にあたって、関係機関・関係各位のご指導、ご協力を賜ったことを深く感謝して、序の言葉としたい。

平成7年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市若江西新町に位置する都市計画道路大阪中央環状線立体交差建設に伴う巨摩遺跡、および若江北遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府八尾土木事務所より財団法人大阪文化財センターが委託を受け、調査課長中西靖人・主幹赤木克視、調査第1係長石神幸子の指導のもと、調査第1係主任技師片山彰一（写真）・同技師三好孝一・市本芳三・亀井聡（現地調査・遺物整理）を担当者として実施し、調査第1係主任技師村上年生・同技師山口誠治・若林邦彦・同専門調査員坪田恵、藤田由里、溝川陽子、調査第2係主任技師小野久隆の協力を得た。
3. 現地調査は平成5年10月1日から平成6年9月30日まで実施し、ひき続き長田分室にて整理作業を行い、平成7年3月31日を以て、報告書の作成を終了した。
4. 調査に要した費用835,554,540円（巨摩遺跡と若江北遺跡とも）は、すべて大阪府八尾土木事務所が負担した。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関の御指導、ならびに下記の諸氏・諸嬢の援助を賜った。記して感謝の意を表したい。
〔調査指導〕大楽康宏・阿部幸一・榎本哲・杉本清美（大阪府教育委員会）、秋山浩三（財大阪府埋蔵文化財協会）、田中清美・大庭重信（財大阪市文化財協会）、木建宏二・藤城泰・松田順一郎（財東大阪市文化財協会）、中達健一（大東市教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、川上洋一（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、前澤郁浩（大和高田市教育委員会）、橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、篠宮正（兵庫県立歴史博物館）、仲西盛雄（浦添市教育委員会）、大槻尚哉・佐藤邦昭（福島市教育委員会）、斉藤義弘（福島市振興公社）、深澤敦仁（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、多賀谷昭・阿部みき子（大阪市立大学）、高橋浩二（大阪大学）、金原正明（天理大学附属天理参考館）、松井章・光谷拓実（奈良国立文化財研究所）、泉拓良・植野浩三（奈良大学）、和田晴吾（立命館大学）、伊達宗泰（花園大学）、桑原久男（天理大学）、真家和生（大妻女子大学）、佐々木憲一（ハーヴァード大学）、細谷葵（ケンブリッジ大学）、金原正子（古環境研究所）
〔調査参加〕朝田公年、浅田尚子、池田幸雄、伊藤幸代、稲石純子、稲田望子、笠井勉、河合忍、葛下ゆかり、倉奈津子、小石ひとみ、小橋健司、佐々木和重、佐藤聖子、清水芳子、菅原祐子、伊達佳代、徳野裕昭、徳本悟、西山佳宏、信里芳紀、林大智、福海貴子、堀智美、増井英子、松永茂子、松本千年勢、森本めぐみ、矢野智子、山本桐子、山本宏子

3号方形周溝墓人骨分析 大阪市立大学解剖学第2教室 多賀谷昭

3号方形周溝墓人骨化学分析 財団法人大阪文化財センター 山口誠治
方形周溝墓主体部微遺体分析 天理大学附属天理参考館 金原正明・古環境研究所 金原正子
方形周溝墓木棺年輪年代測定 奈良国立文化財研究所 光谷拓実
花粉・珪藻分析 川崎地質株式会社 渡辺正巳
地震動による変形構造 財団法人東大阪市文化財協会 松田順一郎
3号方形周溝墓脂肪酸分析 京都府立山城郷土資料館 橋本清一
水田面足跡痕 大妻女子大学 真家和生

凡 例

- ・遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用い、平面的位置は国土座標軸第Ⅵ座標系に基づいた。本文中における座標の記載は、すべてm単位とする。
- ・方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては、小山正忠・竹原秀夫編1988『新版標準土色帖』第8版 農林水産省農林技術会議事務局監修・財団法人日本色研事業株式会社 色票監修に準拠した。
- ・巨摩遺跡の略称はKOM（KOMAsite）、若江北遺跡はWKK（WAKAEKITAsite）である。
- ・付図の遺構全体図の縮尺率は1/200、1/400である。本文内の挿図の縮尺率は1/20、1/40、1/100、1/200、1/250を基本とし、場合によっては任意とする。
- ・遺構名は付図の全体図あるいはトレンチ平面図に記入している。これ以外の本文中の挿図には原則として記入していない。必要のある場合のみ、適宜記入している。
- ・遺構平面図における断面位置は鉤形によって表現している。鉤形は見通しの先を表わす。
- ・遺構番号は各トレンチ毎に時代の新しいものから順に通し番号を設定した。
- ・遺物実測図の縮尺率は、石器の打製が2/3、磨製・礫器が1/2、1/3、土器が1/4、木器が1/1、1/2、1/3、1/4、1/6、金属その他が1/1、1/2である。口縁部残存率が1/6以下の図に関しては、口縁上端線を1点切る。断面の矢印はスス附着の範囲を示す。遺物番号に下線のある弥生土器は生駒西麓産である。
- ・遺物番号は、実測図版の最初から通し番号を設定した。
- ・遺物写真の縮尺率は任意である。遺物番号は実測図版と同一の番号に揃えている。
- ・木器に関する記述は、奈良国立文化財研究所1993『木器集成図録 近畿原始編』を参考にした。
- ・本書の執筆分担は目次に示し、第Ⅳ章第2節3～10については遺構を亀井が、遺物を三好が担当とした。編集は調査担当者が行なった。また、木製品の樹種鑑定は山口によるものである。

目 次

巻頭図版	巻頭図版 1	巨摩遺跡 3 号方形周溝墓全景 同上、第 2 主体部検出
	巻頭図版 2	同上 10 号方形周溝墓第 4 主体部 同上第 3～5 主体部
	巻頭図版 3	周辺の調査地と方形周溝墓の分布
	巻頭図版 4	3 I トレンチ沼状遺構出土朱塗盾

序 文
例 言
凡 例

第 I 章	調査に至る経緯と経過	石神幸子	1
第 II 章	調査の方法	市本芳三	2
第 III 章	位置と環境	三好孝一	4
第 IV 章	発掘調査の成果		
第 1 節	基本層序と遺構面	亀井聡	7
第 2 節	検出された遺構と遺物		
1.	第 1 面（古代～古墳時代中期）	市本	15
2.	第 2 面（古墳時代前期）	亀井	34
3.	第 3 面（弥生時代後期）	三好・亀井	49
4.	第 4 面（弥生時代中期末～後期初頭）	三好・亀井	89
5.	第 5 面（弥生時代中期後半）	三好・亀井	151
6.	第 6 面（弥生時代中期中頃）	三好・亀井	153
7.	第 7 面（弥生時代中期前半）	三好・亀井	155
8.	第 8 面（弥生時代中期前半）	三好・亀井	157
9.	第 9 面（弥生時代前期）	三好・亀井	165
10.	第 10 面（縄紋時代晩期）	三好・亀井	169
第 V 章	自然科学分野からの成果		
第 1 節	3 号方形周溝墓の人骨	多賀谷昭	172
第 2 節	3 号方形周溝墓人骨の化学分析	山口誠治	174
第 3 節	3・10・11 号方形周溝墓主体部における微遺体分析	金原正明・金原正子	178

第4節 3・10号方形周溝墓木棺の年輪年代法による検討	光谷拓実	182
第5節 若江北遺跡における花粉分析	渡辺正巳	184
第6節 若江北遺跡の堆積層にみられた地震動による変形構造	松田順一郎	191
第VI章 まとめ	三好・市本・亀井	203
付章 巨摩遺跡出土の古墳時代前期の篋一出土例と保存処理について	藤田由里	1

挿 図 目 次

図1 国土座標系とそれによる地区割	2
図2 既往の調査と地区割設定	3
図3 周辺の遺跡分布	5
図4 I地区西壁断面	8
図5 A地区西壁断面	8
図6 10Cトレンチ西壁断面	10
図7 8C・9Cトレンチ西壁断面	10
図8 I地区第1面 遺構全体図	15
図9 3Iトレンチ第1面 方形施設1平面, 断面	16
図10 3Iトレンチ第1面 方形施設1出土遺物	17
図11 3Iトレンチ南側第1面 平面	17
図12 3Iトレンチ第1面 溝9・10・11・12, 土坑7, 井戸1・2断面	18
図13 3Iトレンチ第1面 溝5・9・10・11・12出土遺物	19
図14 3Iトレンチ第1面 井戸1・2出土遺物	20
図15 3Iトレンチ 1層・整地層出土遺物	21
図16 3Iトレンチ 整地層出土遺物	22
図17 A地区第1面 遺構全体図	23
図18 8Aトレンチ第1面 平面	24
図19 9A・11Aトレンチ第1面 平面	25
図20 12A・13Aトレンチ第1面 平面	26
図21 8・12Aトレンチ第1面 溝1, 1・2層, 溝18出土遺物	27
図22 10Cトレンチ第1a面 平面	28
図23 10Cトレンチ第1面 粘土採掘坑群平面	29
図24 10Cトレンチ第1b・1c面 平面	30
図25 10Cトレンチ第1c面 溝7断面	31
図26 10Cトレンチ 1層出土遺物	31
図27 10Cトレンチ第1a面 溝1・2・5, 井戸2・3出土遺物	32
図28 10Cトレンチ第1b・1c面 溝6・7, 2・3層出土遺物	33
図29 I地区第2面 遺構全体図	34
図30 3Iトレンチ第2面 河川1出土遺物(1)	37
図31 3Iトレンチ第2面 河川1出土遺物(2)	39
図32 3Iトレンチ第2面 河川1出土遺物(3)	41
図33 3Iトレンチ第2面 河川1出土遺物(4)	42

図34	3 I トレンチ北側 第2 a面足跡検出状況, 第2 b面水田跡平面	43
図35	3 I トレンチ第2面 水田跡出土遺物	44
図36	3 I トレンチ南側第2 b・2 c面 足跡, 水田跡平面	45
図37	3 I トレンチ第2面 方形盛土上面出土遺物	45
図38	A地区第2面 遺構全体図	47
図39	8 A・9 A トレンチ第2 b面 水田跡平面	48
図40	I地区第3面 遺構全体図	50
図41	3 I トレンチ第3面 溝18・19, 河川2平面	51
図42	3 I トレンチ第3面 溝18出土遺物	51
図43	3 I トレンチ第3面 河川2出土遺物(1)	52
図44	3 I トレンチ第3面 河川2出土遺物(2)	53
図45	3 I トレンチ第3面 河川3遺物出土状況	54
図46	3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(1)	55
図47	3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(2)	56
図48	3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(3)	57
図49	3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(4)	58
図50	3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(5)	59
図51	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓墳丘測量図, 遺物出土地点	60
図52	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓主体部検出状況, 墳丘断面	61
図53	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第2主体部平面, 断面	63
図54	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第3主体部平面, 断面	64
図55	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第4主体部平面, 断面	65
図56	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第5主体部平面, 断面	66
図57	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第6・7主体部平面, 断面	67
図58	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第8主体部平面, 断面	68
図59	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第6主体部土器棺	69
図60	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第7主体部土器棺	71
図61	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(1)	72
図62	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況	73
図63	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(2)	73
図64	3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(3)	74
図65	A地区第3面 遺構全体図	76
図66	8 A・11 A トレンチ第3面 平面	77
図67	12 A トレンチ第3面 平面, 溝22・23, 河川1断面	78
図68	12 A トレンチ第3面 溝22, 河川1, 5 a層出土遺物	79
図69	13 A トレンチ第3面 平面, 土坑18, 溝24・25断面	81
図70	13 A トレンチ第3面 河川1出土遺物	82
図71	14 A トレンチ第3面 平面, 落ち込み1断面	83
図72	14 A トレンチ第3面 河川1出土遺物(1)	84
図73	14 A トレンチ第3面 河川1出土遺物(2)	85
図74	C地区第3面 遺構全体図	86
図75	9 C トレンチ第3 b面 平面	87
図76	10 C トレンチ北側第3 a・3 b面 平面	88
図77	I地区第4面 遺構全体図	89
図78	3 I トレンチ第4面 10・11号方形周溝墓墳丘測量図, 遺物出土地点	90
図79	3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓主体部検出状況, 墳丘断面	91
図80	3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓第1・2主体部平面, 断面	93
図81	3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓第3・4主体部平面, 断面	95
図82	3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓第5主体部平面, 断面	96
図83	3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓北・東周溝遺物出土状況	97

図84	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓出土遺物(1)……………	99
図85	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓出土遺物(2)……………	100
図86	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓主体部検出状況, 墳丘断面……………	101
図87	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第1・9主体部平面, 断面……………	103
図88	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第2・3主体部平面, 断面……………	104
図89	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第4・5・6主体部平面, 断面……………	106
図90	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第7・8・10主体部平面, 断面……………	107
図91	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第1主体部土器棺(1)……………	108
図92	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第1主体部土器棺(2)……………	109
図93	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓第9主体部土器棺……………	110
図94	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓マウンド土器出土状況……………	111
図95	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(1)……………	113
図96	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓東側周溝遺物出土状況……………	114
図97	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(2)……………	115
図98	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓南側周溝遺物出土状況……………	116
図99	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(3)……………	117
図100	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況……………	118
図101	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(4)……………	119
図102	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(5)……………	120
図103	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(6)……………	121
図104	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓出土遺物(7)……………	122
図105	3 I トレンチ南側第4面	平面……………	123
図106	3 I トレンチ第4面	沼状遺構出土遺物……………	124
図107	3 I トレンチ第4面	溝20出土遺物……………	125
図108	3 I トレンチ第4面	井戸3, 5層出土遺物……………	126
図109	3 I トレンチ第4面	井戸3最下層出土遺物……………	127
図110	A地区第4面	遺構全体図……………	128
図111	8 A トレンチ第4面	平面……………	129
図112	8 A トレンチ第4面	溝27, 5 b層出土遺物……………	130
図113	9 A トレンチ第4面	平面, 土坑25断面……………	131
図114	9 A トレンチ第4面	溝31, 土坑25, 5 b層出土遺物……………	133
図115	10 A トレンチ第4面	平面, 溝38断面……………	134
図116	10 A トレンチ第4面	溝38, 土坑46, 5 b層出土遺物……………	135
図117	11 A トレンチ第4面	平面, 土坑30断面……………	136
図118	11 A トレンチ第4面	土坑30・31遺物出土状況……………	137
図119	11 A トレンチ第4面	土坑30・31出土遺物(1)……………	138
図120	11 A トレンチ第4面	土坑30・31出土遺物(2)……………	139
図121	11 A トレンチ第4面	5 b層出土遺物……………	140
図122	12 A トレンチ第4面	平面……………	141
図123	12 A トレンチ第4面	5 b層出土遺物……………	142
図124	14 A トレンチ第4面	平面, 溝56, ピット66断面……………	143
図125	14 A トレンチ第4面	溝56, ピット66出土遺物……………	144
図126	14 A トレンチ第4面	溝56, 5 b層出土遺物……………	145
図127	C地区第4面	遺構全体図……………	146
図128	8 C・9 C トレンチ第4面	平面, 溝22断面……………	147
図129	8 C・9 C・10 C トレンチ第4面	溝12・19・22, ピット5, 5 b層出土遺物……………	149
図130	3 I トレンチ北側第5面	平面……………	150
図131	12 A トレンチ第5面	土坑45平面, 断面……………	151
図132	A地区第6面	遺構全体図……………	152
図133	9 A トレンチ第6面	足跡検出状況……………	153

図134	10Cトレンチ第7面 平面	154
図135	10Cトレンチ南側第7面 平面	155
図136	3Iトレンチ第8面 平面	156
図137	3Iトレンチ第8面 出土遺物	156
図138	A地区第8面 遺構全体図	157
図139	C地区第8面 遺構全体図	158
図140	10Cトレンチ南側第8面 平面	159
図141	10Cトレンチ第7面 河川3, 第8面 河川6, 9層出土遺物(1)	160
図142	10Cトレンチ第7面 河川3, 第8面 河川6, 9層出土遺物(2)	161
図143	10Cトレンチ 9層出土遺物(1)	162
図144	10Cトレンチ 9層出土遺物(2)	163
図145	10Cトレンチ 9層出土遺物(3)	164
図146	3Iトレンチ第9面 平面	165
図147	3Iトレンチ 12層出土遺物	165
図148	A地区第9面 遺構全体図	166
図149	C地区第9面 遺構全体図	167
図150	10Cトレンチ南側第9b面 平面, 溝35断面	168
図151	8A・13Aトレンチ第9面落込2 13層, 河川3, 10Cトレンチ第9b面 溝35出土遺物	169
図152	8Aトレンチ第10b面 平面	170
図153	10Cトレンチ第10b面 平面, 遺物出土状況	171
図154	10Cトレンチ 15層・砂層出土遺物	171
図155	微遺体分析試料抽出地点	179
図156	試料採取地点	184
図157	10Cトレンチ西壁南端 柱状図・試料採取層準	186
図158	10Cトレンチ西壁中央 柱状図・試料採取層準	187
図159	10Cトレンチ南壁中央 柱状図・試料採取層準	187
図160	観察地点の柱状図	193
図161	試料1の堆積構造トレース図	196
図162	試料2の堆積構造トレース図	197
図163	河内平野中央部の変形ゾーンの対比	200

表 目 次

表1	基本層序・遺構面対照表	12
表2	出土人骨の分析結果と文献値	176
表3	土壌試料の分析結果と文献値	176
表4	微遺体分析結果	180
表5	年輪年代法の検討結果一覧表	183
表6	層序対照表	193
表7	遺構一覧(1)	207
表8	遺構一覧(2)	208
表9	遺構一覧(3)	209
表10	遺構一覧(4)	210
表11	遺構一覧(5)	211
表12	遺構一覧(6)	212
表13	掲載遺物一覧(1)	213
表14	掲載遺物一覧(2)	214
表15	掲載遺物一覧(3)	215
表16	掲載遺物一覧(4)	216
表17	掲載遺物一覧(5)	217

表18	掲載遺物一覧(6).....	218
表19	掲載遺物一覧(7).....	219
表20	掲載遺物一覧(8).....	220
表21	掲載遺物一覧(9).....	221

写真目次

写真1	微遺体分析.....	177
写真2	若江北遺跡8Cトレンチ土層断面.....	192
写真3	採取試料とその軟X線写真.....	194

写真図版目次

図版1	巨摩・若江北遺跡航空写真 1948年撮影(上が北) S≒1:8000
図版2	3Iトレンチ第1面 方形施設1, 溝10~12獣骨出土状況
図版3	3Iトレンチ第1面 南端部全景, 溝11獣骨出土状況
図版4	8A・11Aトレンチ第1面 8Aトレンチ全景, 11Aトレンチ全景
図版5	10Cトレンチ第1a面 溝1~3, 井戸1, 土坑2~9
図版6	10Cトレンチ第1面 第1b面溝6, 第1c面溝7
図版7	3Iトレンチ第2a面 北半部全景
図版8	3Iトレンチ第2a面 河川1堆積砂 10号方形周溝墓部分, 河川1出土土器164
図版9	3Iトレンチ第2b面 北半部水田跡全景, 水田畦畔跡
図版10	3Iトレンチ第2b面 南半部水田跡全景, 水田畦畔跡
図版11	8Aトレンチ第2面 第2a面水田跡全景, 第2b面水田跡全景
図版12	9A・10Aトレンチ第2面 9Aトレンチ水田跡全景, 10Aトレンチ水田跡全景
図版13	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 マウンド検出状況
図版14	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 庄内期盛土断面, 埋葬施設検出状況
図版15	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第2主体部天井板検出状況, 人骨検出状況
図版16	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第2主体部人骨検出状況, 西側小口部分
図版17	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第3主体部天井板検出状況, 人骨検出状況
図版18	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第3主体部人骨検出状況, 西側小口部分
図版19	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第4主体部天井板検出状況, 人骨検出状況
図版20	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第4主体部人骨検出状況, 西側小口部分
図版21	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第5主体部天井板検出状況, 人骨検出状況
図版22	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第5主体部人骨検出状況, 西側小口部分
図版23	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第6主体部検出状況, 内部除去状況
図版24	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 第7主体部内部半掘状況, 第8主体部掘方
図版25	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 主体部掘方完掘状況、1978~80年調査の東側半分
図版26	3Iトレンチ第3面 3号方形周溝墓 周溝内出土土器・木器
図版27	3Iトレンチ第3a・3b面 3a面河川2, 3b面河川3
図版28	3Iトレンチ第3面 河川3内出土土器
図版29	3Iトレンチ第3面 河川3内出土土器・木器
図版30	8A・11Aトレンチ第3面 8Aトレンチ全景, 11Aトレンチ全景
図版31	12Aトレンチ第3面 第3a面全景, 河川1
図版32	12A・13Aトレンチ第3面 河川1しがらみ, 河川1杭
図版33	13A・14Aトレンチ第3面 13Aトレンチ全景, 14Aトレンチ全景
図版34	10Cトレンチ第3a面 溝9, 溝8
図版35	9C・10Cトレンチ第3b面 9Cトレンチ全景, 10Cトレンチ中央部
図版36	3Iトレンチ第4面 10号方形周溝墓 マウンド検出状況, 埋葬施設検出状況
図版37	3Iトレンチ第4面 10号方形周溝墓 第1主体部, 第2主体部

- 図版38 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓 第3～5主体部, 第3主体部
- 図版39 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓
第4主体部天井板検出状況, 天井板除去状況, 主体部石斧検出状況
- 図版40 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓 第5主体部天井板検出状況, 天井板除去状況
- 図版41 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓 第5主体部天井板除去状況, 東側小口
- 図版42 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓 周溝内出土遺物
- 図版43 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 マウンド上面検出状況, マウンド上面供献土器
- 図版44 3 I トレンチ第4面 10・11号方形周溝墓
10・11号方形周溝墓マウンド検出状況, 11号方形周溝墓マウンド検出状況
- 図版45 3 I トレンチ第4面 10・11号方形周溝墓
11号方形周溝墓主体部検出状況, 10・11号方形周溝墓主体部検出状況
- 図版46 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓
第1主体部検出状況, 覆土器除去状況, 第2主体部, 第3主体部
- 図版47 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 第4主体部, 第4主体部人骨検出状況
- 図版48 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 第5主体部, 第6主体部人骨検出状況
- 図版49 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 第7主体部人骨検出状況, 第8主体部
- 図版50 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 第9主体部, 覆土器除去状況, 第9主体部内面
- 図版51 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 北側周溝内出土土器, 東側周溝内出土土器
- 図版52 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 周溝内出土土器
- 図版53 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 周溝内出土土器
- 図版54 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓 東側, 南側, 北側周溝断面
- 図版55 3 I トレンチ第4面 沼状遺構, 沼状遺構下層
- 図版56 3 I トレンチ第4面 南半部, 北半部
- 図版57 3 I トレンチ第4面 南半部, 井戸3, 建物2
- 図版58 9 A トレンチ第4面 9Aトレンチ全景, 土坑25遺物出土状況
- 図版59 10A トレンチ第4面 10Aトレンチ全景, 溝38遺物出土状況
- 図版60 11A トレンチ第4面 11Aトレンチ全景, 土坑30・31遺物出土状況
- 図版61 12A・13A トレンチ第4面 12Aトレンチ全景, 13Aトレンチ全景
- 図版62 14A トレンチ第4面 14Aトレンチ全景, 溝56断面, 溝56木器出土状況
- 図版63 8 A・8 C トレンチ第4面 8Aトレンチ全景, 8Cトレンチ全景
- 図版64 9 C・10C トレンチ第4面 9Cトレンチ全景, 10Cトレンチ全景
- 図版65 12A トレンチ第5面・9 A トレンチ第6面 12Aトレンチ第5面, 9Aトレンチ第6面
- 図版66 10A・11A トレンチ第6面 10Aトレンチ全景, 11Aトレンチ全景
- 図版67 12A トレンチ第6面・14A トレンチ第7面 12Aトレンチ第6面全景, 14Aトレンチ第7面全景
- 図版68 10C トレンチ第7面 トレンチ北端, トレンチ南端部杭列
- 図版69 10C トレンチ第8面 河川6出土土器
- 図版70 9 A・10C トレンチ第9面 9Aトレンチ全景, 10Cトレンチ中央部
- 図版71 8 A・13A トレンチ第10面 8Aトレンチ全景, 13Aトレンチ全景
- 図版72 14A トレンチ・10C トレンチ 14Aトレンチ北壁断面8～15層, 10Cトレンチ15層内遺物出土状況
- 図版73 3 I トレンチ第1面 遺物
- 図版74 3 I トレンチ第1面 遺物
- 図版75 3 I トレンチ第1面 遺物
- 図版76 8 A・10C トレンチ第1面 遺物
- 図版77 3 I・8 A・10C トレンチ第1面 遺物
- 図版78 3 I・8 A・9 A・11 A・14 A・10C トレンチ第1面 遺物
- 図版79 3 I トレンチ第2面 河川1遺物
- 図版80 3 I トレンチ第2面 河川1遺物
- 図版81 3 I トレンチ第2面 河川1・水畦畔内遺物
- 図版82 3 I トレンチ第2面 河川1遺物
- 図版83 3 I トレンチ第3面 河川2・溝18遺物

図版84	3 I トレンチ第3面	河川2遺物
図版85	3 I トレンチ第3面	河川3遺物
図版86	3 I トレンチ第3面	河川3遺物
図版87	3 I トレンチ第3面	河川3遺物
図版88	3 I トレンチ第3面	河川2・3遺物
図版89	3 I トレンチ第2面	河川1・第3面3号方形周溝墓遺物
図版90	3 I トレンチ第3面	3号方形周溝墓遺物
図版91	3 I トレンチ第3面	3号方形周溝墓遺物
図版92	3 I トレンチ第3面	3号方形周溝墓木棺
図版93	3 I トレンチ第3面	3号方形周溝墓木棺
図版94	3 I トレンチ第3面	3号方形周溝墓木棺
図版95	13A・14A トレンチ第3面	河川1遺物
図版96	12A・13A・14A・9C トレンチ第3・4面	遺物
図版97	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓遺物
図版98	3 I トレンチ第4面	10・11号方形周溝墓遺物
図版99	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓遺物
図版100	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓遺物
図版101	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓遺物
図版102	3 I トレンチ第4面	10・11号方形周溝墓遺物
図版103	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓遺物
図版104	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓遺物
図版105	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓木棺
図版106	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓木棺
図版107	3 I トレンチ第4面	10号方形周溝墓木棺
図版108	3 I トレンチ第4面	11号方形周溝墓木棺
図版109	3 I トレンチ第4面	遺物
図版110	3 I・8A トレンチ第4面	遺物
図版111	9～11A トレンチ第4面	遺物
図版112	11A トレンチ第4面	遺物
図版113	12A・14A トレンチ第4面	遺物
図版114	14A・9C・10C トレンチ第4面	遺物
図版115	8～12A・14A・8C・9C トレンチ第4面	遺物
図版116	3 I・10C トレンチ第8面	遺物
図版117	10C トレンチ第8面	遺物
図版118	10C トレンチ第8面	遺物
図版119	3 I・8A・13A・10C トレンチ第8～10面	遺物
図版120	3 I・11A・14A・10C トレンチ第4・8・9面	遺物

付 図 目 次

付図1	I地区第1・2面
付図2	I地区第3面
付図3	I地区第4面
付図4	A地区第1・2面
付図5	A地区第3・6面
付図6	A地区第4面
付図7	A地区第4面
付図8	A地区第8・9面
付図9	C地区第3・4面
付図10	C地区第8・9面

第 I 章 調査に至る経緯と経過

巨摩・若江北遺跡は、東大阪市若江西新町 2～4 丁目に所在する。地内を南北に通る都市計画道路（大阪中央環状線）が第二寝屋川と交差しており、その北側が巨摩遺跡、南側が若江北遺跡である。

当該遺跡は、当センターが1976～1985年の10年間に発掘調査を行った近畿自動車道天理～吹田線（大阪線）建設地内に所在している15遺跡（新家、西岩田、瓜生堂、巨摩、若江北、山賀、友井東、美園、佐堂、久宝寺、亀井北、亀井、城山、長原、大堀遺跡）の中の、巨摩遺跡、若江北遺跡であり、その西側の隣接地区である。近畿自動車道大阪線の調査において、巨摩遺跡の1次調査を1978～1980年に、2次調査は1982～1983年に行っており、若江北遺跡の1次調査は1979～1982年に、2次調査は1982～1983年に行っている。これらの調査で、巨摩遺跡においては、弥生時代中期・後期の方形周溝墓、古墳時代の巨摩1号墳等、若江北遺跡においては、稲束が出土し、足跡や耕起痕を残す弥生時代前期～中期初頭のの水田面、弥生時代中期末における堀立柱建物群を中心とする集落遺構等が特筆に値する。1992年には、巨摩・若江北遺跡3次調査として、中央環状線北行車線迂回に伴う仮設工のための仮橋橋脚建設に伴い、第二寝屋川に架橋される橋脚部の調査を行っている。この時に、巨摩遺跡において、瓦器椀、小皿等多数出土した平安時代後半の井戸が検出されている。

今回実施した調査は、巨摩・若江北遺跡4次調査になる。大阪中央環状線と府道大阪・東大阪線の立体交差における高架橋建設に伴う調査であり、大阪中央環状線北行車線内に位置する。府道、第二寝屋川を越える高架橋の橋台、橋脚及び取付擁壁部分を対象として、巨摩遺跡は1調査区、若江北遺跡は10調査区の調査を実施した（前回の3次調査は、この高架橋建設に伴う中央環状線北行車線迂回路建設に伴う調査であった）。

1993年4月1日付で大阪府土木部より大阪府教育委員会に発掘調査実施依頼書が提出され、1993年9月1日付で、大阪府教育委員会の指導のもと、大阪府八尾土木事務所と当センターとの間で委託契約を締結した。現地における発掘調査は1993年12月から1994年9月まで実施し、その後、1995年3月まで遺物整理、報告書作成を行い、完了した。

また、調査途中の1994年6月18日、一般府民を対象として現地説明会を行い、約300名の参加を得た。

既調査の報告書

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1) 1978～1980年調査 | 『瓜生堂』1980 (財)大阪文化財センター |
| 2) 巨摩1次(1978～1980年調査) | 『巨摩・瓜生堂』1982 (財)大阪文化財センター |
| 3) 若江北1次(1979～1982年調査) | 『若江北』1983 (財)大阪文化財センター |
| 4) 巨摩2次・若江北2次(1982～1983年調査) | 『巨摩・若江北(その2)』1984 (財)大阪文化財センター |
| 5) 巨摩3次・若江北3次(1992年調査) | 『巨摩・若江北(その3)』1983 (財)大阪文化財センター |
| 6) 1994年調査 | 『瓜生堂遺跡発掘調査報告』1994 (財)大阪文化財センター |

第II章 調査の方法

当調査区は第二寝屋川より北側が巨摩遺跡、南側が若江北遺跡にあたる。トレンチは橋脚部とスロープ部分に設定され、トレンチ番号は既調査に続けた。よって巨摩遺跡では3 I トレンチ、若江北遺跡では8 A～14A・8 C～10C トレンチの名称を設定(図2)し、さらに3 I トレンチは調査の進捗等より三分割され、北半、南半、南端の呼称を与えた。

調査面積は約2,440m²を測るが、現地表面から約5 mまで(T.P. -1.3mまで) 調査するため、トレンチ周囲には土留めの矢板を巡らし、盛土を機械掘削し、層位毎に人力掘削を実施した。また、鋼矢板倒壊防止のため、人力掘削の途中に鉄骨切梁を1～3段、設置した。

遺構の平面実測は、クレーンによる写真測量と平板測量を1/20、1/50、1/100のスケールで図化を行った。また、必要に応じて、遺物出土状況や断面図の作成も行った。

区割りについては従来の当センターの地区割法を利用し、遺物の取り上げや遺構図の作成作業を行った。これは国土座標系の第VI座標系を使用したもので、同一基準で区画することにより、大阪府下の遺跡の遺構・遺物の絶対的な位置を示すことができる。

第I区画は1万分の1地形図の地区割を使用し、東西8 km×南北6 kmとなる。第II区画は2500分の1地形図の地区割を使用し、東西1.5km×南北2.0kmとなる。第III区画は第II区画を100m単位で分割する。第IV区画は第III区画を10m単位で分割したものである。

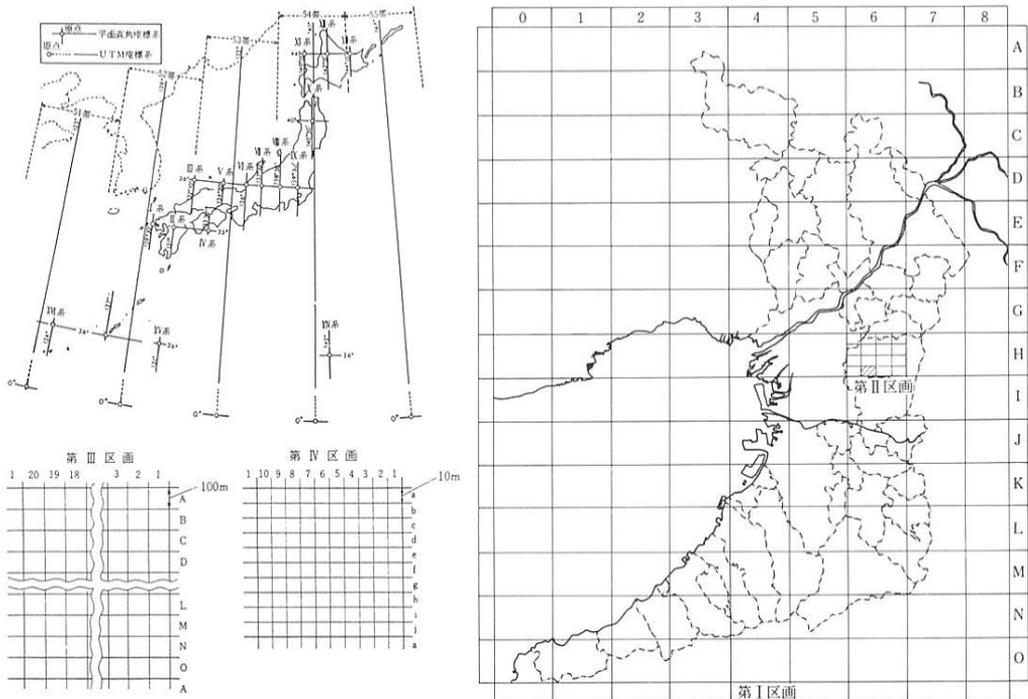


図1 国土座標系とそれによる地区割

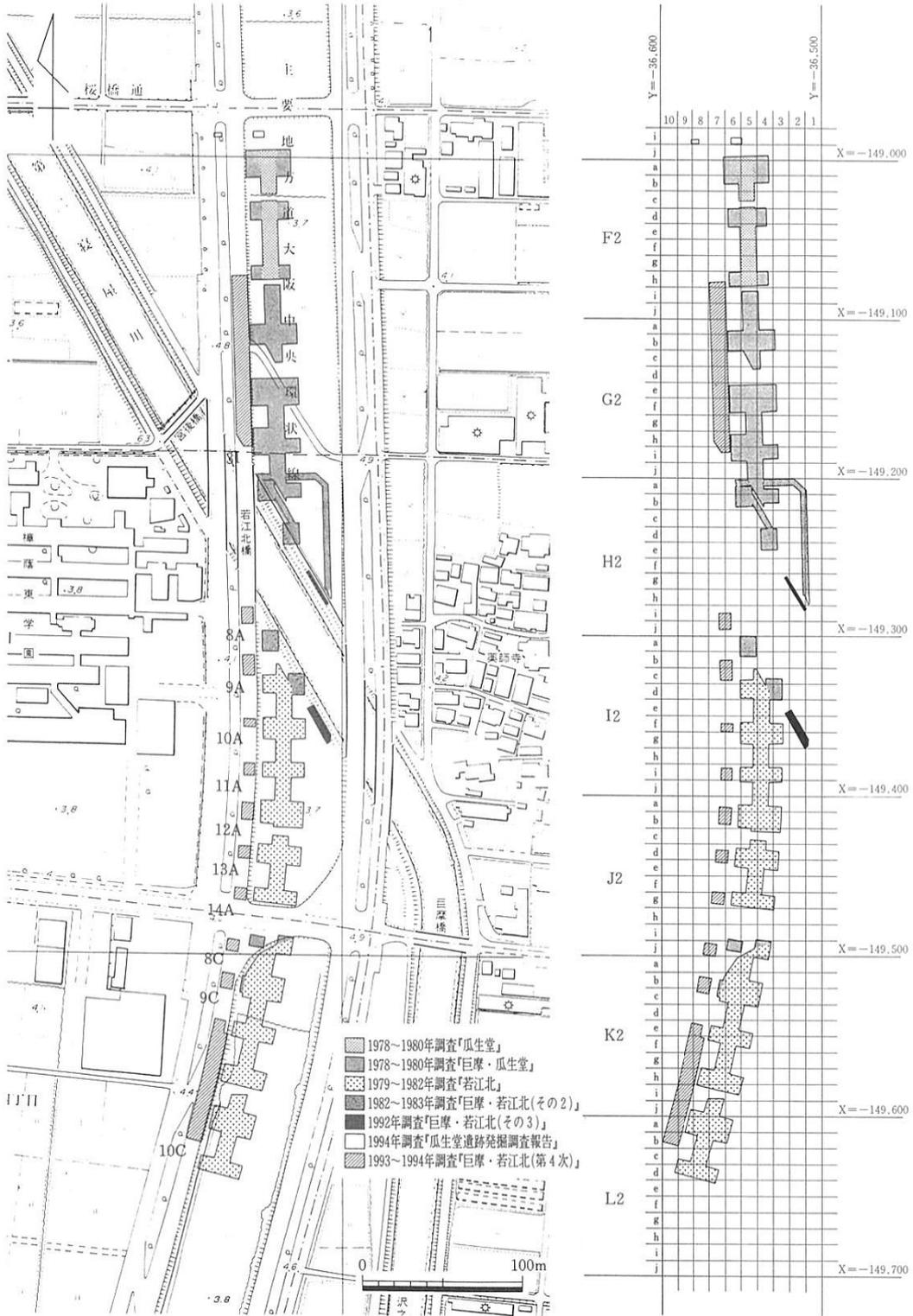


図2 既往の調査と地区割設定

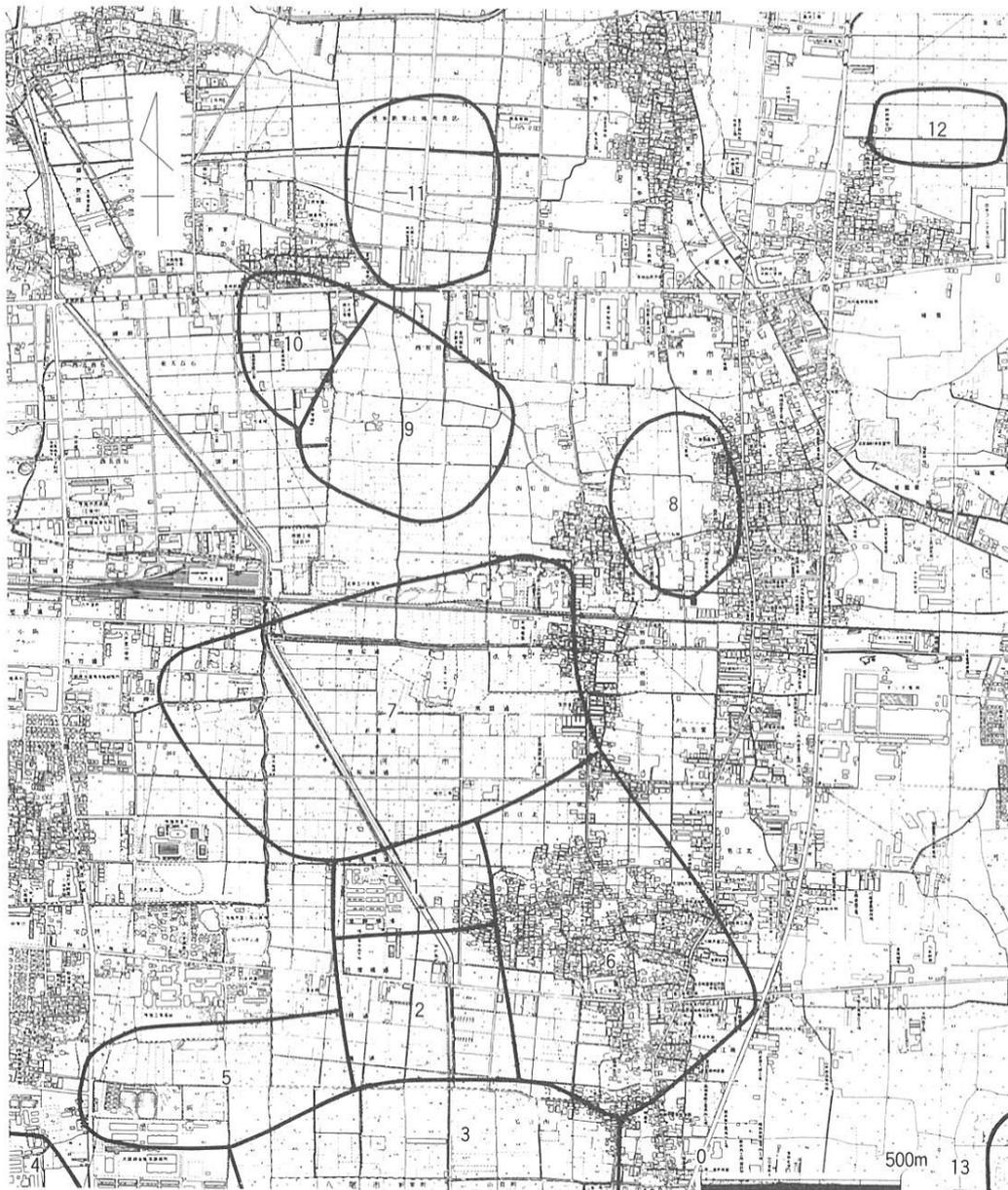
第三章 位置と環境

今回、発掘調査を行った巨摩・若江北遺跡の両遺跡は、大阪府東大阪市若江西新町地内に所在し、人工河川である第2寝屋川を挟んで南北600mにわたって広がる遺跡である。

これらの遺跡が周知されることとなったのは、若江北遺跡が昭和9（1934）年3月、楠根川改修工事の排土中に、大量の弥生土器、土師器、中世の遺物が含まれていたことに端を発する。散布した遺物は、若江北町に所在する信行寺の住職であった巨摩峰春氏の注目するところとなり、氏によって採集が行われた。さらに昭和46（1971）年にも改修工事が行われ、この時点でも大量の遺物が出土し、遺跡の所在が再認識されることとなった。一方、巨摩遺跡は、昭和39（1964）年、大阪中央環状線建設工事に先立ち、巨摩廃寺調査グループと、当時の河内市教育委員会によって予定地内の一部が調査され、その成果から巨摩廃寺跡と命名された。昭和49（1974）年からは近畿自動車道建設工事に伴い、財団法人大阪文化財センターにより発掘調査が実施され、既知の遺構面よりさらに下層で縄紋時代から連綿と続く各時期の遺構、遺物が重層的に検出され、瓜生堂遺跡などと共にこの地域を代表する遺跡として認識されるようになった。

遺跡の埋没する付近一帯は、宝永9（1581）年、大和川が付け替えられる以前までは、その本流となっていた各川が北流し、絶えず氾濫を繰り返しながら土砂が運び込まれることによって、河内平野と呼ばれる広大な平野を形成してきた。人々はこのような劣悪な自然条件と戦いながら生活を続け、その様子は、海拔0m以下から標高3.5mの現地表面までの堆積層内に10数回にわたって累々と刻まれていることが、巻頭図版3に示す各発掘調査地点の成果から明らかとなっている。ここに示した周辺の各調査区では、縄紋時代晩期から近代にかけての遺構・遺物が検出されており、人間の足跡を辿ることのできるその最も古いものが、山賀遺跡で検出された縄紋時代晩期初頭の滋賀里Ⅱ式の土器であった。しかし、今回の若江北遺跡10Cトレンチでは、後期に遡る縄紋土器が、当時の状況を比較的止めたままの状況で検出され、新知見を得ることができた。

弥生時代前期では両遺跡から少量の遺物が出土し、特に若江北遺跡では、この地域で最も古いと考えられる土器が出土しているほか、周辺では貝塚を形成していた宮ノ下遺跡や、大量の遺構・遺物が検出された山賀・美園遺跡のほか、高井田遺跡や瓜生堂遺跡が低湿地の各所に成立し、稲作文化を携えた集団の選地法を知る上で興味深い。中期では、盛土のある方形周溝墓群や、青銅器鎔範、大阪湾型銅戈などの出土で注目を浴びた瓜生堂遺跡、貨泉や有鉤銅鉶が出土した巨摩遺跡がその代表的なものである。特に方形周溝墓に関しては、今回、巨摩遺跡で検出されたものを含めると、70基にも達し、面的な広がりとともに注目される。また、若江北遺跡ではこの時期の終わり頃の掘立柱建物が検出され、その中には、焼失した状態で炭化木が検出された例も確認されている。後期では、巨摩遺跡で方形周溝墓が検出されており、その中には璧玉製管玉やガラス製小玉類を着装した状態で検出した埋葬主体も含まれていることで注目できる。



- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 1. 巨摩遺跡 | 5. 上小阪遺跡 | 9. 西岩田遺跡 |
| 2. 若江北遺跡 | 6. 若江遺跡 | 10. 意岐部遺跡 |
| 3. 山賀遺跡 | 7. 瓜生堂遺跡 | 11. 新家遺跡 |
| 4. 小若江遺跡 | 8. 岩田遺跡 | 12. 菱江寺跡 |
| | | 13. 玉串遺跡 |

(1961年測量図に合成・S=1/18,000)

図3 周辺の遺跡分布

古墳時代前期には広範囲にわたる調査区で水田跡が検出され、周辺一帯に水田が広がる景観を呈していたものと考えられる。そして、4世紀末葉からは、小規模な古墳が築造されはじめ、初期のものには美園遺跡で検出された一辺7.2mを測る方墳や、萱振遺跡で検出された一辺27mを測る方墳がある。両古墳は規模的にはさほど大きなものとはいえないが、樹立された埴輪は非常に立派なもので、美園古墳では、壺形埴輪や、細部にわたるまで極めて精巧な表現を持つ家形埴輪が出土し、萱振1号墳でも巨大な靱形埴輪が検出され、これらは、同時期の規模の大きな前方後円墳の出土品と比較しても遜色のないものである。中期から後期にかけても小規模な古墳が築造され、萱振B遺跡では木棺を埋置した主体部が2基検出された一辺15mを測る方墳が検出され、山賀遺跡では一辺12mの方墳が主体部とともに検出された。また、巨摩遺跡でも主体部の検出はならなかったものの一辺15mを測る方墳が検出されている。この他、埴輪が集中して出土している瓜生堂遺跡などもあり、附近には現在の地表面には痕跡を残さない埋没古墳がなおも存在している可能性が高く、このような点にも沖積地の遺跡の特徴がよく表れているといえよう。

奈良時代以降には、調査地東側に河内国若江郡の郡衙が設置されていたことが推定され、調査区内でも土器や和銅開珎のほか、土馬やミニチュア土器などの律令期祭祀遺物が出土している。

平安時代には比叡山延暦寺座主尊意大僧正の伝記『尊意贈僧正伝』の内容から、元慶年間（877～885年）に若江寺が存在していたことが推定できるが、出土した素弁八葉蓮華紋軒丸瓦や花卉紋（雷紋）縁複弁蓮華紋軒丸瓦、段顎を持つ五重弧紋軒平瓦、藤原宮6641型式偏行唐草紋軒平瓦などから、寺の創建を白鳳時代前期にまで遡らせて考えることも可能である。

中世以降、この地には高野街道、十三街道が通る交通の要衝の地であったことや、周囲に低湿地が広がる地形条件などから若江城が築造された。この城は明徳元（1390）年、畠山基国が河内守護職に任じられるとともにその支配の拠点として築城されたものと考えられ、守護代として遊佐氏が置かれた。その後、応仁の乱や幾多の戦乱のたびに城をめぐる攻防戦が繰り返された。そして、河内地方を制圧した織田信長は、この城を三好義次に与えた。その後、信長は、羽柴秀吉に命じ、不和となった室町幕府15代将軍足利義昭を京都から若江城に送致し、さらに、義次の家臣池田丹後守教正らと内通し、城を攻略する策を立てた。信長軍は城を包囲し、義次を自刃に追い込んで城を陥落させた。信長は城を手中に収めた後、教正にこれを託し、自身は石山本願寺攻めや、和泉、雑賀攻めなどの拠点として利用したが、天正8（1580）年4月、本願寺との和議が成立すると共に城を破却した。当時の様子を、宣教師ルイス＝フロイスがローマに書き送った書翰『イエズス会日本年報 上』によって知ることができ、これによると、天正9（1581）年、2月24日、この地を訪れた様子を「若江の中央を通ったが、此所には今城も何もなく、唯多数の住民の居る町のみがあった」と記している。このことから、わずか1年足らずの間に城は跡形もなく取り壊されたことが知られ、それとともに、歴史の舞台からその姿を隠してしまっていた。

この時代以降から戦前まで、周辺地域は広大な生産領域として利用され、各調査区では水田や、島畑と呼ばれるこの地方を特徴づける土地利用がなされていたことが確認されている。

第IV章 発掘調査の成果

第1節 基本層序と遺構面

今回実施した発掘調査は、2つの遺跡にまたがっていることから各遺跡における層序の設定を想定していた。実際、既往の調査においても両遺跡における層名および遺構面は異なる記述が行なわれている。しかし、今回調査の対象とした巨摩遺跡と若江北遺跡は第2寝屋川を挟んで隣接しており、当時の環境を考慮する場合、両者の層序や遺構面を個別に取り扱う必要性は少ないと考えられる。自然環境的要素については、遺跡のような地区的な視点より、中地域的な位置からの検討が必要と考えられる。これによって隣接する遺跡間の層位的な発掘が可能となるためである。同時に、これは調査の誤認や煩雑さを解消する目的もある。過去の調査における記述を再度検討することによって、両遺跡間に共通する層、いわゆる鍵層の存在することが明らかとなり、これをもとに基本層序の再設定を行なった。

基本的に今回の調査における巨摩遺跡と若江北遺跡の地形的性質は共通しており、ともに河川の氾濫による堆積の繰り返しである。よって、層序の様相は両遺跡の共通した認識であり、遺跡間にはほとんど差がないものとする。また、既往の調査との混乱を避けるためにも、鍵層を中心にできる限り既往の層名を踏襲した。

今回のような調査は今後増加するものと思われ、各地点毎の層序の把握とともに適切な層・面の対応が必要であろう。しかし、これも過去に調査が行なわれたからこそ、可能となる作業であり、また、これがすぐに両遺跡の結合を意味することにはならないことを予め記しておかなければならない。

なお、今回の調査で使用した基本層序と過去のものとの対応表が表1である。以下、表1を参照しながら、説明を行なうことにする。

近・現代（0層）

0層は中央環状線建設にともなう盛土および攪乱の層である。粘土を多く含む粘質土であり、層内には廃棄された土管や陶磁器類、環状線建設によると思われる廃物などが含まれている。調査において、同層はすべて機械による掘削を行ない、遺物の収拾のみを行なった。よって各トレンチにおける層序内には記入されていない。層厚は約1.05mである。

古墳時代中期から中・近世（1・2層）

1層は中世から近世にかけての耕作土である。調査区全体において確認されている。青灰色の粘土あるいは粘質土であり、とくにC地区では、その下層の粘土とともに採掘されている。

2層は古代から中世の整地層である。I地区およびC地区に顕著にみられる。中粒砂を主体と

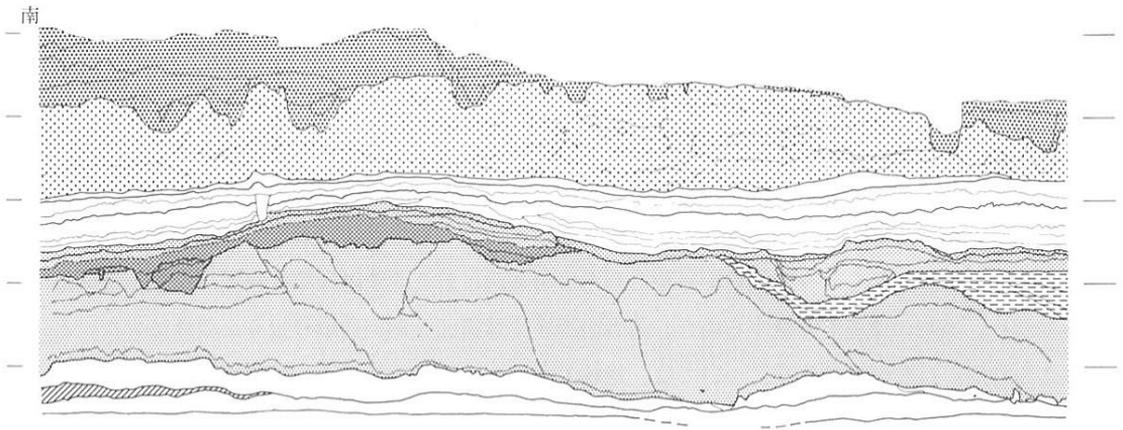


図4 I地区

する砂質土であり、調査区の南側ほど粘土質が多くなる。鉄分の沈着がみられ、橙褐色である。

人為的な削平や造成が盛んに行なわれた層であり、また、同一層上に長期間にわたって遺構が形成されている。

古墳時代前期（3・4 a層）

3層は古墳時代前期の遺構を埋没させた河川の流水堆積砂層である。調査区のほぼ全域で検出

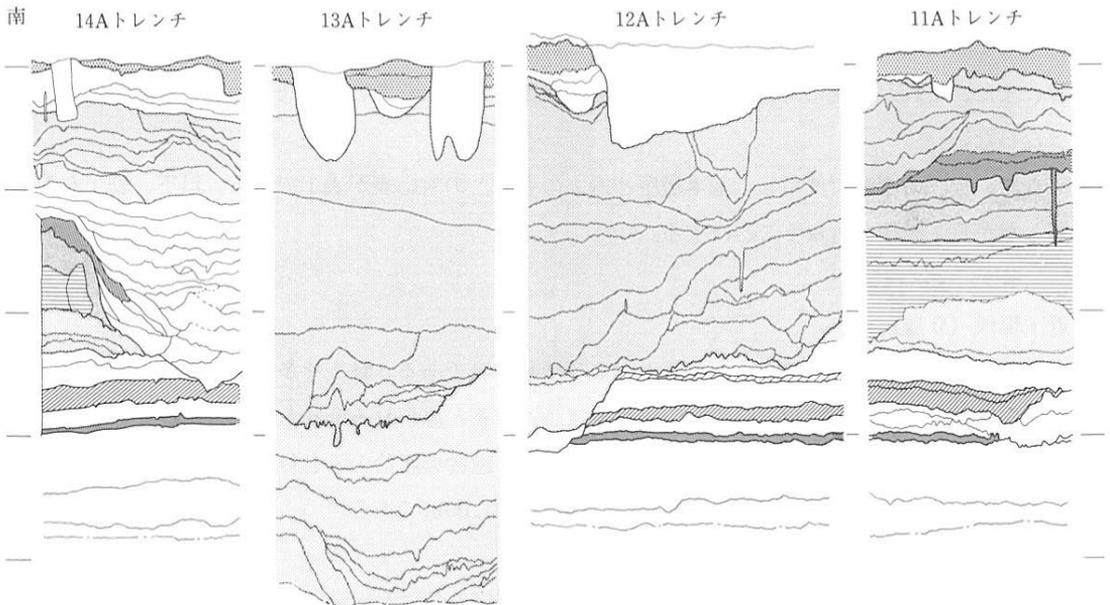
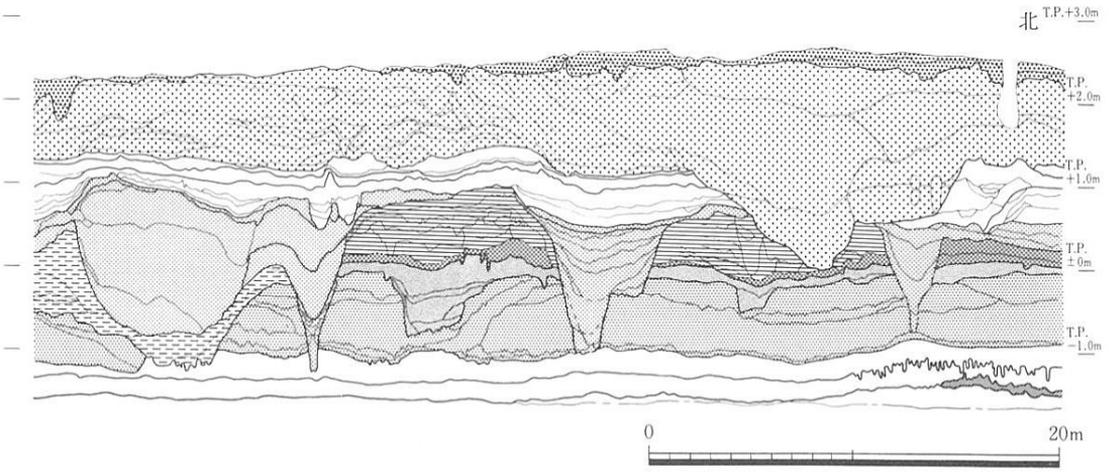


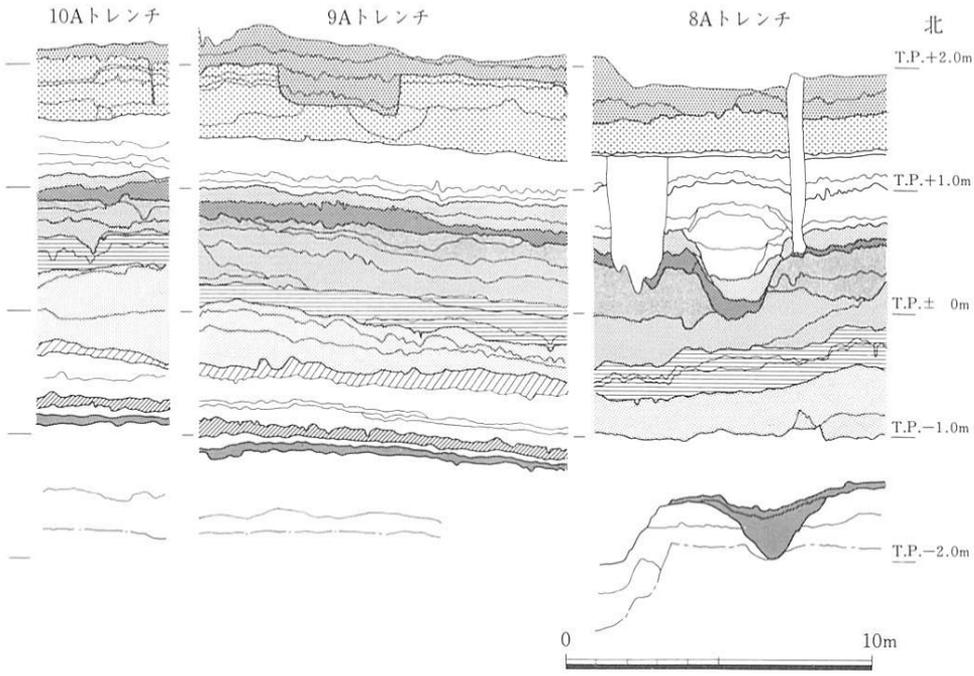
図5 A地区



西壁断面

される。黄褐色を呈し、層厚は0.5mから1.2mである。

4層は古墳時代初頭から前期にかけての粘土層である。大きくa・b・cの3つに分層され、その中でも4a層が当該期に属する。4a層は古墳時代前期の水田耕作土である。水中に埋没していたためにグライ化しており、暗青灰色を呈する。層内には稲科植物によって形成されたと考えられる管状斑や炭酸カルシウムがみられる。層厚は0.3mから0.7mである。



西壁断面

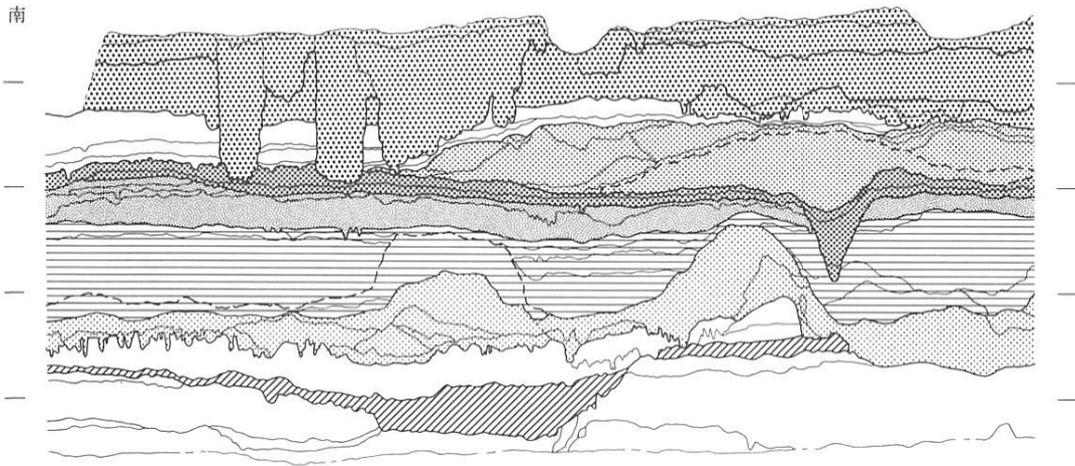


図6 10Cトレンチ

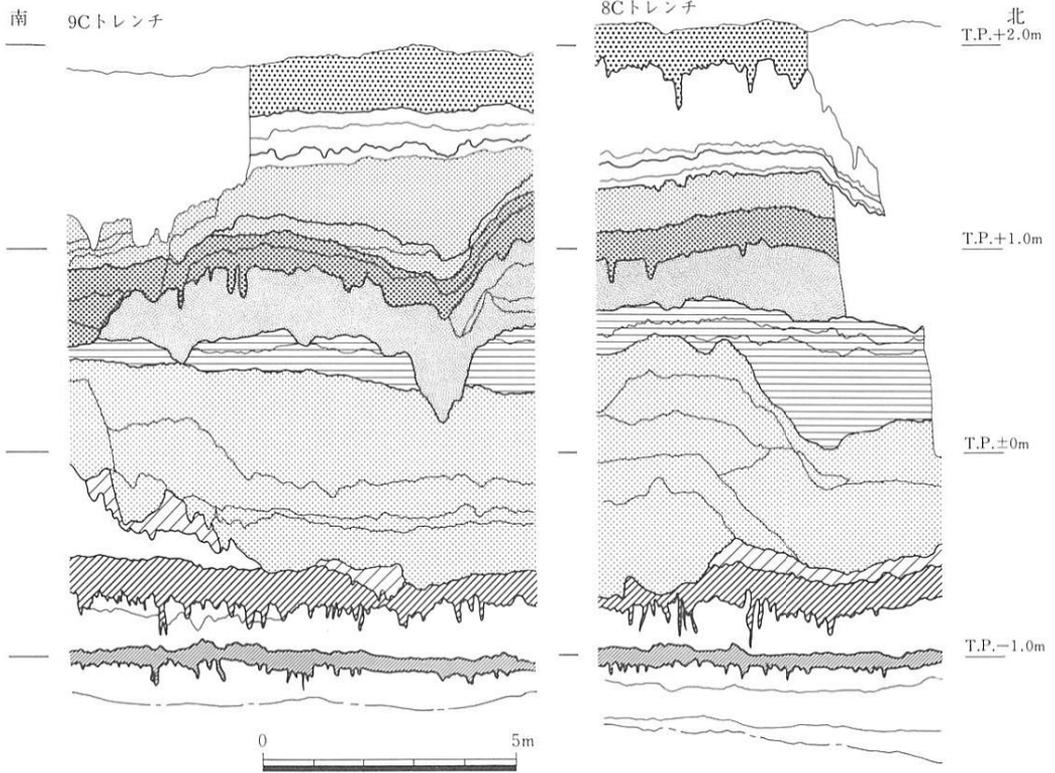
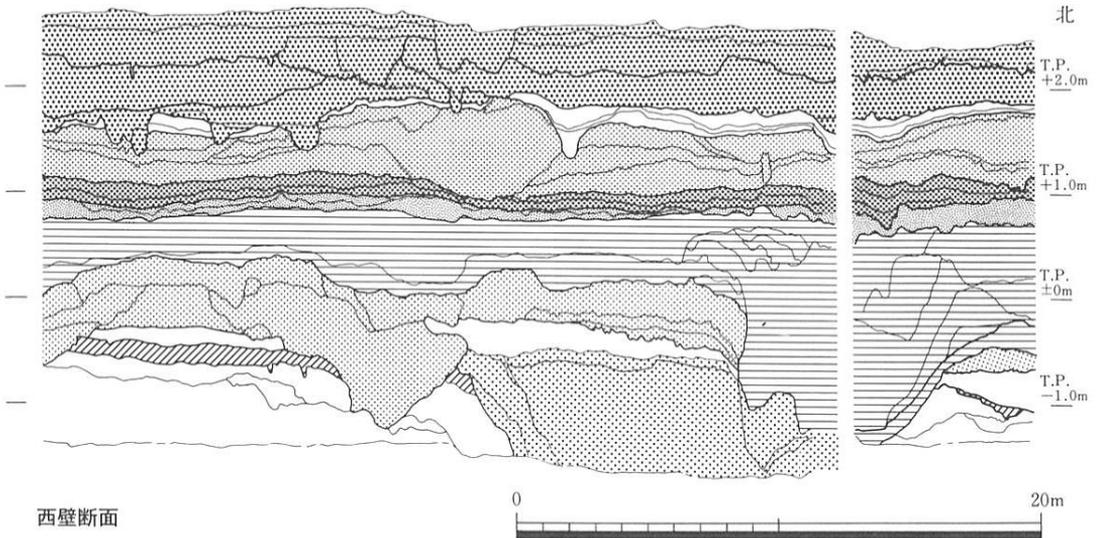


図7 8C・9Cトレンチ西壁断面



弥生時代後期（4 b～5 a層）

4 b・c層は遺構や自然遺構といった部分的に堆積した粘土質のシルトである。比較的安定していたと思われる湿地状の堆積であり、層内に非常に細かいラミナ状の植物遺体を含む。

4 b層は特に植物遺体を多く含み、暗緑黒色を呈する。4 c層は乳白色の粘土層である。それぞれの層厚は0.05mから0.1mである。

5 a層は弥生時代後期の基盤となる砂層である。河川による流水堆積層であり、中粒砂を主体とする淡灰褐色の砂層である。上面には薄く土壌化した痕跡が認められる。層厚は0.2mから0.8mである。

弥生時代中期末から後期初頭（5 b・6層）

5 b層は弥生時代中期末から後期初頭の包含層である。調査区のはほぼ全域で検出されるため、層序の指標となる。調査区の北側ではやや粘質の微砂を主体とし、南側では細砂を多く含むようになる。土壌化の連続によって緑黒色を呈しており、各種の遺物を多く含む。層厚は約0.2mである。

6層は弥生時代中期末の基盤となる微砂層である。5 b層とともに調査区のはほぼ全域においてみられる。やや粘質をもつ均質な微砂の層であり、比較的安定した環境を示している。暗オリーブ灰色を呈し、層厚は0.1mから0.5mである。

弥生時代中期後半（7層）

7層は弥生時代中期後半の基盤となる砂層である。細砂を含む中流砂層で、褐色を呈している。層厚は0.1mから0.5mである。

表1 基本層序・遺構面対照表

パターン	層名	巨摩・若江北4	時期	調査における主な遺構	若江北3	巨摩3
	0層	第1面	a	中世	鋤溝, 井戸, 堀	近世以降
	1層		b	古代	溝, 土坑	中～近世以降
	2層		c	古墳中期以降		古墳時代中期以後
	3層	第2面	a	古墳前期	河川, 水田畦畔	第Ⅶ遺構面
	4a層		b			
	4b層		c	庄内期		
	4c層	第3面	弥生後期		水田畦畔, 方形盛土	第5遺構面
	5a層		第4面	弥生中期末～後期初		3号墓, 溝, 土坑, 河川
	5b層	第5面		弥生中期後半		10・11号墓, 溝, 土坑, 柱穴, 井戸, 沼状遺構, 河川
	6層		第6面	弥生中期中頃		溝, 土坑
	7層	第7面		弥生中期前半		足跡
	8層		河川			第Ⅱ遺構面
	9層	第8面	弥生前期		河川, 溝	第Ⅰ遺構面
	10層		縄紋晩期		落ち込み, 溝	
	11層	第9面	弥生前期		河川, 溝	第Ⅰ遺構面
	12層		縄紋晩期			
	13層	第10面	縄紋晩期			
	14層		縄紋晩期			
	15層					

弥生時代中期中頃（8・9層）

8層は流水性の堆積によるシルトと砂の互層である。調査区の南側を中心として比較的緩やかな水域が存在したと思われる。弥生時代中期中頃に相当する層であり、既往の調査ではこれを3層に分層している。今回の調査においても同様な層界を認識することが可能であったが、基本的には同一の流水現象によって形成されたものとした。層厚は約0.3mである。

9層は弥生時代中期前半の遺構面を覆う流水堆積層である。黄褐色を呈し、上部では細砂や中流砂を基本とし、下部では粗砂や小礫などを含む。洪水などのかなり激しい流水現象によって堆積したものであろう。調査区のはほぼ全域でみとめられ、層厚は0.3mから1.5mである。

弥生時代中期前半（10・11層）

10層は弥生時代中期前半の包含層である。上記の9層によって削平されたためか、調査区南側のごく一部にしかみられない。暗灰色を呈する粘土層であり、層内には炭化粒を含む。層厚は約0.1mである。

11層は弥生時代中期前半の基盤となる微砂混じりの粘土層である。灰色を呈し、雲母が多く含まれる。また、層内には炭酸カルシウムの形成がみられ、植物遺体が残存している。層厚は約0.2mである。

弥生時代前期（12・13層）

12層は弥生時代前期の包含層である。調査区の一部では、上面に弥生時代中期前半の遺構面を確認した。暗灰色の粘土層であり、層内には炭化物や植物遺体を含む。層厚は約0.2mである。

13層は弥生時代前期の基盤となる粘土層である。12層よりやや明るい灰色を呈し、層内には黒斑がみられる。また、植物遺体の残存も多数みられる。層厚は約0.2mである。

縄紋時代後期から晩期（14・15層）

14層は縄紋時代後期から晩期の包含層である。既往の調査では、調査区周辺において、一部でのみ確認されている。黒色の粘土層であり、層厚は約0.1mである。

15層は縄紋時代後期から晩期の基盤となる粘土層である。暗褐色を呈し、層内には多量の黒斑がみられる。調査区のほぼ全域においてみられるため、今回の調査における鍵層となった。

以上、今回の調査における基本的な層序の関係を説明してきた。これをもとに、全調査区の南北方向の断面を分層したものが図4から図7である。これらの図を用い、今回の調査において検出された遺構面の概略を説明する。なお、基本的には層界が遺構面を示しているが、層序との対応関係については、前述の表1を参考にしていきたい。

近・現代

遺構面は現地表面が相当する。近代の遺構面は道路建設の際、削平されたと思われ、遺物の出土か、あるいは削平されなかった井戸など深度のある遺構のみが検出された。

古墳時代中期から中世（第1面）

遺構面はほぼ1つであり、調査区の南側にある10Cトレンチでは複数面を確認した。3層の上面がその最下面となり、今回の調査では古代の遺構・遺物が出土している。

古墳時代前期（第2面）

4 a層の内部に形成された遺構面である。調査区のほぼ全域において複数面の存在が確認されている。度重なる小規模な洪水の間をぬうように、水田として利用されたと考えられる。

弥生時代後期（第3面）

5 a層上面、洪水による流水砂層の上に形成された遺構面である。調査区の北側にある3 I トレンチでは方形周溝墓が築造される。しかし、A・C地区では自然の流路とも思われる大小の溝がみられるだけであり、当時期に相当すると思われる集落跡は、今回の調査区内では検出されなかった。

弥生時代中期末から後期初頭（第4面）

5 bから6層上面に形成された遺構面である。この段階には、かなり活発に活動していたと思われ、I地区では方形周溝墓が築造され、A地区では集落に伴うような遺構群が検出されている。また、包含層である5 b層からは、各種の遺物が多量に出土している。

第3面における弥生時代後期の流水砂層は、調査区の一部でこの包含層を覆っており、同河川が第4面と第3面の間に存在したことが明らかである。

弥生時代中期後半（第5面）

6層除去後、流水砂の検出される面である。調査区の北側にある3 I トレンチと、A地区のごく一部を除いて、基本的には遺物・遺構をほとんど含まない。

弥生時代中期中頃（第6面）

今回の調査ではほとんど検出されなかった遺構面である。わずかにA地区の9 A トレンチにおいて、流水堆積層の間から足跡群を検出した。

弥生時代中期前半（第7・8面）

やや緩慢な流水堆積層である8層を除去した面を第7面、短期的な流水砂の9層を除去した面を第8面とした。調査区の南端、C地区では明瞭な流路変化を検出できたが、その他の地区では遺構として検出することは困難な状況であった。C地区における地形の変化も、そのもの自体は自然流路であり、若干の遺物を伴うことから、人の動きが存在したことを確認するに止まった。

また、調査区の一部では包含層に相当する10層を伴う部分があり、当該期に相当する遺構面の存在が明らかである。しかし、遺構などは確認されなかった。

弥生時代前期（第9面）

安定した粘土層の堆積中に現われる包含層（12層）をはさむ遺構面である。調査ではこの層の上下面をそれぞれ9 a・9 b面とした。調査区のほぼ全域において確認された。中央の調査区から南側では、包含層を伴う明確な遺構面が検出される。しかし、調査区の北側では標高が下がるとともに、包含層もほとんどみられなくなる。

縄紋時代後期から晩期（第10面）

14層をはさむ遺構面である。上下面をそれぞれ10 a・10 b面とした。とくに10 b面の基盤となる15層については、調査区のほぼ全域において確認された。第9面と同様、調査区の中央を中心として、南側では標高が高く遺構面も確認されたが、北側では調査深度より下がるため、一部でのみ確認されるに止まった。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 第1面（古代、中・近世）

0～2層を除去し、第1面が検出された。時期は中近世にあたるが、10Cトレンチのみ3面の遺構面が検出され、平安時代まで遡る。また、すでに削平をうけており、当該期の遺構面が検出されなかったトレンチもある。

(1) I 地区（図8）

中近世面が検出された。基盤層は北端では後述する河川1の堆積砂であり、南側では黄灰色シルトである。既往の調査においても多くの遺構が検出されている。遺構面上層の0～2層からは古墳時代前期から近世の遺物が出土している。

また、3 I トレンチ南半部において厚さ0.1～0.6mのよくしまった橙褐色砂質土の整地層（2層）が認められ、後述する溝10～12はこの整地層を除去後に検出された遺構である。この整地層からは図15-61・16-62～82の遺物が出土している。須恵器、埴輪などの下層の時期に属する遺物も出土しているが、図16-68～82の14～15世紀の遺物が、整地された時期にあたるものと考えられる。

3 I トレンチ北半部分の $X=-149,080$ ～ $-149,110$ 、 $Y=-36,565$ 付近に検出された溝1・7・13・14・24は東西方向にのび、深さは10～15cmを測る。時期は近世に属するものと考えられる。

トレンチ中央部の $X=-149,126$ 、 Y

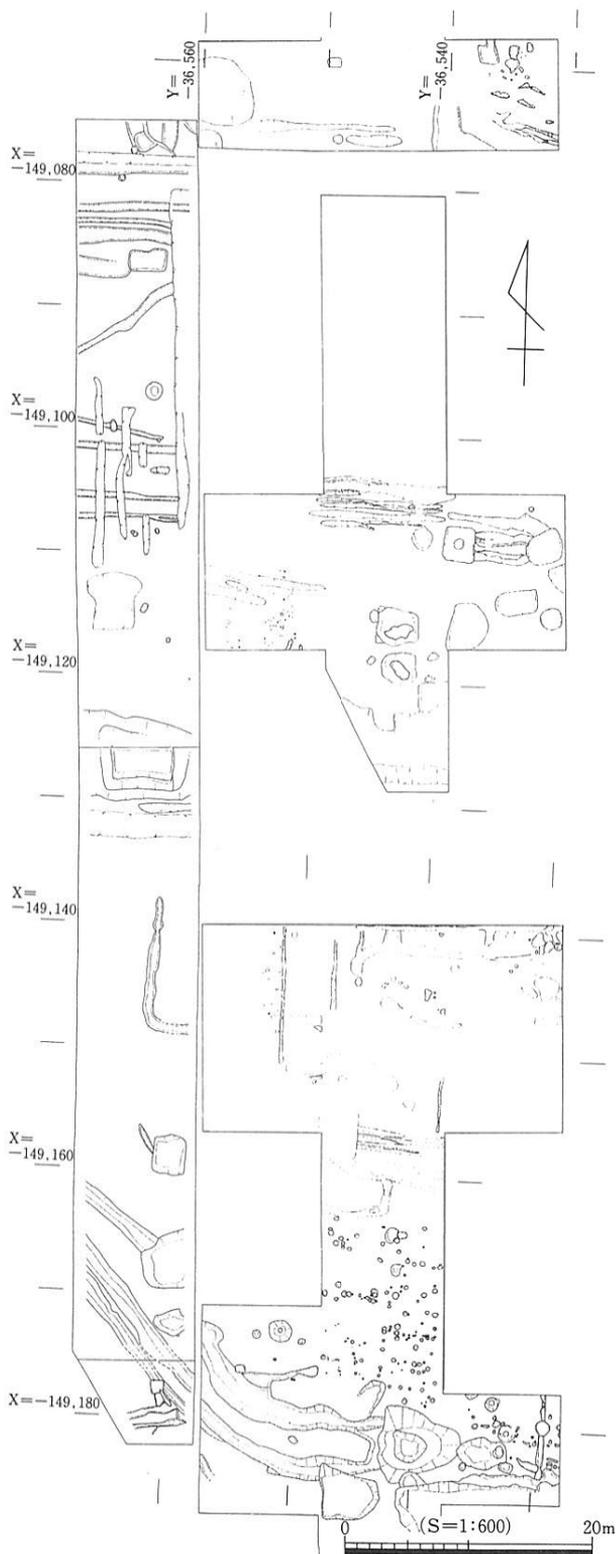


図8 I地区第1面 遺構全体図

＝-36,564において検出された方形施設1（図9、図版2－1）は東西方向にのびる幅5.5～6.5 mの溝を呈しており、中央部に南北4.0～5.0m、東西6.5～7.2m、深さ1.9m以上を測る竪穴を有する。竪穴部分の南辺は幅約0.3mのテラスを有し、さらに垂直近くの傾斜をもって掘削されている。北辺は調査時の矢板設定のため、明瞭にはできず、南辺と同様にテラスを有する形態であるかは不明である。埋土はテラス部分より下層においてブロック土が堆積しており、人為的な

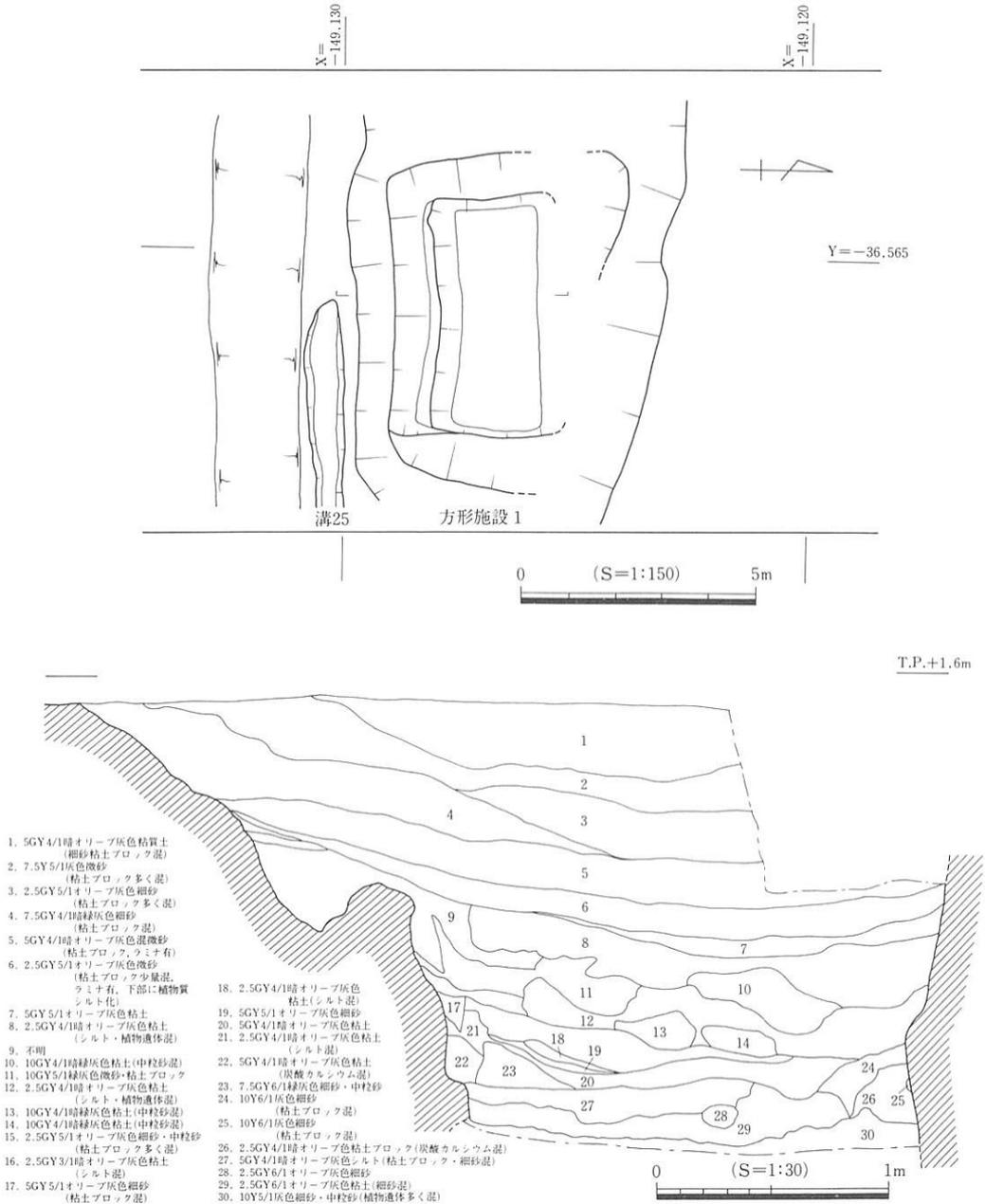


図9 3 I トレンチ第1面 方形施設1平面、断面

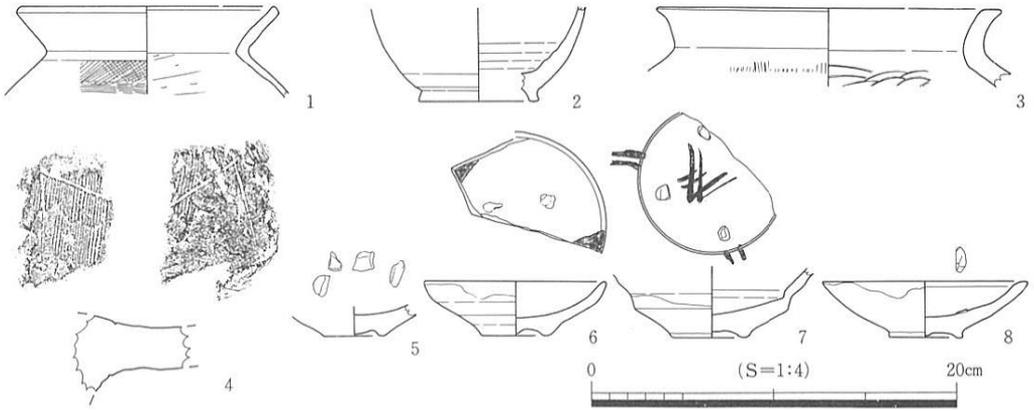


図10 3Iトレンチ第1面 方形施設1出土遺物

埋め戻しが考えられる。図10は方形施設1から出土した遺物であるが、下層の時期にあたるものも混じっている。5～8（図版75）がこの遺構に属する唐津皿である。見込に胎土目が認められ、6と7には鉄絵が描かれている。16世紀末には埋没したと考えられる。

南端部のX=-149,170、Y=-36,565付近において検出された溝10～12（図11・12、図版2-2）は北西から南東方向にのびる溝である。溝11は既往調査の3J地区溝61に連なるものと考えられる。溝10は3J地区溝59とは接合しないが、連続した溝と考えられる。溝11の断面はV字形を呈しており、獣骨が散乱して出土（図版3-2）している。出土遺物は溝10が図13-11～19、溝11が20～25、溝12が26～31である。これらの遺物は古墳時代、10～12世紀、14～15世紀の時期にわけることができるが、溝10～12の埋没時期は28（図版75）の瓦器捏鉢の年代である14世紀後

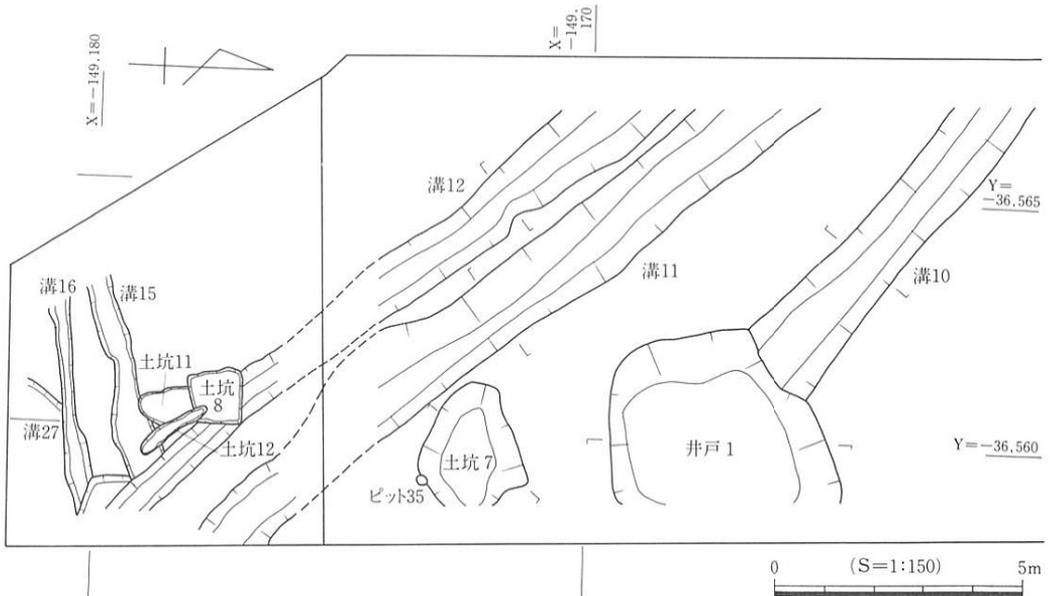


図11 3Iトレンチ南側第1面 平面

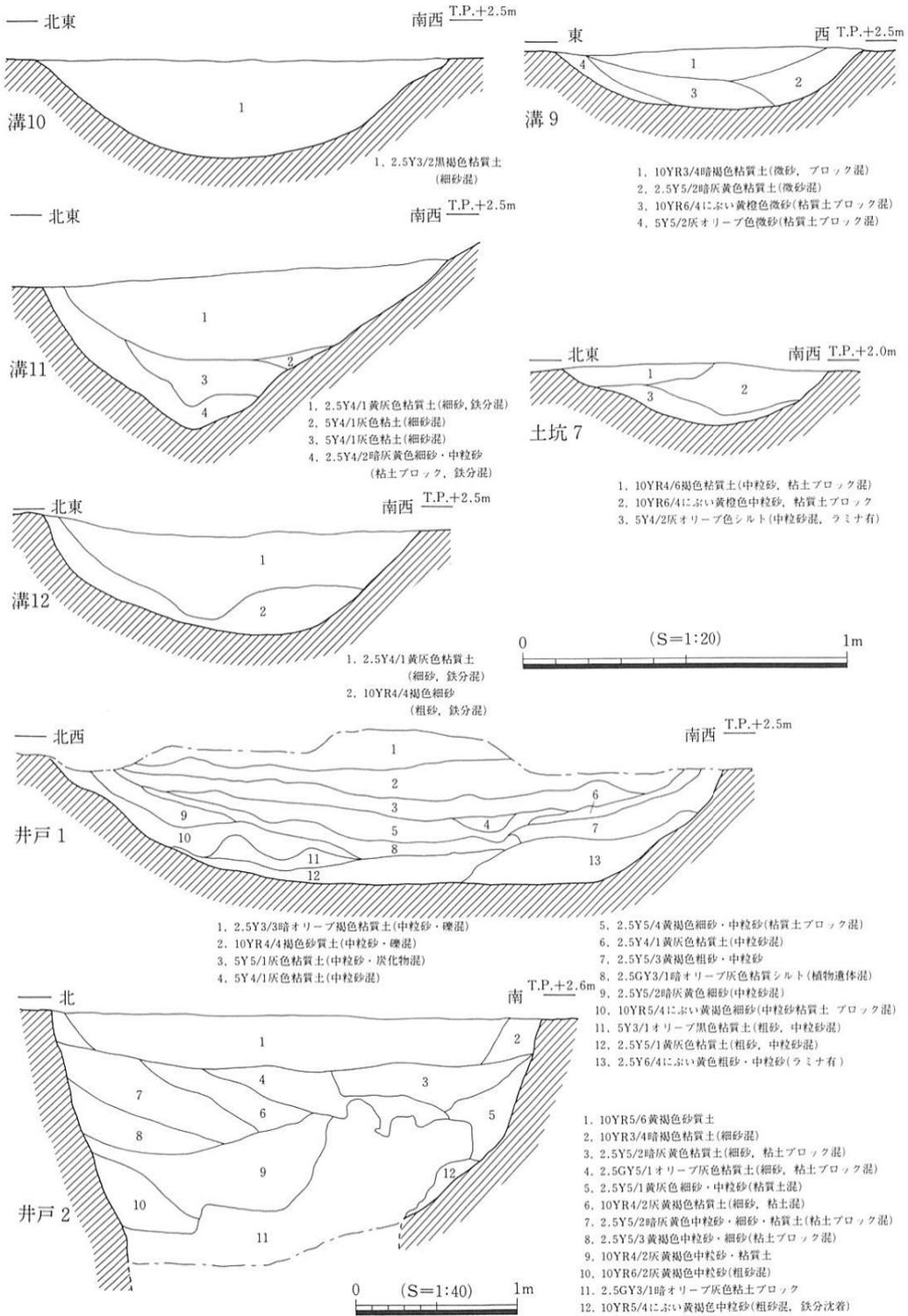


図12 31トレンチ第1面 溝9・10・11・12, 土坑7, 井戸1・2断面

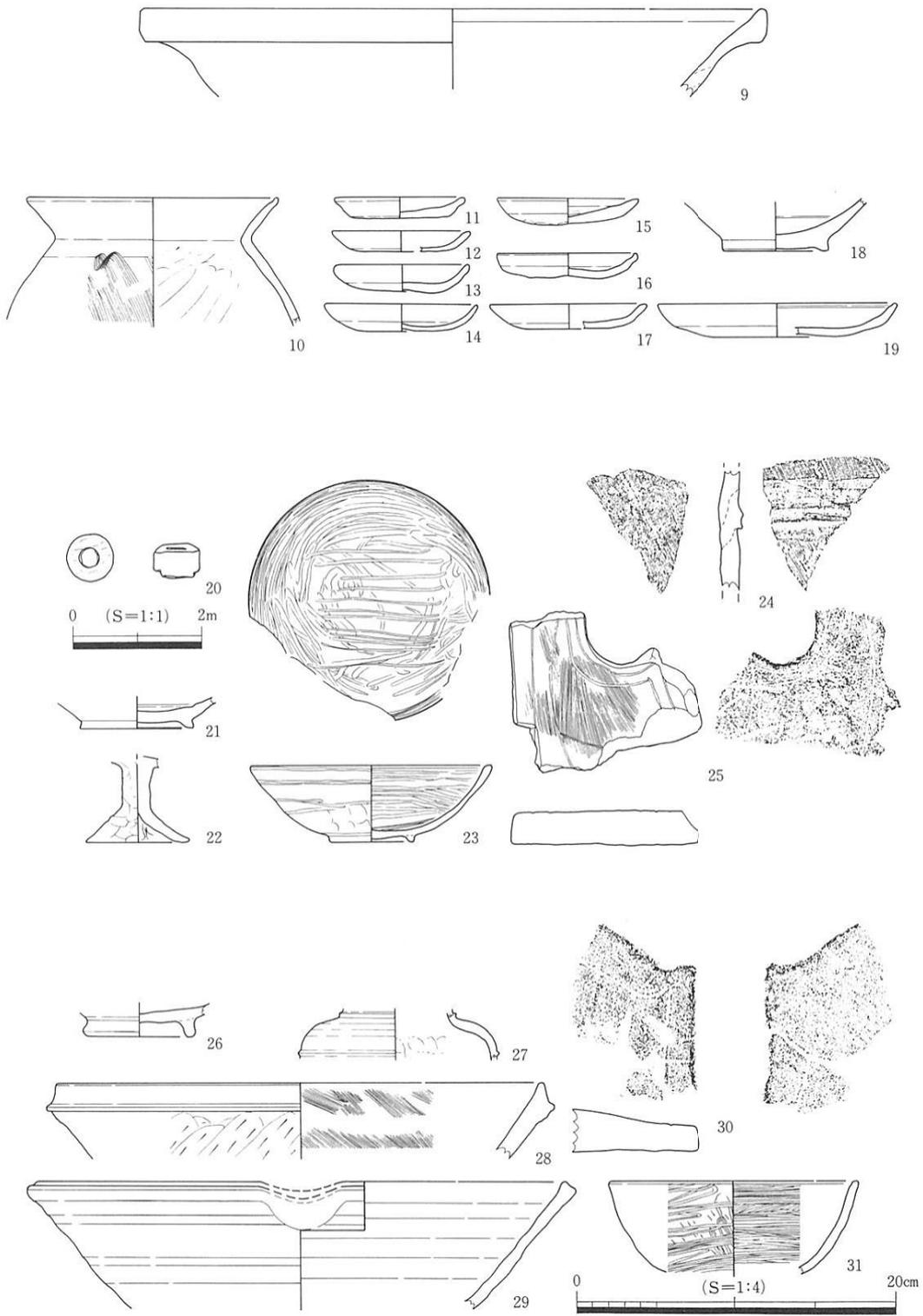


図13 3 | トレンチ第1面 溝5・9・10・11・12出土遺物

葉から15世紀初頭頃に位置づけられると考えられる。また、20（図版73）は滑石製白玉であり、21（図版75）は緑釉陶器皿の底部部分である。

井戸1は南北約4.5m、東西3.6m以上、深さ約1.0mを測る不定形の大型井戸である。上層に砂質土、下層に砂が堆積している。出土遺物は図14-32~42である。38・39・42が当該期の遺物

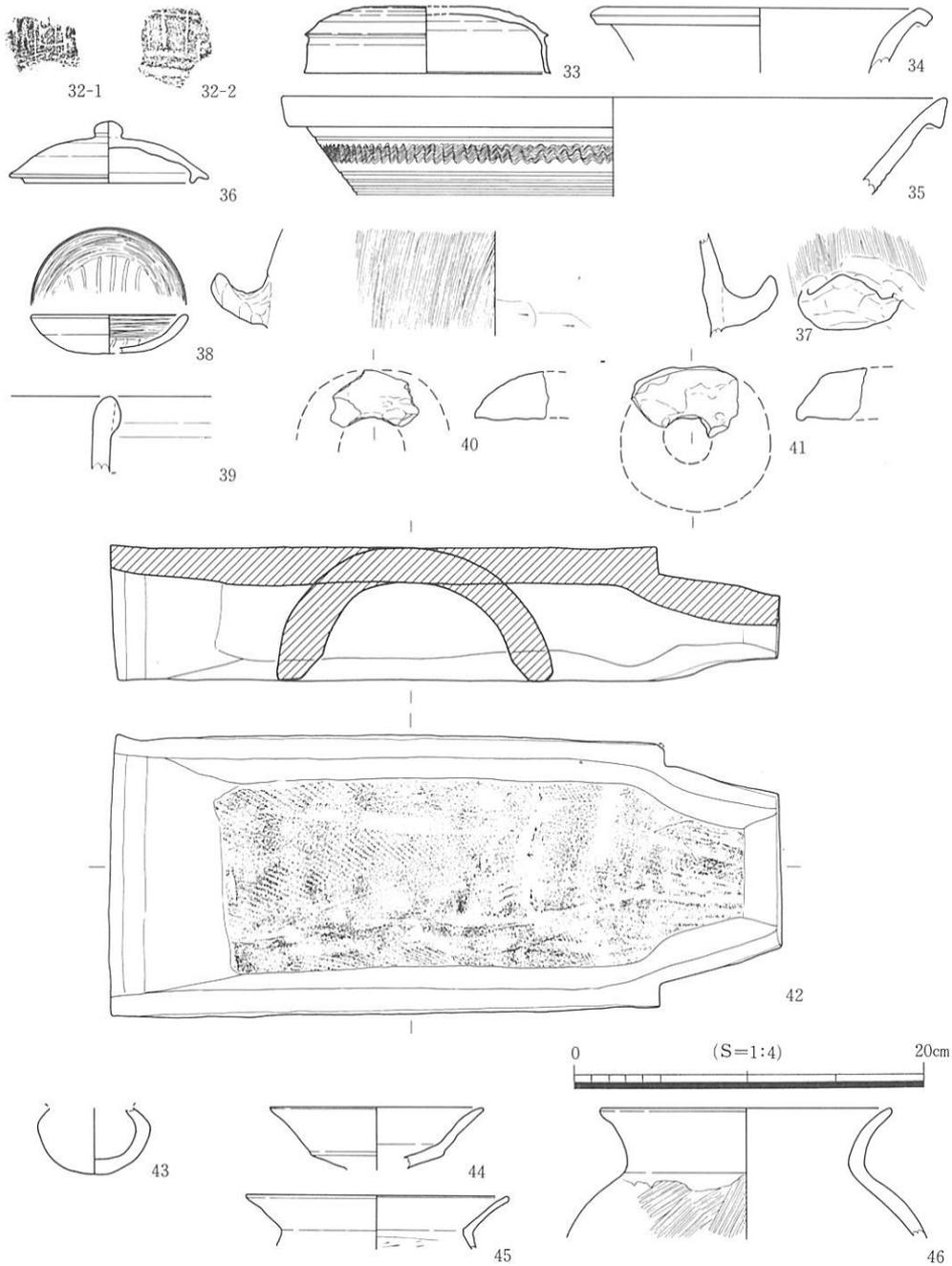


図14 3 | トレンチ第1面 井戸1・2 出土遺物

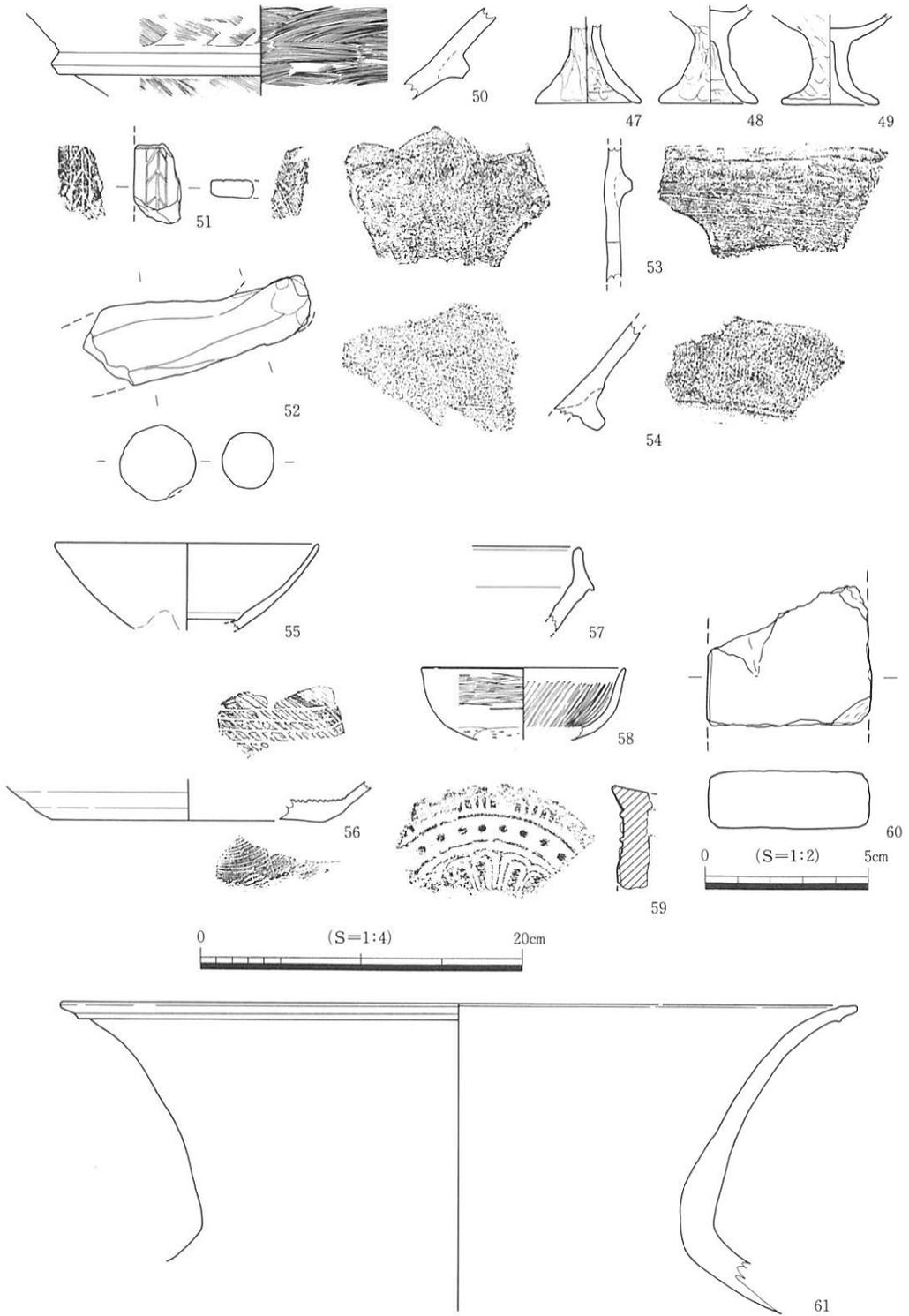


図15 3 | トレンチ 1層出土遺物

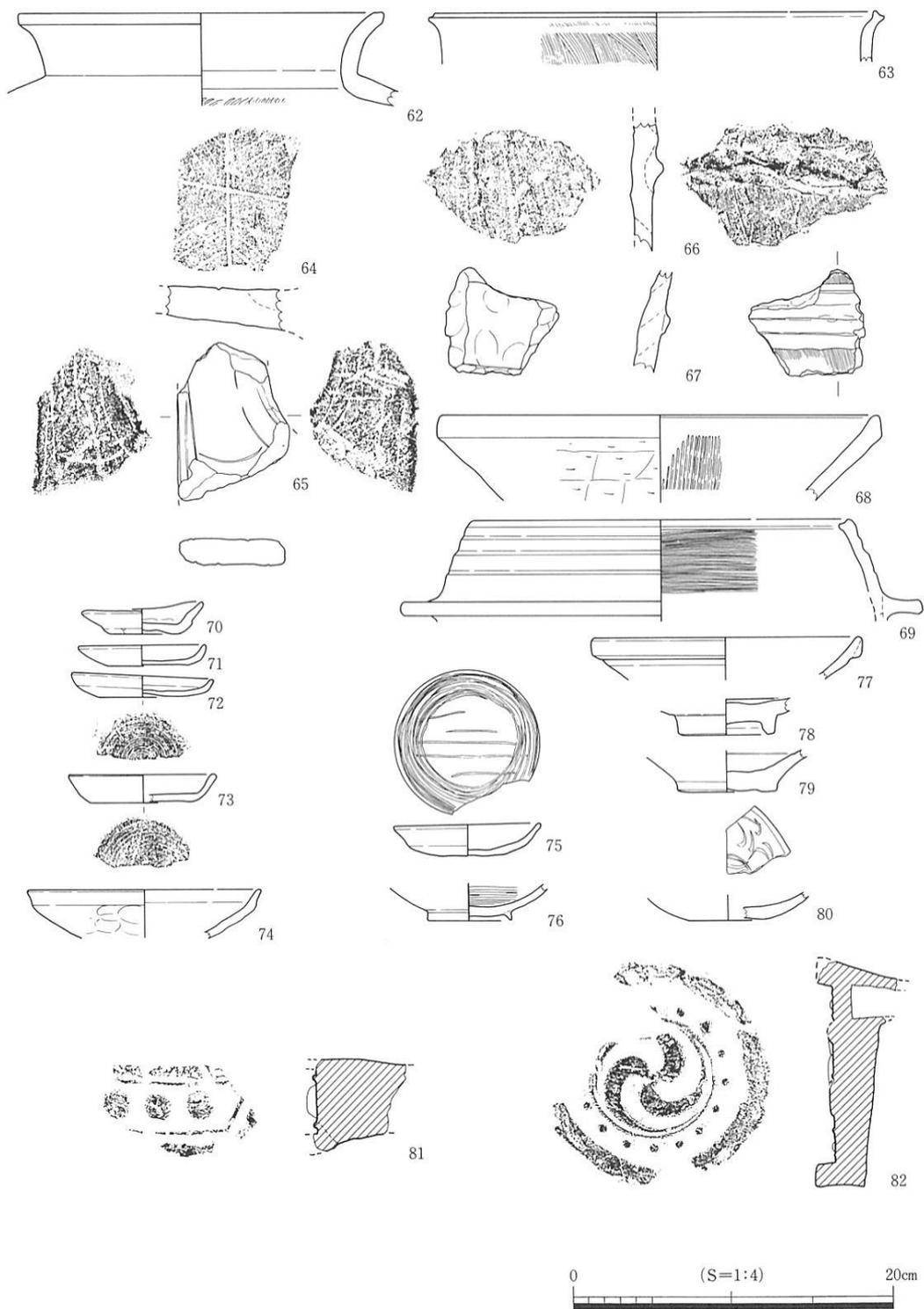


図16 3 | トレンチ 2層出土遺物

であり、溝10~12と大差ない時期の遺構と考えられる。図化以外の遺物に曲物側板、瓦器椀、瓦器釜、獣骨等が出土している。井戸2は南北約3.2m、東西約1.6m、深さ1.7m以上を測る方形の井戸である。北東隅の壁がオーバーハングしている。図14-43~46の遺物の他、土師器釜、瓦器椀片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

図15-47~60は1・2層の包含層出土遺物である。59(図版74)は雷紋を巡らせた複弁蓮華紋軒丸瓦であり、裏面に丸瓦接合部が観察される。若江廃寺跡に関連したものと考えられる。55~

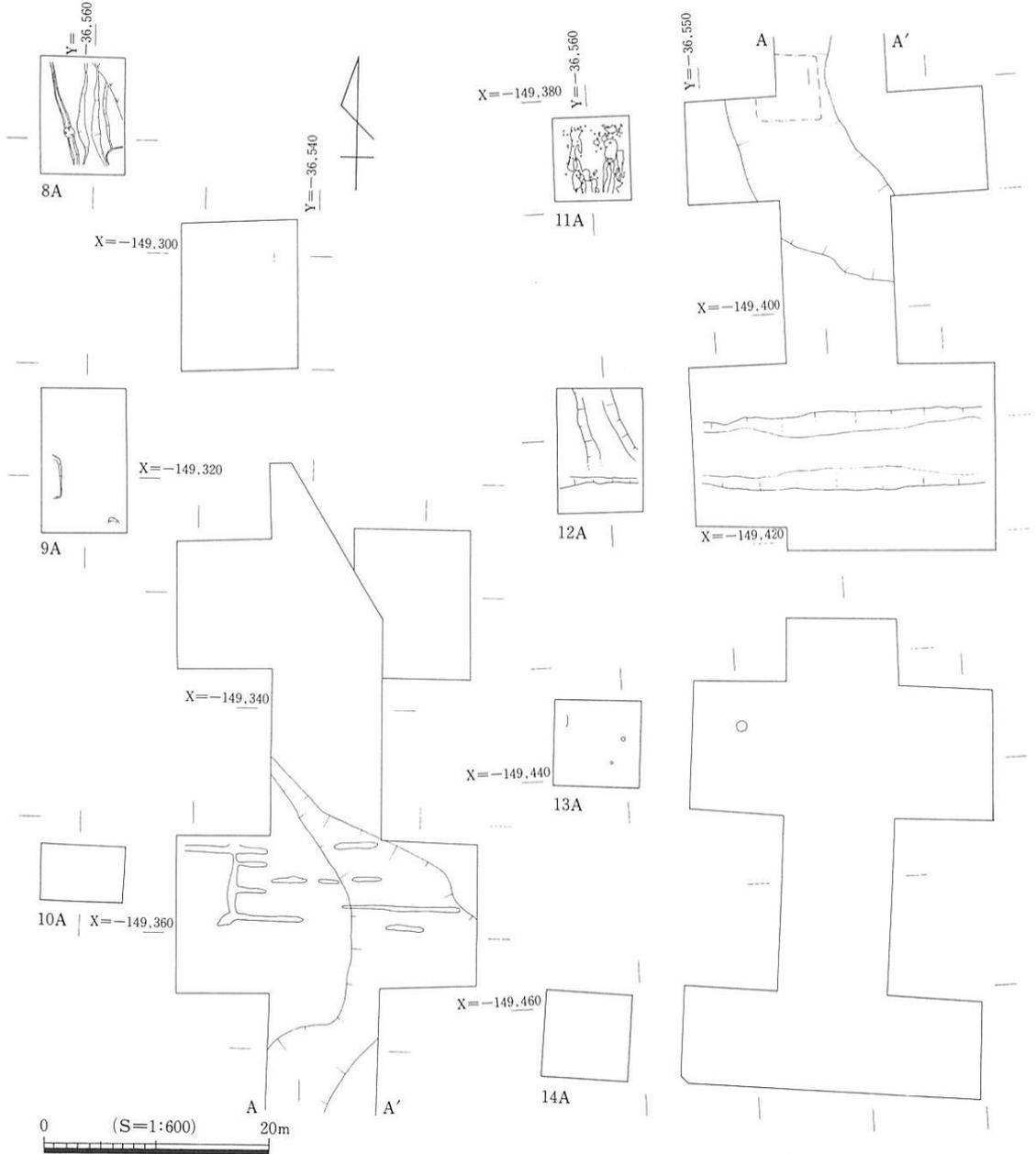


図17 A地区第1面 遺構全体図

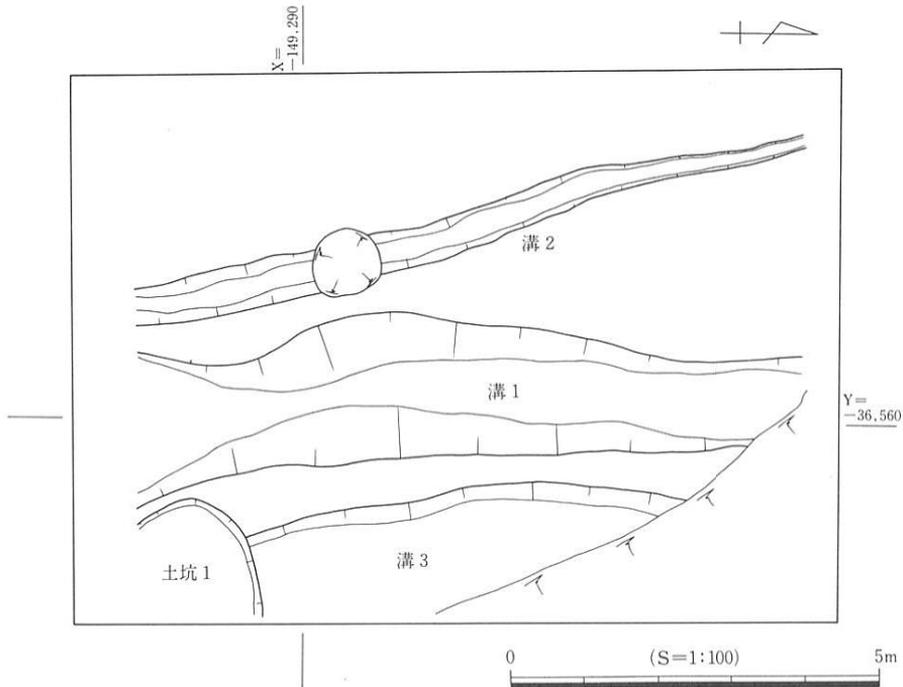


図18 8 Aトレンチ第1面 平面

57と前述した整地層出土の68～82は14～15世紀の遺物であり、当該期の遺構群に対応したものである。また、調査区の東側に存在する若江城跡との関連も考えられる。包含層からは図15-50～54、16-63～67の埴輪の他、中世の遺構からも図10-4、13-24・25・30・32の埴輪が出土しており、形象埴輪も多くみられる。既往調査区での1J地区において1辺15mを測る方形墳の巨摩第1号古墳が検出されており、その関連も考えられるが、今回出土の埴輪の時期には前期と中・後期の二時期があり、他の古墳の存在も推定される。

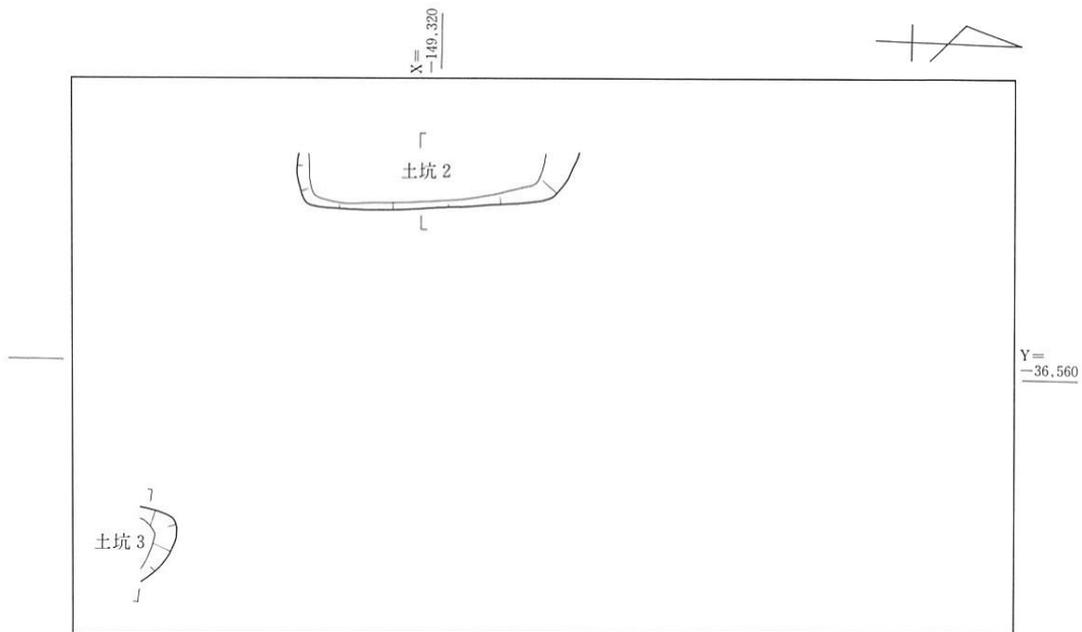
(2)A地区 (図17)

0～2層を除去することにより、中近世面が検出された。また、トレンチによっては包含層がすでに削平を受けており、機械掘削面が第1面とするトレンチもある。

8 Aトレンチでは南北方向にのびる溝1～3と土坑1が検出(図18、図版4-1)されている。埋土はいずれも灰色粗砂混じり粘土である。溝1からは図21-83(図版78)の瓦器甕、図21-84(図版76)の咸平元寶〔铸造年998～1003〕の他、桃の種子、瓦器釜、瓦器碗が出土しており、15世紀前葉の遺構と考えられる。また、包含層からは図21-85～95が出土しており、16世紀までの遺物が含まれている。

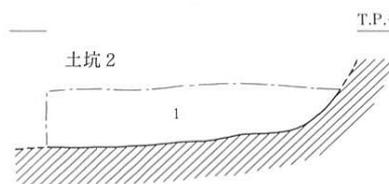
9 Aトレンチでは土坑1・2が検出されている。いずれも調査区外へのびるため、全容は不明である。遺構からの出土遺物はなく、包含層から須恵器、瓦器碗の他、近世の染付碗・播鉢・瓦が出土している。

10 Aトレンチでは第1面とその上部包含層ともにすでに削平を受けていたため、遺構は検出さ

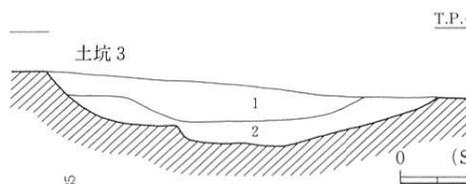


9Aトレンチ

0 (S=1:100) 5m

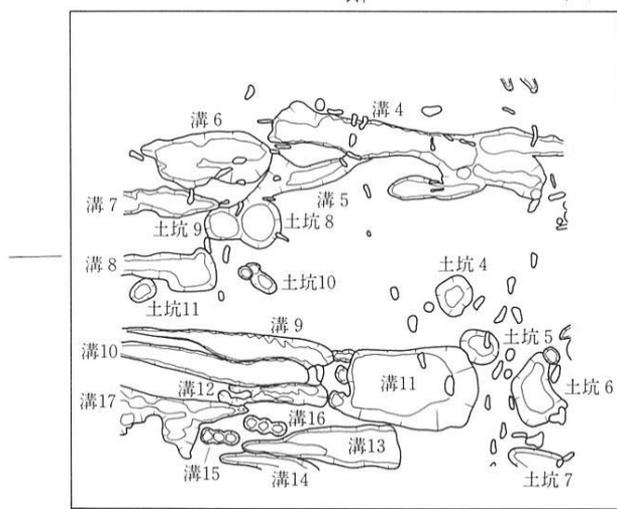


1. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(中粒砂混)



1. 10YR5/4にふい黄褐色粘土ブロック
2. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(中粒砂混)

0 (S=1:20) 0.5m



11Aトレンチ

0 (S=1:100) 4m

図19 9A・11Aトレンチ第1面 平面

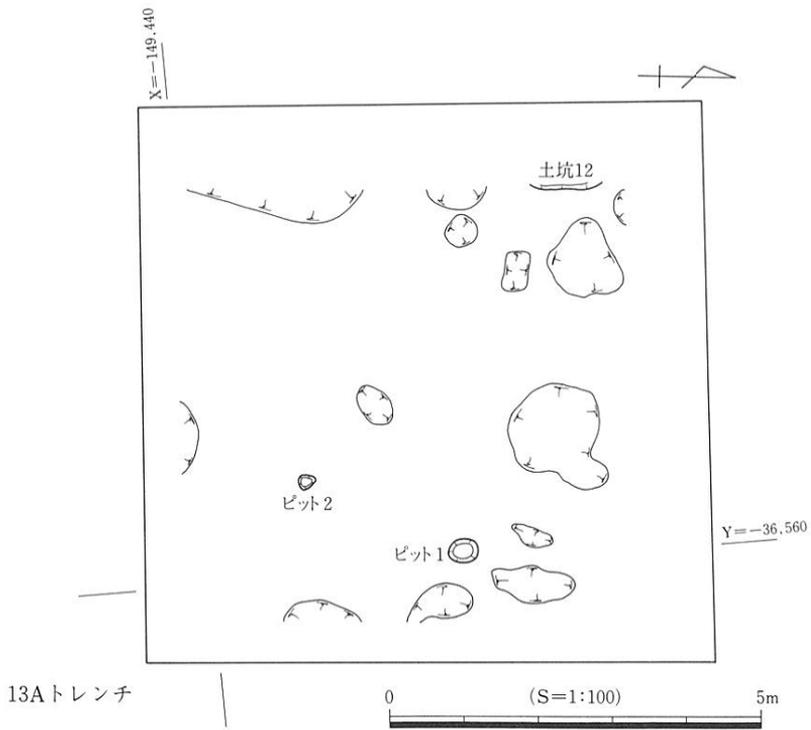
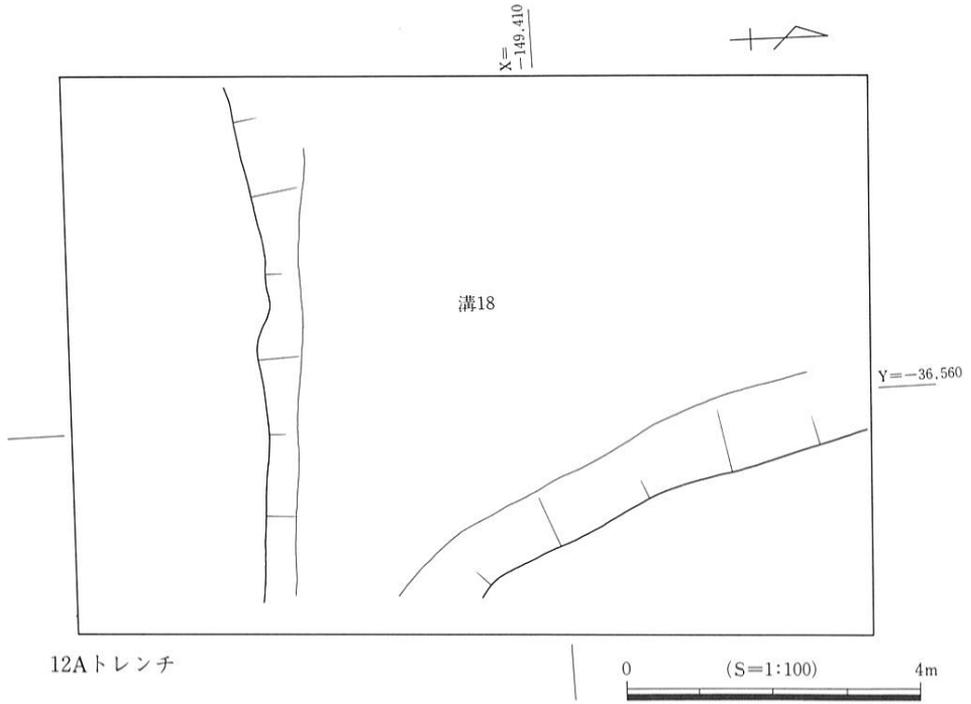


図20 12A・13Aトレンチ第1面 平面

れていない。

11A トレンチでは不定形な溝・土坑と足跡が検出（図版4-2）されている。溝9～12は一体のものと考えられ、底部は凹凸が著しい。足跡は東西方向に3列みられ、深く踏み込まれている。遺構からの出土遺物はない。

12A トレンチでは東西方向にのびる溝18の南肩（旧楠根川）が検出されている。旧楠根川は1934年（昭和9年）の改修工事によって消滅したものであり、既往調査のa-6・a-7 トレンチにおいてもSD801として検出されており、溝18はこれに連なる遺構である。深さは検出面から約0.7mを測り、埋土は黒色粘土である。図21-96の巴紋軒丸瓦の他、近現代の平瓦、土師器が出土している。

13A トレンチでは第1面とその上部包含層ともにすでに削平を受けていた。攪乱が多く、遺構はピット1・2と土坑12のみである。

14A トレンチでは第1面とその上部包含層ともにすでに削平を受けていたため、遺構は検出されていない。

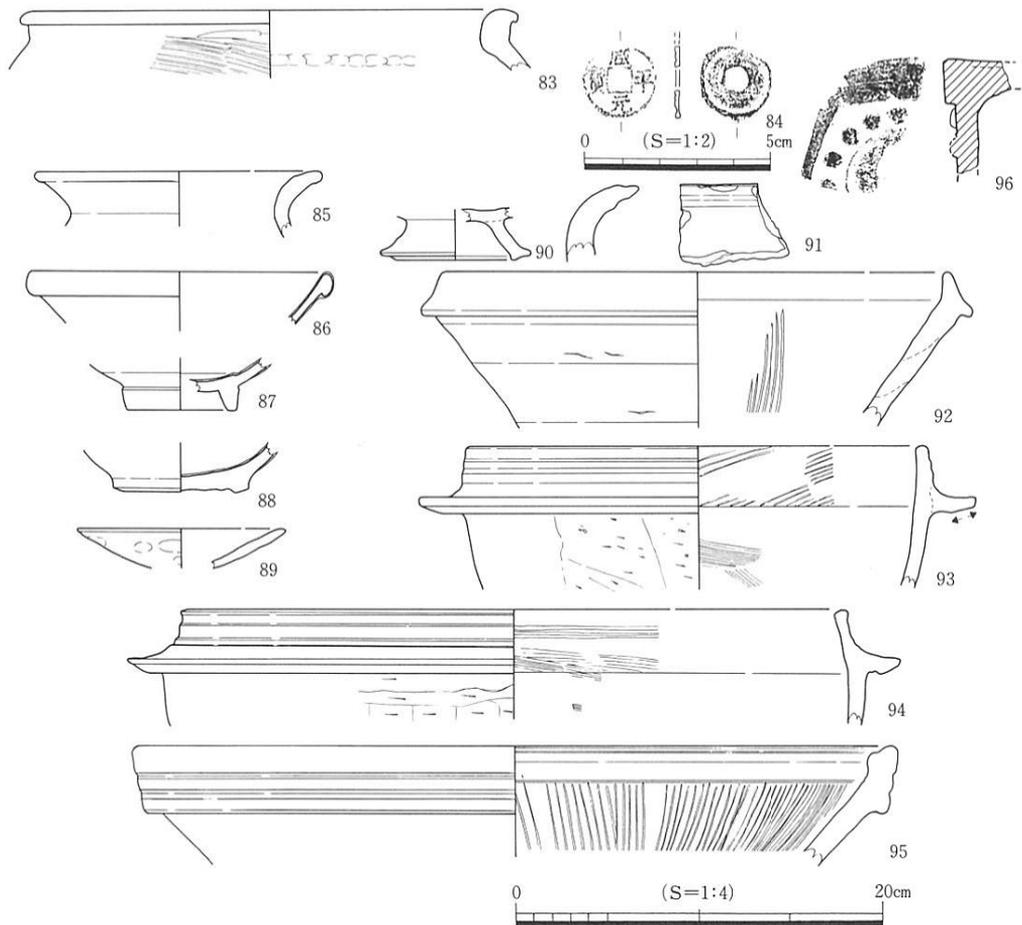


図21 8・12A トレンチ第1面 溝1, 1・2層, 溝18出土遺物

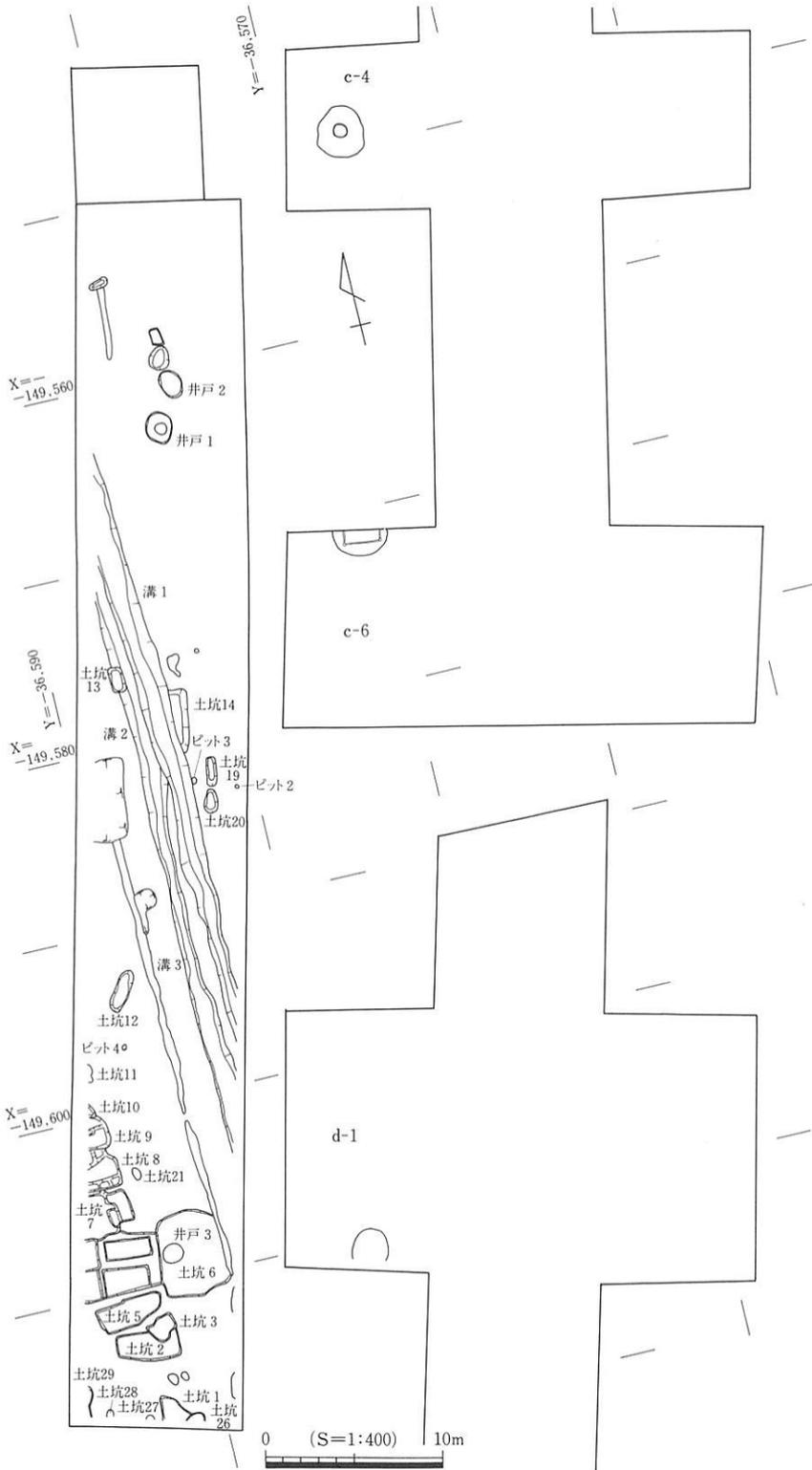


図22 10Cトレンチ第1a面 平面

(3)C地区 (図22)

C地区では古代から中近世に相当する遺構面として第1a・1b・1c面の3面が検出されている。但し、8C・9Cトレンチでは遺構は検出されておらず、以下の記述は10Cトレンチに関するこのみである。また、既往の調査区では井戸が3基検出されているのみである。

第1a面は1層の灰色粘土を基盤とする面であり、トレンチ北側の $X=-149,560$ 、 $Y=-36,580$ 付近で土坑・井戸が、中央部の $X=-149,570\sim-149,600$ 、 $Y=-36,585$ 付近で南北溝が、南側の $X=-149,570\sim-149,610$ 、 $Y=-36,593$ 付近で土坑群が検出されている(図22)。

井戸1の枠は上部に井戸枠瓦を1段立て、下部には板材を3段にわたって縦位に巡らしている(図版5-2)。瓦は9枚をもって1周巡らせており、井戸内からの出土を合わせ、39枚を数える。よって最低5段の井戸枠瓦が想定できる。板材はおおよそ $90\times 12\times 3$ cmを測り、上段に21枚、中段に22枚、下段に21枚使用している。なお、下段板材の長さは88cmを測り、やや短い。これらの枠外側には、瓦部分に1か所、板材部分に2か所にわたって竹材が巻き付けられている。図27-118(図版76)は井戸1の枠に使用されていた瓦であり、凸面の端部に弧線圧痕が観察される。屋根に葺く平瓦とは相違があり、狭端、広端の差はほとんどなく、井戸枠専用に製作されたものと考えられる。 $26.5\sim 29.5\times 24.5\sim 26.5\times 2.1\sim 3.5$ cmの法量を有しており、規格性が高い。溝1~3(図版5-1)は $N-2^{\circ}-W$ の角度を有している。溝1からは染付碗、溝2からは巴紋軒丸瓦(図27-115、図版76)、瓦質獣脚(図27-116、図版76)が出土している。

土坑2~10(図23、図版5-3)は切り合いを有しながら、集中している。壁面は垂直であり、土坑5・7~9の底部にはさらに平面四角形の窪みがある。これらの土坑群は粘土採掘坑と考え

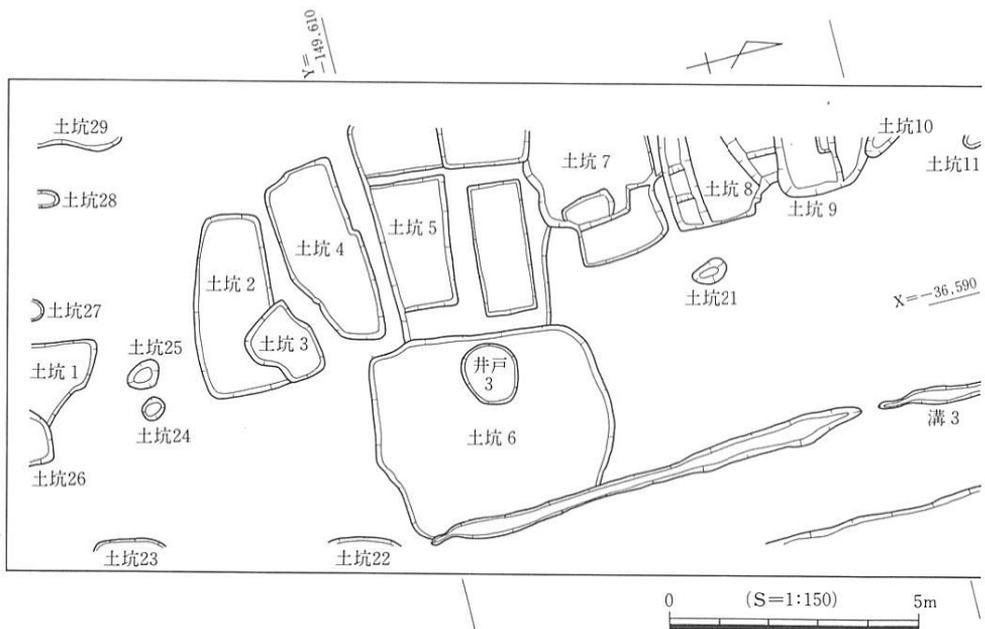


図23 10Cトレンチ第1面 粘土採掘坑群平面

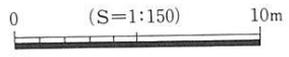
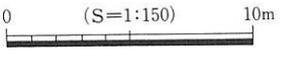
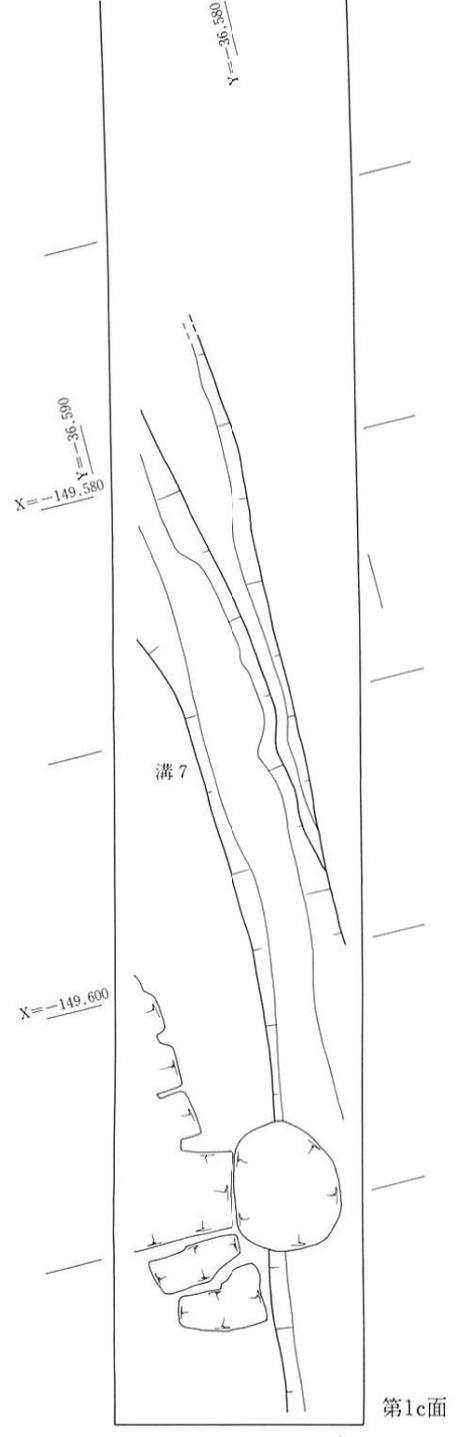
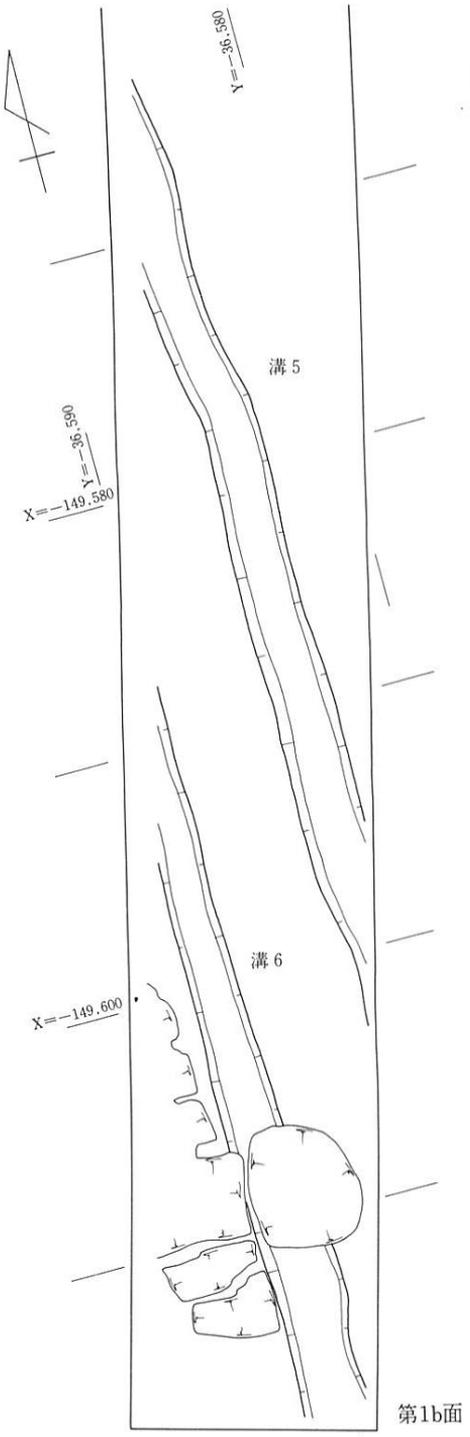


図24 10Cトレンチ第1b・1c面 平面

られる。第1a面の時期は近世と考えられる。

第1b面は1層の灰色粘土を除去した面であり、中央部にN-2°-Wの角度を有した南北方向にのびる溝5・6が平行して検出(図24、図版6-1)されている。断面はU字形を呈し、深さ

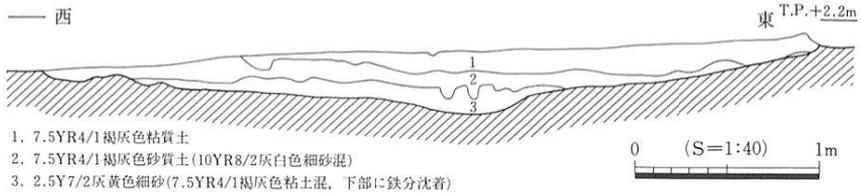


図25 10Cトレンチ第1c面 溝7断面

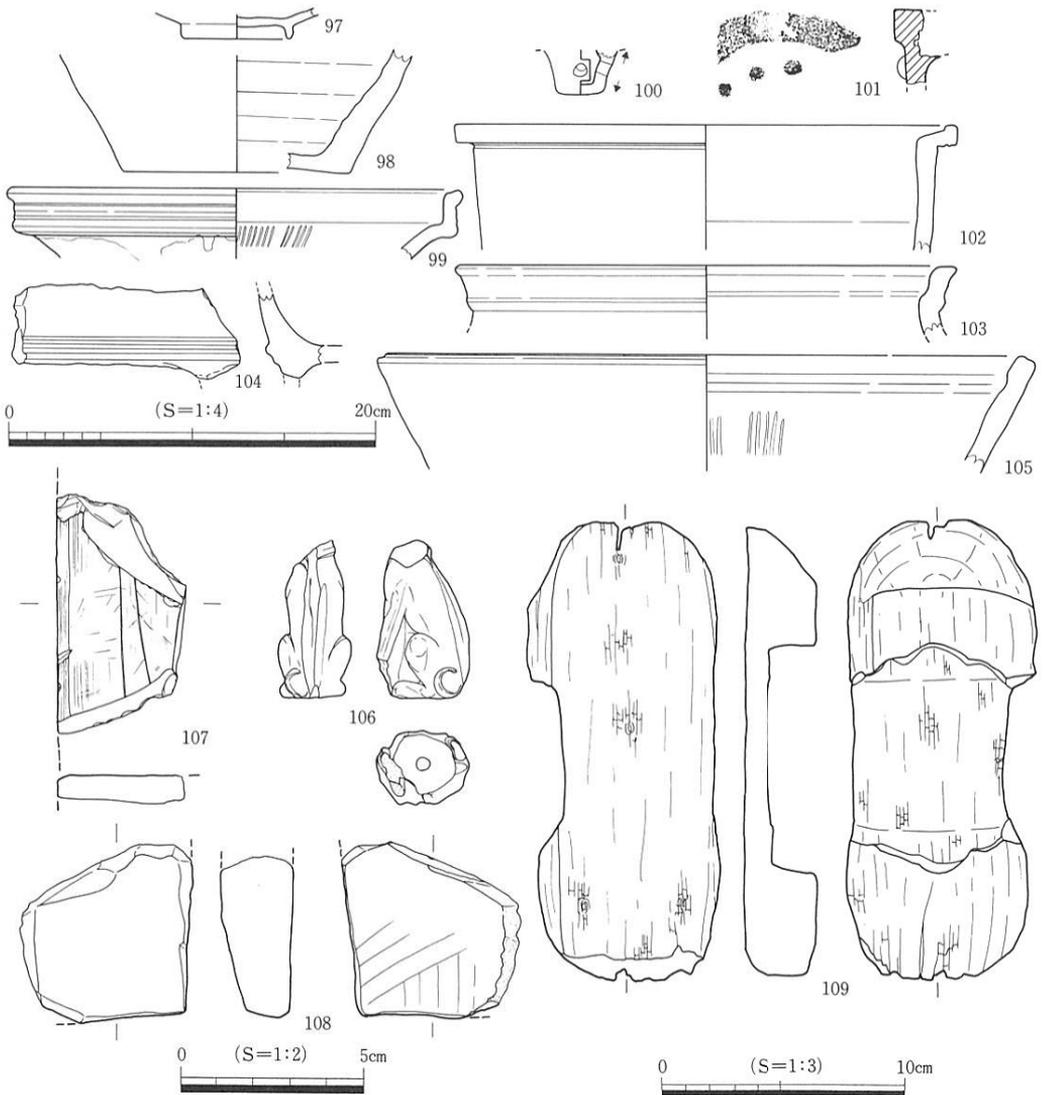


図26 10Cトレンチ 1層出土遺物

は溝5・6共に0.1~0.2mを測る。

溝5からは元豊通寶〔铸造年1078〕（図27-114、図版76）が出土し、溝6からは前右脚部分の土馬（図28-119、図版77）、和銅開珎（図28-120、図版77）が出土している。また、第1b面上層包含層からはミニチュア土器（図28-123・124、図版77）がみられ、貨銭、土馬の出土から、付近において祭祀関連の行為があったことが考えられる。第1b面は11世紀後葉と考えられる。

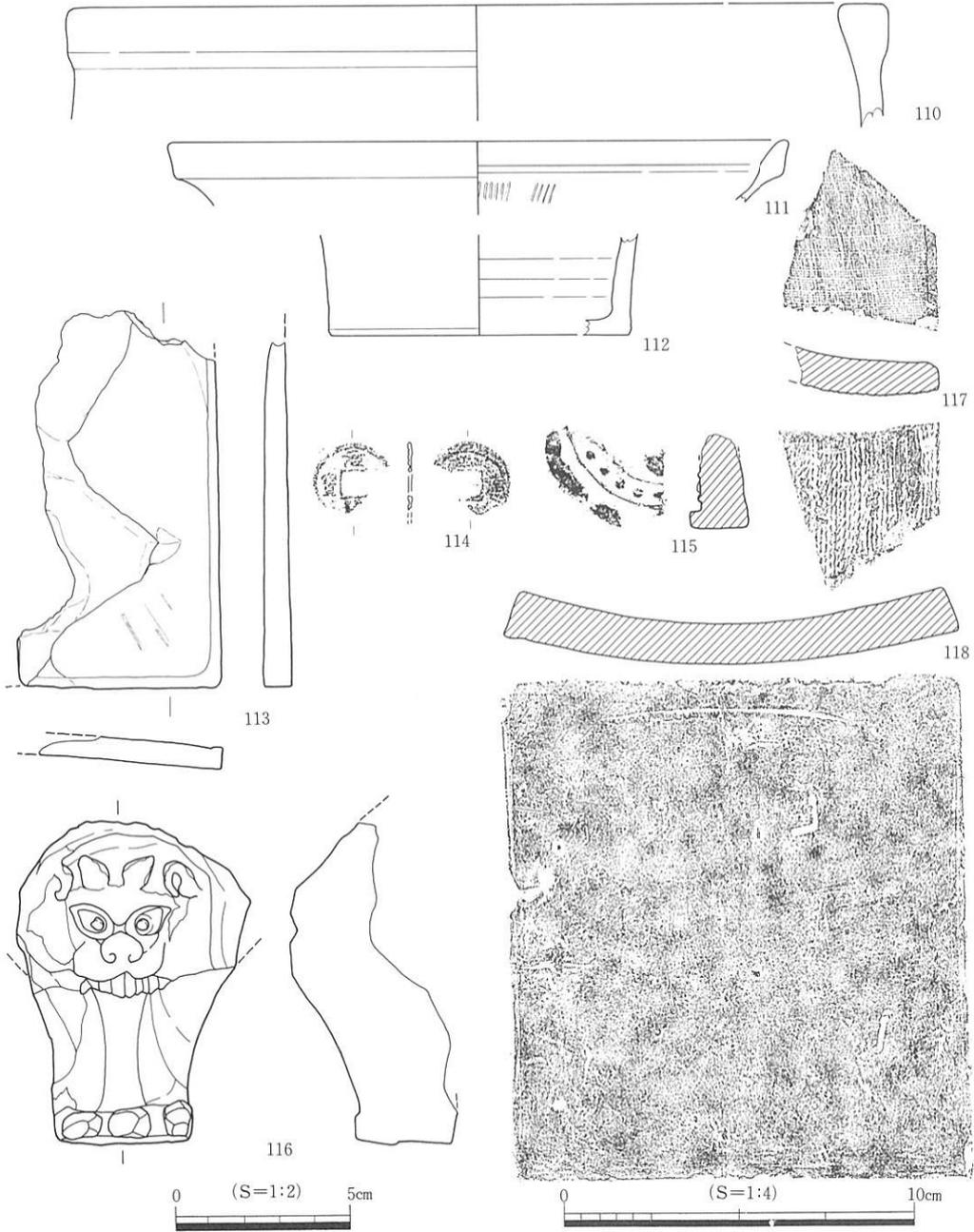


図27 10Cトレンチ第1a面 溝1・2・5, 井戸2・3出土遺物

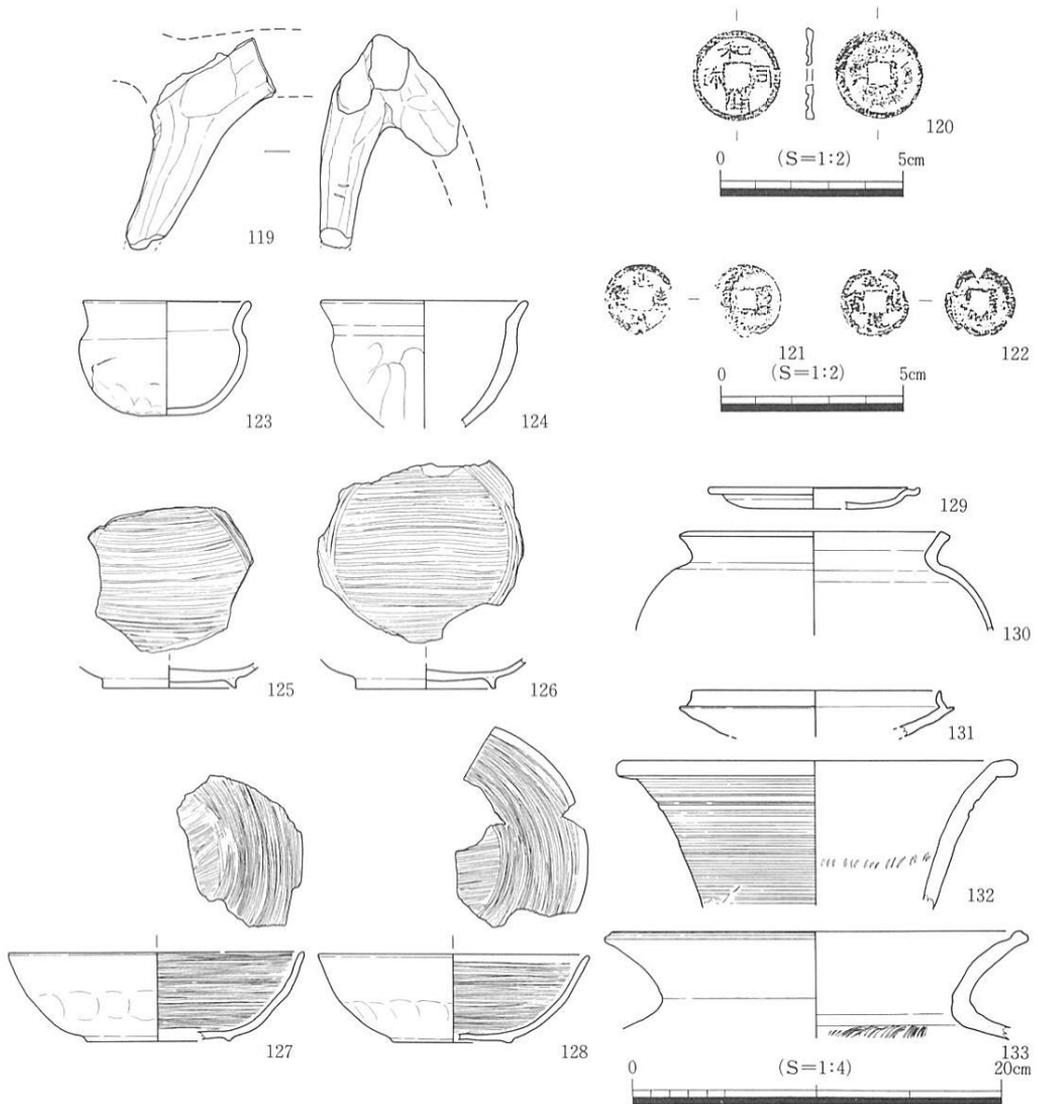


図28 10Cトレンチ第1b・1c面 溝6・7, 2・3層出土遺物

第1c面は第1b面の基盤層である灰色粘土を除去した面であり、 $N-2^{\circ}-E$ の角度を有した南北方向にのびる溝7が検出(図24、図版6-2)されている。幅約4~6m、深さ約0.3mを測り、東辺は途中からテラスをもって、段を有する断面形態である。出土遺物は図28-121、122、125~130であり、121・122(図版77)の延喜通寶は溝の上層部分(図25の土層1)より出土しており、合計8枚を数える。125~128(図版78)は内黒の黒色土器A類であり、10世紀前半にあてることができる。第1c面の時期と考える。

以上の溝1~3・5~7は条里の方向に合致するものであるが、現地表にみられる条里境界線上には位置しない(図版1)。

2. 第2面（古墳時代前期）

基本層序における第2面に相当する遺構面である。既往の調査と同様に複数の遺構面を検出した。しかし、これらの遺構面は短期間のうちに形成されたことが明らかであり、それぞれ第2 a面、第2 b面、第2 c面としている。

(1) I 地区（図29、図版7）

2層の土壤化層を除去した後は、均質な中粒砂を基本とする黄褐色流水砂層である3層の堆積を検出した。3層はトレンチ全域にみられ、標高はT.P.+2.0mから2.2mを測る。層厚は平均約1.0mで、最下面はT.P.-1.3mに達する。

トレンチ北側の3層除去後の状況は、トレンチ全域において粘土層の堆積が認められ、これを第2 a面とした。遺構としては河川と無数の足跡がみられる。

河川1はX=-149,850付近において東西にはしる流路であり、前述の流水砂を堆積させた河川の本流と考えられる。埋土は中粒砂を主体とする砂層であり、北側は粘土塊などを多く含む。流路に堆積した砂層を掘削中、T.P.±0.0m付近の河底から木棺3基を検出した（図版8-1）。小児用と思われる小型の組合式木棺であり、いずれも河川による攪乱のために木棺の一部を流失していた。また、河川の傾斜部分において、土壤化層が東に向かって斜めに堆積す

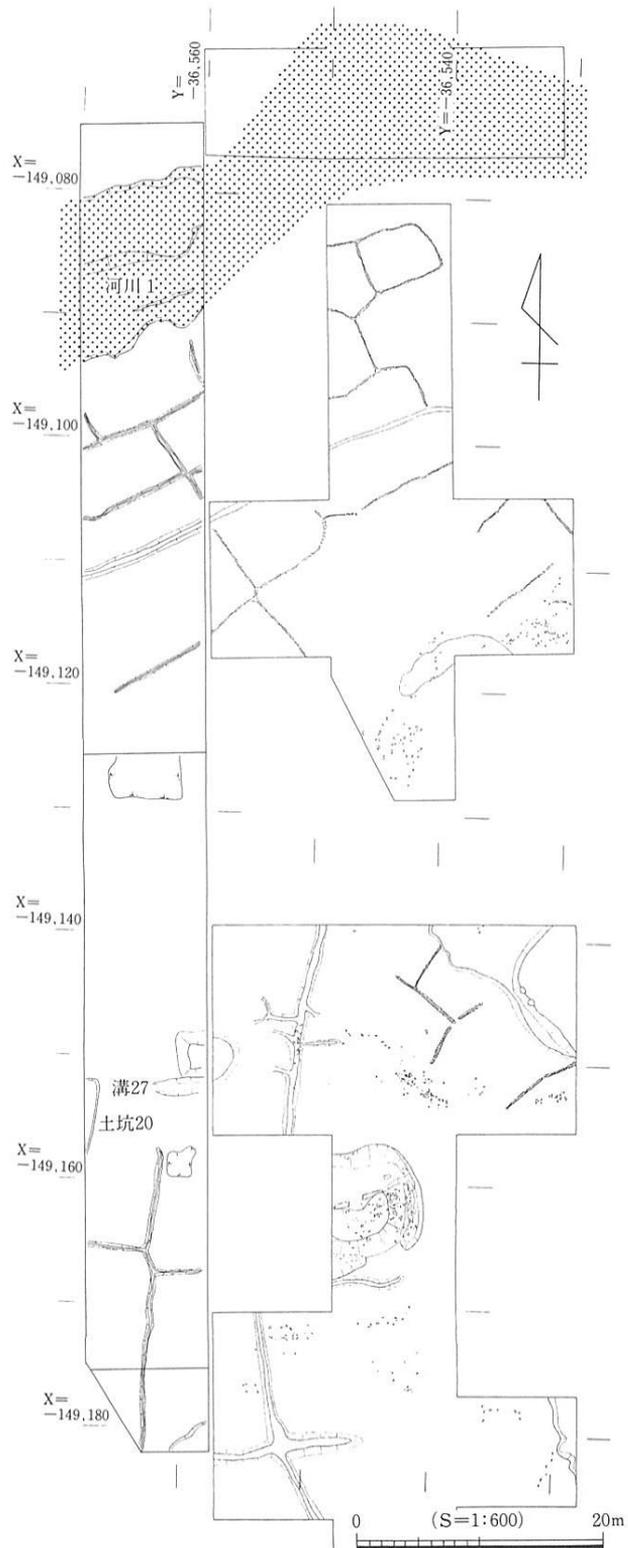


図29 I 地区第2面 遺構全体図

る状況を確認したため、これらが方形周溝墓に伴う埋葬施設であることを確認した。これらの詳細については後述することにする。

河川1と3層の流水砂から出土した遺物は、縄紋時代晩期から古墳時代中期までの時期に及んでいる。しかし、古墳時代前期以前の遺物は極端に少なく、河川の流水現象による攪乱によって、下層より捲き上げられたものと思われる。

このような状況から、河川1の存続期間は古墳時代前期から中期と考えられる。ちなみに遺物の出土量としては、コンテナ約13箱である。

足跡はトレンチのほぼ全域において検出された。足跡の内部には、流水砂である3層が堆積していることから、河川1の氾濫する直前に残されたものと考えられる。また、トレンチ北側の中央、X=-149,107、Y=-36,564付近より完形の土器（図31-164、図版8-2）が出土しており、足跡もこの周辺に集中して検出された。土器は口縁を南側に向け、穿孔部分を北側にした状態で出土した。土器の内部には流水砂が堆積しており、内部からは何も検出されなかった。

図30-134から図33-210は河川1および3層より出土した遺物である。

134・135は縄紋時代晩期の深鉢である。134は突帯紋土器であり、深鉢の肩部の破片と思われる。外面に突帯文が付加されており、その突帯上に刻み目を施す。135は口縁端部を丸く仕上げられており、その外面を突出させる有段口縁である。

136・137は弥生時代前期の壺であり、ともに頸部の破片である。136の外面にはヘラ描きによる沈線が水平方向と斜方向に施されており、137は2条の平行沈線が施されている。

138は口径42.6cmの甕である。胴部はやや内湾しながらほぼ垂直に立ち上がり、口縁は端部を折曲げによって約2.6cm垂下する。調整は胴部外面に縦方向のミガキ、内面は左上がりのハケ目を施す。口縁付近は横方向のミガキがみられる。また、垂下口縁の外面には一列の刺突文を2.0から2.5cmの間隔でめぐらせている。弥生時代中期である。

139から148は弥生時代後期の土器である。

139は頸部を直線的に外方に開き、口縁部付近でわずかに内湾しながら立ち上がる直口壺である。粘土紐のつながりが明瞭に残っており、粗雑な作りである。外面の調整は体部は幅約1.4cmのハケ目、頸部は一部に上方向へのケズリがみられる。内面は頸部に横方向のハケ目を施す。

140から142は鉢である。140は小型品であり、体部はやや内湾しながら外方に立ち上がり、口縁部は屈曲して直線的に開く。内外面ともナデ調整を施す。141は平底の底部からやや内湾しながら外方に広がり、口縁ではほぼ垂直に立ち上がる有孔鉢である。底部には焼成前の穿孔がみられる。調整は外面の底部付近に左上がりのタタキ痕が残る。内面は体部下半に底部を中心とする横方向のハケ目、上半はやや右上がりのハケ目を施す。142は円形に立ち上がり、口縁外側に緩い水平方向のナデを施し、凹みをつくる。口縁端部は水平に面取りを行い、刻み目を施す。調整は外面に右上がりのタタキ、内面は左上がりのハケ目を施す。

143は高杯である。直線的に外方にのびる受け部に、強く外反する口縁が付く。口縁端部はわ

ずかに内湾し、尖り気味に仕上げる。調整は内外面ともナデによる。

144は器台である。体部中央であり、上下を欠損している。外面上下にナデによる凹線を数条めぐらせ、その間に羽状の刻み目を水平に施す。

145は小型の壺である。器形は胴部最大径がやや下半にある下膨れ状を呈し、口縁はやや外反気味に外側に開く。底部はわずかに凹む平底であり、胴部下半の2ヵ所に焼成後の穿孔を行う。調整は胴部外面に縦方向のミガキ、底部にハケ目の痕跡を残す。内面は縦方向のケズリの後、底部に円形のハケ目、胴部に横方向のハケ目を施す。

146・148は甕である。146は垂直気味に立ち上がる頸部から外反し、さらに外反する口縁を付加する。いわゆる受け口状口縁を呈する。口縁端部外面に1条の沈線をめぐらせる。調整は全てナデによるものである。148の口縁はほぼ直線的に外側に広がり、端部は丸く仕上げ、外面に強いナデを1段行う。調整は体部の外面にタタキの後、縦方向のミガキを施し、口縁部にもナデの後にヘラミガキを行う。体部内面は横方向のハケ目、口縁部は横方向のミガキを施す。

147は手焙形土器である。口縁は直線的に外傾させ、口縁端部を上方へつまみ出し、約4mm間隔の刻み目を施す。また、体部と口縁部の屈曲部分に、後から異なった粘土紐を付け足しており、白い带状となる。

149から160は庄内式期の土器である。

149の口縁は内外面に明瞭な段をもち、長く直立した二重口縁をもつ。

150から153は甕である。149と同様に発達した二重口縁部をもつ。いずれも口縁外面に櫛描きによる水平方向の擬凹線を施す。瀬戸内系の影響によるものである。

154は二重口縁壺である。二重口縁部の一部に格子状のヘラ描きを施す。

155は器台であり、いわゆる鼓形器台の裾部分となる。裾部と体部の境につまみ出しによる明瞭な稜線をもつ。裾部外面は上下2段に強いナデを行い、内面はケズリを施す。山陰系の影響によるものである。

156は低脚碗であり、浅鉢状の体部に小型の脚部が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁付近ではわずかに外反する。口縁端部は丸く仕上げている。内面はケズリを行なった後、非常に丁寧なミガキを施す。外面はナデを行う。山陰系土器の搬入品と思われる。

157から159は甕である。口縁端部は上面に端面をもつものやはね上げ口縁のものがみられる。調整は体部外面にタタキの後、縦方向のハケ目を施し、内面はケズリを行う。とくに大和地方の影響を受けたものと思われる。

160は直口壺である。頸部は外反しながら開き、口縁端部に面取りと1条の沈線を施す。

161から201は古墳時代前期の土器である。

161から163は甕である。161の口縁は内湾しながら外方にのびており、端部は内側にわずかに肥厚する。162の口縁はやや内湾しながら外傾し、端部は内側に肥厚する。調整はナデを行っており、一部体部外面にはハケ目がみられる。163は口径15.8cm、器高24.4cmである。口縁はや

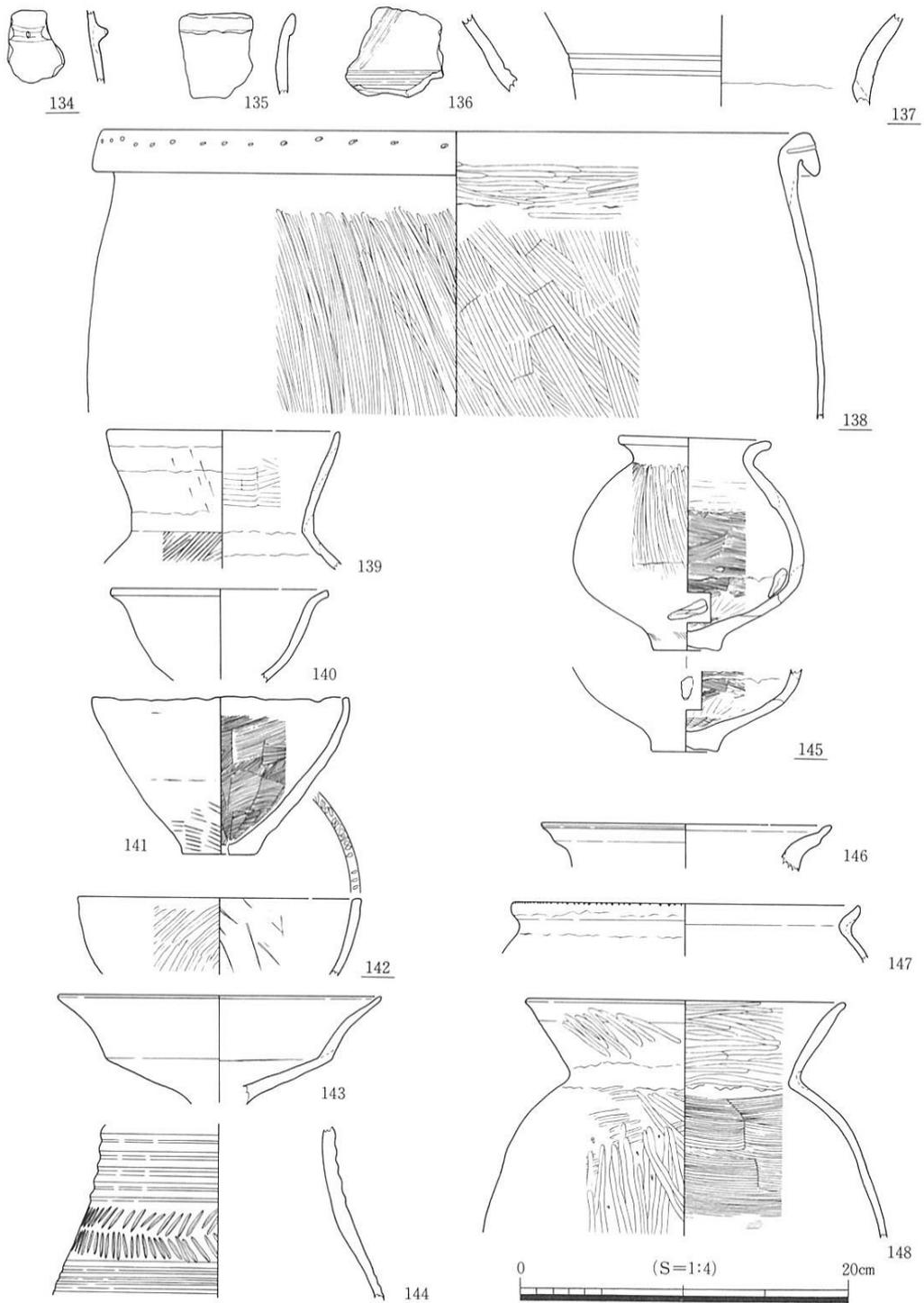


図30 3 i トレンチ第2面 河川1 出土遺物(1)

やや内湾しながら外傾し、端部は内側に肥厚する。体部はほぼ円形で、底部は丸底である。口縁は内外面ともナデ調整を行う。体部外面はハケ目調整を行い、肩部では水平方向のハケ目がみられる。内面は斜め方向のヘラケズリが施されている。布留2から3式に相当する。

164は完形で出土した直口壺である。口径20.5cm、器高34.5cmである。口縁はやや外反しながら、端部が外側にわずかに肥厚する。体部はほぼ円形であり、底部は丸底を呈する。頸部外面はナデ調整を施し、内面は横方向のハケ目調整と体部との屈曲付近には斜めにハケ目調整を行う。また、外面の一部に『ナ』のようなヘラ記号がみられる。体部外面は細かなハケ目調整を行い、内面は、上半を指による押圧後にハケ目調整を施し、下半は斜め方向のヘラケズリを行う。また、肩部より上半の外面には赤色顔料が塗付されており、底部には焼成後の穿孔がみられる。

165から176は小型丸底壺であり、口径7.4から12.4cmを測る。『矢部遺跡』（1986 奈良県立橿原考古学研究所）によるところの、口径と胴部最大径がほぼ同一のものと、口径が胴部径を凌駕するものの2種類に大別される。前者の口縁は器高の1/3から1/4であり、直線的に外傾する。後者の口縁は器高の約1/2であり、やや内湾しながら外方にのびる。調整は古い形態はナデ・ミガキを使用しており、やや新しいものはナデ・ケズリを用いる。172はミニチュア品である。胎土が非常に緻密な精製土器である。口縁部と体部の境に幅2mmの沈線を施す。外面の調整はナデを行い、口縁部内面は放射状にハケ目、体部は円形に横方向のハケ目を施す。175・176は脚付きの小型丸底壺であり、体部はいずれも前述の後者の形態である。175は口縁部と体部の境がナデによって不明瞭である。口縁部内面には放射状の暗文を約5mm間隔で施す。

177から184は小型丸底鉢である。177から181は有段鉢である。布留1から2式に相当する。180は浅い碗状の体部から、口縁部は段をもって強く外反しながら開く。いわゆるS字状口縁に類する形態である。外面の調整はナデを行い、内面は細かい横方向のミガキを施す。182は口径約9.4cmのミニチュア品である。胎土が粗雑であり、調整は内外面ともナデを行う。183の体部は浅い碗状を呈する。体部下半の外面を横方向にケズリを行い、段をつくる。また、ケズリの上に放射状と思われるヘラ描きを施す。また、底部付近にはハケ目がみられる。

185から187は直口壺であり、186・187は小型品である。185の口縁部はわずかに内湾しながら外上方にのびる。外面の調整はナデを行い、内面は横方向の細かなミガキの後、放射状にミガキを施す。

188・192は壺の肩部である。188は肩部と頸部の変換点より下1.5cmの範囲に5から6mm間隔の斜格子を施し、下端には2条の沈線をめぐらせる。192は肩部と頸部の粘土紐繫ぎ部分を突帯状にし、2mm間隔の刻み目を施す。肩部には波状文を施した後、3個1組のボタン状浮文によって装飾する。

189から191・193・194は二重口縁壺である。189・190は口縁部外面を肥厚させることによって二重口縁にしたものである。内面の段が不明瞭であり、外面だけが強調された形となる。189はその突帯部分に竹管文をめぐらせている。191は屈曲する口縁部に直線的に外に開く二重口縁部

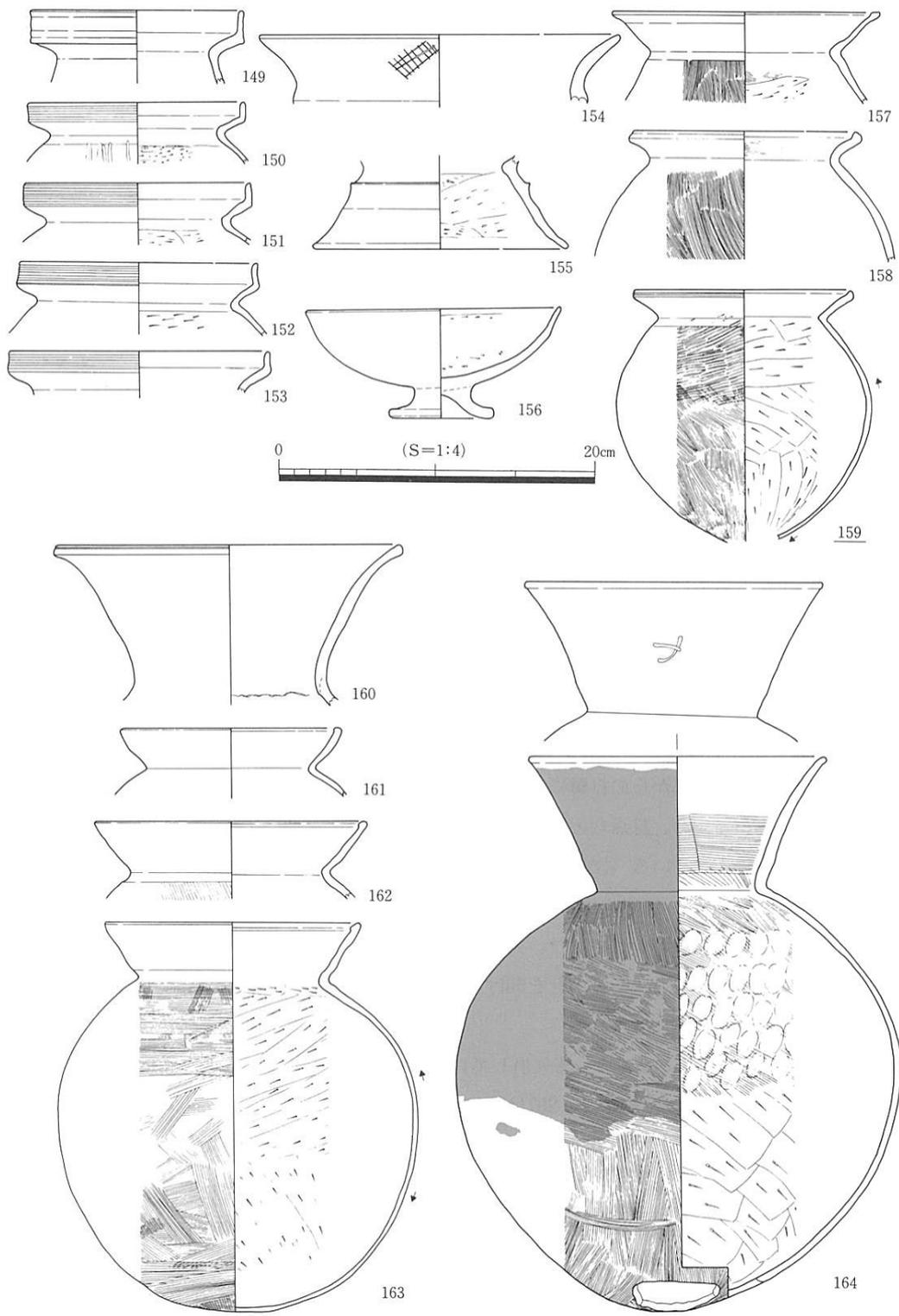


図31 3 | トレンチ第2面 河川1層出土遺物(2)

が付く。内面の段はナデによって不明瞭である。二重口縁部の外面には上下2列の波状紋を施す。原体は7本である。193は強く外反する口縁部に、やや内湾しながら長く直立した二重口縁部をもつ。外面の段の上部に強いナデを行い、段を突出させて強調する。口縁端部の内面も同様に強いナデを行っている。瀬戸内から山陰系の影響を受けたものである。

195・197は小型器台である。195はほぼ直線的に開く体部に直立気味の口縁が付く。口縁部の外面にナデを行い、凹線状にする。布留2式に相当する。197は脚部であり、直線的に広がる中央部に4ヶ所の円孔透かしを施す。

196・200・201は高杯である。いずれも体部側線長に対し、口径が大きく凌駕する形態である。196は稜線の不明瞭な体部に、低脚をもつものである。201はほぼ水平な体部に、わずかに内湾する口縁をもち、端部を尖らせる。外面の調整は横方向のミガキを行い、内面は横方向のミガキの後、放射状のミガキを施す。

198・199は半球状の杯部と、大きく裾が開く脚台の高杯である。

202から204は円筒埴輪である。いずれも川西編年V期に相当する。202は胴部中段の破片である。タガは上部を強く撫でており、ほとんど退化している。透かしは円形である。調整は内外面ともタテハケを行っている。焼成は内面のみ酸化し、断面および外面は還元されており、硬質である。203・204は底部最下段の破片である。タガに断続ナデ技法が施され、204では底部調整もみられる。調整はいずれも外面はタテハケを行い、203の内面はタテハケの後をナデ消しており、204は縦方向のヘラナデを行っている。焼成は203が還元硬質、204が酸化硬質である。

205は緑色凝灰岩の剥片である。緑灰色を呈し、周辺では産出されない石である。残っている剝離面の観察では、上部からの打撃によって割れたものと考えられる。しかし、掘削中の工具によって損傷しているため、打点などは確認できなかった。これに関するものとして、同一の層内より紅廉片岩が出土している(図版82)。

206は小型鏡である。一部を欠損しており、長径推定2.5cm、短径2.3cm、厚さ約1.5mmである。表裏面には成形時の擦痕が残っており、長径側の一端にV字の切れ込みがある。ツمامミは高さ約0.6cmの三角形を呈し、約1.5mmの小孔を開けている。色調は暗青緑色であり、一般的な粗悪品に比べ、比較的良質な青銅と思われる。

207・208は土錘である。206は一部欠損しているものの、直径約3cm、長さ約8cmとほぼ同一の大きさと思われる。206は約1cm、207は約1.2cmの円孔が開けられている。209は土製円板である。土器の破片を転用したものであり、オモリもしくは紡錘車の未製品と思われる。

210は木製の容器である。全体の約1/3であり、現存で長さ約34cm、幅約11cm、厚さ約0.9cmである。縁は平坦に加工されており、図の上から下に向かって次第に広がっている。復元すると、卵形の浅い盆状になると考えられる。材質はヤマグワである。

第2 a面の粘土層を約5から10cm掘削すると、足跡のみられなくなるT.P.+1.2m付近において、南西から北東にはしる水田の畦畔を検出し、これを第2 b面とした(図34、図版9・10)。

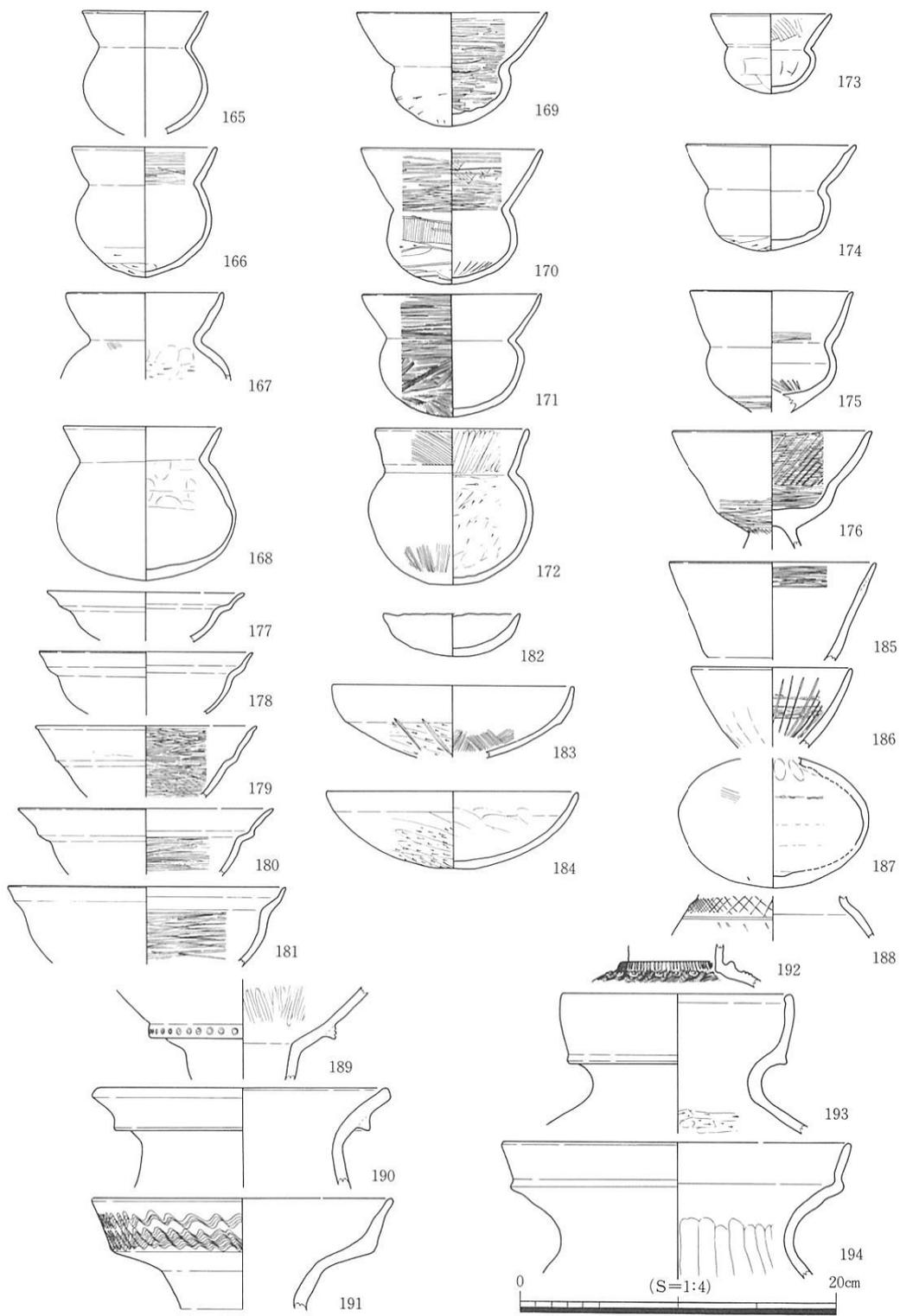


図32 3 | トレンチ第2面 河川1層出土遺物(3)

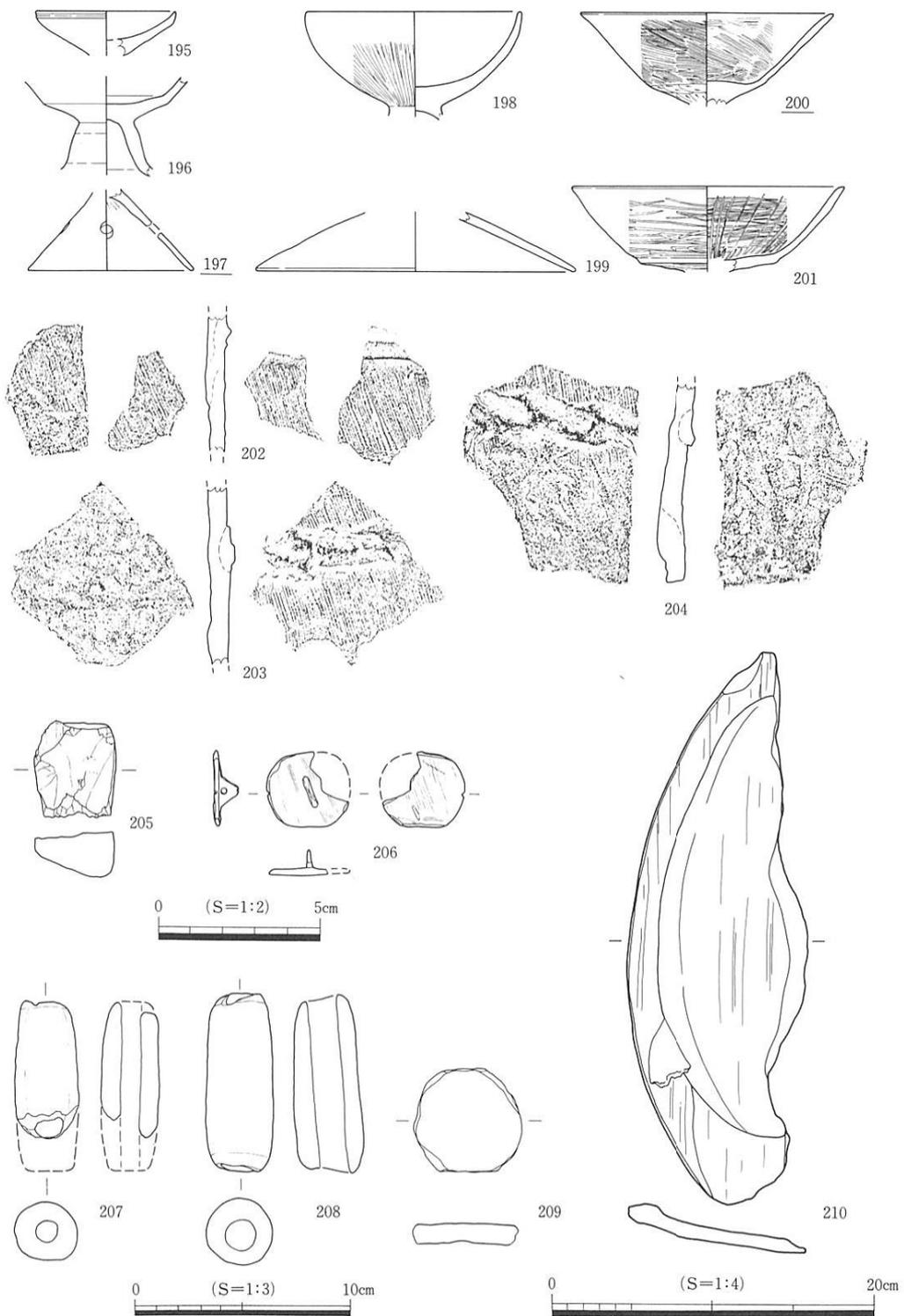


図33 31トレンチ第2面 河川1層出土遺物(4)

畦畔は大小の2種類に分けられ、大畦畔は幅約1m、小畦畔は幅約0.4mを測る。トレンチ北半ではX=-149,109付近に大畦畔があり、これに並行する小畦畔が北に2条、4mから5mの間隔にならび、さらに直交して取り付く小畦畔もみられる。南には約9mの間隔をあけて、やはり大畦畔に並行する小畦畔が1条検出された。

第2b面の粘土層を5cmから10cm掘削したところで、上記と同様の畦畔跡を検出し、第2c面とした。畦畔の位置は第2b面の畦畔とほぼ一致しており、土層の第2b面は、耕作による地表面上昇によって、畦畔をかさ上げしたものと推測される。

第2b面の粘土層を掘削中、畦畔の盛り土に相当する部分より土器が出土している。

図35-211から213は土師器の甕である。211の口縁はわずかに内湾しながら外傾し、端部は内側に肥厚する。調整は、外面に横方向の細かなハケ目を施し、肩部には水平に1条のハケ目を行



図34 3 | トレンチ北側第2a面 足跡検出状況, 第2b面水田跡平面

う。また、肩部に3点一対の刺突紋をめぐらせる。内面は体部に斜め方向のヘラケズリを施す。胎土には砂粒を多く含む。212は口縁をわずかに外反し、端部は内側に肥厚する。調整は、外面に縦方向のハケ目を施し、肩部よりやや下がった部位に水平なハケ目を行う。内面は頸部に横方向のハケ目を行う。体部には斜め方向のヘラケズリを施し、一部ハケ目を行う。213の口縁はやや外反しながら、端部は上方につまみ上げて外側に面取りがみられる。調整は体部外面に縦方向のハケ目を施し、内面は斜め方向のヘラケズリを行う。

水田面から遺物はほとんど出土していないが、もっとも北側の東西にのびる畦畔の北側より網籠が底を正置された状態で出土した。

図35-214は網籠の底部である。直径は約35cmを測る。保存処理の関係により側面の状況は不明であり、底面では亀甲編み（六角形）によって製作されており、高さは推定で約8cmである。材質は竹である。

トレンチ南側においても、北側と同様の複数の遺構面が確認されており、連続する遺構面として捉えることが可能である。遺構としては、畦畔・足跡・溝・方形盛土がみられる（図36）。

第2 a面では水田面を縦横に移動する足跡が検出されており、トレンチ北側と全く同様の状況

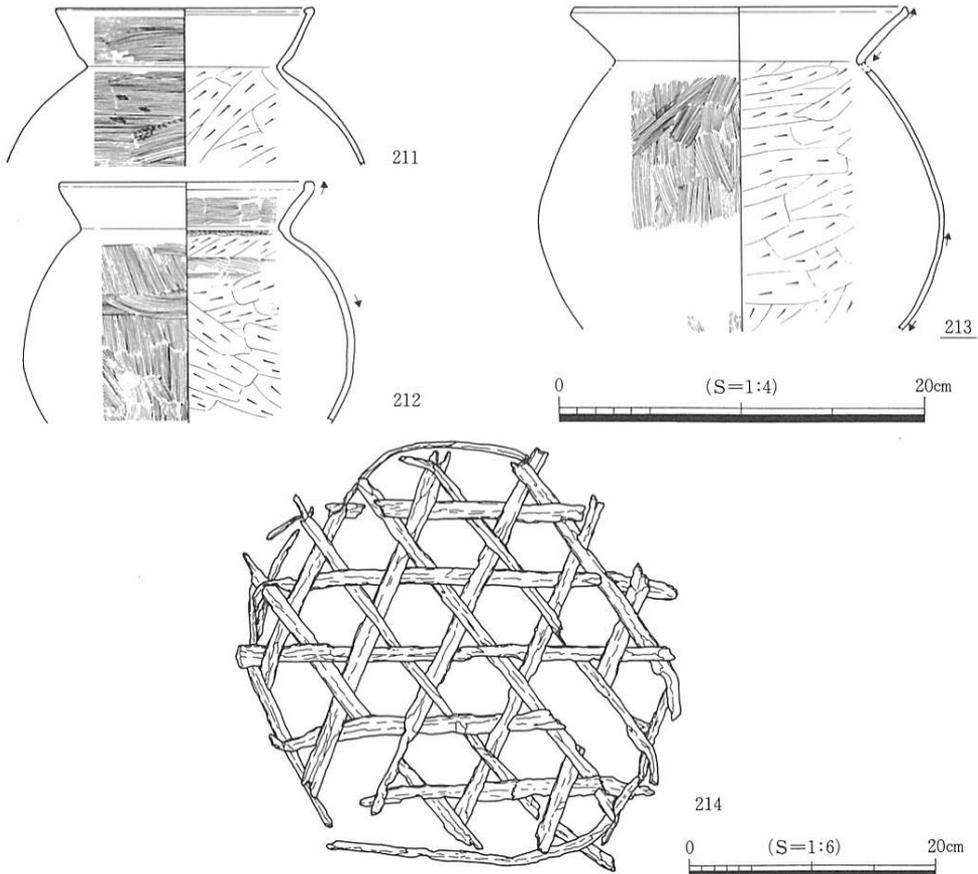


図35 3 | トレンチ第2面 水田跡出土遺物

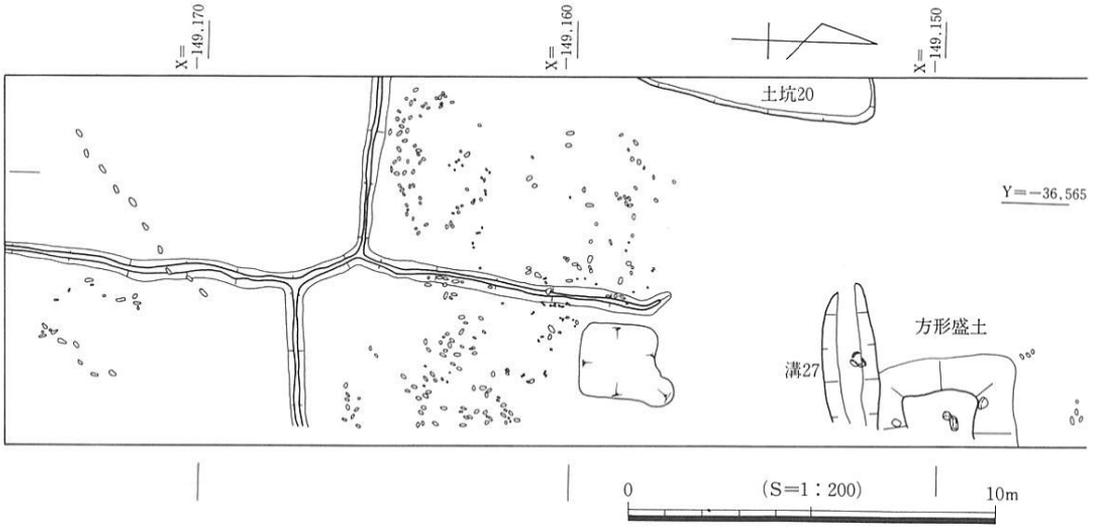


図36 3 | トレンチ第2 b・2 c面 足跡, 水田跡平面

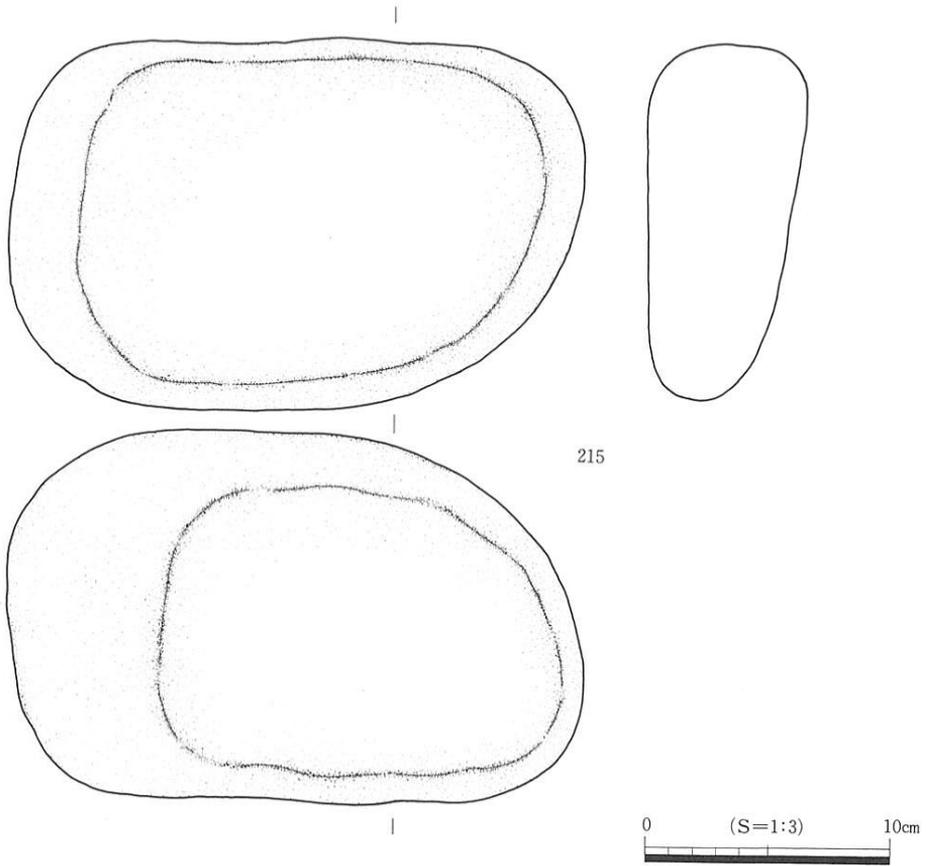


図37 3 | トレンチ第2面 方形盛土上面出土遺物

を確認した。第2 a面と第2 b面の間には薄い砂層が堆積しており、第2 a面より5 cmから10 cmほど下がった第2 b面においても、畦畔とともに幾つかの足跡を検出することができた。図36では第2 a・2 b両遺構面を合成したものである。畦畔の検出された北側部分に足跡は集中しているものの、遺物などはみられなかった。南側は個人を明瞭に分別される足跡列が検出された。明らかに北東方向に進行するものと、南西に進行するものがあり、これらはそれぞれ別の個体によるものである。

第2 b・2 c面において検出した畦畔は、トレンチ北側で検出された区画と方角を異とする、南北方向と東西方向にのびる畦畔である。いずれも前述の小畦畔に類し、規模も大差ない。前回の調査でもX=-149,155付近を境に、北側と南側では水田区画の方向が変化していることが明らかとなっている。既往の調査では不明であった中間部分は、今回の調査において連続した遺構面を検出し、畦畔の形成が行なわれていなかったことが明らかとなった。この空閑地は、標高が周辺よりわずかに上がっており、また南側の一部に方形の盛土が検出された。

方形盛土は、既往の調査において弥生時代後期の周溝墓の墳頂部として検出されていたものである。今回の調査は、その西側を検出したものである。盛土は東西約2.5m、南北約4.0mの範囲において検出され、水田面からの比高差は約0.5mを測る。盛土の上面には、周辺からは出土しない人頭大の自然石を集積した痕跡がみられる。既往の調査においても、同様な状況が確認されており、3号方形周溝墓上面に置かれている自然石から推測すると、水田耕作中に露頭したこれらの石を盛土上に集めたものと思われる。

また、この盛土の南側下端を切る東西方向の溝が検出された。溝27は幅約1.5m、長さ約4.0mを測り、鋼矢板東側にのびている。溝27の底面からは、3号方形周溝墓に埋納された土器棺が露頭している。

このように、北側畦畔と南側畦畔の間には、水田として使用されなかった空間があり、この空間は、既往の調査から、北東方向にのびていたと考えられる。しかし、この空間を形成した要因については、道としての機能をもつものか、あるいは後期の方形周溝墓に規制されたものか、特定することは不可能であった。

遺物はほとんど出土していない。方形盛土の上面に集積された自然石のうち、1点は使用された痕跡が認められ、石皿と思われる。

図37-215は長さ約23cm、幅約15cm、厚さは最大6.2cmを測る。表裏とも使用された痕跡がみられ、わずかに凹んでいる。石材は砂岩である。おそらく、3号方形周溝墓の石を転用したものと考えられる。

(2)A地区 (図38)

A地区ではX=-149,380を境に、北側では水田畦畔を検出しており、南側では流水砂の堆積を確認したのみで、水田耕作を行なったような粘土層は検出されなかった。

11A トレンチから14A トレンチの3層掘削後の状況としては、一部4 a層に相当する粘土層を

検出したものの、畦畔などの遺構は確認されなかった。既往の調査においても同様な様相を確認しており、積極的に水田遺構とする根拠はみられなかった。

8 A トレンチの3層除去後は、T.P.+1.3m付近において、トレンチ全域に粘土層の堆積を検出し、これを第2 a 面（図版11-1）とした。トレンチ北東部に1段高い平坦面が認められ、これにやや変形しながら直角に取り付き、南西にのびる畦畔を1条、約4 mの間隔をおいて北西に

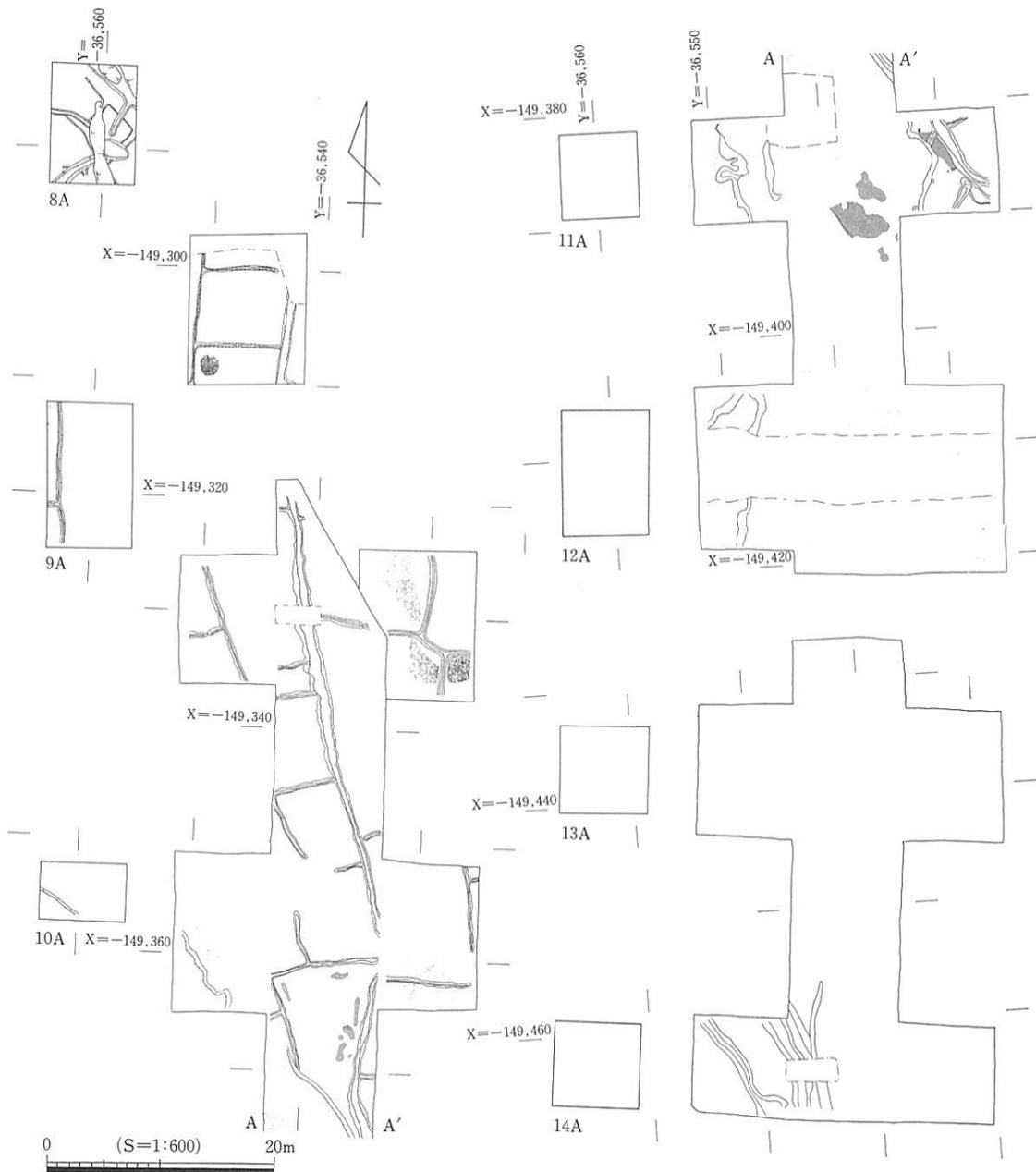
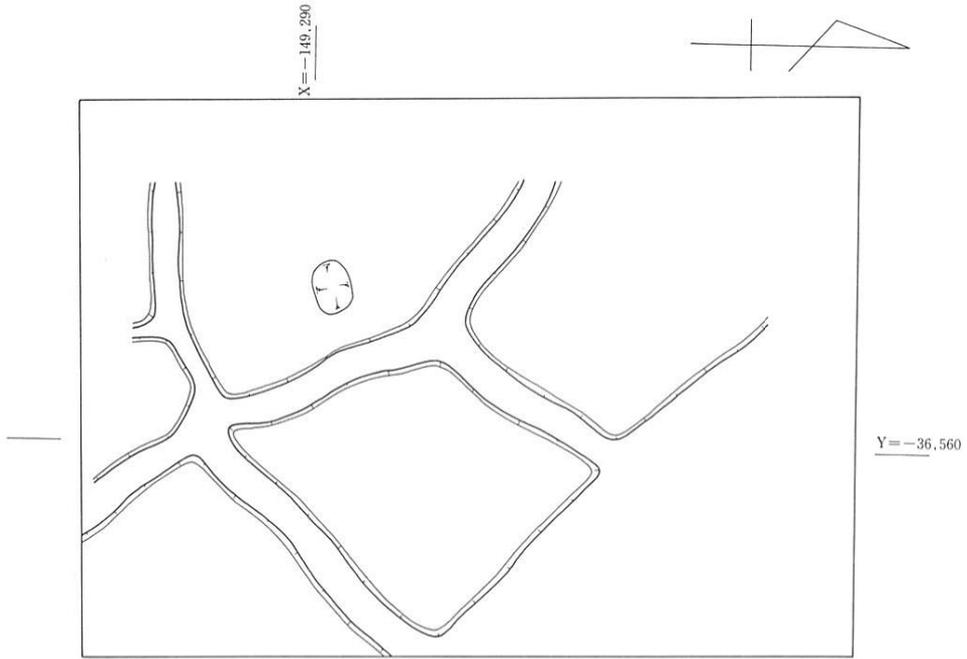
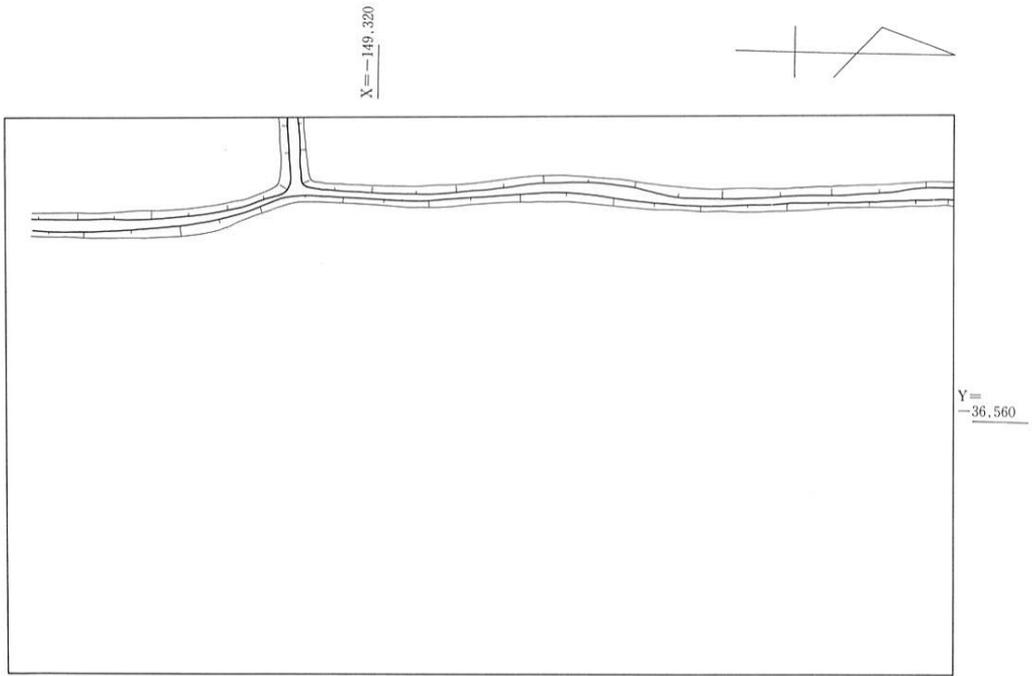


図38 A地区第2面 遺構全体図



8Aトレンチ



9Aトレンチ

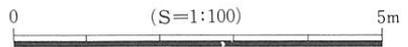


図39 8A・9Aトレンチ第2b面 水田跡平面

並行してのびる畦畔を1条確認した。上面からの溝の攪乱によって正確な状況は不明であるものの、北西から南東方向にのびる水田区画が形成されていたと考えられる。

第2 a面の粘土層を約5 cm掘削すると、上面とほぼ同様の方向に位置を違えて、水田区画が検出された(図39、図版11-2)。畦畔の規模は第2 a面と比べてやや大きく、幅約60cmを測る。水田の区画は、北東側が比較的、直線的な状況を示し、規格がみられるのに対し、南西側は不定形であり、流路などによって制限されたものと思われる。

遺物はいずれの遺構面からも出土しなかった。

9 Aトレンチの3層掘削後の状況としては、T.P.+1.2mから1.4mにおいて、4 a層に相当する粘土層をトレンチ全域に検出した(図39、図版12-1)。畦畔は上部の流水砂に被覆された状態であり、残存状況は極めて良好であった。水田の区画としては、南北方向にのびており、8 Aトレンチとは明らかに状況を異としている。しかし、既往の調査における水田区画とは合致しており、前述の8 Aトレンチのみが変則的であることが明らかとなった。

畦畔は計2条が確認されており、南北方向のものはトレンチの西側、 $Y=-149,557$ にほぼ平行し、長さ約12.5mの範囲にみられる。東西方向の畦畔は $Y=-149,321$ 付近において、南北方向の畦畔に直角に取り付き、西にのびる状況が確認された。いずれの畦畔も幅約30cmを測り、前述の小畦畔に類するものである。

なお、9 Aトレンチでは他の調査区のように複数の遺構面は検出されていない。これは流水による被害や、水田耕作によるかさ上げの必要がなく、最終段階まで補修されなかったものと考えられる。

(3)C地区

C地区の3層除去後の状況は、A地区と同様に粘土層の堆積はみられるものの、検出面は非常に不安定であり、畦畔などの遺構は検出されなかった。

3. 第3面(弥生時代後期)

(1)I地区(図40)

水田面に相当する4層の粘土を除去後、トレンチの全域においてT.P.+0.5mから1.0mに中粒砂を含む細砂層である5 a層の堆積を検出した。この5 a層上面に遺構が形成されており、遺構としては溝・河川・方形周溝墓などがみられる。

$X=-149,083$ から $X=-149,093$ 、 $X=-149,100$ から $X=-149,111$ の範囲に約10cmの高まりが検出された。前述の河川1の河底で検出された小型木棺の状況が、既往の調査における1から8号方形周溝墓の墳丘軸と方向を同一にしていることから、方形周溝墓の墳丘によって当面の基盤層が突出したものと考えられる。

$X=-149,110$ 付近では、上記の南側にある高まりに平行する溝2条を東西方向に検出した(図41)。溝19の幅は約0.7m、溝18の幅は約1.3mであり、長さ約11mを測る。既往の調査にお

けるトレンチ中央の溝2条に接続するものと考えられる。

溝19から北に広がる平坦面より、図42-216に示す平鋏が出土した。これは、身のみが粘土層中に遊離した状態で出土し、樹種はアカガシ亜属で、柄との装着角は 52° を測る。後面には横方向の蟻溝を切っており、泥除装着装置d1類とされる工作がなされている。形態は柄穴と刃の装着部に角度を持つことから直柄鋏であるが、柄穴より上部は曲柄平鋏のそれに見るような着柄軸と見紛うがごとき形態を呈し、一見すると卓球のラケットを想起させるものである。また、刃分側面から刃縁にかけて丸く仕上げられることも通常の例とは異なり、型式細分には該当するものではなく、再加工品とも考えられる。

溝の南側、 $X=-149,110$ から $X=-149,125$ では、南西にのびる河川2が幅約9.0m、長さ約11mの範囲において検出された(図41、図版27-1)。深さはT.P.-0.8mに達し、埋土は砂とシルトが交互に堆積している状況が確認された。

河川2からは、少量の弥生時代中期後半の土器と後期の土器・木器などが出土している(図43・44)。中期後半の土器には217・224の甕、226の高杯がある。後期の土器には、218から223の甕、225の高杯脚部、228の大型壺底部、227の底部があり、223は完形にまで復原された。これ

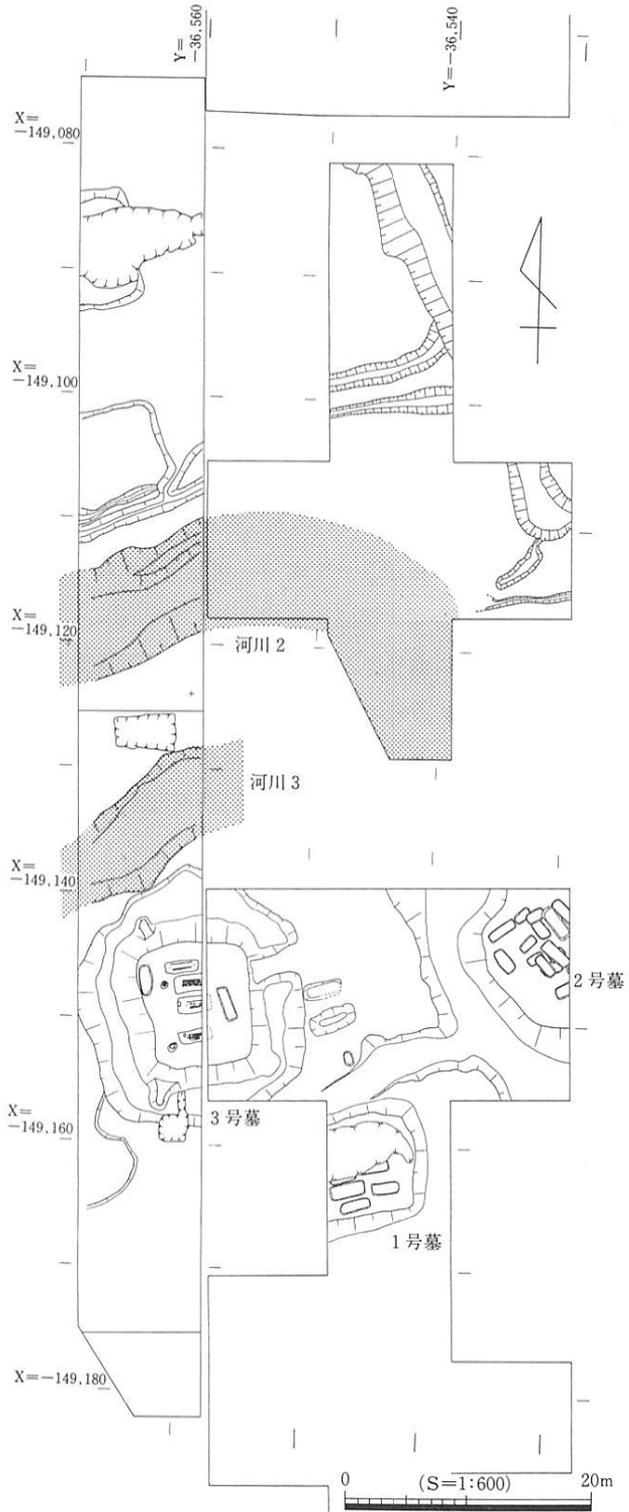


図40 I地区第3面 遺構全体図

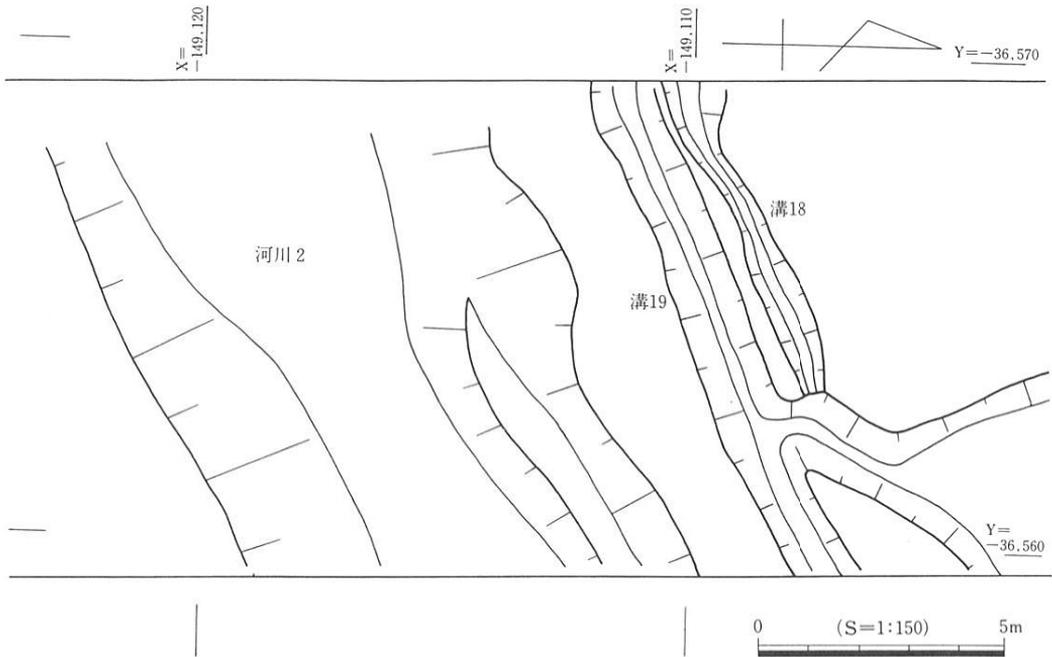


図41 3 | トレンチ第3面 溝18・19, 河川2平面

らの遺物は、その形態や、調整技法から後期前葉に位置づけられる。

木器には232に示した槽と考えられるケヤキ製容器の破片が出土したほか、用途不明の加工木が数点出土した。229は原木を半截し、上部に加工を加えたヒノキ材、230はアカガシ亜属の棒材の端部を裁断したもの、231は一枝を残して小枝を打ち払ったヤブツバキの棒材で、側縁部に階段状の削り込みを4ヶ所に入れている。一つだけ残されたこの枝を爪木と考え、削り込みを横棧との結合に利用したと考えるならば、背負子の柁木とすることも可能であるが、その大きさや、削り込みの方向を検討した場合には疑問点も残るため、加工木としておきたい。

トレンチの南側、 $X=-149,128$ から $X=-149,141$ 付近では浅い落ち込み状の流路を確認し、河川3とした(図45、図版27-2)。河川3は幅約6.5m、長さ約12mの範囲において検出され、河底はT.P.-0.3mに達する。河川内には粘土とシルトが交互に堆積しており、比較的緩慢な流れをしていたことを示している。遺物の出土状況から、河川3は既往の調査における沼状遺構上層に相当するものと考えられる(図版28・29)。

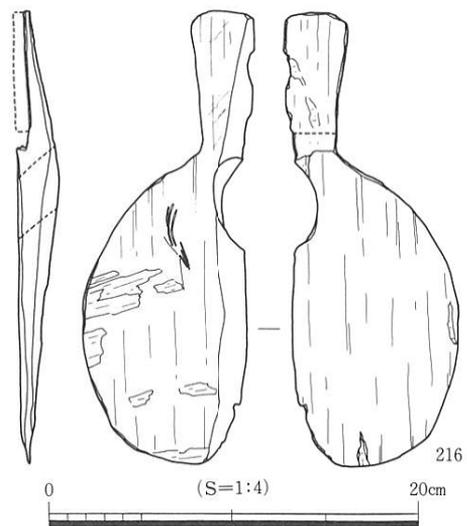


図42 3 | トレンチ第3面 溝18出土遺物

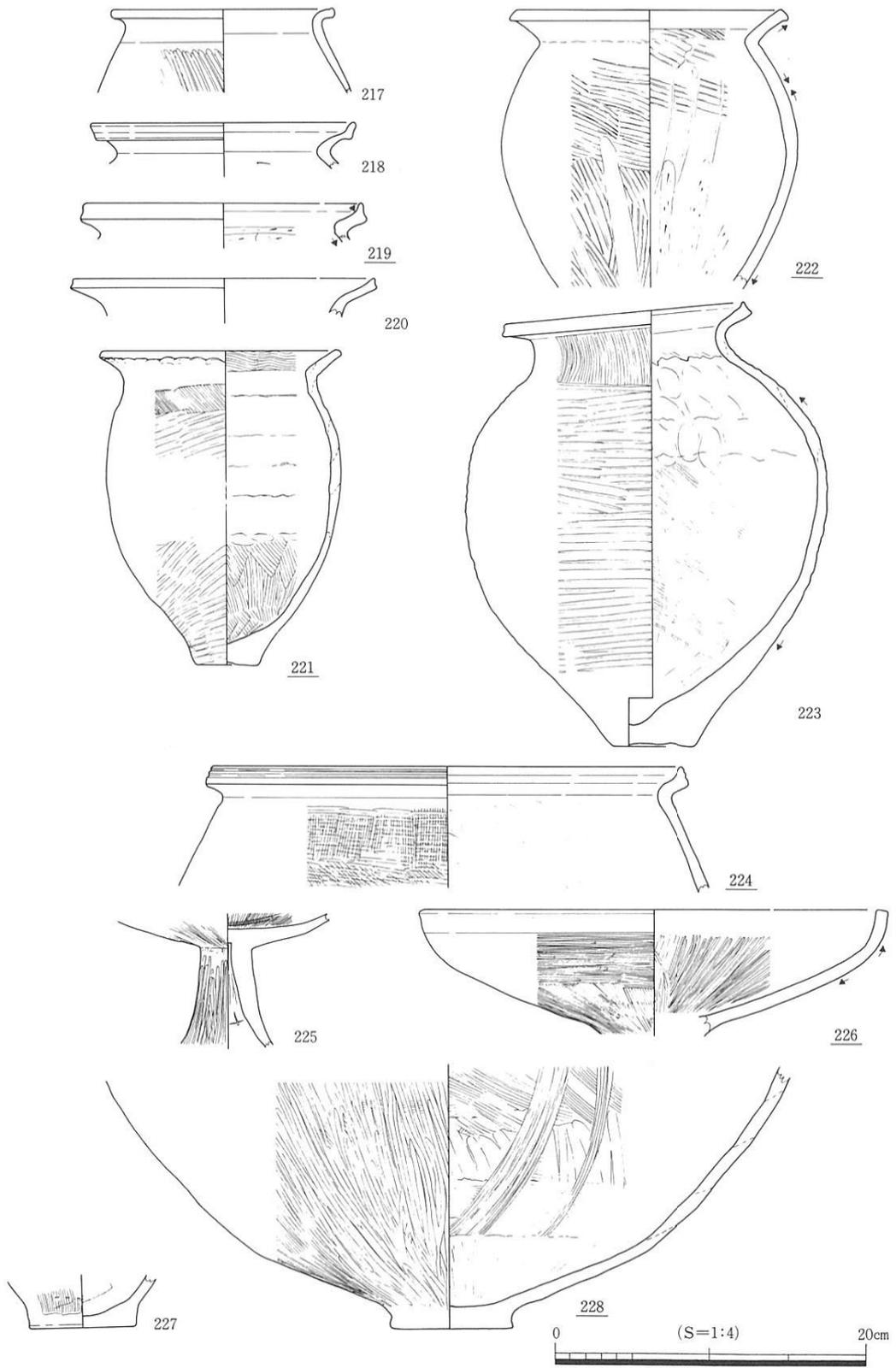


図43 3 I トレンチ第3面 河川2 出土遺物(1)

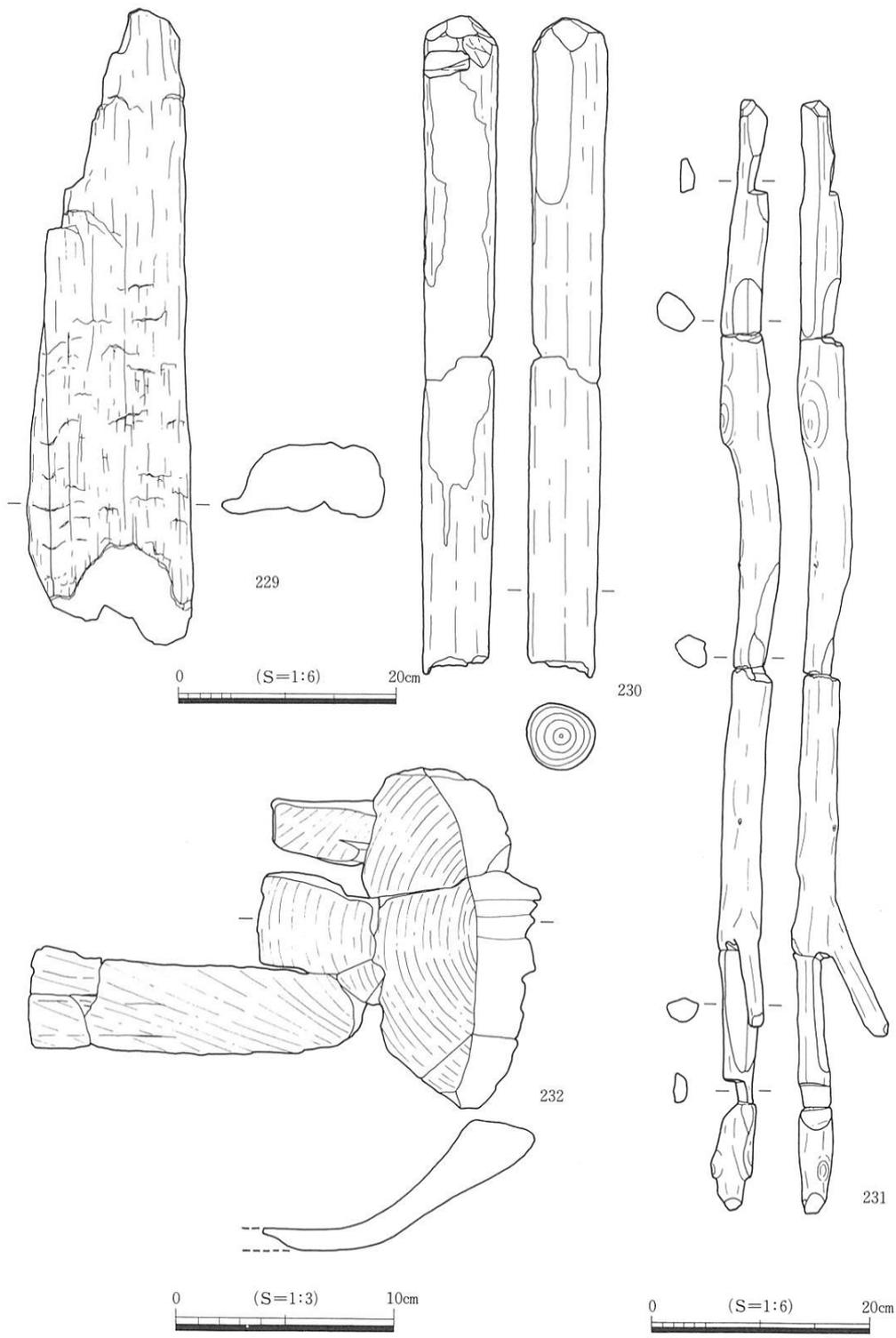


図44 31トレンチ第3面 河川2出土遺物(2)

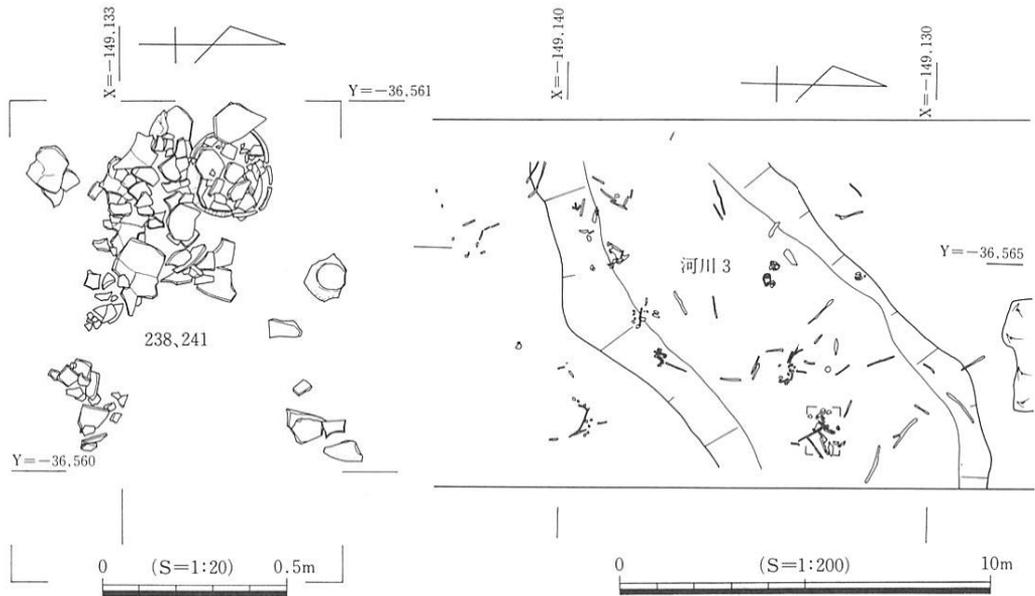


図45 3 I トレンチ第3面 河川3 遺物出土状況

河川3からは弥生時代中期後半から弥生時代後期の土器・木器・石器が出土した(図46~50)。233から235は中期後半から末葉の土器で、中でも233は櫛描紋を失い、円形浮紋列のみが遺存したもので、中期末葉における特徴的な遺物であるといえる。

236から244は後期の土器である。236は小型の無頸壺で、形態や調整技法に中期的様相を色濃く残すものであるが、非常に小型化していることから後期に属するものと考えたい。237は甕蓋である。238から241および243は壺である。ほぼ全形をうかがうことのできる破片からは、長頸壺や広口壺があることがわかる。このうち239は球形の体部に丈長な頸部を接合する長頸壺で、体部のみを取り上げれば形態的に後期のものとは相違しているが、頸部から口縁部の形態、調整技法に着目すれば後期の様相を備えている。240は広口壺の体部から頸部にかけての破片で、内面には底部と体部との接合痕が明瞭に観察される。外面には下方から上方への縦位のヘラミガキが連続して施されていることから、時期的には後期のものであるといえる。241も広口壺の破片で、内面体部上半には粘土紐の継ぎ目が観察できることや、外面の縦位のヘラミガキ、および口縁屈曲部の下方を肥厚させていることから後期の土器とすることができる。243は体部と頸部の境に貼り付け凸帯を1条めぐらせており、これも後期に通有の技法である。

242・244は高杯である。242は脚部と裾部の接点はないが、胎土などから同一個体の破片であると考えられる。口縁部外面と裾部外面には凹線紋が3条づつ巡らされ、器面は丁寧なヘラミガキにより非常に平滑に仕上げられている。杯部と脚部の接合は筒状の脚部に杯部を接合し、空隙には渦巻き状の粘土紐を充填して成形している。244は全形のうかがえるもので、脚部と円盤充填部および杯部の屈曲部上半部には生駒西麓産の胎土を、それ以外には同じ生駒西麓産でも若干異なった胎土を使用しており、その製作手法を非常に明瞭に観察できるものである。

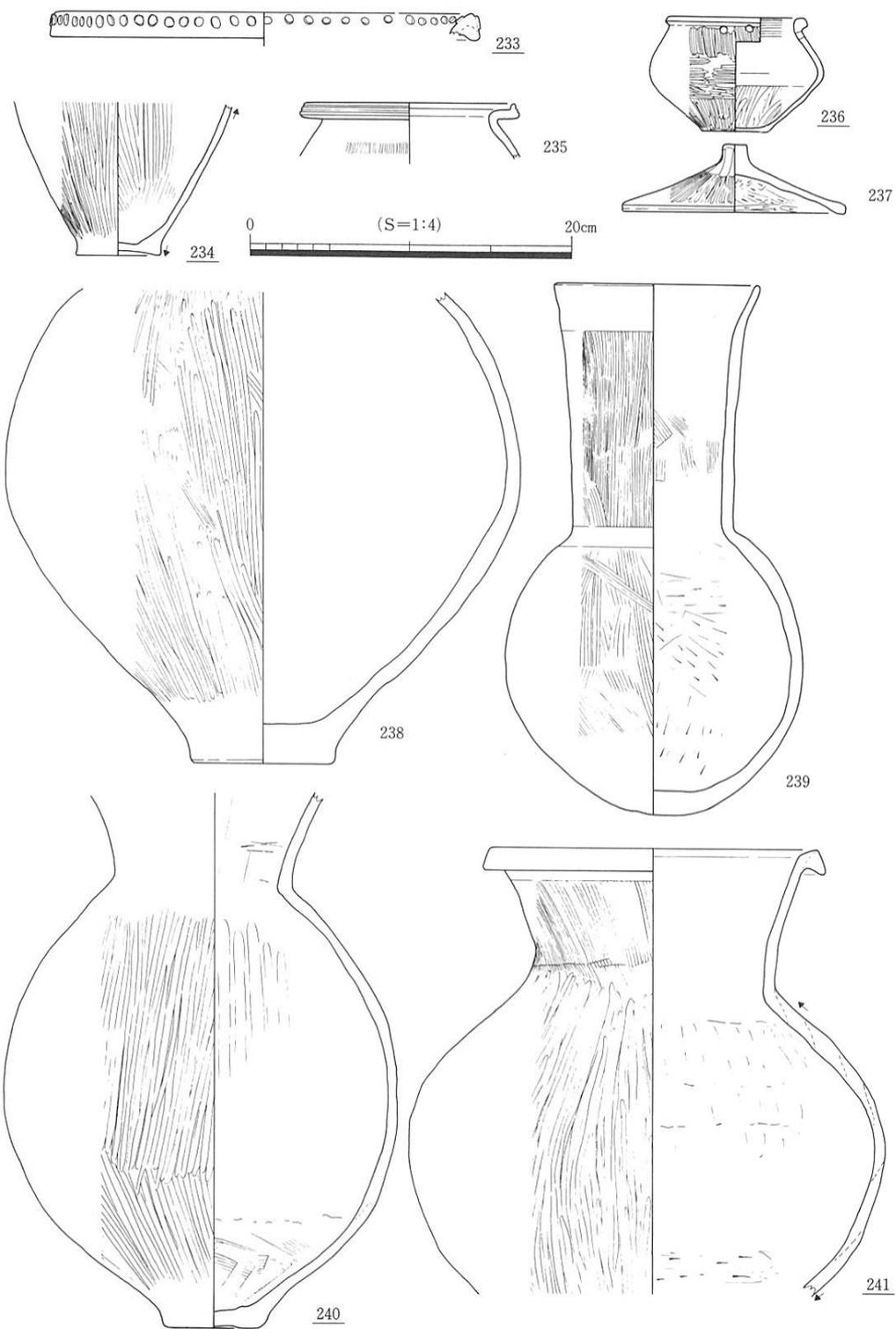


図46 31トレンチ第3面 河川3出土遺物(1)

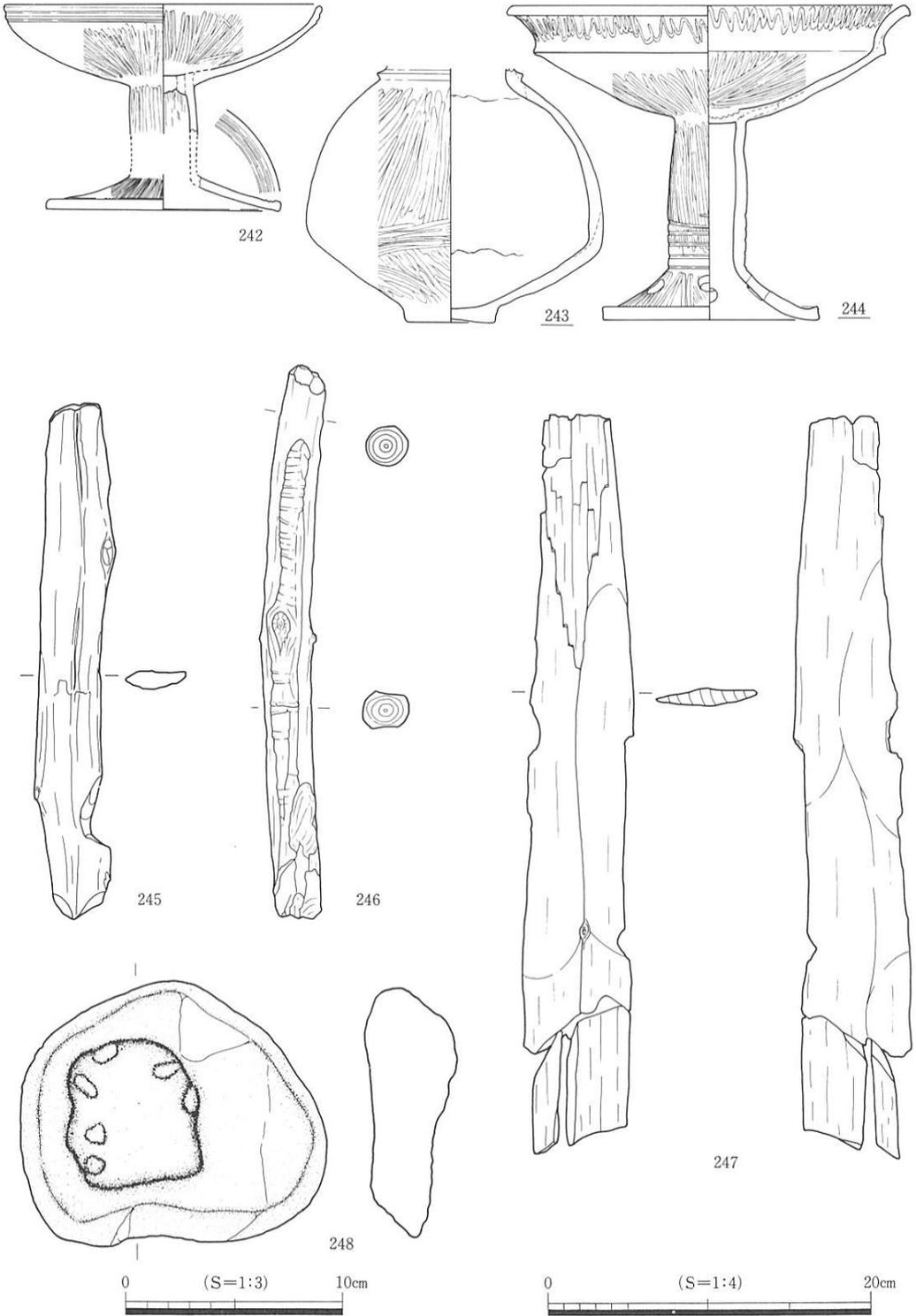


図47 3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(2)

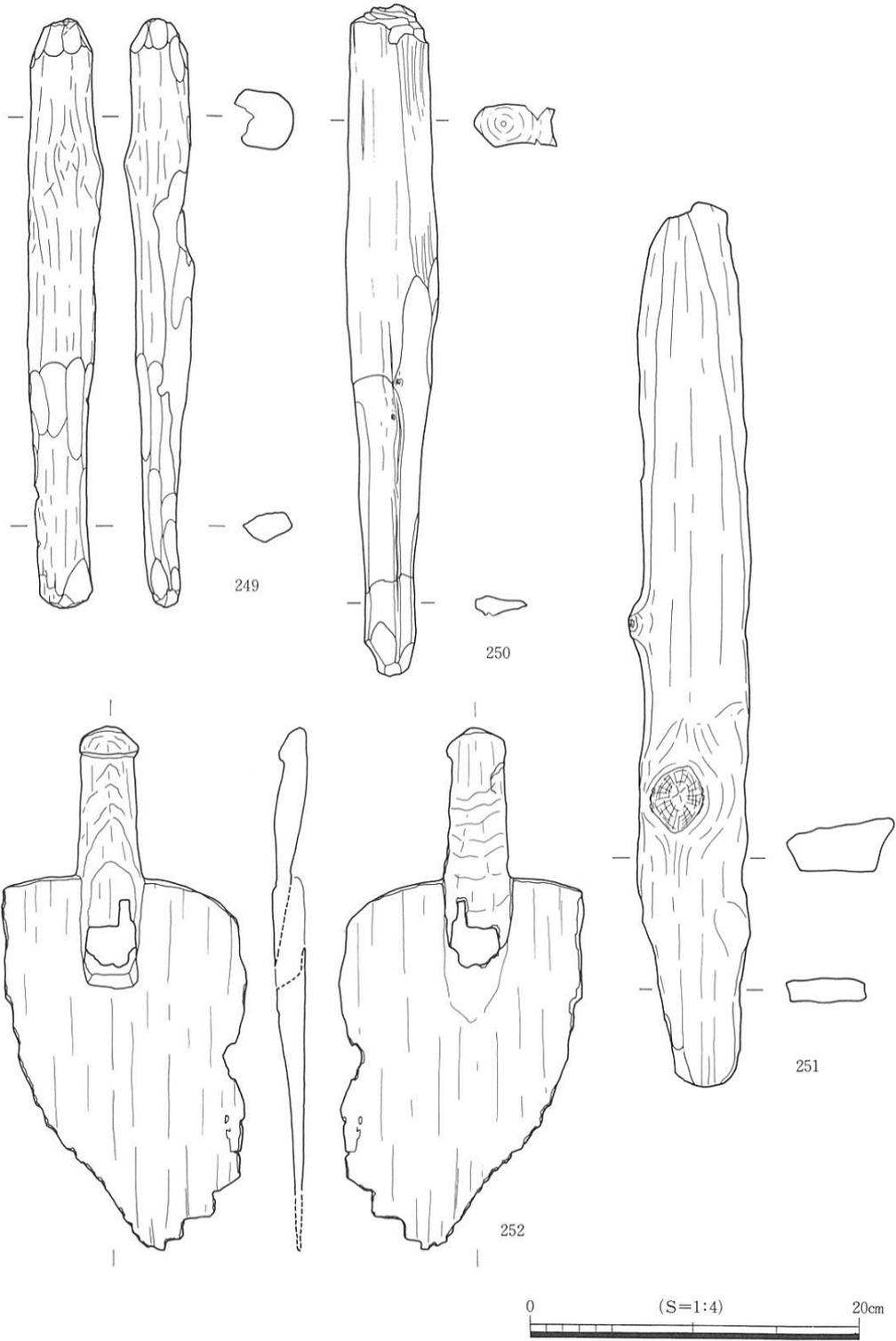


図48 3 I トレンチ第3面 河川3出土遺物(3)

木器には、鋤や用途不明の加工木が出土している。252は組み合わせ平鋤の身部で、刃部は欠損するが、着柄軸から肩部にかけては良く旧状を止め、特に着柄軸の軸頭、紐かけ部は保存状態が良好である。柄穴が角度を持って穿たれていることから、屈折鋤に分類され、各部位の形態分類は肩部が丸肩2種、刃部断面形態がII式に属する。材質はアカガシ亜属を使用している。

加工木には245から247、249から251、253から260があり、247はヤナギ属の原材を断面偏平な菱形を呈する板材に加工したもので、櫓として使用されていたとも考えられる。249と250は両端と下半部に加工痕を残し、横樋の未成品かとも考えられる。材質は双方ともアカガシ亜属を使用

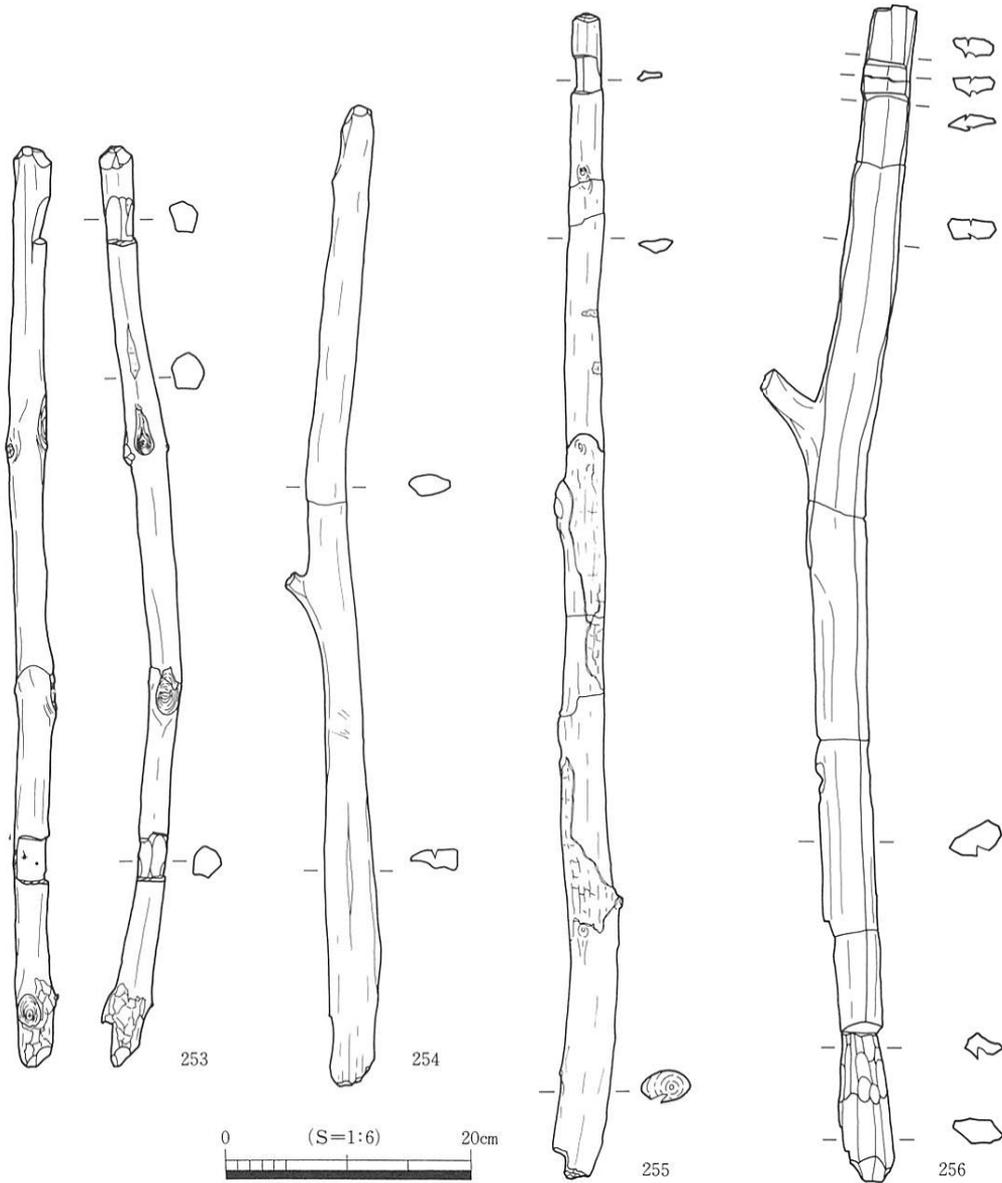


図49 3 | トレンチ第3面 河川3出土遺物(4)

する。これら以外のものは一部に加工痕を残すのみで、用途不明といわざるを得ない。245、246は棒状を呈する原木の両端と側縁の一部に加工痕を止め、前者がアカガシ亜属、後者がマツ属を使用している。253から257は小枝を打ち払い、両端部を加工したもので、その両側あるいは一方のみに部分的な加工を施したものである。材質は253がマツ属、254・255がヤナギ属、256・257がコナラ亜属である。251は棒材を縦割りにして板状に加工したもので、材質はコナラ亜属である。258は端部に加工を加えた棒材を半裁したもので、材質はヤブツバキを使用している。250・260は棒材の端部を杭状に加工したもので、双方ともマツ材を使用する。

石器には248に示すものが出土しており、表面は使用によって磨滅した部分と、敲打によって

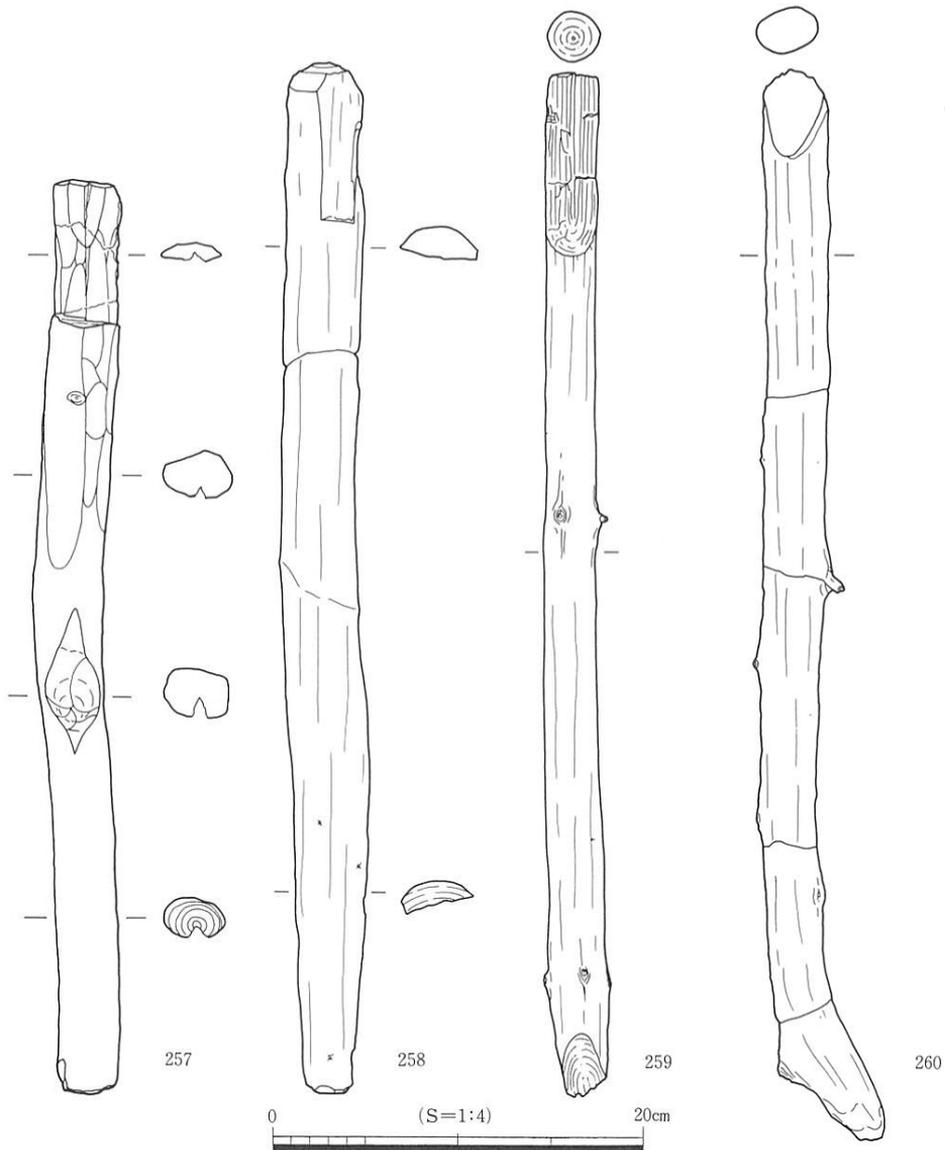


図50 31トレンチ第3面 河川3出土遺物(5)

形成されたとみられる数カ所の凹みが観察されることから、作業台として使用されていたものと考えられる。材質は、緑灰色を呈する砂岩である。

X=-149,135からX=-149,160の範囲において、弥生時代後期にあたる方形周溝墓が1基検出された(図51・52、図版13)。これは既往の調査における3号方形周溝墓(図版25-2)の西側部分にあたり、今回の調査によって、その全景が明らかとなった。墳丘規模は墳丘下端において南北約14m、東西約12mを測り、墳丘頂部はT.P.+1.4mである。墳丘軸はN-6.5°-Wの角

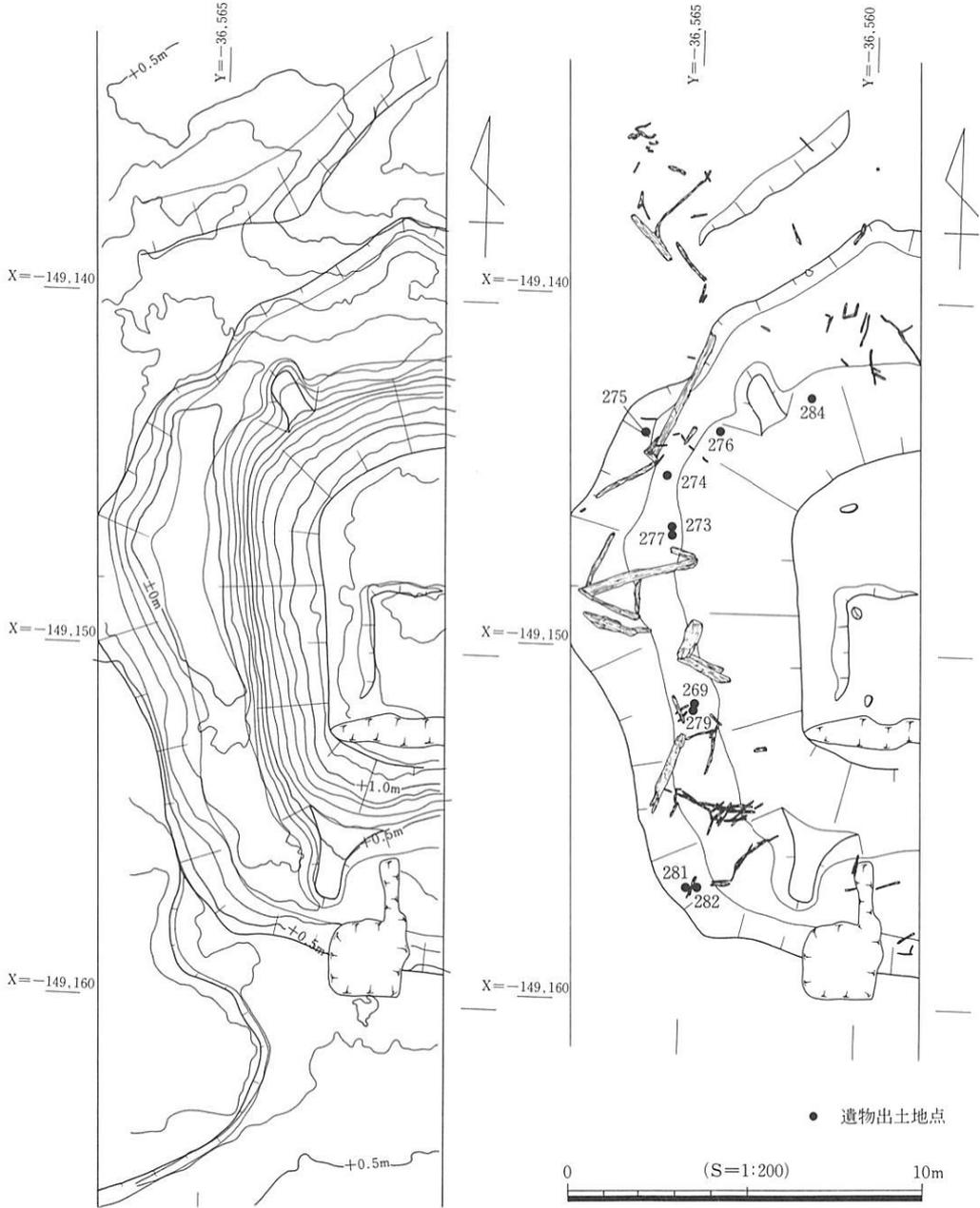
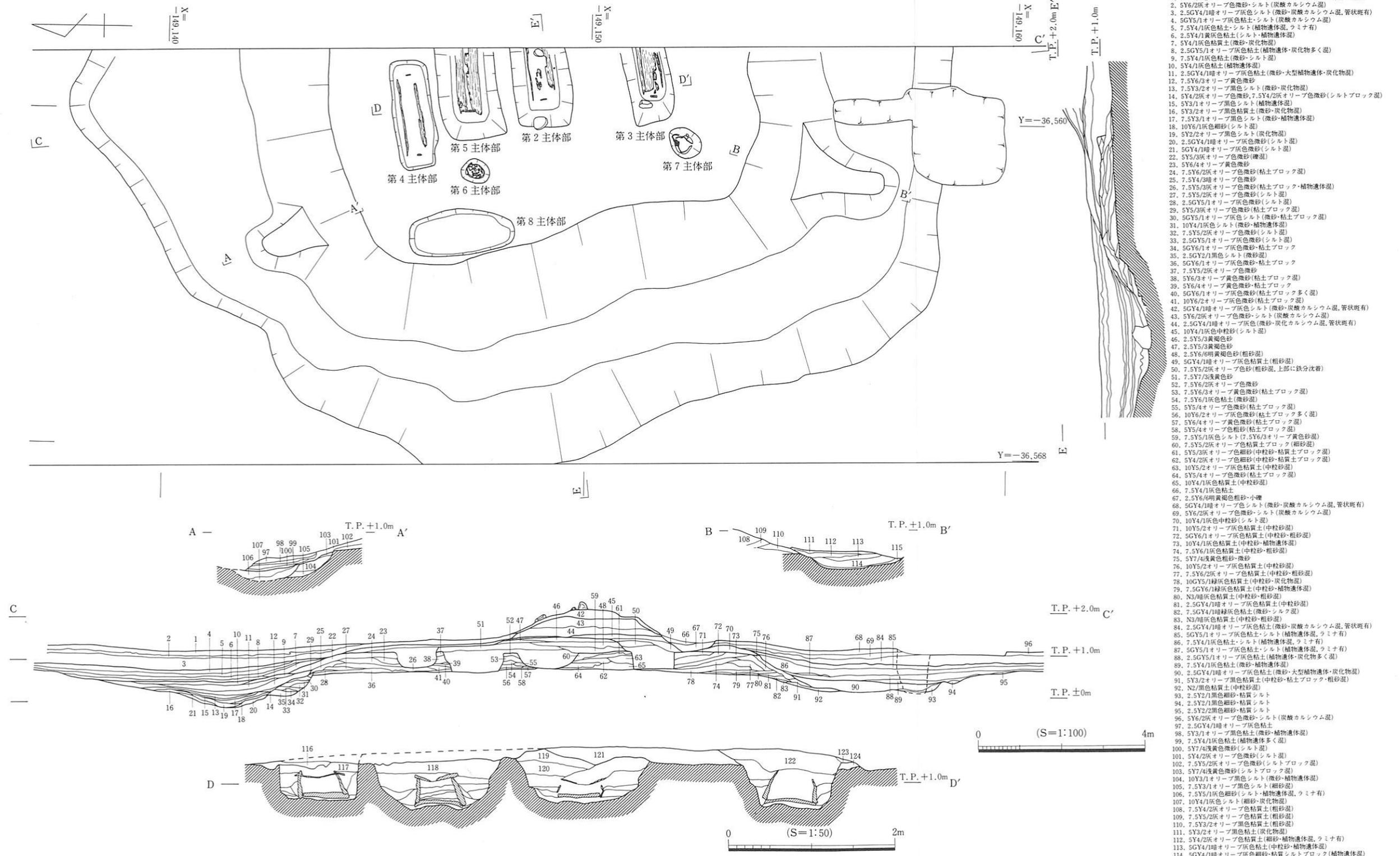


図51 3 | トレンチ第3面 3号方形周溝墓墳丘測量図, 遺物出土地点



1. 5GY4/暗オリーブ灰色シルト(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
2. 5Y6/2灰オリーブ色微砂・シルト(炭酸カルシウム混)
3. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
4. 5GY5/1オリーブ灰色粘土・シルト(炭酸カルシウム混)
5. 7.5Y4/1灰黄色粘土・シルト(植物遺体混,ラミナ有)
6. 2.5Y4/1灰黄色粘土(シルト・植物遺体混)
7. 5Y4/1灰黄色粘土(微砂・炭化物混)
8. 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土(植物遺体・炭化物多く混)
9. 7.5Y4/1灰黄色粘土(微砂・シルト混)
10. 5Y4/1灰黄色粘土(植物遺体混)
11. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(微砂・大型植物遺体・炭化物混)
12. 7.5Y6/3オリーブ黄色微砂
13. 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト(微砂・炭化物混)
14. 5Y4/2灰オリーブ色微砂,7.5Y4/2灰オリーブ色微砂(シルトブロック混)
15. 5Y3/1オリーブ黒色シルト(植物遺体混)
16. 5Y3/2オリーブ黒色粘土(微砂・炭化物混)
17. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト(微砂・植物遺体混)
18. 10Y6/1灰黄色細砂(シルト混)
19. 5Y2/2オリーブ黒色シルト(炭化物混)
20. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色微砂(シルト混)
21. 5GY4/1暗オリーブ灰色微砂(シルト混)
22. 5Y5/3灰オリーブ黄色微砂(硬混)
23. 5Y6/4オリーブ黄色微砂
24. 7.5Y6/2灰オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
25. 7.5Y4/3暗オリーブ黄色微砂
26. 7.5Y5/3灰オリーブ黄色微砂(粘土ブロック・植物遺体混)
27. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂(シルト混)
28. 2.5GY5/1オリーブ灰色微砂(シルト混)
29. 5Y5/3灰オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
30. 5GY5/1オリーブ灰色シルト(微砂・粘土ブロック混)
31. 10Y4/1灰黄色シルト(微砂・植物遺体混)
32. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂(シルト混)
33. 2.5GY5/1オリーブ灰色微砂(シルト混)
34. 5GY6/1オリーブ灰色微砂・粘土ブロック
35. 2.5GY2/1黒色シルト(微砂混)
36. 5GY6/1オリーブ灰色微砂・粘土ブロック
37. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂
38. 5Y6/3オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
39. 5Y6/4オリーブ黄色微砂・粘土ブロック
40. 5GY6/1オリーブ灰色微砂(粘土ブロック多く混)
41. 10Y6/2オリーブ灰色微砂(粘土ブロック混)
42. 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
43. 5Y6/2灰オリーブ黄色微砂・シルト(炭酸カルシウム混)
44. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
45. 10Y4/1灰黄色中粒砂(シルト混)
46. 2.5Y5/3黄褐色微砂
47. 2.5Y5/3黄褐色微砂
48. 2.5Y6/6黄褐色微砂(粗砂混)
49. 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(粗砂混)
50. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂(粗砂混,上部に鉄分沈着)
51. 7.5Y7/3黄褐色微砂
52. 7.5Y6/2灰オリーブ黄色微砂
53. 7.5Y6/3オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
54. 7.5Y6/1灰黄色粘土(微砂混)
55. 5Y5/4オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
56. 10Y6/2オリーブ灰色微砂(粘土ブロック多く混)
57. 5Y6/4オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
58. 5Y5/1オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
59. 7.5Y5/1灰黄色シルト(7.5Y6/3オリーブ黄色微砂混)
60. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂(粗砂混)
61. 5Y5/3灰オリーブ黄色微砂(中粒砂・粘土ブロック混)
62. 5Y4/2灰オリーブ黄色微砂(中粒砂・粘土ブロック混)
63. 10Y5/2オリーブ黄色微砂(中粒砂混)
64. 5Y5/4オリーブ黄色微砂(粘土ブロック混)
65. 10Y4/1灰黄色粘土(中粒砂混)
66. 7.5Y4/1灰黄色粘土
67. 2.5Y6/6黄褐色微砂・小礫
68. 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
69. 5Y6/2灰オリーブ黄色微砂・シルト(炭酸カルシウム混)
70. 10Y4/1灰黄色中粒砂(シルト混)
71. 10Y5/2オリーブ灰色粘土(中粒砂混)
72. 5GY6/1オリーブ灰色粘土(中粒砂・粗砂混)
73. 10Y4/1灰黄色粘土(中粒砂・粗砂混)
74. 7.5Y6/1灰黄色粘土(中粒砂・粗砂混)
75. 5Y7/4浅黄色粗砂・微砂
76. 10Y5/2オリーブ灰色粘土(中粒砂混)
77. 7.5Y6/2灰オリーブ黄色粘土(中粒砂・粗砂混)
78. 10GY5/1緑灰色粘土(中粒砂・炭化物混)
79. 7.5GY6/1緑灰色粘土(中粒砂・植物遺体混)
80. N3/暗灰色粘土(中粒砂・粗砂混)
81. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(中粒砂混)
82. 7.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(微砂・シルト混)
83. N3/暗灰色粘土(中粒砂・粗砂混)
84. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(微砂・炭酸カルシウム混,管状斑有)
85. 5GY5/1オリーブ灰色粘土・シルト(植物遺体混,ラミナ有)
86. 7.5Y4/1灰黄色粘土・シルト(植物遺体混,ラミナ有)
87. 5GY5/1オリーブ灰色粘土・シルト(植物遺体混,ラミナ有)
88. 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土(植物遺体・炭化物多く混)
89. 7.5Y4/1灰黄色粘土(微砂・植物遺体混)
90. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(微砂・大型植物遺体・炭化物混)
91. 5Y3/2オリーブ黒色粘土(中粒砂・粘土ブロック・粗砂混)
92. N2/黒色粘土(中粒砂混)
93. 2.5Y2/1黒色細砂・粘土シルト
94. 2.5Y2/1黒色細砂・粘土シルト
95. 2.5Y2/2黒色細砂・粘土シルト
96. 5Y6/2灰オリーブ黄色微砂・シルト(炭酸カルシウム混)
97. 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
98. 5Y3/1オリーブ黒色粘土(微砂・植物遺体混)
99. 7.5Y4/1灰黄色粘土(植物遺体多く混)
100. 5Y7/4浅黄色微砂(シルト混)
101. 5Y4/2灰オリーブ黄色微砂(シルト混)
102. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色微砂(シルトブロック混)
103. 5Y7/4浅黄色微砂(シルトブロック混)
104. 10Y3/1オリーブ黒色シルト(微砂・植物遺体混)
105. 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト(粗砂混)
106. 7.5Y5/1灰黄色微砂(シルト・植物遺体混,ラミナ有)
107. 10Y4/1灰黄色シルト(微砂・炭化物混)
108. 7.5Y4/2灰オリーブ黄色粘土(粗砂混)
109. 7.5Y5/2灰オリーブ黄色粘土(粗砂混)
110. 7.5Y3/2オリーブ黒色粘土(粗砂混)
111. 5Y3/2オリーブ黒色粘土(炭化物混)
112. 5Y4/2灰オリーブ黄色粘土(微砂・植物遺体混,ラミナ有)
113. 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土(中粒砂・植物遺体混)
114. 5GY4/1暗オリーブ灰色微砂・粘土ブロック(植物遺体混)
115. 5Y2/1黒色粘土(シルト混)

図52 31トレンチ第3面 3号方形周溝墓主体部検出状況, 墳丘断面

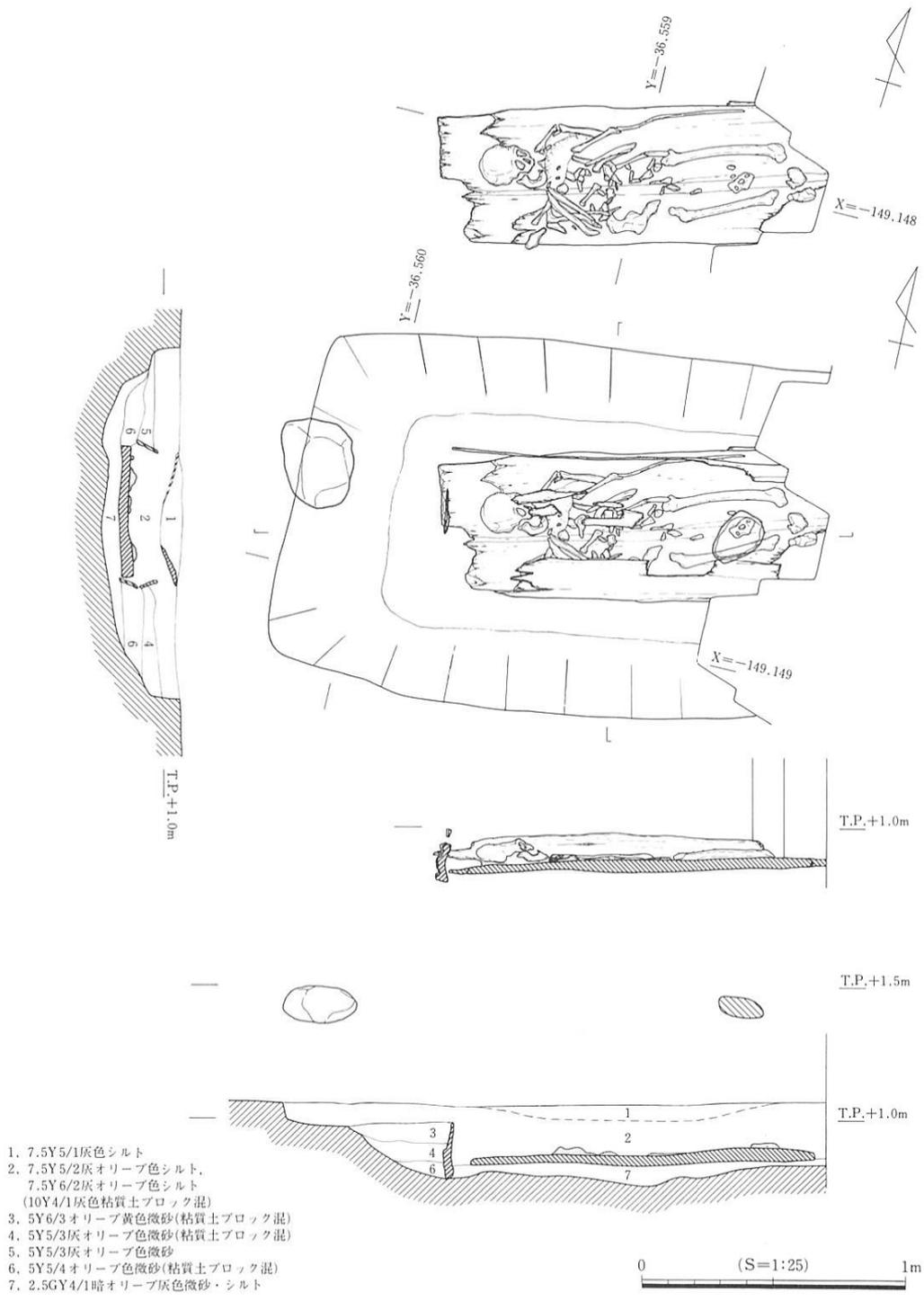
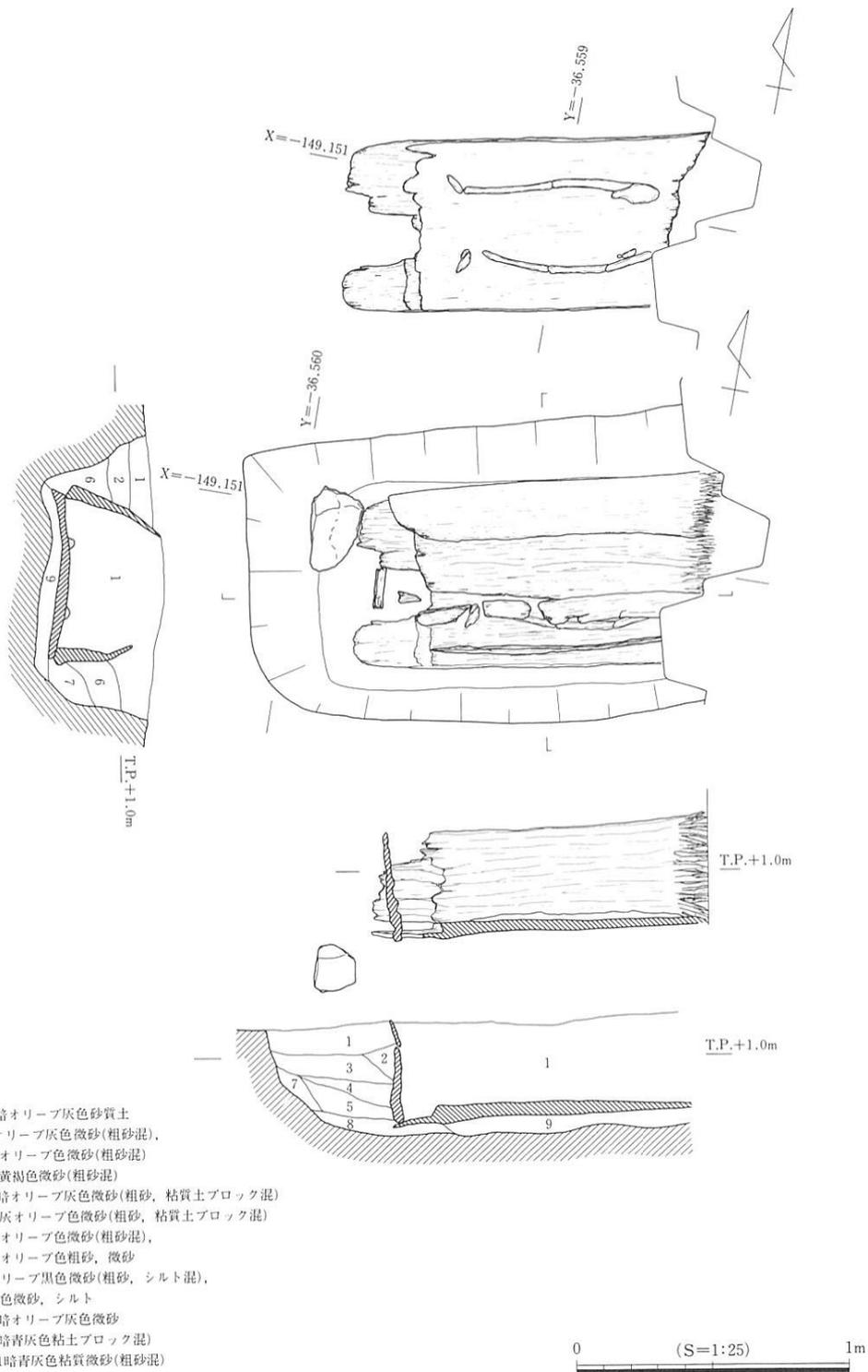


図53 3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第2主体部平面、断面



1. 5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土
2. 10Y5/2オリーブ灰色微砂(粗砂混),
5Y5/2灰オリーブ色微砂(粗砂混)
3. 2.5Y5/4黄褐色微砂(粗砂混)
4. 5GY4/1暗オリーブ灰色微砂(粗砂, 粘質土ブロック混)
5. 7.5Y5/2灰オリーブ色微砂(粗砂, 粘質土ブロック混)
6. 5Y5/2灰オリーブ色微砂(粗砂混),
5Y5/3灰オリーブ色粗砂, 微砂
7. 5Y3/2オリーブ黒色微砂(粗砂, シルト混),
5Y4/1灰色微砂, シルト
8. 5GY4/1暗オリーブ灰色微砂
(5BG4/1暗青灰色粘土ブロック混)
9. 10BG3/1暗青灰色粘質微砂(粗砂混)

図54 3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第3主体部平面, 断面

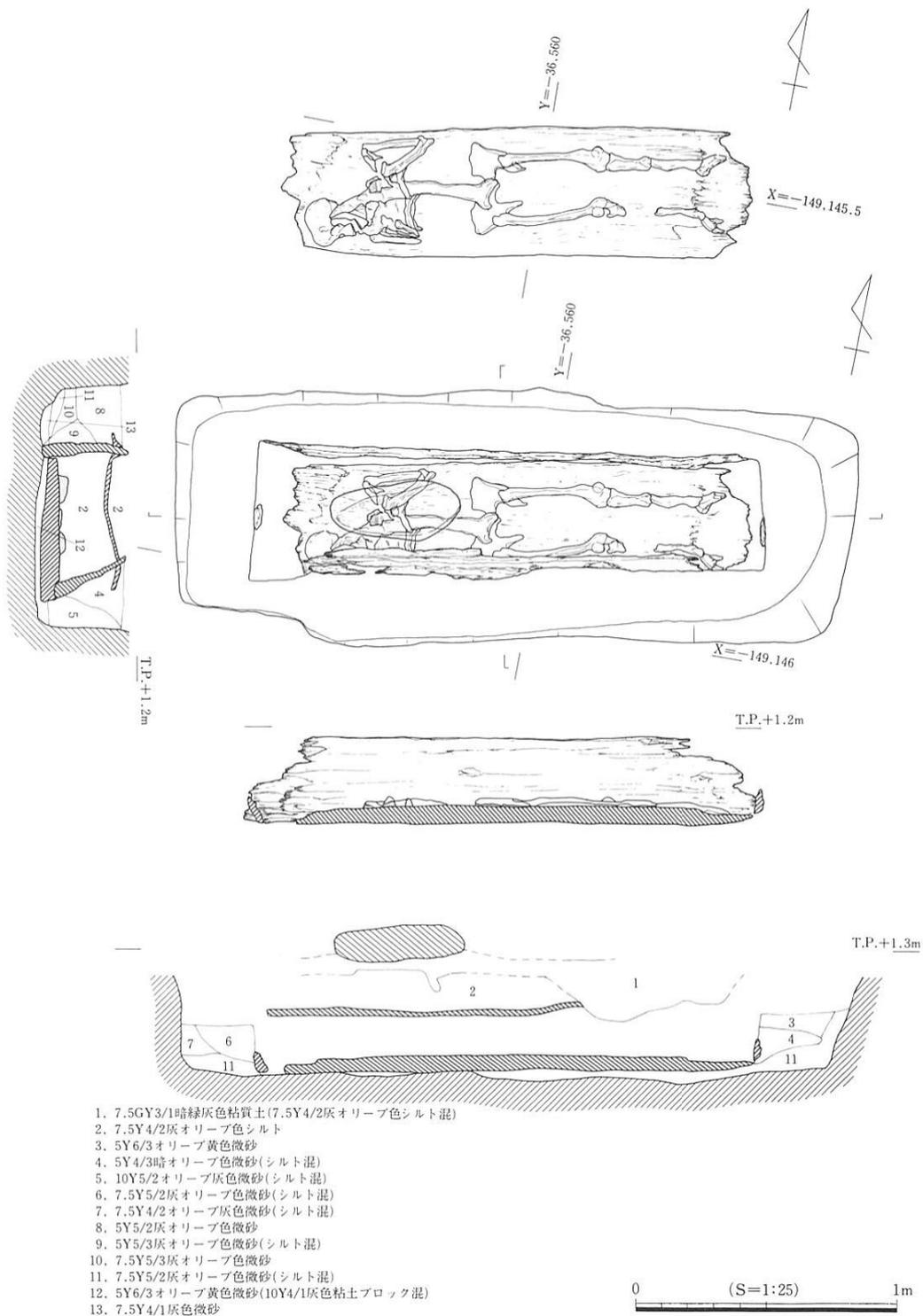


図55 3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓第4主体部平面、断面

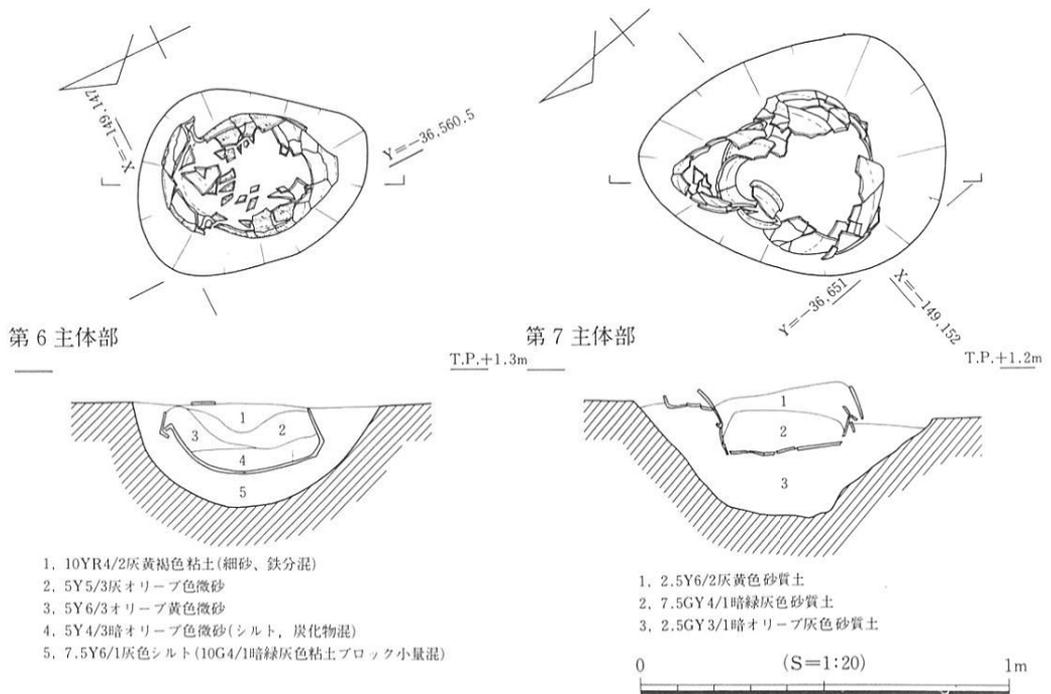


図57 3 | トレンチ第3面 3号方形周溝墓第6・7主体部平面、断面

度を有している。墳丘盛土の比高は、周溝底面から約1.0m、周囲の基盤層より約0.8mを測る。

墳丘部南西隅、北西隅において突出部状の陸橋がみられた。既往の調査においても、墳丘の東側に周溝外から墳丘にとりつく陸橋が確認されているが、今回確認された陸橋は形態・規模とも異なるものである。しかし、これらの陸橋を形成する土層は、周溝埋土と異なる均質な砂質土であるため、墳丘築造後から墳丘埋没の間につくられたものと考えられる。北側の陸橋は墳丘裾部の断層が起こった後に形成されたことが明らかであり、また、陸橋部上面が平坦化されていることから、盛土形成後、ある期間が経過してから東側の陸橋部とは別の目的によって、付加施設として築造されたものと推測される。

盛土は、一見段差をもつ2段築成のようにみられる。上段の盛土は第2面において検出されていたものであり、形状・規模については前述の通りである。この盛土より庄内式期の遺物が出土しており、周溝墓築造の時期と異なる遺構であることが判明した(図版14-1)。

本来の盛土の土層は砂質土を主体とし、断面の観察から、その形成時期は上下2段階に分けられることが明らかとなった。周囲の平均地表面は約T.P.+0.5mであり、これが盛土部分の基盤となっている。また、墳丘上面では4個の自然石を整然と配置している状況を検出した。

周溝部は周囲の基盤層より掘り込まれており、幅3.0mから4.0m、深さ約0.5mの隅丸方形を呈しながら墳丘部をめぐる。埋土は植物質を多く含む粘土とシルトが交互に堆積しており、最も厚いところでは約1.0mほど堆積している。遺物のほとんどは周溝底面から出土したものである

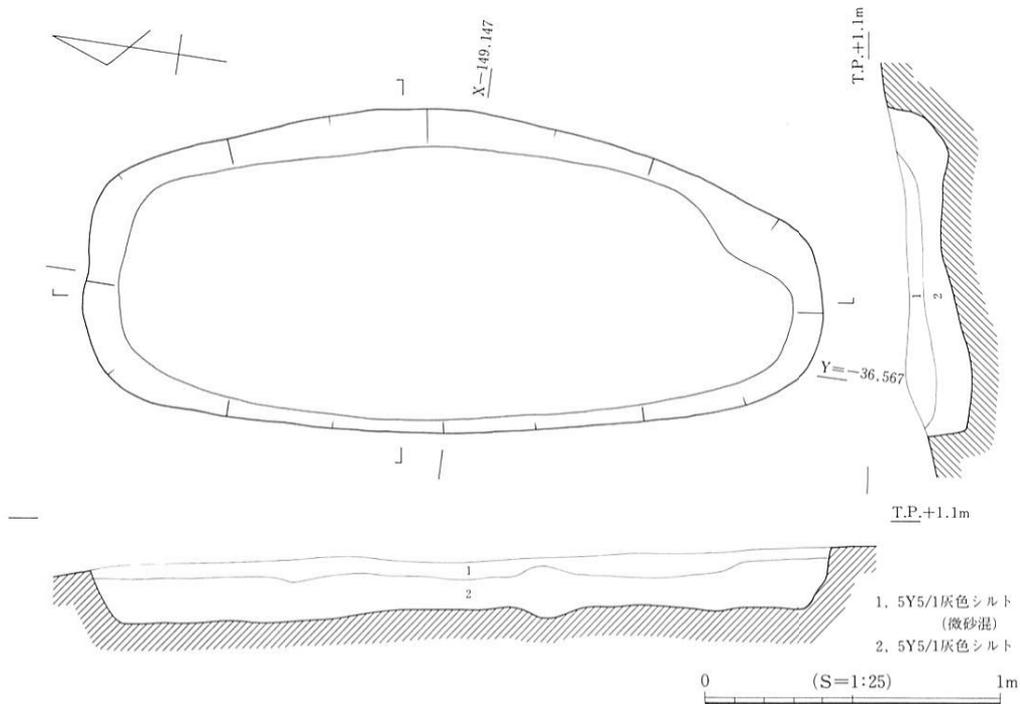


図58 31トレンチ第3面 3号方形周溝墓第8主体部平面、断面

(図61～64、図版26)。なお、これらの遺物は上下2面に分けられ、それぞれの時期は突出部を築造する以前と以後に相当する考えられる。

主体部は、今回の調査では木棺4基、土器棺2基、土壌1基が確認された(図52、図版14-2)。既往の調査における主体部の名称を踏襲し、今回の調査で検出された主体部は、木棺を北より第4・5・2・3主体部とし、土器棺を第6・7主体部、土壌を第8主体部とした。

第2主体部は鋼矢板によって東側を切断されており、全体の約2/3を検出した(図53、図版15・16)。墓壇の全長は現存で約2.0m、幅約1.38m、深さ約0.3mである。墓壇西端と中央部上面の2ヶ所に自然石が置かれている。

木棺は天井板が腐朽しており、残存状況はあまりよくない。しかし、側板と底板は残存状況が比較的良好であった。木棺部は現存で全長約2.7m、幅約0.55m、高さ約0.17mである。木棺内には砂が堆積しており、棺内から遺物の出土はみられなかった。人骨の遺存状況はやや不良であり、膝から下を鋼矢板によって切断されている。頭位は西である。

第3主体部は東側を鋼矢板に切断されており、約1/2を検出した(図54、図版17・18)。墓壇の全長は現存で約1.7m、幅約1.1m、深さ約0.45mである。墓壇西側上面に人頭大の自然石が置かれている。木棺の残存状況は良好であり、木棺部は現存で全長約1.3m、幅約0.65m、高さ約0.4mである。木棺内には砂が流入しており、棺内から遺物の出土はみられなかった。人骨は大腿骨より下部のみが確認されている。遺存状況は不良であり、頭位は東である。

第4主体部は完全な状態を検出された(図55、図版19・20)。墓壇の全長は現存で約2.6m、幅約0.95m、深さ約0.35mである。墓壇中央よりやや西寄り、被葬者の胸骨上方に長さ約50cmの自然石を検出した。自然石は砂岩質の川原石である。下部に木棺東側を攪乱する粘土層が堆積しているため、後世に置かれたもののようにみえる。しかし、自然石の西端下の砂層上面に凹みがあり、本来は頭蓋骨の上部に立てられていたものが、攪乱の際に倒れたものであると推測される。木棺部は天井板がかなり腐朽しているものの、側板や底板の残存状況はかなり良好である。木棺部の全長は現存で約2.0m、幅約0.5m、高さ約0.33mである。木棺内には砂が堆積しており、遺物は出土していない。人骨の遺存状況はやや不良であるものの、全身を確認することができた。被葬者の身長は現存で約1.57mである。頭蓋骨および顔面の一部に赤色顔料の塗付された痕跡が認められる。頭位は西である。

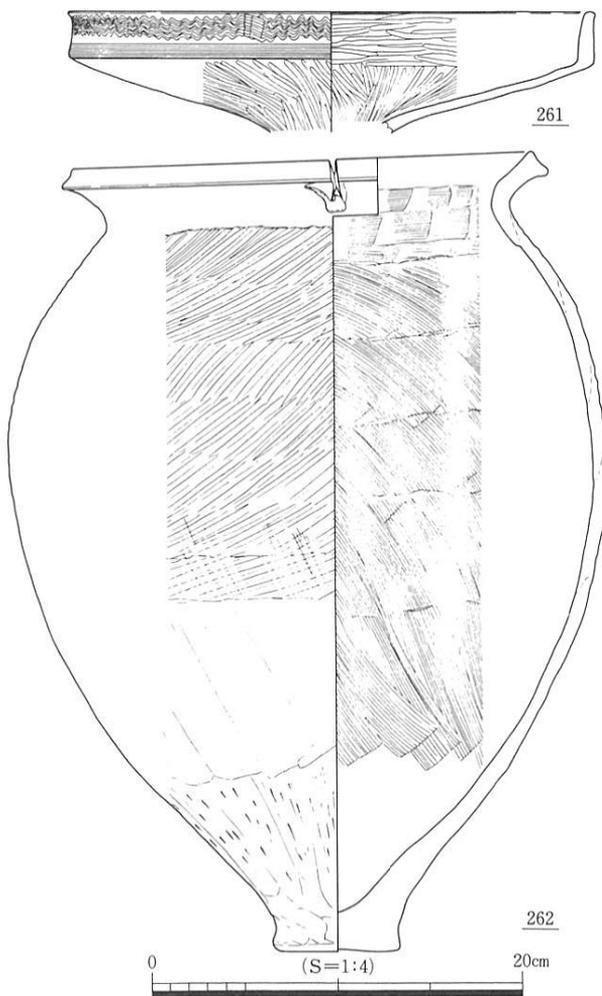


図59 31トレンチ第3面 3号方形周溝墓第6主体部土器棺

第5主体部は鋼矢板によって東側を切断された状況で検出された(図56、図版21・22)。墓壇の全長は現存で約2.17m、幅約1.4m、深さ約0.37mである。この主体部の上面には他の主体部のような自然石はみられなかった。木棺は天井板、側板、底板とも形態をよく遺存している。木棺部の全長は現存で約1.8m、幅約0.55m、高さ約0.4mである。しかし、底板に関しては木目方向に直交する幅1cmほどの溝があり、ブロック状に分解している。この溝が人為のものか詳細は不明である。あるいは別の木製品の転用である可能性も考えられる。木棺内には砂が堆積しており、遺物の出土はみられなかった。人骨は胸骨より下のみを検出し、遺存状況は不良である。頭位は東である。

これらの4基の木棺は、墳丘南北軸に対して直交してつくられており、既往の調査における第1主体部と異なっている。また、これら4基の主体部の形成時期は、少なくとも2段階にわけら

れることが明らかである。これは墳丘盛土の築造状況とも一致している。

墳丘の築造を含め、順を追って復元すると、第1段階ではまず約0.5mほど盛土され、その後第2・5主体部がつくられる。そして第2段階は、0.1mから0.2mの盛土された後、第3・4主体部がつくられたと考えられる。この組み合わせはそれぞれ頭位を異にする2人の被葬者のセットであり、2つの組み合わせが夫婦の埋葬を示し、頭位が男女の違いを示していると考えられるならば、当時の葬制について考える上で貴重な調査例の一つとなるであろう。

第6主体部の墓壇は現存で長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形を呈する（図57、図版23）。深さは約0.35mである。土器棺は甕を据えた後、高杯の脚部を打ち欠いた杯部を蓋として被せており、北東方向に開口する。内部には砂が堆積しており、人骨や遺物は検出されなかった。

第7主体部は第2面の溝27の攪乱を受け、上部を欠損する。墓壇は現存で長径約1.05m、短径約0.8mの卵形を呈する（図57、図版24-1）。深さは約0.4mである。土器棺は壺の頸部を欠いた胴部を身とし、小型の甕の口縁を欠いたものを蓋として用いており、北東方向に開口する。内部には砂が堆積しており、遺物や人骨はみられなかったが、土器棺の底部付近には有機物の付着が認められた。

第8主体部は現存で全長約2.5m、幅約1.1m、深さ約0.2mを測る（図58、図版24-2）。主体部軸を南北方向にとり、既往の調査における第1主体部と平行関係にある。墓壇を検出したのみであるが、断面の観察では埋土中に植物質の薄い層がみられ、木棺の腐朽した可能性が考えられる。木棺の規模などは不明であり、人骨や遺物は検出されなかった。

3号方形周溝墓第6主体部からは棺身に転用された甕と棺蓋に転用された高杯が出土した。甕（図59-262）は焼成段階以前に口縁の一部に亀裂を生じたため、これに粘土を貼り足して補修した後に焼成された状況を止めている。高杯（図59-261）は屈曲する口縁部の上方外面に櫛描波状紋と直線紋を巡らせるもので、加飾性の高いものである。なお、高杯の口縁部破片や甕の体部破片の一部は、第2c面の水田耕土内に破片となって巻き上げられたものが接合し、また、甕の口縁部小破片は、第3号方形周溝墓第4号主体部東側の攪乱を被った層番1とする土層内より出土したものと接合した。

第3号方形周溝墓第7主体部では口頸部を打ち欠いた壺体部を棺身とし、体部を打ち欠いた壺口頸部と、口縁部を打ち欠いた甕を棺蓋として使用していた。棺身に転用された図60-264-2の壺は焼成不良で、体部以下が非常に脆弱であること、そして、図57右側に示すように土圧によって相当細片化しており、一部接合不可能な部分があった。体部上位には帯状に赤色顔料が塗布されているが、完存時に塗布されたものか、口縁部打ち欠き後の所作なのかは遺存状況が不良のため判別がつかかねる状況である。264-1の壺口縁部は、検出時には口縁部端面に赤色顔料を円形に塗布しこれを連ねていたが、現状では褪色してしまい、その痕跡を確認できる程度に過ぎない。これら2点の土器は、色調、胎土など酷似しているが、直接の接合は不可能であった。あるいは、打ち欠きを行った際、頸体部境に再設定した二次的口縁を形成する時点で接合面が除去さ

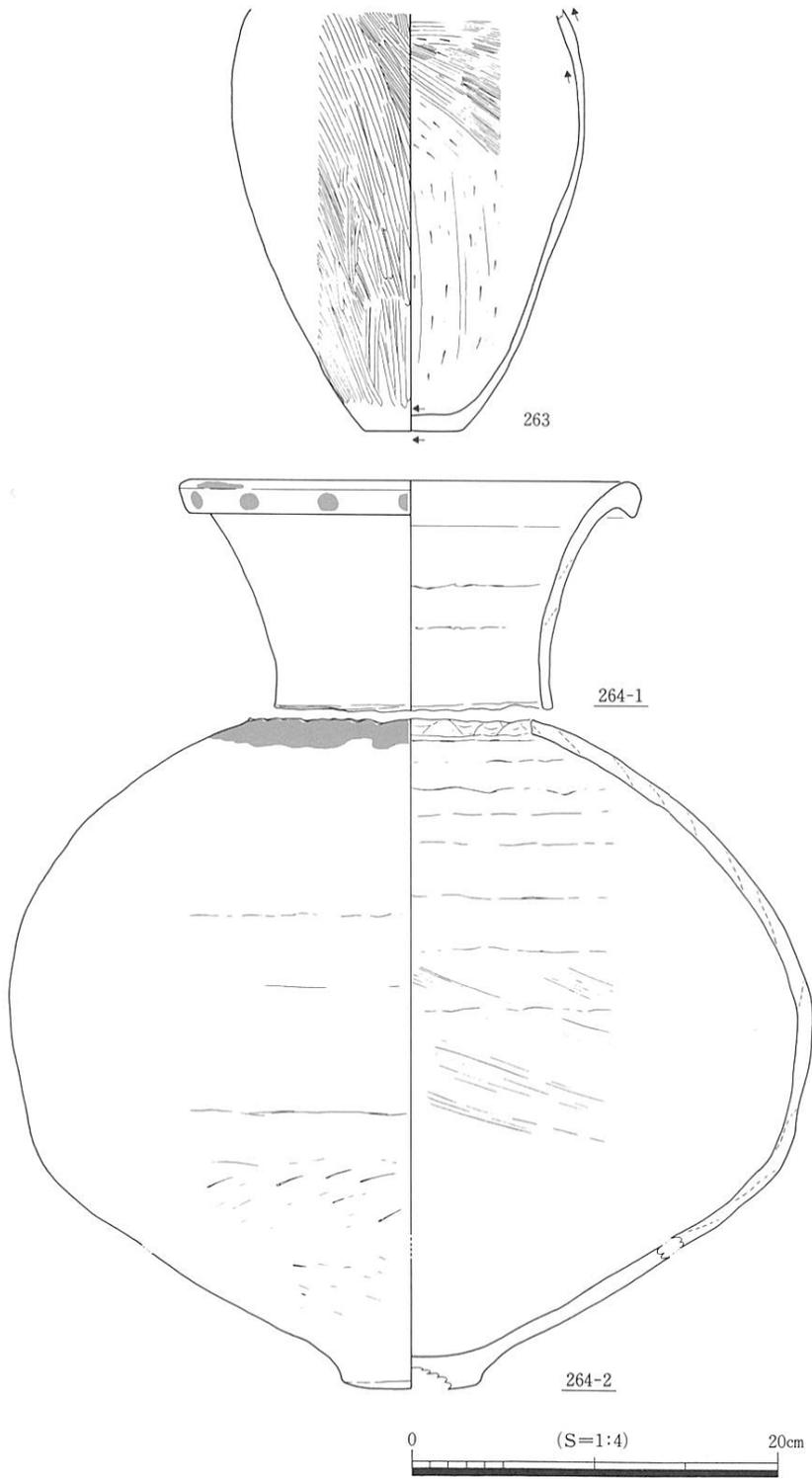


図60 31トレンチ第3面 3号方形周溝墓第7主体部土器棺

れている可能性も推定されることや、双方ともに赤色顔料が塗布されていることから、同一個体としても決して矛盾するものではなく、ここでは、同一個体として報告する。棺蓋として転用された甕は不安定な平底に成形されており、口縁部が欠損しているため、明確な判断は下せないが、胎土、形態、調整技法など、周辺域で出土するものとは少し異なるような印象を受ける。

3号方形周溝墓の庄内期盛土からは、図61-265・266に示す土器が出土している。265は屈曲した口縁部を持つ壺の口縁部破片で、色調や胎土の様相から山陰系の土器の可能性はある。266は体部の開きがやや小さいが、生駒西麓産の胎土を持った典型的な庄内式土器の甕である。

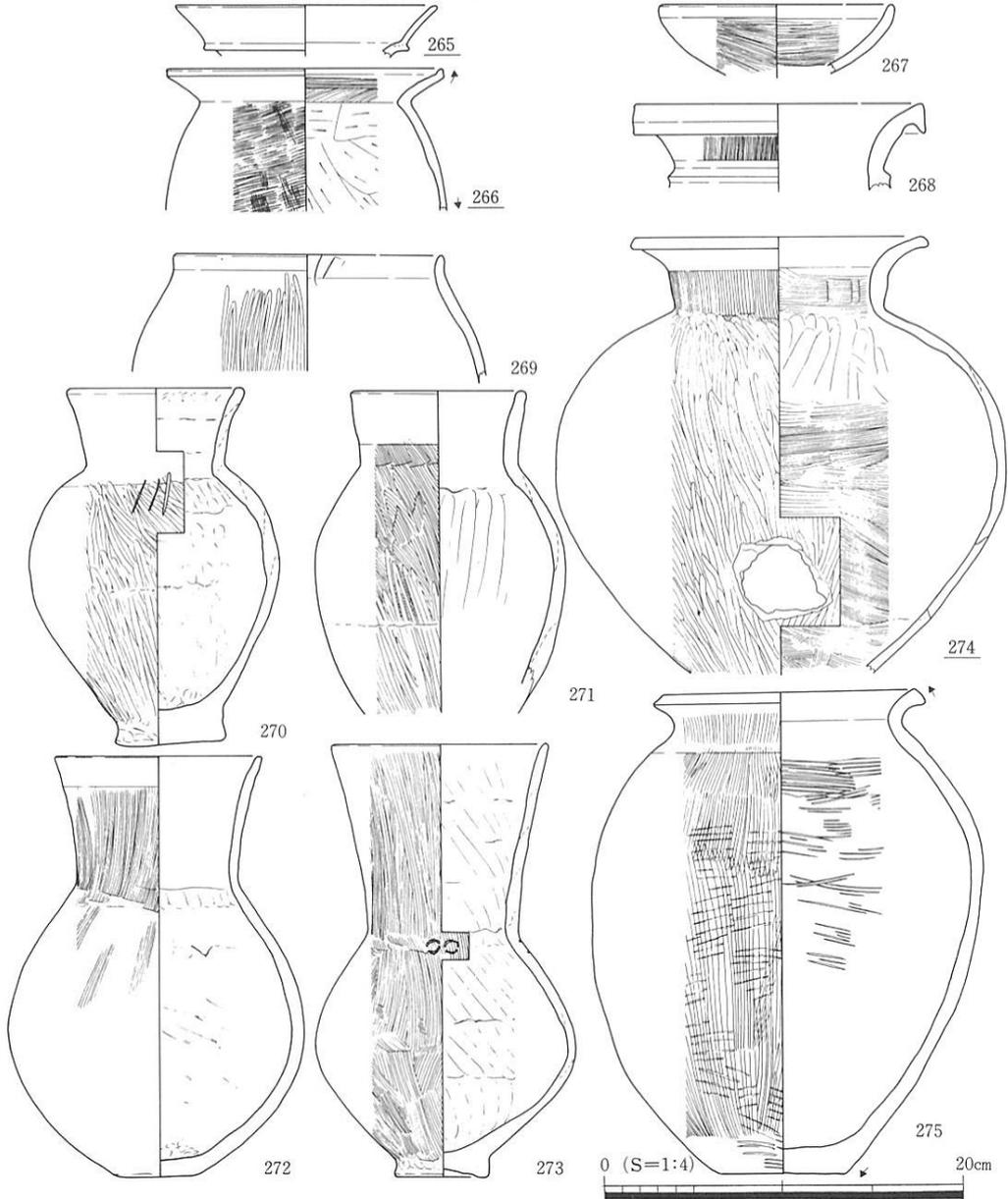


図61 3 | トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(1)

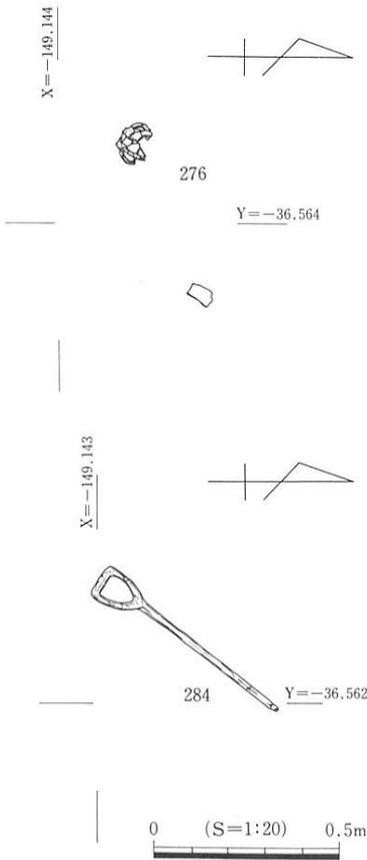


図62 3 I トレンチ第3面

3号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況 穿孔を施した後、粘土紐を挿入して固定する方法により製作され、277は体部を成形した後、脚台部を接合することにより形作られている。278から282は高杯の口縁部および脚部の破片と考えられるものである。278は杯部で屈曲する形態を持ち、屈曲部の上位には多条の疑凹線風の紋様が施される。胎土は灰白色を呈し、周辺で出土する土器と

3号方形周溝墓に直接関連する遺物には図61-267・268がみられる。267は壺棺を埋置した第7号主体部より出土した椀の口縁部破片、268はマウンド盛土上層部から出土した頸部に1条の凸帯紋を巡らす壺の口縁部から頸部の破片である。

上記以外は周溝内より出土したもので、その位置は図51右側に示すとおりである。269から274は壺で、無頸・短頸・長頸・広口の各種形態のもの6点が出土し、この他に、甕1点、鉢2点、高杯口縁部1点、高杯の脚部と考えられる破片4点が出土した。

無頸壺には269に図示した口縁部の破片がある。短頸壺には270・271の2点がみられ、ほぼ全形のうかがえる270には肩部上位に3条のへら描き記号が施される。272・273は長頸壺で、272は不安定な平底を持つ。273は全形のうかがえる土器で、頸体部の境に竹管紋を横に2つ以上連ね、押捺した記号を付す。274は広口壺で体部下半には焼成後の穿孔が行われている。275はほぼ完形に復原された甕で、不安定な平底を持つ。器壁が厚いなど作りの粗さが目立つ土器である。

図63-276および277は鉢であり、276の把手は、体部に

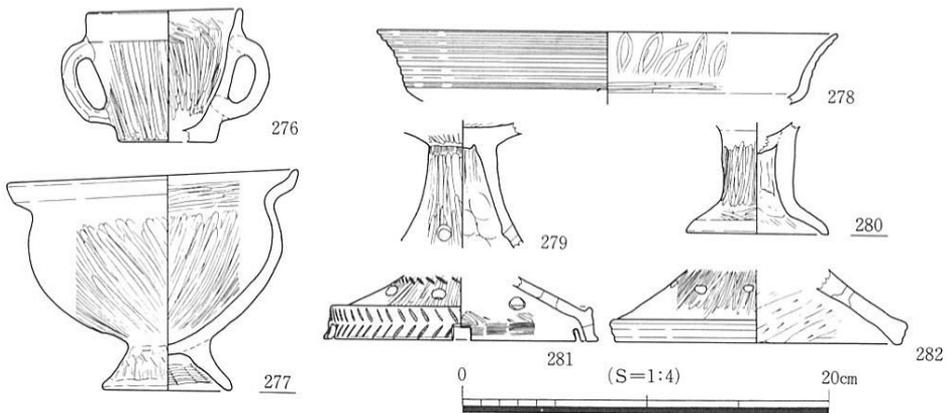


図63 3 I トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(2)

は若干の相違点を指摘することができる。紋様等とも兼ね合わせて考えると、他地域からの影響を受けた土器と言えるのかも知れない。279・280は脚部の破片である。形態的には「ハ」の字状に真っ直ぐ開くものと、筒状の脚柱部から「ハ」の字状に開くものの2者が出土している。281・282は脚裾部の破片である。282は中期末葉から後期初頭にかけての通有の形態を呈しているが、281に関しては、脚裾部をさらに一段屈曲させ、その外面には板状工具による綾杉状の列点紋を施している。列点紋は上位欠損部にも認め、さらに、裾下端部には矩形を呈する切り込みが加えられており、非常に加飾性豊かな土器である。このような土器は周辺の遺跡ではあまり出土して

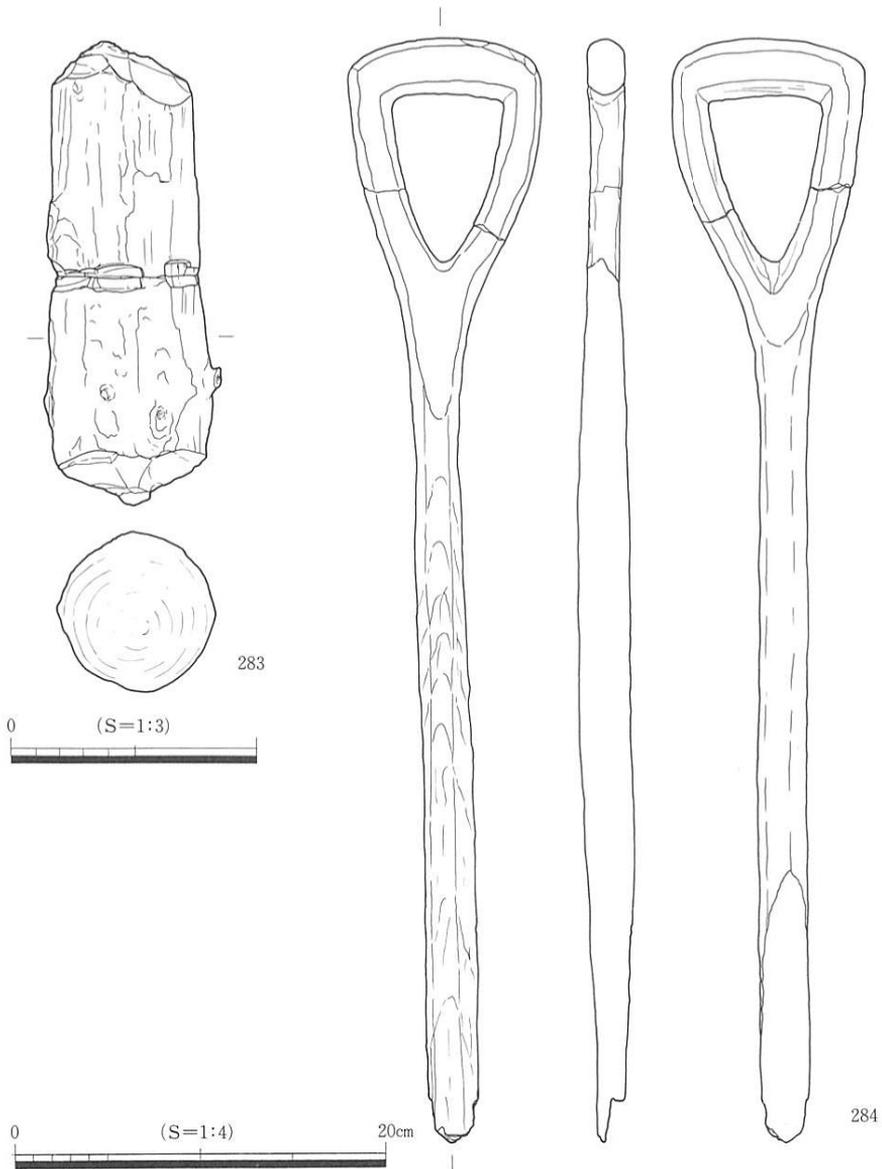


図64 31トレンチ第3面 3号方形周溝墓出土遺物(3)

おらず、西方からの影響を受けた土器とも考えられる。

木器には周溝内より出土した大量の自然木のほか、図64-283・284の木錘と鋤の柄が出土している。木錘はマツ材を使用しており、樹皮の付いたままの棒材の両端を裁断し、その中央に細い溝状の切り込みを入れたもので、3類に分類されるものである。鋤の柄は身部を欠損しているため、組み合わせ鋤の柄か、一本鋤の判断はできないが、上端に逆三角形の把手を作りだしているため、V a型に細分されるものである。使用される材質は、アカガシ亜属と鑑定されている。

(2)A地区 (図65)

4層除去後の状況は、T.P.+2.0m前後において、中粒砂を主体とする砂層である5 a層の堆積が検出された。12Aトレンチ以南は細砂を主体としており、調査区の南になるほど粘土質を多く含むようになり、遺構面の標高もT.P.+2.5mと上昇していく。遺構は5 a層上面に形成されているが、その密度は少なく、流路や溝が主体である。

また、基盤となっている砂層は河川1の埋土であり、同層より出土した遺物は弥生時代後期を主体としている。そこから、第3面の遺構面形成直前には河川1が当地区にあり、洪水などによって同河川が埋没した後、小さな流路と溝が形成されたと考えられる。

8AトレンチはT.P.+1.8m付近において、トレンチ全域において砂層の堆積がみられた。遺構としては、溝・ピットが検出されている(図66、図版30-1)。

溝20はトレンチ中央に位置し、幅約1.5m、長さ約7.0mを測り、西にのびている。深さは約0.4mである。東側は次第に浅くなっており、平面形も不明瞭となっていく。流路からの水の引き込み口であるかもしれない。遺物は出土していない。

11AトレンチはT.P.+2.0m付近において、トレンチ全域に砂層の堆積を検出した。遺構としては、溝・土坑がみられる(図66、図版30-2)。いずれも鋼矢板によって切断されており、全景は明らかではない。

土坑13はトレンチの北西隅に、幅約0.8m、長さ約8mの範囲において検出した。L字状に屈曲し、西側と北側に向かって落ち込んでいるが、深さは約10cmと非常に浅い。

土坑14から16はいずれも不定形の土坑である。遺物は出土していない。

12Aトレンチは、旧楠根川によって攪乱されており、X=-149,414より南側の一部で、T.P.+2.7m付近において粘質の細砂層を検出した。遺構としては溝とピット、河川がみられる(図67、図版31)。

溝22はトレンチ南西隅に位置し、南東から北西に延びている。北側の肩を検出したのみであり、溝の幅は不明である。深さは約15cmを測り、埋土は均質な粘土が堆積し、甕が出土している。

溝23は溝22の東側に位置し、やや北寄りに並行してはしる。長さ約3.0m、幅約1.1mの範囲において検出された。深さは約15cmであり、埋土は炭化物を含む粘質のシルトが堆積している。

河川1は、上記の遺構面の掘削後に検出された遺構である(図版31-2、32-1)。Y=-36,562付近において南北にのびる流路の東側の肩を確認した。遺構内には砂とシルトが交互に

堆積しており、遺物がまとまって出土している。この河川1による流水砂は、他の調査区においても検出されている。出土した遺物の時期および堆積の状況から、河川1による流水堆積は、第4面から第3面の間にA地区のほぼ全体に広がったと考えられる。

12Aトレンチ溝1からは弥生時代後期の遺物が出土し、図68-300に示すような口縁部から体部にかけてが遺存する甕を1点図化することができた。

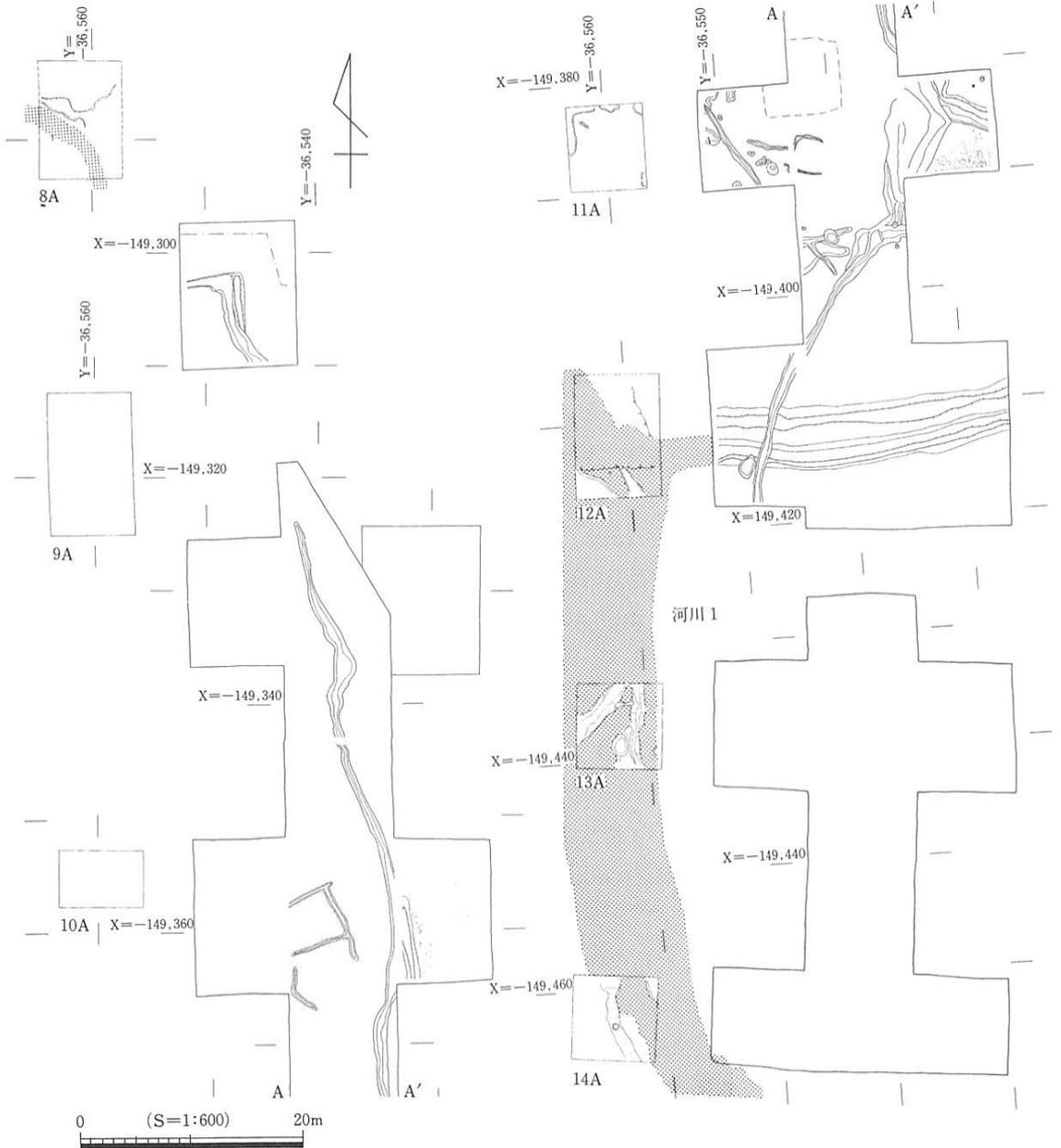


図65 A地区第3面 遺構全体図

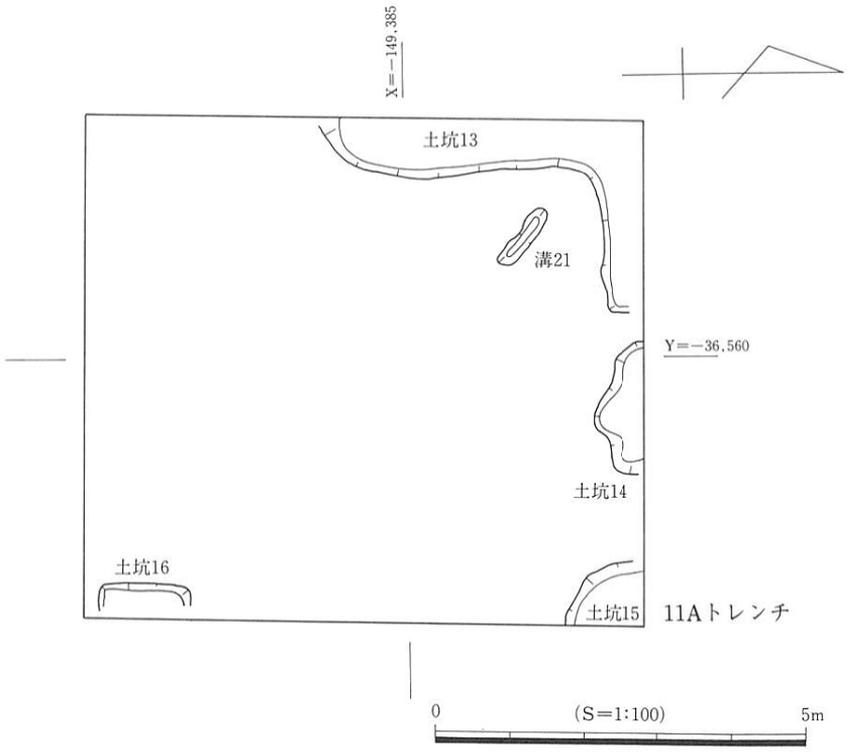
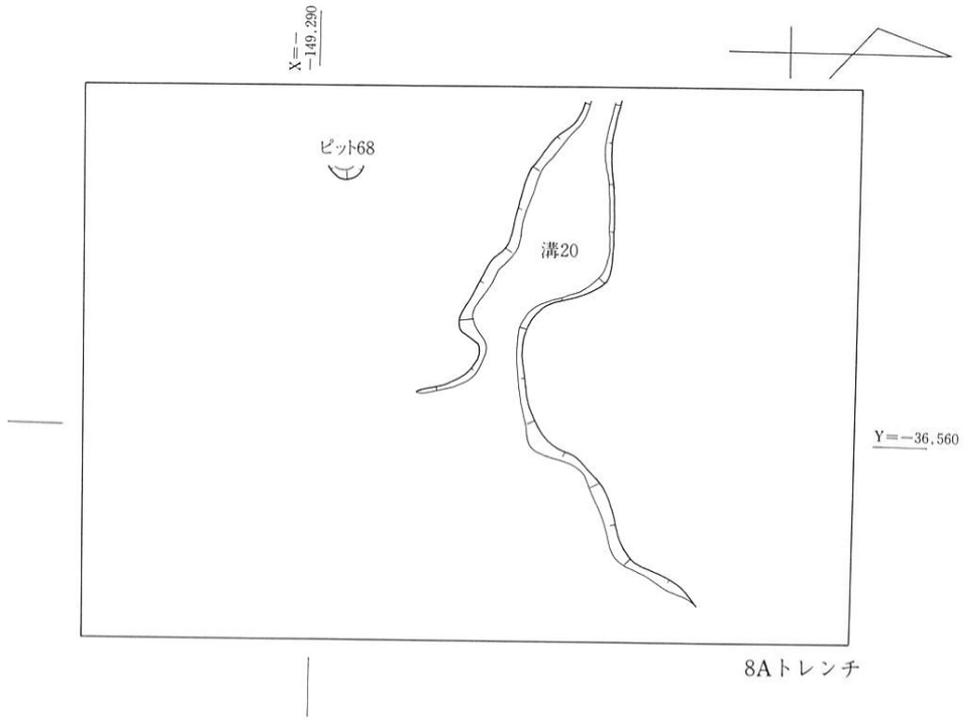


図66 8A・11Aトレンチ第3面 平面

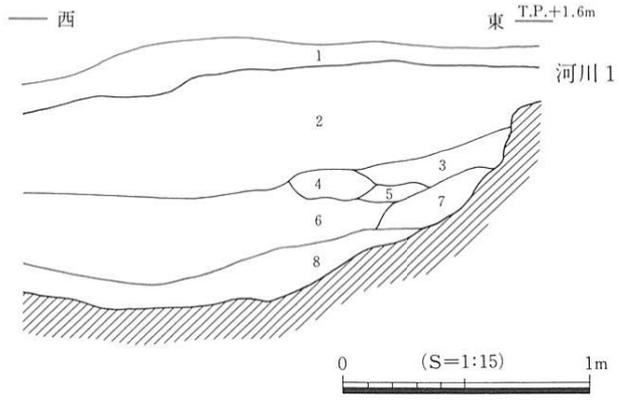
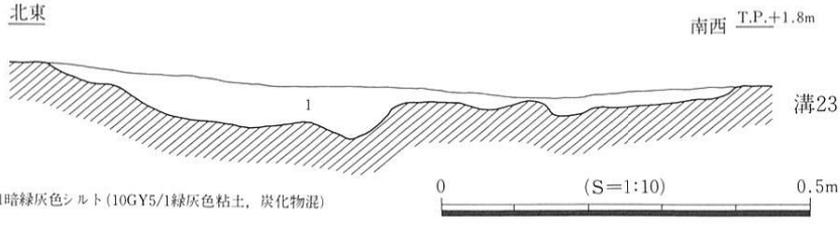
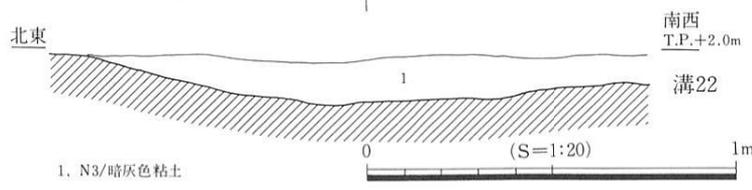
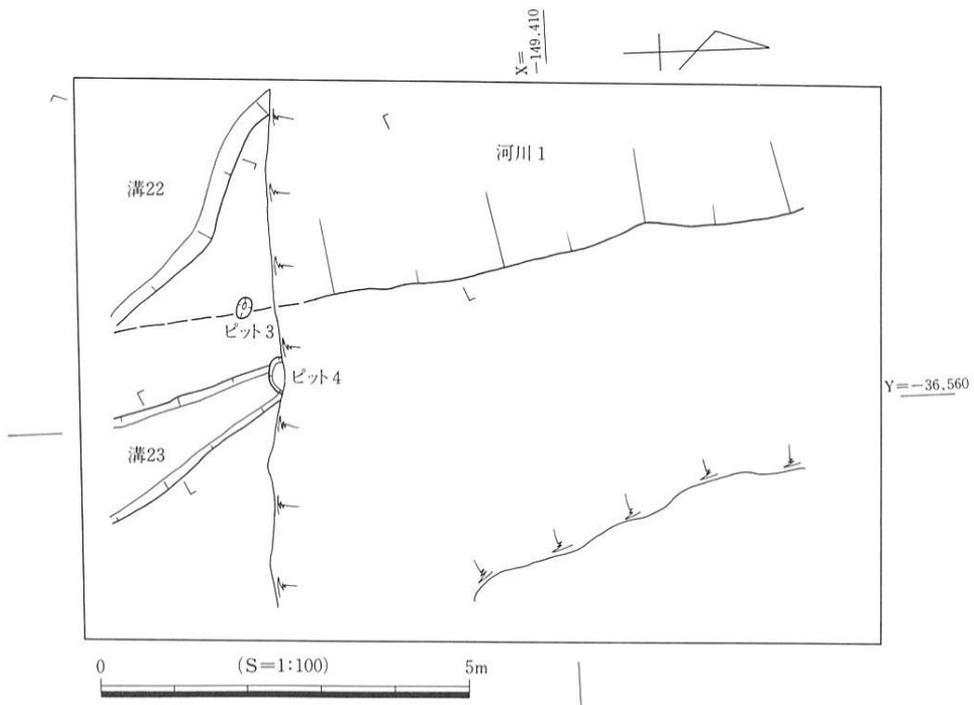


図67 12Aトレンチ第3面 平面, 溝22・23, 河川1断面

12A トレンチ河川1 出土遺物には図68に示すような弥生時代後期の壺・鉢・甕がみられる。285は壺と考えられる体部上半部の破片で、外面にはヘラ描きによる線刻が施されている。286・287は鉢である。286はほぼ完形にまで復原された脚台付の鉢で、成形は非常に粗雑である。288から

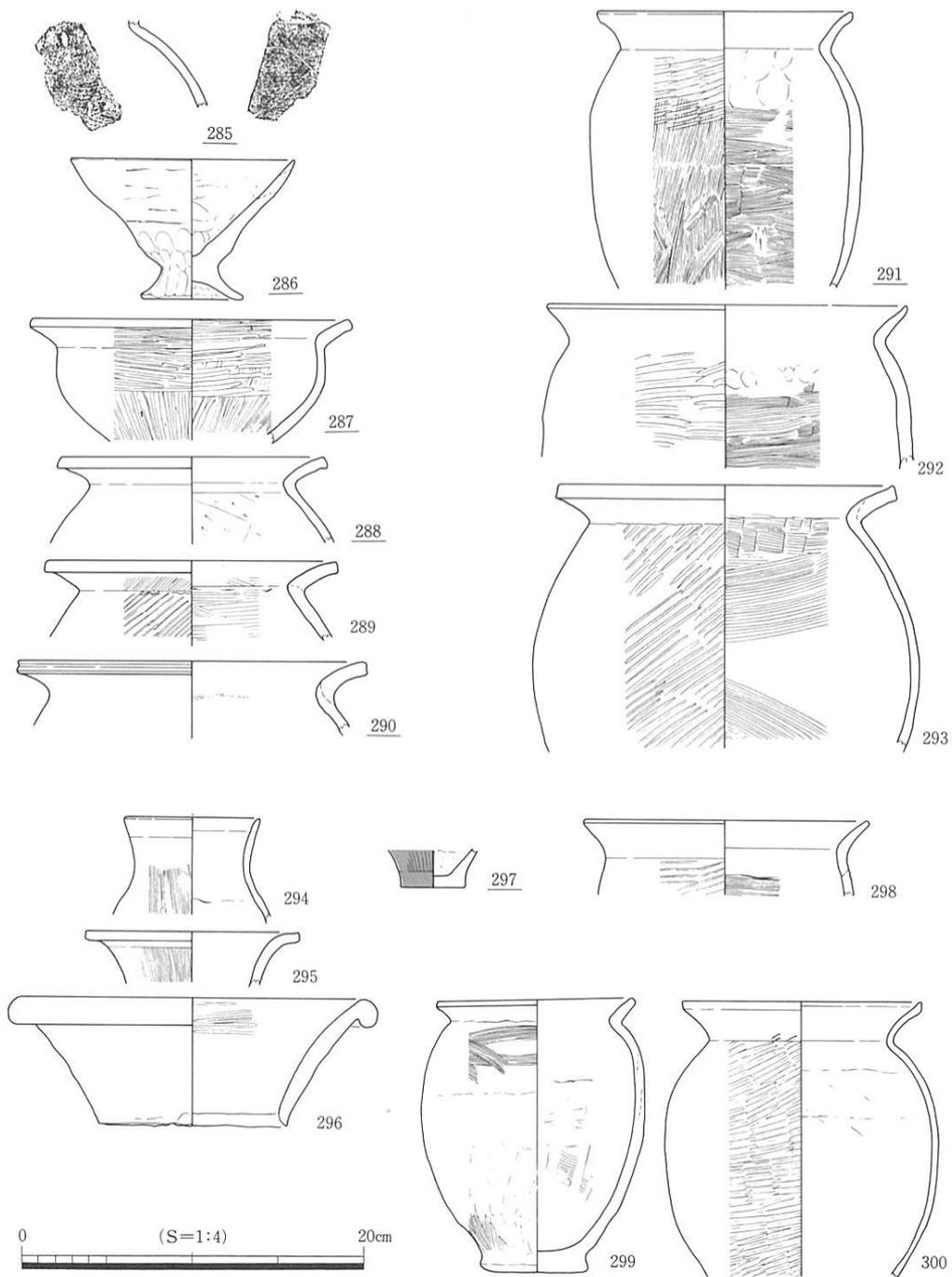


図68 12A トレンチ第3面 溝22, 河川1, 5a層出土遺物

293は甕であり、外面はナデで仕上げられたもの、タタキのままのもの、タタキののちハケを施したものに類別される。内面はおおむねハケが施されているものが多く、1点のみケズリが施されているものも含まれる。なお、293については、接合可能な破片が14Aトレンチ自然河川1より出土しており、両者が同一のものであった可能性も生じる。

12Aトレンチ5層出土遺物には弥生時代後期の遺物が含まれており、うち5点を図化できた。294は短頸壺の口縁部破片で、295・296は広口壺の破片である。296は頸部部境付近で分割された状態から、その破断面に再加工を加え、他の用途に供したものである。297は小型の鉢あるいは甕の底部の破片で、遺存する外面全体に赤色顔料を塗布している。298・299は甕で、298は口縁部破片、299は完形にまで復原され「く」の字状に屈曲する短い口縁部を持つ。

13Aトレンチの第4層除去後の状況は、T.P.+1.8m付近において中粒砂の堆積を確認した。この砂層は12Aトレンチにおける河川1の埋土に相当するものである。遺構はこの砂層上面において形成されており、溝3条と土坑が検出されている（図69、図版33-1）。

溝24は、トレンチ中央よりやや東寄りのY=-36,561付近において、南北にのびる溝である。幅約1.2m、長さ約7.0m、深さ約45cmを測る。埋土は粗砂および粘質土であり、植物遺体を含む最下層は基本層序の4b層に相当する。

溝25は溝24の西側に位置し、南西から北東にのびている。幅約1.6m、長さ約5.5m、深さ約30cmを測る。埋土は砂と粘土が交互に堆積しており、植物遺体を含む。断面層序の2・4層が基本層序の4b・4c層に対応するものである。

埋土の堆積状況から、溝25が溝24より先行することは明らかである。X=-149,435、Y=-36,562付近に、幅約30cmの溝26がこれらの溝にとりついている。輪郭は明瞭であるものの、非常に浅く、性格は不明である。

土坑17はトレンチの中央やや南側に位置する。規模は長径約2.0m、短径約1.4mであり、土坑47を切っている。埋土は砂と粘質土が堆積しており、深さ約27cmを測る。

13Aトレンチの河川1出土遺物には図70に示すような弥生中期後半から後期の土器、石器が出土している。弥生時代中期後半の遺物には305の甕がみられ、河川が周囲から削剝してここに持ち運んだものであろう。306もこの時期の遺物である可能性が高いと思われるが、にわかには断じがたい。後期の遺物には301から304の甕、307の壺、308の高杯が出土している。このうち301・302の甕は、口縁端部を上外方につまみ上げており、他のものとの形態的な差異を持つ。304の体部上半には板状工具による刻目紋がめぐらされる。303は口縁部から体部の一部を欠損した甕で、外面底部から体部下半にかけてはタタキを施したのちハケを施している。307は短頸壺である。体部上位には3条の縦位のヘラ描き記号が施され、頸部から口縁部にかけても不明瞭な線刻が施されている。308は杯部中央で緩やかに屈曲する形態を呈する高杯である。

309から310は砂岩製の作業台あるいは敲打具と考えられるもので、309と310には図示した上面に使用による磨滅が認められ、311にはそれと共に中央部に敲打による凹部が観察できる。

14A トレンチの第4層掘削後の状況は、T.P.+1.7m付近において、細砂を含む粘質な砂層の堆積をトレンチ東側に検出した。西側は4b・4c層が南東から北西に向かって堆積している。遺構は砂層上面に形成されており、落ち込み・土坑がみられる(図71、図版33-2)。

落ち込み1は上記の4b層の堆積部分であり、東西約4.5m、南北約7.5mの範囲において検出された。西に向かって緩やかに傾斜しており、深さは約15cmである。埋土は細砂を含む粘土層で

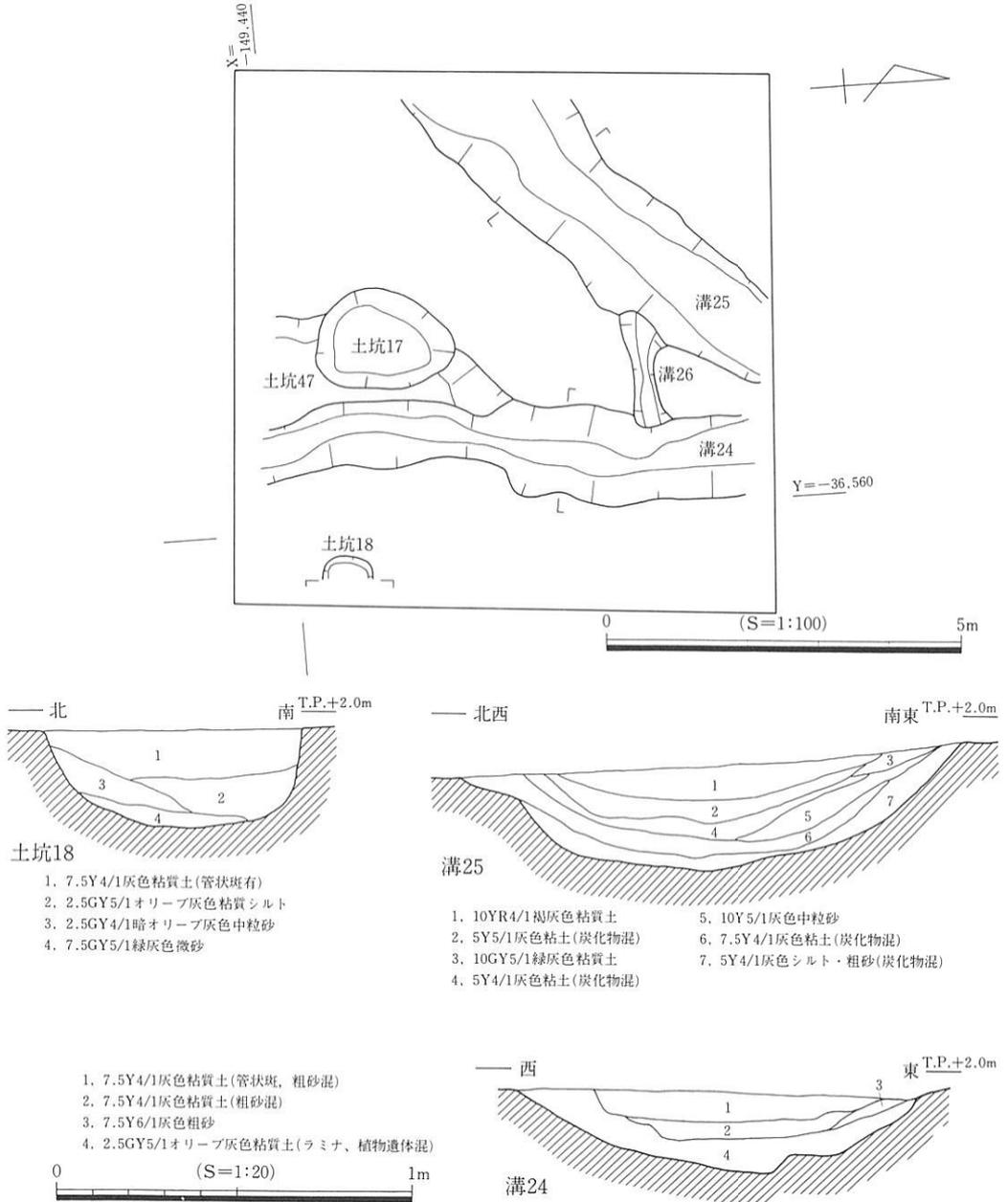


図69 13A トレンチ第3面 平面, 土坑18, 溝24・25断面

あり、植物遺体がラミナ状にみられる。遺構断面の層番3・4が基本層序の4b・4c層に相当している。

土坑19はトレンチのほぼ中央、X=-149,464、Y=-36,565に位置し、落ち込み1の埋没後に形成された遺構である。一辺約55cm、深さ約10cmの隅丸方形を呈する。

14Aトレンチ河川1出土遺物には、図72・73に示す中期後半から後期にかけての土器、木器がみられる。中期後半の土器とするものの大部分は、器壁が厚い、成形の粗雑さが目立つ、調整技法の簡略化が進んでいるなどの諸様相から、その末葉に位置づけられるものである。

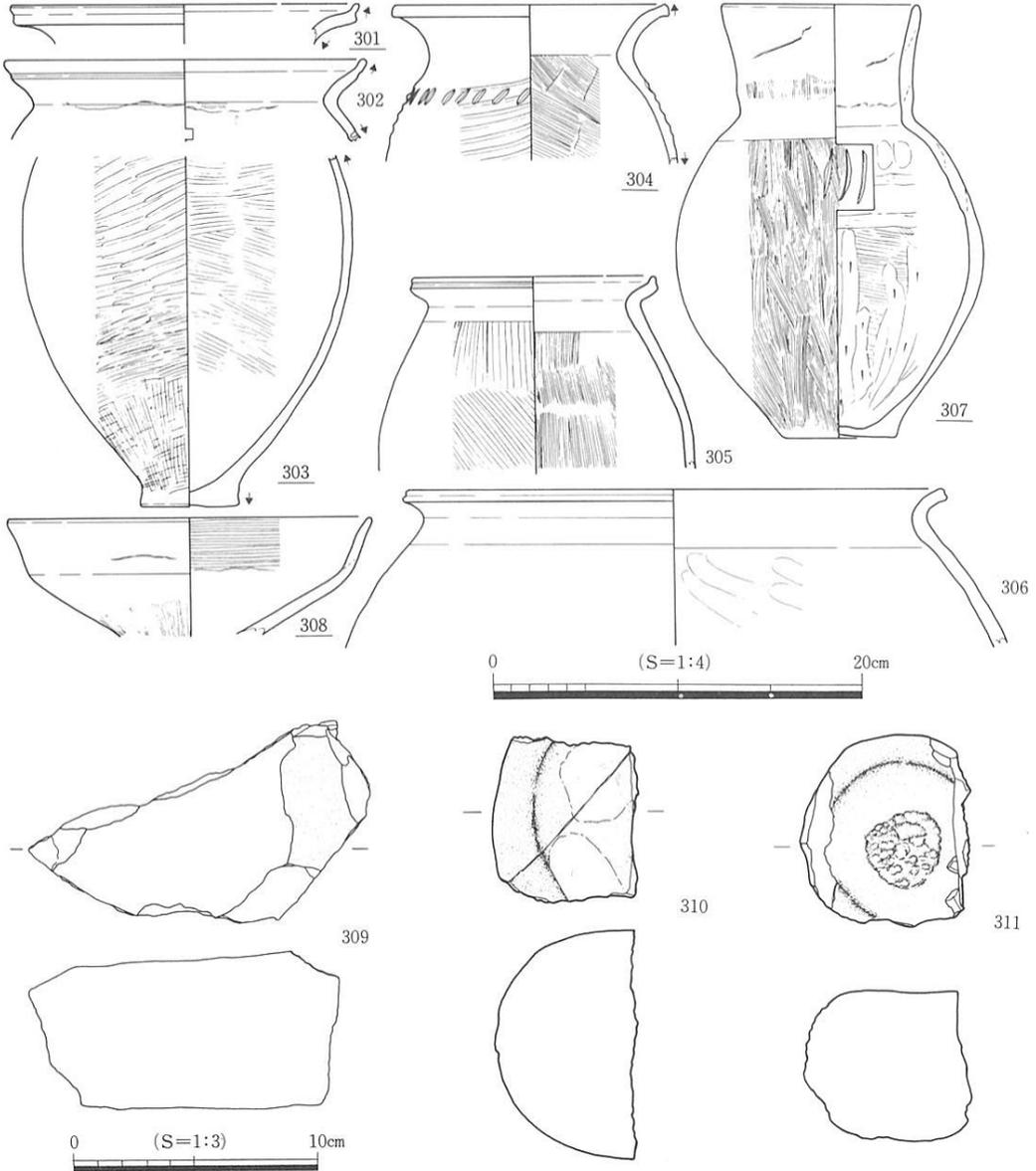


図70 13Aトレンチ第3面 河川1出土遺物

後期の遺物には、まったく紋様を持たない図72-312の無頸壺、313・314・317のような広口壺、図73-339から341の短頸壺あるいは長頸壺の口縁部破片が出土し、341の短頸壺頸体部境には円形の粘土粒が貼り付けられている。甕には319があり、このほか、外面の杯部中央に赤色顔料を塗布した332の高杯、大きな鋸歯状の線刻を入れた329の脚部がある。

先述した中期の遺物には、315・316の広口壺があり、316は頸部と体部の境付近に分離した口縁部を再加工している。甕には318・320から326があり、口縁端部の最終調整や成形の粗雑さなど、中期末葉の特色をよく表している。鉢には327に示す小型のものや、336の大型のものが出土しており、これも中期末葉の特色をよく表すものである。高杯には331のような小型のもの、333から335に示すよう中期的な器形を有するものが出土しているが、上記と同様、成形や調整には粗雑さが目立つ。これら以外に鉢あるいは高杯の脚裾部と思われる破片が出土している。法量に比して大きな透かし穴を穿っており、これも中期的な様相とは異なる。また、337はミニチュアの脚部、338は貼り付け凸帯の間に赤色顔料を交互に塗布した土器片である。なお、時期的な判断は下しかねるが底面に「×」状の線刻を持つ壺と思われる底部が出土している。

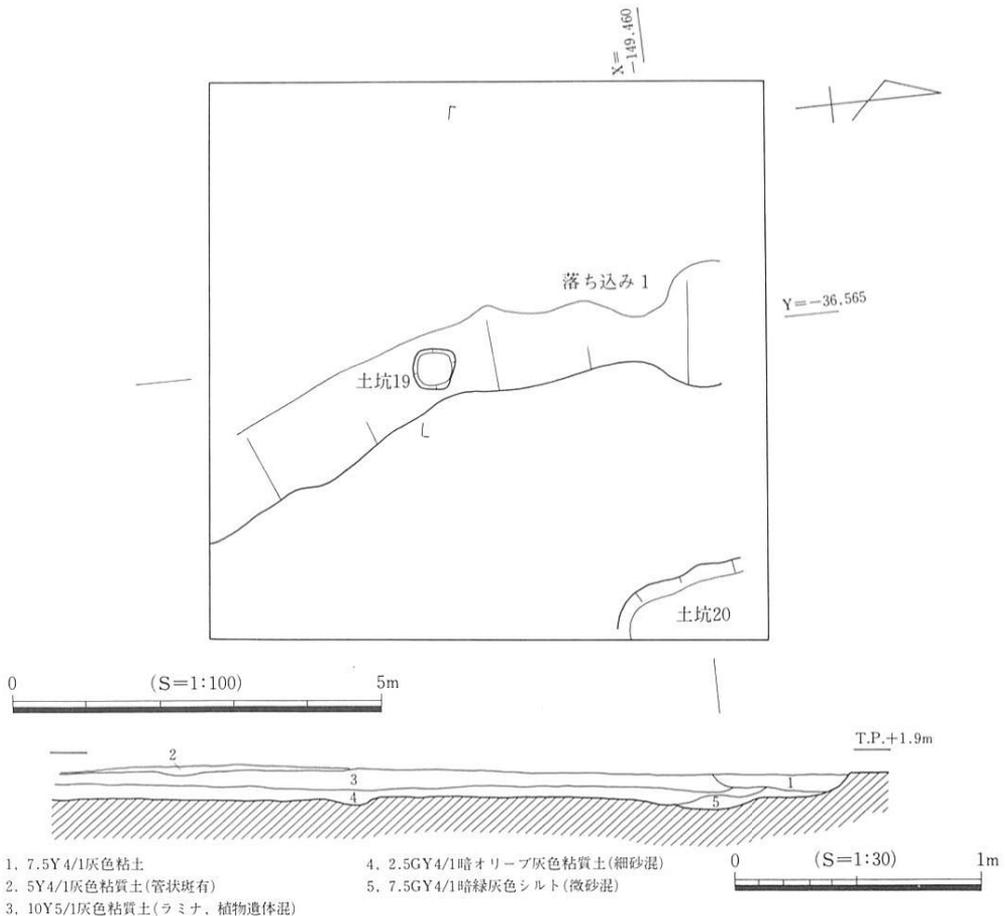


図71 14A トレンチ第3面 平面，落ち込み1断面

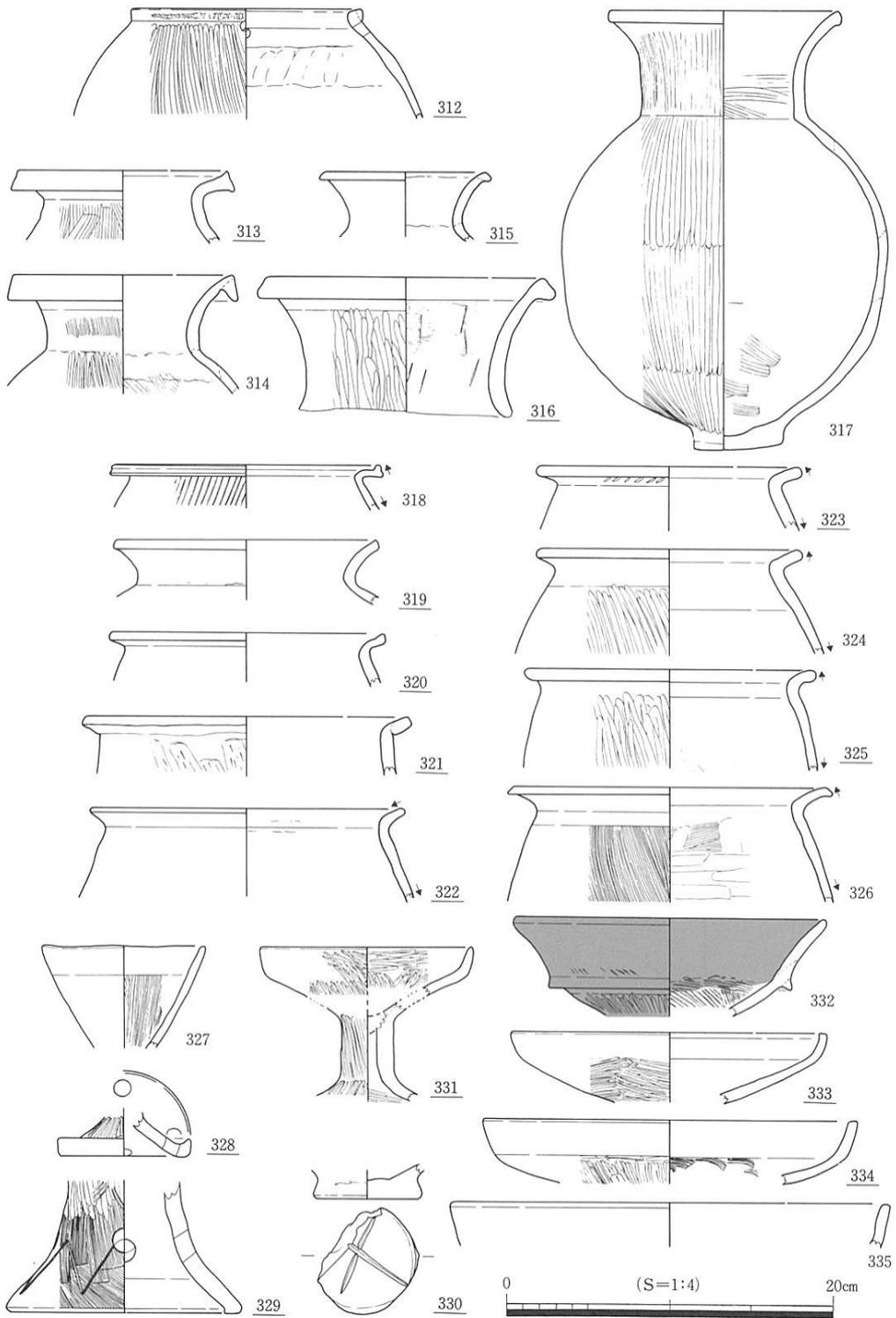


図72 14A トレンチ第3面 河川1 出土遺物(1)

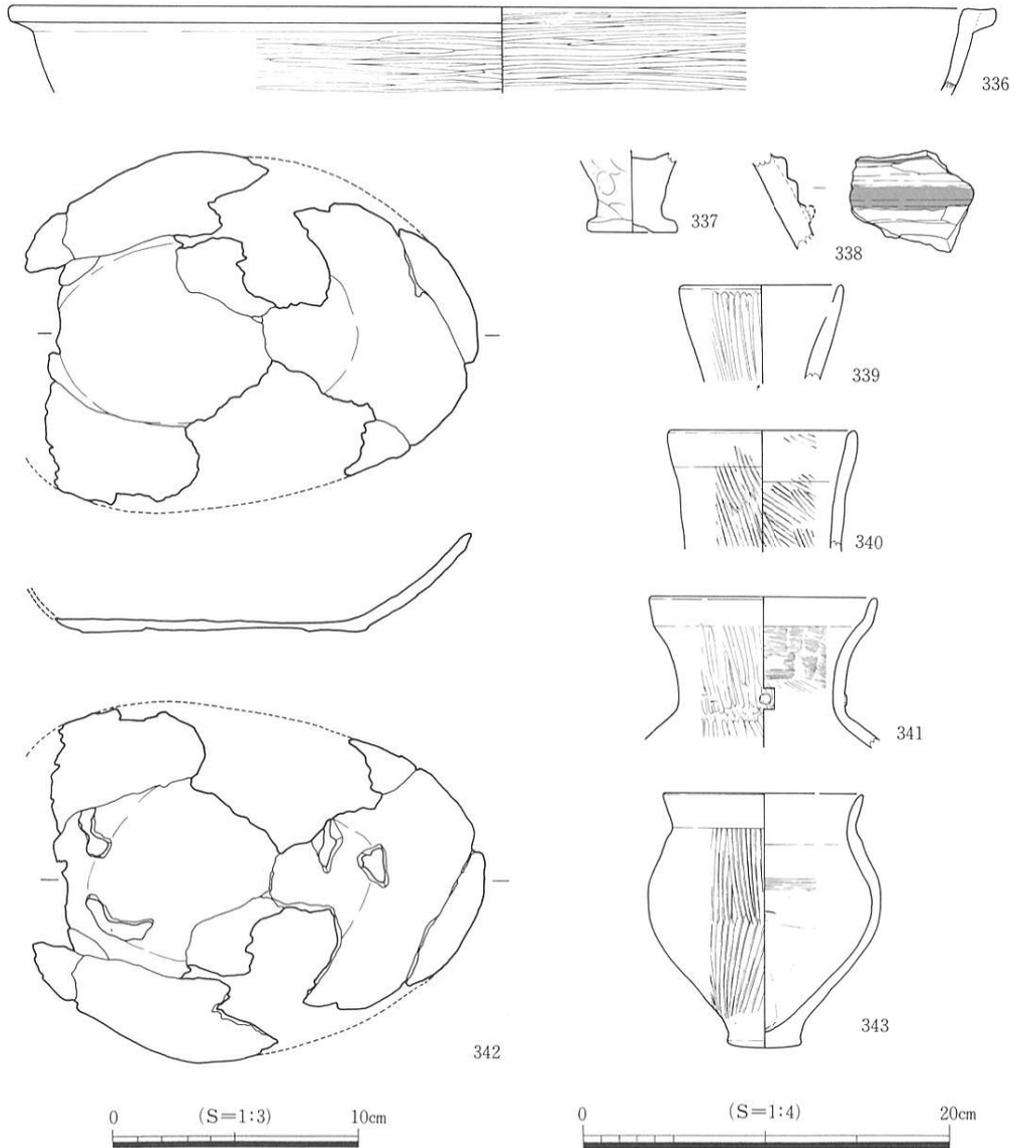


図73 14Aトレンチ第3面 河川1出土遺物(2)

木器には図73-342に示すような容器が出土している。腐食が激しいが平面楕円形の鉢に脚を作りだしており、三脚鉢と呼ぶことができよう。材質はヤマグワを使用している。

(3)C地区 (図74)

4層除去後の状況は、8Cトレンチから10CトレンチのX=-149,590付近まで、A地区と同様な砂層の堆積がみられた。これより南側では砂層の堆積は認められず、下層の包含層である5b層が露頭している。

砂層は中粒砂を主体としており、T.P.+1.6m前後に堆積している。この砂層は、地点としては離れているものの、A地区における河川1の流水砂に対応する5a層と考えられる。ただし、

遺物はA地区のようにまとめて出土しておらず、正確な時期の把握は困難である。

遺構は砂層上面および中層に形成されており、おもに流路・溝・土坑がみられる。

8Cトレンチの4層除去後の状況は、T.P.+1.5m付近においてトレンチ全域に砂の堆積が検出された。面としては、砂層上面と砂層掘削後の上下2面を検出したものの、明確な遺構などはみられなかった。

9Cトレンチの4層除去後の状況は、T.P.+1.6m付近において5a層に相当する砂層の堆積が検出された(図版35-1)。8Cトレンチと同様に、上下2面を確認している。しかし、砂層上面では遺構は検出されなかった。5a層を掘削すると、トレンチの北側に第4面の包含層である5b層が、T.P.+1.4m前後に高まり状に残った状態で検出された(図75)。これは、A地区の河川1に並行する同時期の河川によって削られたものであり、その河川の肩に相当するものと思われる。

10Cトレンチの4層掘削後の状況は、T.P.+1.2mから1.8mにおいて砂層の堆積を検出した。トレンチ北端からX=-149,590付近までは、T.P.+1.8m付近においてはほぼ平坦な地形を呈しており、これより南側では砂層は緩やかな傾斜をもって下っていく。X=-149,600以南では流水砂に相当する砂層は全く検出されず、包含層である

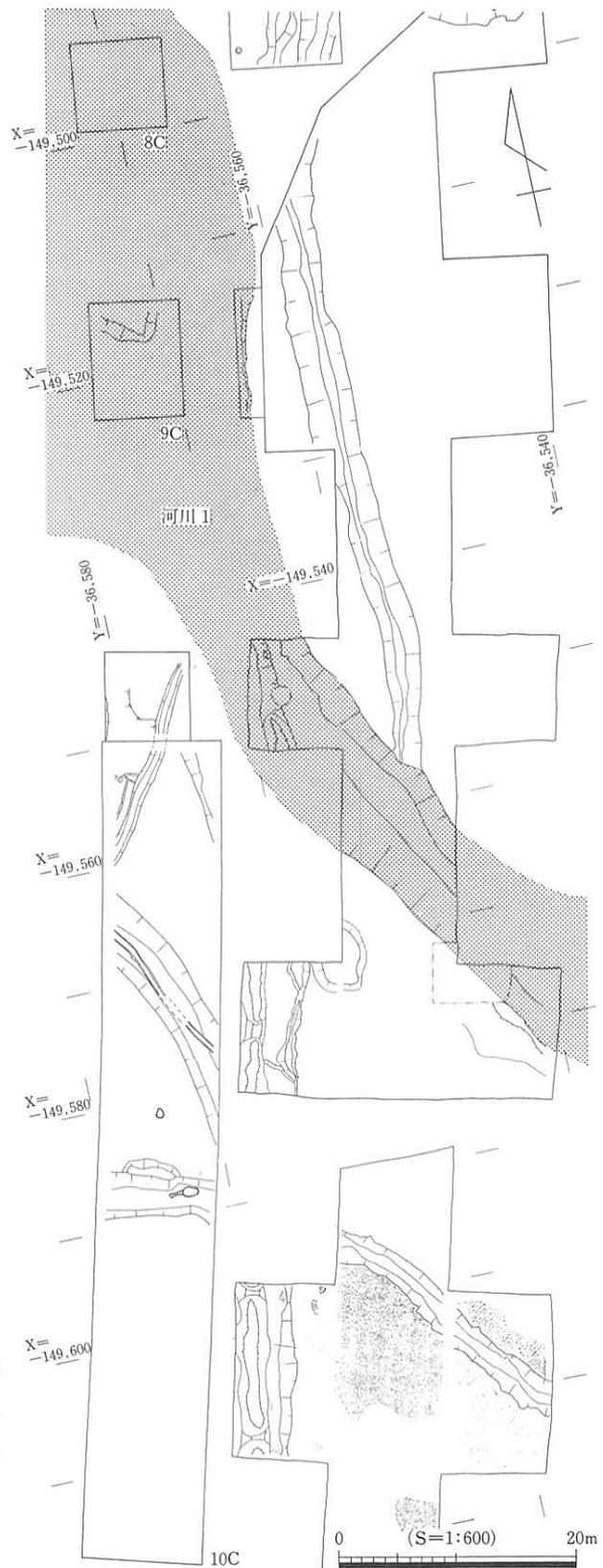


図74 C地区第3面 遺構全体図

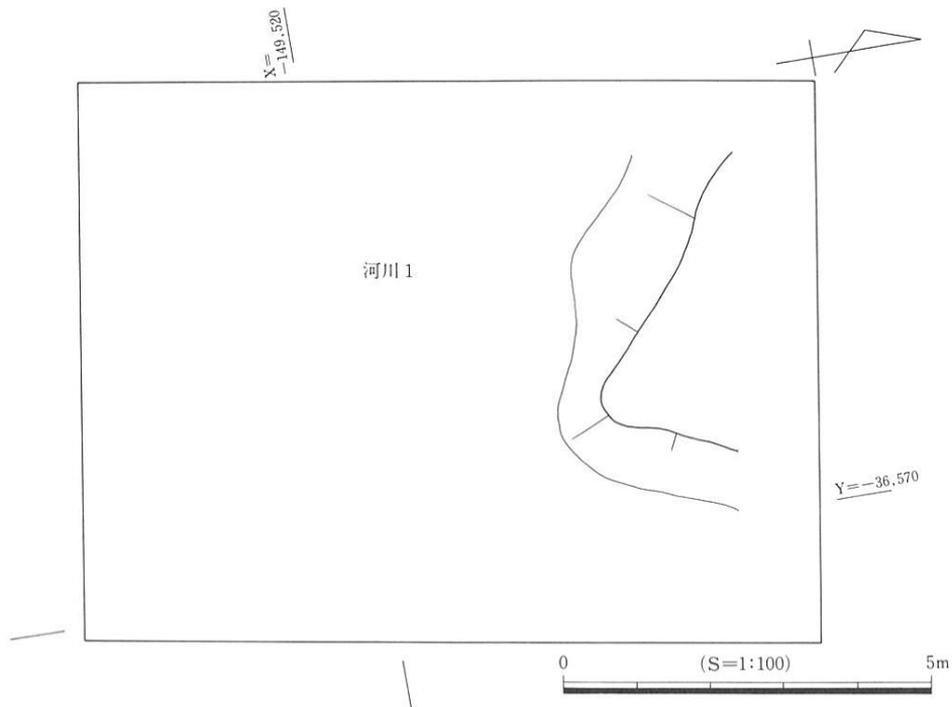


図75 9Cトレンチ第3b面 平面

5b層があらわれている。

遺構は流水砂層の上面と、中層に検出されている（図76）。遺構としては溝が数条と土坑がみられる。

流水砂層の上面である第3a面は、 $X = -149,590$ より北側部分において同層がやや土壌化した粘質土が検出されており、標高はT.P.+1.8mを測る。遺構としては、小規模な溝2条と土坑が認められる。これらの遺構は遺構面全体に散在しており、全体としての様相は不明である。

溝8（図版34-2）はトレンチ北側に位置し、幅約1.3m、長さ約18mの範囲において検出された。深さは約30cmであり、南西から北東方向にのびている。

溝9（図版34-1）は溝8の南側に位置し、幅約55cm、長さ約13mの範囲において検出された。深さ約20cmを測り、南東から北西方向にのびている。溝の北端は溝8にほぼ直交する形を呈しているものの、これらの前後関係は不明である。

土坑は数基検出されており、位置は溝8の北側と溝9の南側に分かれている。

土坑31・33・34は、直径1.0m前後の楕円形を呈する土坑であり、深さは約20cmを測る。

遺物はいずれの遺構からも出土していない。

5a層に相当する流水砂層を約20cm掘削した後、上層とは異なる別の砂層の堆積を検出した。第3b面はT.P.+1.5m前後において、やや土壌化した平坦面を第3a面とほぼ同様の範囲において確認した（図版35-2）。遺構としては、溝がみられるのみである。

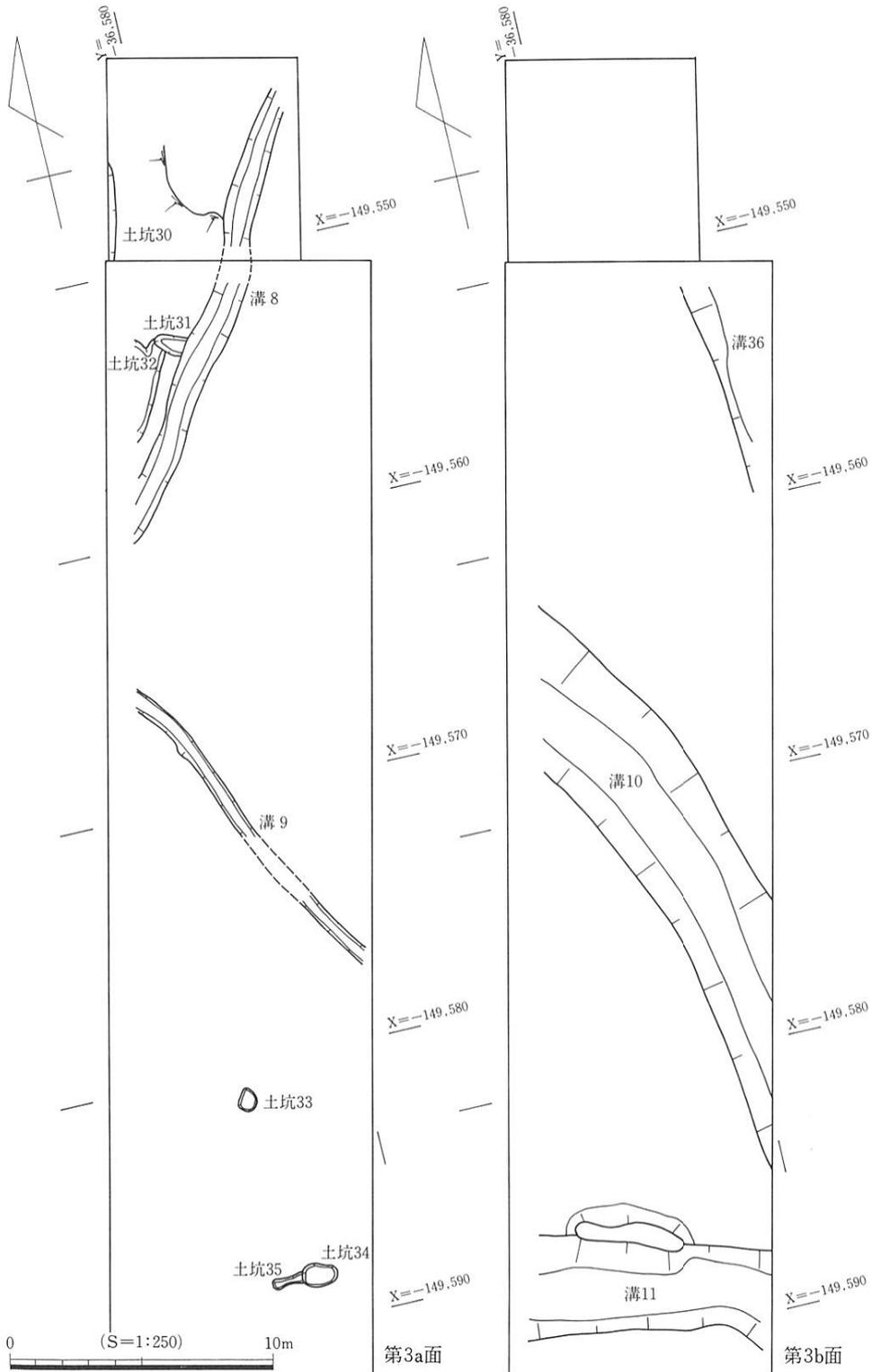


図76 10Cトレンチ北側第3 a・3 b面 平面

溝10はX=-149,560からX=-149,585の範囲において、長さ約15mを測り、幅約4.0m、深さ約70cmを測り、南東から北西に向ってのびている。

溝11はトレンチ中央よりやや北寄りのX=-149,585からX=-149,590の範囲に、東西方向にのびる形で検出された。幅約3.0m、深さ約60cmを測る。北側の肩の中央部に、砂層の盛り上がり部分が見られた。規模は南北約2.0m、東西約4.5mを測る。自然に形成された堤防状の遺構と推測される。

遺構から出土した遺物はほとんどみられず、図化できたものとしては、図73-343に示す土器がある。体部外面に粗いハケを施す小型の壺あるいは甕と思われる土器で、ほぼ全形がうかがえるまでに復原できるものである。

4. 第4面

(弥生時代中期末から後期初頭)

第4面は6層を基盤層として遺構が形成されており、5b層はその包含層である。ほぼ調査区の全域で確認され、遺構および遺物がまわって検出されている。

(1) I地区 (図77)

弥生時代後期に堆積した河川2による砂層を除去した状況は、トレンチ全域においてシルト質を含む粘質細砂の堆積を検出した。これは第4面包含層の5b層であり、この下層

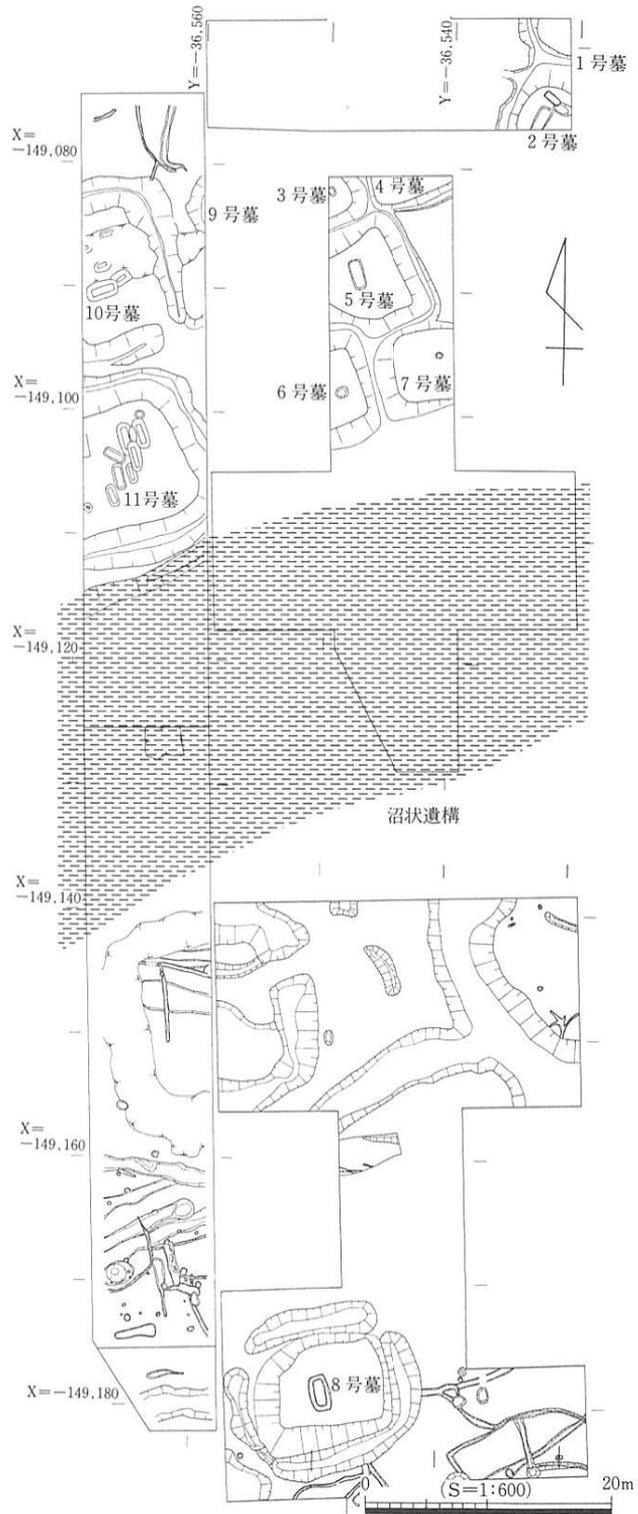


図77 I地区第4面 遺構全体図

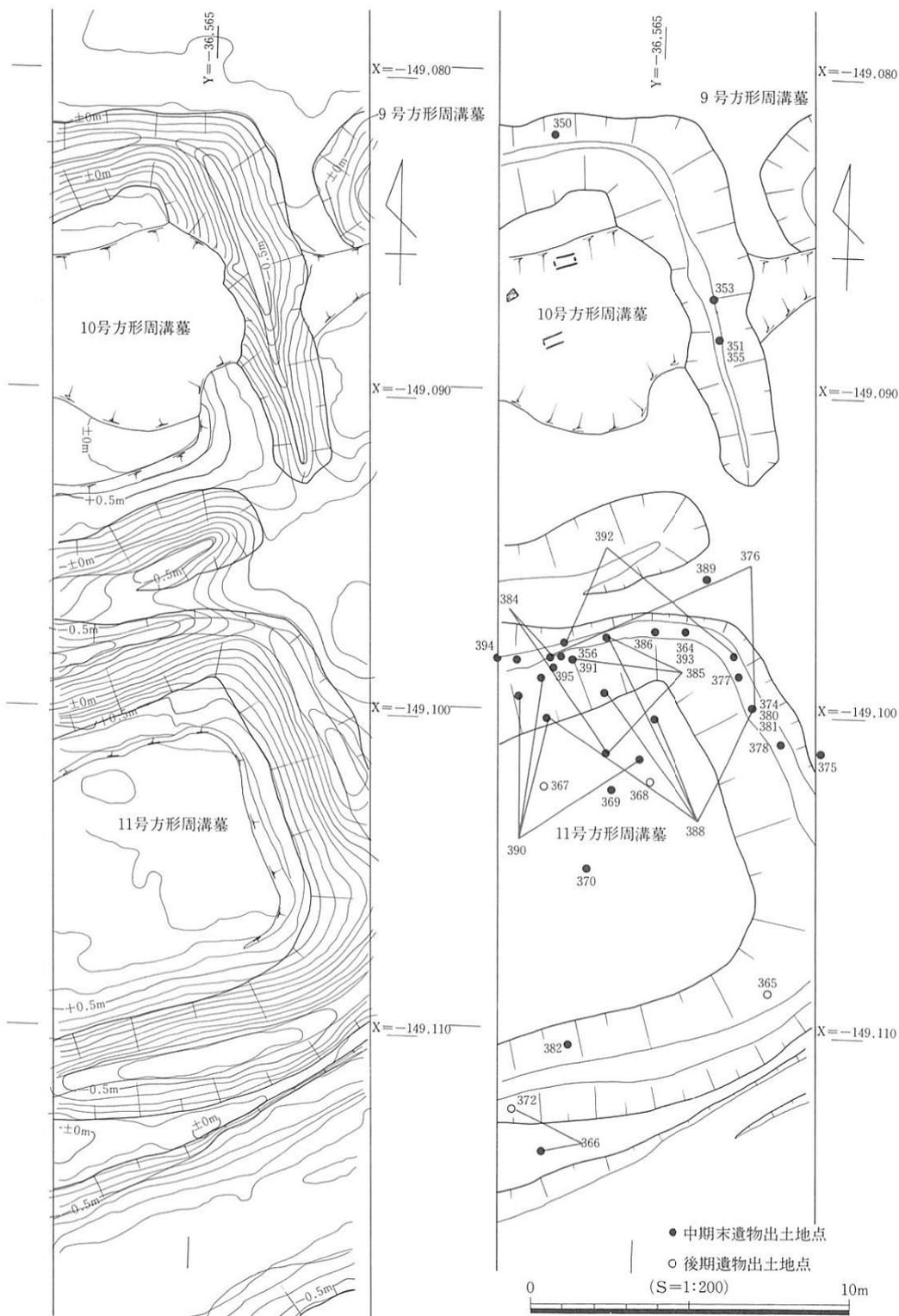


图78 3 I トレンチ第4面 10・11号方形周溝墓墳丘測量図, 遺物出土地点

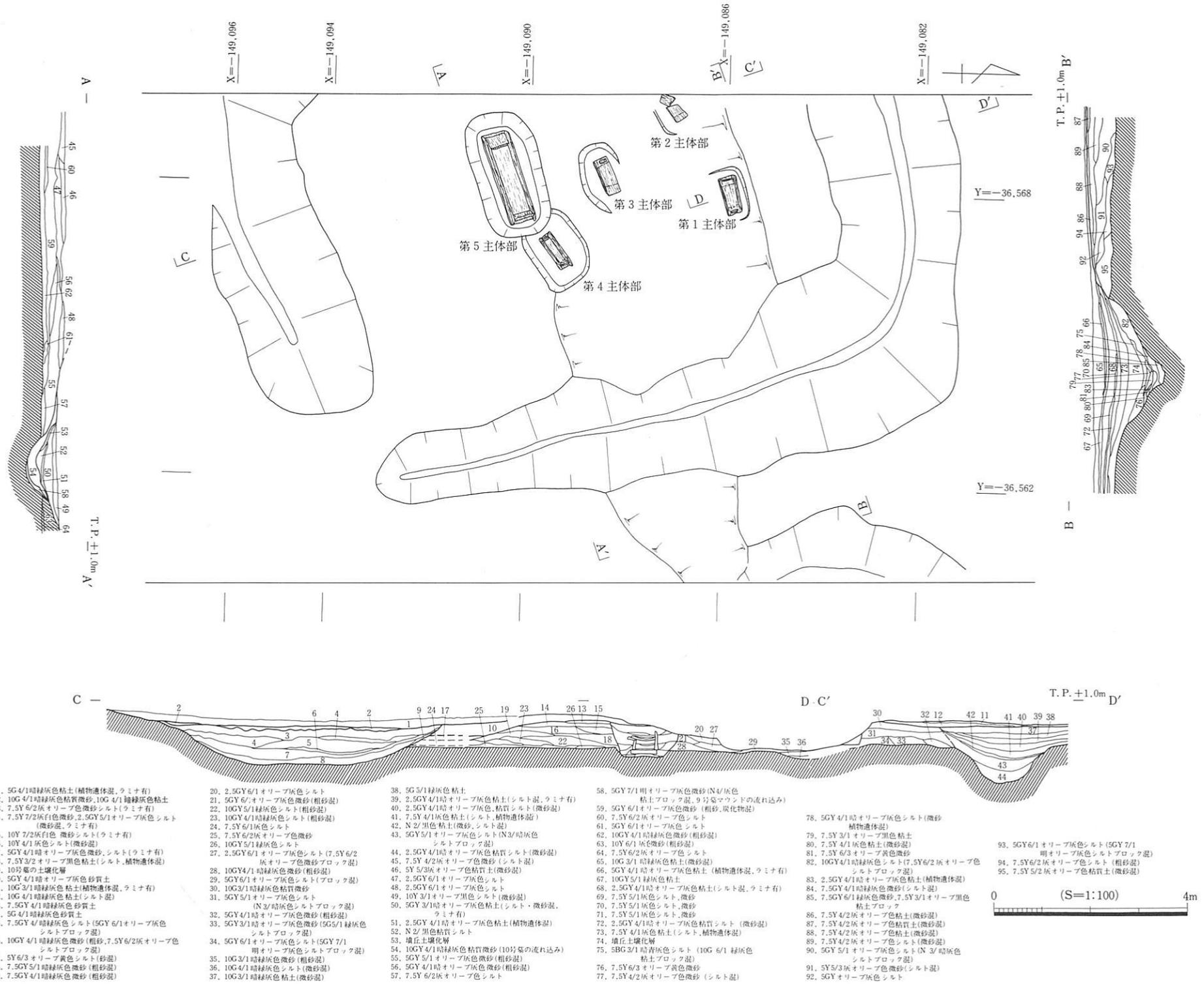


図79 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓主体部検出状況, 填丘断面

に第4面の基盤層である6層が検出された。6層は均質な微砂の層であり、 $X=-149,110$ 以北でのみ確認されている。これより南側では6層の堆積は認められず、さらに下層の流水堆積砂が現われており、遺構はこの層の上面に形成されている。このように、遺構は5b層である包含層中に形成されたものと、6層および7層上面にかかって形成されたものがあり、短期間のうちに複数の遺構面の存在したことが明らかとなった。

6層上面の標高はT.P. -1.2m から $+1.0\text{m}$ と、流路や方形周溝墓によって変化に富む地形となっている。遺構としては、方形周溝墓・沼状遺構・溝・土坑・ピットがある。

方形周溝墓はトレンチ北側に位置し、計3基が検出された。既往の調査による名称を踏襲し、9から11号方形周溝墓とした。これらの方形周溝墓の基盤層は5b層上面であり、10・11号方形

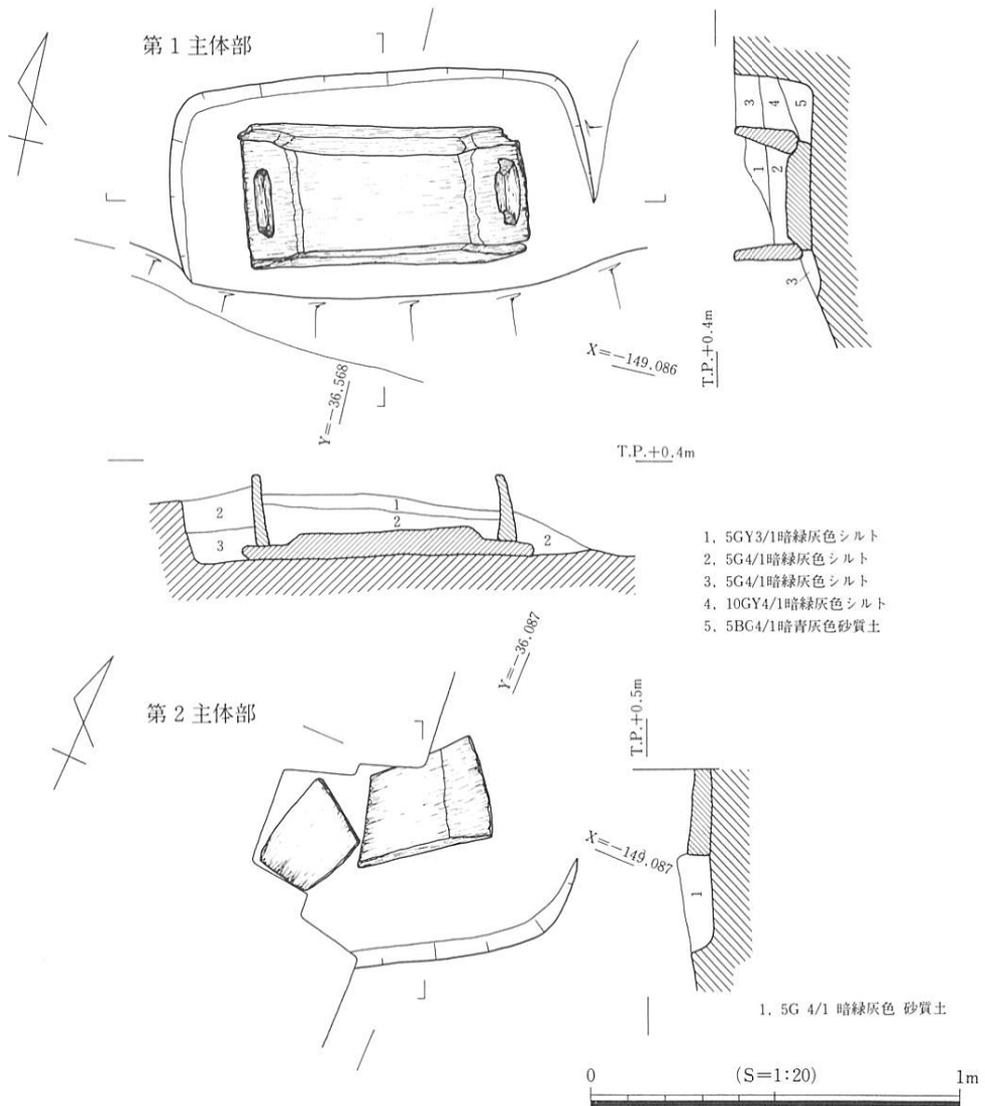


図80 3 | トレンチ第4面 10号方形周溝墓第1・2主体部平面、断面

周溝墓は第4面のうちで最も後出する遺構であることが明らかとなった。なお、方形周溝墓下層の遺構面からは、いずれも明確な遺構は検出されなかった。

トレンチ南半に関しては、5a層である中粒砂層を掘削後、シルト質を多く含む土壌化した砂層が全面に検出された。この土壌化層は5b層であり、弥生時代中期末から後期初頭の遺物を多く含む、いわゆる既往の調査における当該期の包含層に対応している。

9号方形周溝墓は $Y=-36,562$ 以東の $X=-149,080$ から $X=-149,093$ の範囲において検出した。墳丘と周溝の北西隅を確認したのみであり、全形は不明である。既往の調査における弥生時代中期の3号方形周溝墓の西側に位置しており、3号方形周溝墓の西端に相当する可能性もある。

10号方形周溝墓は9号方形周溝墓の西側に位置し、 $X=-149,080$ から $X=-149,096$ の範囲において検出された(図78・79、図版36)。墳丘主軸は東北東を示し、 $N-13.5^{\circ}-W$ の角度を有する。墳丘は西側の約1/3が鋼矢板によって切断されているため、全形は不明である。ただし、墳丘の南側の鋼矢板際、 $X=-149,095$ 、 $Y=-36,569$ 付近において墳丘南隅を確認している。

周溝を含めた規模は南北約15m、東西は現存で約9.5mである。墳丘部の規模は周溝底面において南北約13m、東西は現存で約8mであり、盛土部分の規模は南北約11m、東西は現存で約7.5mである。墳丘上面の平坦部は南北約9.5m、東西約7.5mであり、墳丘上面の形態から、南北方向に長軸をもつ長方形を呈するものと思われる。墳丘の高さは、上面が古墳時代前期の河川1に削平されており、周溝底面より現存で約1.3mを測る。盛土部分のみの高さは約0.7mである。

周溝は北・東・南側の3方向に確認された。北側周溝は幅約2.0m、深さ約0.65mを測る。東側周溝は北側周溝との接点は幅約2.5mであり、南に向かって縮小する。深さも同様に北側では約0.9mを測り、南に向かって上昇している。南側周溝は幅約1.5m、深さ約0.4mであり、東側周溝と同様、東に向かって収束している。墳丘部南東隅で周溝は途切れており、陸橋部として利用されたものと考えられる。

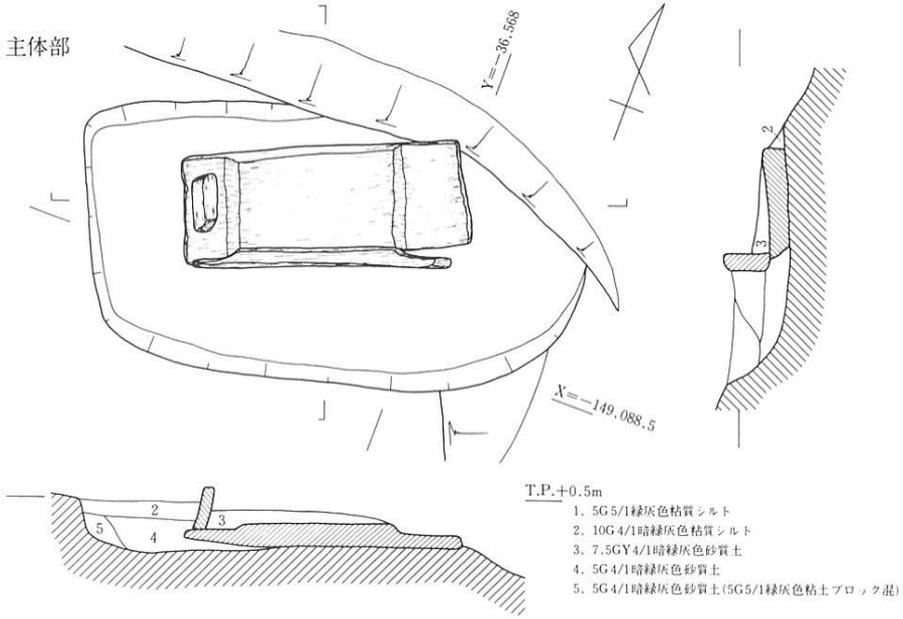
埋葬施設は河川1によって攪乱されたものを含め、計5基が検出された。北側より第1から5主体部とする(図79)。

第1主体部から第4主体部は、小児用の木棺と思われる小型のものである。このうちの第1から3主体部は古墳時代前期の河川1によって攪乱されており、天井板などの一部を流失している。

第1主体部は墳丘の北側 $X=-149,086$ 、 $Y=-36,568$ に位置する(図80、図版37-1)。墳丘主軸に並行しており、頭位は不明である。墓壇の南側を河川1に削られており、規模は現存で全長約1.25m、幅約0.6m、深さ約0.22mである。木棺は天井板を流失しているものの、それ以外の残存状態はかなり良好である。木棺部の規模は長さ約78cm、幅約37cm、高さ約21cmである。棺内には細砂が堆積しており、遺物や人骨は検出されていない。

第2主体部は墳丘中央やや北の $X=-149,087$ 、 $Y=-36,569$ に位置する(図80、図版37-2)。河川1の削平を受け、また墓壇の西側約1/2を鋼矢板によって切られており、木棺は原位置を保っていない。かろうじて底板を検出したのみであり、遺物や人骨はみられない。

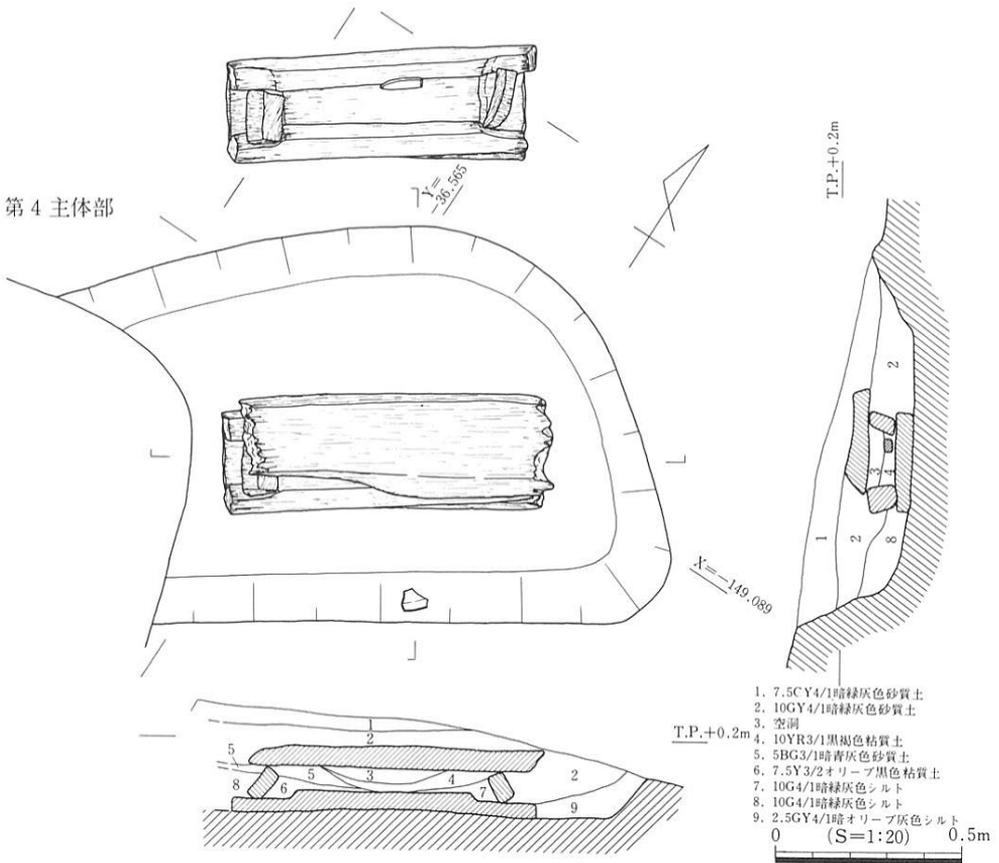
第3主体部



T.P.+0.5m

1. 5G5/1緑灰色粘質シルト
2. 10G4/1暗緑灰色粘質シルト
3. 7.5GY4/1暗緑灰色砂質土
4. 5G4/1暗緑灰色砂質土
5. 5G4/1暗緑灰色砂質土(5G5/1緑灰色粘土ブロック混)

第4主体部



T.P.+0.2m

T.P.+0.2m

1. 7.5C Y4/1暗緑灰色砂質土
2. 10GY4/1暗緑灰色砂質土
3. 空洞
4. 10YR3/1黒褐色粘質土
5. 5BG3/1暗青灰色砂質土
6. 7.5Y3/2オリブ黒色粘質土
7. 10G4/1暗緑灰色シルト
8. 10G4/1暗緑灰色シルト
9. 2.5GY4/1暗オリブ灰色シルト

0 (S=1:20) 0.5m

図81 3 | トレンチ第4面 10号方形周溝墓第3・4主体部平面、断面

第3主体部は墳丘のほぼ中央 $X=-149,089$ 、 $Y=-36,568$ に位置する(図81、図版38-2)。河川1の削平を受けており、上半および北側を失っている。墓壇の規模は現存で長さ約1.34m、幅約0.76m、深さ約0.19mを測る。木棺は天井板および北側板、西小口板を流失しているものの、残存状況は比較的良好である。木棺部の規模は長さ約76cm、幅約23cm、高さ約18cmである。棺内は河川による攪乱のため、何も検出されていない。

第4主体部は墳丘中央やや南東の $X=-149,090$ 、 $Y=-36,567$ に位置する(図81、図版39)。

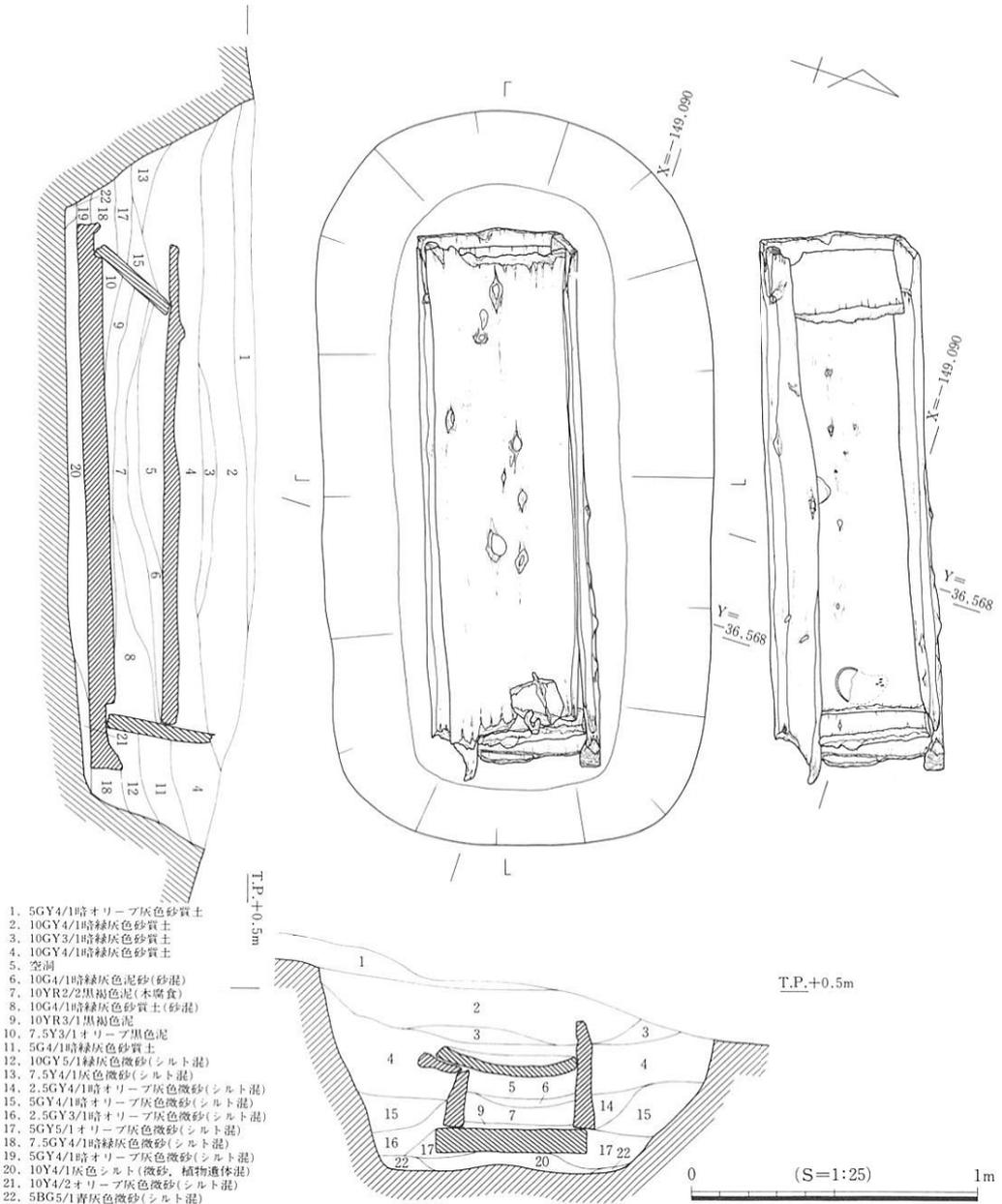


図82 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓第5主体部平面、断面

墓壇の西側を第5主体部に切られており、全形は不明である。墓壇の規模は現存で約1.65m、幅約1.07m、深さ約0.31mである。木棺の残存状況はかなり良好である。木棺部の規模は長さ約89cm、幅約31cm、高さ約18cmである。棺内にはシルト質を含む粘土が堆積しており、天井板との隙間に種子や植物遺体を検出した。内包寸法は長さ約62cm、幅約14cm、高さ約7cmを測る。

種子はモモであり、数点出土している。植物遺体は木棺埋納後に侵入した木根と思われる。

また、植物遺体の下、木棺中央やや北寄りの部分から石斧が1点出土している。石斧は長さ約11cm、幅約3.5cm、厚さ約2cmの柱状片刃石斧である。

第5主体部は墳丘中央やや南のX=-149,091、Y=-36,568に位置し、第4主体部を切る形で西側に隣接している(図82、図版40・41)。墓壇の規模は全長約2.6m、幅約1.35m、深さ約0.75

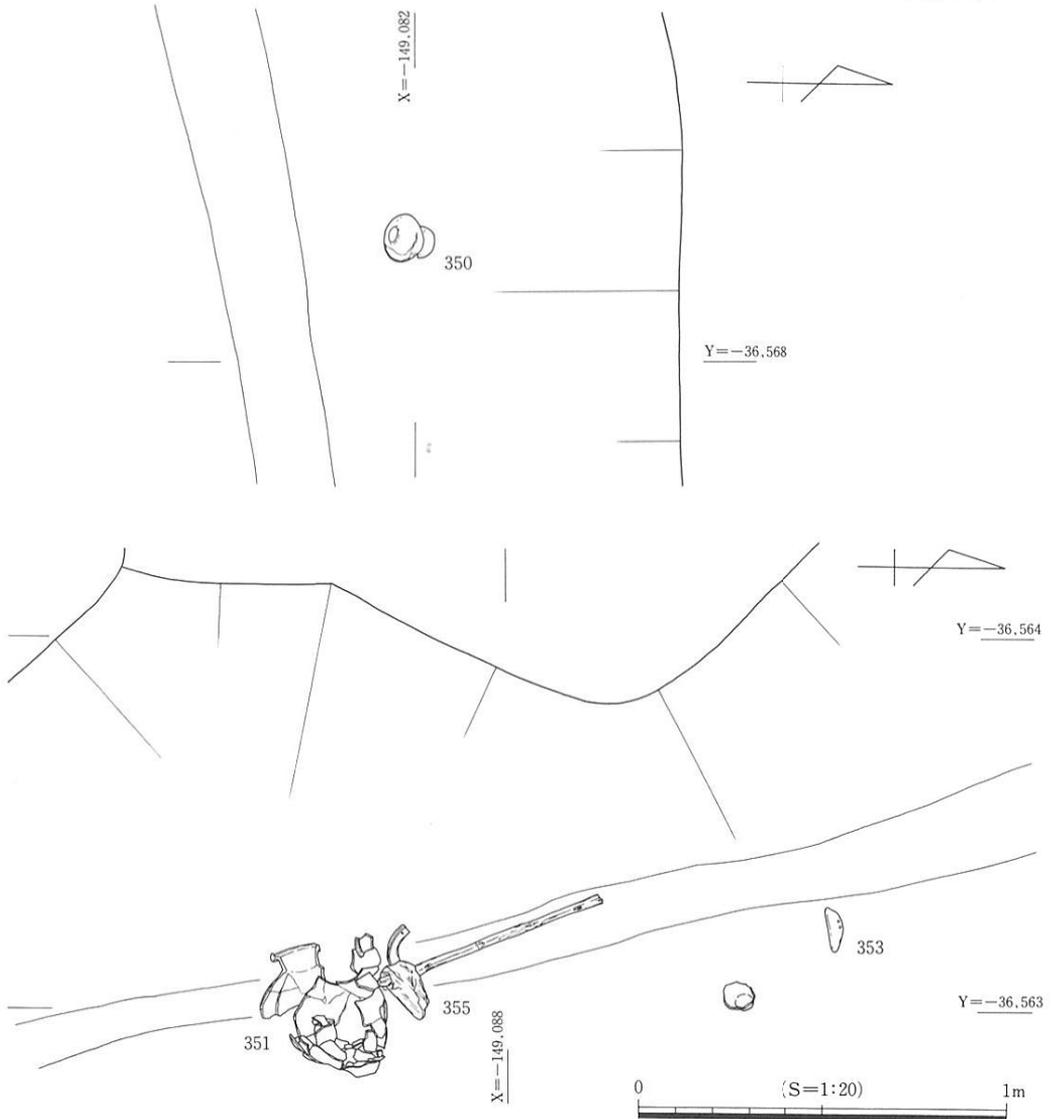


図83 3 I トレンチ第4面 10号方形周溝墓北・東側周溝遺物出土状況

mを測る。木棺の残存状態は良好であり、木棺部の規模は長さ約1.9m、幅約0.55m、高さ約0.45mである。木棺内にはシルト質を多く含む粘土が堆積しており、底面より頭蓋骨の痕跡と歯牙が検出された。頭位は北東である。

遺物は周溝から出土したものが大半であり、量はi1号方形周溝墓と比較して非常に少ない。北・東側周溝の底部から壺・水差・高杯、石庖丁・組合せ式木製鍬などが出土している（図版42）。

10号方形周溝墓第4主体部からは、348の大型鉢口縁部破片が出土した。口縁部外面には板状工具による刻目紋が施され、その下段に波状紋の一部が確認できる。土器は、図81下段に示すように墓壇の南側面に貼り付くように出土し、木棺を埋置する際に混入したものと考えられる。

10号方形周溝墓の周溝内からは図84-349から351に示す土器3点と、図85-353に示す石器1点、および355の木器1点が出土した。土器には北側周溝より口縁を下にして出土した350の広口壺、東側周溝からは破片となって出土した349の水差、木器とともに出土した351の広口壺がある。これらの土器は二次焼成を受け、特に2点の壺には煤が厚く付着している。また、350と351の口縁部の一部には打ち欠きが認められ、この部分にも煤が及んでいる。

石器には353の緑色片岩製半月形内弯刃の石庖丁1点がみられる。東側周溝より完形で出土し、身と刃部の光沢に相違があることから、使用と再研磨により、内弯するに至ったと考えられる。

木器には355に示す泥除装着装置のない直柄平鍬が1点着柄したままの状態出土した。鍬身は刃縁が腐朽し原形を損なうが、平面角丸三角形を呈し、広鍬a式に分類されるものである。上位にはA3型隆起を作りだし、その中央部には円形の柄穴が穿たれ、その傾きから、柄との着柄角度は70°と計測される。柄は断面円形の棒材で、長さ74cmまでが遺存し、身との結合法は、柄の先端部を柄穴よりも太めに削り出し、それを手元から差し込んで組み合わせる固定法1とされる構造である。なお、図上では柄と身との結合部に段が形成されているように図化しているが、これは結合部以外の柄の部分が土中において腐朽し、二次的に形成されたもので、当初よりの加工ではないことを断っておく。使用される樹種は、身、柄ともにアカガシ亜属と鑑定される。

10号方形周溝墓第4主体部木棺内からは、緑色片岩系の石材を使用した柱状片刃石斧（図85-354）が1点出土した。その位置から推定した場合、柄を取り外して納められたことが察せられ、また、刃部には微細な刃潰れが観察できることから、実際に使用していたものを納めたものと考えられる。

近畿地方の弥生時代中期の埋葬施設内から石鍬以外の人工遺物が確認されることは非常にまれで、今回、蓋までが完存し、二次的な流入が考えられない状態の木棺内から、わざと柄を取り外した石斧が出土したことは、石鍬とは異なる意味で、すなわちこの石斧が「埋納品」として取り扱われたことを想定させ、この点において本例は、極めて貴重な成果を得ることができたといえる。

11号方形周溝墓は10号方形周溝墓の南に隣接したX=-149,097からX=-149,113の範囲において検出された（図78・86、図版43~45）。墳丘主軸は10号方形周溝墓とほぼ平行しており、N-20°-Wの角度を有する。墳丘の西側が鋼矢板によって切断されており、全形は不明である。

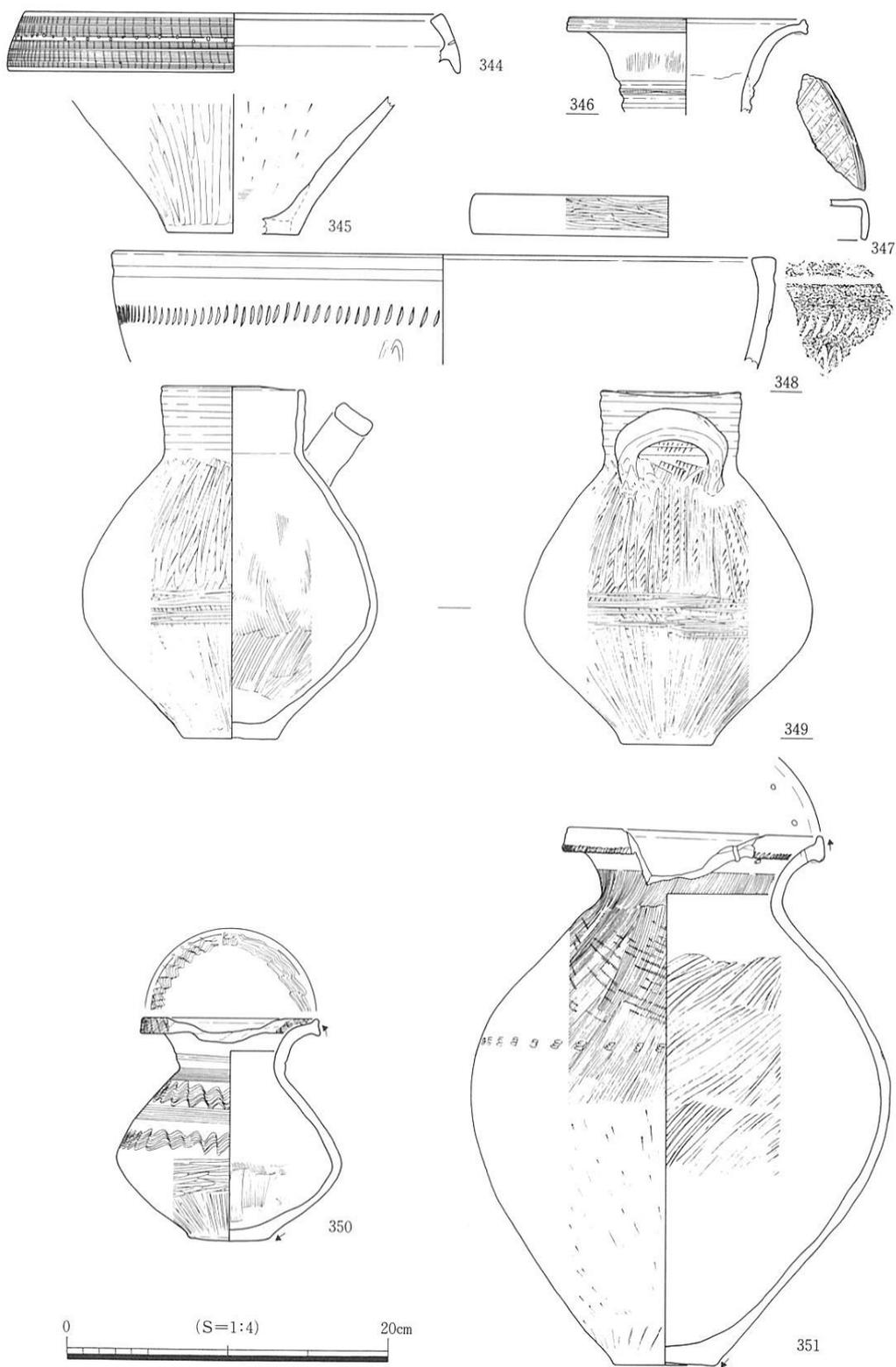


図84 3 | トレンチ第4面 10号方形周溝墓出土遺物(1)

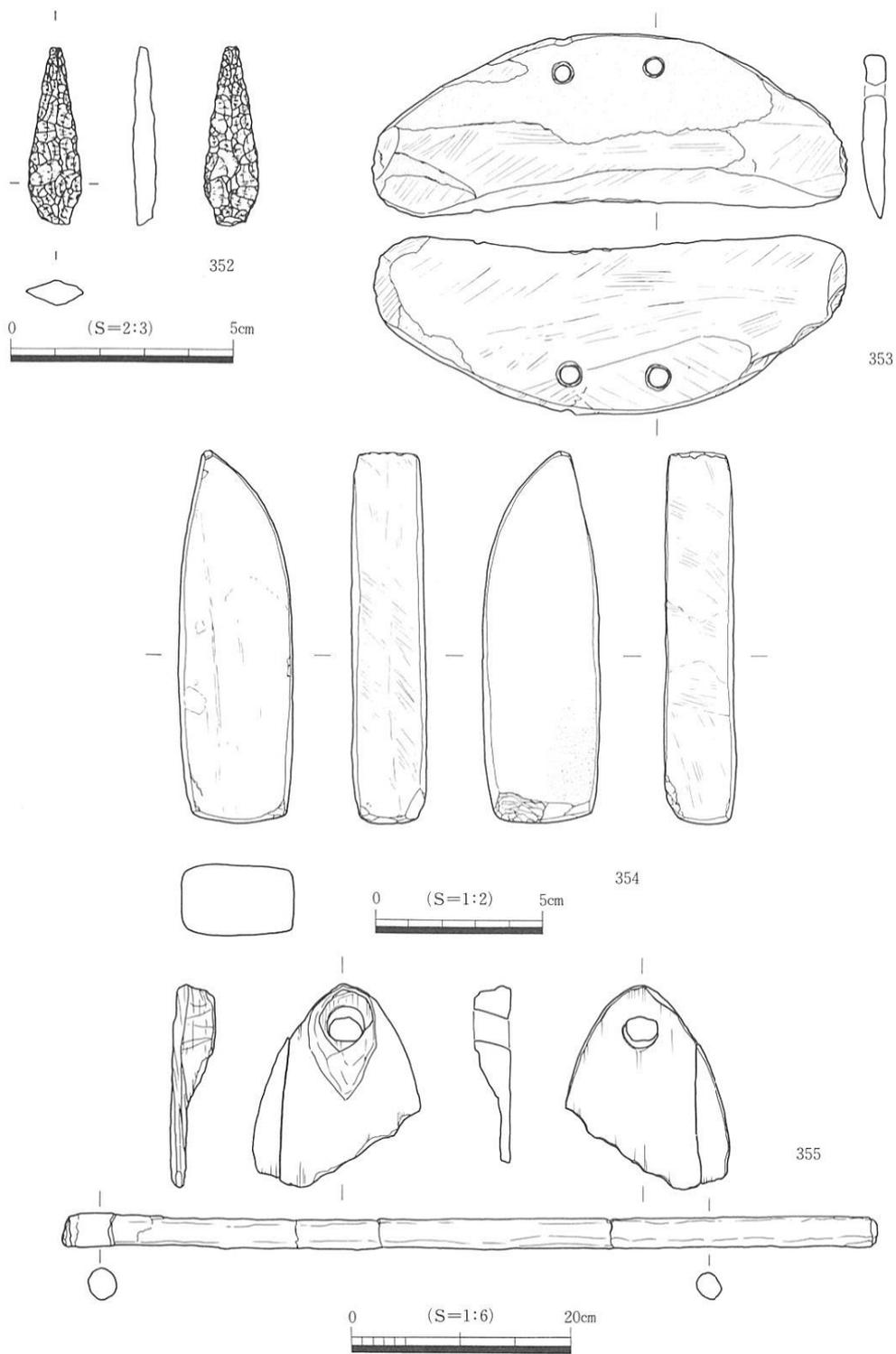


図85 3 | トレンチ第4面 10号方形周溝墓出土遺物(2)

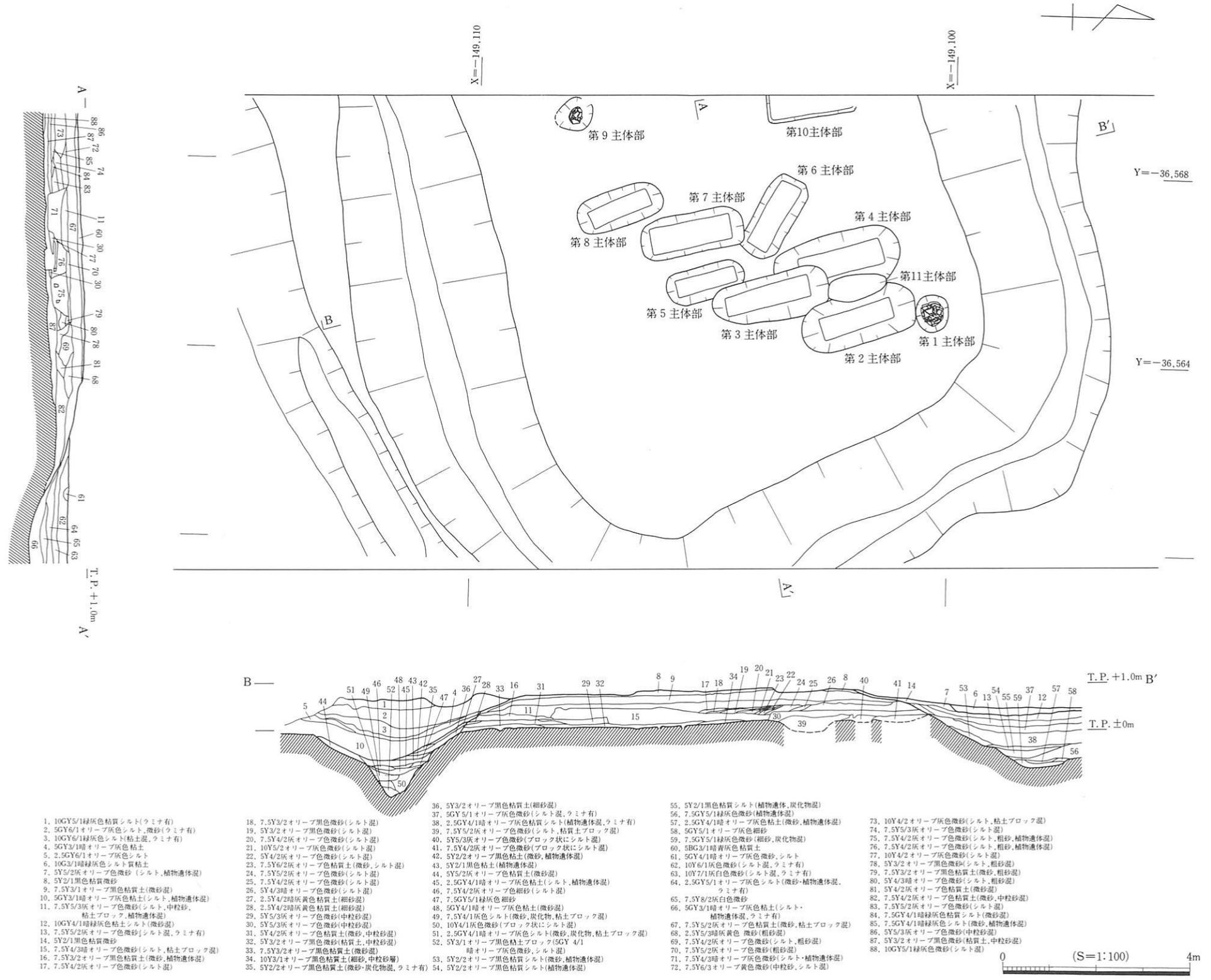


図86 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓主体部検出状況、填丘断面

周溝を含めた規模は南北約16m、東西は現存で約13mを測る。墳丘部の規模は周溝底面で南北約12.5m、東西は現存で約12mであり、盛土部分のみの規模は南北約10.5m、東西は現存で約10.5mである。墳丘上面の平坦部の規模は南北約9.0m、東西は現存で約9.5mであり、平面形態は東西方向に長軸をもつ長方形を呈するものと思われる。墳丘の高さは周溝底面より約2.2m、盛土部分の高さは約0.8mを測る。

周溝は北西から南西にかけてほぼ連続して検出された。幅は約3.0m、深さ約1.3mを測る。X=-149,106、Y=-36,560付近は等高線が南東に流れる状況を示しており、陸橋部となる可能性が考えられる（図版54）。

埋葬施設は計11基が検出された（図86）。木棺は墳丘中央部に集中しており、相互に切り合っ

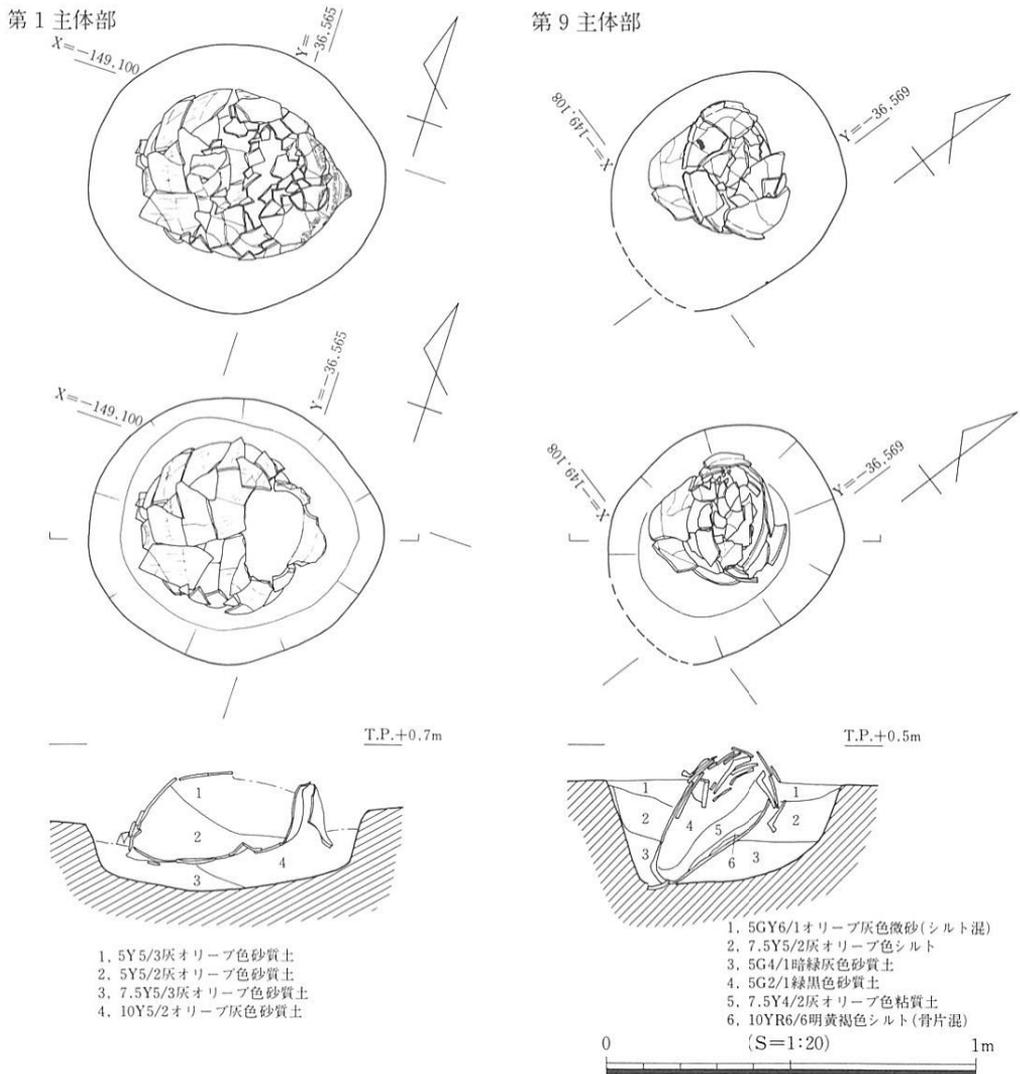
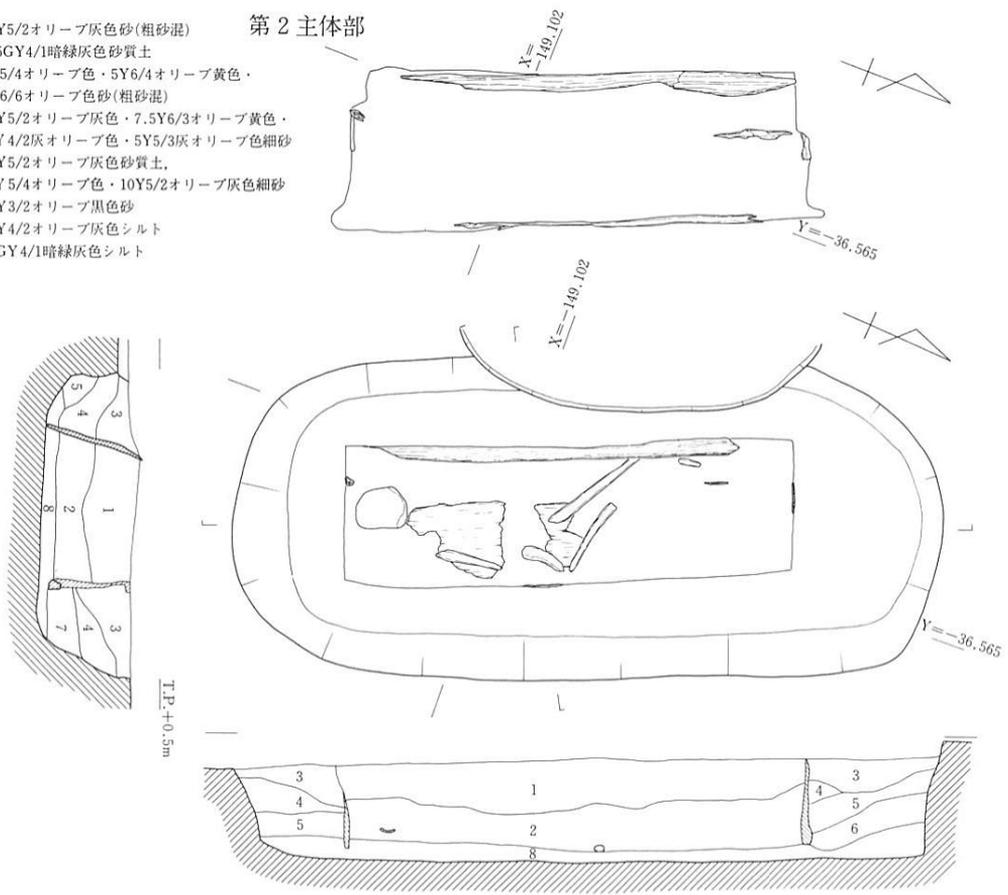


図87 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第1・9主体部平面、断面

1. 10Y5/2オリーブ灰色砂(粗砂混)
2. 7.5GY4/1暗緑灰色砂質土
3. 5Y5/4オリーブ色・5Y6/4オリーブ黄色・5Y6/6オリーブ色砂(粗砂混)
4. 10Y5/2オリーブ灰色・7.5Y6/3オリーブ黄色・5Y4/2灰オリーブ色・5Y5/3灰オリーブ色細砂
5. 10Y5/2オリーブ灰色砂質土, 5Y5/4オリーブ色・10Y5/2オリーブ灰色細砂
6. 10Y3/2オリーブ黒色砂
7. 10Y4/2オリーブ灰色シルト
8. 10GY4/1暗緑灰色シルト

第2主体部



第3主体部

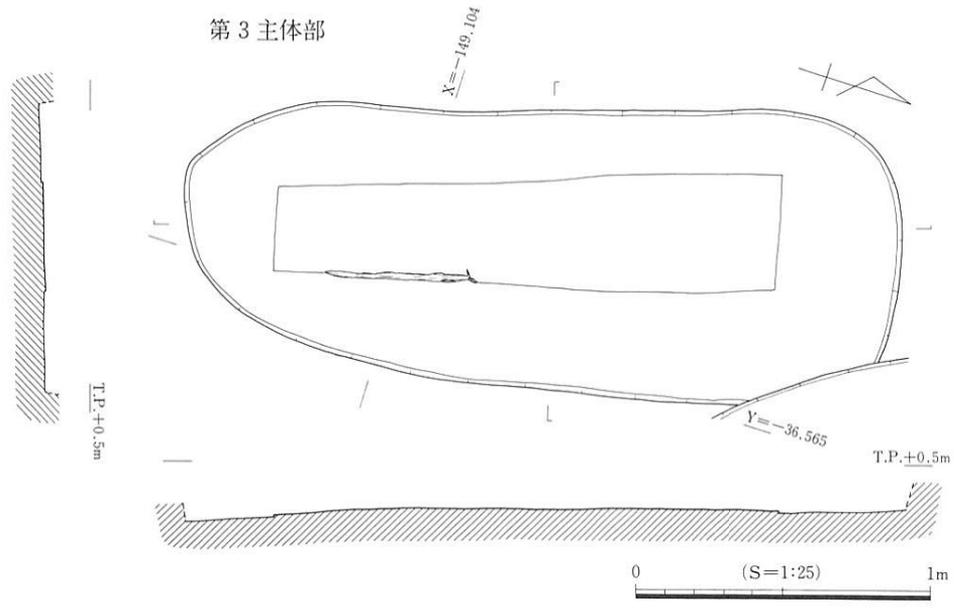


図88 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第2・3主体部平面, 断面

ている。土器棺は墳丘平坦部の北東と南西縁辺にみられる。

第1主体部は土器棺であり、墳丘平坦部の北東隅に位置する（図87、図版46-1・2）。墓壇は短径約70cm、長径約80cm、深さ約30cmの円形を呈する。土器棺部は幅約45cm、長さ約60cm、高さ約25cmを測り、頸部を打ち欠いた壺の上に、鉢を蓋として被せている。ほぼ真東に開口する。棺内は砂が堆積しており、人骨や遺物は検出されなかった。

第2主体部は第1主体部の南側、 $X=-149,102$ 、 $Y=-36,565$ に位置する（図88、図版46-3）。墓壇は長さ約2.4m、幅約1.0m、深さ約0.4mの隅丸方形である。木棺部の規模は、長さ約1.7m、幅約0.55m、高さ約0.3mを測る。木棺は側板と小口板を残してほとんど腐朽しており、残存状態はよくない。棺内は砂が堆積しており、底面より頭蓋骨と大腿骨の痕跡を検出したのみである。頭位は南南西である。

第3主体部は第2主体部の南、 $X=-149,104$ 、 $Y=-36,566$ に位置する（図88、図版46-4）。墓壇は長さ約2.4m、幅約1mの隅丸方形を呈する。墓壇の北東隅を第2主体部に切られており、これよりやや先行すると考えられる。木棺は側板の一部を検出し、底板は痕跡を確認したのみである。木棺部の規模は、底板の痕跡から、長さ約1.8m、幅約0.45mと推測される。人骨や遺物はみられない。

第4主体部は第1主体部の西側、 $X=-149,0102$ 、 $Y=-36,566$ に位置する（図89、図版47）。墓壇は長さ約2.4m、幅約1.2mの隅丸方形を呈する。上部を第3主体部と第11主体部に切られており、これらより先行する。木棺は痕跡を残すのみであり、底板の痕跡から、木棺部の規模は長さ約1.8m、幅約0.5mと推測される。棺内は砂が堆積しており、頭蓋骨と上腕骨、大腿骨などの一部を検出した。遺物はみられない。頭位は北北西である。

第5主体部は第3主体部の南西、 $X=-149,105$ 、 $Y=-36,565$ に位置する（図89、図版48-1）。墓壇の北東部を第3主体部に切られており、これより先行するものである。墓壇は長さ約1.7m、幅約0.7mの隅丸方形を呈する。木棺は痕跡を残すのみであり、底板の痕跡から、木棺部の規模は長さ約1.3m、幅約0.45mと推定される。人骨や遺物は全く検出されなかったため、頭位は不明である。

第6主体部は第3主体部の西側、 $X=-149,103$ 、 $Y=-36,567$ に位置する（図89、図版48-2）。墓壇の南西部を第7主体部に切られており、これより先行する。墓壇は長さ約1.85m、幅約0.8mの隅丸方形を呈する。木棺は底板の一部を残すのみであり、残存状態はよくない。木棺部の規模は底板の痕跡から、長さ約1.6m、幅約0.5mと推測される。頭蓋骨および大腿骨の一部を検出しており、頭位は南東と思われる。

第7主体部は第6主体部の南、 $X=-149,105$ 、 $Y=-36,566$ に位置する（図90、図版49-1）。墓壇は長さ約2.1m、幅約0.8mの隅丸方形を呈する。木棺は底板の痕跡と小口板の一部を確認するのみであり、残存状態はよくない。木棺部の規模は底板の痕跡から、長さ約1.75m、幅約0.5mと推測される。頭蓋骨、上腕骨、大腿骨などの一部を検出しており、頭位は北北西と思われる。

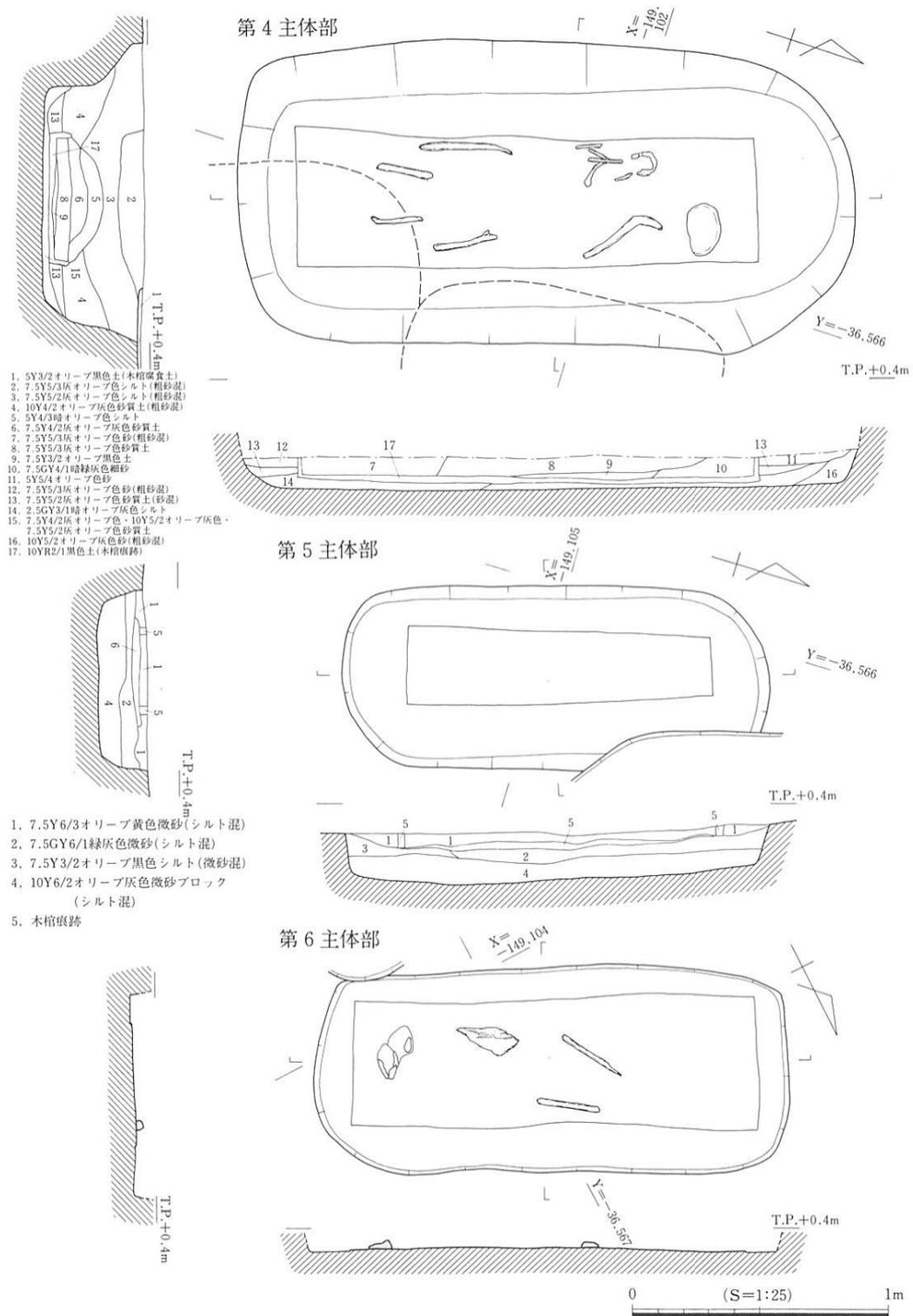
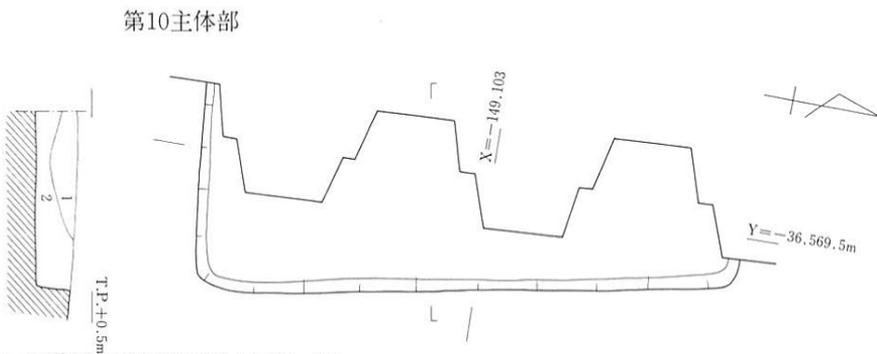
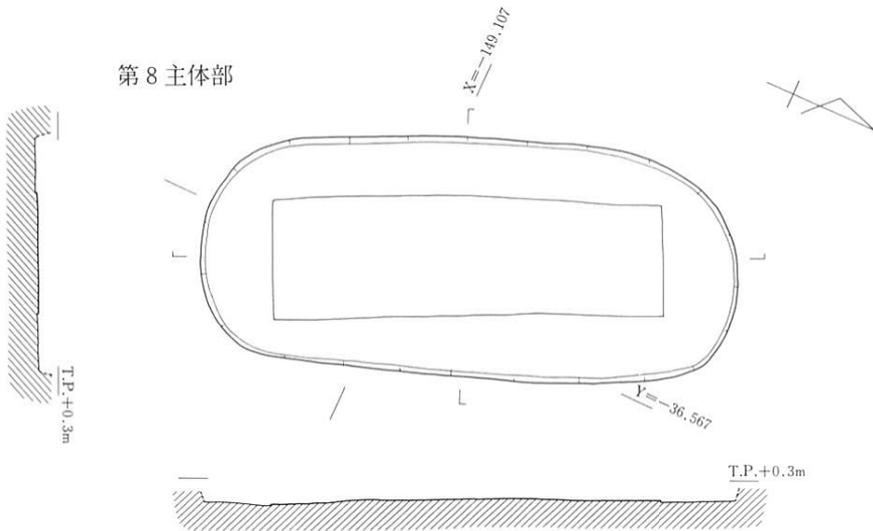
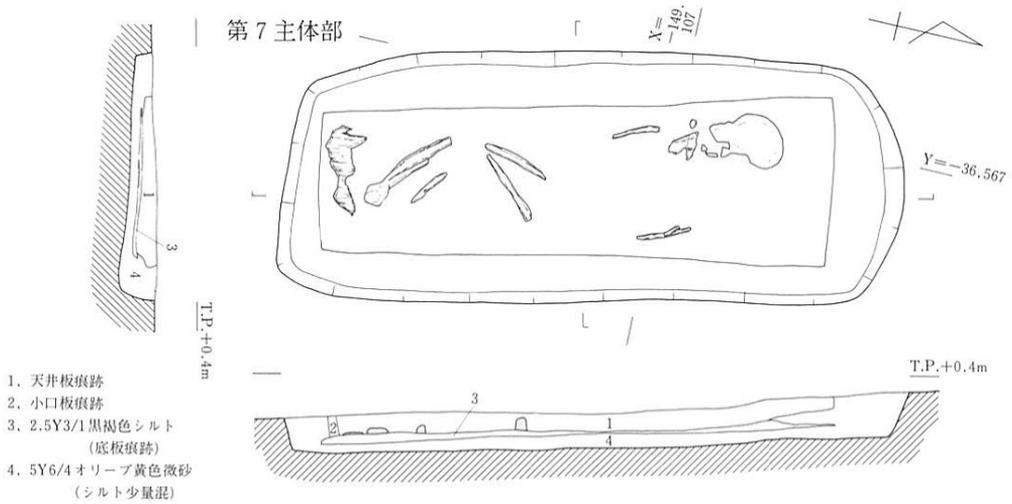


図89 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第4・5・6主体部平面、断面



1. 10Y5/2 オリーブ灰色砂質土(10G 6/1 緑灰色シルトブロック混)
2. 10Y4/2 オリーブ灰色砂質土(5BG 4/1 暗青灰色シルト混)

0 (S=1:25) 1m

図90 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第7・8・10主体部平面、断面

第8主体部は第7主体部の南西、 $X=-149,107$ 、 $Y=-36,567$ に位置する（図90、図版49-2）。墓壙の規模は長さ約1.8m、幅約0.8mの隅丸方形を呈する。木棺は底板の痕跡を確認するのみであった。木棺部の規模は痕跡から、長さ約1.3m、幅約0.4mと推測される。人骨や遺物は検出されなかった。

第9主体部は墳丘平坦面の南西、鋼矢板際の $X=-149,108$ 、 $Y=-36,569$ に位置する（図87、図版50）。墓壙は長径65cm、短径55cmの円形を呈する。土器棺部は長さ約45cm、幅約35cmを測る。墓壙内に甕を据えた後、鉢を蓋として被せて土器棺としている。棺内は砂が堆積しており、底部付近から有機質の痕跡と成人の歯牙を検出した。

第10主体部は墳丘平坦部の北西、 $X=-149,103$ 、 $Y=-36,569$ 付近に位置する（図90下）。西半を鋼矢板に切断されており、全形は不明である。墓壙は現存で長さ約1.3m、幅約0.4mを測り、長方形を呈する。木棺および人骨等は検出されなかった。

第11主体部は $X=-149,102$ 、 $Y=-36,566$ に位置し、第2から4主体部を切る形で検出された。

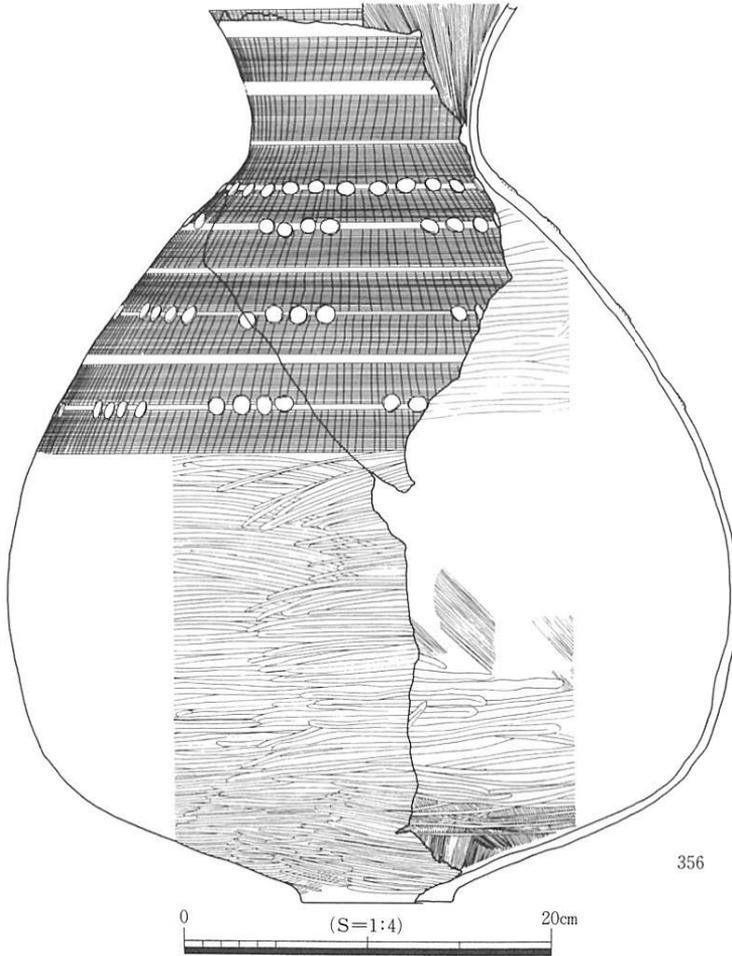
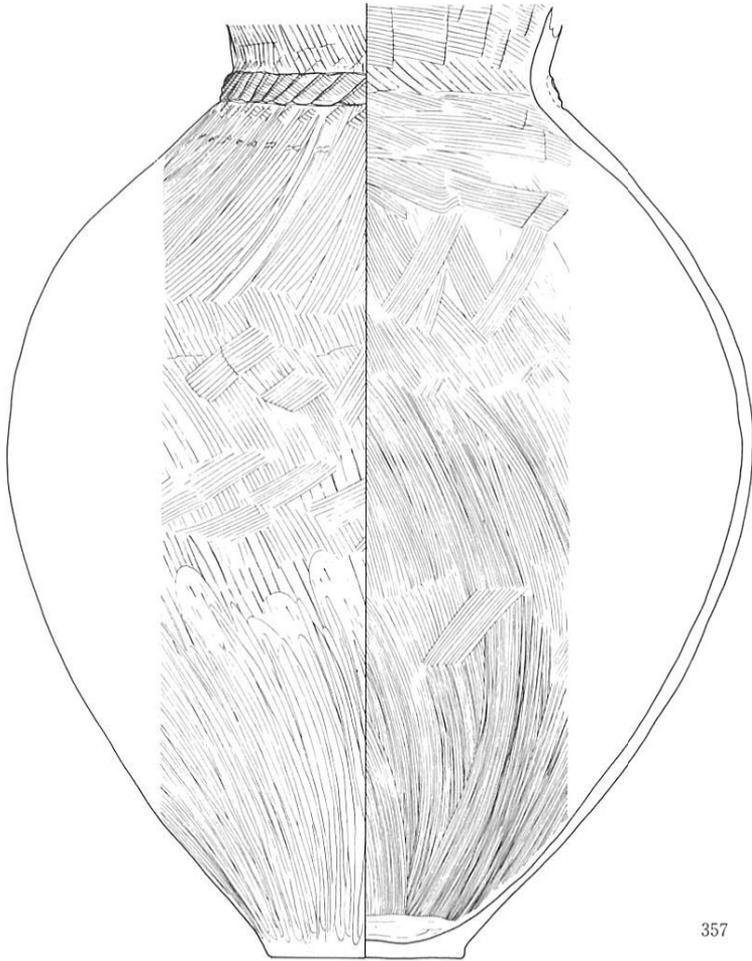
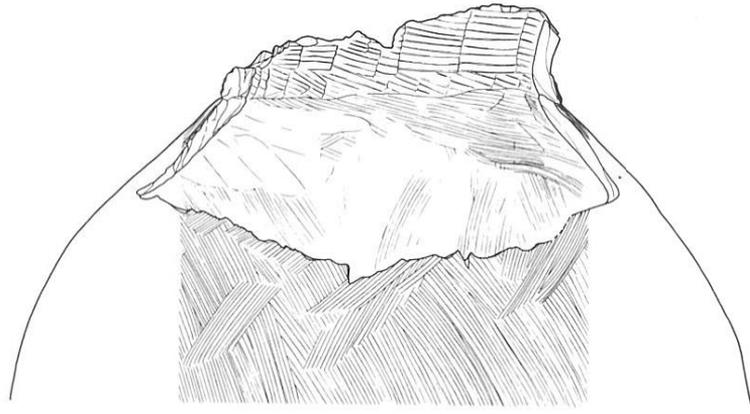


図91 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第1主体部土器棺(1)



357

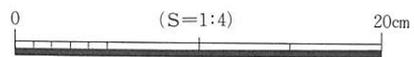


図92 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓第1主体部土器棺(2)

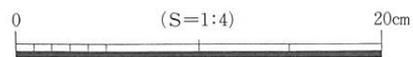
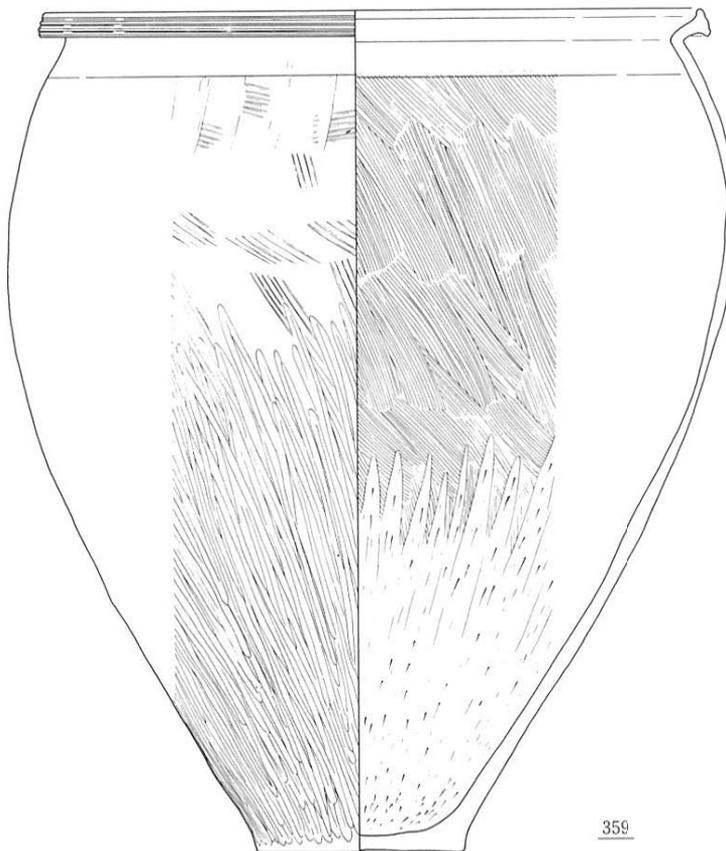
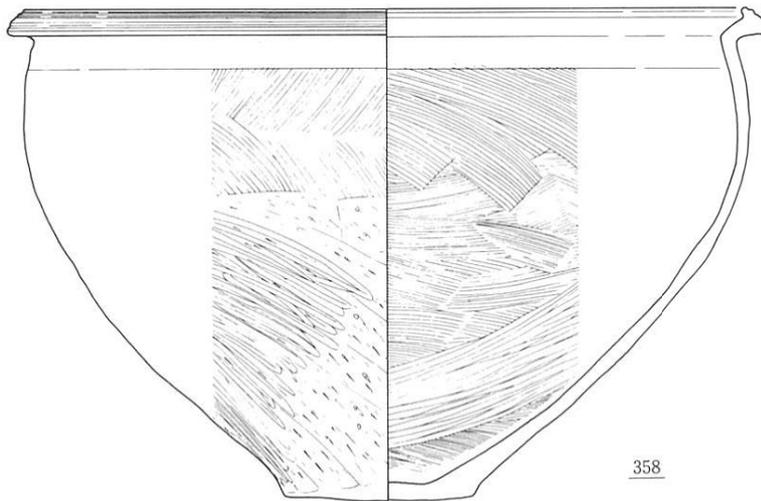


図93 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓第9主体部土器棺

幅約0.55m、長さ約1.2mの範囲に有機質の痕跡を確認したのみである。有機質の堆積内より、歯牙が数点出土している。

10・11号方形周溝墓出土物には図84-344から347の土器、図85-352に示した石器があるが、これらは後述するように、周溝墓とは直接の関係が認められない遺物であると考えられる。

344は11号方形周溝墓東側周溝内より出土したもので、上下に拡張した口縁部を持つ壺の破片である。口縁部外面に二条の簾状紋と、その間に波状の刺突紋を巡らせている。345は甕の底部と考えられる破片で、10・11号方形周溝墓間の周溝内より出土したものと、11号方形周溝墓周溝南東部より出土した破片、および11号方形周溝墓盛土除去後の中期包含層から出土した破片

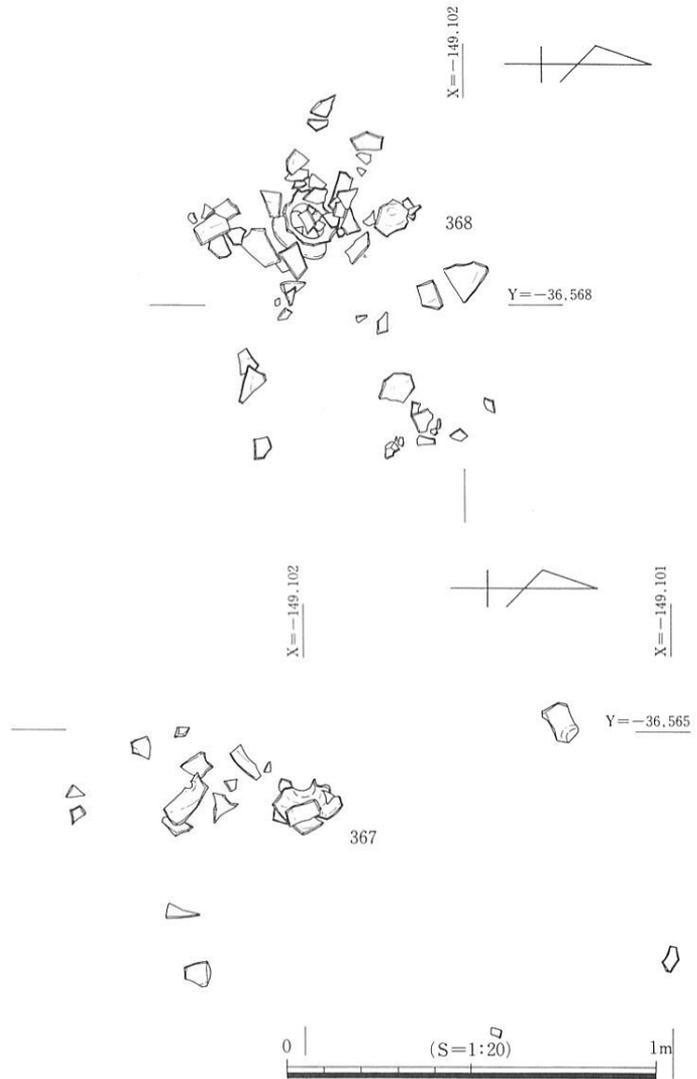


図94 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓マウンド土器出土状況

が接合した。346・347は10・11号方形周溝墓間の周溝から出土したもので、346は頸部に凹線紋を巡らす広口壺、347は垂下口縁を持つ高杯の破片で、口縁部上面には暗紋風の斜格子ミガキが施されている。図85-352は狭長な鎌身部を持ち、身と茎との境の不明瞭なサヌカイト製の凸基式鎌である。既述のとおり、これらの遺物は盛土や周溝内より出土しているが、方形周溝墓盛土下の包含層から出土する破片と接合するものや、方形周溝墓の供献土器群よりも時期的に若干先行する要素を持つことから、方形周溝墓築造以前の遺物が混入しているものと考えたい。

11号方形周溝墓1号土器棺には口縁部から頸部を打ち欠いた壺を棺身とし、口縁部から頸部および胴部半分を打ち欠いた細頸壺を棺蓋として使用していた。細頸壺は体部から底部にかけての部位を半截して蓋として使用していたが、その打ち欠かれた残余の破片が、マウンド東側斜面や

北側周溝で出土し、その最も大きなものが、図100の出土状況図における356とした頸部破片（図91-356）である。図87に示すとおり、半截された細頸壺は、棺身を完全に被覆した状態で出土し、元来ここにあったものが埋葬後に移動した形跡は認められないことから、破碎して棺蓋として用意した土器を、現地において再加工したものと推定される。図91-356の土器実測図には、この頸部破片を接合し、正面においた状態で図化した。土器の時期はⅣ様式の後半に位置づけられる。

棺身に使用された壺は頸部以上を打ち欠いて使用しているが、口縁部を除いた同一個体の破片が11号方形周溝墓の東側あるいは北側の斜面や周溝内、また、マウンド上部より散在して出土しており、その一部は接合が可能であった。先述のとおり棺身を蓋が完全に被覆している状況で検出されたため、これらの破片は土器棺埋置後に移動したとは考えられない。改めて、接合部や破片の部位を確認した結果、口縁に近い部分の破片は存在せず、頸体部境の貼り付け凸帯紋が残る破片や体部上半の破片ばかりであり、頸部以上を除去したのち、さらに頸体部境を斜めに打ち欠いていることが判明した図92上段にはこの状況を示すため、接合する破片を除外して図化した。

以上の状況は、棺蓋と同様、別の場所で棺用に加工した土器が用意されたが、現地において何らかの不都合が生じたため再度加工を行う必要性が生まれたことを推察せしめる。

11号方形周溝墓第9主体部には棺身として甕が使用され、棺蓋として鉢が使用されていた。双方とも打ち欠きや穿孔の見られない土器で、口縁部には凹線紋が数条めぐらされている。時期はⅣ様式の新しい段階で、胎土は生駒西麓産の特徴を持つ。

11号方形周溝墓の周溝からは弥生時代中期後半から後期にかけての遺物が出土した（図版51～53）。後期の土器には図95-360から363に示すような周溝が後期の堆積土で埋没する途上で含まれたものや、364から366のようにマウンド検出時、その斜面や周辺の最上位より出土したもの、また、367や368の方形周溝墓マウンド上から出土したものがある。

周溝内出土土器には、360・361の甕、362・363の壺がみられ、360は口縁上端部をつまみ上げて屈曲させる口縁部を作りだしている。また、363の広口壺の体部上半にはへら描きの記号が施されている。これらの土器は、周溝の南側から南東部にかけて出土した。

マウンド検出時、その斜面や周辺の最上位より出土した土器には、北側周溝より出土した364の長頸壺や、図98に出土状態を示した365の壺体部、および11号方形周溝墓南側周溝と後期の河川2の間に位置する高まり部分で出土した図98-366の甕がある。このうち、365は中期の供献土器と同様にマウンド南東斜面に上部より転落してきたかのごとき状況で出土した。

マウンド上の土器は、図94のような出土状況を示し、11号方形周溝墓表土層に密着して検出され、この上を後期の堆積層が覆うという状況であった（図版43-2・3）。土器には367と368の2点の壺があり、367の壺は体部下半に焼成後の穿孔を持つ。また、これらの土器は2点とも完形にまで復原できることや、出土状況から考えて双方とも供献土器としても不自然ではないと思われる。

後期の土器以外に11号方形周溝墓からは、図97・99・101から104に示すような弥生時代中期後

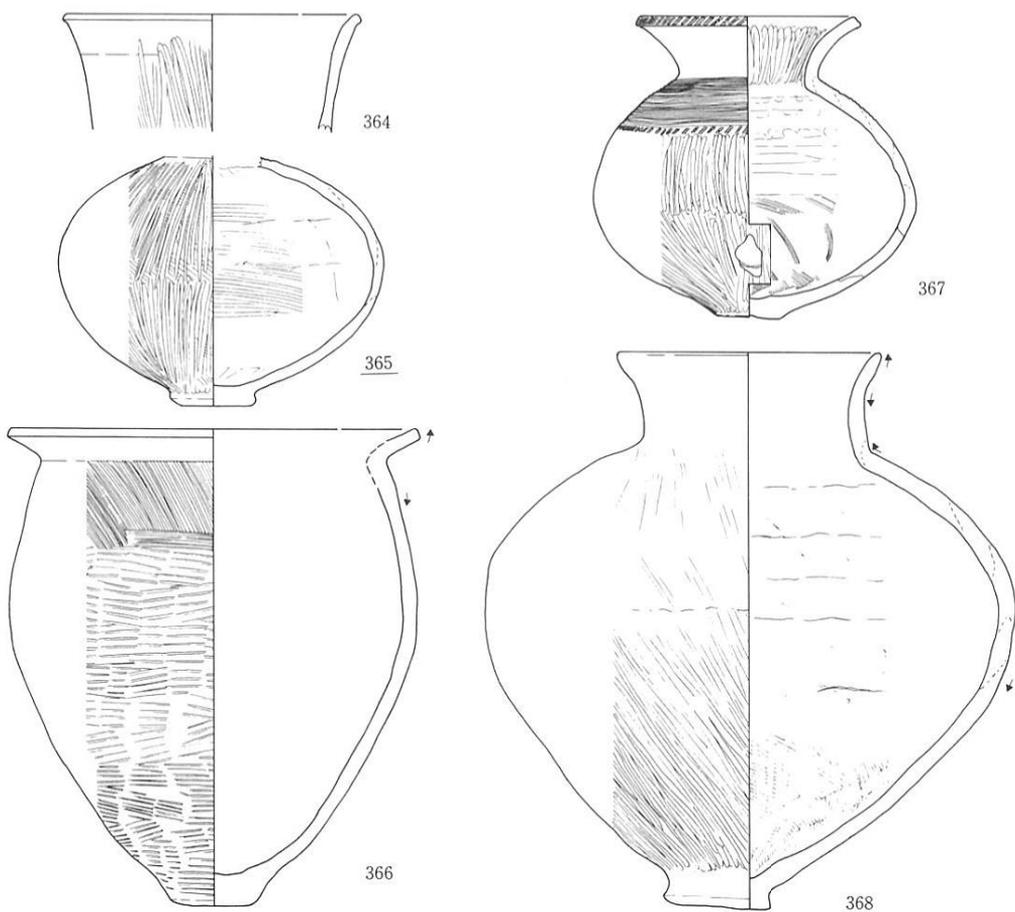
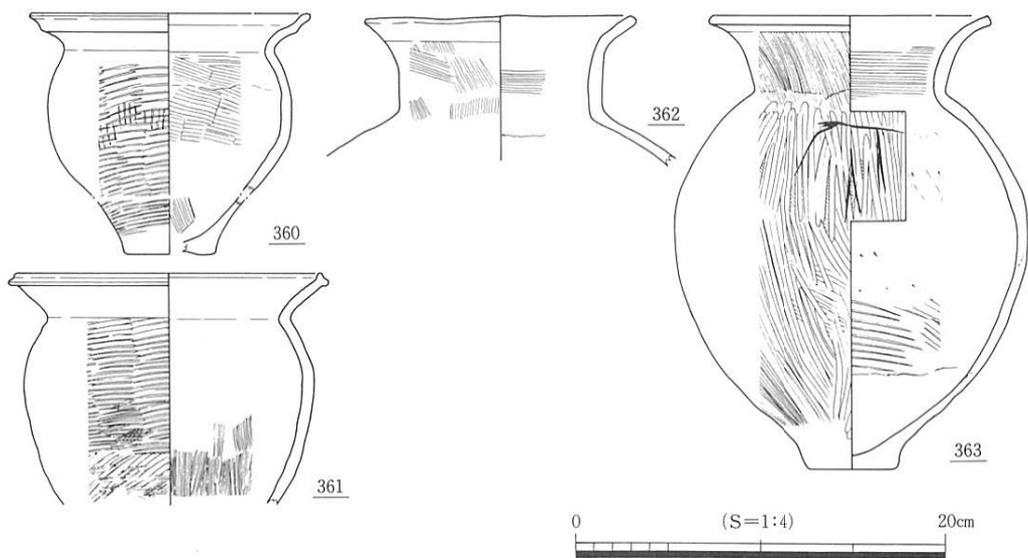


図95 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(1)

半の供献土器や加工木・桃殻が、マウンド上や斜面、周溝内より出土している。出土した土器は
 広口壺10点、無頸壺1点、同蓋1点、甕5点、鉢2点、高杯2点、水差2点の計24点である。こ
 れら以外にも372・373・379・380を図示しているが、破片が単独に出土したのみの復原不可能な
 小片で、10号方形周溝墓と同様、下層包含層の土器が混入している可能性が高い。また、土器以
 外に北側周溝内から板材が1点出土した。

これらの遺物は、369から371がマウンド上層部の土壌化層より、372から397がマウンド斜面や
 周溝より出土したもので、出土位置には周溝墓北側と東側に偏在する傾向が認められる。また、
 図78に示すように、東側と北側の土器は各々接合関係を持つものがあり、供献土器の取り扱われ
 方を推察するのに興味深い資料を提示することができた。

マウンド上層部の土壌化層から出土した遺物には369・370の甕、371の高杯がある。370の甕は、

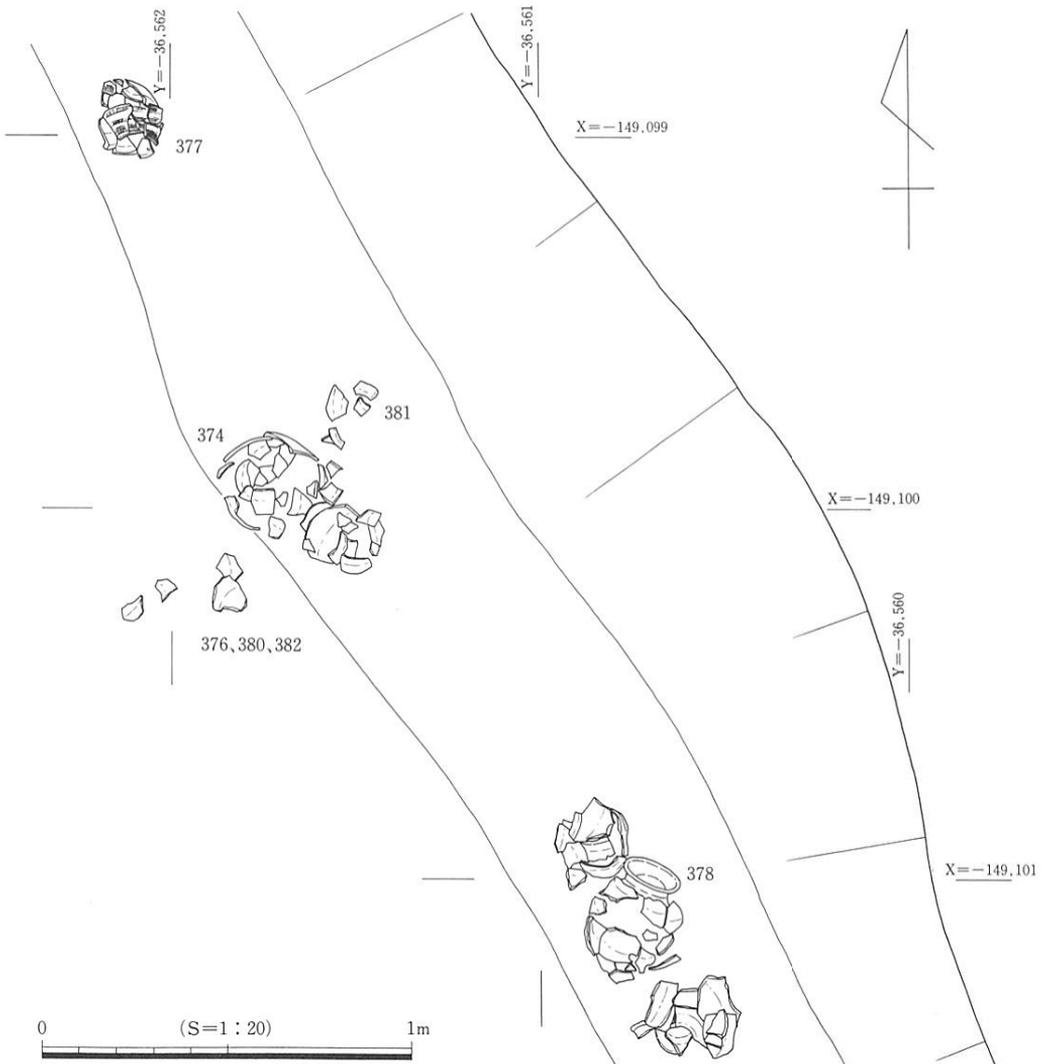


図96 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓東側周溝遺物出土状況

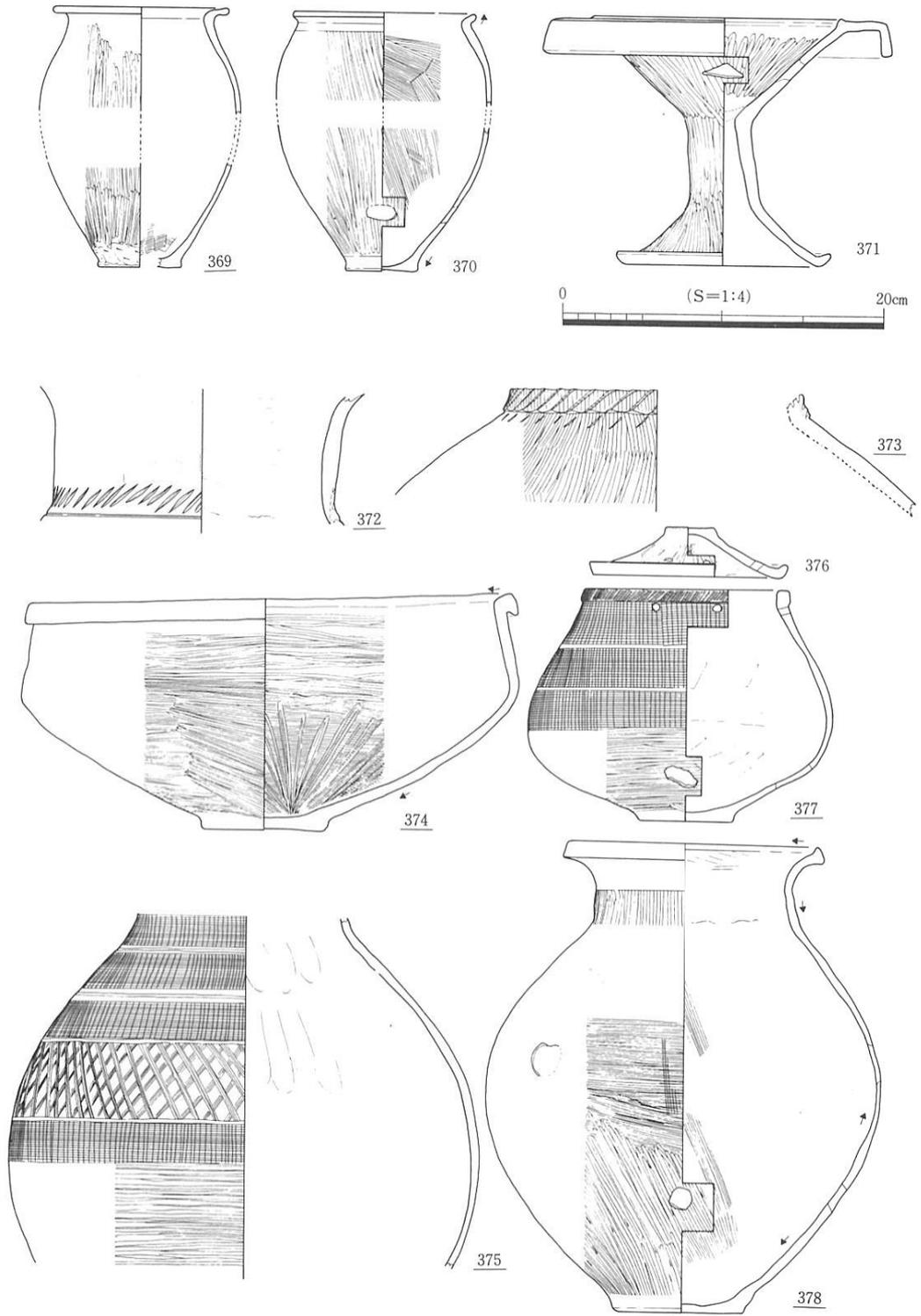


図97 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(2)

煤が付着してから後、穿孔が行われ、371の高杯にも焼成後外面からの穿孔が認められる。

周溝内から出土した土器には、374から378のように東側から検出された一群と、381・389のような北東部から出土したもの、そして、383から396のように北側から検出された一群があり、このうち、北側の一群はその出土状況から比較的原位置を止めていると考えられる。

東側の一群には374の鉢、375・378・391の広口壺、体部下半に焼成後の穿孔が行われた377の無頸部、この無頸部と対になる376の蓋が出土し、376の蓋の上に374の鉢が伏せられた状態で出土した。また、煤付着後体部に2ヶ

所の穿孔が行われた378の広口壺の両側からは、図96の出土状況図に示すように、体部に穿孔を持つ391の壺が、その南側と北側に2分割されて出土し、同形の壺2点が並べられた状態であった。また、391の破片の一部は北側周溝より出土し、破砕行為が行われた後、東側周溝に土器が置かれたことが推測される。同一形態を持つ388・390も破砕された状態で出土し、390は北側周溝の396の水差の南西部斜面一帯に広がって検出され、388は、接合する破片が11号方形周溝墓各地点で検出され、非常に拡散している状況であった。375は11号方形周溝墓南東部鋼矢板際から出土した広口壺の体部破片で、その出土状況から破片は調査区以外にも分散しているものと考えられる。全形はうかがえないものの、体部中央には幅広の簾状紋を数帯巡らせ、その間に櫛描斜格子紋を施している。

11号方形周溝墓北東部からは381の把手付台付鉢や、389の広口壺が出土している。381は外面脚部

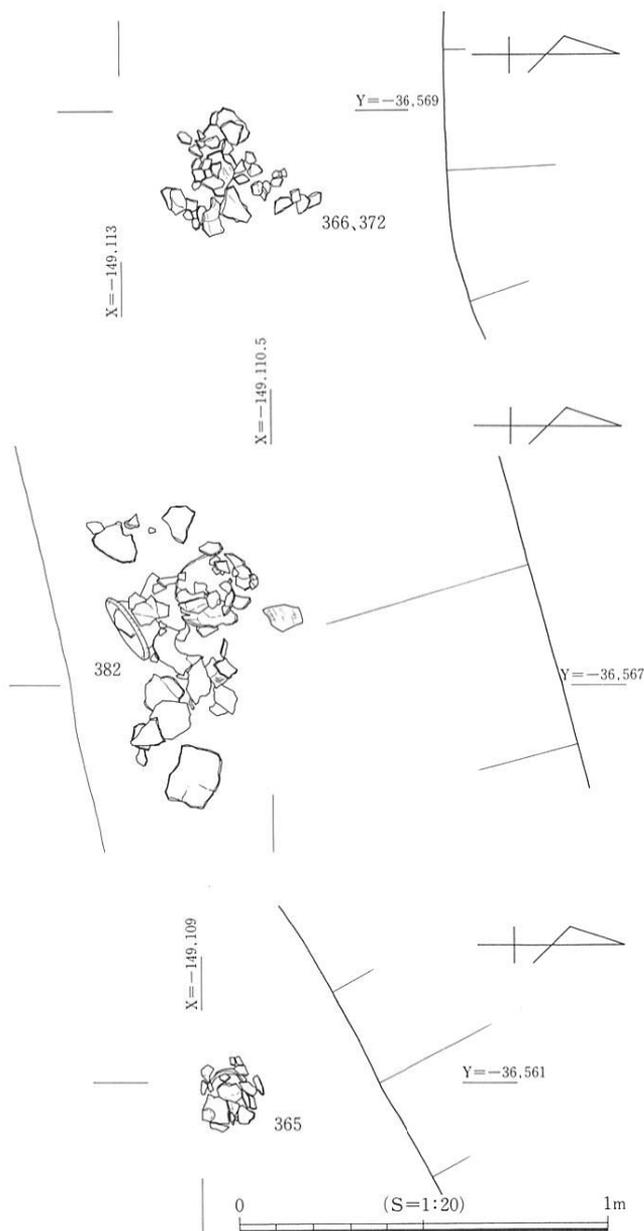


図98 31トレンチ第4面 11号方形周溝墓南側周溝遺物出土状況

から杯部下半にかけて二次焼成を受けている。389は先の例と同様に同一形態を持つ土器が比較的まとまっていたが、破碎された状況で出土し、これが1個体に復原された。

11号方形周溝墓南側周溝からは、382の土器が単独で出土している。土器はマウンド斜面に上部よりずり落ちたような状態となり、横倒しになって出土した。

11号方形周溝墓北側周溝からは、最も多くの遺物が出土した。この状況は図100に示す通りで、その多くが墳丘上位より周溝内に転落したような状態で、一部重なり合うようにして埋没してい

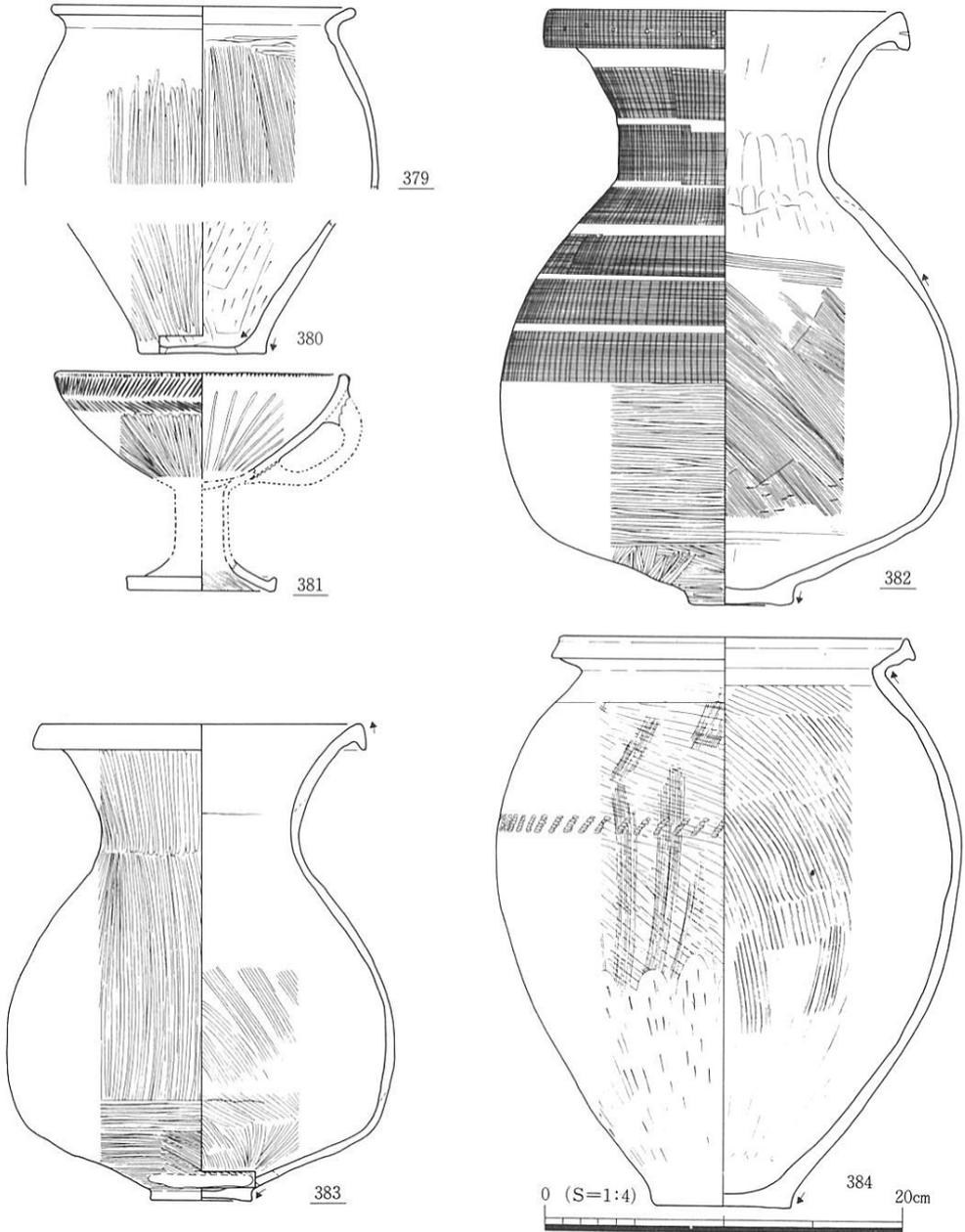


図99 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(3)

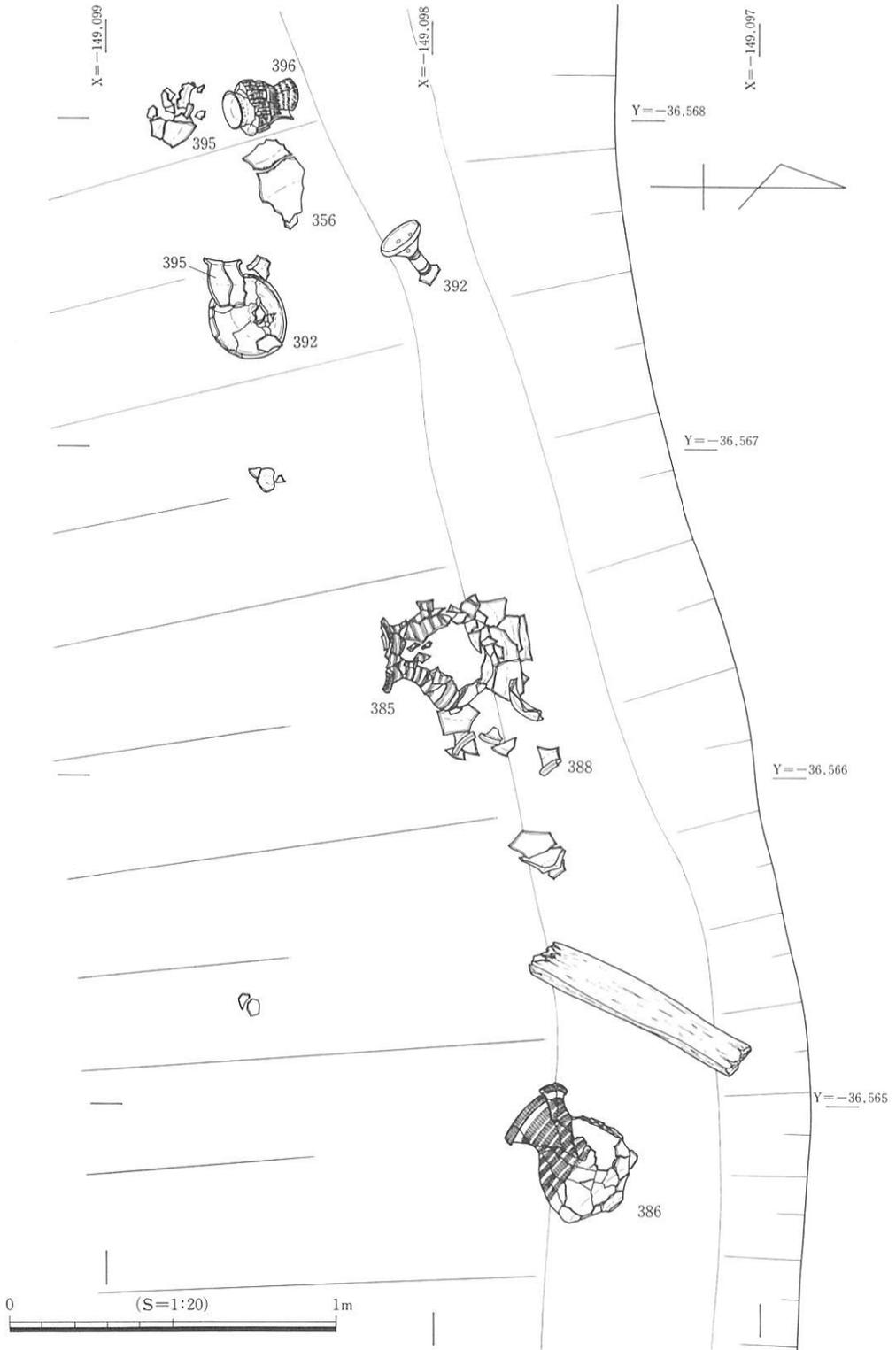


図100 3 I トレンチ第4面 11号方形周溝墓北側周溝遺物出土状況

た。壺には幅広の簾状紋を巡らす386や紋様を施さない383のほか、楕円描紋の上から暗紋風のヘラミガキを加える385がみられ、これらのうち、386のみ煤の付着が認められない。また、383と385には体部下半に焼成後の穿孔が認められ、特に385に関しては体部下半に通常の供献土器穿孔法とは異なる型抜き法とも呼ぶべき手法で穴を穿っており、図100の出土状況図における385の壺と392の高杯との間に図化した楕円形の土器片が、その抜き取られた破片である。なお、その接合状況は図版103に示す通りである。

甕には384・393から395がみられ、384は体部中央に板状工具による列点紋が巡らされる。393は通有の甕ではなく丈長な体部を持つもので、体部の1/3程度の高さに製作単位を持ち、これを境にして調整が異なる。そして、体部下半には焼成後穿孔が行われている。

高杯に垂下口縁を持つ392があり、杯部と脚部が遊離した状態で出土した。全体的に厚手の作りで、焼成が悪いためか、非常に脆弱である。端面と脚柱両端には細い凹線紋が巡らされている。

水差には387と396が出土しており、387はマウンド北側斜面一帯に散在していたものが一つにまとまり、396は完形を保ったまま斜面に逆さまに倒れ込んだ状態で出土した。双方ともに焼成後の穿孔が認められ、396には外面体部から脚部にかけて煤が付着している。なお、396の把手の装着法は穿孔

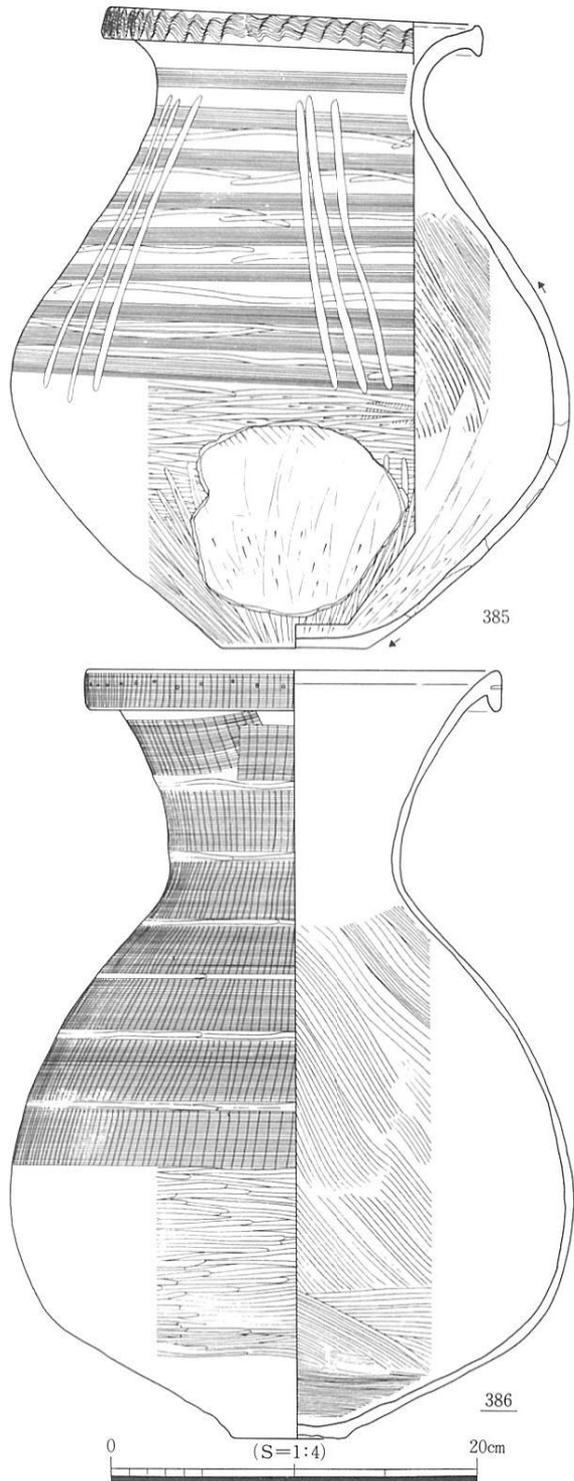


図101 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(4)

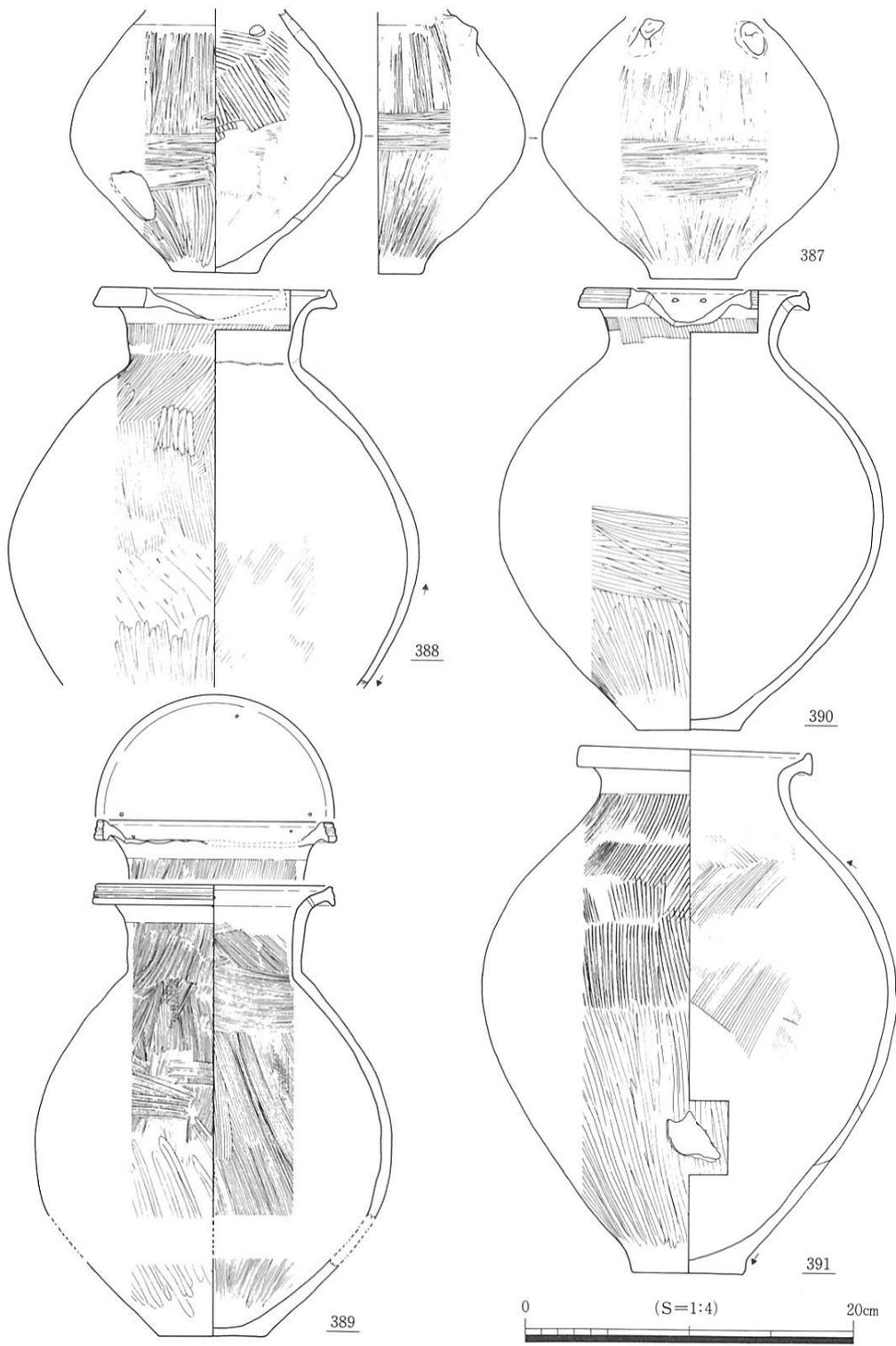


図102 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(5)

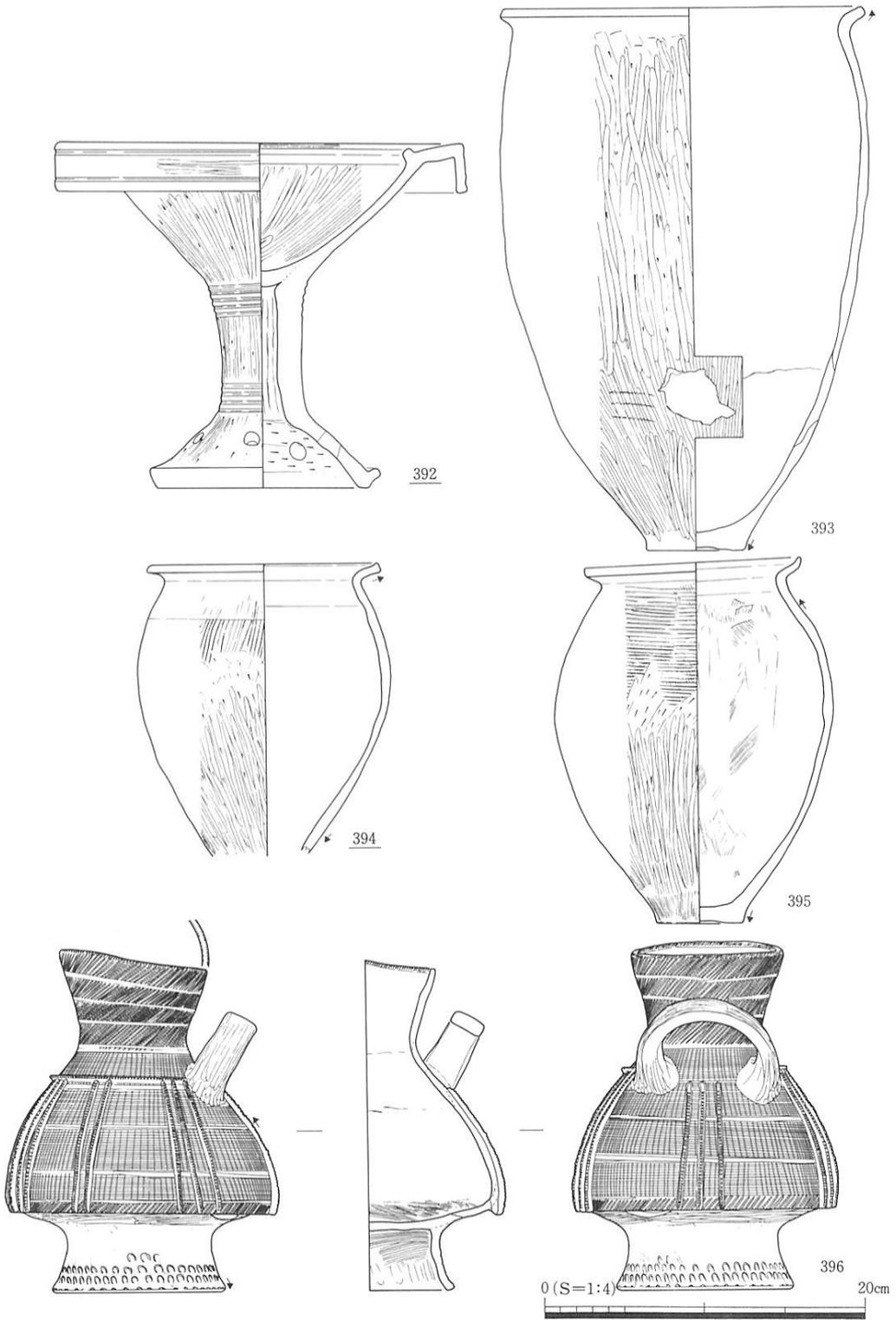


図103 3 | トレンチ第4面 11号方形周溝墓出土遺物(6)

後粘土紐を挿入して貼り付け、底部には背の高い高台状の脚部を作り付けている。このような脚部は類例が非常に乏しく、「ハ」の字状の脚部を作り付けるものよりもより古い形態であると考えられるが、出土例が非常に少ないことから、それほど多くは製作されたものではないようである。

以上に述べた土器以外に図104-397に示す板材が1点出土した。これは周溝に斜めに横たわって出土したもので、全長75cm、幅12cm、厚さ5cmを測る。材質はコウヤマキで、表面には加工痕は観察できない。小児用木棺の側板程度の長さは有するが、高さをみた場合には無理があるため、現地で木棺材を加工した際の残材、あるいは他の用途のために供されたと考えたほうがより説得力がある。

沼状遺構は、11号方形周溝墓の南側のX=-149,115からX=-149,135の範囲において、浅い流路状に植物遺体を多く含む粘土層の堆積を検出した(図版55)。幅約25m、長さ約10mにわたって確認されており、東西にのびている。埋土は平均0.4mであり、最深部はT.P.-1.1mに達する。

この遺構は、上層が弥生時代後期の河川2・3に一致しており、既往の調査における沼状遺構下層に相当するものである。

沼状遺構出土遺物には図106の土器、木器のほか二枚貝がある。土器には398・399・402・403の広口壺、404・405の高杯、406の無頸壺、407の鉢のほか、400の脚部、401・408の底部がみられる。このうち、405の高杯には内面から力が加えられた穿孔が認められる。

木器には409・410の2点がみられる。409はスギを縦割りにして得られた断面意長方形を呈する柁目材である。410は盾である。既往の分類ではB型に分類されるもので、現状での長さ45cm、幅は3cm弱のみが遺存する破片であり、図示した上位の端部は旧状を止めている。表面には横方向に小穴列が穿たれ、外面は上端部8cmが木地のまま、それ以外には赤色顔料が塗布されている。また、小穴の周囲には「X」と直線状に顔料が及んでいない部分が観察され、皮革あるいは植物繊維によって綴じられてから後に顔料が塗布されたことが理解され、その綴じ方に菱巻き状と直線状の二種類の方法があったことが判明する。しかしながら、裏面の綴紐の痕跡を明瞭に確認できないため、一本の紐を使用したものか、二本の紐を使用して綴じられていたのかは判然としない。そして、この部分のみ小穴の間隔が狭いため、当初より菱巻き状の綴り方を意識して穿孔し

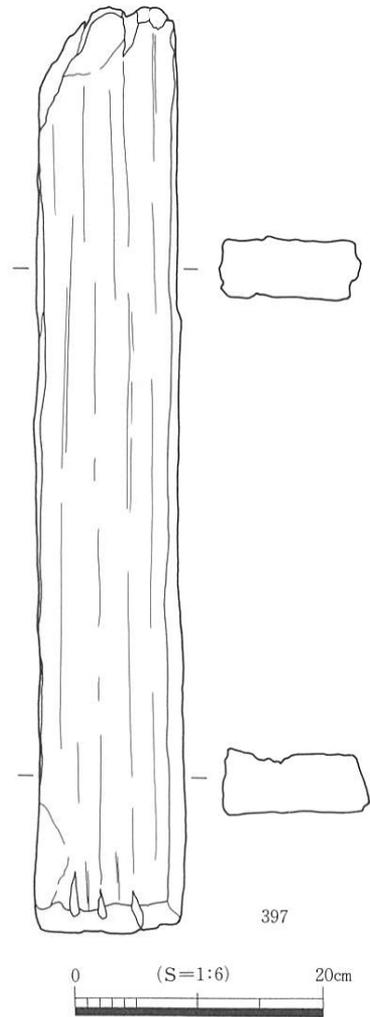


図104 3 I トレンチ第4面
11号方形周溝墓出土遺物(7)

ている様子が察せられ、これまで検出された盾よりもより複雑な綴じ方がこの時期に存在していたことが明らかとなった。また、上端部の木地のままの部分にも顔料が及んでいないことから、この部分にも元来は、覆輪状に皮革などが綴じ付けられていた可能性も考えられる。使用される樹種は木目の判然としないもので、鑑定結果ではスギであると報告されている。

溝・土坑・ピットは沼状遺構の南側、 $X=-149,140$ から $X=-149,182$ において集中してみられる(図105、図版57)。

3号方形周溝墓の盛土を掘削すると、第4面包含層の5b層が検出された。木根痕が多数みられ、溝とピットが確認された。周溝による攪乱のため、いずれも全体は未確認である。

溝33・34は東西にのびる溝であり、長さ約6.0mの範囲で検出された。既往の調査における溝63につながるものと考えられる。あるいは別の遺構であるかもしれない。

溝36は東西にのびる溝である。幅約2.4m、長さ約5.5mの範囲において検出した。東に向かって次第に浅くなっており、既往の調査では落ち込みとして確認されている。

いずれの遺構からも遺物の出土はみられなかった。

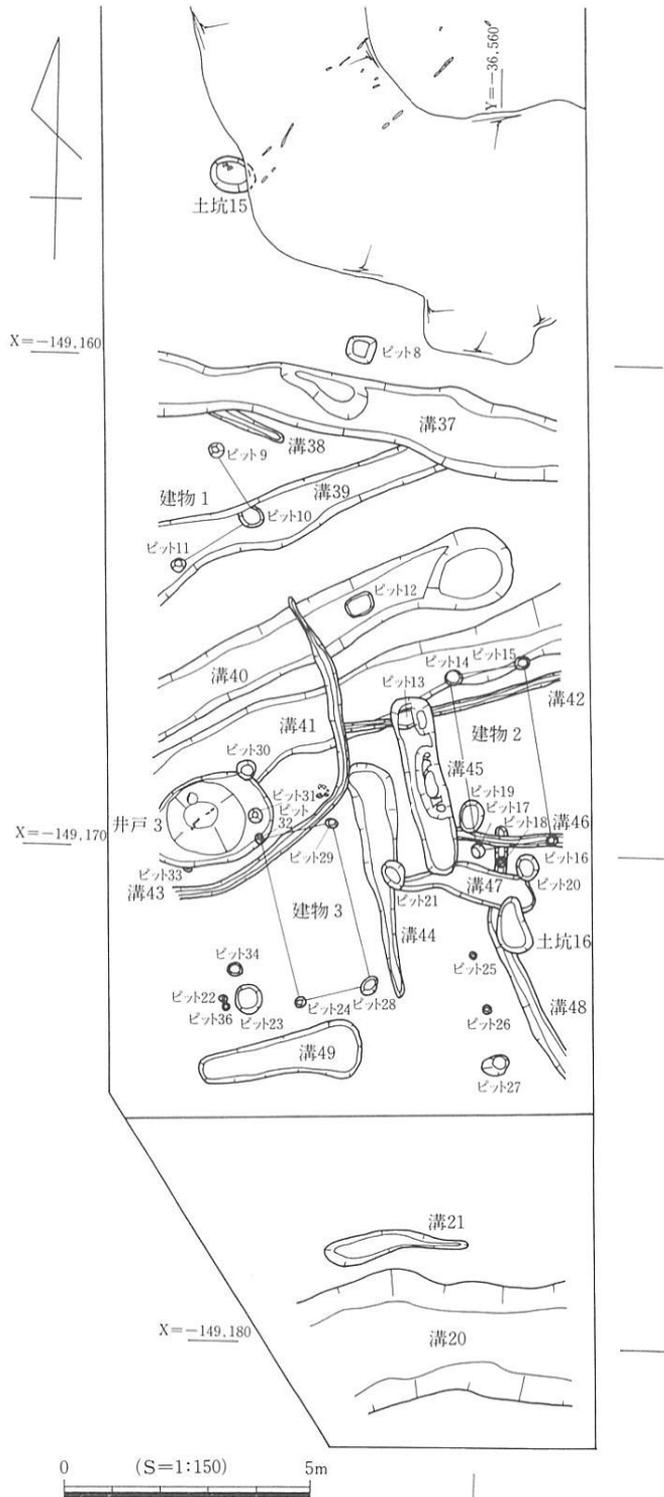


図105 3 | トレンチ南側第4面 平面

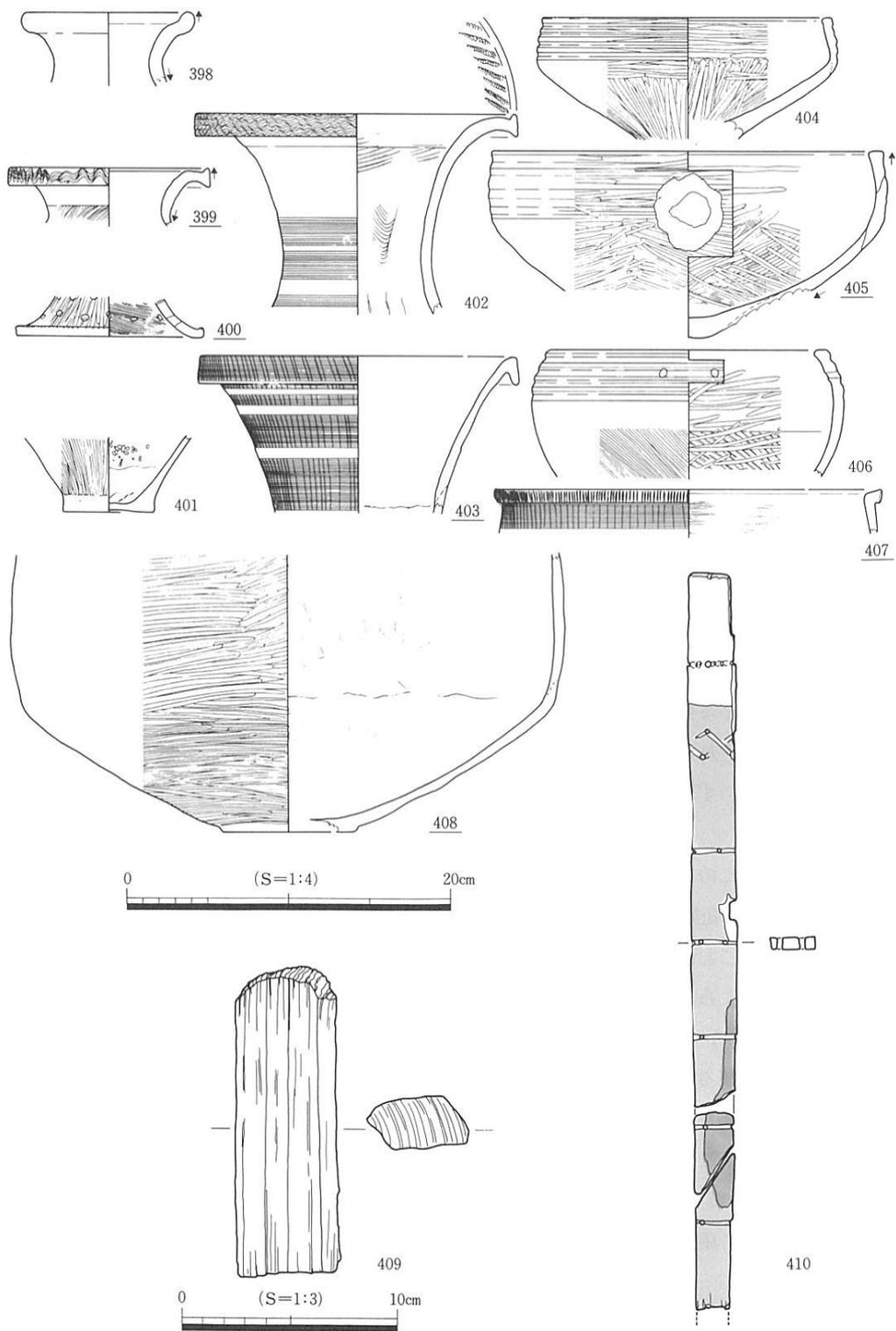


図106 3 | トレンチ第4面 沼状遺構出土遺物

3号方形周溝墓の南側、X=-149,157以南では遺構の錯綜する状況を確認した(図版56-1)。複数の遺構面を検出することはほぼ不可能であり、6層上面において全遺構を確認した。

溝は東西方向と南北方向のものがみられる。東西方向の溝は概して大規模であり、それに比べて南北方向の溝は小規模である。東西方向の溝は北側に4条、南側に1条検出された。北側の溝のうち溝39から41はいずれも南西から北東にのびており、最も北側の溝37は南側の溝20とほぼ並行である。小規模な溝や土坑、ピット群は主にこれらの溝の間、X=-149,168からX=-149,179の範囲において検出された。またピット群の検討から、複数の建物の存在する可能性が考えられる。

溝20は幅約2.5m、長さ約5.0mの範囲において検出された。埋土はシルト混じりの粘土が堆積しており、遺物がまともに出てきている。遺物としては甕・水差・高杯・器台・壺などがみられる(図107)。

井戸3は長径約2.5m、短径約1.8mであり、2段掘りの井戸である。深さは約0.9mを測る。埋土は植物質を多く含むシルトと粘土が堆積しており、底部に密着する形で遺物が出土した(図

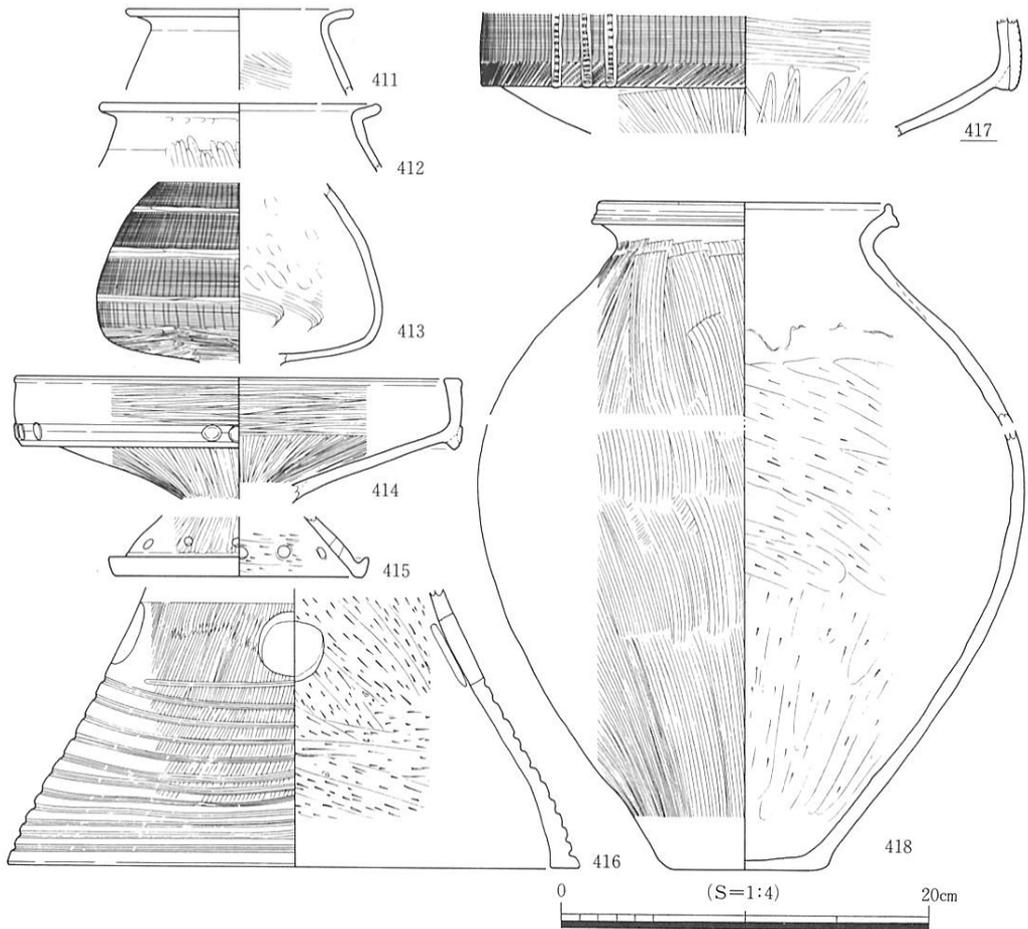


図107 3 | トレンチ第4面 溝20出土遺物

版57-2)。遺物としては壺・甕がみられる。

溝20からは図107に示す弥生時代中期後半の土器が出土した。411・412・418は甕であり、413は水差で、底部の遺存状況から「ハ」の字状に広がる脚台を備えていたものと考えられる。414・415は高杯の杯部と脚裾部で、414は屈曲部に粘土紐を貼り足して垂下させ、その部分に二個一対の円形浮紋を複数ヶ所に配置している。416は器台脚部の破片で、螺旋状に凹線紋を巡らせている。これと接合できる破片が井戸3から出土し、両者が同時に機能していた可能性が考えられる。417は台付鉢の体部破片で、棒状浮紋を持つ。

沼状遺構南側に広がる中期の遺構面を覆う5b層からは若干の遺物が出土し、図108にそれらを示した。器種には419の広口壺と420・421の甕がみられ、壺は口縁端面に凹線紋、頸部と体部との境目に板状工具による刻目紋を施している。

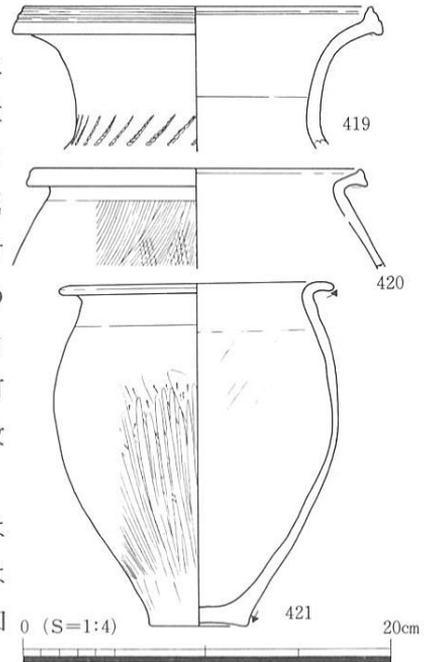


図108 31トレンチ第4面
井戸3, 5層出土遺物

井戸3の最下層出土遺物には図109に示す遺物が出土し、完形にまでは復原できないが、遺存する部位までほぼ原形に戻せる状態である。422は大きく広がる体部を持つ広口壺、433は受け口状口縁部を持つ壺の口縁部から頸部の破片、424と425はそれぞれ大型と小型の甕である。これらの遺物の大きな特徴は、同一個体の破片であるにもかかわらず、赤変、煤が付着するなど二次的な焼成を受けた痕跡を持つ破片と、そうではない土器片が互いに接合することで、欠損する部位を除いてほぼもとの状態にまで復原できることと兼ね合わせて考えると、井戸廃棄時点で何らかの祭祀的行為が行われてから後に土器が投棄された可能性が考えられる。なお、実測図の星印の破片が問題とする二次焼成を受けた土器である。

建物1はX=-149,162、Y=-36,565を中心に、1間×1間を検出した。1間の幅は約1.8mである。ピット9から11が柱穴に相当し、北西部を欠損する。ピットの規模は15cmから20cmである。溝37と39に削られており、全形は不明である。

建物2(図版57-3)は溝41の南側、X=-149,168、Y=-36,560を中心に、1間×1間の掘立柱建物を検出した。ピット14から17が柱穴に相当し、ピットの規模は10cmから15cmである。建物の規模は東西約1.5m、南北約3.5mを測る。

建物3は建物2の南西に位置し、X=-149,172、Y=-36,563を中心に、1間×1間の掘立柱建物を検出した。ピット24・28・29・32が柱穴に相当し、ピットの規模は10から15cmである。建物の規模は東西約1.5m、南北約3.4mを測り、建物2とほぼ一致し、建物の方向も平行している。

これらの建物はピットの検討によって、さらに別の建物の存在する可能性も考えられる。

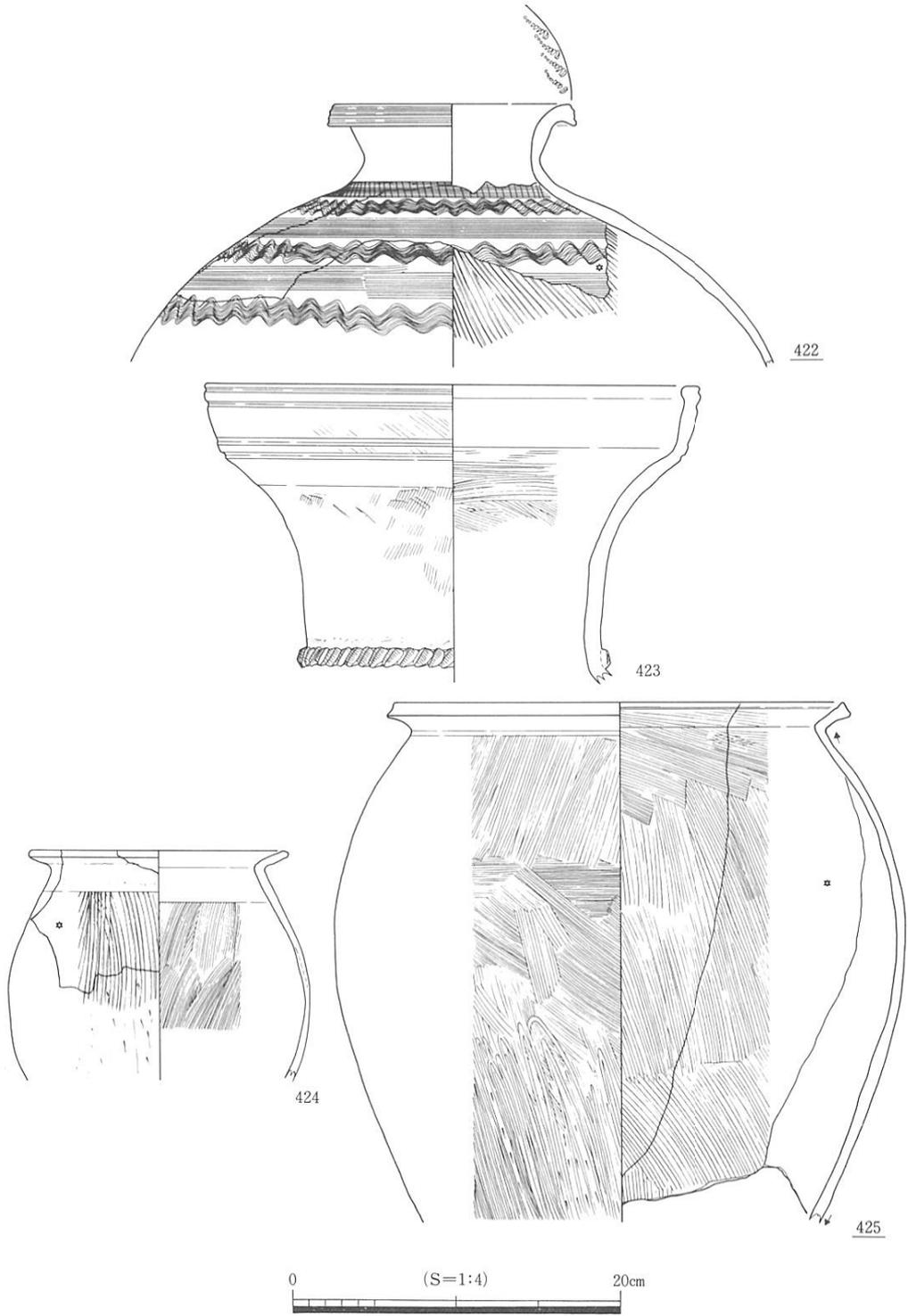


図109 3 | トレンチ第4面 井戸3最下層出土遺物

(2)A地区 (図110)

弥生時代後期の河川1による流水砂層である5 a層を除去後の状況は、ほぼ調査区の全域において包含層である5 b層を検出した。各トレンチによって5 b層の特徴は若干異なっているものの、シルト・植物質を多く含む粘質の微砂であり、土壌化していることが特徴である。上層からの攪乱を除き、T.P.+1.0m前後の平坦な地表面を形成している。

包含層である5 b層を除去した状況は、第4面の基盤である6層が、上層と同様の範囲におい

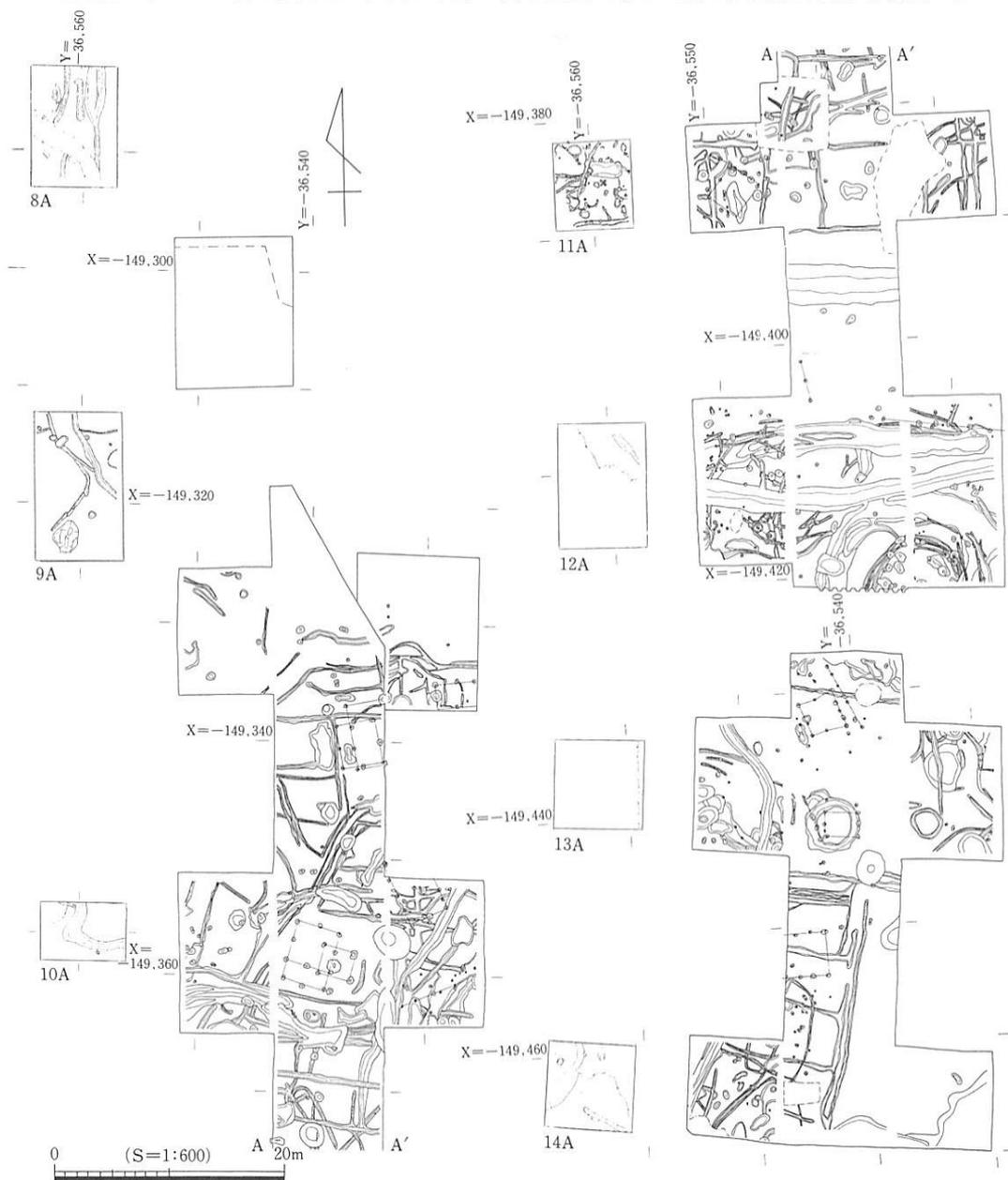


図110 A地区第4面 遺構全体図

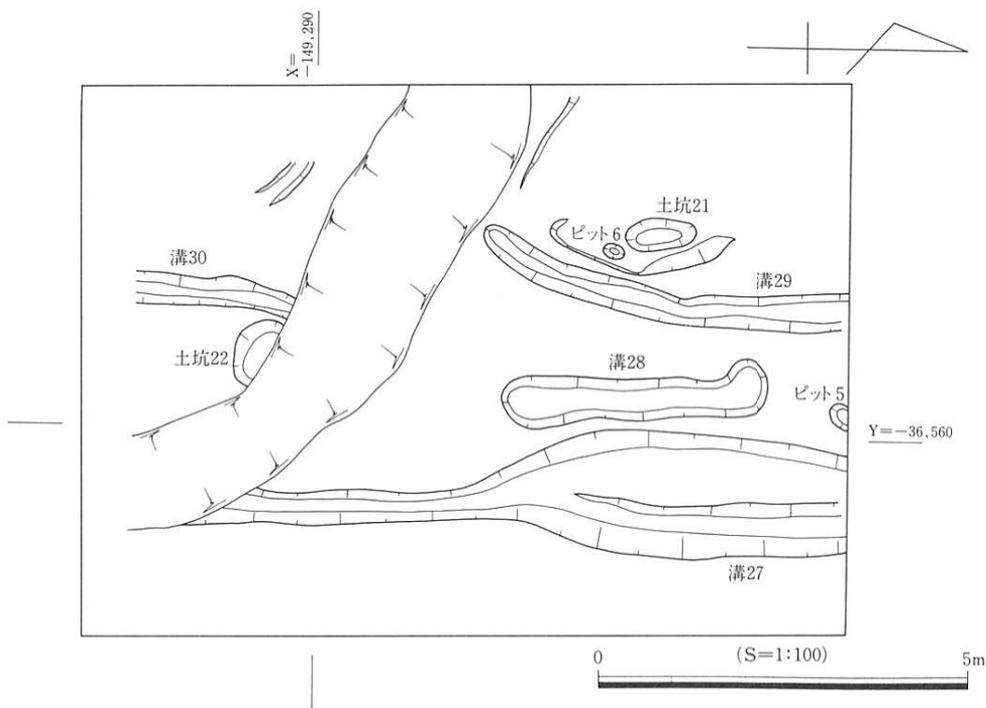


図111 8Aトレンチ第4面 平面

て確認された。6層はI地区と同様に均質な微砂の層であり、T.P.+0.6mから1.2mに検出された。

遺構は5b層内と6層上面に形成されており、複数時期の遺構面が存在すると考えられる。しかし、5b層内の遺構は6層上面の遺構と埋土が同一であるため、別の遺構面として把握することは困難であった。とくにそれは遺構密集地点において顕著であり、基本的には6層上面を第4面の遺構面として認識した。

検出された遺構としては、溝・土坑・ピットがみられる。

12・13Aトレンチについては、弥生時代後期の河川1によって遺構面が著しく削平されており、遺構はほとんど検出されていない（図版61）。

8Aトレンチの5a層除去後の状況は、T.P.+0.6m付近において包含層である粘質の微砂層をほぼトレンチ全域に検出した。5b層に相当する包含層は厚さ10cmほど堆積しており、遺物を含む。遺構は溝・土坑・ピットがみられ、おもに下層の微砂層上面において確認した（図111、図版63-1）。溝はトレンチ中央付近に4条、いずれも南北方向に検出された。土坑およびピットは、これらの溝の周囲にみられる。遺物は溝27から出土しており、他の遺構からはほとんど出土していない。溝27はトレンチ東側、Y=-36,559付近において南北にのびる溝である。南端は上面からの河川2によって攪乱されている。溝27の北側と南側では若干様相が異なり、北側は幅約1.6m、深さ約40cmを測り、東に向かって2段に落ち込む。一方、南側は幅約40cmと極端に細

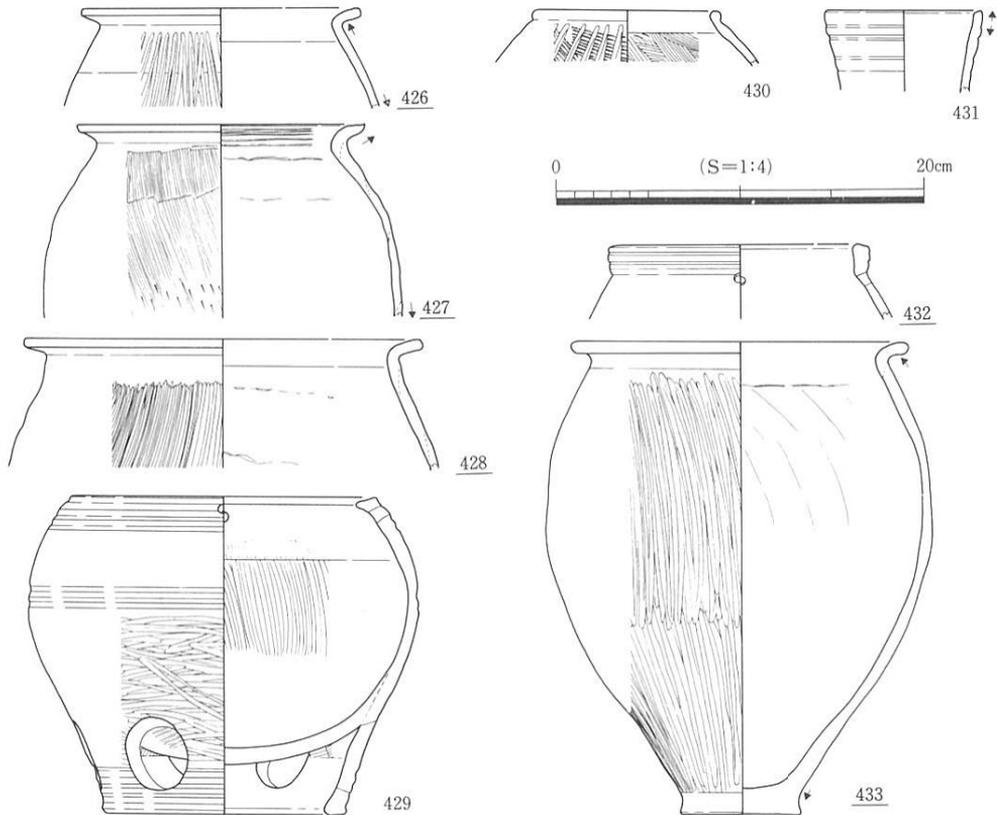


図112 8 Aトレンチ第4面 溝27, 5層出土遺物

くなっている。埋土は粗砂を含むシルトである。遺物は比較的まとまって出土しており、甕・台付鉢・無頸壺・壺がみられる。

図112-426から431が溝27より出土したもの、432と433がこの上部を覆う5 b層より出土したものである。

溝20から出土した遺物には426から428の甕、429・430の無頸壺、431の水差と思われる口縁部小片が出土している。このうち429の無頸壺は、脚部の透かし穴を穿つ際、誤って体部を損なうまでの大きさの穴を削り込んでしまい、それを修復している痕跡を止めている。

5 b層から出土した遺物には、432の無頸壺、433の甕が見られる。これらの遺物は、おおむね弥生時代中期後半の新しい段階に属するものであろう。

9 Aトレンチの流水砂層除去後の状況は、T.P.+0.8m前後において、5 b層相当の包含層をトレンチ全域に検出した。5 b層は植物質を含む粘質微砂であり、厚さ20cmほど堆積している。層内には遺物を比較的含んでおり、壺・甕・高杯・石鎗がみられる。遺構は基盤となる6層上面において検出し、溝・土坑・ピットがみられる(図113、図版58)。

溝はおもにトレンチの北側にみられ、南東から北西方向にのびている。溝35から溝37はこれらの溝から南西方向にのびており、西側は方形の区画状を呈する。しかし、ピットなどの遺構は検

出されず、この区画の性格は不明である。土坑およびピットの中には溝より上層のものがあり、複数の遺構面の存在する可能性が考えられる。遺物は溝31および土坑25からまとも出土している。

溝31はトレンチの北東に位置し、幅約0.6m、長さ約8.0mの範囲において検出された。深さ約20cmを測り、埋土には包含層である5 b層が堆積している。遺物は埋土より出土したものであり、壺・鉢がみられる。

土坑25はトレンチ南西に位置し、東西約2.2m、南北約3.0mの範囲において検出された（図版58-2）。土坑内は複数の凹みがあり、全体も不定形である。複数の土坑が重なったものとも考えられる。深さは最深部で約50cmを測り、埋土は砂を含む粘質土である。遺物は中層および底面

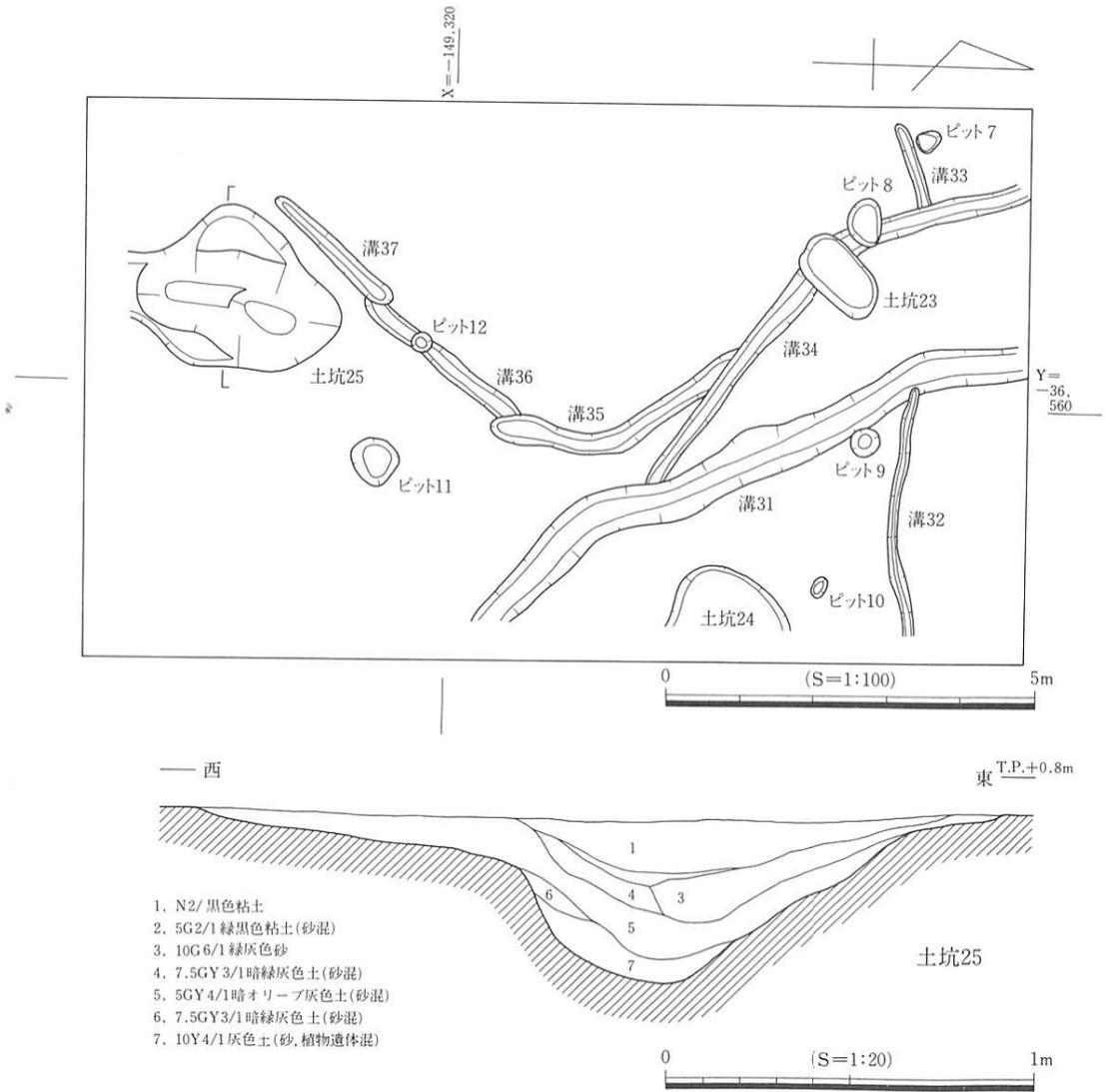


図113 9 Aトレンチ第4面 平面, 土坑25断面

から、壺・高杯・甕・ミニチュア土器が出土している。

図114-434から439は溝31より、440から446は土坑25から、それ以外は、5 b層から出土したものである。

溝31出土遺物には434・437の甕、436・438の細頸壺、439の台付鉢、435の底部がみられ、細頸壺の出土が目立つ。

土坑25出土遺物には440の広口壺、441の双把手付台付鉢、444・445の甕、443・446の底部のほか、口縁部の一部を欠くのみ状態で出土したミニチュア土器、442が出土している。

これらの遺構を覆う5 b層からは447・449の広口壺、448の甕、450から452の高杯各部位の破片のほか、先端部を欠損するサヌカイト製尖頭器が1点出土した。これらの遺物は中期後半の新しい段階に属するものと考えられる。

10A トレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチ全域において、T.P.+1.0m付近に5 b層相当の包含層の堆積を検出した。5 b層はシルトや植物質を含む微砂混じりの粘土であり、厚さ15cmほど堆積している。層内に遺物を含み、壺・甕などがみられる。5 b層除去後は、均質な微砂混じりの粘土である6層がT.P.+0.9m付近に堆積しており、遺構はその上面において検出された(図115、図版59)。遺構の密度は低く、溝・土坑・ピットがみられる。トレンチ中央に溝38がはしり、その周辺に他の遺構がわずかに検出されたのみである。遺物は溝38よりまとまって出土している。

溝38は幅1.0から1.8m、長さ約8.0mの範囲において、トレンチの東側から北側へ屈曲するL字状に検出された(図版59-2)。深さは約20cmと浅く、断面はなだらかなU字形を呈する。埋土は微砂混じりの粘土とシルトであり、上層はブロック状の粘土を、下層は植物遺体を含む。遺物は埋土中および底面より出土しており、とくにX=-149,355、Y=-36,561付近の屈曲部に集中してみられた。遺物としては壺・甕・高杯がある。

図116に図化した土器のうち、454から461は溝38から出土した遺物であり、462から465が上部の5 b層から出土した遺物である。

溝38出土遺物には454から456・461の広口壺、457、458の甕、459・460の高杯がみられ、460の高杯は口縁上端面に疑凹線風の強いヨコナデを施しており、他地域からの影響を受けているものと考えられる。このほか、5 b層出土遺物には465の広口壺、463の甕のほか462・464の底部や脚部が出土している。

11A トレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチ全域において、T.P.+1.3m付近に5 b層相当の包含層の堆積を検出した。5 b層は微砂を含む粘質シルトである。上下2層に分層が可能であり、とくに上層は植物遺体を多く含む。上層の厚さは約10cm、下層は約15cmほど堆積しており、遺物を多く含む。遺物としては、壺・甕・無頸壺・高杯・台付鉢がみられる。5 b層除去後は、トレンチ全域において、T.P.+1.1m付近に均質な微砂層である6層の堆積を検出した。

遺構は5 b層中位と6層上面のものが存在することは明らかであるものの、遺構の密度が非常

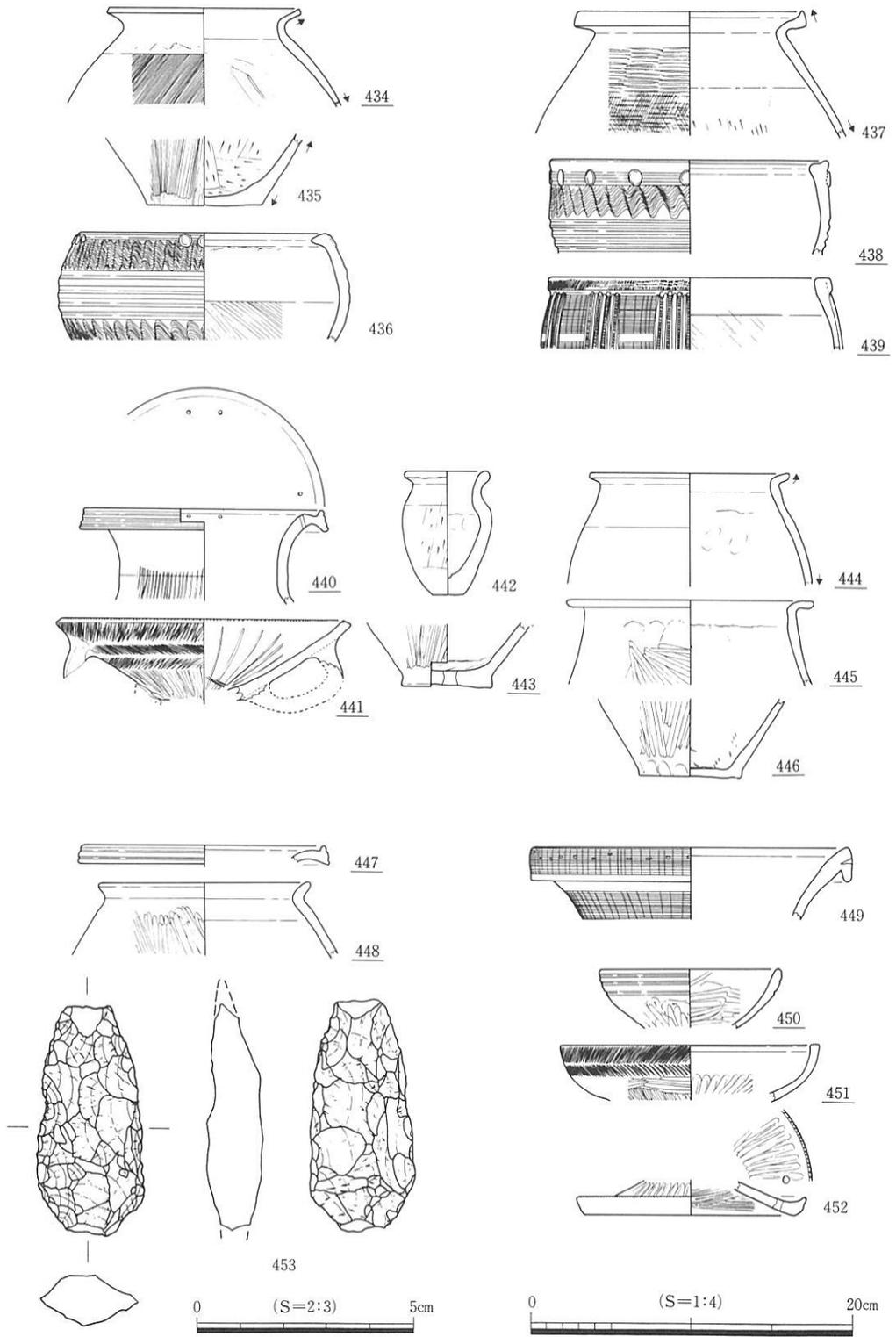


図114 9 A トレンチ第4面 溝31, 土坑25, 5層出土遺物

に高く、遺構面として分けて認識することはほぼ不可能であった（図117、図版60）。検出した遺構群の状況は、6層上面におけるものである。遺構としては、溝・土坑・ピットがみられる。

トレンチ西側から南側にかけて溝群があり、トレンチの東側には大規模な土坑が2基、東西に隣接して検出された（図118）。ピットはこの土坑周辺に多くみられ、南東から北西に向かって検出された。建物の存在する可能性は十分に考えられるものの、遺構が密集していることと、調査範囲が狭小なため、建物を想定するまでに至っていない。今後の成果に期待される。

遺物は土坑30・31から一括して出土している。

土坑30はトレンチ中央やや北東、 $X=-149,384$ 、 $Y=-36,559$ に位置する。遺構の西端は溝40に切られており、幅約1.3m、長さ約2.9mの長楕円形を呈する。深さは約27cmを測り、埋土は5b層が堆積している。遺物は底面から積み重なるように出土しており、壺・甕・高杯・脚付鉢・

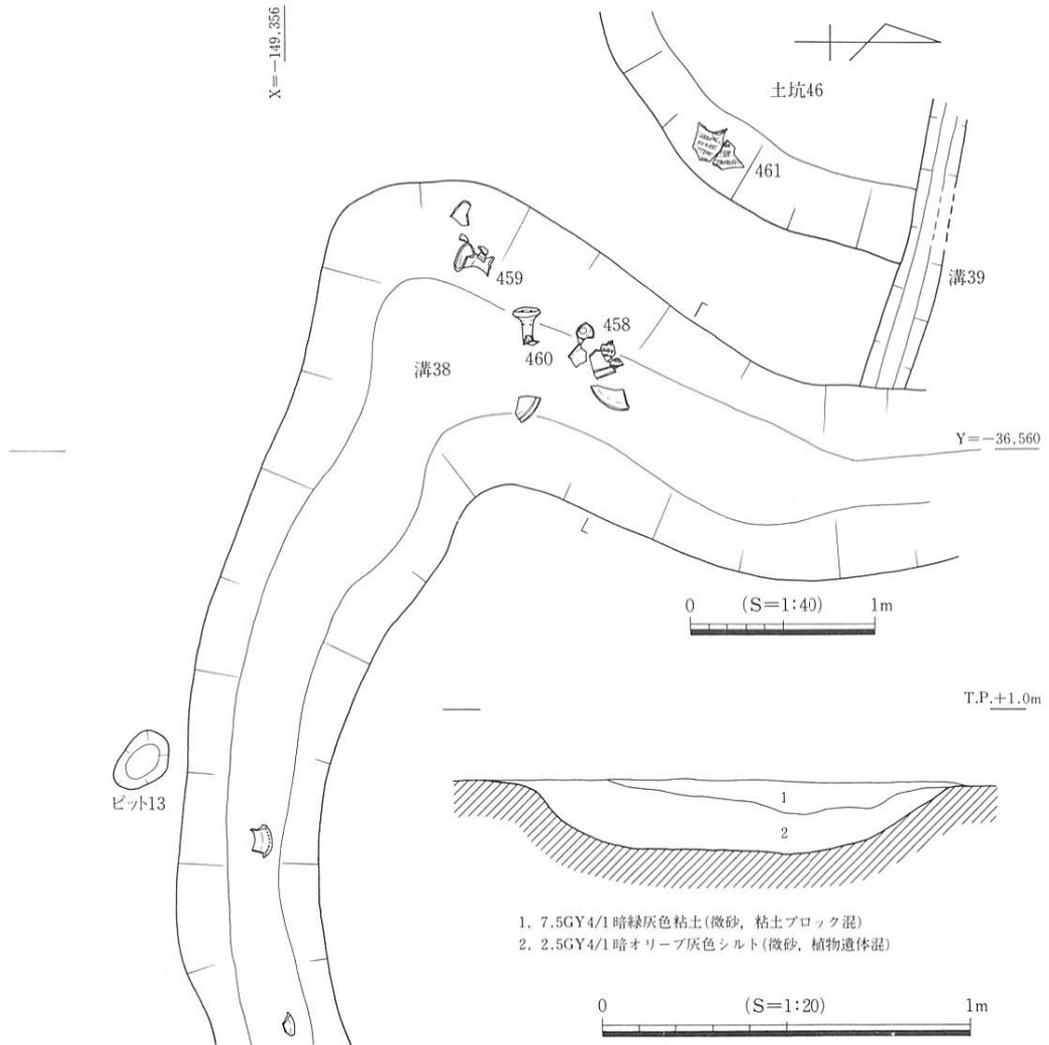


図115 10Aトレンチ第4面 平面、溝38断面

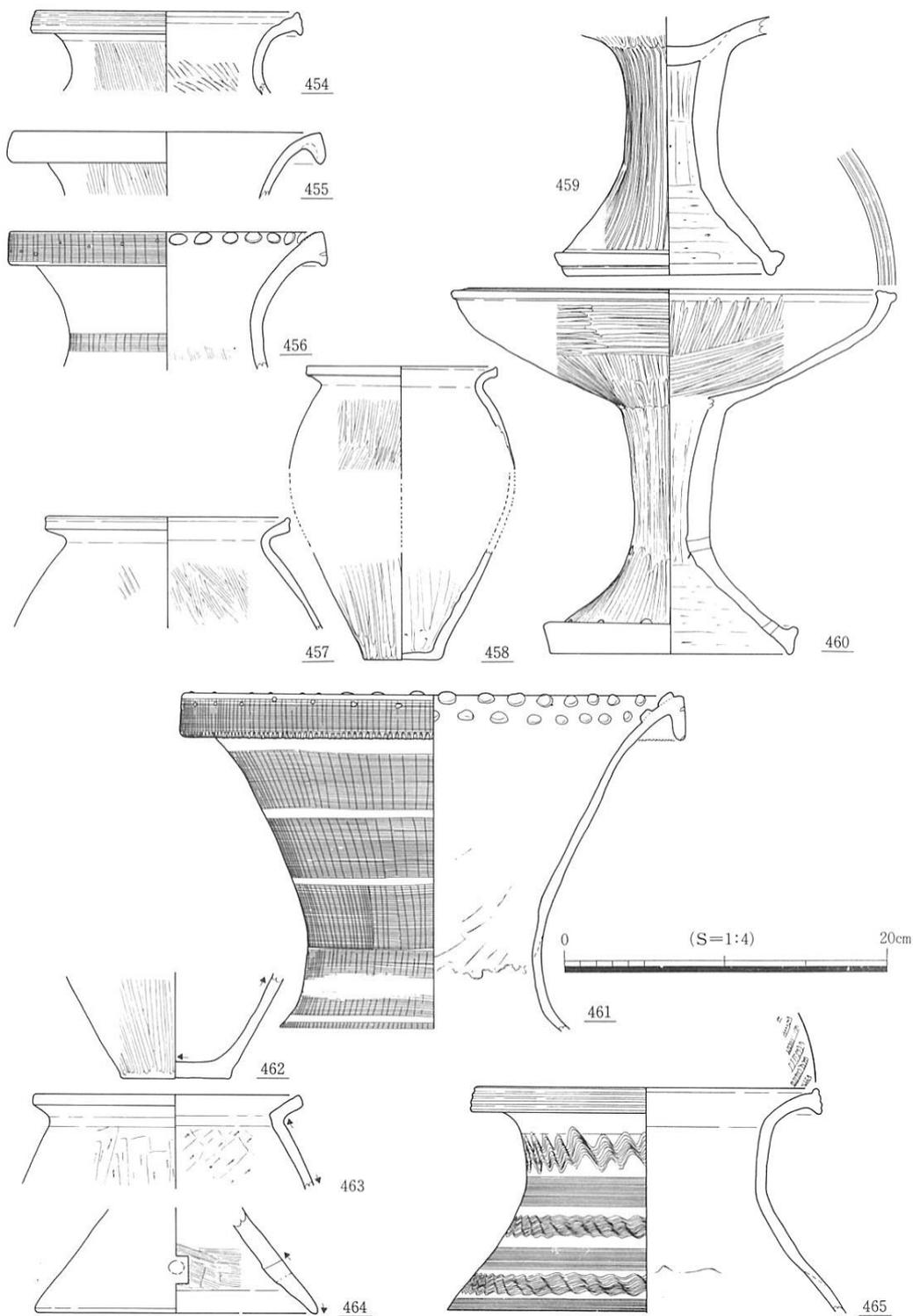


図116 10Aトレンチ第4面 溝38, 土坑46, 5層出土遺物

ミニチュア土器・木製品などがみられる（図版60-2）。

土坑31は土坑30の南東に隣接する形で検出された。X=-149,385、Y=-36,557に位置し、幅約1.2m、長さ約2.3mである。遺構の北側を土坑30に切られており、その切り合い関係から、土坑30より先行するものと思われる。しかし、両遺構の埋土は類似しており、また両遺構の遺物が多数接合されることから、本来は同一の遺構であった可能性も考えられる。遺物は土坑30に近接する地点に集中して出土している。

図119・図121に示す土器、図120-483に示す木器があり、土器は土坑30・31から出土したものがほとんどで、それ以外の遺構からは図化できるような破片はみられず、上部を覆う5b層より図121に示す遺物が出土しているのみである。この中には完形品が2点含まれており、さらにはその中には、焼成後に穿孔が行われているものが1点含まれており、祭祀の様相が濃い遺物といえる。また2つの土坑の出土遺物には互いに接合するものが多く、図119には両者を区別すること

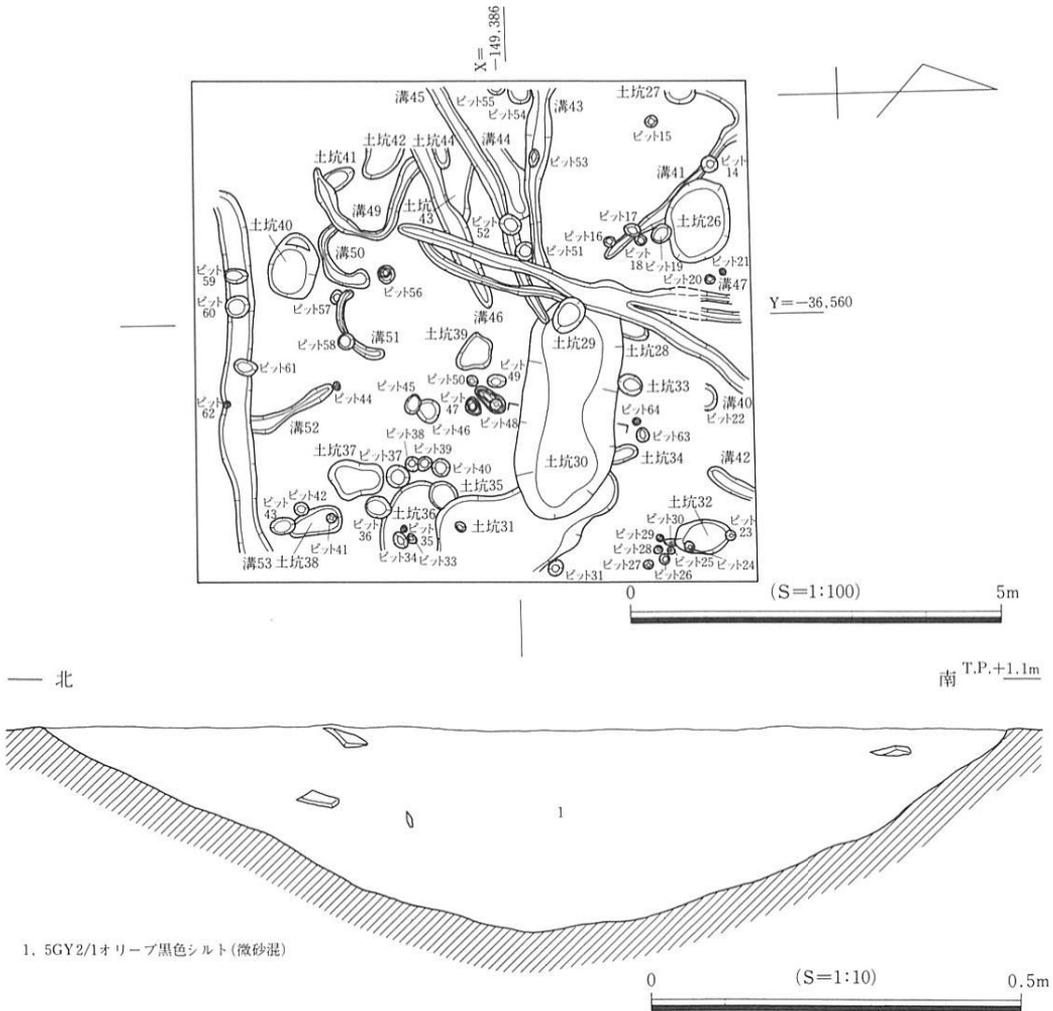


図117 11Aトレンチ第4面 平面，土坑30断面

Y=-36.560

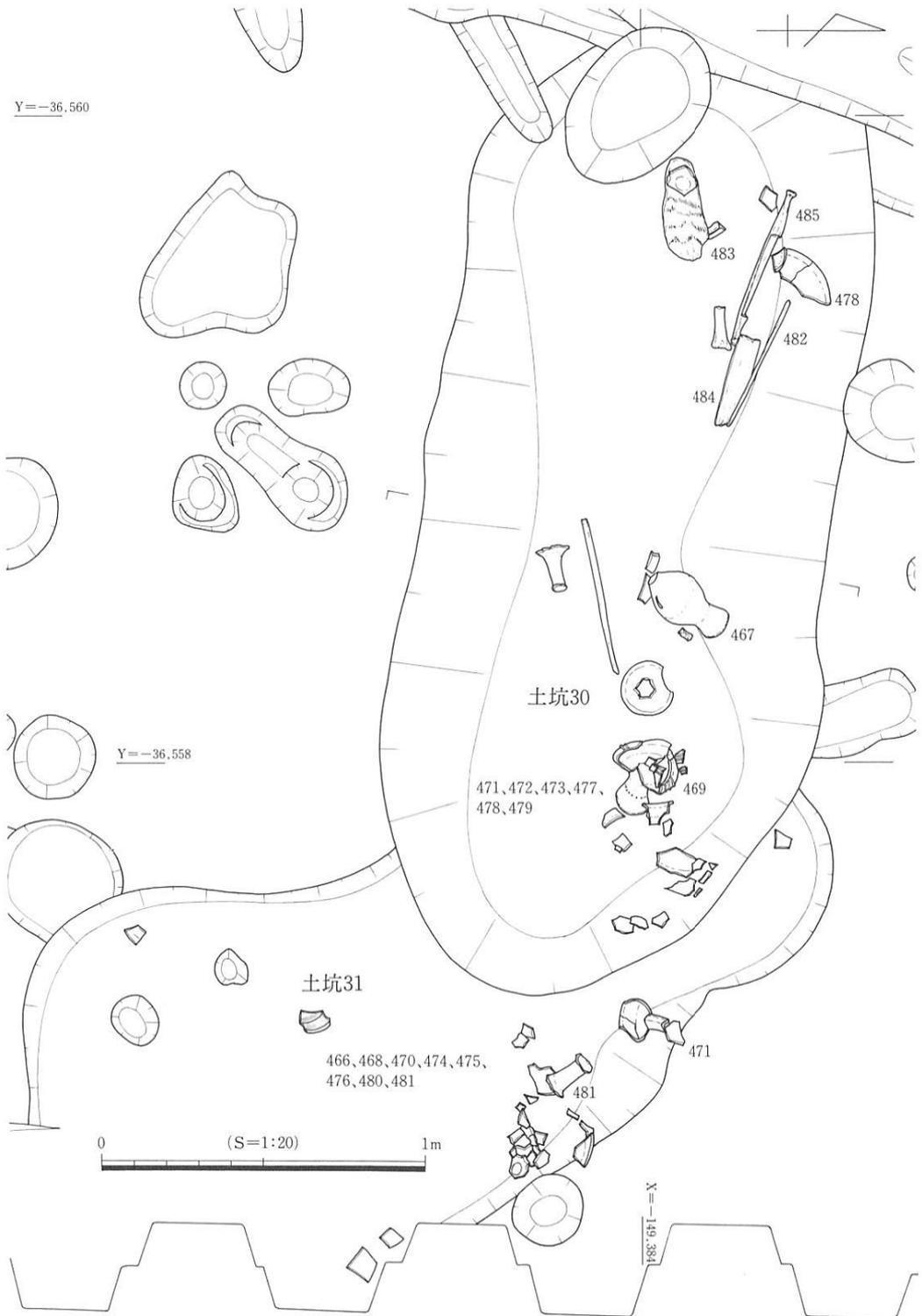


図118 11Aトレンチ第4面 土坑30・31遺物出土状況

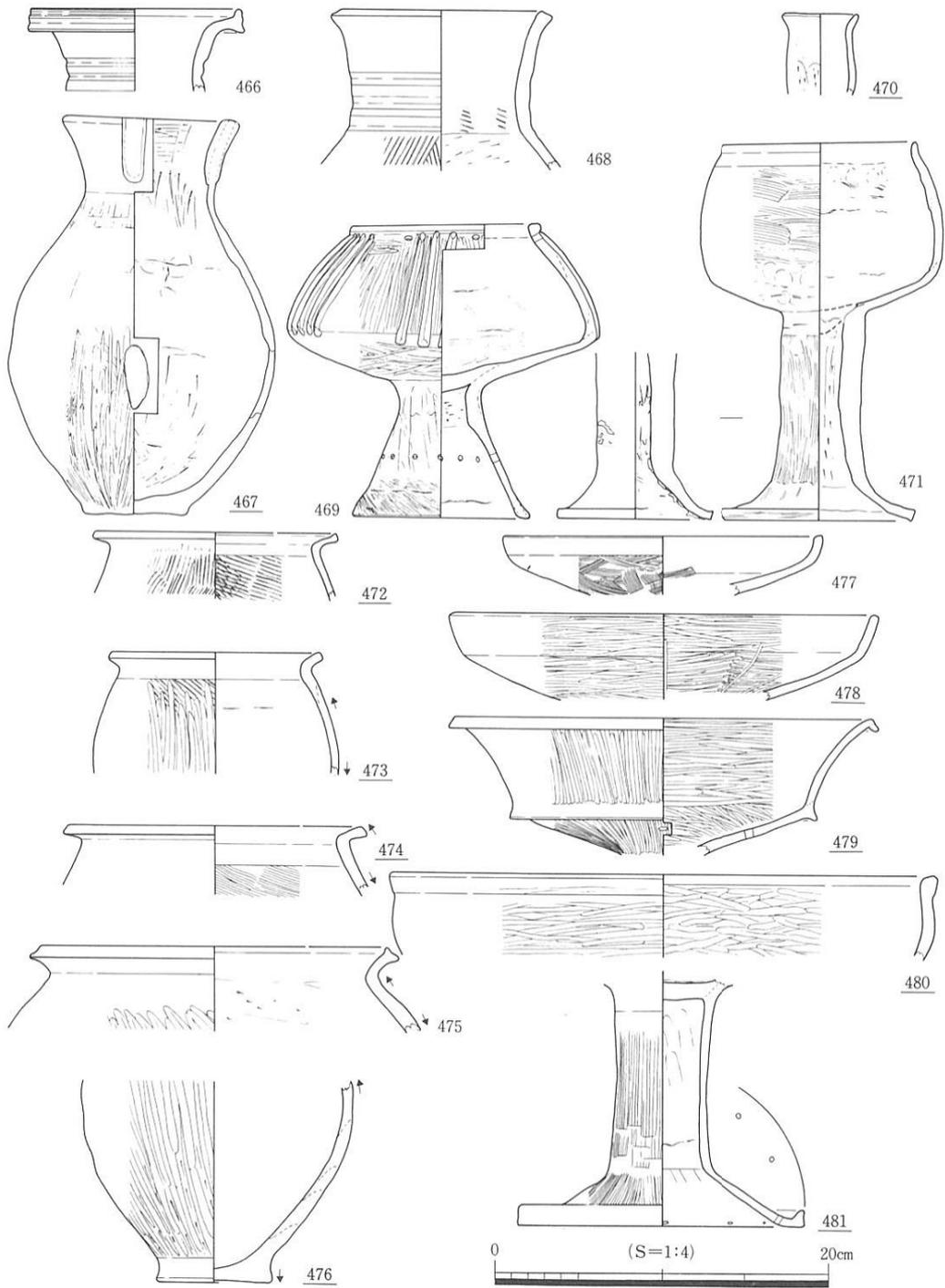


図119 11Aトレンチ第4面 土坑30・31出土遺物(1)

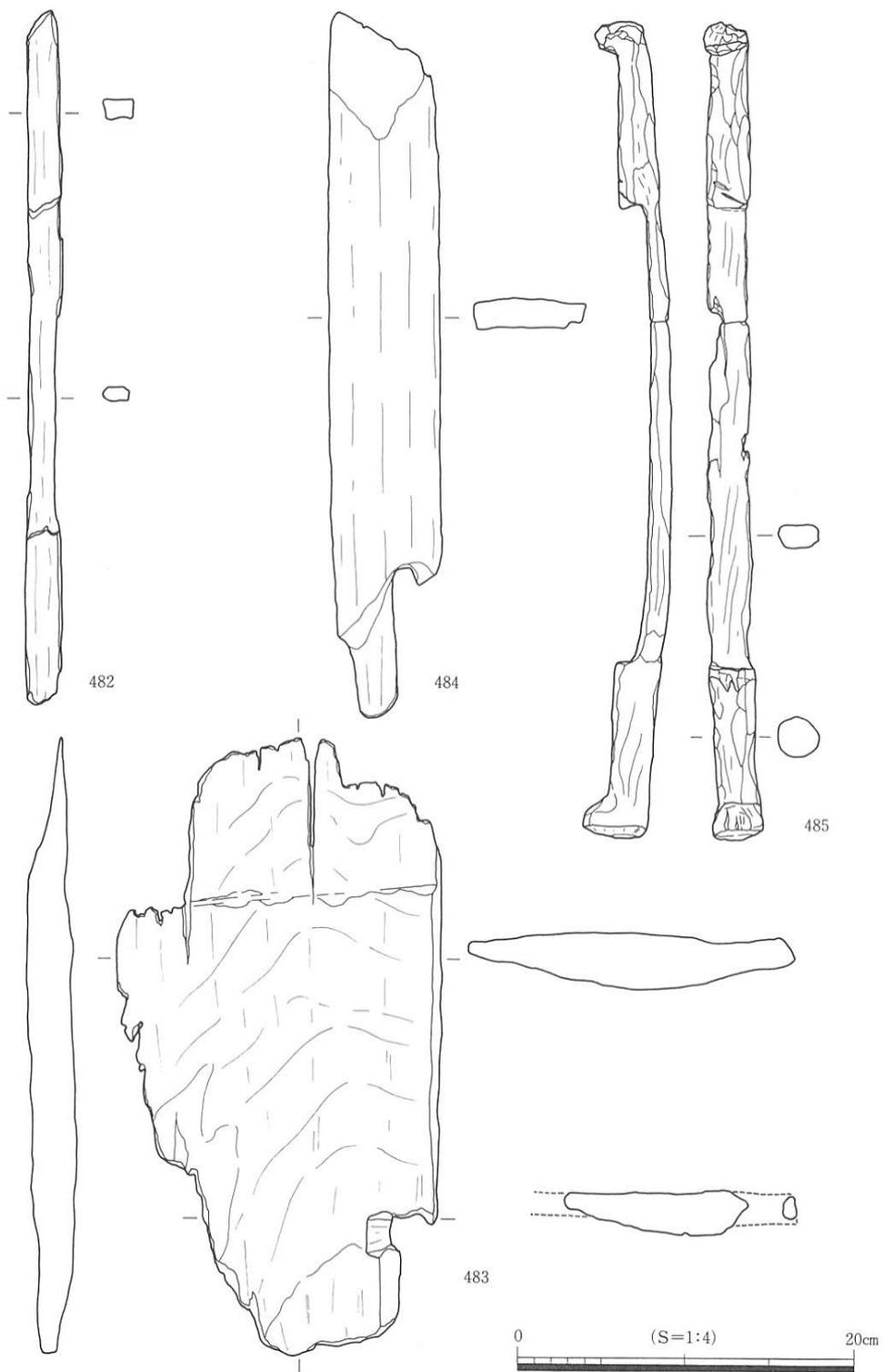


図120 11Aトレンチ第4面 土坑30・31出土遺物(2)

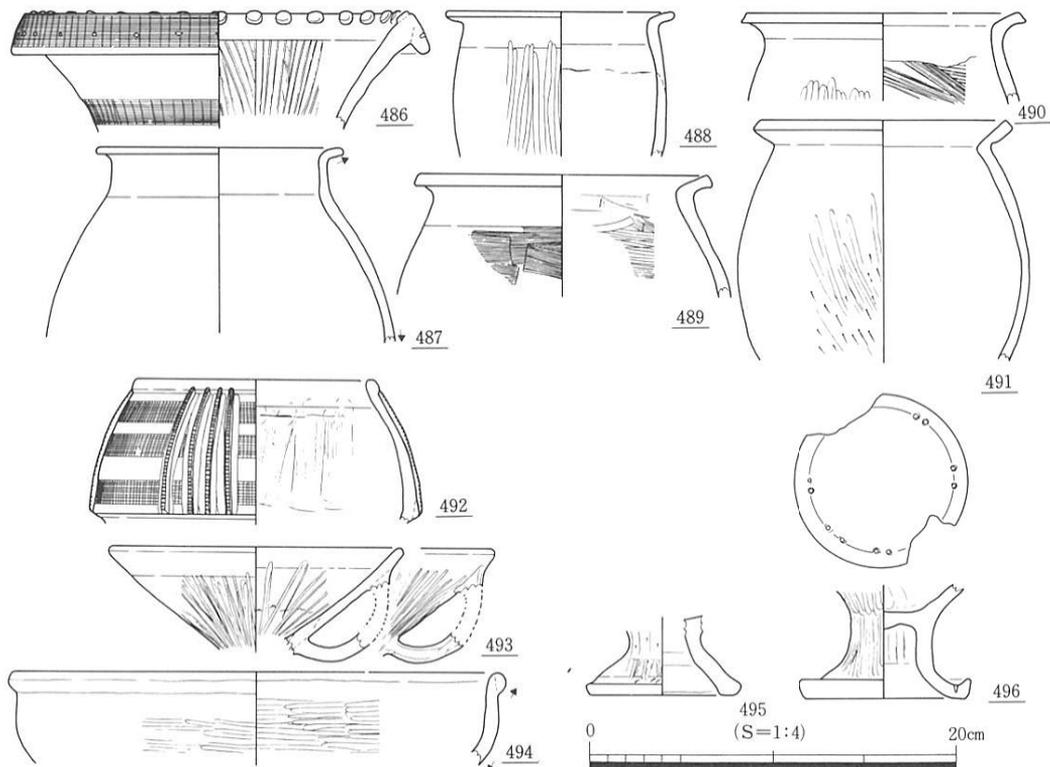


図121 11Aトレンチ第4面 5b層出土遺物

なく組み込んでいる。

土坑からは、466から468の壺、469・471の台付無頸壺、470のミニチュア土器、472から476の甕、477から479・481の高杯の各部位の破片などの土器が出土し、木器には485の経（布）巻具のほか、482から483の加工木片がみられた。

466から468は壺で、467は成型時に口縁部に亀裂が生じ、その部分に粘土を補填して補修している。また、体部には焼成後に外面からの穿孔を行なっている。

469・471は無頸壺で、469は紋様を失ない、その最終末の様相を持つ土器で、双方とも脚部に製作時の不完全な部分を粘土を補うなどして補修した痕跡が認められる。

472から476は甕である。器壁が厚いなど、全体的に作りの粗雑さが目立つものが多い。

477から479・481は高杯である。中期に通有の形態を持つ477・488のほか、後期的様相を持つもの479が出土している。479は杯部に焼成前に小円穴を穿っている。481は裾内面には煤が付着していることから、高杯脚部を甕蓋に転用したのものであると考えられる。

5b層出土の土器には、486・487の壺、488から491の甕、492の無頸壺、498の把手付脚付鉢、494の鉢、495・496の脚部がみられ、土坑出土遺物と同様、中期末葉から後期初頭にかけての様相を示す土器であるということができよう。

482から485は土坑30・31から出土した木器である。485はクスノキを加工して製作された経

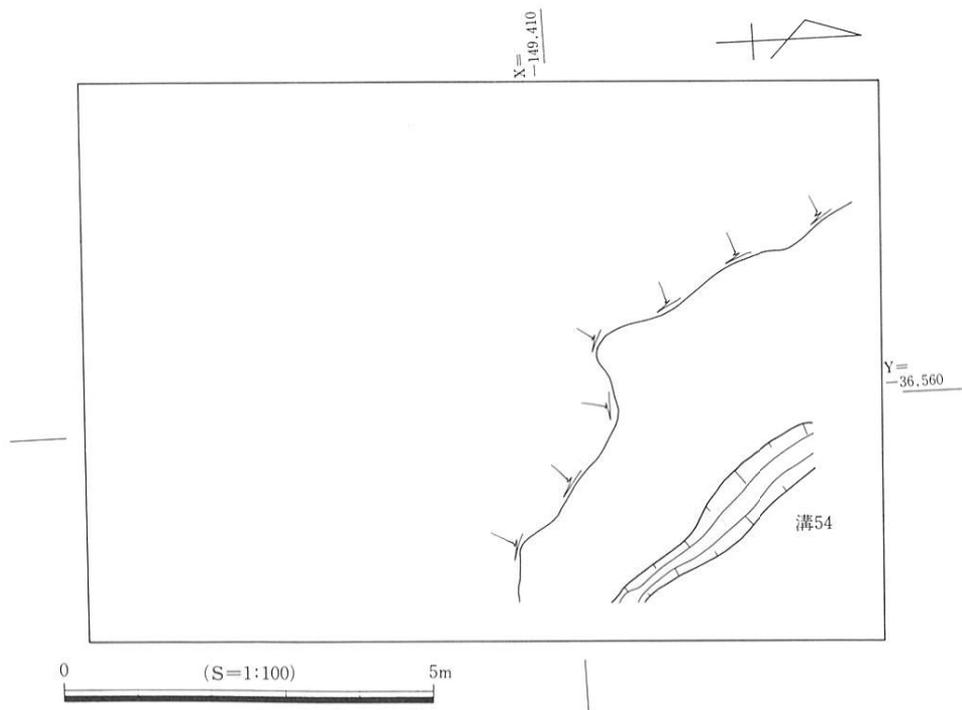


図122 12Aトレンチ第4面 平面

(布) 巻具で、全長48cmを測る。両端には瘤状の隆起を作りだし、身の中央部は半月状に一段切り込まれている。その幅は13cmで、製作される布の幅を推定することができる。482・484はヒノキを角材や板材に加工した木片であり、483はマツ属を使用した同様の板材であるが、用途は不明である。

12Aトレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチの北東部において、T.P.+0.7mから1.3mの範囲に5 b層に相当する微砂混じりのシルト層を検出した。トレンチの大部分を上層からの河川1によって削平されており、シルト層の検出された部分は南西に向かって緩やかに傾斜した地形となっている。5 b層は厚さ10cmほど堆積しており、除去後は均質な微砂層の堆積を、同様の範囲において検出した。

遺構は6層である微砂層の上面において、溝を1条検出した(図122、図版61-1)。溝54は幅約0.6m、長さ約3.5mを測り、南東から北西にのびている。

遺物は5 b層より図123に示す少量の土器が出土している。497は無頸壺の口縁部破片、498は垂下口縁を持つ高杯杯部、499・501は甕、500は鉢の脚部と考えられる破片で、これらの土器は中期後半から末葉にかけての時期のものと考えられる。

14Aトレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチの北西部を中心に、T.P.+0.9m付近において微砂混じり粘土の堆積を検出した。この粘土層はトレンチの南西から北にのびる形で堆積しており、この南東部では、T.P.+0.8m付近においてシルトを含む細砂層が検出された。北西側の

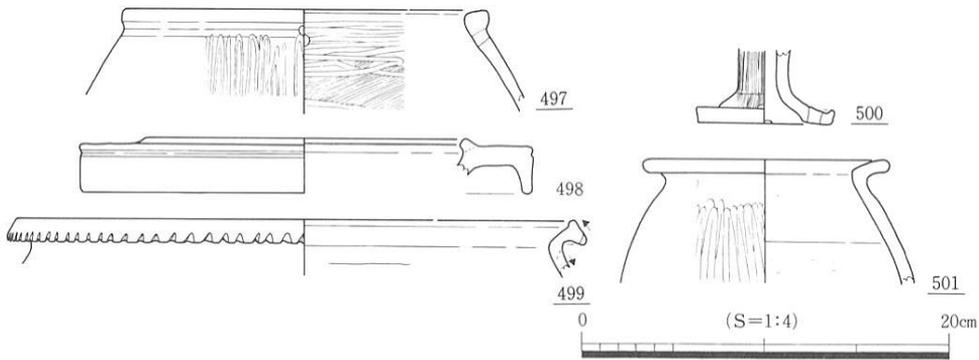


図123 12Aトレンチ第4面 5b層出土遺物

粘土層は溝56の埋土の上層であり、南東側の細砂層が包含層である5b層に相当する。包含層除去後は、均質な微砂層の堆積がT.P.+0.6m付近において検出された。遺構は溝・ピットがあり、基盤層となる6層上面において確認された（図124、図版62）。

溝56は東西約3.0m、南北約6.2mを測り、北西方向に急激に落ち込んでいる。深さは約1.1mであり、埋土はシルト・微砂・粘土が交互に堆積している。植物遺体を多く含み、上層では炭酸カルシウムの沈着がみられる（図版62-2）。この埋土は上層と下層に分層され、下層上面はT.P.+0.3m付近に位置し、ピット66が検出された。堆積の状況から、おそらく下層上面が5b層の段階に対応しており、溝56の形成が複数の段階にわたっていることを示すものと思われる。遺物は埋土の下層上面からまとめて出土しており、壺・甕・脚付鉢・高杯・木製品がみられる。

ピット66は溝56の中央部に位置し、埋土の下層上面に形成された遺構である。直径約40cm、深さ約50cmを測る。埋土は粘質のシルトであり、中位より壺1個体分が出土している。

遺物は図125・126に示すような土器、石器、木器の各種遺物がみられ、これらは溝56や、図124の断面図に示す溝56中位より切り込むピット66、および5b層から出土したものである。

溝56から出土した遺物には、502・503の壺、504の無頸壺、505・506の甕、507の台付鉢、508から516の高杯各部位の破片のほか、細い樹枝に切り込みを入れた用途不明の加工木がみられ、これらの大部分は中位より集中して出土した。土器には503の長頸壺が含まれ、508の高杯なども上端面が面をなし、後期的様相が強い。完形品にまで復原された507の台付鉢は、器形や紋様など、より西方からの影響を多分に受けた土器であるといえよう。

溝56中位より切り込まれたピット66からは、517に示す完形に復原される壺が1個体分ひしゃげた状態で出土している。形態的には中期の延長線上に位置づけられるものであるが、口縁端部の作り方や、体部中央の粘土紐の接合痕が明瞭であること、体部中央に施されるヘラミガキの順序が異なっていることなどから、中期の範疇では捉えきれない部分が多い土器である。

5b層出土遺物には519から525に示す土器のほか、526の石器、527・528の木器がみられる。519・520は小型の鉢である。522は甕、521・523は高杯の破片、524・525は壺の口縁部破片で、

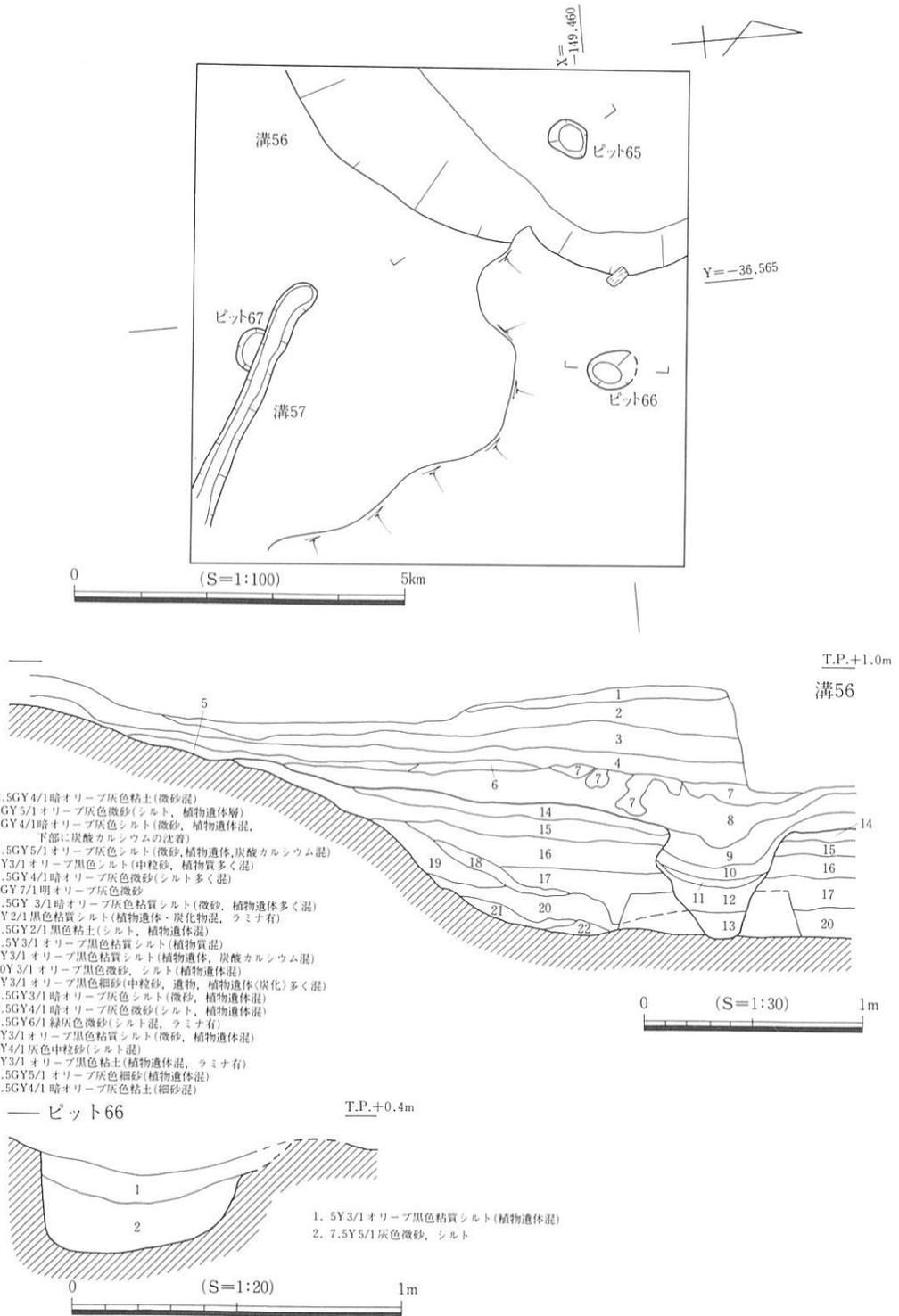


図124 14A トレンチ第4面 平面, 溝56, ピット66断面

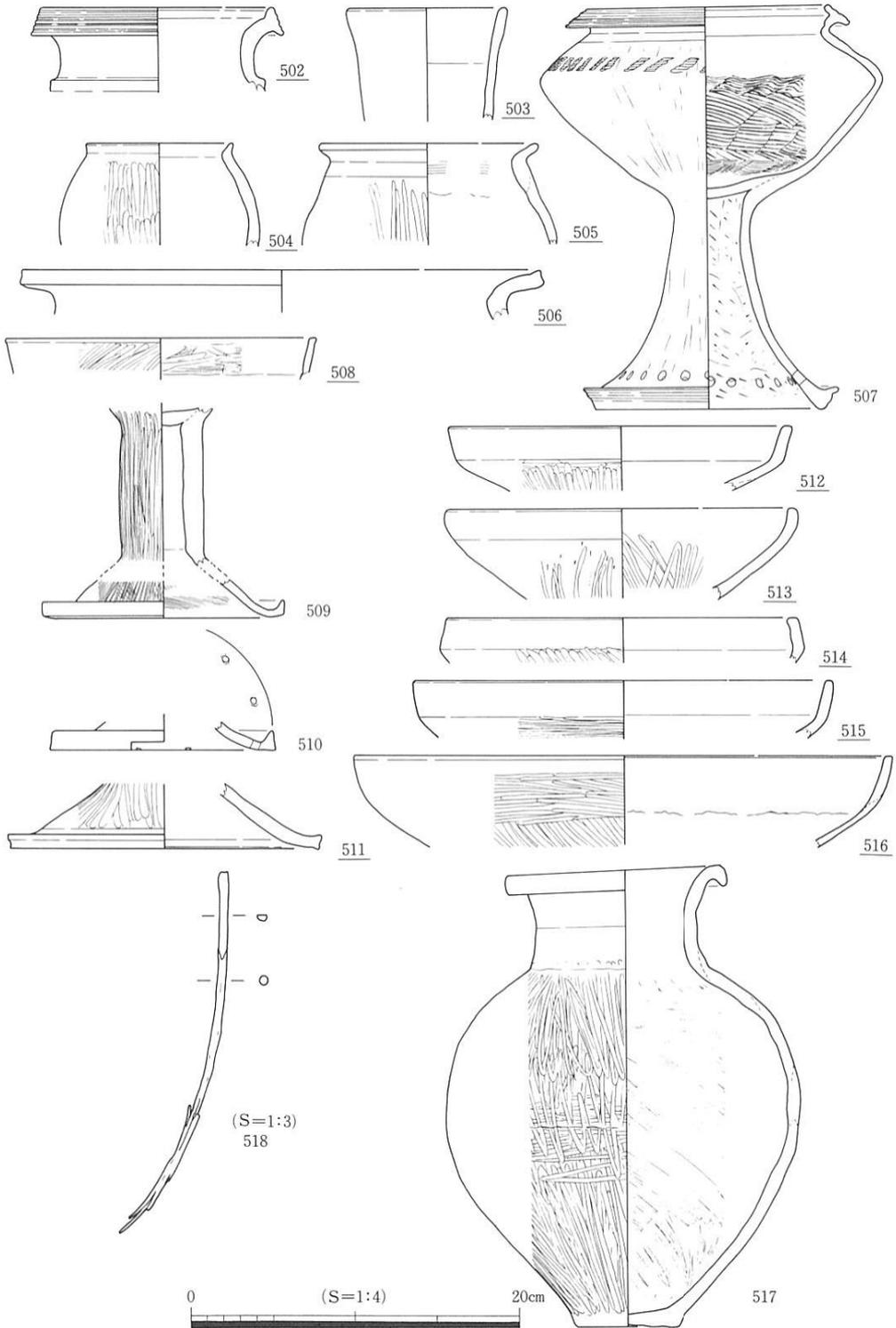


図125 14Aトレンチ第4面 溝56, ピット66出土遺物

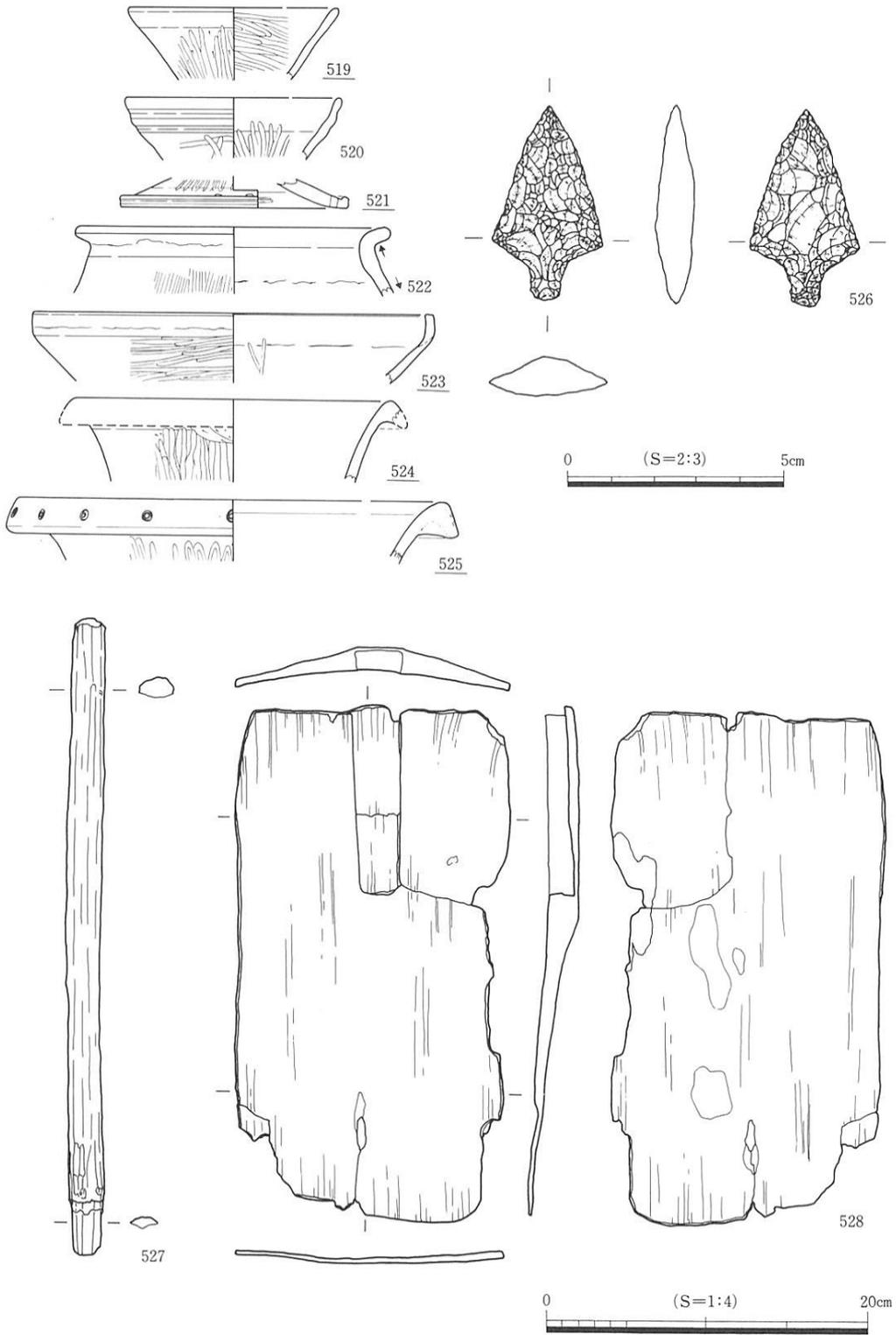


図126 14Aトレンチ第4面 溝56, 5b層出土遺物

525の端面の紋様は竹管紋が巡らされており、中期のそれが刺突紋であることと相違していることで後期的様相を持つ土器であるといえよう。

石器にはサヌカイト製凸基有茎式石鏃(526)が1点出土している。横断面は翼状を呈し、全体的にずんぐりした作り込みであり、その重量は7.3gである。

木器には棒状のものと鋤の身が出土している。527の棒状木製品は樹種不明で、下端部を削り込んで、段状に仕上げられており、非常に丁寧な面取が行われている。528(図版62-3)は組合せ式平鋤の身部分で、肩の平面形態は角肩2種、断面形態はII式に属し、柄との接合法は杓結合法による。柄と結合された状態の角度は 170° を測り、やや角度を持つことから屈折鋤とすることができるのかも知れない。使用される樹種はアカガシ亜属である。

(3)C地区(図127)

A地区からつづく5a層の流水砂層を除去した後は、調査区の全域から5b層に相当する包含層を検出しており、T.P.+1.1m前後に平坦な地形を呈している。5b層は、北側では粘質の微砂およびシルトであり、A地区と類似しているのに対して、南側は砂混じりの粘土を主体としている。これは、調査区の北側はA地区と同様に遺構が比較的密集するのに対し、南側の遺構は散漫で溝や流路を主体とする状況と一致している。既往の調査においても同様の様相がみられ、過去の成果を踏襲する結果となった。

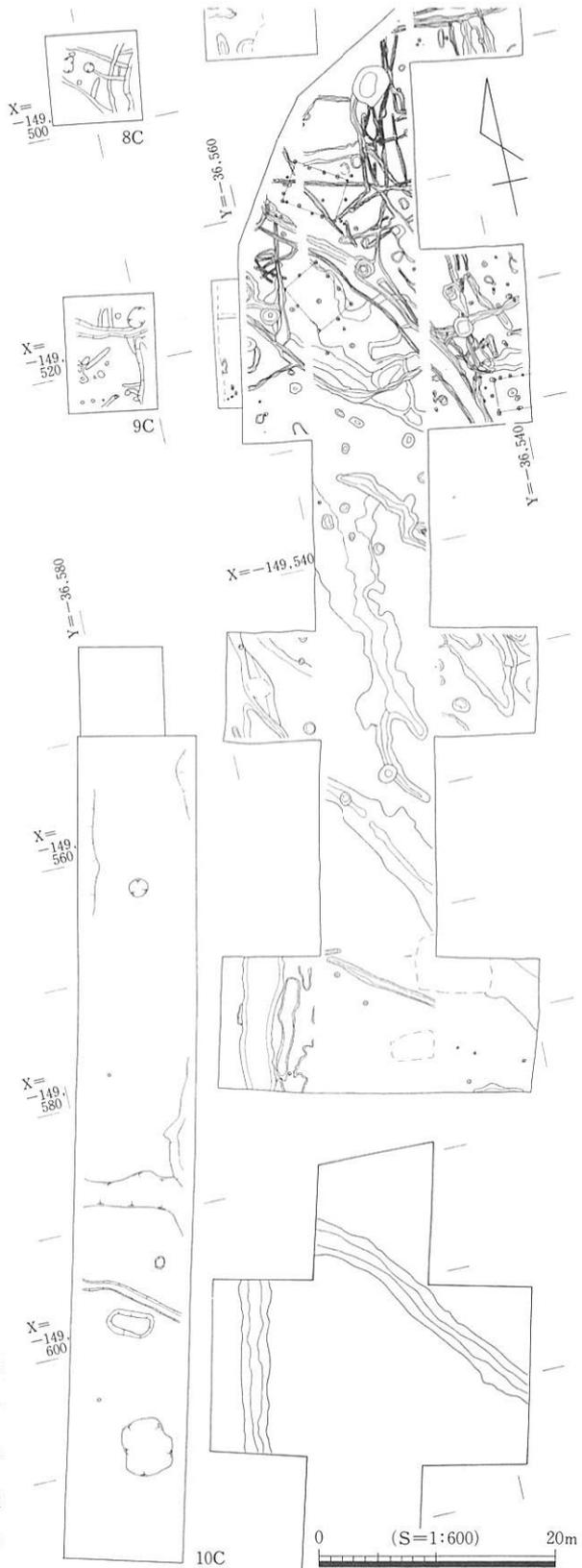
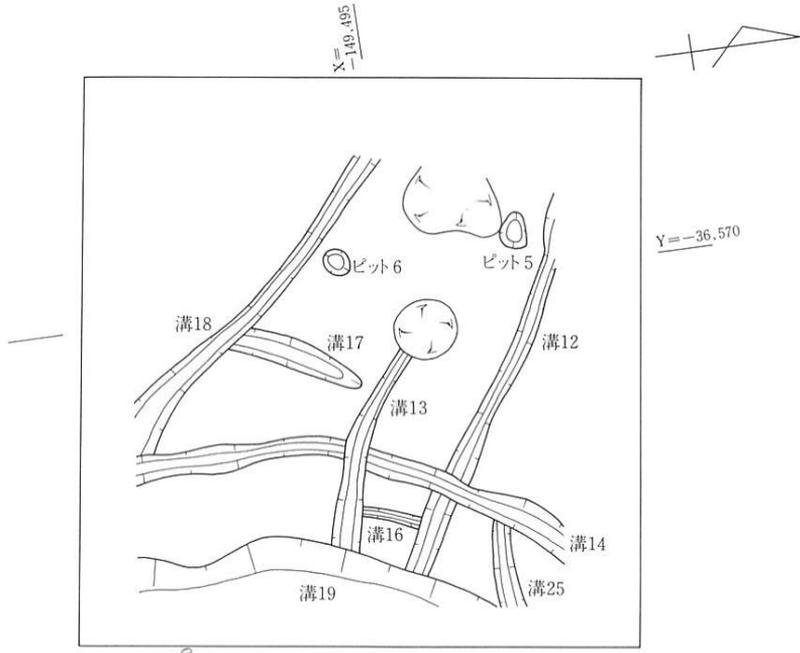
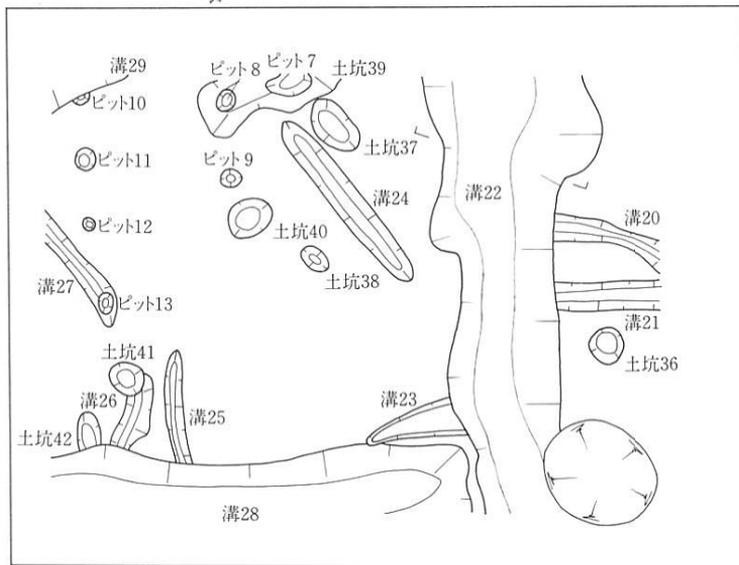


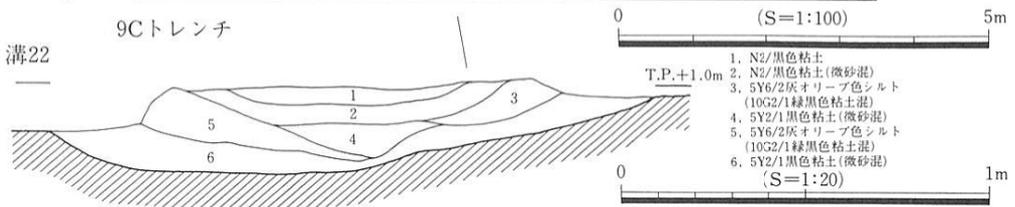
図127 C地区第4面 遺構全体図



8Cトレンチ



9Cトレンチ



1. N2/黒色粘土
2. N2/黒色粘土(微砂混)
3. 5Y6/2灰オリブ色シルト
(10G2/1緑黒色粘土混)
4. 5Y2/1黒色粘土(微砂混)
5. 5Y6/2灰オリブ色シルト
(10G2/1緑黒色粘土混)
6. 5Y2/1黒色粘土(微砂混)

図128 8C・9Cトレンチ第4面 平面, 溝22断面

5 b層除去後は、T.P.+0.9m前後において、上層と同様の範囲に基盤層となる6層を検出した。6層はA地区と異なり、均質な粗砂の層である。

遺構はおもに6層上面において検出されており、溝・土坑・ピットがみられる。

8 Cトレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチの全域において、T.P.+1.1m付近に5 b層相当の包含層の堆積を検出した。5 b層は植物遺体を含む粘質の微砂であり、厚さ約20cm堆積している。5 b層除去後は、トレンチ全域において6層に相当する均質な粗砂の堆積を検出した。

遺構はおもに6層上面に形成されており、溝・土坑・ピットがみられる(図128、図版63-2)。溝は東西方向に4条、南北方向に3条検出されている。溝12・18は東西方向の溝で、2.5mから3.0mの間隔をもって、やや北寄りに並行にのびている。この区画内にピットと南北の小溝が検出されているものの、建物などはみられない。溝14はトレンチ東側に位置し、やや弧状に南北方向にのびている。この内側にあたる部分にやや大きな溝19の西肩を検出した。

溝12はトレンチの北側、幅約30cm、長さ約5.4mの範囲において検出された。深さ約10cmを測り、埋土より遺物が出土している。遺物としては、高杯がみられる。

溝19はトレンチの東側の鋼矢板際に検出された。西側の肩部を確認しており、東に向かって落ち込んでいる。東西約1.0m、南北約5.0mを測り、南北方向につづくものと思われる。遺構内より遺物が出土しており、壺・無頸壺・鉢がみられる。

上記以外では5 b層より壺・甕・高杯・石鏝が出土しており、図129-529から537の遺物がみられる。

529はピット5から出土した甕、530は溝12より出土した高杯、531から533は溝19より出土した土器で、それぞれ水差、無頸壺、鉢あるいは高杯の口縁部破片である。これら以外に包含層からは、534から537に示す土器が出土している。これらの遺物は中期後半から末葉にかけてのものであろう。

9 Cトレンチの5 a層除去後の状況は、トレンチ全域において5 b層となる包含層の堆積を検出した。5 b層は上下2層に分層が可能であり、上層は粘質の微砂層、下層は粘質のシルト層となっている。5 b層の上面は、トレンチの北側のX=-149,495以東ではT.P.+1.2mを測り、南側ではT.P.+1.0mとやや低くなっている。

5 b層除去後は、トレンチ北東の一部に中粒砂がみられる以外は、ほぼトレンチの全域において基盤となる6層相当の均質なシルト層の堆積を検出した。上層と同様に、トレンチの北側ではT.P.+1.0m、南側ではT.P.+0.9mと若干の高低差がみられる。遺構は基盤層である6層上面に形成されており、溝・土坑・ピットがみられる(図128、図版64-1)。

遺物はおもに5 b層と溝22から出土しており、壺・甕・高杯・石器がみられる。

溝22はトレンチの北側、X=-149,495付近において東西方向にのびる溝である。幅約0.9m、長さ約6.0m、深さ約30cmを測る。この溝22を境界とし、北側と南側の標高が変化している。埋土は微砂混じりの粘土とシルトである。

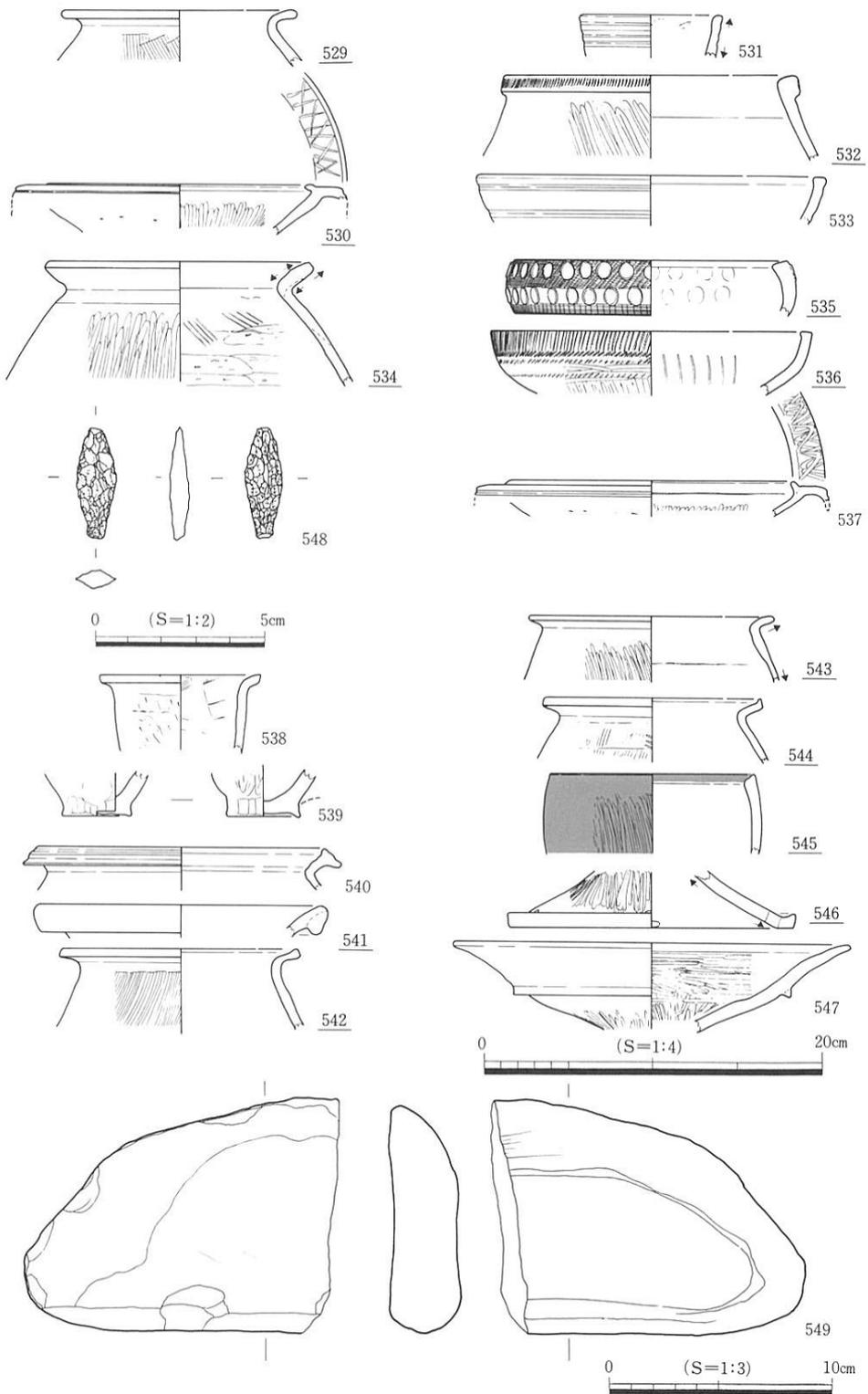


図129 8C・9C・10Cトレンチ第4面 溝12・19・22, ピット5, 5b層出土遺物

溝22の北側は、高所であるため立地としては優れているが、南北方向の溝2条とピットがみられるのみであった。一方、南側は溝・ピットが比較的まとまって検出されており、建物の存在した可能性が考えられる。しかし、今回の調査では、建物を設定できるほどの明確な遺構の検出は困難であった。

遺物は図129-538から549に示す土器や石器があり、これらのうち538から540は溝22から出土したもので、538は小型の鉢と考えられるもの、539は把手の欠落した鉢、540は口縁部に凹線紋を巡らす甕の破片である。このほか、5b層から541から549に示す遺物が出土しており、541は壺の口縁部、542から544は甕の破片、545は口縁部上端面および外面に赤色顔料を塗布した無頸壺、546・547は高杯の脚部および杯部破片である。また、549は砂岩製の石器で、表裏面には使用による磨滅が確認できる。これらの遺物は、中期後半から後期初頭にかけての時期に属するものと考えられる。

10Cトレンチの5a層除去後の状況は、トレンチ全域において、砂混じり粘土の堆積を検出し、T.P.+1.2m付近には植物遺体が含まれていた。5b層に相当する包含層であり、厚さ約20cm堆積している。上下2層に分層が可能であるものの、いずれも明確な遺構はみられず、遺構面としては成立しにくい。

5b層除去後は、T.P.+0.9m付近にて砂を含む粘土層の堆積を検出した。この粘土層は6層に相当する基盤層であり、トレンチの全域に認められる。地表面はあまり変化がなく、非常に平坦な地形を呈している。しかし、遺構の密度は低く、トレンチ全域にてわずかに溝3条と土坑・ピットが検出されたのみである（図版64-2）。

このように、砂層を基盤とするA地区とは異なり、粘土層上面に遺構面を形成することが、この地区の特徴といえる。あるいはこのことが、本地区の遺構の形成を左右していたのかもしれない。

なお、遺物はほとんどみられず、遺構からも出土してい

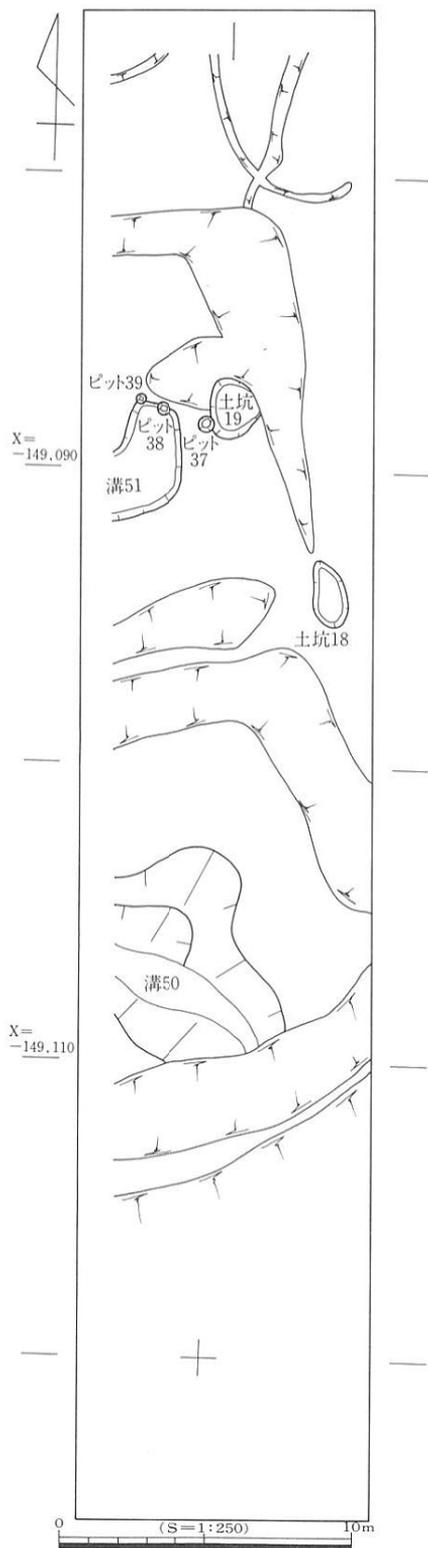


図130 3 | トレンチ北側第5面 平面

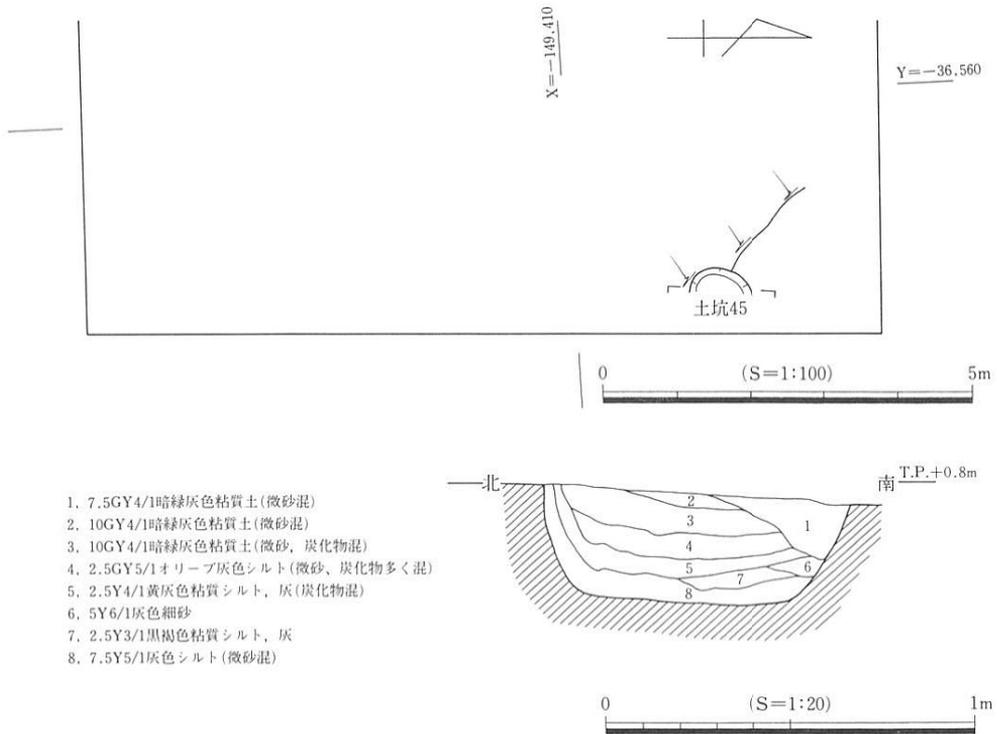


図131 12Aトレンチ第5面 土坑45平面, 断面

ない。図化したものとしては、5 b層より出土した図129-548のサヌカイト製凸基無茎式石鏃がみられる。断面扁平な菱形を呈し、形態的にも一応石鏃と考えたが、先端部の一部と、基部が欠損しているため、石鏃の可能性も考えられよう。

5. 第5面(弥生時代中期後半)

第5面は弥生時代中期後半の遺構面であり、7層を基盤層とする。遺構の検出された地区はごく一部であり、以下にその説明を行う。

(1) I 地区

6層を約15cmほど掘削した状況としては、トレンチのほぼ全域において、T.P.-0.2mから+0.5mの範囲に7層に相当するシルトを含む砂層の堆積がみられる。前述のように、6層はトレンチ北側、X=-149,110以北でのみ検出された層であり、これより南側については、すでにこの砂層上面は第4面の遺構によって攪乱されていた。トレンチ全域においても、上層の遺構による攪乱が激しく、明確な遺構の検出はほとんど不可能であった。わずかに方形周溝墓の下層部分より、溝2条と土坑・ピットが検出されたのみである(図130)。ただし、これらの遺構も、その一部を方形周溝墓の周溝によって削平されており、全形の把握は困難であった。

溝50はトレンチ北側のX=-149,107、Y=-36,566、第4面11号方形周溝墓の下層部分に検出

された。南側を周溝に削られており、北西方向にのびている。規模は幅5.0から6.5m、長さ約6.5m、深さ約70cmを測り、大規模な溝である。北側の肩が外に向かってふくらんでおり、その斜面は段を成している。これに対して南側はほぼ直角に落ち込む形を呈する。埋土は微砂やシルトを含む粘土であり、一部に炭化物を含んでいる。遺物はみられない。

溝51は溝50の北、 $X=-149,090$ 、 $Y=-36,568$ に位置する。幅約2.0m、長さ約4.0mの範囲において検出された。深さは約35cmを測り、北からはほぼ直角に屈曲して西にのびる形を呈している。

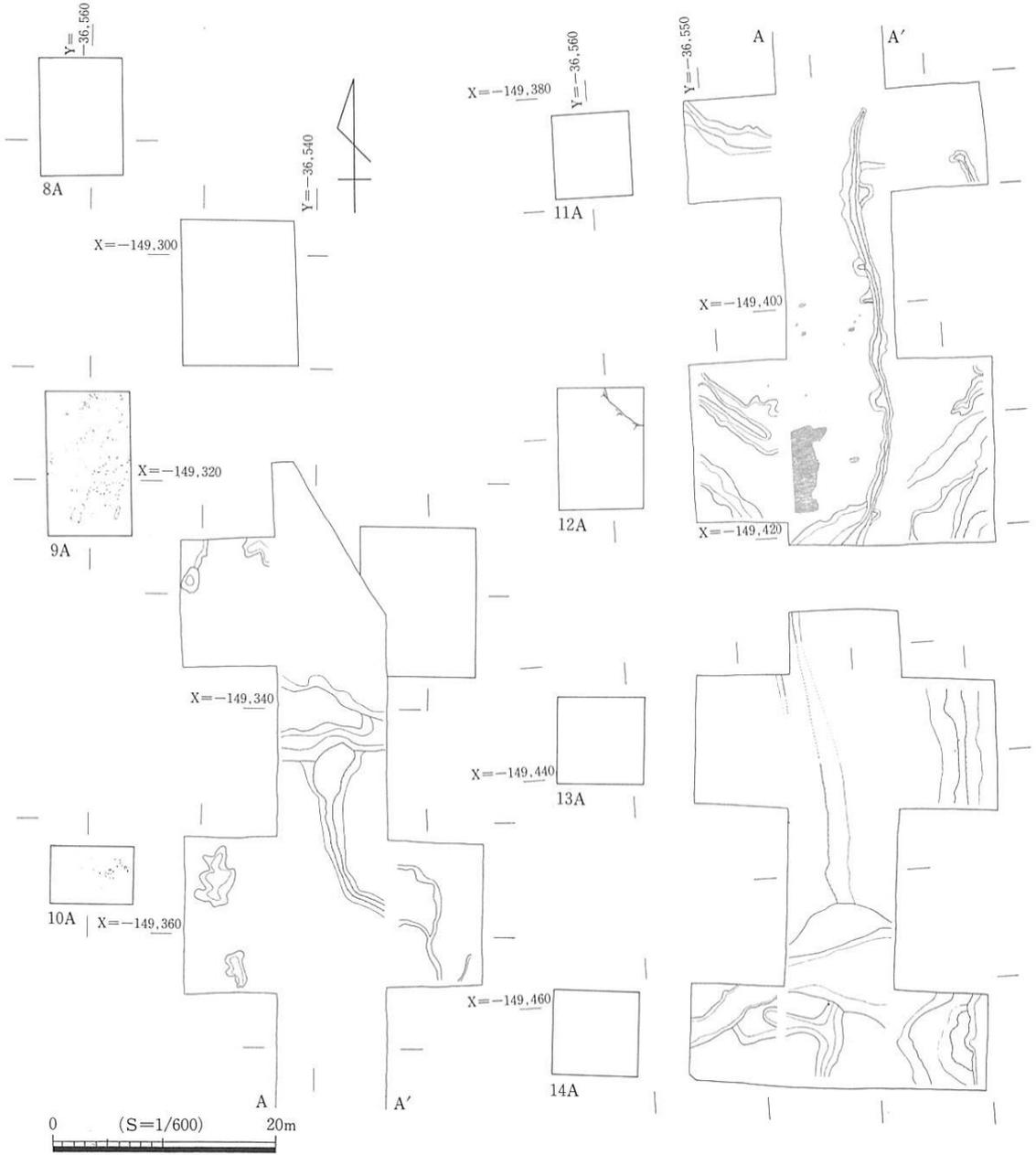


図132 A地区第6面 遺溝全体図

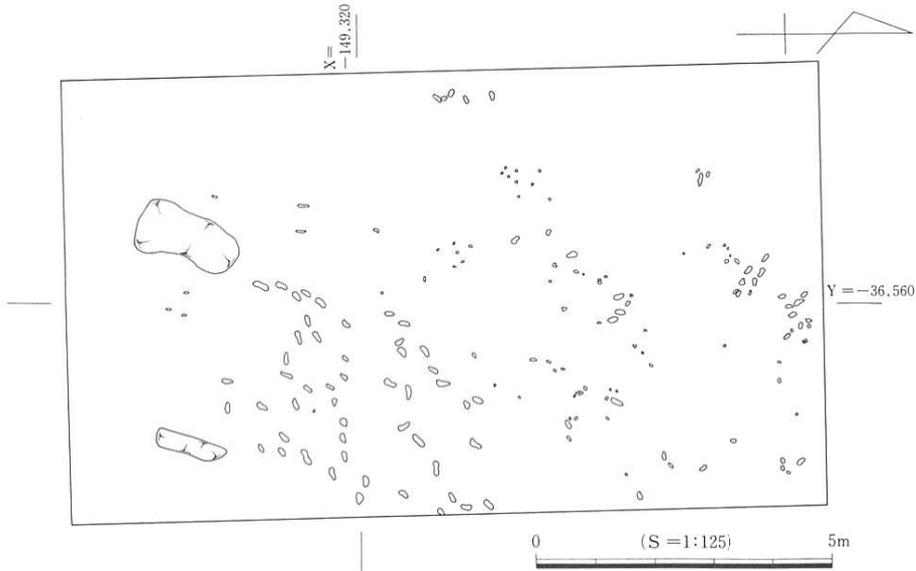


図133 9Aトレンチ第6面 足跡検出状況

この溝51の北肩付近にピット群が検出された。肩のラインにほぼ平行する形で3基みつかっており、溝に伴うものである可能性が高い。しかし、その性格については不明である。

(2)A地区

6層除去後の状況としては、13Aトレンチを除く調査区において、7層相当のシルトと微砂の堆積を検出した。8Aから11AトレンチではT.P.±0.0mから0.8mの範囲に、ほぼ平坦な地形を呈している。12Aから14Aトレンチでは、13Aトレンチを中心とする上層からの河川による攪乱のため、13Aトレンチに向かって傾斜するような形で7層の一部が検出された。

12Aトレンチの6層除去後は、トレンチ北東部のごく一部に7層相当の微砂層の堆積を検出した。これより南側は上層の河川1によって削られている。

土坑45は、残存している7層の南端部に検出された(図131、図版65-1)。X=-149,408、Y=-36,557付近に位置し、T.P.+0.8mを測る。南北約90cm、東西約40cm、深さ約30cmである。埋土は微砂を含む粘質土とシルトであり、下層には炭化物と灰質を多く含む。遺構の壁面に被熱の痕跡はみられない。おそらくこの周辺で火を使った際に、炭化物などが混入したものか、あるいはその廃棄土坑と思われる。遺物は出土していない。

6. 第6面(弥生時代中期中頃)

第6面は弥生時代中期前半から中頃の遺構面であり、8層上面を基盤としている。8層はA地区およびC地区で検出されており、I地区では確認されなかった。

A地区では12Aトレンチより北側において、7層を除去した後、8層に相当する均質な粘土層の堆積を検出した。13Aトレンチでは上層の河川埋土が堆積しており、対応する粘土層は検出さ

れていない。14A トレンチでは7層がみられず、6層除去後すぐに8層を検出している。T.P. -0.5mから+0.7mの範囲にみられ、各調査区によってかなりの高低差がみられる。8層は粘土と砂が交互に堆積する流水砂層であり、遺構面として検出した8層上面は、流水堆積の最上層である粘土層の上面となっている。

遺構面として検出したものは、粘土層上に残存する足跡のみであり、いわゆる遺構はいずれの調査区においても確認されなかった(図132、図版66・67-1)。なお、断面にみられる微妙な地形の変化は、8層を堆積させた河川の流路が変化したものと考えられる。

9A トレンチの7層除去後の状況は、トレンチの全域において、T.P. +0.0mから0.2mに均質な粘土層の堆積を検出した。粘土層は8層上層に相当しており、以下は砂層とシルト層が交互に堆積している。厚さ20から30cmを測る。足跡は上部の粘土層上面に残されている(図133、図版65-2)。

足跡はトレンチのほぼ全域において検出された。とくに東側に顕著にみられ、その中でもいくつかの集合に分けられる。足跡内には遺構面を覆う砂層が流入しており、検出は比較的容易であった。検出された足跡は大きく3種類に分類され、各地点にまとまってみられる。

X=-149,320、Y=-36,556を中心に半径約3.5mの範囲にみられる足跡があり、大きさは20cmから25cmを測る。足跡の形態と大きさから、おそらく成人のものと思われる。

X=-149,311、Y=-36,560を中心に半径約1.5mの範囲にみられる足跡があり、大きさは10cmから15cmを測る。足跡の大きさから、小児のものと思われる。

X=-149,314、Y=-36,564を中心に半径約1.0mの範囲、X=-149,314、Y=-36,561付近、X=-149,315、Y=-36,559付近において検出された足跡である。大きさは約5.0cmであり、足跡の一部が二股に分れている。猪、鹿などの偶蹄類の足跡と考えられる。

このように、複数の種類の足跡は他の調査区においても検出されており、当時の環境などを考える上で有効な資料であると思われる。なお、人の足跡については専門分野からの調査を行なっている。

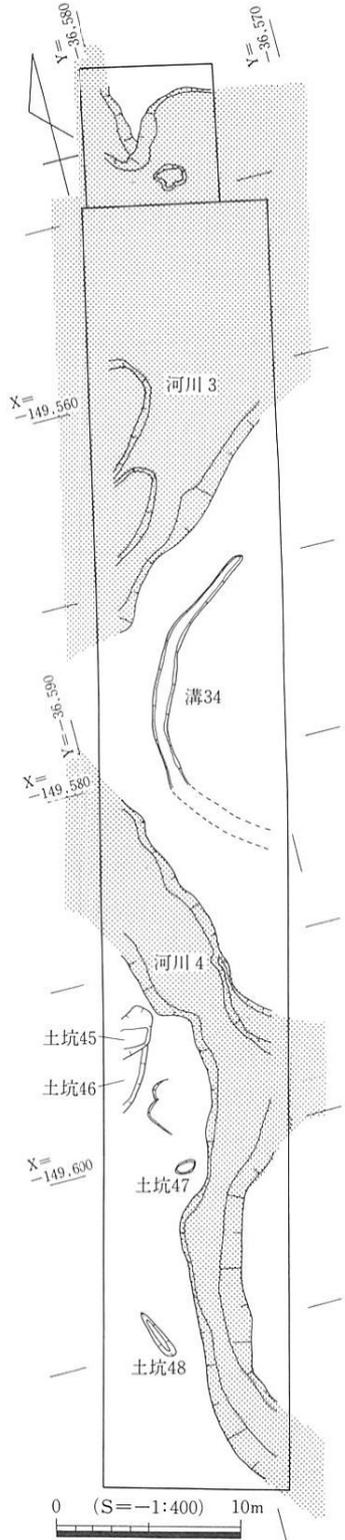


図134 10C トレンチ第7面 平面

7. 第7面（弥生時代中期前半）

8層除去後の状況としては、I地区を除くA・C地区において、粘土・シルト・砂による流水砂層の堆積を検出した。9層に相当する流水堆積層であり、観察地点によって状況が異なる。層内には一様にラミナがみられ、活発な水成堆積を示している。

遺構としては、C地区において9層上面から溝・土坑・河川を検出した。A地区については、これに対応する遺構面は検出されたものの、明確な遺構などはみられなかった。一部、14Aトレンチでは足跡が検出された（図版67-2）。

10Cトレンチの8層除去後は、粘質土および粗砂・中粒砂の堆積を検出した。このうちの粘質土が遺構面の基盤層となる9層に相当しており、砂層の堆積は河川の埋土部分となる。9層の平均地表面はT.P. ±0.0mであり、一部自然堤防状に盛り上がる部分はT.P. +0.6mを測る（図134・135、図版68）。

河川はトレンチの北側と南側の2ヵ所に検出された。北側の河川3は、X=-149,570以北において南西から北東に向かってのびている。幅約15m、深さ約30cmを測り、南西部に中洲状の高まりがみられる（図版68-1）。

河川4はX=-149,580以南において、幅3.0mから5.0m、長さ約35mにわたって検出された。深さ約55cmを測り、ほぼ南北に東から西に向かつてのびている。調査区の制約上、西側の状況は確認されていないが、河川4と河川3は同一の遺構である可能性も考えられる。

これらの河川の間は平坦な地表面であり、溝34が検出された。溝34は幅約0.8m、長さ約13mを測り、東側に弧状を呈している。建物などに関連する溝の可能性はある。

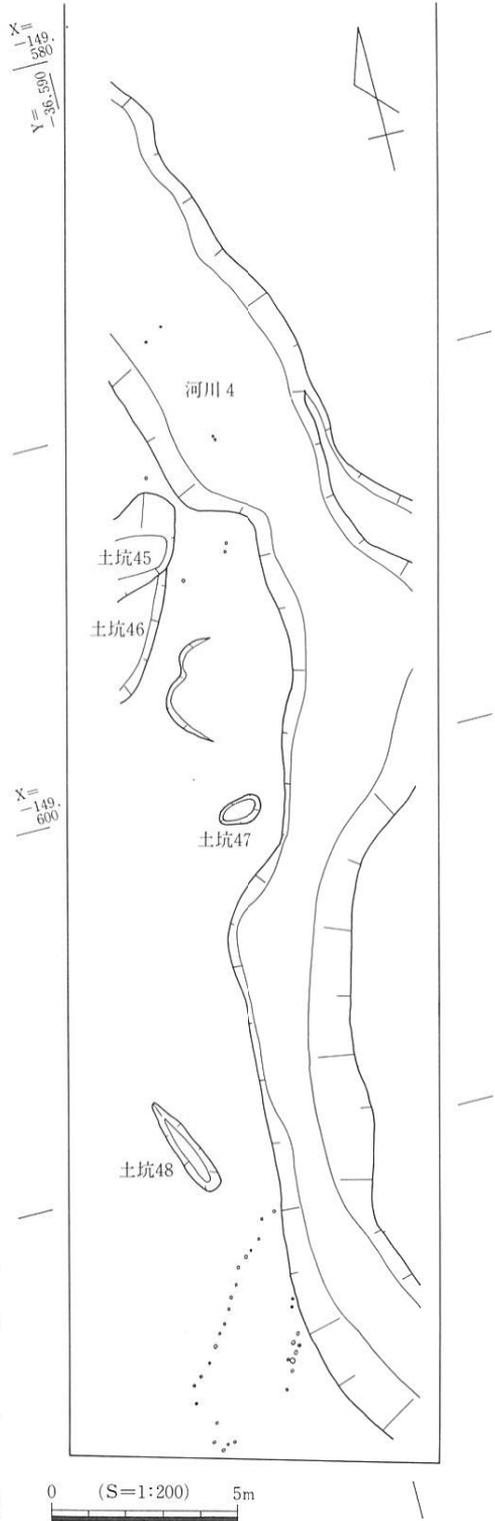


図135 10Cトレンチ南側第7面 平面

河川4の西側の肩は幅約3.3mの自然堤防状に盛り上がり、その西側に土坑数基が検出された。土坑45・46は切り合い関係のある2つの土坑である。ともに西側に向かって落ち込んでおり、断面からは第7面における同一遺構の時期差と考えられる。土坑の南側は高まりをもって

おり、西壁の観察から人為的に盛り上げられたものと思われる。土坑の規模は南北約4.8mと大きく、前述の状況から西にのびる大溝の可能性も考えられる。

また、これらの土坑の北側では、やや散漫ではあるが、杭の痕跡が検出された。地上部分が腐朽しており、その性格については不明である。

このような杭の痕跡はトレンチの南側、X=-149,610以南においても検出された(図135、図版68-2)。トレンチのほぼ中央、河川4の西肩より南南西に向かって2列の杭列がみられる。約4.0mの間隔をもち、平行に並ぶものと思われる。トレンチの南端において西側の杭列が南東に屈曲している。東側の杭列は途中で切れている。さらに南西にのびる場合は東側に河川が接近しており、あるいは何か区画するものとして作られたのかもしれない。また、木質は地下部分のみ残存しており、上部は腐朽している。地下部分の深さは50cm以上であり、地上部分もある程度の長さがあったと思われる。

遺物は図141-556・557の土器がみられる。ともに河川3から出土し、556は甕の口縁部、

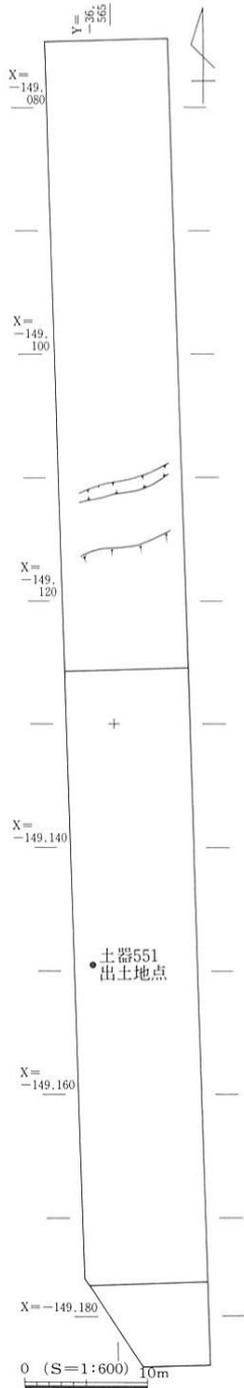


図136 3 | トレンチ第8面

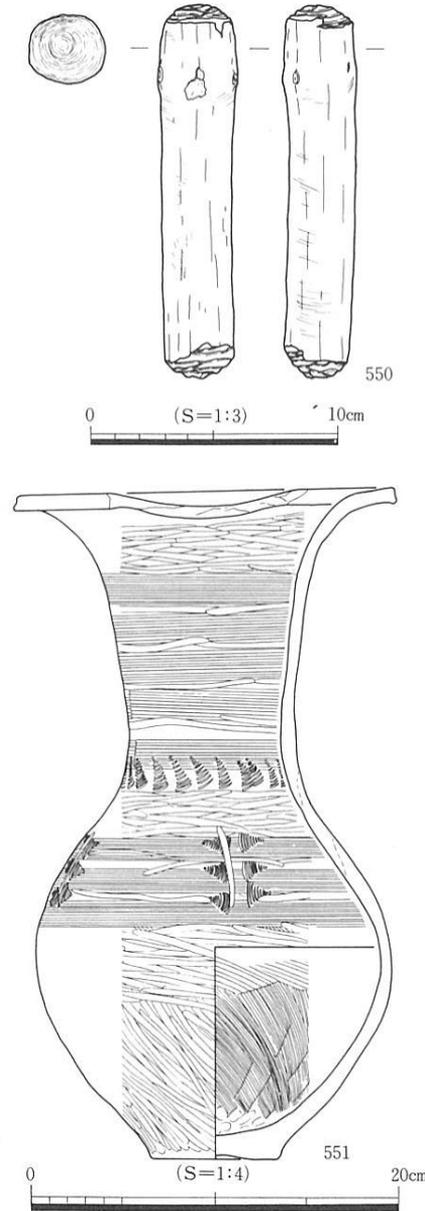


図137 3 | トレンチ第8面 出土遺物

557も甕の底部と思われる破片で、中期初頭の時期を与えられよう。

8. 第8面（弥生時代中期前半）

調査区のほぼ全域で検出された9層の除去後は、安定した粘土層の堆積が調査区の全域において検出された。遺構面は上部の流水砂である9層によって削平された可能性は高いものの、8Aトレンチや8C・9Cトレンチでは、10層相当の包含層と思われる植物遺体を含む砂混じりのシ

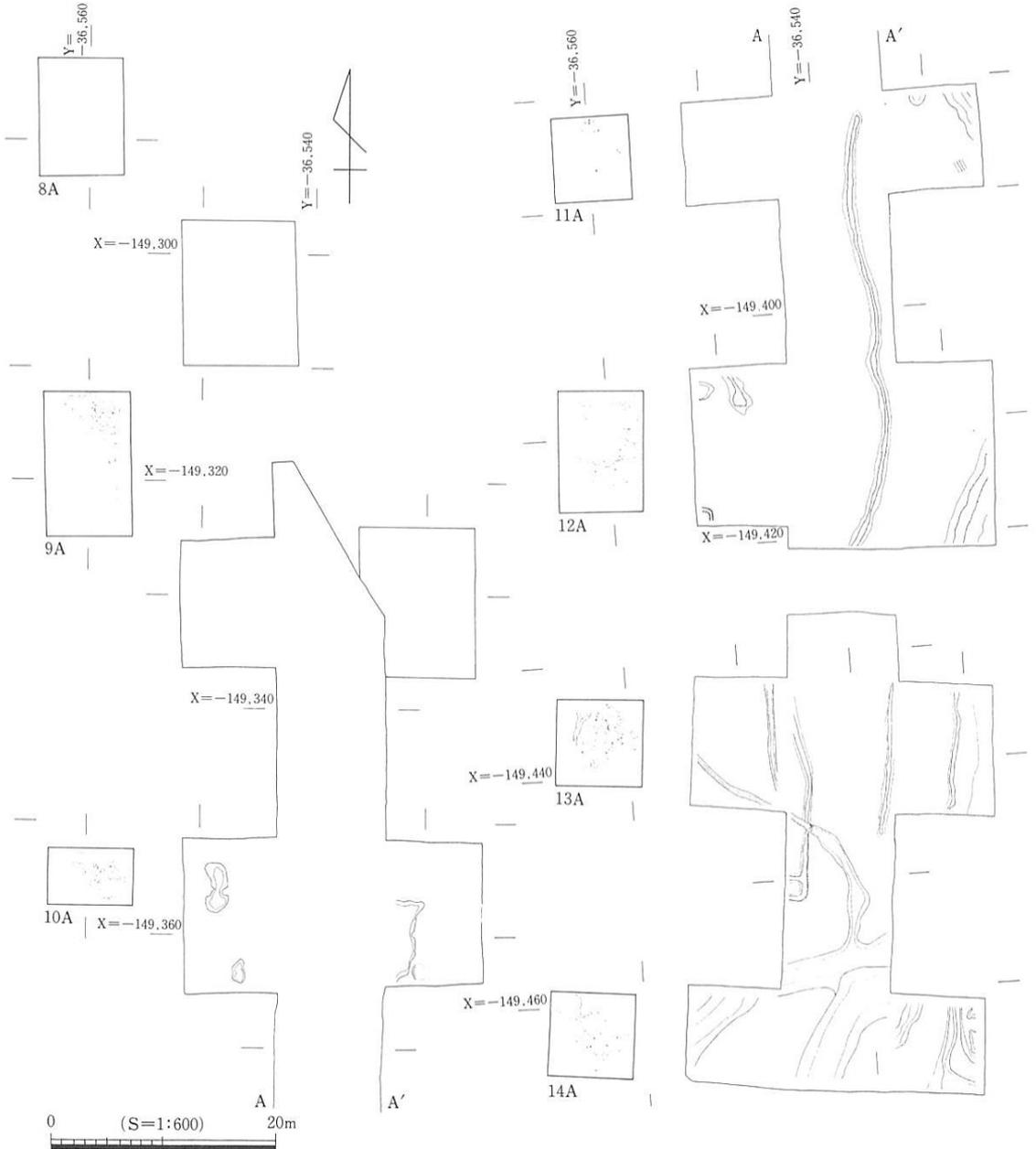


図138 A地区第8面 遺構全体図

ルト層が検出されている。遺構としては河川や足跡があるものの、その密度は極端に低い。

(1) I 地区 (図136)

9層相当の砂層の除去後は、トレンチの全域において、T.P. -1.0m前後に均質な粘土層の堆積を検出した。これは第8面の基盤層である11層に対応するものであり、植物遺体をラミナ状に含む粘土層である。この地区においては、上記のような包含層である10層は検出されなかった。

遺構はまったく検出されておらず、方形周溝墓の周溝と沼状遺構による攪乱のみである。

遺物は11層である粘土層の直上付近より、9層に被覆された状態で出土しており、図137-551に図化した土器、550の木器がみられる。551は口縁部の一部を欠いた中期初頭の広口長頸壺で、頸部には櫛描直線紋、体部上半には直線紋を横位の扇形紋で4分割し、その間をヘラミガキにより消去することによって疑似流水紋を表現している。頸部と体部の境は縦位の扇形紋で区画し、その下方には無紋帯が設定されているが、これは、頸部紋様帯と体部紋様帯を分割する前期からの伝統を踏襲する意識が働いているものとみなしたい。また、口縁部の一部を欠失したのみで、その他の部位は完存して出土していることから、供献土器として使用されていたことが考えられる。550はヒノキ材の両端を裁断した芯持の木材を棒材に加工したもので、表面には軽微

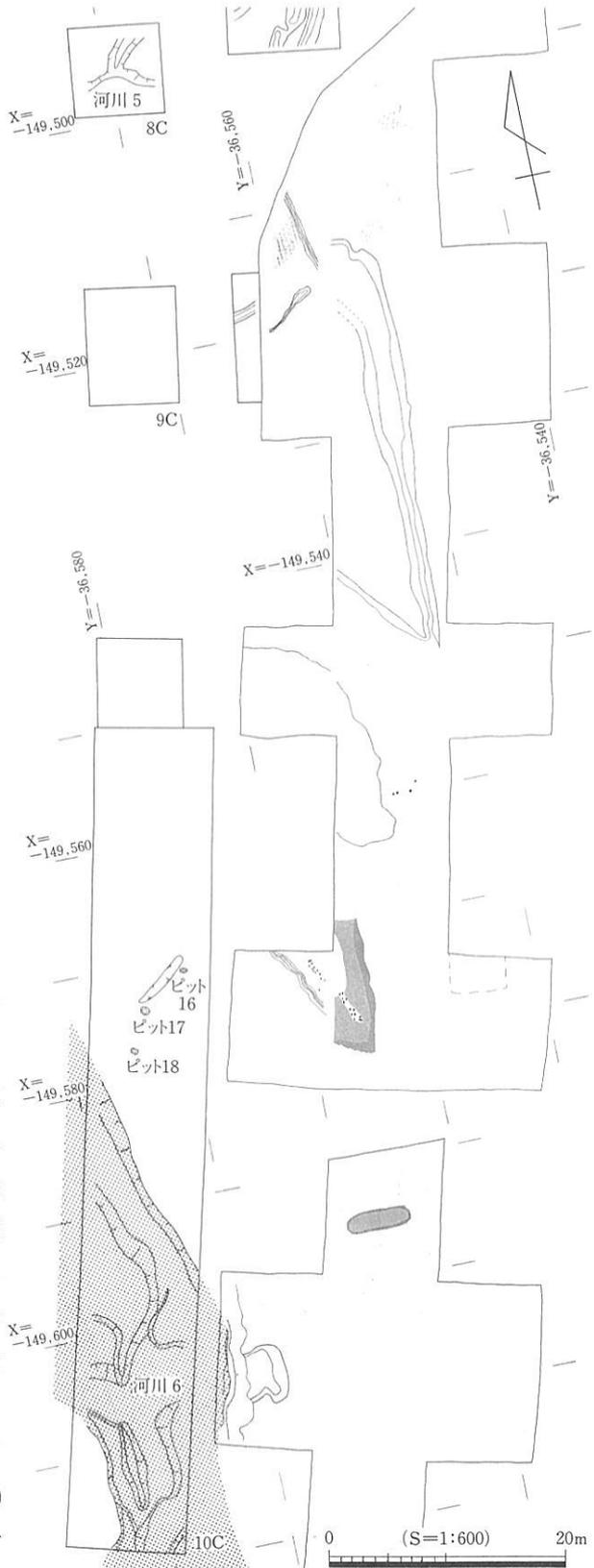


図139 C地区第8面 遺構全体図

な擦痕が認められる。

(2)A地区 (図138)

9層の除去後は、13A トレンチを除く調査区の全域において、T.P. -1.1m前後に粘土層の堆積を検出した。I地区と同様、ほとんどは11層の粘土層であるが、8A トレンチの北側の一部、および10A・12A トレンチでは10層を検出した。

いずれのトレンチにおいても明確な遺構は確認されておらず、9Aから14A トレンチにおいて、足跡群が検出されたのみである。

13A トレンチについては、第3面の河川1による攪乱の下層より異なる堆積の河川3が確認された。しかし、トレンチ全体が河川の内部となっており、河川の規模などは不明である。

(3)C地区 (図139)

9層を除去後の状況としては、調査区のはほぼ全域において、T.P. -0.5m付近に粘土層の堆積を確認した。前述のように、8C・9C トレンチでは包含層である10層が検出されているが、10C トレンチでは基盤層となる11層のみが確認された。遺構は調査区の北端と南端で検出されており、中央部では全くみられなかった。

8C トレンチでは、9層除去後、包含層である10層がトレンチの北半において検出された。南側は上層が落ち込んでおり、底面では下層の12層があらわれている。10層の下層は基盤層である11層が認められず、10層が12層の上に直接堆積している。

遺構としては上記の落ち込みを河川5とし、枝分れして北にのびる状況が確認されたのみである。

10C トレンチでは9層の除去後、炭化物・炭酸カルシウムなどを含む11層に相当する粘土層が検出された。地表面はT.P. -0.5m付近であり、ほぼ平坦を成している。この平坦部のX=-149,575、Y=-36,581付近にピットが数基検出されている。しかし、周辺から他の遺構がみられないため、性格については不明である。

トレンチ南半部のX=-149,580以南では、幅約6.0mの河川6が検出されている(図140、図版69)。深さは約35cmであり、底面は蟹などの生痕によって乱れている。流路は南から北西に向かっ

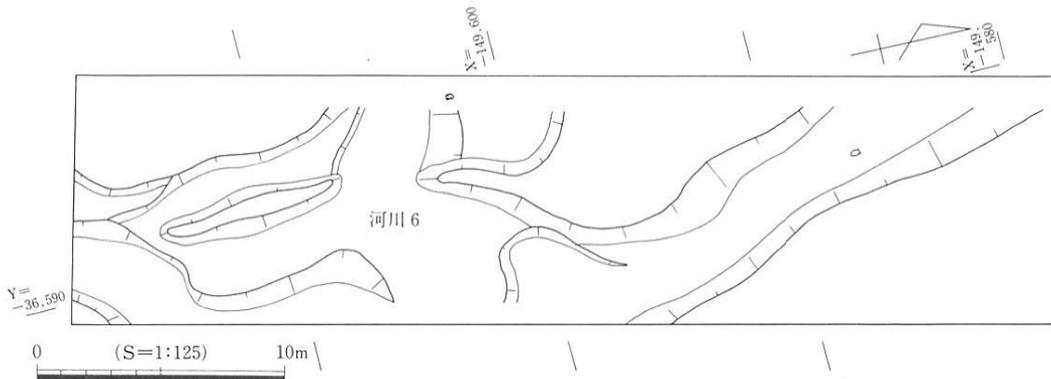


図140 10C トレンチ南側第8面 平面

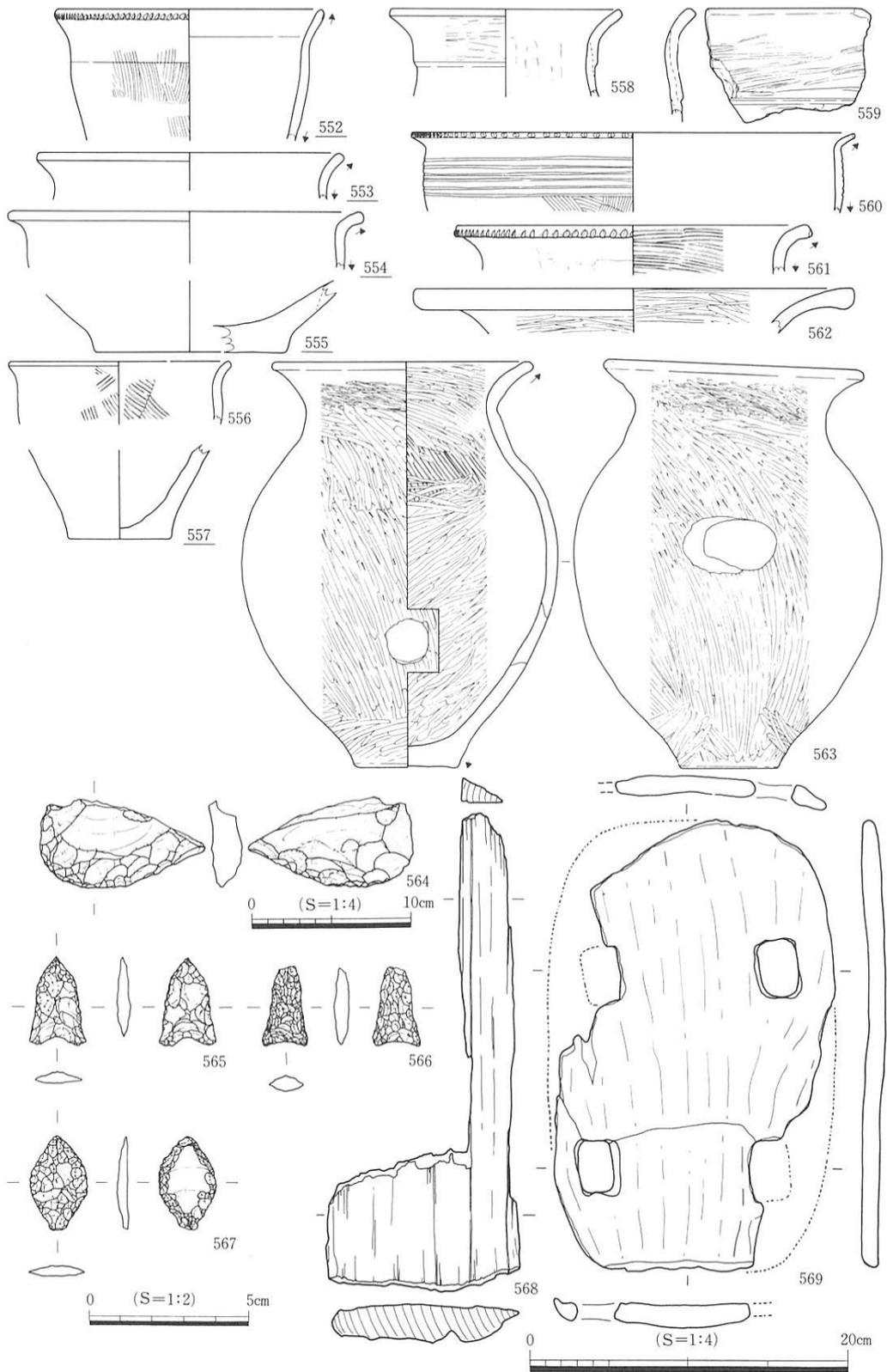


图141 10Cトレンチ第7面 河川3, 第8面 河川6, 9層出土遺物

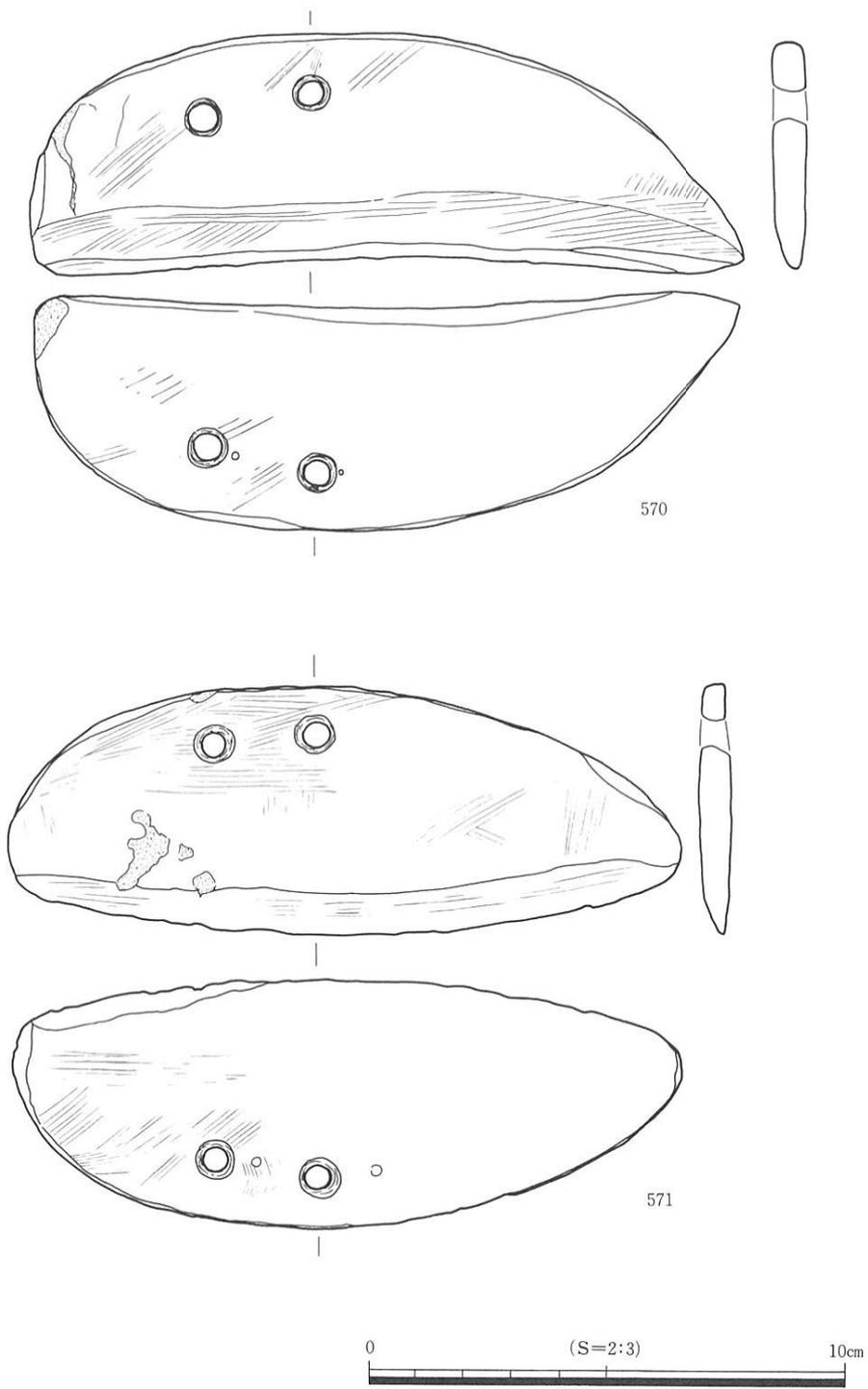


図142 10Cトレンチ第8面 河川6, 9層出土遺物

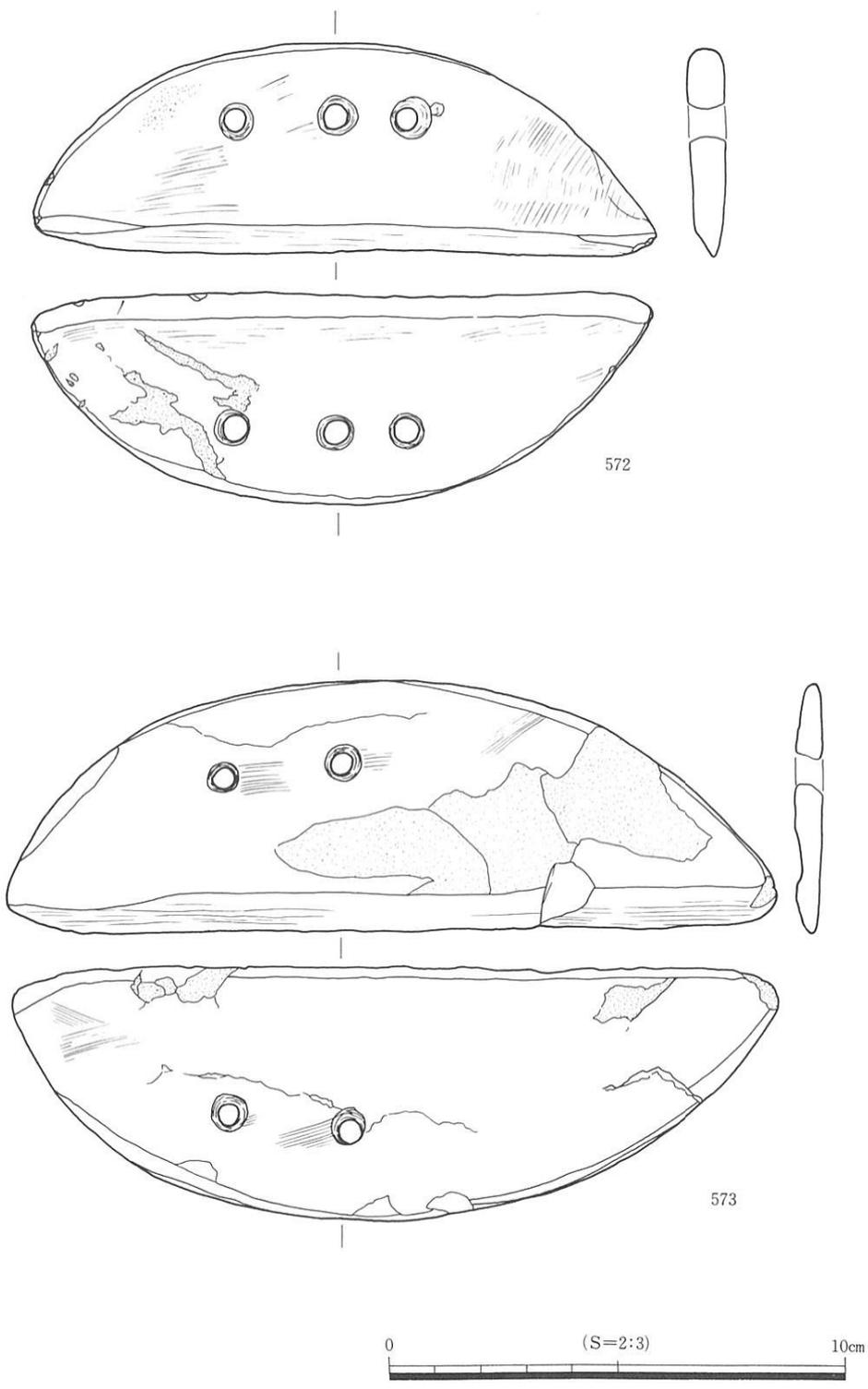


図143 10Cトレンチ 9層出土遺物(1)

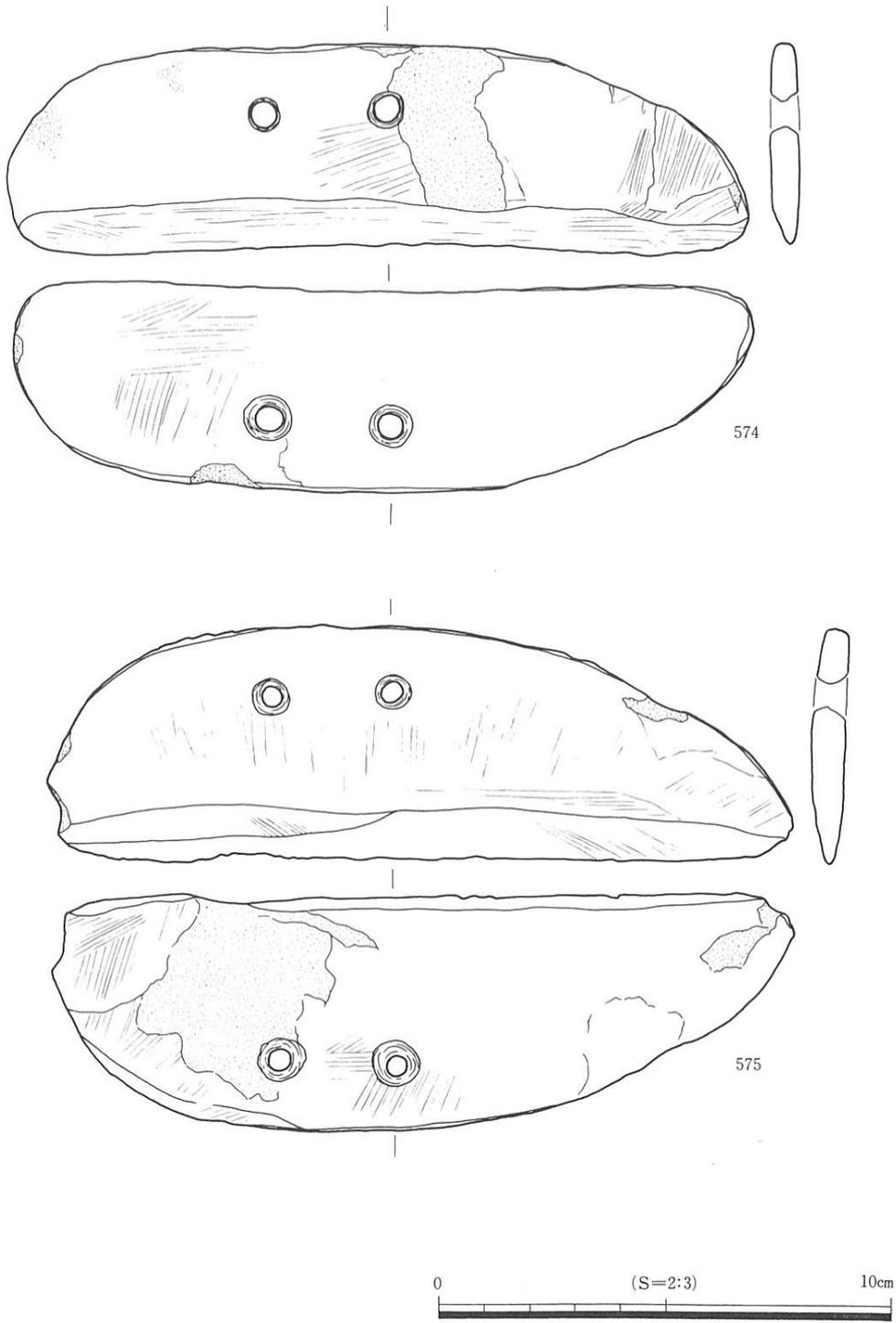


図144 10Cトレンチ 9層出土遺物(2)

ており、 $X=-149,598$ から $X=-149,606$ では枝分れして、西にのびている。小規模な流路が変化しながら流れていたと考えられる。河川の内部には、中洲状の高まりもみられる。

遺物は河川6の流水堆積層よりまとまって出土しており、甕・壺・石器・木製品がみられる。河川6の北側、 $X=-149,587$ 、 $Y=-36,589$ 付近では、ほぼ完形の壺が出土している。北側に口を向けて倒れた状態にあった（図版69-2）。

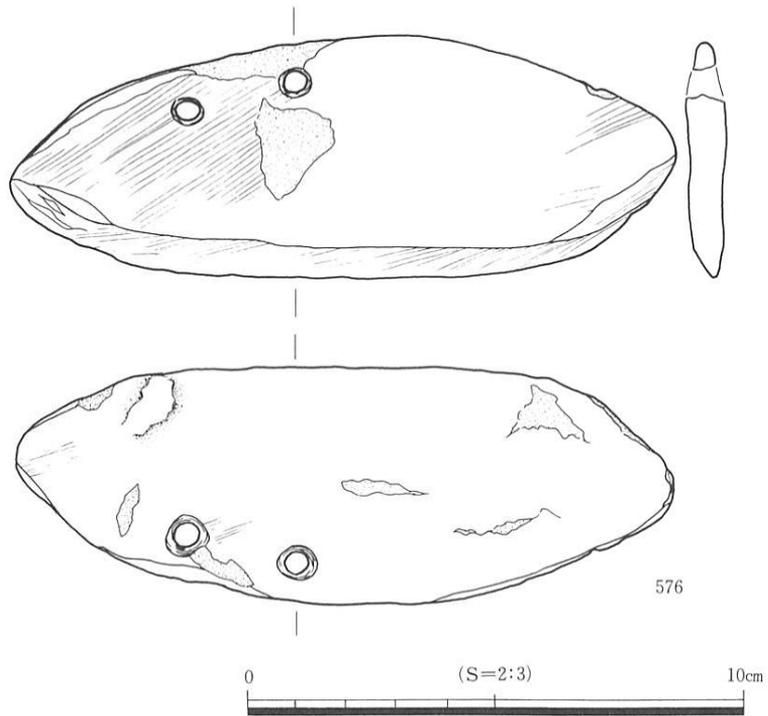


図145 10Cトレンチ 9層出土遺物³⁾

周辺からは、河川上層の9層より5点の石庖丁（図142-571、143-572・573、144-574・575、145-576）が一括して出土した。これ以外にも河川埋土の下層より1点の石庖丁が出土している。

また、西に向かってのびている部分、 $X=-149,601$ 、 $Y=-36,595$ 付近において、埋土のほぼ上面より木製品が出土している（図版69-3）。

土器には552から555、558から563に示すような前期から中期にかけてのものがみられ、中期初頭にまで下るのは552・553、561・562の4点である。前期の土器では558の壺と559の大型甕に注目でき、双方とも口縁部から下がった位置に一方を低くすることによって段を形成し、既往の調査と同様、これまで河内潟で出土した土器の中でも古い要素を持つ土器とすることができる。このほか、560は体部上半に6条のヘラ描き沈線紋を施す甕の破片で、新段階に属する。これ以外に図示した土器も、この時期から一部中期初頭にかけてのものであると考えられる。

確実に中期初頭の土器と考えられるものには、553・561の甕、563の壺がある。563は完形で出土し、焼成後体部に2ヶ所の穿孔を行っており、祭祀の様相の強い遺物である。

石器には564から567が出土し、564の安山岩系の石材を使用したスクレイパー状のもの、565・566はサヌカイト製凹基無茎式石鎌で、565は五角形状の形態から、弥生時代前期以前に遡るものである可能性も考えられる。567はサヌカイト製凸基無茎式の石鎌で、中期にまで下がるもので

あろう。このほか、石庖丁が7点出土している。いずれも緑色片岩製のもので、半月形内湾刃1点、同外湾刃2点、その他が直線刃である。これらの遺物のうち、571から575の5点は、流水砂の中に折り重なるようにして出土したが、調査時の不手際で、詳細な出土状況の記録はできなかった。

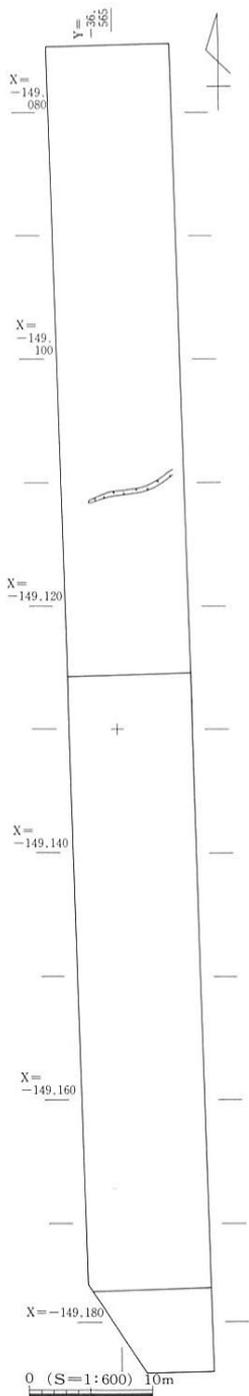


図146 3 | トレンチ第9面

これまでの発掘調査で複数の石庖丁が集中して検出されたのは、住居跡より完形品が4点検出された大阪府富田林市甲田南遺跡、落ち込み内より柱状片刃石斧、サヌカイトの大型剥片と共に大型石庖丁1点と未成品3点が検出された大阪府堺市大庭寺遺跡、その他の数遺跡で4点が集中して出土した例はあるが、5点がまとまって検出されたことは確認されていない。

木器・加工木には568・569がある。568はヒノキを使用した桁目取の板材で、569は田下駄と考えているものである。これは、ヤマグワを使用した角丸長方形の板材に、長方形の穴をおおのの角4ヶ所に開けており、他の部材と組み合わされた痕跡が確認できないことから4孔式緒孔の単独型に類別できるものと考えられる。しかし、緒孔が諸例と比較して非常に大きいことや、使用される樹種から田下駄以外の製品の可能性も残る。

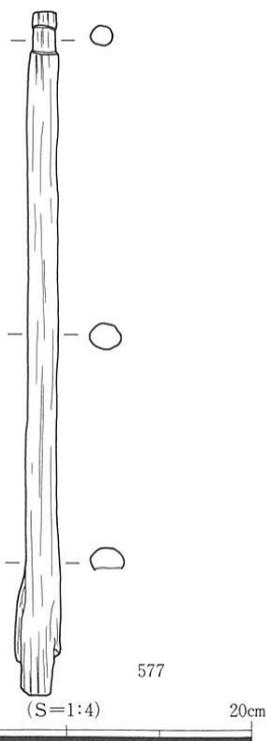


図147 3 | トレンチ 12層出土遺物

9. 第9面（弥生時代前期）

11層の粘土層を掘削した後の状況としては、調査区のほぼ全域において、粘土層を検出した。この粘土層は12層に相当するものであり、第9面の土壌化層である。安定した地表面であり、T.P. -1.3mから0.5mにおいてほぼ平坦な状況を確認した。

12層除去後、植物遺体を含む均質な粘土層が検出された。遺構が確認されたのは、この13層上面である。遺構が検出された地点は、A地区とC地区の一部である。

(1) I地区（図146）

11層除去後の状況は、トレンチの全域において、T.P. -1.0m付近にほぼ平坦な粘土層の堆積を検出した。X = -149,165より南側

の一部では、第9面の土壤化層に相当する12層が検出された。しかし、トレンチの大部分は基盤層である13層がすでに露出している。

遺構はまったく検出されていない。ただ、地形としては $X=-149,144$ 付近に向かって全体的に傾斜しており、最底面はT.P.-1.4mを測る。浅い流路状の遺構とも考えられるが、とくに流水性の堆積がみられないため、自然的な微地形と判断した。

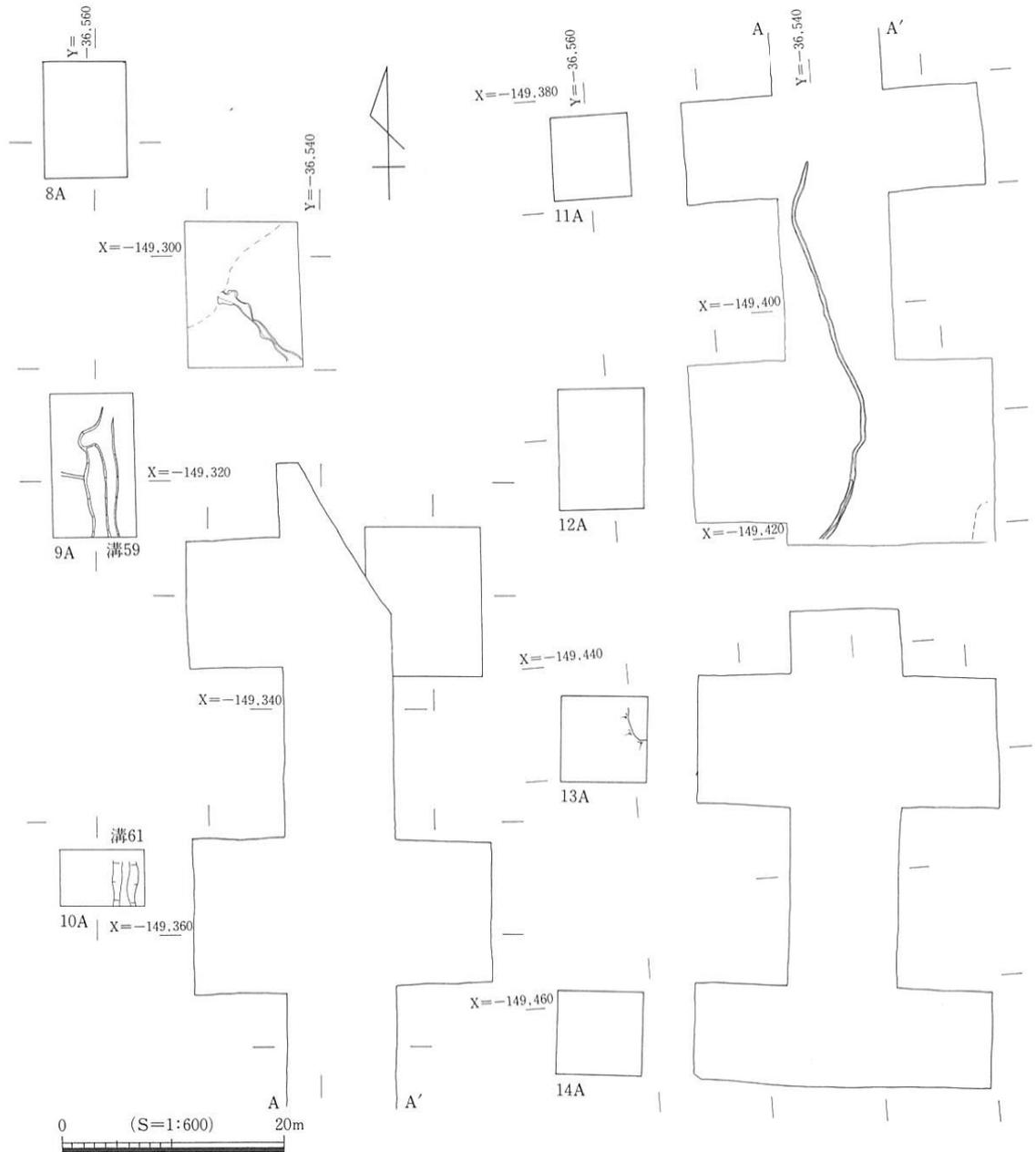


図148 A地区第9面 遺構全体図

遺物はほとんど出土していない。弥生時代前期相当の12層より木製品が単独で出土しており、577は先端部に輪状の削り込みを入れたヒノキ製棒状木製品である。遺存状況は非常に良好で加工痕も明瞭である。

(2)A地区 (図148)

11層除去後は、8A・13Aトレンチを除くほぼ全域にて、12層相当の粘土層の堆積を検出した。調査区の北側ではT.P. -1.0m前後を測り、南側ほどやや高くなっており、14AトレンチではT.P. -0.6mとなる。

12層を10cmから20cmほど掘削すると、基盤層となる13層相当の粘土層が、12層と同様の範囲に検出された。

遺構が検出されたのは9A・10Aトレンチのみであり、南北方向にのびる溝がみられる (図版70-1)。

9Aトレンチの溝59と10Aトレンチの溝61は、幅約2.5mと、規模・方向とも類似した特徴を示しており、同一の溝である可能性が高いと思われる。

13Aトレンチの河川3からは578・579・581の3点の土器が出土している。いずれも甕の破片で、口縁部の遺存する破片2点には、体部上位外面に2条のヘラ描き沈線紋が巡らされ、底部の破片には焼成後、錐状工具により、穿孔が行われている。これらの土器は形態や紋様から前期中段階に属するものと考えられる。

(3)C地区 (図149)

11層除去後は、調査区のほぼ全域において、12層相当の微砂混じりの粘土層を

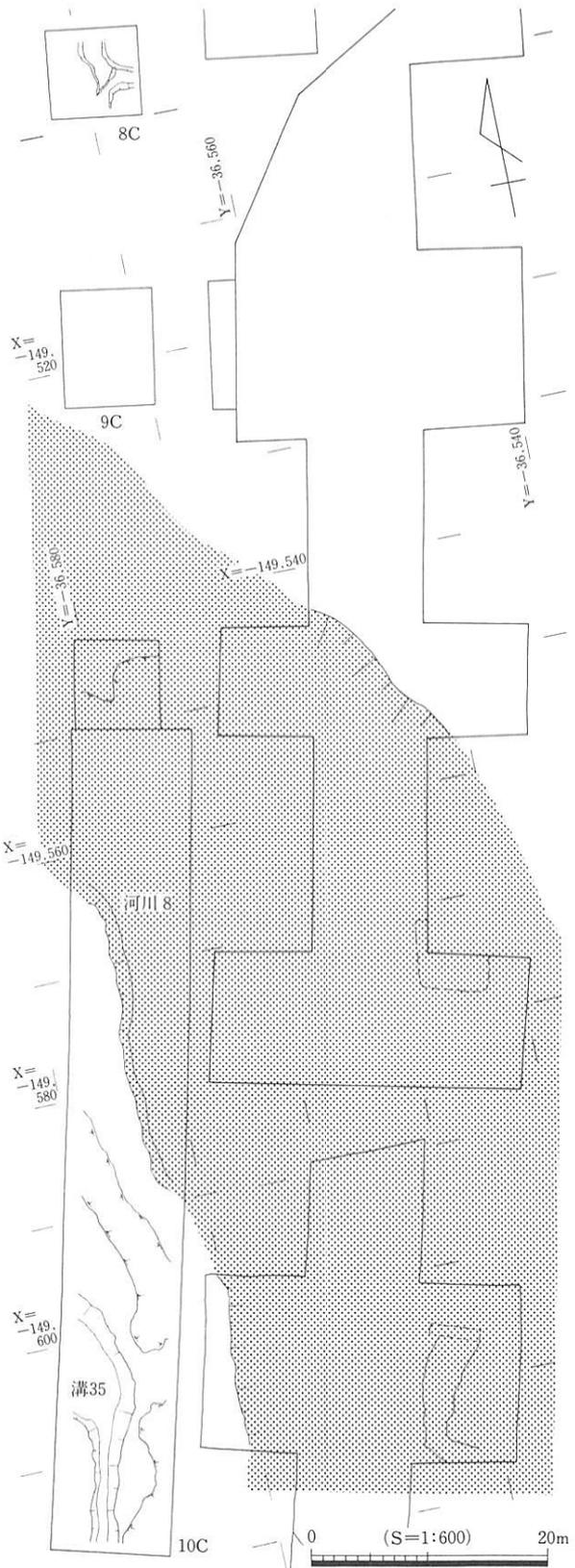


図149 C地区第9面 遺構全体図

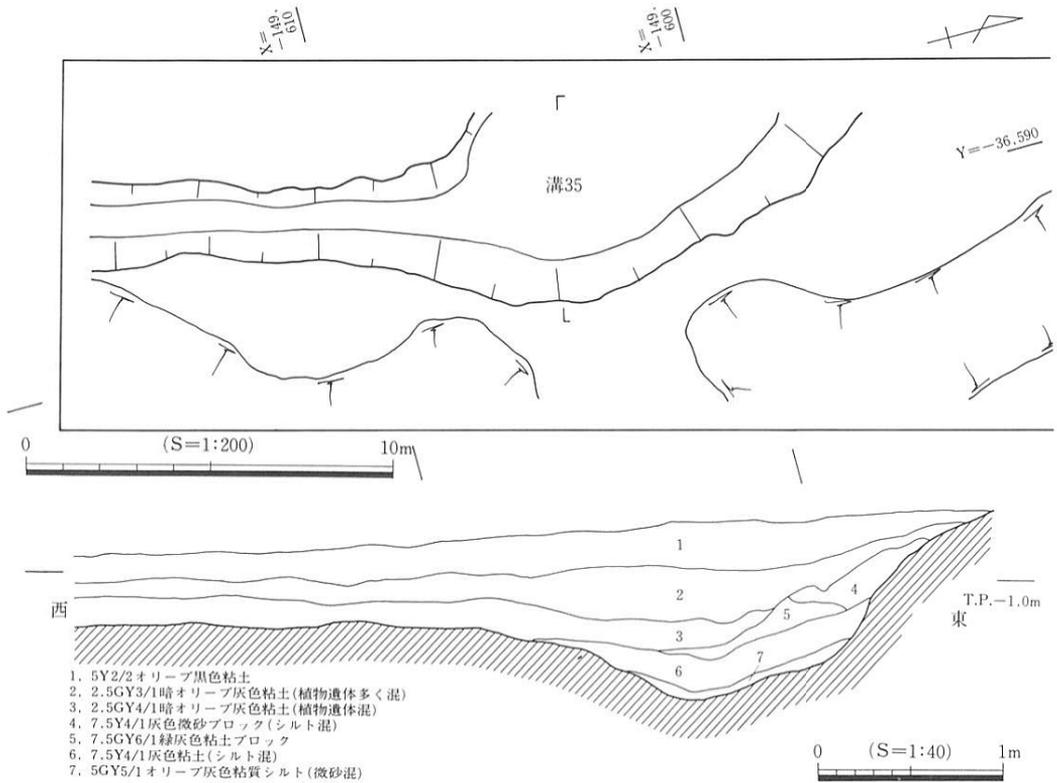


図150 10Cトレンチ南側第9b面 平面, 溝35断面

検出した。12層は、T.P. -0.5m付近にはほぼ平坦な堆積を呈している。

12層を10cmから20cmほど掘削すると、T.P. -0.8m付近に13層に相当する砂混じりの粘土層の堆積を検出した。土層上面は生痕による乱れ以外はほぼ平坦であり、8C・10Cトレンチにて遺構を確認した。

8Cトレンチでは、13層上面にて流路の錯綜する状況を検出した。流路の規模は調査面積が狭小であるため不明である。深さは約10cmと非常に浅い遺構である。埋土となる12層には植物遺体を多く含むことから、これらの遺構は同一の河川7の底部であると考えられる。

10Cトレンチでは、12層上面を検出した段階に、河川8を確認した(図版70-2)。

河川8は、トレンチのほぼ中央のX=-149,560からX=-149,590の範囲に、南北方向にのびる西側の肩部を検出した。埋土は植物遺体を多く含むシルト・粘土と砂が交互に堆積しており、T.P. -1.3mまで掘削した。さらに下層まで砂の堆積は続いており、正確な遺構の深さは不明である。

既往の調査では、X=-149,550、Y=-36,555付近において西に下る河川の東肩が確認されており、またX=-149,605、Y=-36,580付近に同様な河川の西肩がみられる。これから、南東から北西にのびる幅30m以上の河川の存在が想定される。

溝35はトレンチの南側、X=-149,595以南の西側に検出された(図150)。溝の幅は南側で約2.0m、北側は約6.5mを測り、南から北に向かって徐々に広がりながら西にやや屈曲してのびて

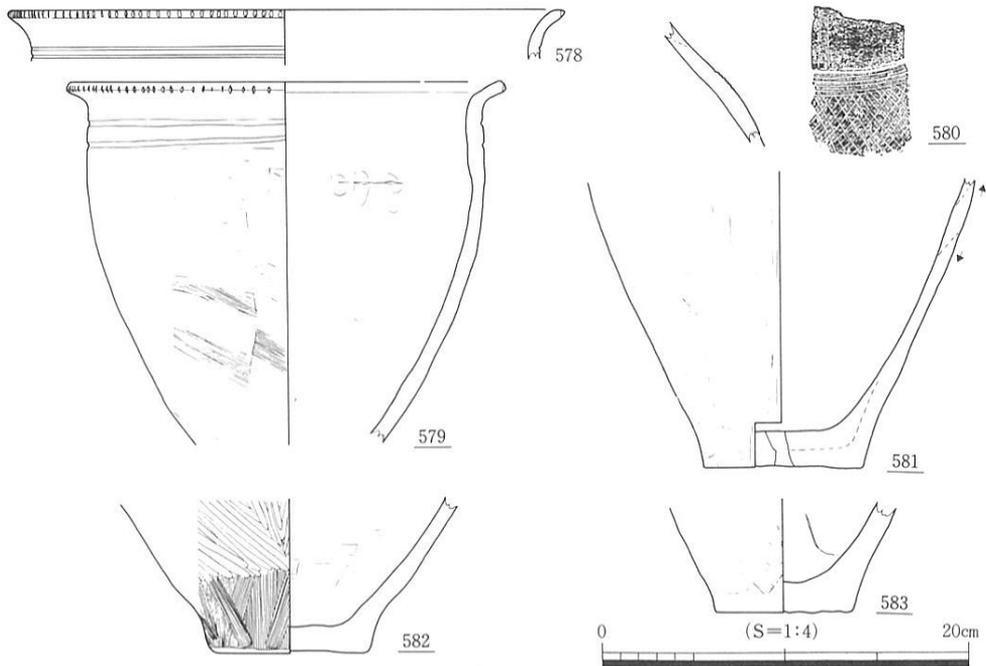


図151 8 A・13 A トレンチ第9面 落ち込み2, 13層, 河川3, 10C トレンチ第9 b 面 溝35出土遺物
いる。溝の埋土は上層に12層を含む粘土層と、下層にはシルトとブロック状の粘土が堆積している。深さは最深部で約90cm、西側のやや浅い部分で約40cmを測る。

10C トレンチの溝35とする遺構より壺体部破片が1点のみ出土した(図151-580)。体部上位には削り出しの段を有し、その下方には4条のヘラ描き沈線紋と一帯のヘラ描き斜格子紋を施している。以上の特徴から弥生時代前期中段階の土器であると考えられる。

10. 第10面(縄紋時代晩期)

13層を除去後の状況としては、ラミナ状に植物遺体を多く含む粘土の土壌化層を、調査区のほぼ全域に確認した。既往の調査では、縄紋晩期の包含層として報告されているものであり、わずかに遺物が出土しているのみである。今回の調査では、調査深度に近いT.P.-1.0から1.3m付近に様に検出され、鍵層となった層である。調査地点によっては、さらに下層の黒斑を伴う粘土層の15層も検出されている(図版72-1)。遺構の確認された地区は極めて稀であり、全調査区の中で8 A トレンチのみである。

(1)A 地区

8 A トレンチでは上層の12・13層が検出されず、これに伴う第9面は確認されなかった。11層を約55cm掘削すると、トレンチの北側2/3の範囲に14層を検出した(図152、図版71-1)。南側は13層がさらに約50cmほど堆積しており、東西方向の落ち込み2を形成している。遺構としては14層上面に形成されたものである。この落ち込み2の埋土より、土器が2点出土している。



図152 8 A トレンチ第10b面 平面

14層は炭化した植物遺体を多く含むシルト混じりの粘土であり、厚さ約6cmほど堆積している。これを除去すると、落ち込み2の中央やや西寄り、 $X = -149,290$ 、 $Y = -36,562$ 付近より北西にのびる溝62が検出された。溝62は幅約1.8m、長さ約5.0mの範囲においてみられ、深さは約36cmである。埋土は14層に酷似する粘土である。

遺物は8 A トレンチの落ち込み2より582・583の土器底部破片2点がある。これらは形態や胎土に含まれる混和材の粒径から、弥生時代前期のものと考えられる。

(2)C地区

第10面として遺構の検出された調査区は以上であるが、これ以外に10C トレンチにおいて遺物が2点出土している。

10C トレンチでは、上面にある複数の河川によって著しく削られているため、第10面として検出された遺構面は、トレンチ南側の $X = -149,612$ 、 $Y = -36,591$ を中心とする約10mの範囲であった(図153)。14層が約6.0cmほど堆積しており、これを掘削すると、T.P. -1.2m付近に黒斑を伴う15層が検出された。調査深度まで約10cmほど掘削した15層内から、土器が横倒しに潰れた状況で出土した(図153、図版72-2)。

また、15層の検出されない部分では、さらに下層に相当すると推測される砂層が露出しているおり、この砂層上面より木製品が出土している。

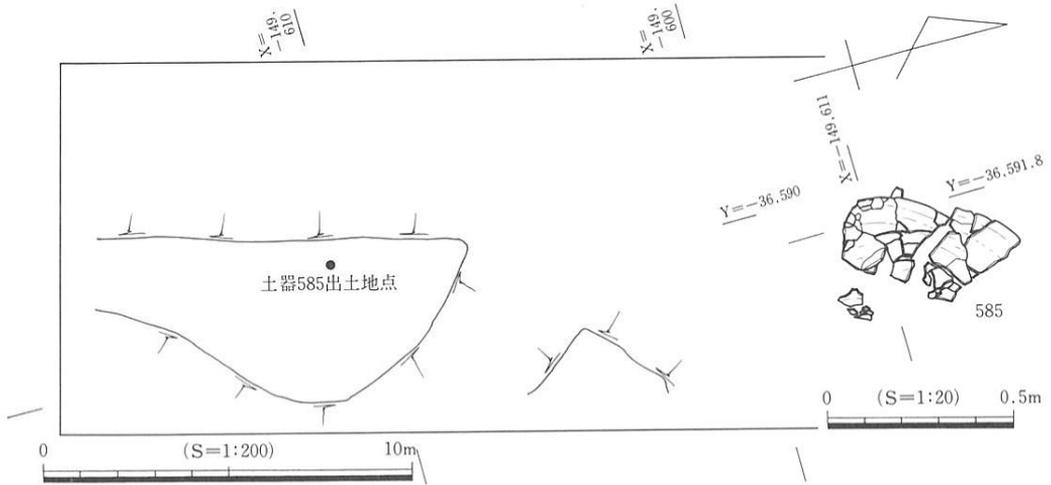


図153 10Cトレンチ第10b面 平面，遺物出土状況

木製品は図154—584に示す円形の孔を穿ったトチの果皮が出土した。上部部に直径3 cmほどの円孔がみられるが、人工的なものか、昆虫などが開けたものかは判断できない。

第10面下の15層内からは図154—585の土器が出土した。底部を欠くものの約1/3程度の破片が出土しており、磨滅もほとんど認められないことから原位置を大きく移動した遺物とは考えられない状態である。調整は外面に擦痕を止め、内面屈曲部にはケズリ状の擦痕が観察される。胎土

は生駒西麓の特徴を持つもので、時期的には縄紋時代後期前葉の中津式の終わりごろから福田K 2式または一乗寺K式に位置づけられる粗製深鉢と考えられる。既往の調査では確認されていない古い時期の土器でもあり、また、河内平野の形成過程を考える上での貴重な資料となりうるため、今後、周辺の調査においては十分な注意が払われなければならないと考えられる。

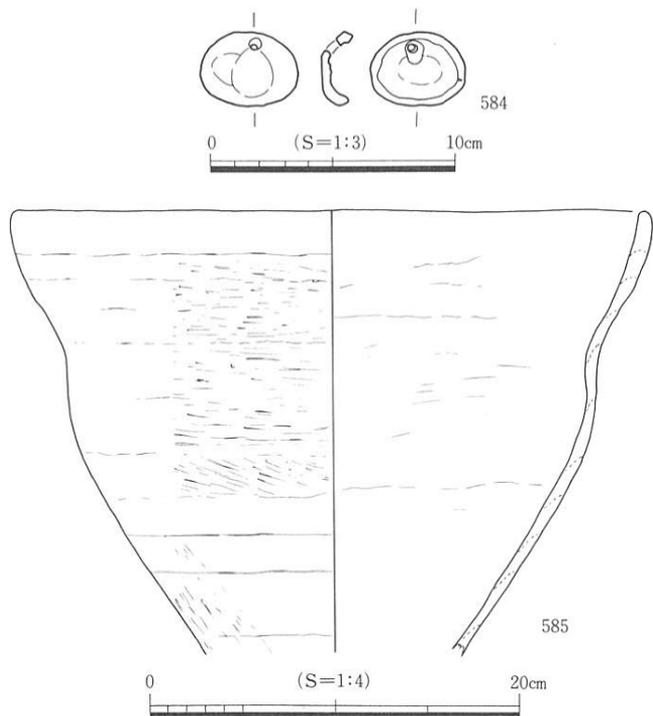


図154 10Cトレンチ 15層・砂層出土遺物

第V章 自然科学分野の成果

第1節 3号方形周溝墓の人骨

(財)大阪文化財センターが1994年に実施した東大阪市巨摩遺跡の発掘調査により、弥生時代後期の3号方形周溝墓から人骨4体が出土した。これらの人骨は各々木棺に埋葬されており、木棺は南から北へ3号、2号、5号、4号木棺の順に並列している。人骨の残存する部位は比較的多いが、この地域の他の多くの弥生時代人骨と同様に保存は不良であった。これらの人骨は樹脂で固めて取り上げられたが、土圧による変形と風化が著しく、復原することはできなかった。

3号木棺人骨

4体のうちでは、残存部位が最も少なく、保存状態も悪い。残存部位は左右の大腿骨と脛骨で、ほかに輪郭のはっきりしない足の骨が残っているのみであるが、埋葬時の位置関係は保たれている。東を頭位とし、仰臥伸展位で埋葬されていた。骨はほぼ成人の大きさである。変形が著しいので詳細な観察はできないが、全体にきゃしゃで、いずれかといえば女性の可能性が大きい。

2号木棺人骨

膝からは発掘区域外にあり、確認できないが、それ以外の四肢骨および頭骨は比較的良好に残っている。西を頭位とし、顔面をわずかに左に傾けている。肘関節を完全に屈し、手は手掌を下に向けて肩から頸の辺りに置いた状態である。上下顎とも切歯と思われる歯が2本づつ釘植しているが保存が悪く同定はできない。右寛骨の大坐骨切痕は狭く、明らかに男性と判定できる。現地で測った左大腿骨最大長は約44cmで、粗線もよく発達していることから成人と推定される。

5号木棺人骨

胸部から頭部までは、発掘区域外になっていて確認できない。東を頭位とし、仰臥伸展位で埋葬され、残存する骨はすべてほぼ埋葬時の位置を保つ。輪郭のはっきりしない腰椎と骨盤、左右の大腿骨全体と脛骨上半部、左腓骨の下端部付近のみが残存する。現地で計測した左大腿骨の最大長は約39cmである。骨は全体にきゃしゃであり、年齢が確定できないが、成人とすれば女性である。

4号木棺人骨

頭蓋をふくむほぼ全身の部位が残存するが、椎骨、肋骨、足の骨などの輪郭ははっきりしない。また、手の骨と腓骨は検出できないが、残存する骨はすべてほぼ埋葬時の位置を保っていた。

頭位は西で、顔面を右に向けて仰臥伸展位で埋葬されていた。上肢は左右とも上腕を体側に向けて肘を約45度に屈し、手は残っていないが、前腕の状態は、手掌を下に向けて胸部の上に置いた状態を示す。取り上げ前に測定した左大骨の最大長は約43cm、直接計測した身長は約157cmである。上顎には左の第1大臼歯から中切歯までと右の中切歯、第1・第2小臼歯、第1大臼歯

が釘植する。下顎では右の中および側切歯、左の側切歯から第2小臼歯までの歯が釘植する。右の他の下顎歯の有無は確認できない。小臼歯と第1大臼歯には、点状ないし面状の象牙質の露出が認められる。上顎中切歯は著しいシャベル状である。寛骨では大坐骨切痕付近が比較的よく残り、その角度はやや男性的である。これらのことから、この人骨は20代の成人男性のものと推定される。

(大阪市立大学医学部解剖学第2講座 多賀谷昭)

第2節 3号方形周溝墓出土人骨の化学分析

1. はじめに

巨摩・若江北遺跡から検出された3号方形周溝墓墓の人骨について、化学分析調査を行った。分析対象は、第2, 3, 4, 5主体部の人骨とその周辺の土壌である。人骨の鑑定に関しては、大阪市立大学解剖学第2教室 多賀谷昭先生に依頼し、2号人骨が成人男性、3号人骨が成人女性、4号人骨が20代の成人男性、5号人骨が成人女性と推定されている。これらの人骨は、保存状態が悪く鑑定依頼する場合には、アクリル樹脂で保存処理を施したうえで提供している。なお、土圧による変形と劣化が激しく復元・接合はできていない。以上の状況から、分析できる少量の骨を骨格部位確認のうえ分析試料とした。ここでは、出土人骨の臨床化学的分析調査であり、可能であれば過去の病態情報を引き出すための基礎的な研究として分析を試みた。また、化学分析はいわき明星大学基礎理学科分析化学研究室 佐藤健二先生にご協力をお願いした。

2. 分析方法と試料の調整

第2主体部左大腿骨片、第3主体部左脛骨片、第4主体部右大腿骨片、第5主体部右大腿骨片と第2, 3, 4, 5主体部の土壌を試料とし、分析方法は原子吸光分析法を用いた。この原子吸光分析法とは、試料を高熱負荷したり放電を起こして気化し、被検元素を遊離原子状態にした後、熱あるいは電子衝突によって励起させる。この励起した原子がエネルギーを失う過程で放出する光のスペクトルを観察記録することによって、元素の同定を行う方法である。この分析方法を用いることにより、人骨と土壌の微量元素マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、コバルト(Co)、ニッケル(Ni)、銅(Cu)、亜鉛(ZN)、ストロンチウム(Sr)、カドミウム(Cd)の10元素について定量分析を行う。なお、試料の調整は以下の手順で行った。

(1) 試料の採集

人骨試料に関しては、骨格部位を確認のうえ遊離させた骨1gをビニール袋に入れる。その後、ビニール袋に入れたまま骨を砕き、テフロン製の薬さじを用いて石英るつぼに0.8g採取して精秤する。土壌は室内で自然乾燥後、乳鉢で微粉化して石英るつぼに0.9g採取して精秤する。

(2) 灰化処理

人骨と土壌試料の入ったるつぼをマッフル炉に入れ、炉内温度を750℃に昇温し5時間強熱処理を行う。灰化終了後は、一晩放置して冷却する。

(3) 溶解処理

灰化した土壌試料は、ホットプレート上のテフロンピーカーに移し、徐々に加熱(180℃)しながら塩酸(1+1)溶液10mlを加え、次にフッ化水素酸10mlを徐々に加える。酸が蒸発乾固したら先の処理を繰り返し、塩酸(1+1)溶液10mlを加え蒸発乾固近くで加熱を止め、蒸留水を2~3mlを加える。溶解した試料溶液をろ過し、残留物を除去したのち定容とする。

また、骨試料については、るつぼに入れたまま石英製の時計皿をかぶせホットプレート上に移し、加熱（100℃）すると同時に王水（塩酸：硝酸 3：1に混合した溶液）を2ml加え、蒸発乾固近くまで加熱し、試料溶液が透明になるまでこの操作を繰り返す。その後塩酸（1+1）溶液10mlを加え溶解し、蒸留水2～3mlを加え冷却する。最終的に溶解した試料溶液をろ過し、残留物を除去したのち定容とする。

(4) 原子吸光光度計による試料溶液内微量元素の定量分析

測定元素は、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、コバルト(Co)、ニッケル(Ni)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、ストロンチウム(Sr)、カドミウム(Cd)の10元素である。

測定する場合には、あらかじめ測定できる濃度範囲を決定し、その濃度範囲の直線性を確かめてグラフを作成した上で、未知試料である土壌と骨試料についての濃度を求めた。

（使用機器） フレーム原子吸光光度計（AA-680型） 島津製作所製

（分析条件） ホロカソードランプ使用条件は、マグネシウムランプ(285.2nm、4 mA)、カルシウムランプ(422.7nm、6 mA)、マンガンランプ(279.5nm、5 mA)、鉄ランプ(248.3nm、8 mA)、コバルトランプ(240.7nm、6 mA)、ニッケルランプ(232.6nm、4 mA)、銅ランプ(324.8nm、3 mA)、亜鉛ランプ(213.9nm、4 mA)、ストロンチウムランプ(460.7nm、4 mA)、カドミウムランプ(228.8nm、4 mA)である。nmは、ランプの波長の単位であり、mAはランプの電流の単位である。（1 nm = 1 m μ = 10⁻⁹m）

フレームの条件は、燃料ガス（アセチレンガス 圧力0.9kg/cm²）、助燃ガス（空気 圧力3.5kg/cm²）である。

3. 分析結果

測定した試料溶液の各元素濃度と、溶液に溶けている原試料の重量から骨と土壌試料の組成を求めた。その分析結果は表3、表4に示した通りである。なお、比較のために文献値も表に入れている。（ppm；百万分率を示している。）

表3、4に示した通り、人骨では骨の主成分元素のカルシウム、鉄、マンガンが比較的多量に含まれ、次にマグネシウム、亜鉛、ストロンチウムの順に多く含まれている。そのほか、コバルト、ニッケル、銅、カドミウムが微量に存在する。なお、文献値と比較すると、鉄、マンガンの含有量が多いのが特長といえる。また、主体部付近から採取した土壌の分析結果を見ると、人骨の分析結果と同様にカルシウム、鉄、マンガン及びマグネシウムが、他の元素に比べて比較的多量に存在する。しかし、そのほかの元素は、大きな差はなく微量である。また、文献値の土壌の平均組成と比較すると、ニッケル、銅、ストロンチウムが低率である。

4. まとめ

今回の出土人骨の化学分析調査は、化石骨の内部の微量元素を追求することにより、臨床化学

表2 出土人骨の分析結果と文献値（単位：ppm）

元素	第2主体部 左大腿骨片	第3主体部 右脛骨片	第4主体部 右大腿骨片	第5主体部 右大腿骨片	骨組織の元素 組成(文献値)
Mg	2.4×10^3	4.6×10^3	4.5×10^3	1.0×10^3	700~1800
Ca	9.8×10^4	2.4×10^4	5.0×10^4	1.3×10^5	1.7×10^5
Mn	5.2×10^3	1.0×10^3	1.6×10^3	5.8×10^3	0.2~100
Fe	7.5×10^4	2.3×10^4	2.4×10^4	1.8×10^4	3~380
Co	13	11	9.6	11	0.01~0.04
Ni	11	9.6	11	7.1	<0.7
Cu	9.0	5.2	5.5	4.2	1~26
Zn	120	110	140	110	75~170
Sr	29	40	46	23	36~140
Cd	4.0	2.7	3.0	2.6	1.8

表3 土壌試料の分析結果と文献値（単位：ppm）

元素	第2主体部	第3主体部	第4主体部	第5主体部	土壌の平均 組成(文献値)
Mg	1.8×10^3	2.1×10^3	3.3×10^3	3.5×10^3	5000
Ca	490	1.0×10^3	1.3×10^3	1.2×10^3	1.5×10^4
Mn	280	660	720	1.7×10^3	1000
Fe	3.2×10^4	3.0×10^4	3.3×10^4	4.5×10^4	4.0×10^4
Co	31	21	26	26	8
Ni	20	16	19	18	50
Cu	7.3	8.9	6.8	14	30
Zn	110	150	120	150	90
Sr	5.9	10	12	9.4	140
Cd	5.5	7.8	7.6	6.3	0.35

的な知見を得るための基礎調査を行ったわけであるが、従来人骨の化学調査であれば長い歴史のあるフッ素分析によって年代判定を行うのが常法であった。ここでは、時期が限定できるため化学調査をやることによる内的情報を追求した。

さて、生体の骨は主に、リン灰石と呼ばれる鉱物の微結晶と繊維状のタンパク質であるコラーゲンからできている。土に埋蔵された骨は溶解してしまうことも多いが、周囲の条件が良ければ、化石となって残る。この化石化作用の程度の客観的指標を見つけると、化石骨の新旧判定（年代決定法）に利用できるわけである。一方、有機成分のコラーゲンの場合には、土中で加水分解を受けながら、徐々に骨の外へ浸出していくと同時に、無機物のリン灰石結晶は、周囲の土壌や地下水中に存在する鉄、マンガン、フッ素などのイオンが吸着し、あるいは取り込まれ、その含有量が増えていくことがわかっている。このことは、今回の分析結果からもいえることである。すなわち、鉄、マンガンの含有量の比率において、今後データを増し統計的な処理を行えば、絶対年代決定法にも利用の可能性もありえる。その意味から、できるかぎり各時代や各遺跡の動物遺体の化石骨の分析調査を行い基礎データを収集したい。

なお、人体を構成する元素を生理作用の面から分類すると、炭素、水素、酸素、窒素、硫黄、の主要5元素と、それ以外の元素に分類できる。前者は食物に含まれる水、タンパク質、脂肪、糖質によって供給され、そしてこれらの元素だけで体重のはぼ96%を占めている。

後者はほとんどが無機質で、ミネラルとよばれる。このミネラルは、1日に100mg以下の補給で十分なものを必須微量元素と呼ぶ。それは、カルシウム、マグネシウム、リン、ナトリウムである。この必須ミネラルのなかで、人体にもっとも多く含まれるのが、カルシウムであり体重70kgの成人で約1200g含まれ、その99%が骨と歯に含まれている。

さて、出土人骨のカルシウムの量を推定すると、生体中の含有量より非常に少なくなっていることがわかる。これは、埋蔵中に浸出しカルシウムの量が減ったためである。一方、鉄、マンガンについては非常に多く検出されるのは、先で述べたように埋蔵中に土壌中の鉄、マンガンが骨に吸着したものと考えられる。また、造血に必要な成分の銅や摂取量の増減によって、いろいろな障害を起こす亜鉛の量も文献値と比較すると、極端に多かったり少なかったりしていないようで、疾病等の影響も今回の分析結果からは考えられない。その反面、データ値の比較によっては、局地的な埋葬順位付けも相対的に可能であると考えている。

最後に、化学分析調査にご協力頂いたいわき明星大学基礎理学科分析化学研究室 佐藤健二先生に厚くお礼申し上げます。

(山口誠治 (財)大阪文化財センター)

(参考文献)

- (1) H.J.M. Bowen著, 浅見輝男, 茅野充男訳 『環境無機化学』, p.68, p.119 1983年, 博友社
- (2) 松浦秀治 「フッ素年代判定法と古人骨の編年」
『人類学—その多様な発展』, p46~50 1984年, 日経サイエンス
- (3) 『最新 医学全書』 1990年, 小学館・中山書店

第3節 3・10・11号方形周溝墓主体部における微遺体分析

1. はじめに

巨摩・若江北遺跡の調査において、弥生時代遺体埋葬跡の微遺体分析の機会を、(財)大阪文化財センターおよび奈良国立文化財研究所の松井章氏からいただいた。欧米では埋葬遺体の寄生虫卵分析などの微遺体分析が行われているが、日本においては類例がないといえる状況である。ここでは、寄生虫卵分析と花粉分析の手法を用い、基礎的な研究として分析を試みた。なお、分析処理は中村亮仁氏（古環境研究所）に手伝っていただいた。

2. 試料と方法

試料は43点で、採取位置等は分析結果の表にともに示した。分析処理は以下の順に行った。

- i. 試料を1cm³およびその正数倍で採量する。
- ii. DWを加え攪拌する。
- iii. 篩別により大きな粒子を除去する。
- iv. フッ化水素酸処理を施し、2分する。
- v. 一方をグリセリンゼリーで封入する。
- vi. 残りにアセトリシス処理を施し、染色後グリセリンゼリーで封入し標本を作製する。
- vii. 検鏡を行う。

3. 分析結果

分析の結果は表4に示した。寄生虫卵は作製したプレパラートをすべて検鏡したが含まれていなかった。花粉についても、密度が少なく、通常の検鏡では計数外である程度であった。結果の表4には、備考欄に出現した分類群を示した。出現する分類群は、樹木花粉ではモミ属・スギ・コナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属などで、草本花粉ではイネ科・ヨモギ属であった。いずれも風媒花の植物の花粉である。遺構別では、3号墓の各主体部の試料には花粉・胞子が含まれていないものが多く、10号墓と11号墓では含まれている試料が多い。また、遺構によって、植物遺体片が多く含まれる試料、炭化物が多く含まれる試料、ほとんど何も含まれない試料が多いなどの傾向がみられる。10号墓第5主体下腹部では、コウヤマキ材片が多く含まれ、木棺材の分解した破片のようである。

4. 考察

すべての試料に寄生虫卵は含まれていなかったが、現段階では当初から含まれていなかったのか、たとえば分解によって失われたのか不明である。花粉においても風媒花の植物のみできわめてまれに観察されるのみであったことから、試料となった堆積が遺構の埋没段階に周囲から供給

された堆積物である可能性が高い。今回の分析からは、普通に献花などに用いる花の美しい虫媒花の花粉は認められなかった。なお、炭化物の含まれている試料が多いことから、表土として土壌生成作用を受けた堆積物が再堆積したものと考えられる。

今後、埋葬施設に関しては、埋没のプロセスなども考慮し、立体的にサンプリングを行ったりして、分析を行う必要性があろう。

(金原正明 天理大学附属天理参考館)

(金原正子 古環境研究所)

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard(1992). Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science* 19.

奈良国立文化財研究所『藤原京跡の便所遺構』 1992

金子清俊・谷口博一『新版 臨床検査講座 8 医動物学』医歯薬出版 1987

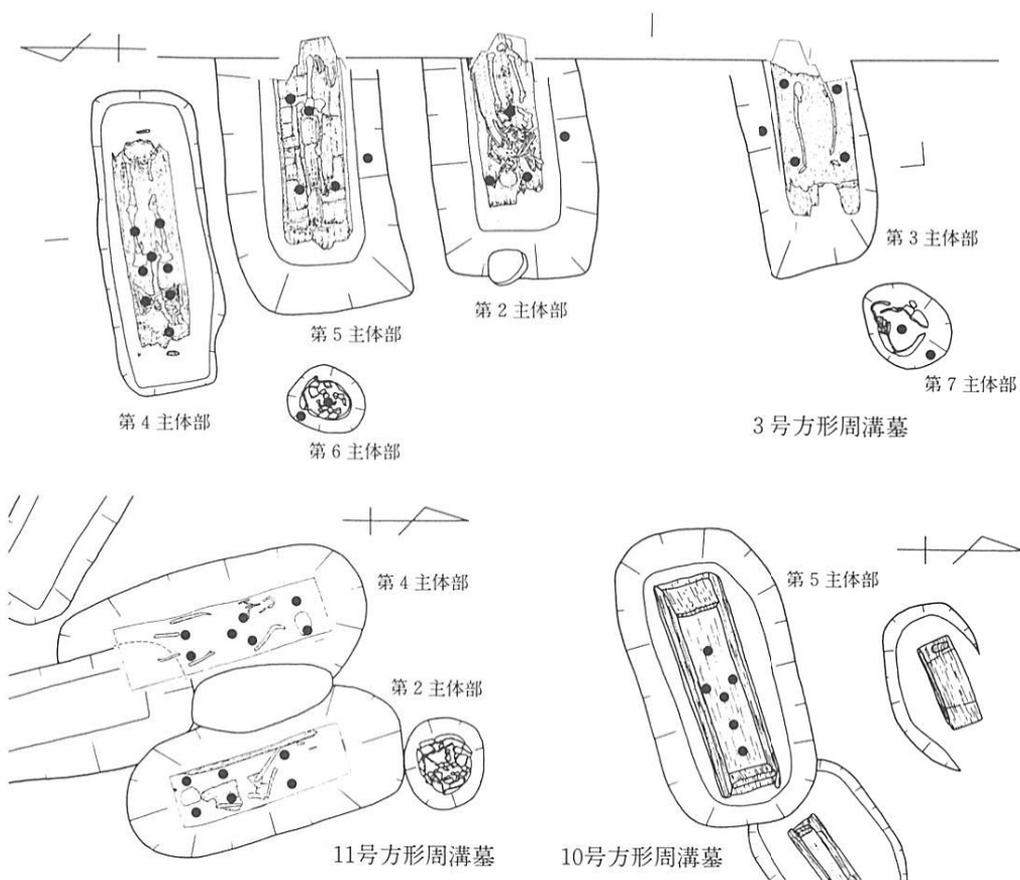
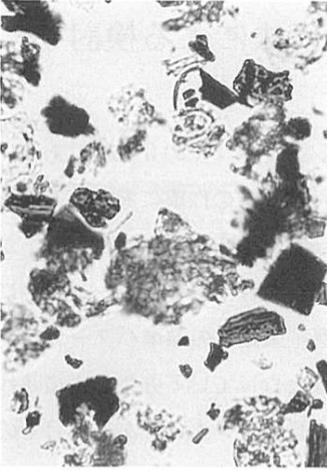


図155 微遺体分析試料抽出地点

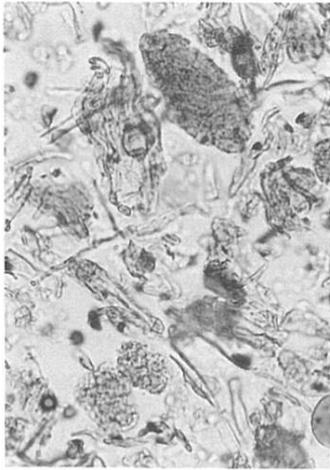
表 4 微遺体分析結果

遺構および試料採取位置	寄生虫卵	花粉	植物遺体片	炭化物片	備考
3号墓					
第2主体部	-	++	-	+	Spore
第3主体部	-	-	-	+	
第5主体部	-	-	-	+	
第4主体部	-	+	-	-	
第2主体部	-	++	++	++	Abies Pinus Tsuga
棺、頭部、北	-	++	++	++	
棺、頭部、南	-	++	++	++	
掘り方(南)、上面	-	-	-	-	
掘り方(北)、上面	-	-	-	-	
第3主体部	-	++	-	-	spore
掘り方(北)	-	++	+	-	Abies
足元、北	-	++	+	-	Abies Cryptomeria Lepido. Gramineae spore
足元、南	-	++	+	+	Abies Gramineae spore
脇、北	-	++	++	++	
脇、南	-	++	++	++	
第4主体部	-	-	-	+	
後頭部	-	++	-	+	spore
脇、南	-	++	+	+	Gramineae spore
脇、北	-	++	+	+	
腰	-	-	-	+	
下腹、南	-	-	-	+	
下腹、北	-	-	-	+	
膝、南	-	-	-	+	
膝、北	-	-	-	+	
第5主体部	-	++	-	++	Cyclo.
掘り方(南)、上面	-	++	-	++	Alnus spore
足元、北	-	++	-	++	
足元、南	-	++	-	++	
北側左	-	++	+	++	spore
第6号土器棺	-	-	-	++	
掘り方	-	-	-	++	
棺底	-	++	-	++	spore
第7号土器棺	-	++	-	++	spore
第5主体部	-	++	-	++	Castano. Cyclo. Gramineae spore
頭部	-	++	-	++	Gramineae
胸部	-	++	-	++	spore
膝部	-	++	+	-	Abies Pinus Cryptomeria Cyclo. 功材材片多い
下腹部	-	++	+	++	Gramineae
木棺中央部北寄	-	++	-	++	
木棺中央部南寄	-	++	-	++	
第2主体部	-	++	-	++	Tsuga Cyclo. spore
頭部、東	-	++	-	++	Lepido. Cyclo. Gramineae Artemisia spore
頭部、西	-	++	-	++	Sciadopitys Corylus Castano. Lepido. Cyclo. Gramineae Artemisia spore
脇部、東	-	++	-	++	Lepido. Artemisia
脇部、西	-	++	-	++	Castano. Cyclo. Gramineae spore
足元、東	-	++	-	++	Juglans Lepido. Cyclo. Artemisia spore
足元、西	-	++	-	++	Castano. Lepido. Cyclo. Gramineae Artemisia spore
第4主体部	-	++	+	++	Cryptomeria Crcllo. Gramineae
頭部、東	-	++	+	++	Artemisia
頭部、西	-	++	+	++	Abies Sciadopitys Cyclo. Gramineae Artemisia spore
胴部、東	-	++	+	++	Sciadopitys Lepido. Cyclo. Chenopodium
胴部、西	-	++	+	++	Cyclo.
脚部、東	-	++	+	++	Cryptomeria Gramineae spore
脚部、西	-	++	+	++	

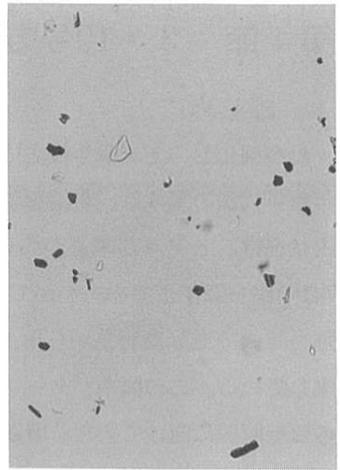
(-ない、+-まれ、+多い)



①3号墓第2主体部



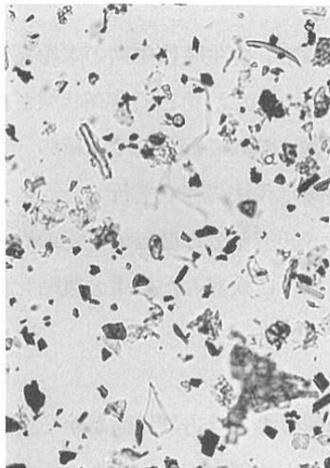
②11号墓第4主体部



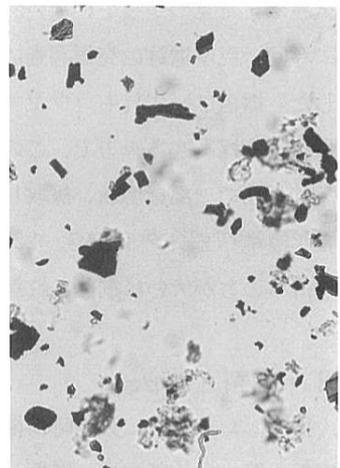
③3号墓第3主体部 掘り方



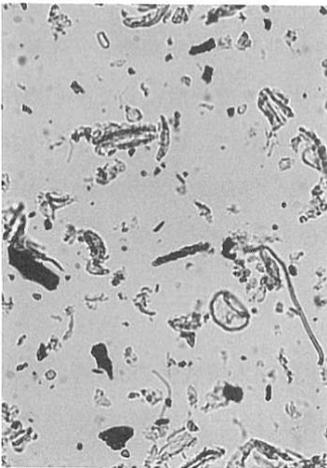
④3号墓第3主体部 脇北



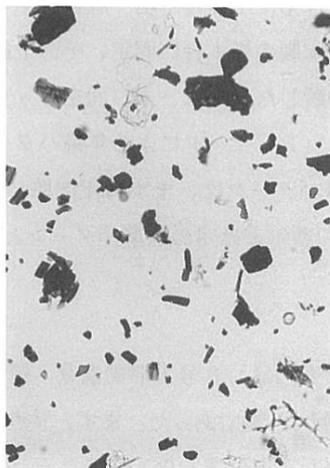
⑤3号墓第4主体部 下腹部



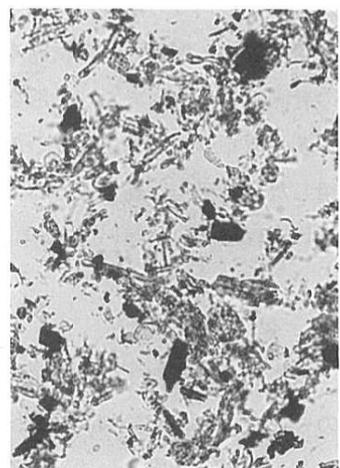
⑥3号墓第6主体部 棺底



⑦10号墓第5主体部 下腹部



⑧11号墓第2主体部 脇部



⑨11号墓第4主体部 胴部

写真1 微遺体分析

第4節 3・10号方形周溝墓木棺の年輪年代法による検討

1. はじめに

わが国において年輪年代法に使える主要樹種は、ヒノキ、スギ、コウヤマキの3種類である。年輪年代法の基本は、年輪を割り出すときに基準となる暦年標準パターンの作成にある。その作成状況は、ヒノキが現在から紀元前734年で、スギが現在から紀元前651年まで、コウヤマキが741年から22年までのものができている。コウヤマキについては、この暦年標準パターンの他に弥生時代の方形周溝墓から出土した木棺材を使って、697年分の暦年未確定の標準パターンを作成している。この標準パターンに暦年が確定すれば、考古学で問題となっている弥生、古墳時代の暦年解明に向けて大きく前進する運びとなるため、その期待は大変大きいものがある。目下のところ、この標準パターンに暦年を確定するための試料を探しているが、残念ながらそのような試料はまだ見つかっていない。

今回、巨摩遺跡の発掘調査によって、弥生時代中期の木棺墓が3基、後期の木棺墓が4基出土した。樹種はいずれもコウヤマキであった。そこで遺存状態が良好な木棺材から直径5ミリの棒状標本を採取する一方で、この発掘に際して鋼矢板で木棺の一部が切断されたものについては、ノコギリで一部を切断、採取し年輪年代法の検討を行った。ここで特に、後期の木棺材は、先の暦年標準パターン（741年～22年）と697年分の暦年未確定の標準パターンとを連結する試料となり得ることが大いに期待された。以下に検討した結果の概略を報告する。

2. 試料と方法

採取した試料は、弥生時代後期前半の3号方形周溝墓から第3主体部木棺－南側板、北側板、底板、第4主体部木棺－底板、第5主体部木棺－南側板、天井板、北側板からである。弥生時代中期後半の10号方形周溝墓の中では第4主体部木棺－底板、第5主体部木棺－東小口板から試料を採取した。採取した棒状標本は木製の標本台に固定、その上面をカミソリ刃で調整し、年輪幅の計測に備えた。また、一部を切断した試料は、木口面をカッターナイフで平滑にしてから専用の読み取り器で計測を実施した。コンピュータによる年輪パターンの照合は、相関分析手法を採用した。計測した総数9点の試料パターンは、まず暦年標準パターン（741年～22年）と個別にそれぞれ照合し、ついで697年分の暦年未確定の標準パターンと照合することとした。

3. 結果と考察

試料9点の計測年輪数で最多のものは、3号方形周溝墓・第4主体部木棺底板の354層、最少のものは同・第3主体部木棺北側板の89層であった。まず、9点の試料パターンと暦年標準パターンとの照合の結果、いずれも明瞭な重複位置を確定することはできなかった。次に、697年分の暦年未確定の標準パターンと試料パターンとを個別に照合したところ、9点のうち弥生時代後期

前半の6点が合致した。

表5 年輪年代法の検討結果一覧表

残る3点については照合が成立しなかった(表5参照)。

照合が成立した6点についてみると、3号方形周溝墓の第3主体部木棺南側板、同底板、第4主体部木棺底板の3点は697年分の標準パターンより、91年分、80年分、94年分と、それぞれ新しい年輪が刻まれていたこ

No.	時代区分	遺構	部材名	年輪数	標準パターン(697年分)との年代差
1	弥生後期前半	3号墓第3主体部木棺	南側板	237	91年分(新)
2	弥生後期前半	3号墓第3主体部木棺	北側板	89	95年分(古)
3	弥生後期前半	3号墓第3主体部木棺	底板	274	80年分(新)
4	弥生後期前半	3号墓第4主体部木棺	底板	354	44年分(新)
5	弥生後期前半	3号墓第5主体部木棺	南側板	279	84年分(古)
6	弥生後期前半	3号墓第5主体部木棺	天井板	154	107年分(古)
7	弥生後期前半	3号墓第5主体部木棺	北側板	91	——
8	弥生中期後半	10号墓第4主体部木棺	底板	120	——
9	弥生中期後半	10号墓第5主体部木棺	東小口板	176	——

とが判明した。これより788年分の暦年未確定の標準パターンを作成することができた。つまり、697年分の標準パターンを91年分、西暦年代に近い方に延長することができたのである。このことは、弥生・古墳時代の暦年の解明にむけて大きく前進したことになる。

一方、第5主体部木棺南側板と天井板の試料パターンは、697年分の後端(西暦年代に近い方)からそれぞれ89年分、107年分と、古く遡った年代位置で照合が成立した。同様に、第3主体部木棺北側板のそれは、95年分、古く遡った年代のところ合致した。このように第3主体部木棺南側板の年輪より古い年代位置で照合が成立したのは、木取りや加工程度の差が起因しているものと思われる。

弥生時代中期後半の10号方形周溝墓・第4主体部木棺の底板は原木から樹皮を剥いただけのものである。このような形状のものは、きわめて珍しい。この底板から計測、収集した年輪データは120と少なく、現時点では788年分の標準パターンとの照合には成功していない。今後、この年輪パターンに暦年が確定すれば、弥生時代中期後半が暦年の何時なのか、この試料パターンはそれを決めるのに大変重要となってくる。

今回、最大の成果は、697年分の暦年未確定の標準パターンを新しい年代方向に91年分、延長できたことである。多分、この91年分の年輪パターンは西暦1世紀代あるいは2世紀代に到達しているものと推定されるが、現時点では定かでない。今後、この788年分の標準パターンに暦年が確定すれば、考古学で大きな問題となっている弥生・古墳時代の年代観についてその回答を出すことができるであろう。暦年標準パターン(741年～22年)と788年分の暦年未確定の標準パターンとを連結する試料の出土が待たれる。

(光谷拓実 奈良国立文化財研究所)

第5節 若江北遺跡における花粉分析

1. はじめに

若江北遺跡は、大阪府東部の東大阪市若江北・若江南・若江西新町一帯に広がる遺跡である。本報は、遺跡周辺での古環境変遷の推定を行うために、財団法人大阪文化財センターが川崎地質株式会社へ委託して実施した分析調査の概報である。

2. 分析試料について

図156の3地点で試料採取を行った。それぞれの地点での柱状図および試料採取層準を、図157～159の左端に示す。

3. 分析方法および分析結果

分析方法は、川崎地質株式会社（1992）に従った。

花粉分析結果を図157～159の花粉ダイアグラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、木本花粉総数を基数とする百分率で各々の種類をダイアグラムに表した。

4. 考察

(1)花粉分帯

花粉分析結果、および壁面観察と出土考古遺物からの堆積年代推定に基づく層序をもとに分帯を行い、2花粉帯6花粉亜帯を設定した。以下に各花粉帯、花粉亜帯の特徴を示す。また、花粉帯（花粉亜帯）及び試料番号を、層序的に下位から上位に向かって記した。

II帯：西壁南端試料No.17～2、西壁中央試料No.8～1、南壁中央試料No.5～1

多くの試料でアカガシ亜属が卓越し、他の種類に比べ高い出現率を示す。

f 亜帯：西壁中央試料No.8～6、南壁中央試料No.5～2

アカガシ亜属以外の種類で特徴的に出現する種類はない。

e 亜帯：西壁南端試料No.17～12、南壁中央試料No.1

スギ属がアカガシ亜属に次ぐ高率（10～20％程度）で出現し、他の種類は数％程度以下の出現率である。草本花粉では、西壁南端試料No.16～12でイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。

d 亜帯：西壁中央試料No.5～3

モミ属、ツガ属、コウヤマキ属がアカガシ亜属に次ぐ高率（5～20％程度）で出現し、他の種類は数％程度以下の出現率である。草本花粉ではヨモギ属が、西壁中央試料No.4・3で高率を示す。また、シダ類胞子が高率となる。

c 亜帯：西壁南端試料No.11～9

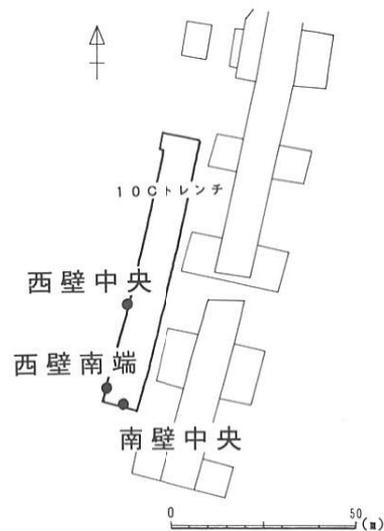


図156 試料採取地点

スギ属がアカガシ亜属に次ぐ高率（11～25%程度）で出現し、他の種類は数%程度以下の出現率である。草本花粉では、西壁南端試料No.11でヨモギ属が高率になるほか、イネ科（40ミクロン以上）も西壁南端試料No.11・9では高率を示す。

b 亜帯：西壁南端試料No. 8・7

モミ属、マツ属（複維管束亜属）、ツガ属がアカガシ亜属に次ぐ高率で出現し、他の種類は数%程度以下の出現率である。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）が西壁南端試料No. 7で高率となる。また、シダ類孢子が高率となる。

a 亜帯：西壁南端試料No. 6～2

マツ属（複維管束亜属）、ツガ属、スギ属がアカガシ亜属に次ぐ高率で出現し、他の種類は数%程度以下の出現率である。草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が高い出現傾向を示し、西壁南端試料No. 3からはソバ属が出現する。

I 帯：西壁南端試料No. 1

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、モミ属、ツガ属、アカガシ亜属を伴う。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）がII帯 a 亜帯から連続して高い出現率を示し、ソバ属も出現する。

(2)古環境変遷

若江北遺跡の周辺では、若江北遺跡内で安田（1983）の報告があるほか、北側の巨摩廃寺遺跡でも安田（1982）により花粉分析が実施されている。また、近畿自動車道沿いの各遺跡で、おもに安田や株式会社パリノ・サーベイにより花粉分析が実施されている。また安田（1990）は従来の分析結果をまとめ、同地域の弥生時代前後の古環境変遷を推定している。

今回の分析結果の内、II帯の多くが安田（1983）の分析試料の推定時期と一致した。したがって大きな傾向である、アカガシ亜属の卓越する点は一致した。また、弥生時代後期のシダ類孢子多産層準（西壁南端試料No.11）のように、おおよその堆積時期と花粉（孢子）組成の一致が見られるケースもあった（ただし、安田（1983）ではイネ科、カヤツリグサ科花粉が同時に高率となるのに対し、今回の結果ではイネ科、カヤツリグサ科の他、ヨモギ属も高率となった。）。しかし当然のことながら、後代の削り込みや無堆積による堆積物の欠如、試料の分析間隔の大小によるデータの漏れなどがあり、今回の分析により、ヨモギ属を伴うシダ類孢子多産層準が弥生時代前期にも存在することなど、従来得られていなかったデータも得られた。

前記の各花粉帯（花粉亜帯）は、出土考古遺物からII帯 f 亜帯（西壁中央試料No. 8～6、南壁中央試料No. 5～2）が縄文時代晩期以前（南壁中央試料No. 2と1間が10面：縄文時代晩期面）、II帯 e 亜帯（西壁南端試料No.17～12、南壁中央試料No. 1）が縄文時代晩期以降（南壁中央試料No. 2と1の間が10面：縄文時代晩期面）、II帯 d 亜帯（西壁中央試料No. 5～3）が弥生時代前期（西壁中央試料No. 4と3の間が9 b 面：弥生時代前期面、西壁中央試料No. 3と2の間が9 a 面：弥生時代前期面）、II帯 c 亜帯（西壁南端試料No.11～9）が弥生時代中期末～後期（西壁南端試料No.11が5層：弥生時代中期末～後期初頭の堆積、No. 9が4 c 層：弥生時代後期の堆積）、II帯

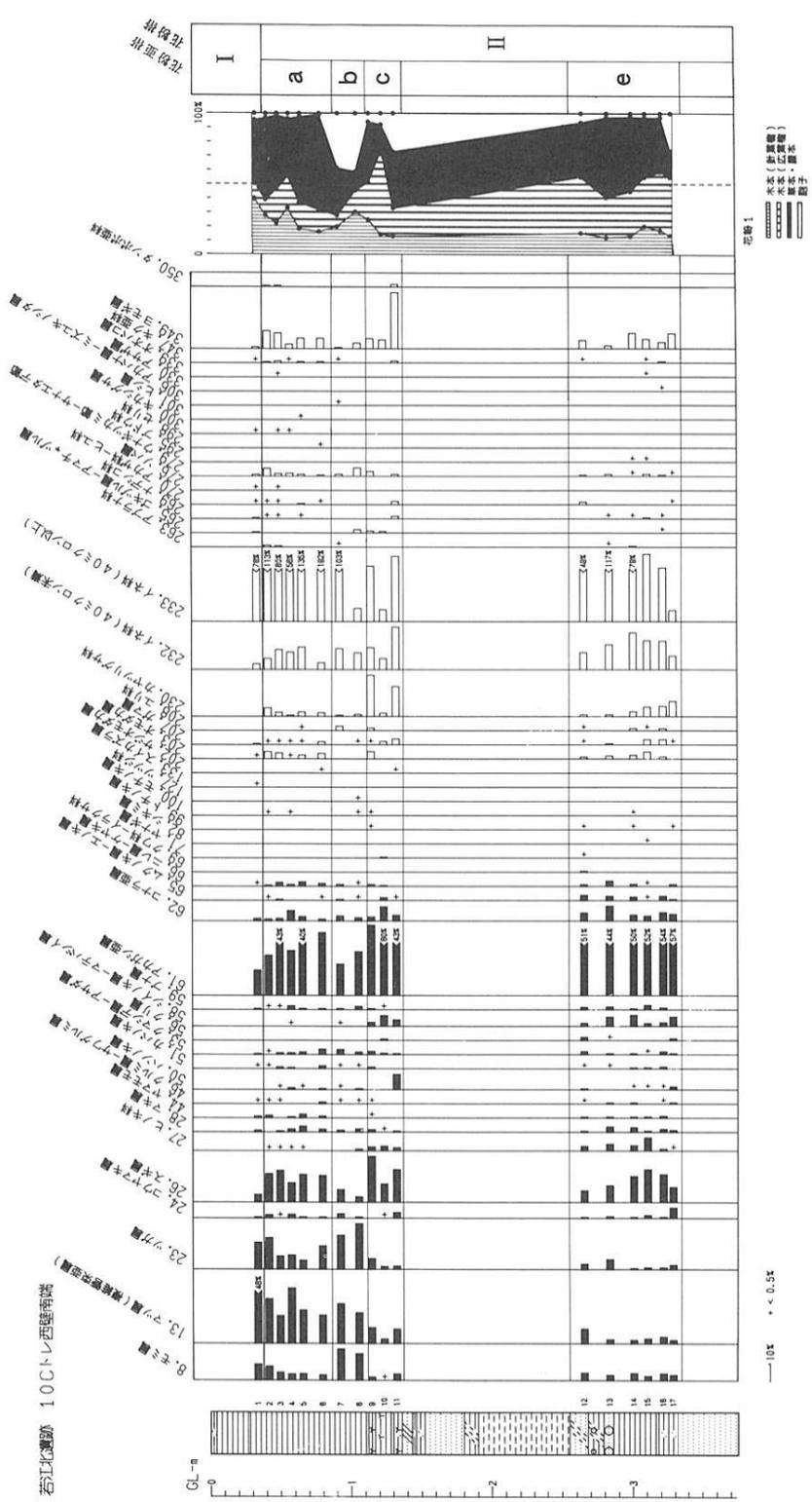


図157 10Cトレンチ西壁南端の花粉ダイアグラム

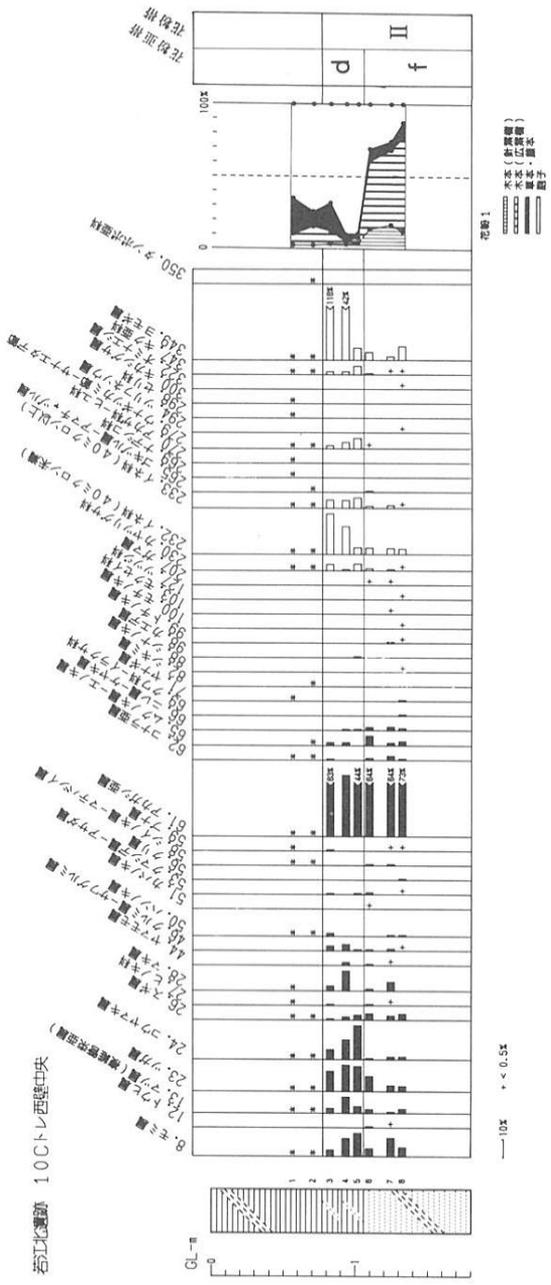


図158 10Cトレンチ西壁中央の花粉ダイアグラム

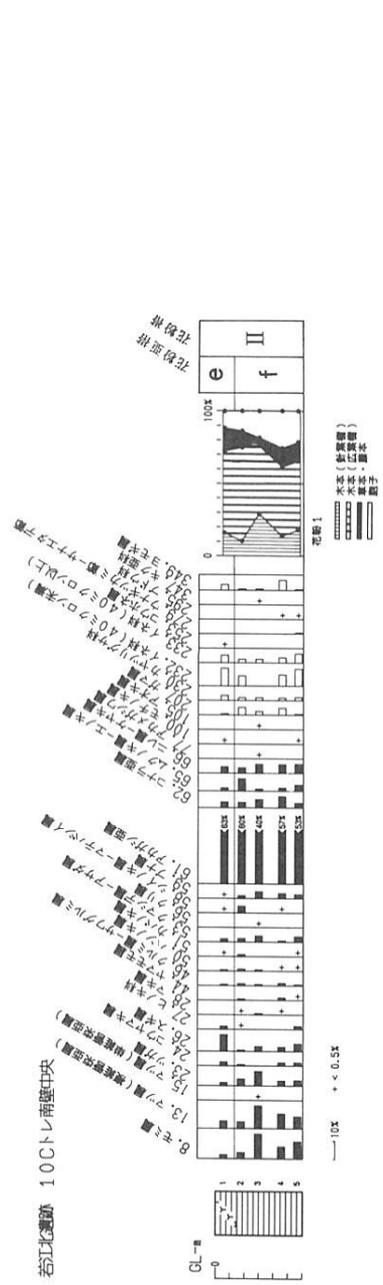


図159 10Cトレンチ南壁中央の花粉ダイアグラム

b 亜帯（西壁南端No. 8、7）が古墳時代前期（西壁南端No. 8が4 b層：古墳時代前期の堆積、No. 7層準：古墳時代前期の堆積）、II帯 a 亜帯（西壁南端No. 6～2）が古墳時代前期～近世（西壁南端No. 6層準：古墳時代前期の堆積、No. 5～2層準：古墳時代前期～近世の堆積）、I 帯（西壁南端No. 1）が近世（西壁南端No. 1層準：近世の堆積）の植生を反映していると考えられる。

以下に各花粉帯毎に古植生を中心とした古環境の復元を試みた。

II帯 f 亜帯期（縄文時代晩期以前）

遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。また、わずかながらブナ属が出現することから、金剛・葛城山系や大和川上流（大和高原）にはブナを要素とする冷温帯林が分布していたと考えられる。

また堆積物から、試料採取地点周辺には沼沢湿地であった時期や、流れのある浅い水域であった時期があったと推定される。さらに、大型のイネ科（イネ科：40ミクロン以上）がほとんど出現しないことから、試料採取地点周辺で、稲作が行われていた可能性はきわめて低い。

II帯 e 亜帯期（縄文時代晩期～弥生時代前期以前：西壁南端では、上位のd 亜帯に相当する層準の分析が実施できなかった。このため、西壁中央部で確認できたd 亜帯の年代までの植生を反映していると推定した。）

前時期と同様に、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。しかしこの時期には、中間温帯林要素のうちスギ属が特に増加し、気候の湿潤化、生駒山地での土地条件の変化、あるいは遺跡周辺でスギが生育したなどの可能性がある。

試料採取地点周辺では、南壁中央の各試料では大型のイネ科が低率であることから、10面、あるいはその直上層準で稲作が行われていた可能性はきわめて低い。しかし西壁南端試料No.16～12の層準では、大型のイネ科が高率で出現することから、稲作が行われていた可能性が極めて高い。

II帯 d 亜帯期（弥生時代前期）

前時期と同様に、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。しかしこの時期には、スギ属を除く中間温帯林要素が特に増加し、気候の乾燥化あるいは、生駒山地での土地条件の変化が起こった可能性がある。

試料採取地点周辺では草原が広がり、ヨモギ属の草や、シダ類が繁茂していたと考えられる。

II帯 c 亜帯期（弥生時代中期末～後期）

前時期と同様に、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。この時期には、中間温帯林要素のうちスギが再び増加し、気候の湿潤化、

生駒山地での土地条件の変化、あるいは遺跡周辺でスギが生育したなどの可能性がある。

最も古い時期（5層堆積期）には、試料採取地点周辺では、水田が広がっており、その周辺には、ヨモギ属や、シダ類が繁茂する草原が広がっていた可能性がある。しかし大型のイネ科の出現率が安定しないことから、c 亜帯期で水田耕作が行われていたとすることには、疑問も残る。今後のプラント・オパール分析などの調査に、結論を持ち越したい。

II帯 b 亜帯期（古墳時代前期）

前時期と同様に、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。しかしこの時期には、スギ属を除く中間温帯林要素が特に増加し、気候の乾燥化あるいは、生駒山地での土地条件の変化が起こった可能性がある。

e 亜帯、b 亜帯で見られるモミ属、マツ属（複維管束亜属）、ツガ属の花粉の増加、スギ属の減少の原因について、乾燥化あるいは土地条件の変化を推定した。しかし、これらの亜帯では同時にシダ類孢子も高率となることから、堆積作用により大型花粉と孢子が濃縮された可能性もある。

また、この時期の後半から I 帯にかけて大型のイネ科が連続して高率で出現することから、遺跡周辺ではこの時期以降、連続して稲作が行われていたと推定できる。

II帯 a 亜帯期（古墳時代前期～近世）

前時期と同様に、遺跡周辺から生駒山地山麓にかけてはカシ類を要素とする照葉樹林に、生駒山地山腹から山頂にはモミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギを要素とする中間温帯林に覆われていたと考えられる。前時期後半からの遺跡周辺の水田化に伴い、照葉樹林は平野部での分布域を縮小したと推定され、相対的な中間温帯林要素花粉の増加が見られる。

また、この時期の後半、西壁試料No.3 層準堆積時期には、ソバの栽培が行われていたと推定できる。

I 帯：西壁南端試料No.1（近世）

II帯期とは一転し、平野部から生駒山地山麓ではアカマツを要素とする二次林が分布域を拡大したと推定できる。しかし、一部ではアカガシ亜属を要素とする照葉樹林も分布していたと推定できる。一方、生駒山地山腹から山頂では、II帯期同様に中間温帯亜林が分布していたと推定できる。

5. まとめ

若江北遺跡で花粉分析を行い以下のことが明らかになった。

- (1) 花粉分析結果から、花粉組成は I、II帯に分帯でき、さらに II帯は a～f 亜帯に細分できる。これらの花粉帯は、出土遺物などから縄文時代晩期以前から近世までの植生を反映していると考えられる。
- (2) 弥生時代の花粉組成は、大きくは安田（1983）と矛盾しなかった。また、弥生時代中期から

後期でのシダ類胞子の多産層準が確認できた。

(3) 今回新たに、弥生時代前期でのヨモギ属を伴うシダ類胞子の多産層準が確認できた。

(4) 縄文時代晩期以前のII帯 f 亜帯期から近世のI帯期までの古植生を中心とした古環境変遷を推定した。

(5) 若江北遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期のII帯 d 亜帯期と、古墳時代以降のII帯 b 亜帯期からI帯期の2期に連続して稲作が行われていた。また弥生時代中期から古墳時代前期のII帯 c 亜帯期では、断続的に稲作が行われていた。

(川崎地質株式会社 渡辺正巳)

引用文献

川崎地質株式会社(1993) 「芝ノ垣外遺跡の花粉・珪藻分析」

『芝ノ垣外遺跡II-発掘調査報告書-本文編』393-413, (財)大阪府埋蔵文化財協会

安田喜憲(1982) 「瓜生堂・巨摩廃寺遺跡の泥土の花粉分析」『巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』321-360, (財)大阪文化財センター

安田喜憲(1983) 「若江北遺跡Aトレンチ北壁の花粉分析」『若江北 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』75-88, (財)大阪文化財センター

安田喜憲(1990) 『気候と文明の盛衰』p.358, 朝倉書店

第6節 若江北遺跡の堆積層にみられた地震動による変形構造

1. はじめに

本稿では、若江北遺跡の発掘調査で掘削された完新統沖積上部砂層および沖積頂部陸成層¹⁾に相当する、おもに湖沼成堆積物中にみられたいくつかの変形構造について記載し、これらが過去の地震動に起因した可能性について検討する。

地震や火山噴火、暴浪、洪水など「自然の非定期的変化あるいは“イベント”」を何らかのかたちで記録している堆積物は「イベント堆積物」と呼ばれ、Seilacher(1984a)によって「イベント層序学」が提唱されて以来、地質学とくに堆積学の分野でその研究が進められてきた(たとえば、志岐, 1993)。イベント堆積物のなかで、地震動による変形構造をもつ現地性堆積物²⁾はサイズマイト(seismite)と呼ばれる(Seilacher 1991)。しかし、この用語には定義や堆積物の認定のうえでいまだ異論があり、本稿ではこれを用いない。

未固結堆積物の地震動による堆積構造は、粘塑性変形、液状化にともなう堆積物と間隙水の流動、および破断やせん断といった破壊などの痕跡をとどめ、地震動特有のランダム振動によって生じる加速度的かつ反復的な変形プロセスと関連して解釈されるものと考えられる。このような変形構造のなかで、噴砂現象(sand volcano)とこれに伴う砂脈(sand dike)はよく知られている。このほかに、Kuenen(1958)による実験で形成機構が確かめられたロード構造(load structure)、球・まくら状構造(ball-and-pillow structure)、Seilacher(1969, 1984b)によって論じられたフォールト・グレーディング構造(fault-grading structure)、凸面を下にした貝殻の累積(convex-down stack)や、ある種のスランプ構造、スラスト構造(pleated laminae or skin slump, Krumme Lagen)、Lowe and LoPiccolo(1974)によって論じられた、液状化と間隙水圧の上昇に伴う水抜けによって生じる皿状構造(dish structure)、ピラー構造(pillar structure)などがある。さらに多数の二次的な分岐をもつフレーム構造(helictic flame structure)(Brodzickowski and Halszczak, 1987)、液状化した堆積物がロード構造間に侵入した痕跡(fluid flow)や一団となって流動した痕跡(mass flow)、植物遺体の浮き上がり(Davenport and Ringrose, 1987)などがある。

いっぽう、これらの変形構造を過去の地震記録として、堆積層の累重中に見出し、先史・歴史時代の地域的な地震の発生頻度や強度、近接する断層の活動の推定に利用する研究も行われてきた(Sims, 1973, 1975; Davenport and Ringrose, 1978)。わが国では、考古遺跡で直接確かめられる過去の地震の痕跡を考古遺物の相対年代と対比し、古地震の編年を行うと同時に、年代のわかる地震の痕跡から逆に考古資料の年代を特定しようとする、いわゆる「地震考古学」が提唱されている(寒川, 1992, 1993)。しかし、従来の研究では、おもに断層と粗粒堆積物の液状化に伴う噴砂現象が注目され、先に挙げたような多様な変形構造についてはほとんど論じられていなかった。³⁾

筆者らは、大阪府東大阪市内の河内平野、沖積低地中央部に分布する北島遺跡・鬼虎川遺跡・水走遺跡・瓜生堂遺跡・宮ノ下遺跡などで、縄文時代晩期から鎌倉時代初頭までの、おもに湖沼成の泥質堆積物の地震動による変形構造について検討し、変形をこうむった層準を同時間面の指標として層序対比を試みた(松田他, 1994)。現在、変形構造の諸例を収集するとともに、変形機構の説明、変形構造によって地震イベントを読みとる際の分解能、層序対比を含めた応用的側面について模索中である。このような課題を考慮しつつ、まず次節では、調査地の土層断面および採取試料の観察結果について述べる。

2. 若江北遺跡で観察された変形構造

(1)変形構造を観察した堆積層

本遺跡での変形構造の観察は、発掘調査地の8Cトレンチに設定された縄文時代後期から弥生時代中期までの高さ約1.5mの土層断面でおこなった(写真2, 図160)。この土層断面では以下の単層がみとめられた。

- (1)中粒砂～細礫を主とする砂礫層。シルト質粘土～砂質シルトのレンズ状の薄層ないしブロックが挟まれ、波状ないしトラフ型斜交層理をなす。灰黄色を呈する。
- (2)砂礫質シルト層。中粒砂～細礫からなる砂礫の薄層・葉層が挟まれ、波状の層理・葉理およびトラフ型斜交層理・葉理をなす。緑灰色を呈する。
- (3)おもに中粒砂～細礫からなる砂礫層。逆級化成層をなし、下面付近では細粒砂～極細粒砂とシルト葉層の互層をなす。灰黄色を呈する。
- (4)わずかに砂がまじるシルト質粘土層。見かけ上、塊状をなし、炭酸鉄の結核を含む。暗緑灰色を呈する。
- (5)シルト質粘土層。見かけ上、塊状をなし、炭酸鉄の結核を含む。緑灰色を呈する。
- (6)生物擾乱がみとめられるシルト質粘土層。上面からは下方に延びる植物の根の痕が多数みられる。緑灰色～暗緑灰色を呈する。
- (7)有機物に富む砂質シルト質粘土層。見かけ上、塊状をなす。オリーブ黒色を呈する。



写真2 若江北遺跡8Cトレンチ土層断面

- (8)砂質シルト質粘土層。見かけ上、塊状をなす。下面より下方に巣穴が多数形成され、本層の堆積物によって充填されている。暗灰色を呈する。
- (9)おもに細粒砂～中粒砂からなる砂層。見かけ上、塊状をなし、黄灰色を呈する。
- (10)シルト質粘土層。塊状および平行葉理をなす。下部は黒色シルト質粘土(10と同じ)の葉層との互層となり、平行葉理をなす。比較的まばらにヨシの直立棹・匍

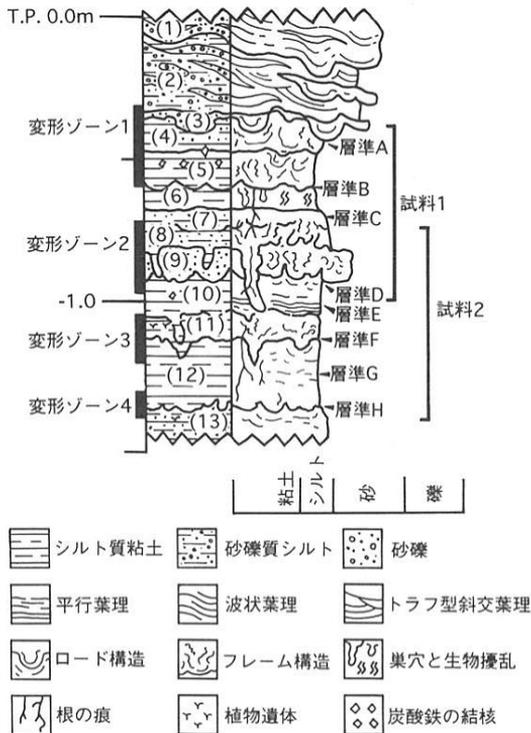


図160 観察地点の柱状図

匍茎の痕を残す。

(1)有機物に富むシルト質粘土層。上部は暗灰色で下方へ漸移的にオリーブ灰色となる。不明瞭な平行葉理が散見されるが、ほとんど塊状をなす。下面より巣穴が多数発達し、本層の堆積物で充填されている。

(2)シルト質粘土層。見かけ上、塊状で部分的に平行葉理をなす。ヨシの茎の痕が多数みとめられる。最下部は下層(12)と混じり合う。

(3)有機物に富む砂質シルト質粘土層。黒褐色を呈する。

以上の単層の番号は、本報告書中の考古学的発掘調査における層序番号と異なる。そのため、両者の対応関係と各層準の出土遺物による相対年代を表6に示す。

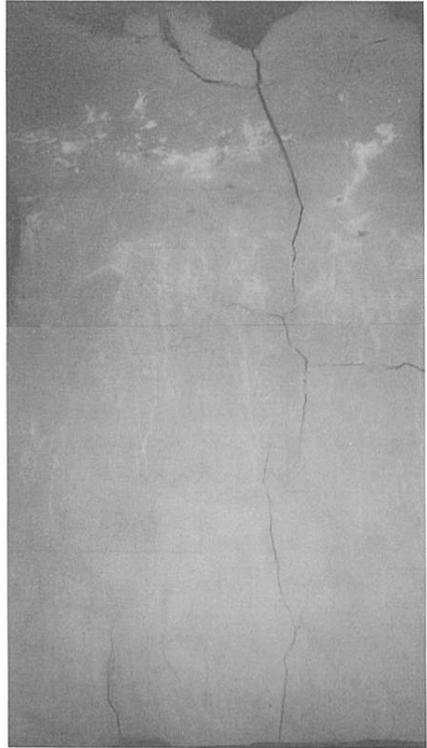
(2)観察の方法

現地では土層断面の柱状スケッチを作成したのち、より詳細に変形構造を観察するため、上記の土層断面において、(3)層の下部から(10)層の中部までと、(7)層から(13)層の上部までの、層位的に重複部分をもつ、2つの連続した厚板状の不攪乱試料(高さ55cm、幅33cm、厚さ約10cm)を採取した。図160の右端にこれらの採取位置を示す。室内に持ち帰った試料は、約1cmの厚さに削り、軟X線写真撮影を行った。また、各単層間の層界と単層スケールより微細な葉理や粒状・線状あるいは斑点状に分布する相異なる堆積物の境界、生痕化石・根や茎の痕跡の輪郭などを試料上に

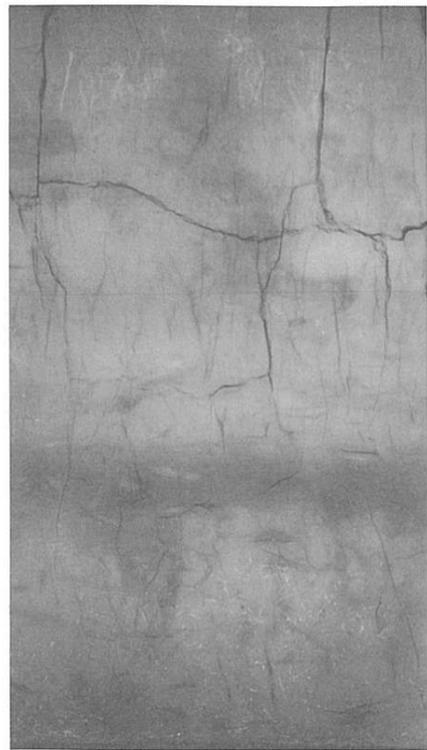
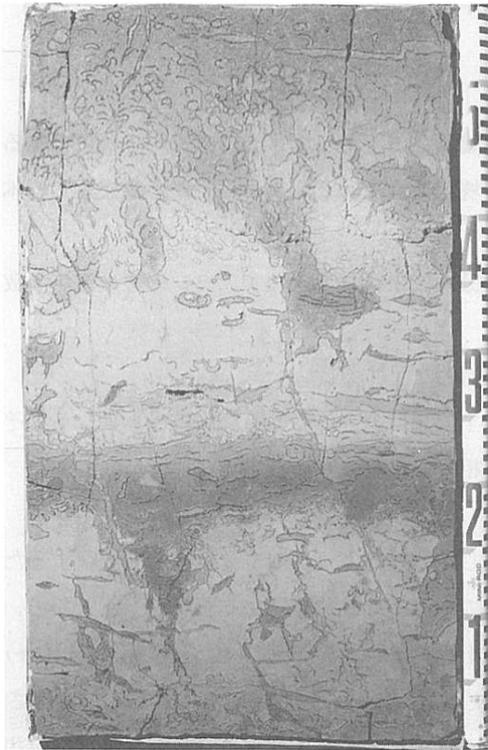
表6 層序対照表

単層番号	考古学的層序	時代・時期	
(1)	第9層	弥生時代 中期前半	
(2)			
(3)			
(4)	第10層		
(5)			
(6)	第11層		
(7)			
(8)			
(9)	第12層		縄文時前期
(10)			
(11)	第13層		縄文時晩期
(12)	第14層		縄文時後期
(13)	第15層		

試料 1



試料 2



a

b

写真 3 採取試料とその軟 X 線写真

針で描き、これをOHPフィルムにトレースした。採取した試料は上位より「試料1」「試料2」と呼ぶ。両試料の写真を写真3-aに、軟X線写真を写真3-bに、トレース図を図161・162に示す。以下、トレース図に従って試料中に見られる変形構造の特徴を記載する。また、1回の変形イベントによって生じたと考えられる堆積物中の垂直的範囲を「変形ゾーン」と呼び、これを認定する。なお、単層の層界とは別に、記載の便宜上、2試料を通して上位より「層準A～H」を設けた。(3)変形構造の記載

試料1 (図161)

本試料には、フレーム構造、ロード構造、ロード構造の下端から発達したフィッシャーがみとめられる。試料上部の層準Aでは(3)層の砂に充填されたロード構造があり、その直下の(4)層中にはフレーム構造が発達している。(4)層と(5)層の層界にも、ロード構造が見られ、微細なフィッシャーを伴うものもある。その下位には上位よりやや未発達なフレーム構造が見られる。(4)層最下部と(5)層に含まれる炭酸鉄の結核がフレーム状に分布していることが軟X線写真でわかる。

両層の層界を越えて上方に発達するフレーム構造があり、層準A～B間のロード構造とフレーム構造は調和的な重なりのパターンをなすこと、この間でフレーム構造の発達が下方に向かって漸次弱まり、層準B以下に形成された巣穴や根の痕の保存状態が良好なことから、層準Bが変形ゾーンの下限と考えられる。現地の観察では、層準Aより上位の(1)～(3)層も、単層内および層界にロード構造を含み、屈曲に富む波状の層理をなすことから、変形ゾーンの上限は試料の範囲より上位の層準にあると考えられる。(変形ゾーン1)。

試料1の下半では、層準Dに顕著なロード構造が見られる。この上位の(9)層の砂、(8)層の砂質シルト質粘土がフレーム構造をなす。また、(9)層の砂の中に含まれる砂質シルト葉理はうろこ状ないしは同心円状の渦模様をなす。顕著なロード構造ではないが、(8)層下面から下方に形成された巣穴からフィッシャーが発達している。(8)層上面からの巣穴らしき部分が2・3か所あるが、すべて周囲の砂(より下位ではシルト質粘土)とともに変形している。(8)層上面のフレーム構造は比較的明瞭で、その変形の上限は層準C付近にある。この上位では生物擾乱による小さなスケールでの侵食・変形・再堆積を示す堆積構造が見られる。いっぽう、層準Dより下位の(10)層上半は、発達の弱い不明瞭なフレーム構造をなし、層準E付近ではほとんど変形がみとめられない。また、層準Bより下方に形成された根の痕が、上記の変形構造を切っており、変形がみとめられない。以上のことから、変形ゾーン1と層準Cから層準Eまでの異なる時期に形成されたと判断し、この範囲を一つの変形ゾーンと認定する(変形ゾーン2)。

試料2 (図162)

本試料には、フレーム構造、ロード構造、これにともなうフィッシャーのほかに、ロード構造と連続して生じた微小な断層、加速度的な流動を示唆する顕著な渦模様がみとめられた。

本試料上半はすでに述べた変形ゾーン2(層準C～層準E)に相当する。層準Dより上方では、丸い形の粘土礫(細礫～中礫クラス)含み、渦模様をなす砂および砂質シルト質粘土のフレーム

構造がみられ、下方では下位のシルト質粘土上面に、下に凸な形をなすロード構造がみられる。また、このロード構造の左右が変位した微小な断層がみとめられる。垂直変位量は約2cmで、ロード構造の下端から斜め下方に約20cm延びている。断層面の間隙には、ロード構造を充填する(8)層の砂質シルト質粘土(巣穴の堆積物)や(9)層の砂、ロード構造内で形成された粘土礫が挟まっている。したがって、この微小断層は一種のフィッシャーともみなせる。

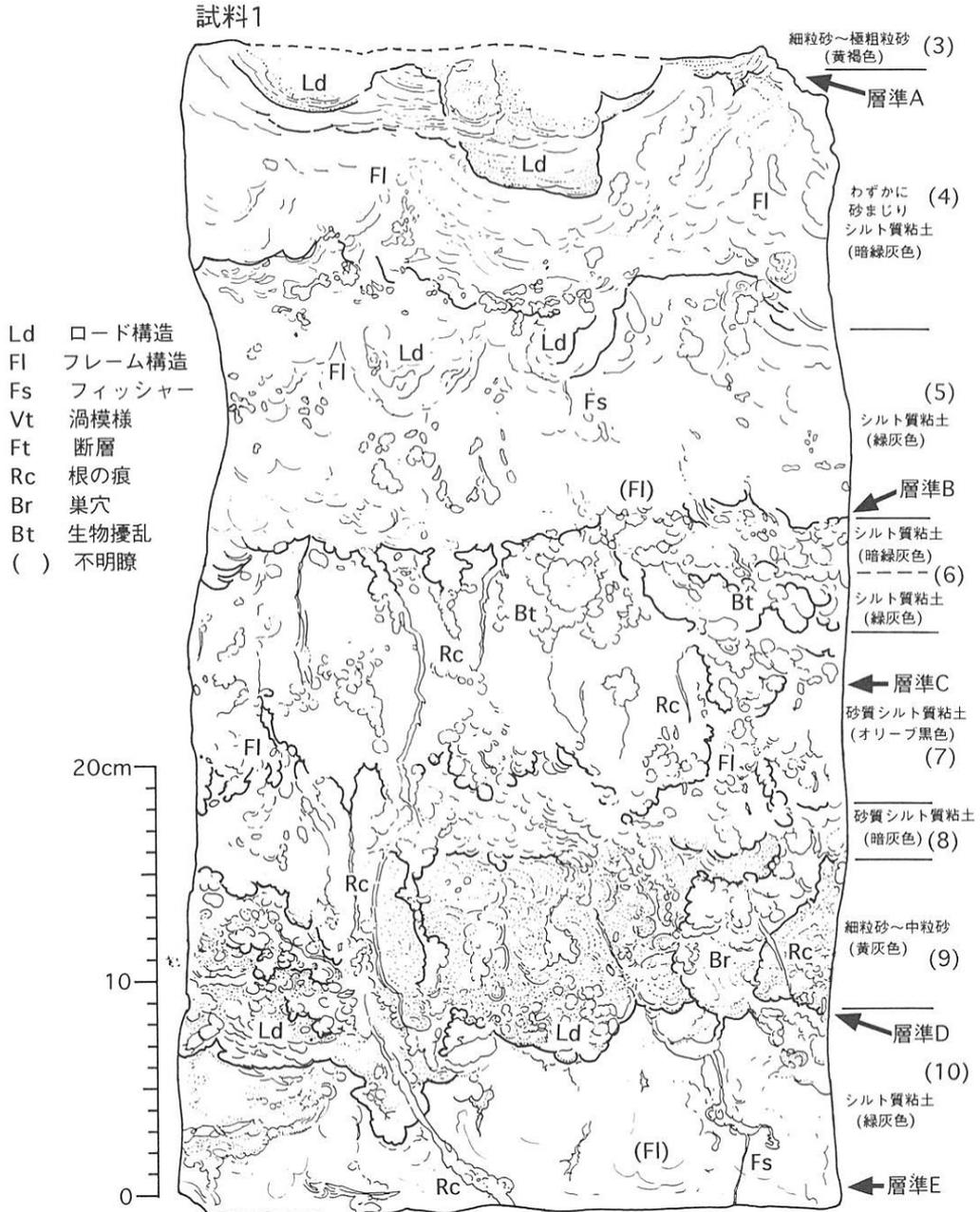


図161 試料1の堆積構造トレース図

層準Eより下では、層準Fまでの間に不明瞭なフレーム構造や本来は巣穴であったと思われる逆三角形の断面をなすロード構造およびその下端より発達したフィッシャーが見られる。まず、(10)層下部と(11)層との層界付近には、前者が断裂した部分に液状化した下位の堆積物が流入して生じた、貫入的なフレーム構造が見られる。また、(10)層下部は荷重を受けた、やや下に凸な面の集

試料2

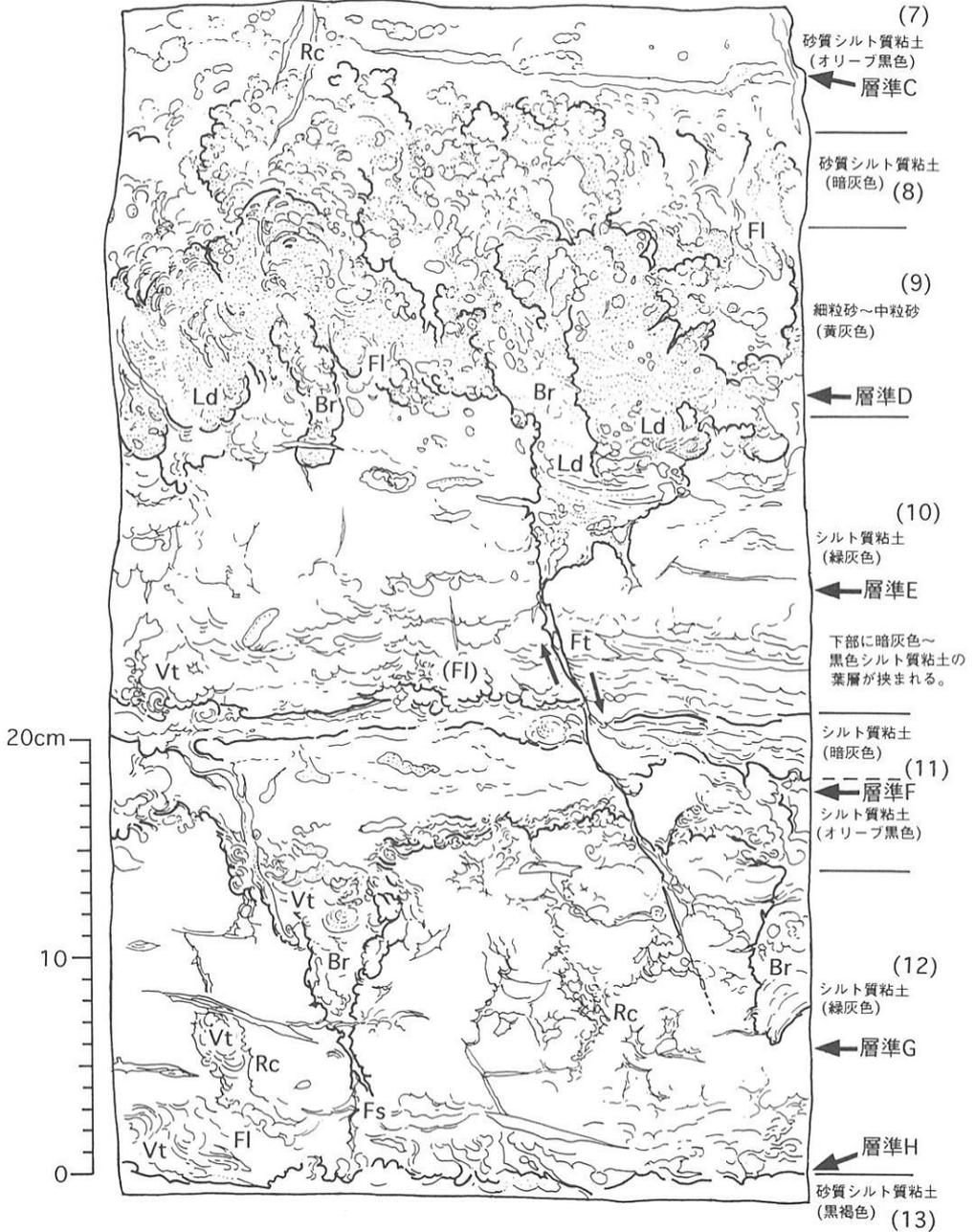


図162 試料2の堆積構造トレース図

まりであることから弱いロード構造とみなせる。いっぽう、(11)層内では、屈曲した植物遺体の葉層が見られるとともに、層準Fに相当する(11)層最下部では(12)層上面の堆積物を巻上げたかたちで、直径15～数mmの渦模様が多数見られる。この特徴は、(11)層下面から下方に発達した巣穴の内壁や、これを充填した同層の堆積物中にもみとめられる。さらに、層準Fの下位、(12)層内に見られる巣穴、ヨシの直立棹・匍匐茎痕は(11)層の堆積物に充填されているが、これらの輪郭(内壁)の断面はほとんどの部分が幅15～数mmの、内に凸な形の集まりからなる。これらは、(12)層に圧迫されて、巣穴、ヨシの直立棹・匍匐茎痕の本来の形が変形したようにみえる。このような変形は縦方向に延びた巣穴、直立棹痕に顕著である。層準G付近では、この特徴は弱まる。

以上の、層準Eから層準Gまでの変形構造が連続的であること、変形ゾーン2から下方に延びる微小な断層によって切られており、それ以前の変形であることから、一つの変形ゾーンと認定する(変形ゾーン3)。

試料2の最下部(層準H)には、約5cmの厚みの中にフレーム構造が見られる。現地での観察を怠ったため、変形ゾーンの下限は不明であるが、変形ゾーン3より古い変形ゾーンと考えられる(変形ゾーン4)。

変形構造の検討

試料の観察から推測される変形構造の形成プロセスの特徴は以下のようなものである。

①液状化堆積物の流動(一部塑性変形)、ないしは堆積物粒子の質量と浮力がつりあった状態のゾル状堆積物の流動によるほぼ同時的な(ないしはきわめて短時間の)変形を示す。また、この変形は垂直的な位置関係にあるいくつかの堆積層にまたがる。このなかで、せん断応力の低下による下位堆積物の上方への移動、上位堆積物の下方への移動がみられる。これらの特徴は、生物擾乱のように一定の時間経過の中でパッチ状に切り合ったり、ペレット状の粒が堆積し、さらにその場の堆積環境を反映した構造が挟まれる様子(層準B-C間)とは異なる。

②ロード構造の下位堆積物(おもに変形ゾーンの下部)が流動変形(塑性流動)しつつあるにもかかわらず、この堆積物中にロード構造の下底からフィッシャーが生じていることが注目される。このフィッシャーは、加速度的で急激な力が加わり、塑性流動状態の堆積物が一気に破壊点に達して断裂したものと考えられる。フィッシャー内に噴出・貫入した堆積物は、液状化した上位層の間隙水圧の上昇によるものと考えより、下方への衝撃による圧入によるものと考えられる。また、このような力が空間的に不均等に作用した結果、微小断層が生じると考えられる。

③泥質堆積物が粘性の高い粘性流体として挙動したため、流体中に顕著な渦を発達させる。渦から読み取れる流線方向はほとんど無秩序だが、詳細にみれば反復的に変化したと考えられる。この特徴は変形ゾーン上部のフレーム構造にもみられる。

以上のことから、4つの変形ゾーンの構造は、加速度的ないし衝撃的かつ反復的な堆積物への加荷によって生じた変形や破壊を示し、地震動によって形成された可能性がきわめて高い。

今回の試料を観察するなかで、さらに気付いた点を以下に述べる。

まず、堆積構造の記載中にフレーム構造と呼んだものには2種類ある。上位にロード構造がみとめられるものと、ロード構造がないものである。前者は層準A-B間、層準D付近、層準E-F間にみられる。後者は層準C-D間、層準Hにみられる。後者は、フレーム構造の先端部分の分岐が多く、渦模様をなすこともある。また、ロード構造に制約されずに発達していることから、変形構造の形成時点では、この直上が湖水の水底であったと考えられる（仮に「開放型フレーム構造」と呼ぶ）。今回の試料においても、これまで筆者が観察した事例でも、このようなフレーム構造は変形ゾーンの上部にみられた。これに対して、上位にロード構造をとまなうフレーム構造は変形ゾーンの中部以下にみられ、先端の分岐は限定されている（仮に「被荷重型フレーム構造」と呼ぶ）。

以上のことと、フィッシャーがロード構造の下に生じることを考え合わせると、1つの変形ゾーンは水底直下の開放型フレーム構造がみとめられる上部ゾーン、ロード構造がみとめられる中部ゾーン、被荷重型フレーム構造とフィッシャーがみとめられる下部ゾーンの3つのサブゾーンに細分できると思われる。このような変形構造の垂直的組み合わせモデルを想定することによって、変形ゾーンの重複を認知することができる。たとえば、ロード構造直下に開放型フレーム構造がみられる場合は、新旧2回の変形イベントがあった可能性が高い。現時点では、より多くの事例で検証する必要を残すので、このモデルについては将来稿を改めて論じたい。

3. 変形イベントの年代と層序対比

変形ゾーンの上限が、変形イベントの起きた堆積面（侵食されていないと仮定して）と考えられるので、この層準や直上・直下の堆積層から出土した遺物の相対年代によって変形イベントの起きた時代・時期を推定する。まず、変形ゾーン1の上限は、試料中にはなかったが、この変形ゾーンがおおむね弥生時代中期中頃までの、畿内第II様式土器包含層に対応し、(1)層より上位でもこの時期の遺物が出土しているので、変形イベントはこの時期に起きたと考えられる。変形ゾーン2の上限（層準C）は弥生時代前期、畿内第I様式土器包含層の上部に対応する。変形ゾーン3の上限は縄文時代晩期に対応する。また、変形ゾーン4の上限は縄文時代後期後半、北白川上層式土器包含層に対応する。変形イベントはそれぞれの時期に起ったと考えられる（表6）。

次に、これらの変形ゾーンを、東大阪市内の鬼虎川遺跡、北島遺跡、瓜生堂遺跡、宮ノ下遺跡でこれまでにみとめられた変形ゾーンと対照し、層序対比した結果を図163に示す。図中破線をつないだ層準は、上下の相対年代の対比から、同一の変形ゾーンとみなせるが、現在のところ確証を欠く部分である。

若江北遺跡の変形ゾーンのうち、弥生時代中期前半の変形ゾーン1に対比した他遺跡の変形ゾーンは、いずれも弥生時代中期の畿内第II様式から第III様式までの土器を産出する。若江北遺跡の変形ゾーンとは相対年代に微妙なずれがある。そのため、弥生時代中期には2つの変形ゾーンが存在することも予想される。

弥生時代前期の変形ゾーンに関しては、各遺跡ともに弥生時代中期の変形ゾーンの低位にみら

れる変形ゾーンが対比されるようである。ただし、鬼虎川遺跡、北島遺跡ではより下位の縄文時代晩期の変形ゾーンと重複しているものと考えられる。宮ノ下遺跡の弥生時代前期の変形ゾーンは、図中に示していないが、下位の潮汐の影響下で堆積したと考えられる砂質シルト質粘土・砂質シルトが侵食されて形成された、いわゆる埋積浅谷中の堆積層に明瞭な変形構造がみとめられ、畿内第Ⅰ様式の土器が産出することがわかっている。

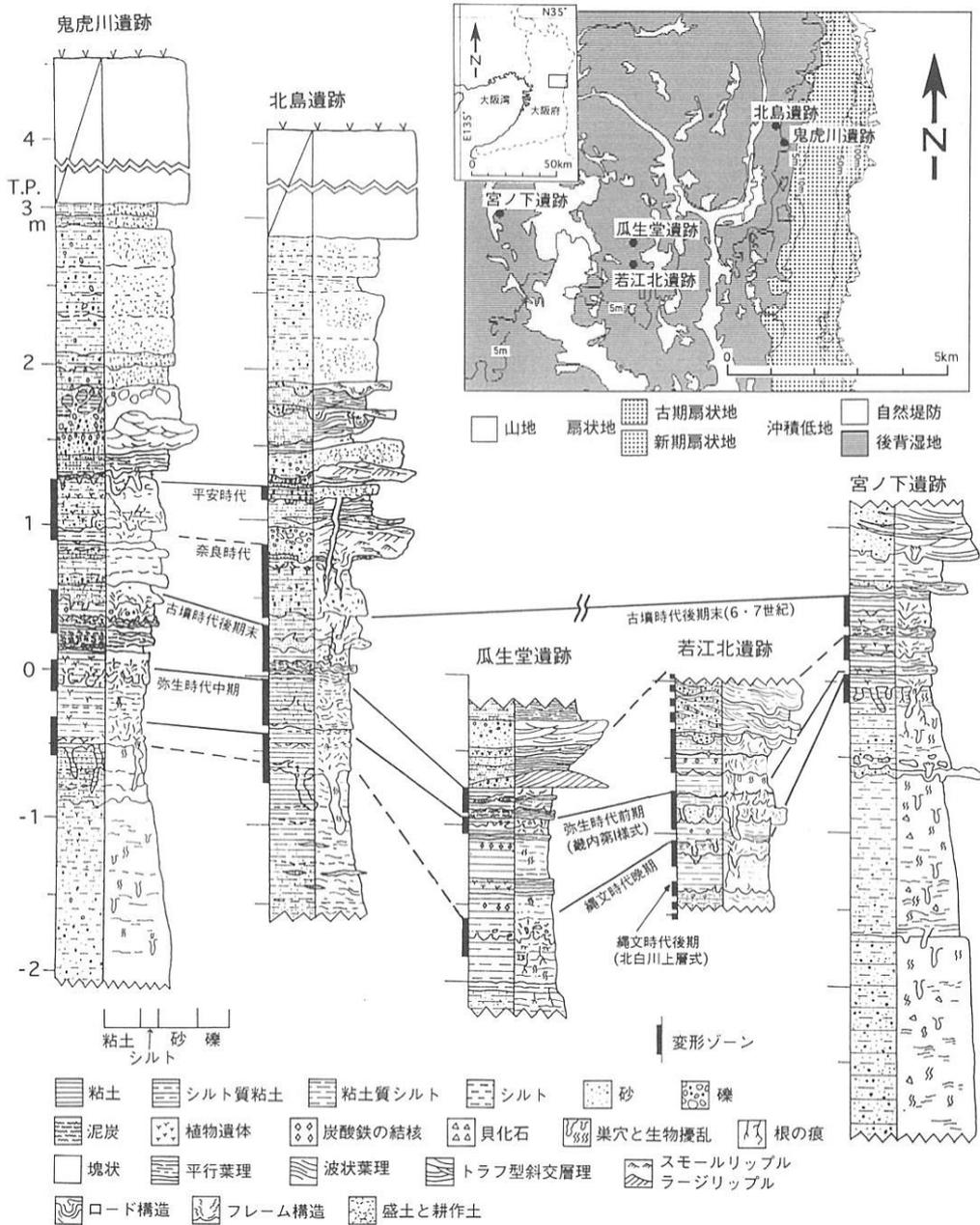


図163 河内平野中央部の変形ゾーンの対比

縄文時代後期後半の変形ゾーン4は今回の観察で初めてみとめられた。河内平野の沖積低地では、この層準の堆積層の時期が遺物の相対年代によって確認される例が少なく、絶対年代によって異なる地点間の層序対比も行われていなかった。変形ゾーンの観察もこれまで充分ではなかったので、今後の調査で注意していきたい。瓜生堂遺跡では、縄文時代晩期の変形ゾーンの低位に砂質粘土質シルト層がみられ、13層と対応するようである。

なお、参考のため、弥生時代中期の層準より上位で層序対比ができる古墳時代、奈良時代、平安時代の変形ゾーンを図示した。このうち、古墳時代の変形ゾーンは、6世紀末から7世紀の遺物が産出している。変形ゾーン下部の泥炭層が特徴的であるため、発掘調査でも容易に識別できる。平安時代の変形ゾーンは、いずれも直上に13世紀初頭の瓦器碗を産出する層準があり、鎌倉時代に属する可能性がある。

以上のように、詳細な時期差についての検討は残すものの、若江北遺跡で観察された変形ゾーン1～3は、河内平野沖積低地のほぼ同一層準で広い領域で見られると判断され、前節で述べたような変形プロセスも考慮すると、これらの変形が地震動によるものであったことはほぼ確実である。

4. まとめ

本稿では若江北遺跡の発掘調査において検出された縄文時代後期後半から弥生時代中期前半までの、おもに泥質堆積物中にみられる変形構造について検討した。その結果、変形構造には2種類のフレーム構造、ロード構造、フィッシャーなどがあり、これらの構造が同時に生じたと考えられる4つの変形ゾーンを認定した。そのうちの1つは微小な断層をともなっていた。それぞれの変形ゾーンの構造を形成したイベントは、変形ゾーン上限に対応する考古学的層序の相対年代にもとづき、低位より縄文時代後期、縄文時代晩期、弥生時代前期、弥生時代中期前半に起きたと推定した。変形構造から推測される形成プロセスと、河内平野沖積低地中央部における変形ゾーンの分布から、これらが過去の地震動によるものと考えられる。

謝辞

現地での堆積物の観察と試料採取を快諾いただき、拙稿に発表の機会を与えて下さった財団法人大阪文化財センターの三好孝一・市本芳三・亀井聡の各氏に心より御礼申し上げます。

(松田順一郎 (財)東大阪市文化財協会)

注

- 1) 完新統沖積上部砂層と頂部陸成層の概念は、井関(1983)による。
- 2) 例えばタービダイト層のように、地震によって他所から運搬されてきたものではないという意味である。
- 3) ただし、上本(1989)は武蔵野ローム層中のテフラの液状化による変形構造を論じている。

文献

- 井関弘太郎 (1983) 沖積平野。東京大学出版会、p.49-52。
- 上本進二 (1989) 南関東のテフラ層における波状帯の形成
—地震によるテフラの液状化と波状帯の形成および遺物の移動—。考古学と自然科学, 21, 73-84。
- 寒川旭 (1993) 遺跡の地震痕を用いた古地震研究。第四紀研究, 32 (5), 249-256。
- 寒川旭 (1992) 地震考古学—遺跡が語る地震の歴史—。中央公論社。
- 志岐常正 (1993) イベント堆積物の研究—その経由と課題—。月刊地球、号外No.8、「イベントとリズム、それらの記録—志岐常正教授退官記念号」、海洋出版、p.227-244。
- 松田順一郎・池崎智詞・別所秀高 (1994) 東大阪市北島遺跡でみられた泥質堆積物の地震による変形構造。日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集、p.63-64。
- Brodzikowski, K. and Haluszczak, A. (1987) Flame structures and associated deformations in Quaternary glaciolacustrine and glaciodeltaic deposits: examples from central Poland. In Jones, M.E. and Preston, R.M.F. (eds.) *Deformation of Sediments and Sedimentary Rocks*, Geological Society Special Publication No.29, p.279-286.
- Kuenen, P. (1958) Experiments in Geology. *Geological Magazine*, 23, 1-28.
- Lowe, D. and LoPiccolo, R. (1974) The characteristics and origins of dish and pillar structures. *Journal of Sedimentary Petrology*, 44, 484-501.
- Davenport, C.A. and Ringrose, P.S. (1987) Deformation of Scottish Quaternary sediment sequences by strong earthquake motions. In Jones, M.E. and Preston, R.M.F. (eds.) *Deformation of Sediments and Sedimentary Rocks*, Geological Society Special Publication No. 29, p.299-314.
- Seilacher, A. (1969) Fault-graded beds interpreted as seismites. *Sedimentology*, 13, 155-159.
- Seilacher, A. (1984a) Storm beds: their significance in event stratigraphy. American Association of Petroleum Geologists, *Studies in Geology*, No.16, p.49-54.
- Seilacher, A. (1984b) Sedimentary Structures tentatively attributed to seismic events. *Marine Geology*, 55, 1-12.
- Seilacher, A. (1991) Events and their Signatures — an overview. In: Einsele, G., Ricken, W., and Seilacher, A. (eds.) *Cycles and Events in Stratigraphy*. Springer, Berlin Heidelberg, p. 222-226.
- Sims, J.D. (1973) Earthquake-induced Structures in Sediments of Van Norman Lake, San Fernando, California. *Science*, 182, 161-163.
- Sims, J. D. (1975) Determining earthquake recurrence intervals from deformational structures in young lacustrine sediments. *Tectonophysics*, 29, 141-152.

第Ⅵ章 ま と め

旧大和川によって形成された河内潟のほぼ中央部に位置する巨摩・若江北遺跡は、その氾濫による堆積のため、近世以前の遺構が被覆された状態ではほぼ良好に残っていた。今回の調査区は過去に近畿自動車道の建設に伴う調査が行われた地点に隣接しており、これらの調査成果についての詳細は本文を参考にしていきたい。ここでは、両遺跡を通しての時期的な様相を考察し、まとめにかえることにする。

1. 縄紋時代後期～弥生時代中期前半

今回の調査区の南端に位置する10Cトレンチから縄紋時代後期前葉の深鉢が出土している。この時期に相当する遺構はほとんど確認されておらず、この遺物も遺構面直上より検出されたものである。既往の調査では当該期の遺物は未確認であり、これまでは縄紋時代でも晩期を遡る調査成果をみることはなかった。このようなことから、今回の調査成果は今後の縄紋時代後期以前の河内潟の様相を考える上で、新たな指標となると思われる。また、自然科学的調査によって、当時の周辺は沼沢湿地あるいは浅い水域であったとされており、このような環境を生業とする集団が存在したと考えられる。

縄紋時代晩期の状況は、自然科学的には周辺の湿潤な様相は変わらなかったようである。考古学的には、調査区全体から少量ではあるが、遺物の出土がみられるようになる。今回の調査では明確な遺構の存在は確認されておらず、ほぼ普遍的に人為的な交流があったものの、前段階と同様に非定住的なものであったと考えられる。ただ、弥生時代前期にかけての堆積層の一部より、イネ科植物の花粉が検出されており、少なくともこの周辺が淡水化されていたことは明らかである。また、考古学的には確認されていないが、稲作の初源的な活動が行われていた可能性があるという点では、今後の調査を含めて注目される点である。

このように遺構としてやや希薄な状況は、弥生時代中期前半の段階まで続いたようである。とくに弥生時代前期の段階は、比較的安定していた縄紋時代晩期までの状況と異なり、度重なる河川の氾濫によって遺構面の確認が困難なほどである。考古学的には、当該期の遺物の出土量は後の時期に比べて圧倒的に少なく、また人為的な遺構もほとんど確認されていない。周辺の植生も、前段階にみられたようなイネ科植物は確認されておらず、ヨモギ属やシダ類といった草本類のみであり、少なくとも当地周辺における稲作は行われていなかったと考えられる。

既往の調査では、弥生時代前期から中期後半までの各水田面が検出されている。しかし、今回の調査では明確な水田遺構は確認されておらず、弥生時代前期から中期にかけて自然の流路が交錯する状況を確認したのみである。ただし、これらの自然河川の状況はいくつかの時期に分けることが可能であり、その間隙を縫うように水田耕作を行っていた可能性も考えられる。

また、一方では縄紋時代から弥生時代中期前半にかけての地震活動が明らかにされており、当時の様相を考える上で、新たな側面が見出されたと言えよう。しかし、残念ながら調査区周辺は遺構・遺物の希薄な時期であり、地震活動と人為的な活動の関連については不明な点が残った。

2. 弥生時代中期後半

弥生時代前期から中期前半における河川の氾濫がおさまり、定住的な様相が明らかにみられるのは弥生時代中期後半からである。当該期の遺構面が形成された基盤は、その直前段階に氾濫した河川の流水性堆積砂層であり、これ以降は古墳時代前期までほぼ安定した状況が続いている。しかし、弥生時代中期後半の様相としては、後述する弥生時代中期末から後期にかけての遺構群や自然の流路によって攪乱されているため、現在のところ明確な集落域を想定するまでには至っていない。わずかに調査区の北側に位置する巨摩遺跡において、溝や土坑などの人為的な遺構が形成されており、これより北側に拡大する集落の存在した可能性が高いと思われる。今後の調査成果に期待される場所である。

3. 弥生時代中期末～後期

後続する弥生時代中期末から後期初頭にかけて遺構が集中してみられるのは調査区のほぼ中央付近の若江北遺跡であり、過去の調査成果からもこの周辺に集落域が形成されていたと考えられる。今回の調査では、この集落域が巨摩遺跡の南端部に達していることが明らかとなった。集落の北端部には溝が数条みられ、集落域を囲む環濠状の遺構と推測される。この北側は既往の調査における沼状遺構が広がっており、これを隔てた形で方形周溝墓が築造されている。

このように、集落域と墓域は意識的に分けられており、当地では湿地帯という自然地形を利用して考えられる。方形周溝墓の築造された巨摩遺跡は、北側に隣接する瓜生堂遺跡とともに墓域と考えられ、これらの方周溝墓群は現在確認されているだけでも70基以上を数えている。今回の調査で確認された11号方形周溝墓は、その中でも北の瓜生堂2号墓に次ぐ大型の方周溝墓である。また、10号方形周溝墓からは柱状片刃石斧を埋納する小型木棺が検出されており、畿内にはほとんど例をみないものである。

また、自然科学的な調査によって当時期に稲作の行われていた可能性が指摘されている。しかし、その痕跡が弱いことなどから推測すると、調査区周辺には一大集落域が形成され、やや離れた、あるいはその集落域の周辺において稲作を行っていたと思われる。

後期では湿地帯は衰退して陸地化し、前段階にみられたような北と南の境界が不明瞭になったようである。若江北遺跡を中心に形成された集落域は、弥生時代後期前半に調査区の中央部を東西に流れる河川の氾濫によって、その溢流堆積砂層下に埋没したと考えられる。その砂層上面に当該期のわずかな遺構が確認されており、その状況からはこの周辺を集落域として積極的に再利用したとは考えにくい。

弥生時代後期後半に氾濫した河川からは自然木に混じって多数の加工木が出土しており、既往の調査における沼状遺構上層がこれに対応すると思われる。木製品は農耕具・機織具・漁猟具など多岐にわたっており、河川の氾濫によって流された集落のものと考えられる。このことから、その集落がある程度の規模をもち、定住的なものであったことを推測させる。この集落が前述の集落から連続するものであるならば、明らかに移動したものであろう。

これに対し、墓域としての巨摩遺跡は、弥生時代中期末の方形周溝墓が埋没したにも関わらず、陸地化した沼状遺構の南側に新たに後期の方形周溝墓を築造している。また、当時すでに埋没していた弥生時代中期末の方形周溝墓に、後期の土器を供献していることも明らかとなっている。このような状況から、当時の人々にとっては集落域としての若江北遺跡よりも墓域としての巨摩遺跡に対する認識がより強いものであったと推測される。つまり、生活空間としての集落域は自然に対して柔軟な対応を行い、墓域はその土地や空間そのものを重視したといえよう。

今回、既往の調査において3号方形周溝墓の西側を調査することができた。マウンドのほぼ中央部に南北に並ぶ4基の埋葬施設を確認し、それぞれ上部に自然石が人為的に置かれていたことが判明した。各木棺から検出された人骨の分析により、被葬者は男女の2組であり、男性は西頭位、女性は東頭位に埋葬されていることが明らかとなった。このように埋葬形態が明らかになった例は少なく、当時の葬制を考える上で貴重な成果といえる。また、これらの木棺の年輪年代による分析を行い、暦年代を確定する手がかりも得られた。このように、自然科学的方法との連携によって得られる成果は大きく、今後の考古学的調査の一つの方向を示す材料となることを期待する。

弥生時代後期後半の河川の氾濫以後、調査区周辺の状況は大きく変化したと思われる。弥生時代後期の方形周溝墓を埋没した河川と堆積層からは大量の流木が出土しており、その中には直径50cmほどの大木もみられ、当時の洪水の規模を物語っている。周辺では緩慢な水成堆積がみられ、河川の氾濫以後しばらく手のつけられない状況であったと推測される。

4. 古墳時代前期

古墳時代前期にかけての庄内式新相の段階より、調査区一帯は水田地帯として利用され始めたことが明らかである。水田は巨摩遺跡から若江北遺跡の北側まで、かなりの広範囲にわたっており、大規模な開発が行われたと思われる。またその際に、弥生時代後期の方形周溝墓が整地されており、これは前段階の墓域に対する考え方とは大きく異なっている。

水田は庄内式期と布留式期の2つの面を確認している。これらの水田面の上部には薄い砂層の堆積が認められ、小規模な洪水が起こっていたことが推測される。布留式期の水田が埋没した直後の遺構面では、多数の足跡と彩色された布留2式の壺が出土している。これらはその後の河川の洪水砂によって一気に埋没しており、このような状況から、河川の氾濫を鎮静するための祭祀を行ったものと考えられる。しかし、その直後の洪水によって巨摩遺跡から若江北遺跡にかけて

の調査区のほぼ全域が埋没したと思われる。

この時期に相当する集落域は調査区内では確認されていないが、おそらく集落においてもなんらかの変化が生じたと推測される。水田を埋没した河川及びその堆積層中より大量の土器が出土しており、その中にはいわゆる外来系の土器が含まれている。主に山陽・山陰地方のものがあり、集落を構成する人員にその地方からの移入者が含まれていた可能性が高いと思われる。

5. 古墳時代中期から古代・中世・近世

前述の古墳時代前期の洪水砂は平均1mの堆積を測り、周辺を一変させたが、その後は安定した状況となる。しかしながら、古墳時代中期から古代にかけては、遺物は調査区全域から出土しているが、明瞭な遺構は検出されていない。平安時代にはいり、10～11世紀の遺構は10Cトレンチの第1b面と第1c面において検出された。南北方向にのびる溝であり、条里の方向に合うものではあるが、現況の地割り境界部分とは合致しない。

中世の14～16世紀の遺構として3Iトレンチの方形施設1が検出されている。調査地の西側約500mの若江小学校を中心とした地点にある若江城跡と関連した遺構と考えられ、その周辺からは堀・土塁・建物跡が検出されている。既往の調査においても、直角に曲がる溝が検出されたり、当期の遺物が多量に出土している。若江城を中心とした営みが明らかとなった。

若江城は天正元年（1573）に織田信長により落城されており、その後、石山本願寺攻撃のために若江城を拠点としている。文献より、天正6年（1578）には実在し、天正9年（1581）には消滅していることがわかる。このように埋没した時期を示す遺物として唐津皿をあげることができる。

表7 遺構一覧(1)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
3I	G2c7	1面	方形施設1	付1,挿9	2	
3I	G2a7	1面	溝1	付1		
3I	F2i7j7	1面	溝2	付1		
3I	F2i7	1面	溝3	付1		
3I	F2i7	1面	溝4	付1		
3I	F2h7	1面	溝5	付1		
3I	F2i7	1面	溝6	付1		
3I	F2i7	1面	溝7	付1		
3I	G2c7	1面	溝9	付1,挿12		
3I	G2g7	1面	溝10	付1,挿11・12		
3I	G2g7,h6,h7	1面	溝11	付1,挿11・12	2・3	既調査溝61
3I	G2h6,h7	1面	溝12	付1,挿11・12	2・3	既調査溝83
3I	G2a7	1面	溝13	付1		
3I	G2a7	1面	溝14	付1		
3I	G2h7	1面	溝15	付1,挿11	3	
3I	G2h7	1面	溝16	付1,挿11	3	
3I	G2i6,j7	1面	溝17	付1,挿11	3	
3I	F2h7	1面	溝22	付1		
3I	F2h7	1面	溝23	付1		
3I	F2j7	1面	溝24	付1		
3I	G2c6,c7	1面	溝25	付1		
3I	G2f7	1面	溝26	付1		
3I	F2j7	1面	土坑1	付1		
3I	F2j7	1面	土坑2	付1		
3I	F2h7	1面	土坑3	付1		
3I	F2h7	1面	土坑4	付1		
3I	G2a7	1面	土坑5	付1		
3I	F2i7	1面	土坑6	付1		
3I	G2h6	1面	土坑7	付1,挿11・12		
3I	G2h7	1面	土坑8	付1,挿11	3	
3I	F2h7	1面	土坑9	付1		
3I	G2b7	1面	土坑10	付1		
3I	G2h7	1面	土坑11	付1,挿11	3	
3I	G2h7	1面	土坑12	付1,挿11	3	
3I	G2h6,j6	1面	土坑17	付1,挿11	3	
3I	G2g6,g7	1面	井戸1	付1,挿11・12		
3I	G2f6,f7	1面	井戸2	付1,挿12		
3I	F2h7	1面	井戸4	付1		
3I	F2j7	1面	ピット1	付1		
3I	G2a7	1面	ピット2	付1		
3I	G2a7	1面	ピット3	付1		
3I	G2a7	1面	ピット4	付1		
3I	G2b7	1面	ピット5	付1		
3I	G2h6	1面	ピット35	付1,挿11		
8A	H2j7j8	1面	溝1	付4,挿18	4	
8A	H2i7,j7	1面	溝2	付4,挿18	4	
8A	H2i6	1面	溝3	付4,挿18	4	
8A	H2j6	1面	土坑1	付4,挿18	4	
9A	H2b7,c7	1面	土坑2	付4,挿19		
9A	H2c6	1面	土坑3	付4,挿19		
11A	I2i7	1面	溝4	付4,挿19	4	
11A	I2i7	1面	溝5	付4,挿19	4	
11A	I2i7	1面	溝6	付4,挿19	4	
11A	I2i7	1面	溝7	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝8	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝9	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝10	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝11	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝12	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝13	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝14	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝15	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝16	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	溝17	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑4	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑5	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑6	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑7	付4,挿19	4	
11A	I2i7	1面	土坑8	付4,挿19	4	
11A	I2i7	1面	土坑9	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑10	付4,挿19	4	
11A	I2i6	1面	土坑11	付4,挿19	4	
12A	J2a6,a7,b6,b7	1面	溝18	付4,挿20		既調査SD801旧楠根川
13A	J2d7	1面	土坑12	付4,挿20		

表8 遺構一覧(2)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
13A	J2d7	1面	ピット1	付4,挿20		
13A	J2d7	1面	ピット2	付4,挿20		
10C	K2h9j9j9	1面	溝1	挿14	5	
10C	K2h9j9j9	1面	溝2	挿14	5	
10C	K2j9:L2a9	1面	溝3	挿14・23	5	
10C	K2f9	1面	溝4	挿14		
10C	K2h9j9j9	1面	溝5	挿14・24		1b面
10C	K2i10j10:L2a10	1面	溝6	挿14・24	6	1b面
10C	K2g9,h9j9j9:L2a9,b9	1面	溝7	挿14・24・25	6	1c面
10C	L2b10	1面	土坑1	挿14・23		
10C	L2b10	1面	土坑2	挿14・23	5	
10C	L2b10	1面	土坑3	挿14・23	5	
10C	L2b10	1面	土坑4	挿14・23	5	
10C	L2a10	1面	土坑5	挿14・23	5	
10C	L2a9,a10,b9,b10	1面	土坑6	挿14・23	5	
10C	L2a10	1面	土坑7	挿14・23	5	
10C	L2a10	1面	土坑8	挿14・23	5	
10C	K2j10:L2a10	1面	土坑9	挿14・23	5	
10C	K2j10	1面	土坑10	挿14・23		
10C	K2j10	1面	土坑11	挿14・23		
10C	K2j10	1面	土坑12	挿14		
10C	K2h9j9	1面	土坑13	挿14		
10C	K2h9j9	1面	土坑14	挿14		
10C	K2f8	1面	土坑15	挿14		
10C	K2f9	1面	土坑16	挿14		
10C	K2f8	1面	土坑17	挿14		
10C	K2h9	1面	土坑18	挿14		
10C	K2i9	1面	土坑19	挿14		
10C	K2i9	1面	土坑20	挿14		
10C	L2a10	1面	土坑21	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑22	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑23	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑24	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑25	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑26	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑27	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑28	挿14・23		
10C	L2b9	1面	土坑29	挿14・23		
10C	K2g8	1面	井戸1	挿14	5	
10C	K2g8	1面	井戸2	挿14		
10C	L2a10	1面	井戸3	挿14・23		
10C	K2h9	1面	ピット1	挿14		
10C	K2i9	1面	ピット2	挿14		
10C	K2i9	1面	ピット3	挿14		
10C	K2j10	1面	ピット4	挿14		
3I	F2h7j7j7	2面	河川1	付1	7・8	
3I	G2f7,f6	2面	溝27	付1,挿36		
3I	F2i6	2面	土坑13	付1		
3I	G2f7	2面	土坑20	付1,挿36		
3I	G2e6,e7,f6,f7	2面	方形盛土	付1,挿36		2c面
3I	G2e6	3面	3号墓	付2,挿51・52	13・14・25	
3I	G2e6	3面	第2主体部	付2,挿51・53	14・15・16・25	
3I	G2e6,f6	3面	第3主体部	付2,挿51・54	14・17・18・25	
3I	G2e6,e7	3面	第4主体部	付2,挿51・55	14・19・20・25	
3I	G2e6,e7	3面	第5主体部	付2,挿51・56	14・21・22・25	
3I	G2e7	3面	第6主体部	付2,挿51・57	14・23・25	
3I	G2f7	3面	第7主体部	付2,挿51・57	14・24・25	
3I	G2e7	3面	第8主体部	付2,挿51・58	14・24・25	
3I	G2b7,c7	3面	河川2	付2,挿41	27	3a面
3I	G2d7	3面	河川3	付2,挿45	27	3b面
3I	G2a7	3面	溝18	付2,挿41		3a面
3I	G2a7	3面	溝19	付2,挿41		3a面
8A	H2i6,j7	3面	溝20	付5,挿66	30	
8A	H2i7	3面	ピット68	付5,挿66	30	
8A	H2i7,j6,j7	3面	河川2	挿65	57	3b面
11A	I2i7	3面	溝21	付5,挿66	30	
11A	I2i7	3面	土坑13	付5,挿66	30	
11A	I2i6,j7	3面	土坑14	付5,挿66	30	
11A	I2i6	3面	土坑15	付5,挿66	30	
11A	I2i6	3面	土坑16	付5,挿66	30	
12A	J2b7	3面	溝22	付5,挿67	31	
12A	J2b6,b7	3面	溝23	付5,挿67	31	
12A	J2b7	3面	ピット3	付5		
12A	J2b7	3面	ピット4	付5		

表9 遺構一覧(3)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
12,13,14A	J2a~g7,b~e6	3面	河川1	挿65・67	31・32	3b面
13A	J2d7	3面	溝24	付5,挿69	33	
13A	J2d7	3面	溝25	付5,挿69	33	
13A	J2d7	3面	溝26	付5,挿69	33	
13A	J2d7	3面	土坑17	付5,挿69		
13A	J2d6	3面	土坑18	付5,挿69		
13A	J2d7	3面	土坑47	付5,挿69		
14A	J2g7	3面	土坑19	付5,挿71	33	
14A	J2f7,g7	3面	土坑20	付5,挿71	33	
14A	J2f7,g7	3面	落ち込み1	付5,挿71	33	
9C	K2b8,c8	3面	河川1	付9,挿75	35	3b面,既調査SD628自然流路
10C	K2e8,f8,f9	3面	溝8	付9,挿76	34	3a面
10C	K2g9,h8,h9	3面	溝9	付9,挿76	34	3a面
10C	K2g9,h8,h9	3面	溝10	付9,挿76		3b面,既調査SD629溝
10C	K2i9	3面	溝11	付9,挿76	35	3b面,既調査SD630溝
10C	K2i8	3面	溝36	付9,挿76		3b面,既調査SD628溝
10C	K2e9	3面	土坑30	付9,挿76		3a面
10C	K2i9	3面	土坑31	付9,挿76		3a面
10C	K2i9	3面	土坑32	付9,挿76		3a面
10C	K2i9	3面	土坑33	付9,挿76		3a面
10C	k2i9	3面	土坑34	付9,挿76		3a面
10C	K2i9	3面	土坑35	付9,挿76		3a面
3i	F2i7,j7	4面	9号墓	付3		
3i	F2i7,j7	4面	10号墓	付3,挿78・79	36・44・45	
3i	F2i7	4面	第1主体部	付3,挿79・80	36・37	
3i	F2j7	4面	第2主体部	付3,挿79・80	36・37	
3i	F2j7	4面	第3主体部	付3,挿79・81	36・38	
3i	F2j7	4面	第4主体部	付3,挿79・81	36・38・39	
3i	F2j7	4面	第5主体部	付3,挿79・82	36・38・40・41	
3i	F2j7,G2a7	4面	11号墓	付3,挿78・86	43・44・45	
3i	F2j7	4面	第1主体部	付3,挿86・87	45・46	
3i	G2a7	4面	第2主体部	付3,挿86・88	45・46	
3i	G2a7	4面	第3主体部	付3,挿86・88	45・46	
3i	G2a7	4面	第4主体部	付3,挿86・89	45・47	
3i	G2a7	4面	第5主体部	付3,挿86・89	45・48	
3i	G2a7	4面	第6主体部	付3,挿86・89	45・48	
3i	G2a7	4面	第7主体部	付3,挿86・90	45・49	
3i	G2a7	4面	第8主体部	付3,挿86・90	45・49	
3i	G2a7	4面	第9主体部	付3,挿86・87	45・50	
3i	G2a7	4面	第10主体部	付3,挿86・90	45	
3i	G2a7	4面	第11主体部	付3,挿86	45	
3i	G2b7,c7,d7	4面	沼状遺構	付3	55	
3i	G2h6,h7	4面	溝20	付3,挿105	56	
3i	G2h7	4面	溝21	付3,挿105	57	
3i	F2h7	4面	溝28	付3	56	
3i	F2h7	4面	溝29	付3	56	
3i	F2i7	4面	溝30	付3	56	
3i	F2h7	4面	溝31	付3	56	
3i	G2e6,e7	4面	溝32	付3		
3i	G2e6,e7	4面	溝33	付3		既調査溝63
3i	G2e6	4面	溝34	付3		既調査溝63
3i	G2e7,f7	4面	溝35	付3		
3i	G2e6,e7	4面	溝36	付3		
3i	G2g6,g7	4面	溝37	付3,挿105	56	
3i	G2g7	4面	溝38	付3,挿105	56	
3i	G2g7	4面	溝39	付3,挿105	56	
3i	G2g7	4面	溝40	付3,挿105	56	
3i	G2g6,g7	4面	溝41	付3,挿105	57	
3i	G2g6,g7	4面	溝42	付3,挿105	56	
3i	G2g7,h7	4面	溝43	付3,挿105	56	
3i	G2g7,h7	4面	溝44	付3,挿105	56	
3i	G2g7,h7	4面	溝45	付3,挿105	56	
3i	G2g6,g7	4面	溝46	付3,挿105	56	
3i	G2h6,h7	4面	溝47	付3,挿105	56	
3i	G2g6,h6	4面	溝48	付3,挿105	56	
3i	G2h7	4面	溝49	付3,挿105	56	
3i	G2e7	4面	ビット6	付3		
3i	G2e7	4面	ビット7	付3		
3i	G2f7	4面	ビット8	付3,挿105	56	
3i	G2g7	4面	ビット9	付3,挿105	57	建物1
3i	G2g7	4面	ビット10	付3,挿105	57	建物1
3i	G2g7	4面	ビット11	付3,挿105	57	建物1
3i	G2g7	4面	ビット12	付3,挿105	57	
3i	G2g7	4面	ビット13	付3,挿105	57	

表10 遺構一覧(4)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
3I	G2g7	4面	ピット14	付3,挿105	57	建物2
3I	G2g6	4面	ピット15	付3,挿105	56	建物2
3I	G2g6	4面	ピット16	付3,挿105	56	建物2
3I	G2g7	4面	ピット17	付3,挿105	56	建物2
3I	G2h6	4面	ピット18	付3,挿105	56	
3I	G2g7	4面	ピット19	付3,挿105	56	
3I	G2h6	4面	ピット20	付3,挿105	56	
3I	G2h7	4面	ピット21	付3,挿105	56	
3I	G2h7	4面	ピット22	付3,挿105	57	
3I	G2h7	4面	ピット23	付3,挿105	56	
3I	G2h7	4面	ピット24	付3,挿105	57	建物3
3I	G2h7	4面	ピット25	付3,挿105	57	
3I	G2h6	4面	ピット26	付3,挿105	57	
3I	G2h6	4面	ピット27	付3,挿105	57	
3I	G2h7	4面	ピット28	付3,挿105	56	建物3
3I	G2g7	4面	ピット29	付3,挿105	56	建物3
3I	G2g7	4面	ピット30	付3,挿105	56	
3I	G2g7	4面	ピット31	付3,挿105	56	
3I	G2g7	4面	ピット32	付3,挿105	56	建物3
3I	G2h7	4面	ピット33	付3,挿105	57	
3I	G2h7	4面	ピット34	付3,挿105	57	
3I	G2h7	4面	ピット36	付3,挿105	57	
3I	G2e6	4面	土坑14	付3		
3I	G2f7	4面	土坑15	付3,挿105	57	
3I	G2h6	4面	土坑16	付3,挿105	56	
3I	G2g7	4面	井戸3	付3,挿105	56・57	
8A	H2i6,j6	4面	溝27	付6,挿111	63	
8A	H2i7	4面	溝28	付6,挿111	63	
8A	H2i7	4面	溝29	付6,挿111	63	
8A	H2j7	4面	溝30	付6,挿111	63	
8A	H2i7	4面	土坑21	付6,挿111	63	
8A	H2j7	4面	土坑22	付6,挿111	63	
8A	H2i7	4面	ピット5	付6,挿111	63	
8A	H2i7	4面	ピット6	付6,挿111	63	
9A	I2b6,b7	4面	溝31	付6,挿113	58	
9A	I2b6	4面	溝32	付6,挿113	58	
9A	I2b7	4面	溝33	付6,挿113	58	
9A	I2b6,b7	4面	溝34	付6,挿113	58	
9A	I2b6,b7	4面	溝35	付6,挿113	58	
9A	I2b7,c7	4面	溝36	付6,挿113	58	
9A	I2c7	4面	溝37	付6,挿113	58	
9A	I2b7	4面	土坑23	付6,挿113	58	
9A	I2b6	4面	土坑24	付6,挿113	58	
9A	I2c7	4面	土坑25	付6,挿113	58	
9A	I2b7	4面	ピット7	付6,挿113	58	
9A	I2b7	4面	ピット8	付6,挿113	58	
9A	I2b6	4面	ピット9	付6,挿113	58	
9A	I2b6	4面	ピット10	付6,挿113	58	
9A	I2c6	4面	ピット11	付6,挿113	58	
9A	I2c7	4面	ピット12	付6,挿113	58	
10A	I2f6,f7	4面	溝38	付6,挿115	59	
10A	I2f7	4面	溝39	付6,挿115	59	
10A	I2f7	4面	土坑46	付6,挿115	59	
10A	I2f6	4面	ピット13	付6,挿115	59	
11A	I2i6,i7	4面	溝40	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝41	付7,挿117	60	
11A	I2i6	4面	溝42	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝43	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝44	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝45	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝46	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝47	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝48	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝49	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	溝50	付7,挿117	60	
11A	I2i6,i7	4面	溝51	付7,挿117	60	
11A	I2i6	4面	溝52	付7,挿117	60	
11A	I2i6,i7	4面	溝53	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	土坑26	付7,挿117	60	
11A	I2i7	4面	土坑27	付7,挿117	60	
11A	I2i6	4面	土坑28	付7,挿117	60	
11A	I2i6,i7	4面	土坑29	付7,挿117	60	
11A	I2i6	4面	土坑30	付7,挿117・118	60	
11A	I2i6	4面	土坑31	付7,挿117・118	60	

表11 遺構一覧(5)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
11A	J2i6	4面	土坑32	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑33	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑34	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑35	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑36	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑37	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑38	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	土坑39	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	土坑40	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	土坑41	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	土坑42	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	土坑43	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	土坑44	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット14	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット15	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット16	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット17	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット18	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット19	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット20	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット21	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット22	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット23	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット24	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット25	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット26	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット27	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット28	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット29	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット30	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット31	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット32	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット33	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット34	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット35	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット36	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット37	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット38	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット39	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット40	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット41	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット42	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット43	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット44	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット45	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット46	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット47	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット48	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット49	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット50	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット51	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット52	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット53	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット54	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット55	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット56	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット57	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット58	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット59	付7,挿117	60	
11A	J2i7	4面	ピット60	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット61	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット62	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット63	付7,挿117	60	
11A	J2i6	4面	ピット64	付7,挿117	60	
12A	J2a6	4面	溝54	付7,挿123	61	
13A	J2d6	4面	溝55	付7	61	
14A	J2f7 g7	4面	溝56	付7,挿125	62	
14A	J2g7	4面	溝57	付7,挿125	62	
14A	J2g7	4面	ピット65	付7,挿125	62	
14A	J2g7	4面	ピット66	付7,挿125	62	
14A	J2g7	4面	ピット67	付7,挿125	62	
8C	J2j7	4面	溝12	付9,挿129	63	
8C	J2j7	4面	溝13	付9,挿129	63	
8C	J2j7	4面	溝14	付9,挿129	63	

表12 遺構一覧(6)

トレンチ	地区	遺構面	遺構名	図番号	写真番号	備考
8C	J2j7	4面	溝15	付9,挿129	63	
8C	J2j7	4面	溝16	付9,挿129	63	
8C	J2j7	4面	溝17	付9,挿129	63	
8C	J2j7,j8	4面	溝18	付9,挿129	63	
8C	J2j7	4面	溝19	付9,挿129	63	
8C	J2j8	4面	ビット5	付9,挿129	63	
8C	J2j8	4面	ビット6	付9,挿129	63	
9C	K2b8	4面	溝20	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	溝21	付9,挿129	64	
9C	K2b7,b8	4面	溝22	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	溝23	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	溝24	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	溝25	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	溝26	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	溝27	付9,挿129	64	
9C	K2b7,c7,c8	4面	溝28	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	溝29	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	土坑36	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	土坑37	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	土坑38	付9,挿129	64	
9C	K2b8,c8	4面	土坑39	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	土坑40	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	土坑41	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	土坑42	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	ビット7	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	ビット8	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	ビット9	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	ビット10	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	ビット11	付9,挿129	64	
9C	K2c8	4面	ビット12	付9,挿129	64	
9C	K2b8	4面	ビット13	付9,挿129	64	
10C	K2f8	4面	溝30	付9	64	(既調査SD596溝)
10C	K2f9,g9	4面	溝31	付9	64	(既調査SD596溝)
10C	K2f8,a9	4面	溝32	付9	64	
10C	K2j9,j10	4面	溝33	付9	64	
10C	K2j9	4面	土坑43	付9	64	
10C	K2j9,j10	4面	土坑44	付9	64	
10C	K2h9	4面	ビット14	付9	64	
10C	L2a10	4面	ビット15	付9	64	
3I	G2a7	5面	溝50	挿131		
3I	F2i7,j7	5面	溝51	挿131		
3I	F2j7	5面	土坑18	挿131		
3I	F2i7	5面	土坑19	挿131		
3I	F2i7	5面	ビット37	挿131		
3I	F2i7	5面	ビット38	挿131		
3I	F2i7	5面	ビット39	挿131		
12A	J2a6	5面	土坑45	挿132	65	
10C	K2f8,f9,g8,g9	7面	河川3	挿135	68	
10C	K2i9,j9,L2a9,a10,b9,b10	7面	河川4	挿135・136	68	
10C	K2h9	7面	溝34	挿135		
10C	K2j10	7面	土坑45	挿135・136		
10C	K2j10	7面	土坑46	挿135・136		
10C	L2a9,a10	7面	土坑47	挿135・136		
10C	L2a10	7面	土坑48	挿135・136		
12A	J2b6,b7	8面	河川3			
13A	J2d6,d7,e6,e7	8面	河川3			
13A	J2d7	8面	溝58	付8		
8C	J2j7,j8	8面	河川5	付10		
10C	K2i9,j9,j10:L2a9,a10,b9,b10	8面	河川6	付10,挿125	69	既調査SD232流路
10C	K2h8	8面	ビット16	付10		
10C	K2h9	8面	ビット17	付10		
10C	K2h9	8面	ビット18	付10		
9A	I2b6,b7,c6,c7	9面	溝59	付8	70	
9A	I2b7	9面	溝60	付8	70	
10A	I2f6	9面	溝61	付8		
8C	J2j7,j8	9面	河川7	付10		
10C	K2f8,f9,g8,g9,h8,h9	9面	河川8	付10	70	9b面,既調査SD110自然河川
10C	L2a10,b10	9面	溝35	付10,挿132		9b面
8A	H2i7	10面	溝62	挿134	71	10b面
8A	H2j6,j7	10面	落ち込み2	挿134	71	10b面
8A	H2j6	10面	落ち込み3	挿134	71	10b面

表13 掲載遺物一覧(1)

図No.	遺物No	写真No	器種名	トフ	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
10	1		土師器壺	3I	G2c7	1面	方形施設1	古墳前期	口縁内側端部つまみ出す、色調灰黄褐色	5
10	2		須恵器壺	3I	G2c7	1面	方形施設1	8 C	体部外面ヘラケズリ	5
10	3		須恵器壺	3I	G2c7	1面	方形施設1	8 C	口縁端部に面、体部外面叩き	5
10	4		盾形埴輪	3I	G2c7	1面	方形施設1	古墳中～後期	縁部、表裏タテハケ・縦書文	—
10	5		唐津皿	3I	G2c7	1面	方形施設1	16C末	胎土目、巻筋底、残存部外面露胎、2次火熱	30
10	6	75	唐津皿	3I	G2c7	1面	方形施設1	16C末	胎土目、鉄絵、削り出し高台	40
10	7	75	唐津皿	3I	G2c7	1面	方形施設1	16C末	胎土目、鉄絵、削り出し高台	60
10	8	75	唐津皿	3I	G2c7	1面	方形施設1	16C末	胎土目、三日月チリメン高台	40
13	9	75	東播磨鉢	3I	F2h7	1面	溝5	13C	2次火熱	10
13	10		土師器壺	3I	G2e7	1面	溝9	古墳中～後期	口縁端部を上方へややつまみ出す	20
13	11		土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	底部外面指オサエ、外面底部と体部は屈曲	50
13	12		土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	底部外面指オサエ、内面に2次火熱痕	30
13	13		土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁部外面つよいナデ	70
13	14	75	土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁端部を上方につまみ上げる	60
13	15	73	土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁部つよいナデ	—
13	16	73	土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁端部を上方につまみ上げる	—
13	17		土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁部外面つよいナデ	20
13	18	75	白磁碗	3I	G2g7	1面	溝10	平安後期	高台は厚く、削り出しはわずか	50
13	19	75	土師皿	3I	G2g7	1面	溝10	中世	口縁内面端部に沈線、底部外面指オサエ	30
13	20	73	滑石製白玉	3I	G2h6	1面	溝11	古墳中～後期	径7mm、厚さ4mm、孔径2mm、色調明緑灰色	—
13	21	75	緑釉皿	3I	G2g7	1面	溝11	10C後半	見込み部に重ね焼き痕、全面施釉	30
13	22		土師器高杯	3I	G2h7	1面	溝11	古墳後期	脚部、内面しぼり目残存	50
13	23	73	瓦器碗	3I	G2g7	1面	溝11	12C後半	口縁端部肥厚、外面ミガキは体部上半	—
13	24	75	円筒埴輪	3I	G2g7	1面	溝11	古墳後期	川西瀬年V期、内外タテハケ	90
13	25	75	蓋形埴輪	3I	G2g7	1面	溝11	古墳中～後期	立ち飾り部、表面タテハケ、線刻	—
13	26		黒色土器	3I	G2h7	1面	溝12	10～11C	A類、内面灰黄吸着	20
13	27		須恵器壺	3I	G2h7	1面	溝12	5C後半	肩部、内面折損圧痕	5
13	28	75	瓦器埴輪	3I	G2h7	1面	溝12	14後葉～15C初	口縁部を上下に強くつまみ出す	5
13	29		東播磨鉢	3I	G2h7	1面	溝12	11C後葉～12C前	口縁は四角形を呈し、内縁をややつまみ出す	10
13	30	75	盾形埴輪	3I	G2h7	1面	溝12	古墳中～後期	縁部上端、タテハケ、線刻	—
13	31		瓦器碗	3I	G2h7	1面	溝12	11C末～12C初	内面ミガキ緻密、深い碗形	10
14	32-1		家形埴輪	3I	G2g6	1面	井戸1	古墳中～後期	屋根部破片?	—
14	32-2		家形埴輪	3I	G2g6	1面	井戸1	古墳中～後期	屋根部破片?	—
14	33		須恵器杯蓋	3I	G2g6	1面	井戸1	5C後半	稜線が鋭い	5
14	34		須恵器壺	3I	G2g6	1面	井戸1	6 C	口縁端部を外に折り曲げ、面をつくる	5
14	35	75	須恵器壺	3I	G2g6	1面	井戸1	6 C	口縁端部断面は三角形をなす	5
14	36	75	須恵器壺	3I	G2g6	1面	井戸1	7 C中	宝珠つまみ、内面頂部不定方向ナデ	20
14	37	75	土師器鍋	3I	G2g6	1面	井戸1	古墳後期	外面ハケム、内面下部ケズリ	5
14	38		瓦器碗	3I	G2g6	1面	井戸1	15C前半	口縁外面つよいナデ	20
14	39		備前壺	3I	G2g6	1面	井戸1	14C	外面下部が屈曲部にあたる	5
14	40	74	輪羽口	3I	G2g6	1面	井戸1	—	外面灰色、内面橙色	5
14	41	74	輪羽口	3I	G2g6	1面	井戸1	—	外面緑灰色、内面橙色	5
14	42	73	丸瓦	3I	G2g6	1面	井戸1	13C	外面編目叩きナデケシ、内面吊り紐	—
14	43		土師器壺	3I	G2f7	1面	井戸2	古墳前期	小型丸底、軟質	50
14	44		土師器高杯	3I	G2f7	1面	井戸2	古墳前期	灰白色、1～2mm石类含む	5
14	45		土師器壺	3I	G2f7	1面	井戸2	古墳前期	体部内面ケズリ	5
14	46		土師器壺	3I	G2f7	1面	井戸2	弥生後期	外面タタキ、肩部に刷圧痕	10
15	47	78	土師器高杯	3I	G2h7	1面	1層	古墳後期	脚部、内面しぼり目残存	40
15	48	78	土師器高杯	3I	G2h7	1面	1層	古墳後期	脚部、内面しぼり目残存	40
15	49	78	土師器高杯	3I	G2f7	1面	1層	古墳後期	脚部変形	50
15	50	75	朝顔形埴輪	3I	F2h7	1面	1層	古墳後期	川西瀬年V期、内外面ヨコハケ	—
15	51	75	形象埴輪	3I	F2f7	1面	1層	古墳中～後期	線刻文、盾形あるいは馬形埴輪障泥の縁飾り	—
15	52	75	人物埴輪	3I	F2f7	1面	1層	古墳中～後期	胴部分、基部の一部は空筒	—
15	53	75	円筒埴輪	3I	G2a7	1面	1層	古墳中～後期	外面タテハケのちヨコハケ、円孔	—
15	54	75	朝顔形埴輪	3I	G2h7	1面	1層	古墳前期	外面タテハケ、外面赤彩	—
15	55		白磁碗	3I	G2h7	1面	1層	—	見込みに沈線	20
15	56	75	瀬戸卸皿	3I	G2g6.g7.h7	1面	1層	中世	底部糸切り、色調褐色	10
15	57	75	備前埴鉢	3I	G2h7	1面	1層	15C前半	口縁端部に浅い凹線	5
15	58		土師器杯	3I	F2h7	1面	1層	7 C中葉	軟質、内面一部剥離	20
15	59	74	複弁蓮華紋軒丸瓦	3I	F2f7	1面	1層	7 C後半	蕾紋、裏面に丸瓦接合痕、やや軟質	30
15	60	77	磁石	3I	G2h7	1面	1層	—	使用面は1面のみ	—
15	61	73	須恵器壺	3I	G2f6.g6.f-h7	1面	2層	5 C中葉	内外面回転ナデ	10
16	62		須恵器壺	3I	G2h7	1面	2層	7 C	体部内面同心円紋スタンプ	5
16	63		円筒埴輪	3I	G2h7	1面	2層	古墳中～後期	口縁端部内側をつまみ出す	—
16	64	75	盾形埴輪	3I	G2f6.f7	1面	2層	古墳前～中期	富山型縦書文、表裏面小孔	—
16	65		蓋形埴輪	3I	G2h7	1面	2層	古墳中～後期	立ち飾り部、線刻	—
16	66	75	円筒埴輪	3I	G2f6.f7	1面	2層	古墳後期	タガ断続ナデ技法、須恵質	—
16	67		円筒埴輪	3I	G2g6.g7	1面	2層	古墳後期	タガ三角形、須恵質	—
16	68	75	瓦器埴鉢	3I	G2h7	1面	2層	15C前半	口縁外端部はやや稜を残す	5
16	69		瓦器釜	3I	G2h7	1面	2層	14 C	口縁端部に平坦面	5
16	70	73	土師皿	3I	G2h7	1面	2層	中世後半	へそ皿、口縁外面をつよくなる	90
16	71	75	土師皿	3I	G2f6.f7	1面	2層	中世	口縁内傾	90
16	72	75	土師皿	3I	G2f6.f7	1面	2層	中世	口縁内傾	80
16	73		土師皿	3I	G2f6.f7	1面	2層	中世	底部外面糸切り痕、内面カキメ	40
16	74		土師器	3I	G2g6.g7	1面	2層	中世	外面指オサエ、口縁部ヨコナデ、色調淡灰色	10
16	75	73	瓦器碗	3I	G2f6.f7	1面	2層	15C前半	内面底部平刷印文	90

表14 掲載遺物一覧(2)

図No	遺物No	写真No	器種名	口径	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
16	76		黒色土器	3I	G216,j7	1面	2層	11C中葉	A類、高台断面三角形	10
16	77	75	白磁碗	3I	G2h7	1面	2層	中世	貫入	5
16	78		白磁碗	3I	G2h7	1面	2層	中世	高台外面から内側露出、見込み外縁に除刻	20
16	79		白磁碗	3I	G2h7	1面	2層	中世	高台は厚く、前り出しはわずか	30
16	80	75	白磁皿	3I	G2h7	1面	2層	中世	内面片切影の紋様、底部外面露胎	10
16	81	74	蓮珠紋軒瓦	3I	G216,j7	1面	2層	12C後半～13C前半	凹面布目復稚い、凹面瓦当部縁ケズリ	30
16	82	74	巴紋軒瓦	3I	G2h7	1面	2層	14C	瓦当面露胎、巴頭部にコンパス痕	80
21	83	78	瓦器壺	8A	H217	1面	溝1	15C前葉	短い頸部、口縁端部は丸い	5
21	84	76	成平元寶	8A	H2j7	1面	溝1		鑄造年998～1003	95
21	85		壺	8A	H216,j7	1面	2層	弥生後期	軟質のため調整不明	5
21	86		白磁碗	8A	H216	1面	1層	中世	口縁部玉縁	5
21	87		白磁碗	8A	H216	1面	1層	中世	高台内外面露胎、見込み外縁に除刻	5
21	88		白磁碗	8A	H216	1面	1層	中世	高台は厚く、前り出しはわずか	20
21	89		瓦器碗	8A	H216,j7	1面	2層	14C	生焼	5
21	90	78	須恵器高杯	8A	H216	1面	1層	古墳後期	台付長頸壺の可能性も	5
21	91		常滑壺	8A	H216	1面	1層	12C	口縁端部は尖る	5
21	92	78	備前播鉢	8A	H216	1面	1層	15C前半	口縁外縁つまみ出し、丸く収める	10
21	93	78	瓦器釜	8A	H216	1面	1層	15C前葉	口縁端部は丸く収める、軟質	10
21	94		瓦器釜	8A	H216	1面	1層	15C前葉	口縁端部の内側は丸く、外側はつまむ	5
21	95	78	埴播鉢	8A	H216	1面	1層	18C後半	口縁端部の内面に突帯を巡らす	5
21	96		巴紋軒瓦	12A	J2a6,a7	1面	溝18	近世	瓦当面に雲母	20
26	97		瓦器碗	10C	K219	1面	1層	11C後葉	外面剥離	20
26	98		備前壺	10C	K2j9,j10	1面	1層	中世	底部外面露胎	5
26	99	78	丹波播鉢	10C	K2e8	1面	1層	近世	口縁部外面に暗褐色の釉	5
26	100	78	瓦器	10C	L2a9,a10	1面	1層	中世	脚部、上面は本体との接着面	5
26	101		軒丸瓦	10C	K2g9	1面	1層	近世	瓦当面雲母、丸瓦接合面に刺突痕	20
26	102	78	土師器鉢	10C	K2g9	1面	1層	近世	体部内面上部煤付着	10
26	103	78	陶器壺	10C	K2h8	1面	1層	近世	信索?、外面褐色、断面淡褐色、	5
26	104		土師器火鉢	10C	K2i9	1面	1層	中世	方形、脚部一部欠損、瓦器の生焼か	10
26	105	78	陶器播鉢	10C	K2i9	1面	1層	中世	丹波?、明焼灰色	5
26	106	76	土人形	10C	K2g8,g9	1面	1層	近世	狐、底部穿孔、型づくり	80
26	107	77	磁石	10C	K2h8	1面	1層	-	-	-
26	108		石製品	10C	K2g8,g9	1面	1層	-	-	-
26	109	77	下駄	10C	K2g9	1面	1層	-	砂岩、平滑に加工	-
26	110	78	土師器壺	10C	K2b8	1面	井戸2	-	連樹下駄、柱目材、前歯を前端から斜めに	95
27	111		丹波播鉢	10C	L2a9	1面	井戸3	17C	剥離著しく調整不明	5
27	111		丹波播鉢	10C	L2a9	1面	井戸3	近世	によい赤褐色、外面自然釉	5
27	112	78	土師器火鉢	10C	K2h9-j9	1面	溝1	近世	底部外面露胎	5
27	113	76	石製品	10C	K2h9-j9	1面	溝1	-	粘板岩、両面平滑に加工、高島石か?	-
27	114	76	元龜通寶	10C	K2j9	1面	溝5		初鑄造年1017	60
27	115	76	蓮華紋軒瓦	10C	K2h9	1面	溝2	12C	堺市日置荘遺跡G1型式、裏面丸瓦接合面	20
27	116	76	瓦器火鉢	10C	K2h9	1面	溝2	中世	脚部分、裏面粘土接合面	10
27	117		平瓦	10C	K2b8	1面	井戸2	8C	凹面布目1×1cmに7×7本、色調灰色	10
27	118	76	平瓦	10C	L2a10	1面	井戸3	近世	凸面に弧線圧痕、凸面一部布目	完形
28	119	77	土馬	10C	L2a10	1面	溝6	8・9C	土師質、前右脚部分	20
28	120	77	和銅開珞	10C	L2a10	1面	溝6		初鑄造年708	完形
28	121	77	延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7		初鑄造年907	90
28	122	77	延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7		初鑄造年907	90
28	123	77	土師器小型壺	10C	L2a10	1面	2層	8C	外面下部指頭圧痕、表面剥離著しい	完形
28	124	78	土師器小型壺	10C	L2a10	1面	2層	8C	外面下部指頭圧痕	10
28	125		黒色土器杯	10C	K2j9	1面	溝7	10C前半	A類、内黒、高台断面三角形、外面剥離	20
28	126	78	黒色土器杯	10C	K2j9	1面	溝7	10C前半	A類、内黒、高台断面三角形、外面剥離	20
28	127		黒色土器杯	10C	L2a9	1面	溝7	10C前半	A類、内黒、短い高台	30
28	128		黒色土器杯	10C	L2a9	1面	溝7	10C前半	A類、内黒、短い高台	30
28	129	78	土師皿	10C	K2j9	1面	溝7	10C後半	て字状口縁、灰白色	20
28	130		土師器壺	10C	L2a9	1面	溝7	10C	体部外面指頭圧痕、外面煤付着	20
28	131	78	須恵器杯身	10C	K2i9	1面	2層	7C前半	受け部に深い沈線	10
28	132	78	須恵器壺	10C	L2b10	1面	2層	古墳後期	頸部内面に同心円状スタンプ部残存	5
28	133	78	須恵器壺	10C	L2a10	1面	2層	古墳後期	口縁端部に浅い沈線	10
30	134	81	縄紋深鉢	3I	F2h7-j7	2面	河川1		縄紋晩期 突帯文+刻み目	5
30	135	81	縄紋深鉢	3I	F2j7	2面	河川1		縄紋晩期 有段口縁	5
30	136		弥生壺	3I	F2h7	2面	河川1	弥生前期	肩部、沈線2条によって鋸歯状文様?	5
30	137	81	弥生壺	3I	G2h7	2面	河川1	弥生前期	頸部下半に平行な沈線2条	5
30	138		弥生壺	3I	F2h7	2面	河川1	弥生中期	口径42.5cm、垂下口縁に刺突文	10
30	139	81	弥生直口壺	3I	G2h7	2面	河川1	弥生後期	粘土紐痕を残す、内面ハケメ、外面タタキ	5
30	140		弥生小型鉢	3I	G2j7	2面	河川1	弥生後期	口縁端部外反、内外面ナア	15
30	141	79	土師器有孔鉢	3I	F2i7	2面	河川1	弥生後期	内面タタキ、内面ハケ、底部に焼成後穿孔	90
30	142		土師器鉢	3I	F2h7-j7-G2a7	2面	河川1	弥生後期	外面ケズリ、外面・口縁端部タタキ、外果系	10
30	143		土師器高杯	3I	G2j7	2面	河川1	弥生後期	調整不明、黒斑	10
30	144	81	弥生高杯	3I	G2j7	2面	河川1	弥生後期	体部上下凹線、羽状刻み目、円孔透かし	5
30	145	80	弥生小型壺	3I	G2a7,b7	2面	河川1	弥生後期	体部下半2ヵ所に焼成後穿孔	完形
30	146		弥生壺	3I	F2i7	2面	河川1	弥生後期	受け口状口縁、口縁端部1条の沈線	5
30	147	81	弥生手焙形土器	3I	G2e7	2面	河川1	弥生後期	口縁端部に刻み目、屈曲部に粘土紐付け足し	5
30	148		弥生壺	3I	F2i7	2面	河川1	弥生後期	口縁外面に不定のミガキ	10
31	149	81	土師器壺	3I	F2h7-j7-G2a7	2面	河川1	古墳前期	山陰系の二重口縁	5
31	150		土師器壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	二重口縁に擬凹線、瀬戸内系	5
31	151	81	土師器壺	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	二重口縁に擬凹線、瀬戸内系	5

表15 掲載遺物一覧(3)

図No	遺物No	写真No	器種名	H/F	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
31	152		土師器壺	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	二重口縁に縦凹線、瀬戸内系	5
31	153		土師器壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	二重口縁に縦凹線、瀬戸内系	5
31	154	81	土師器壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	二重口縁、格子状のヘラ抜き	5
31	155	81	土師器器台	3I	F2h7~j7・G2a7	2面	河川1	古墳前期	山形系の数形器台	5
31	156	79	土師器低脚碗	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	山形系土器の搬入品、内面ケズリのちみガキ	80
31	157	81	土師器壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	口縁端部面取り・内面肥厚、外面スス付着	5
31	158	80	土師器壺	3I	G2h7	2面	河川1	古墳前期	はね上げ口縁、外面スス付着	5
31	159		土師器壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	はね上げ口縁、肩部外面タタキ、スス付着	70
31	160		土師器直口壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	口縁端部沈線、摩滅	10
31	161		土師器壺	3I	G2h7	2面	河川1	古墳前期	口縁内面わずかに肥厚	5
31	162		土師器壺	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	口縁内面肥厚、ハケメ	5
31	163	80	土師器壺	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	口縁内面肥厚・端部尖、肩部にヨコハケ	90
31	164	81	土師器直口壺	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	ヘラ記号?、外面赤影、焼成後穿孔	完形
32	165		土師器小型丸底壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	口径7.8cm、内外面ナデ	20
32	166	79	土師器小型丸底壺	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	9.0×8.2cm、内外面ナデ、底部ケズリ	95
32	167		土師器小型丸底壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	口径9.6cm、内面ケズリのちナデ、外面ナデ	15
32	168	80	土師器小型丸底壺	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	9.8×9.6cm、内面指圧痕	95
32	169		土師器小型丸底壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	12×7cm、内面ミガキ、黒斑	70
32	170	79	土師器小型丸底壺	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	11.2×8.4cm、ハケのちみガキ	完形
32	171	79	土師器小型丸底壺	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	11.2×7.6cm、外面ヘラナデ	完形
32	172	80	土師器小型丸底壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	8.4×9.6cm、内面ケズリ・ミガキ、外面ハケ	95
32	173	79	土師器小型丸底壺	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	7.4×5cm、内面放射状ハケ、外面ヘラナデ	完形
32	174	79	土師器小型丸底壺	3I	G2g7,h7	2面	河川1	古墳前期	10.4×6.6cm、内外面ナデ	90
32	175		土師器小型丸底壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	口径10.2cm、台付、内外面一部ミガキ	15
32	176	79	土師器小型丸底壺	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	口径11.4cm、台付、口縁内面放射状暗文	60
32	177		土師器小型丸底鉢	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	有段口縁、口径12.2cm、内外面ナデ	5
32	178		土師器小型丸底鉢	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	有段口縁、口径13.2cm、内外面ナデ	5
32	179		土師器小型丸底鉢	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	有段口縁、口径13.8cm、内面ミガキ、黒斑	15
32	180	81	土師器小型丸底鉢	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	有段口縁、口径15.6cm、内面ミガキ	10
32	181		土師器小型丸底鉢	3I	F2h7~j7・G2a7	2面	河川1	古墳前期	有段口縁、口径17cm、内面ミガキ	10
32	182		土師器小型丸底鉢	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	口径8.4cm、手摺ね?	95
32	183		土師器小型丸底鉢	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	外底面ケズリによって強い横線	25
32	184	79	土師器小型丸底鉢	3I	F2h7~j7・G2a7	2面	河川1	古墳前期	外底面ケズリ、内面ミガキ	70
32	185		土師器直口壺	3I	F2h7~j7・G2a7	2面	河川1	古墳前期	口縁内面ミガキ	5
32	186		土師器直口壺	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	内面ヨコミガキの放射状ミガキ	5
32	187	80	土師器直口壺	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	摩滅著しい、黒斑	60
32	188	81	土師器壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	ヘラ抜きによる斜格子・2条沈線	5
32	189		土師器二重口縁壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	貼り付け突帯に竹管文	5
32	190	81	土師器二重口縁壺	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	貼り付け突帯による縦二重口縁	5
32	191		土師器二重口縁壺	3I	G2g7,h7	2面	河川1	古墳前期	口縁外面に放射状の横指文	5
32	192	81	土師器壺	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	頸部付近を突帯状に残し、2mm間隔の刻み	5
32	193	81	土師器二重口縁壺	3I	G2e7	2面	河川1	古墳前期	縦口縁部が明瞭に突出、厚手、山形系、黒斑	5
32	194		土師器二重口縁壺	3I	G2g7	2面	河川1	古墳前期	付け足しによる、黒斑	5
33	195	81	土師器小型器台	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期	口径6.4cm、口縁端部つまみ出し、底部充填法	50
33	196		土師器高杯	3I	G2a7	2面	河川1	古墳前期	脚部挿入付加法	35
33	197	81	土師器小型器台	3I	G2h7	2面	河川1	古墳前期	中位に4ヶ所直径8mmの円孔透かし	15
33	198		土師器高杯	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	杯部彫形、外面ハケメのちナデ	40
33	199		土師器高杯	3I	F2h7~j7・G2a7	2面	河川1	古墳前期	摩滅著しい	10
33	200		土師器高杯	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期	内外面ハケメ、底部外面ケズリ	50
33	201		土師器高杯	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期	内外面ヨコミガキ、内面放射状暗文	15
33	202		円筒形埴輪	3I	G2e7~h7	2面	河川1	古墳後期	タガ低平、内外面タテハケ、円孔透かし	-
33	203		円筒形埴輪	3I	G2e7~h7	2面	河川1	古墳後期	タガ断続ナデ技法、外面タテハケ、内面ナデ	-
33	204	81	円筒形埴輪	3I	G2g7	2面	河川1	古墳後期	タガ断続ナデ技法、外面タテハケ、底部調整	-
33	205	82	剥片	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前~中期	緑色凝灰岩	-
33	206	82	小型鏡	3I	G2a7	2面	河川1	古墳中期~古代	つまみ三角形、擦痕、V字切り込み	70
33	207	82	土鏃	3I	G2h7	2面	河川1	古墳中期	直径3cm、直径1cmの円孔	70
33	208	82	土鏃	3I	G2g7,h7	2面	河川1	古墳中期	直径3cm、長さ8cm、直径1.2cmの円孔	95
33	209	81	土製円板	3I	G2f7	2面	河川1	古墳中期	直径5cm、厚さ0.9cm	完形
33	210	82	木製容器	3I	F2h7	2面	河川1	古墳前~中期	厚さ0.8cm、縁辺部を平坦に加工、ヤマグワ	15
35	211		土師器壺	3I	G2b7	2面	水田畦畔内	古墳前期	口縁内面肥厚、肩部1条ヨコハケ・列点文	20
35	212	81	土師器壺	3I	G2b7	2面	水田畦畔内	古墳前期	口縁端部立ち上げ、肩部ヨコハケ、スス付着	40
35	213		土師器壺	3I	G2b7	2面	水田畦畔内	古墳前期	口縁端部つまみ上げ、外面タテハケ、スス	60
35	214		木製網籠	3I	F2j7	2面	水田畦畔内	古墳前期	亀甲編み、竹製	完形
37	215	89	石皿	3I	G2e6,e7,f6,f7	2面	方形盛土	弥生後期	3号方形周溝墓転用?、裏表面とも使用痕	完形
42	216	83	組み合わせ甕	3I	G2a7	3面	溝18	弥生後期	アカシ亜属、身部分遺存	50
43	217	88	甕	3I	G2b7	3面	河川2	弥生中期	口縁ヨコナデ、内面ナデ、体部外面ミガキ	10
43	218		甕	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	口縁端部つまみ上げ、内外面ヨコナデ	5
43	219		甕	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	口縁端部つまみ上げ、内外面ヨコナデ、内面下半ケズリ	5
43	220		甕	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	内外面ヨコナデ	5
43	221	83	甕	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	体部内面ナデ、下半部ハケ、外面ハケ後タタキ	80
43	222	83	甕	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	体部内面ハケ、下半部ケズリ、外面タタキ後ナデ	50
43	223	83	甕	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	体部内面下半部ハケ、外面ハケ後タタキ	95
43	224	88	甕	3I	G2b7	3面	河川2	弥生中期	口縁3条、内面ナメハケ、外面タタキ後ハケ	10
43	225		高杯	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	杯部内面ミガキ、外面ハケ、脚部外面ミガキ	40
43	226	88	高杯	3I	G2c7	3面	河川2	弥生中期	内面タテミガキ外面分割ミガキ	10
43	227		(底部)	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	内面ハケ、外面ハケ	5

表16 掲載遺物一覧(4)

図No	遺物No	写真No	群種名	トナリ	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
43	228		竪底板	3I	G2c7	3面	河川2	弥生後期	内面ナナメハケ後タテハケ、外面タテミガキ	15
44	229	84	加工木	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	ヒノキ、遺存状況不良、樺状原材を半截	—
44	230	84	加工木	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	アカガシ重層、樺状志持材を截断	—
44	231	84	背負子?	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	ヤブツバキ、樺状志持材に段状の切込を入れる	完形
44	232	84	樽	3I	G2b7	3面	河川2	弥生後期	ケヤキ、横木取り、木裏を削り込み容積に加工	—
46	233	88	広口壺	3I	G2b7	3面	河川3	弥生中期末	口縁上端と外面に円形浮紋 西ノ辻N式併行	5
46	234		甕	3I	G2d7	3面	河川3	弥生中期	内面タテハケ、外面タテミガキ	25
46	235		甕	3I	G2b7	3面	河川3	弥生中期	口縁端部つまみ上げ、外面タテハケ後ヨココナデ	5
46	236	85	無頸壺	3I	G2b7	3面	河川3	弥生後期	内面下半タテミガキ、外面分割ミガキ	80
46	237	88	甕蓋	3I	G2b7	3面	河川3	弥生後期	外面タテミガキ、内面ケズリ	20
46	238		壺	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	外面ナナメハケ後タテミガキ、内面ナデ	40
46	239	86	長頸壺	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	内面下半ケズリ、上半ハケ後ナデ、外面タテハケ	90
46	240	85	広口壺	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	内面下位ハケ、上半ナデ、外面タテミガキ	90
46	241	85	広口壺	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	内面下位ケズリ、上半ナデ、外面ハケ後ミガキ	60
47	242	85	壺	3I	G2d7a7	3面	河川3	弥生後期	杯部内外面タテミガキ、脚部外面タテミガキ	75
47	243	85	壺	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	頸体部に凸帯1条、内面ナデ、外面タテミガキ	70
47	244	85	高杯	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	杯部内外面ミガキ、脚部凹線3条、外面ミガキ	95
47	245	88	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	アカガシ重層、板状木材側面に刃込を入れる	完形
47	246	86	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	マツ属、樺状志持材の両端を截断し側縁を削る	—
47	247	88	樽?	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	ヤナギ属、榎目材を断面扁平な菱形の板材に加工	30
47	248	88	作業台	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	和泉砂岩、土直使用による磨滅、凹部が形成される	完形
48	249	86	横楕?	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	アカガシ重層、両端を截断した樺材の側縁を削り込む	完形
48	250	86	横楕?	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	アカガシ重層、両端を截断し、樺材の側縁を削り込む	完形
48	251	86	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	コナラ属、遺存状況不良、板材に加工	完形
48	252	88	組み合わせ罎	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	アカガシ重層、身部上半遺存、刃先部欠損	70
49	253	87	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	マツ属、志持樺材を截断し側縁を段状に削り込む	完形
49	254	87	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	ヤナギ属、樺材を削り込み、断面楕円形に加工	完形
49	255	87	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	ヤナギ属、樹皮遺存、志持樺材の端部を削り込む	—
49	256	87	加工木	3I	G2c7d7	3面	河川3	弥生後期	コナラ重層、樺材の両端に削り込みを入れ、段を形成	完形
50	257	86	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	コナラ重層、志持樺材の端部を段状に削り込む	—
50	258	86	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	ヤブツバキ、樺材の両端を截断	90
50	259	86	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	マツ属、志持樺材の先端を両側から加工し杭状とする	完形
50	260	87	加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	マツ属、樺材の先端を両側から加工し杭状とする	—
59	261	89	高杯	3I	G2e7	3面	3号墓第6主体部	弥生後期	杯部外面楕圓縁線と波状紋、内外面ヘラミガキ	50
59	262	89	甕	3I	G2e7	3面	3号墓第6主体部	弥生後期	内面ハケ、外直下半ヘラケズリ、上半タタキ	90
60	263	89	甕	3I	G2e7	3面	3号墓第7主体部	弥生後期	内面下半ケズリ、上半ハケ、外面ハケ後ミガキ	50
60	264-1	89	広口壺	3I	G2f7	2面	河川1	弥生後期	上半内外面ヨココナデ、下半内外面ナデ	95
60	264-2	89	広口壺	3I	G2e7	3面	3号墓第7主体部	弥生後期	内面下半一部ハケ、外面ケズリ、内外面上半ナデ	70
61	265		二重口縁壺	3I	G2f7	3面	3号墓庄内期盛土	古墳前期初頭	5の字口縁内外面ヨココナデ、山隆背木瀬年産期	5
61	266		甕	3I	G2f7	3面	3号墓庄内期盛土	古墳前期初頭	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ケズリ、外面タタキ	40
61	267		樽	3I	G2e7	3面	3号墓第7主体部	古墳前期	口縁端部内外面ヨココナデ、杯部内外面ヨココナデ	10
61	268		広口壺	3I	G2f7	3面	3号墓墳丘上	弥生後期	凸帯1条、口縁ヨココナデ、頸内面ナデ、外面ハケ	5
61	269		無頸壺	3I	G2e6e7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	5
61	270	90	短頸壺	3I	G2f7	3面	3号墓西側周溝	弥生後期	記号、口縁ヨココナデ、体部外面ミガキ、内面ハケ	80
61	271	90	短頸壺	3I	G2f7	3面	3号墓北西側周溝	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	40
61	272	90	長頸壺	3I	G2f7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内外面ナデ	60
61	273	90	長頸壺	3I	G2f7	3面	3号墓西側・北西側周溝	弥生後期	頸体境記号あり、内面ユビナデ、外面ナナメハケ	60
61	274	91	広口壺	3I	G2e7f7	3面	3号墓西側周溝	弥生後期	口縁ヨココナデ、体部内面ハケ、外面ハケ後ミガキ	30
61	275	91	甕	3I	G2d7~g7	3面	3号墓北側・北西側周溝	弥生後期	口縁ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ後ハケ	70
63	276	91	双把手付鉢	3I	G2e6e7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内外面タテミガキ	85
63	277	91	台付鉢	3I	G2i6	3面	3号墓西側周溝	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体内外面ミガキ、脚ハケ	90
63	278		高杯	3I	G2d7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	杯部外面縦凹線、内面螺旋状ミガキ	5
63	279		高杯	3I	G2f7	3面	3号墓西側周溝	弥生後期	杯部内外面ミガキ、脚部内面絞目、外面ミガキ	10
63	280		高杯	3I	G2e7	3面	3号墓南西側橋部	弥生後期	杯部内外面ナデ、脚部内面絞目、外面ミガキ	10
63	281		高杯	3I	G2f7	3面	3号墓庄内期盛土・南西側周溝	弥生後期	縁状刻目目紋、脚部内面ハケ、外面ヘラミガキ	15
63	282		高杯	3I	G2f7	3面	3号墓南西側周溝	弥生後期	内面ナナメケズリ、外面タテハラミガキ	10
64	283	91	木鐺	3I	G2e7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	マツ属 樹皮を残した志持材の中央に切込を入れる	完形
64	284	91	厨桁	3I	G2c7	3面	3号墓北側周溝	弥生後期	アカガシ重層、身部欠損、柄は一本作り	90
68	285	96	壺	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	体部にヘラ描きの記号あり	5
68	286		台付鉢	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	口縁部内外面ナデ、脚部内外面ユビオサエ	60
68	287	96	鉢	12A	J2a7,b7	3面	河川1	弥生後期	内外面タテミガキの後ヨコミガキ	10
68	288		甕	12A	J2a7,b7	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ケズリ、外面ナデ	5
68	289	96	甕	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ	5
68	290		甕	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	口縁端部凹線 口縁内外面ヨココナデ	5
68	291		甕	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	口縁ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ後ハケ	15
68	292		甕	12A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ	10
68	293		甕	12A	J2a6,g7	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ	40
68	294		短頸壺	12A	J2b6,b7	3面	5a層	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ナデ、外面ハケ	10
68	295		広口壺	12A	J2b6,b7	3面	5a層	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、頸部内面ナデ、外面ハケ	10
68	296	115	広口壺	12A	J2a6	3面	5a層	弥生後期	転用、口縁内面ミガキ、外面ヨココナデ、頸部ナデ	10
68	297	115	(底部)	12A	J2a6	3面	5a層	弥生後期	外面赤色顔料塗布、内面ナデ、外面タテミガキ	10
68	298		甕	12A	J2b6,b7	3面	5a層	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ	5
68	299	113	甕	12A	J2a6	3面	5a層	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面ハケ	90
68	300		甕	12A	J2b7	3面	溝22	弥生後期	口縁内外面ヨココナデ、体部内面ハケ、外面タタキ	30
70	301		甕	13A	J2d7	3面	河川1	弥生後期	口縁端部つまみ上げ、内外面ヨココナデ	5
70	302		甕	13A	J2d7	3面	河川1	弥生後期	口縁端部つまみ上げ、内外面ヨココナデ、体部ナデ	5

表17 掲載遺物一覧(5)

図No	遺物No	写真No	器種名	材質	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	碎散	残存(%)
70	303		埴	13A	J246,47	3面	河川1	弥生後期	体部上半タタキ、下半ハケ、内面上半ハケ	30
70	304	96	埴	13A	J246,47	3面	河川1	弥生後期	列点紋、口縁ヨコナデ、体外面タタキ、内面ハケ	10
70	305		埴	13A	J247	3面	河川1	弥生中期	罫上口縁、口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ	10
70	306	96	埴	13A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体内面ユビナデ、外面ナデ	10
70	307	95	短頸壺	13A	J247	3面	河川1	弥生後期	体部と口縁部記号あり、口縁内外面ヨコナデ	85
70	308		高杯	13A	J247	3面	河川1	弥生後期	杯内面ミガキ、外面ヨコナデ、下半ハケ	25
70	309	95	砥石?	13A	J247	3面	河川1	弥生後期	砂岩製、上面平滑で磨減がみられる。周囲欠損	-
70	310	95	摩石?	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	砂岩製、上面磨減が見られ平坦となる。周囲欠損	-
70	311	95	凹石?	13A	J247	3面	河川1	弥生後期	砂岩製、上面磨減と敲打による凹部が見られる	70
72	312	96	無頸壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	体部外面タタキ、内面ユビナデ	10
72	313		広口壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ、外面ハケ	5
72	314		広口壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ、外面ミガキ	10
72	315		広口壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ 頸部内外面ナデ	5
72	316	96	広口壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	転用、口縁ヨコナデ、頸部内外面ハケ、外面ミガキ	5
72	317	95	広口壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、内面ナデ	60
72	318		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	罫上口縁、口縁ヨコナデ、体内面ナデ、外面ハケ	5
72	319		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	5
72	320		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ヨコナデ	5
72	321		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ、外面ケズリ	5
72	322		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	5
72	323		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	爪痕あり、口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	5
72	324		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ、外面ミガキ	5
72	325		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ、外面ミガキ	5
72	326		埴	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体内面ユビナデ、外面ハケ	10
72	327		鉢	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ、外面ナデ	30
72	328	96	(脚部)	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	円孔4ヶ所、内面ナデ、外面タタキ	5
72	329	96	(脚部)	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	縦溝紋、円孔あり、内面ナデ、外面ハケ後ミガキ	5
72	330	96	(底部)	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	記号あり、底部内外面ナデ	5
72	331		高杯	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	杯部内外面ミガキ、脚部内外面ナデ、外面ミガキ	20
72	332	96	高杯	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	内面赤色顔料塗布、上半内外面ヨコナデ	10
72	333		高杯	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、杯部内外面ナデ、外面ミガキ	5
72	334		高杯	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、杯部内外面ハケ、外面ミガキ	5
72	335		高杯	14A	J247	3面	河川1	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ	5
73	336	115	鉢	14A	J247	3面	河川1	弥生中期末~後期初頭	口縁内外面ミガキ、外面ヨコナデ、体内外面ミガキ	5
73	337	78	三足鉢	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	ヤマガワ、横木取、遺存状況極めて不良	5
73	338	96	ミニチュア	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	平づくね、脚部のみ遺存	5
73	339		髷台?	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	外面赤色顔料塗布、凸帯3条、内外面ヨコナデ	5
73	340	96	長(短)頸壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁部内外面ナデ、外面タタキ	5
73	341		長(短)頸壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ナメハケ	10
73	342	96	短頸壺	14A	J247	3面	河川1	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ、頸部内外面ハケ、外面ミガキ	60
73	343		埴	10C	K2h9	3面	ポイントNO.2	弥生後期	口縁内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ	30
84	344		広口壺	3I	F2j7	4面	10号・11号墓間	弥生中期	口縁部臙状、波状刻突紋、内外面ヨコナデ	5
84	345		埴	3I	F2j7-G2a7	4面	10号・11号墓間の高まり	弥生中期	底部内外面ナデ、外面タタキ	20
84	346		広口壺	3I	F2j7	4面	10号・11号墓間	弥生中期	端面凹線紋2条、頸部凹線紋3条以上、内面ナデ	5
84	347		高杯	3I	F2j7	4面	10号・11号墓間	弥生中期	上面斜格子状のミガキ、端面ミガキ	5
84	348		鉢	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部掘り方内	弥生中期	口縁端面凹線紋1条、体部外面、列点紋、波状紋	5
84	349	97	水差し	3I	F2i7	4面	10号墓東側周溝	弥生中期	口縁部凹線紋風の強いヨコナデ、体部外面ミガキ	50
84	350	97	広口壺	3I	F2i7	4面	10号墓北側周溝	弥生中期	口縁打欠、波状紋、直線紋を交互に施す	90
84	351	97	広口壺	3I	F2i7	4面	10号墓東側周溝	弥生中期	口縁打欠、口縁下端刻目紋、体部中位列点紋	95
85	352	97	石鉢	3I	F2j7	4面	10号墓墳丘盛土	弥生中期	サヌカイ土製、凸帯無蓋式	90
85	353	97	石甕丁	3I	F2i7	4面	10号墓東側周溝	弥生中期	緑色片岩製、半月形内寄刃	定形
85	354	97	柱状片刃石斧	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部木棺内	弥生中期	緑色片岩製の石材、刃濡れが認められる。	定形
85	355	98	鉄	3I	F2j7	4面	10号墓東側周溝	弥生中期	アカガシ黒属、刃先欠損	90
91	356	98	短頸壺	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓第1主体部	弥生中期	半截して棺蓋に転用、体部内外面ミガキ	50
92	357	98	広口壺	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓北側斜面	弥生中期	頸部を打欠き棺身に転用、頸部塊に貼付凸帯1条	90
93	358	99	鉢	3I	G2a7	4面	11号墓第9主体部	弥生中期	棺蓋に転用、口縁端面不明瞭な凹線紋3条	95
93	359	99	埴	3I	G2a7	4面	11号墓第9主体部	弥生中期	棺身に転用、口縁端面凹線紋3条	90
95	360		埴	3I	G2a7	4面	11号墓南側周溝	弥生後期	口縁端部つまみ上げ、体部内外面ハケ、外面タタキ	40
95	361		埴	3I	G2a7	4面	11号墓南側周溝	弥生後期	口縁端部上下に拡張、体部内外面ハケ、外面タタキ	40
95	362		広口壺	3I	G2a7	4面	11号墓南側周溝	弥生後期	口縁ヨコナデ、頸内外面ハケ、体内外面ナデ	50
95	363	99	広口壺	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓南側周溝	弥生後期	体部に記号、外面ハケ後ミガキ、内面ハケ後ナデ	30
95	364		(長)短頸壺	3I	F2j7	4面	11号墓北側・東側周溝	弥生後期	口縁端部ヨコナデ、頸部内外面ナデ、外面ミガキ	50
95	365	99	壺	3I	G2a7	4面	11号墓南側周溝	弥生後期	体部外面ミガキ、内面底断続ハケ、上半ヨコナデ	60
95	366		埴	3I	G2b7	4面	11号墓南側外周	弥生後期	口縁ヨコナデ、体部外面ハケ後タタキ、内面ナデ	90
95	367	99	広口壺	3I	G2a7	4面	11号墓墳丘上	弥生後期	頸部下位焼成後穿孔、口縁端面、体部上位施紋	50
95	368	99	広口壺	3I	G2a7	4面	11号墓墳丘上	弥生後期	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ、下半ミガキ	80
97	369	100	埴	3I	G2a7	4面	11号墓墳丘上	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部外面ミガキ、内面ナデ	20
97	370	100	埴	3I	G2a7	4面	11号墓墳丘上	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、体部内外面ハケ、外面ミガキ	30
97	371	100	高杯	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓墳丘上	弥生中期	杯部中央焼成後穿孔、脚部外面ミガキ、内面ナデ	80
97	372		広口壺	3I	G2a7/b7	4面	11号墓南側・東側周溝	弥生中期	頸部塊に列点、凹線紋、頸部内外面ハケ	20
97	373		広口壺	3I	G2a7	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	頸部塊に貼付凸帯紋、体部内外面ハケ、外面ハケ	20
97	374	100	鉢	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面分割ミガキ	90
97	375		広口壺	3I	G2a6	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	体部外面臙状、斜格子紋、下位ミガキ、内面ナデ	20
97	376	101	無頸壺	3I	F2j7-G2a7	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	内面ハケ、外面ミガキ	定形
97	377	101	無頸壺	3I	F2j7	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、口縁部列点紋、体部臙状紋	90
97	378	100	広口壺	3I	G2a7	4面	11号墓東側周溝	弥生中期	体部2ヶ所焼成後穿孔、体外面ハケ後下半ミガキ	90

表18 掲載遺物一覧(6)

図No	遺物写真真似	器種名	口径	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
99 379		甕	31	F2j7	4面	11号基東側周溝	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ミガキ	30
99 380		甕	31	F2j7-G2a7	4面	11号基東側周溝	弥生中期	底部焼成後に穿孔?内面ケズリ、外面ミガキ	10
99 381 101		把手付台付鉢	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北東側周溝	弥生中期	口縁部外面列点紋、体部内面ミガキ	50
99 382 101		広口壺	31	G2b7	4面	11号基南側周溝	弥生中期	外面簾状、波状刺突紋、体部下分割ミガキ	90
99 383 102		広口壺	31	F2j7	4面	11号基北側斜面	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、外面分割ミガキ、内面ハケ	50
99 384 101		甕	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北側斜面・東側周溝	弥生中期	口縁部ヨコナデ、外面ミガキ	90
101 385 103		広口壺	31	G2a7	4面	11号基北側斜面	弥生中期	体部下位焼成後大きな穿孔、体上位縦位のミガキ	90
101 386 103		広口壺	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北側斜面	弥生中期	外面簾状、波状刺突紋、内面ハケ、外面ミガキ	65
102 387 101		水差	31	F2j7	4面	11号基北側斜面	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、内面ハケ、外面分割ミガキ	60
102 388 103		広口壺	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北側斜面・東側周溝	弥生中期	口縁打欠、体部上半ハケ後ケズリ、下半ミガキ	60
102 389 102		広口壺	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北東側周溝	弥生中期	口縁打欠、体部上半タキ後ハケ、下半ミガキ	40
102 390 102		広口壺	31	F2j7-G2a7	4面	11号基北側斜面・東側周溝	弥生中期	口縁打欠 体部上半ナデ、下半分割ミガキ	65
102 391 102		広口壺	31	F2j7	4面	11号基北側・東側周溝	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、体部外面ハケ後ミガキ	90
103 392 104		高杯	31	F2j7	4面	11号基北側・東側周溝	弥生中期	口縁端面、脚部に凹線紋、杯部内外面ミガキ	90
103 393 104		甕	31	F2j7	4面	11号基北側周溝	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、体外面上半ケズリ後ミガキ	90
103 394 103		甕	31	F2j7	4面	11号基北側周溝	弥生中期	口縁ヨコナデ、体内面ナデ、外面ケズリ後ミガキ	90
103 395 104		甕	31	F2j7	4面	11号基北側斜面	弥生中期	跳上げ口縁 体部外面タキ後ケズリ	80
103 396 104		台付水差	31	F2j7	4面	11号基北側周溝	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、列点、簾状、棒状浮紋	95
104 397 109		加工木	31	F2j7	4面	11号基北側周溝	弥生中期	コウヤマキ、榎目取板材	-
106 398 110		壺	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ	5
106 399		壺	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁端面波状紋、内外面ヨコナデ	5
106 400 110		(脚)	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	二股以上の小円孔紋、内面ハケ、外面ミガキ	5
106 401 110		甕	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	内面ナデ、外面タテミガキ、底部外面ヨコナデ	10
106 402 110		広口壺	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁端面波状紋、内面列点紋、頸部直線紋	10
106 403		広口壺	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁端面、頸部簾状紋、内面ナデ	10
106 404 110		高杯	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	杯部凹線紋4条、杯部外面ミガキ、内面ミガキ	20
106 405		高杯	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	杯部中央焼成後穿孔、不明瞭な凹線2条	30
106 406 110		無頸壺	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁部凹線4条、外面体部下ハケ	10
106 407 110		鉢	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	口縁端面刺目紋、体部簾状紋、内面ミガキ	5
106 408		壺	31	G2d7	4面	沼状遺構	弥生中期	体部内面ナメハケ、外面分割ミガキ	30
106 409 109		加工木	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	スギ、榎目取板材	-
106 410 109		盾	31	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期	スギ?、外面赤色顔料塗布、小円孔列に縦り聴明瞭	-
107 411		甕	31	G2h7	4面	溝20	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ナデ	5
107 412		甕	31	G2h7	4面	溝20	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ナデ、外ミガキ	5
107 413		台付水差	31	G2h7	4面	溝20	弥生中期	体部簾状紋、外面下位分割ミガキ、内面下位ハケ	30
107 414 110		高杯	31	G2g7,h7	4面	溝20	弥生中期	杯部屈曲部に2個一対の円形浮紋、内外面ミガキ	20
107 415		高杯	31	G2h7	4面	溝20	弥生中期	脚部円孔列、内面ケズリ、外面ミガキ	5
107 416		器台	31	G2g7,h7	4面	溝20・井戸3	弥生中期	外面螺旋状の凹線紋、4ヶ所の円孔、内面ケズリ	40
107 417 110		台付鉢	31	G2h6,h7,j7	4面	溝20	弥生中期	体部簾状、列点、棒状浮紋、内面ミガキ	10
107 418		甕	31	G2g7,h6,h7,j7	4面	溝20	弥生中期	跳上げ口縁、口縁端面不明瞭な凹線紋	50
108 419		壺	31	G2g7	4面	5b層	弥生中期	口縁端面凹線紋2条、頸部板状工具による刺目紋	10
108 420		甕	31	G2g7	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナメハケ	10
108 421		甕	31	G2g7	4面	5b層	弥生中期	口縁ヨコナデ、体内面ハケ、外面ケズリ後ミガキ	80
109 422		壺	31	G2g7,h7	4面	井戸3最下層	弥生中期	被損後二次焼成を受ける、外面に凹線、櫛指紋	40
109 423 109		空口状口縁壺	31	G2g7	4面	井戸3最下層	弥生中期	口縁外面凹線紋4条、頸部境に貼付帯刺	20
109 424 109		甕	31	G2g7	4面	井戸3最下層	弥生中期	被損後二次焼成を受ける、体部外面ハケ後ケズリ	30
109 425 109		甕	31	G2g7	4面	井戸3最下層	弥生中期	被損後二次焼成を受ける、外面ハケ後ケズリ	60
112 426 115		甕	8A	H2i6	4面	溝27	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	5
112 427 110		甕	8A	H2i6	4面	溝27	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ後ケズリ	40
112 428		甕	8A	H2i6	4面	溝27	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	5
112 429 110		無頸壺	8A	H2i6	4面	溝27・土坑21	弥生中期	各区部位に凹線紋、脚部円孔5ヶ所、底部タキ	60
112 430		無頸壺	8A	H2i6	4面	溝27	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ハケ後ミガキ	5
112 431		水差	8A	H2i6	4面	溝27	弥生中期	口縁部不明瞭な凹線4条、内外面ヨコナデ	5
112 432		無頸壺	8A	H2i6	4面	5b層	弥生中期	口縁部凹線紋2条、体部内外面ナデ	5
112 433 110		甕	8A	H2i6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	70
113 434		甕	9A	I2b6	4面	溝31	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケ	5
113 435		甕	9A	I2b6	4面	溝31	弥生中期	底部内面ケズリ、外面タテハケ	10
113 436		細頸壺	9A	I2b6	4面	溝31	弥生中期	凹線紋4条、波状紋、円形浮紋、口縁部ヨコナデ	20
113 437 115		甕	9A	I2b6	4面	溝31	弥生中期	跳上げ口縁、体部外面タキ後ハケ	15
113 438 115		細頸壺	9A	I2b6	4面	溝31	弥生中期	口縁、頸部に凹線紋、波状紋、円形浮紋	10
113 439		台付鉢	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	溝31	弥生中期	口縁部列点紋、体部簾状、棒状浮紋	10
113 440		広口壺	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	口縁部凹線紋3条、内外面ヨコナデ	10
113 441 115		及把手付台付鉢	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	縞形列点紋3帯、体部内外面ミガキ	10
113 442 78		ミニチュア	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ユビオサエ、外面ケズリ	90
113 443		甕	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	底部工具による穿孔、内面ナデ、外面ミガキ	10
113 444		甕	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ユビオサエ、外面ナデ	10
113 445		甕	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ハケ後ミガキ	5
113 446		甕	9A	I2c7	4面	土坑25	弥生中期	内面ナデ、外面ミガキ、底部外面ユビオサエ	10
113 447		広口壺	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	口縁端面凹線2条、内外面ヨコナデ	5
113 448		甕	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ミガキ	5
113 449		広口壺	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	口縁端面簾状紋、波状刺突紋、頸部簾状紋	5
113 450 115		高杯	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	口縁部凹線紋3条、杯部内外面ミガキ	10
113 451 115		高杯	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	口縁部縞形列点紋、杯部内外面ミガキ	5
113 452		高杯	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	脚付上端部に刺目紋、内面ハケ、外面ミガキ	10
113 453 111		尖頭器	9A	I2b6,b7,c6,c7	4面	5b層	弥生中期	サヌカイト製、先端部欠損	5
116 454 115		広口壺	10A	I2i6,f7	4面	溝38	弥生中期	口縁端面不明瞭な凹線2条、頸部内外面ハケ	10

表19 掲載遺物一覧(7)

図No	遺物No	写真No	群種名	トナ	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
116	455		広口壺	10A	J2f6	4面	溝38	弥生中期	口縁内外面ヨコナデ、頸部内面ナデ、外面ミガキ	10
116	456		広口壺	10A	J2f6	4面	溝38	弥生中期	口縁端面横状紋、内面円形浮紋、頸部横状紋	15
116	457		甕	10A	J2f6,f7	4面	溝38	弥生中期	跳ね上げ口縁、端面に不明瞭な凹線紋	10
116	458		甕	10A	J2f7	4面	溝38	弥生中期	跳ね上げ口縁、体部内面ユビナデ、外面上位ハケ	20
116	459		高杯	10A	J2f7	4面	溝38	弥生中期	脚部端面凹線紋1条、外面ミガキ、内面ケズリ	55
116	460	111	高杯	10A	J2f7	4面	溝38	弥生中期	口縁上端面疑凹線紋、杯内面ミガキ、脚内面ナデ	70
116	461	111	広口壺	10A	J2f7	4面	溝38,土坑46,5層	弥生中期	口縁端面横状紋、内面円形浮紋2条、頸部横状紋	40
116	462		甕	10A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	底部内面ナデ、外面タテミガキ	10
116	463		甕	10A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内外面ケズリ	10
116	464		(脚)	10A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	脚部ヨコナデ、内面ハケ、外面ナデ	10
116	465		広口壺	10A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	口縁端面凹線紋3条、頸部交互の波状、直線紋	20
119	466	115	広口壺	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期	口縁端面不明瞭な凹線3条、頸部凹線紋3条以上	10
119	467	111	短頸壺	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	体部下位焼成後穿孔、口縁部補修焼成前に補修	完形
119	468	115	短頸壺	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期末～後期初頭	頸部不明瞭な凹線紋3条、体部内面ケズリ	10
119	469	112	無頸壺	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	脚部焼成前に補修、体部横状浮紋、脚部円孔列	90
119	470	78	ミニチュア	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期末～後期初頭	内面ナデ、外面下半ケズリ、上半ハケ	10
119	471	111	無頸壺	11A	J2f6	4面	土坑30,31	弥生後期初頭	脚部焼成前に補修、外面ハケ、内面杯ナデ	50
119	472		甕	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	跳ね上げ口縁、口縁部ヨコナデ、体部内外面ハケ	5
119	473		甕	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ後ミガキ	10
119	474		甕	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ナデ	5
119	475		甕	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期末～後期初頭	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ミガキ	5
119	476		甕	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期末～後期初頭	体部内面ナデ、外面ケズリ後ミガキ	50
119	477		高杯	11A	J2f6	4面	土坑30,5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ナメハケ	20
119	478		高杯	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	杯部内面ヨコミギ後放射状ミガキ、外面ミガキ	20
119	479	115	高杯	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生後期	杯部下位焼成後穿孔、内外面ミガキ	20
119	480		鉢	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期末～後期	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコミガキ	5
119	481		転用甕蓋	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期	脚部輪状に採付着、脚部外面ハケ、内面紋り目	60
120	482	112	加工木	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	ヒノキ、断面長方形の棒状に加工	—
120	483	112	加工木	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	マツ属、板目取り、扁平な板材に加工	—
120	484	112	加工木	11A	J2f6	4面	土坑31	弥生中期	ヒノキ、板目取り、扁平な板材に加工	—
120	485	112	糸(経)巻具	11A	J2f6	4面	土坑30	弥生中期	クスノキ、完存、製品の布幅13cm	完形
121	486	115	広口壺	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁端面横状紋、波状刺突紋、内面円形浮紋	5
121	487		広口壺	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	20
121	488		甕	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ミガキ	10
121	489		甕	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内外面ヨコハケ	5
121	490		甕	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ミガキ	5
121	491		甕	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ケズリ後ミガキ	20
121	492	115	無頸壺	11A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	横状、棒状浮紋、口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ	10
121	493		把手付台付鉢	11A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内外面、タテミガキ	20
121	494		鉢	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内外面、ヨコミガキ	5
121	495		(脚)	11A	J2f6	4面	5b層	弥生中期	脚部内面ナデ、外面ケズリ後ミガキ	40
121	496		(脚)	11A	J2f7	4面	5b層	弥生中期	2個一対の円孔列、杯部内面ナデ、外面ミガキ	50
123	497	115	無頸壺	12A	J2a6,a7	4面	5b層	弥生中期	口縁ヨコナデ、体部内面ハケ後ミガキ、外面ミガキ	5
123	498		高杯	12A	J2a6,a7	4面	5b層	弥生中期	端面凹線紋1条、杯部内外面ヨコナデ	5
123	499	115	甕	12A	J2a6,a7	4面	5b層	弥生中期	跳ね上げ口縁、口縁下端部刻目紋、内外面ナデ	30
123	500	115	(脚)	12A	J2a6,a7	4面	5b層	弥生中期	脚部円孔列、内面紋り目、外面ミガキ	5
123	501	115	甕	12A	J2a6,a7	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タテミガキ	10
125	502		広口壺	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁端面凹線紋3条、頸部埋貼付凸帯紋1条	10
125	503		長頸壺	14A	J2g7	4面	溝56	弥生後期	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ナデ	10
125	504		無頸壺	14A	J2g7	4面	溝56	弥生後期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タテミガキ	5
125	505		甕	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タテミガキ	5
125	506		甕	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ	5
125	507	113	台付鉢	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁端部上下に大きく拡張、体部上位板状点紋	85
125	508		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生後期	口縁部内外面ヨコナデ	5
125	509	96	高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	内面ナデ、外面タテミガキ	20
125	510	115	(脚)	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	脚部2個一対の円孔、内外面ヨコナデ	10
125	511		蓋	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	脚部ヨコナデ、内面ナデ、外面タテミガキ	10
125	512		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面タテミガキ	10
125	513		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、杯部内外面タテミガキ	10
125	514		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末	口縁部内外面ヨコナデ	5
125	515		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁部内外面ヨコナデ、杯部外面ヨコミガキ	5
125	516		高杯	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期	口縁部ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ミガキ	5
125	517	113	広口壺	14A	J2f7	4面	ピット66	弥生後期	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケ、外面ミガキ	80
125	518	113	加工木	14A	J2g7	4面	溝56	弥生後期	樹種不明、樹皮遺存の志持の枝材に切込を入れる	—
126	519		鉢	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ミガキ	5
126	520		鉢	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	凹線紋2条、口縁部ヨコナデ、体部内外面ミガキ	5
126	521		(脚)	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	端面不明瞭な凹線紋1条、内面ナデ、外面ミガキ	5
126	522		甕	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タテハケ	10
126	523		高杯	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、杯部内外面ミガキ	5
126	524		広口壺	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、頸部内面ナデ、外面タテミガキ	15
126	525		広口壺	14A	J2g7	4面	5b層	弥生後期	口縁部端面竹管紋、頸部内面ナデ、外面ミガキ	5
126	526	114	石鉢	14A	J2g7	4面	5b層	弥生中期末	完存、サヌカイト製凸蓋有蓋式	完形
126	527	114	加工木	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末～後期	樹種不明、表面丁寧な面取り、下端部一段削込み	—
126	528	114	組み合わせ甕	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末～後期	アカガシ亜属、先端、側縁部一部欠損	90
129	529		甕	8C	J2j8	4面	ピット5	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面タテハケ	5
129	530	115	高杯	8C	J2j7	4面	溝12	弥生中期末	口縁端面凹線紋1条以上、上端面斜格子ミガキ	5

表20 掲載遺物一覧(8)

図No	遺物No	写真No	群種名	トナ	地区	遺構面	遺構・層位名	時期	特徴	残存(%)
129	531		水差	8C	J2j7	4面	溝19	弥生中期	口縁部不明瞭な凹線紋3条、内外面ヨコナデ	5
129	532	115	無類壺	8C	J2j7	4面	溝19	弥生中期末	口縁端面刺目紋、体部内面ナデ、外面タテミガキ	5
129	533		鉢or高杯	8C	J2j7	4面	溝19	弥生中期末	口縁部凹線紋2条、手以外面ヨコナデ	5
129	534		甕	8C	J2j7j8	4面	5b層	弥生中期末	口縁部ヨコナデ、体部内面ケズリ、外面タテハケ	10
129	535	115	細頸壺	8C	J2j7j8	4面	5b層	弥生中期	口縁部列点、糠状、円形浮紋、内面ヨコナデ	5
129	536	115	高杯	8C	J2j7j8	4面	5b層	弥生中期	口縁部列点紋、杯内面放射状ミガキ、外面ミガキ	5
129	537		高杯	8C	J2j7j8	4面	6b層	弥生中期末	口縁端面凹線紋1条以上、上端面波状ミガキ	5
129	538		鉢	9C	K2b8	4面	溝22	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ケズリ	5
129	539	115	把手付鉢	9C	K2b8	4面	溝22	弥生中期	把手接合部で索難、内面ナデ、外面ユビオサエ	5
129	540		甕	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	口縁端面不明瞭な凹線紋2条、内外面ヨコナデ	5
129	541		広口壺	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期末	口縁部下方に貼り足し、内外面ヨコナデ	5
129	542		甕	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナメハケ	5
129	543		甕	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナメハケ	5
129	544		甕	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ、外面ナメハケ	5
129	545		無類壺	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	跳ね上げ口縁、体部内面ナデ、外面ナメハケ	5
129	546	96	高杯	9C	K2b8	4面	5b層	弥生後期	口縁上端面、外面赤色顔料塗布、外面ミガキ	5
129	547		高杯	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期末	脚部円孔列、内面ナデ、外面タテミガキ	10
129	548	114	石鉢or石甕	10C	K2b9	4面	5b層	弥生後期	口縁部ヨコナデ、杯内面ミガキ、外面下半ミガキ	5
129	549	114	砥石	9C	K2b8	4面	5b層	弥生中期	サヌカイト製、凸蓋無蓋式、蓋部欠損	5
137	550	116	加工木	3I	G2c7	8面	9層最下層	弥生中期初頭	緑灰色の砂岩製、表面と裏面に使用による磨滅	—
137	551	116	壺	3I	G2c7	8面	9層最下層	弥生中期初頭	ヒノキ、芯持の棒材の両端を截断、表面に擦過痕	—
141	552	119	甕	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	口縁部打欠、直線紋、層形紋、疑似流水紋	完形
141	553		甕	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	端面下端刺目紋、内面ナデ、外面ハケ	10
141	554	119	甕	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	口縁部内外面ヨコナデ	5
141	555		壺	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	口縁部内外面ヨコナデ	5
141	556		壺	10C	K2b9	7面	河川3	弥生中期初頭	低部内外面ナデ、	5
141	557		甕	10C	K2b9	7面	河川3	弥生中期初頭	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナメハケ、	5
141	558	119	壺	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	底部内外面ナデ	10
141	559	119	甕	10C	K2b9j9	8面	河川6	弥生前期	頸部境に削出し段、内面ナデ、外面ヨコミガキ	5
141	560	119	甕	10C	K2b9	8面	河川6	弥生前期	頸部上位に削出し段、内面ナデ、外面ヨコミガキ	10
141	561	119	甕	10C	K2b9	8面	河川6	弥生前期	口縁端面刺目紋、頸部上位沈線紋6条、下位ハケ	5
141	562	119	壺	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	口縁端面刺目紋、内面ヨコハケ、外面タテハケ	5
141	563	116	壺	10C	K2j10	8面	河川6	弥生中期初頭	口縁部ヨコナデ、内外面ヨコミガキ	5
141	564	117	スクレイパー	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	体部2ヶ所焼成後穿孔、内外面ミガキ	99
141	565	117	石鉢	10C	K2b9	8面	9層最下層	？	安山岩系の石材 一部原材面残る	95
141	566	117	石鉢	10C	K2b9	8面	河川6	弥生前期	サヌカイト製、凹蓋無蓋式、平面五角形	完形
141	567	117	石鉢	10C	L2a9,a10	8面	9層最下層	弥生前期	サヌカイト製、凸蓋無蓋式、表面一次剝離面残る	99
141	568	116	加工木	10C	K2j10	8面	河川6	弥生中期初頭	頸部上位に削出し段、内面ナデ、外面ヨコミガキ	—
141	569	117	田下駄?	10C	L2a10	8面	河川6	弥生中期初頭	ヤマダク、板目取した角丸長方形板材の四方に穿孔	5
142	570	117	石甕丁	10C	K2b9	8面	河川6	弥生中期初頭	緑色片岩製半月形内弯刃、刃部研ぎ直し	完形
142	571	118	石甕丁	10C	L2a9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、緑色片岩製半月形外弯刃	完形
143	572	118	石甕丁	10C	L2a9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、紐孔3ヶ所、緑色片岩製半月形直線刃	完形
143	573	118	石甕丁	10C	L2a9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、緑色片岩製半月形直線刃	完形
144	574	118	石甕丁	10C	L2a9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、緑色片岩製半月形直線刃 刃部研ぎ直し	完形
144	575	118	石甕丁	10C	L2a9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、緑色片岩製半月形直線刃 刃部研ぎ直し	完形
145	576	118	石甕丁	10C	K2b9	8面	9層最下層	弥生中期初頭	一括出土、緑色片岩製半月形外弯刃、刃部研ぎ直し	完形
147	577	119	加工木	3I	G2c7	9面	12層	弥生前期	ヒノキ、先端を段状に削り込む	—
151	578	119	甕	13A	J2d7	9面	河川3	弥生前期	口縁端面刺目紋、頸部上位沈線紋二条以上	5
151	579	119	甕	13A	J2d7	9面	河川3	弥生前期	口縁端面刺目紋、頸部上位沈線紋二条、外面ハケ	20
151	580	119	壺	10C	L2a10	9面	溝35	弥生前期	体部削出し段、沈線紋5条、ヘラ指し斜格子紋	5
151	581		甕	13A	J2d7	9面	河川3	弥生前期	底部焼成後穿孔、内面ハケ、外面ナデ	20
151	582	119	壺	8A	H2i7	9面	落ち込み2	弥生前期	底部内面ハケ、外面上半ミガキ、下半ハケ	15
151	583		甕	8A	H2i7	9面	落ち込み2	弥生前期	底部内面ナデ、外面ハケ	15
154	584	119	トナの果皮	10C	L2b10	10面	13層	補紋晩期	上端部に人為的かどうか不明の穿孔	完形
154	585	120	深鉢	10C	L2b10	10面	15層	補紋晩期	内面横方向、外面下位横方向、上位横方向の擦痕	35
586	92		木棺底板	3I	G2e6	3面	3号墓第2主体部	弥生後期	高野燐製、II型、西側に段加工	70
587	92		木棺北側板	3I	G2e6	3面	3号墓第2主体部	弥生後期	高野燐製、II型	25
588	92		木棺南側板	3I	G2e6	3面	3号墓第2主体部	弥生後期	高野燐製、II型	50
589	92		木棺西小口板	3I	G2e6	3面	3号墓第2主体部	弥生後期	高野燐製、II型	—
590	92		木棺底板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第3主体部	弥生後期	高野燐製、II型?	50
591	92		木棺北側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第3主体部	弥生後期	高野燐製	45
592	92		木棺南側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第3主体部	弥生後期	高野燐製	40
593	92		木棺西小口板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第3主体部	弥生後期	高野燐製	60
594	93		木棺底板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第4主体部	弥生後期	高野燐製、II型、腐朽のためか段加工は不明瞭	95
595	93		木棺北側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第4主体部	弥生後期	高野燐製	80
596	93		木棺南側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第4主体部	弥生後期	高野燐製	85
597	93		木棺西小口板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第4主体部	弥生後期	高野燐製	—
598	93		木棺東小口板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第4主体部	弥生後期	高野燐製	—
599	94		木棺底板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第5主体部	弥生後期	高野燐製、I型?、木目に直交する人為的交溝?有	75
600	94		木棺北側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第5主体部	弥生後期	高野燐製	70
601	94		木棺南側板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第5主体部	弥生後期	高野燐製、段加工有り	70
602	94		木棺西小口板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第5主体部	弥生後期	高野燐製	—
603	94		木棺天井板	3I	G2e6,e7	3面	3号墓第5主体部	弥生後期	高野燐製	65
604	105		木棺底板	3I	F2i7	4面	10号墓第1主体部	弥生中期	高野燐製、II型、両端に段加工有り	完形
605	105		木棺北側板	3I	F2i7	4面	10号墓第1主体部	弥生中期	高野燐製、II型、両端に段加工有り	90
606	105		木棺南側板	3I	F2i7	4面	10号墓第1主体部	弥生中期	高野燐製、II型、両端に段加工有り	90

表21 掲載遺物一覧(9)

図No	遺物No	真No	器種名	H/F	地区	遺構面	遺構-層位名	時期	特徴	残存(%)
607	105		木棺西小口板	3I	F2i7	4面	10号墓第1主体部	弥生中期	高野模製	—
608	105		木棺東小口板	3I	F2i7	4面	10号墓第1主体部	弥生中期	高野模製	—
609	105		木棺底板	3I	F2j7	4面	10号墓第2主体部	弥生中期	高野模製、I型、両端に段加工有り	90
610	106		木棺底板	3I	F2j7	4面	10号墓第3主体部	弥生中期	高野模製、I型、両端に段加工有り	完形
611	106		木棺南側板	3I	F2j7	4面	10号墓第3主体部	弥生中期	高野模製、I型、両端に段加工有り	90
612	106		木棺西小口板	3I	F2j7	4面	10号墓第3主体部	弥生中期	高野模製	—
613	106		木棺底板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製、II型、両端に段加工有り	完形
614	106		木棺北側板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製、段加工有り、材の一部を斜めに加工	完形
615	106		木棺南側板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製、段加工有り、材の一部を斜めに加工	完形
616	106		木棺西小口板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製	完形
617	106		木棺東小口板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製	完形
618	106		木棺天井板	3I	F2j7	4面	10号墓第4主体部	弥生中期	高野模製、長辺部を斜めに加工	完形
619	107		木棺底板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製、II型、両端に段加工有り	完形
620	107		木棺北側板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製、II型、両端に段加工有り	完形
621	107		木棺南側板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製、II型、両端に段加工有り	完形
622	107		木棺西小口板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製	完形
623	107		木棺東小口板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製	完形
624	107		木棺天井板	3I	F2j7	4面	10号墓第5主体部	弥生中期	高野模製	完形
625	108		木棺底板	3I	G2a7	4面	11号墓第2主体部	弥生中期	高野模製	25
626	108		木棺西側板	3I	G2a7	4面	11号墓第2主体部	弥生中期	高野模製	15
627	108		木棺北小口板	3I	G2a7	4面	11号墓第2主体部	弥生中期	高野模製	—
628	108		木棺南小口板	3I	G2a7	4面	11号墓第2主体部	弥生中期	高野模製	—
629	74		輪羽口	3I	G2h7	1面	2層	—	先端部分にガラス質状の結晶が付着	—
630	74		輪羽口	3I	G2h7	1面	2層	—	同上	—
631	74		輪羽口	8A	H2i6j7	1面	2層	—	同上	—
632	74		鉦漳	3I	G2g6.g7	1面	井戸1	—	オリーブ黒色	—
633	74		鉦漳	3I	G2g6.g7	1面	井戸1	—	灰～オリーブ灰色	—
634	74		鉦漳	3I	G2g6.g7	1面	井戸1	—	灰～オリーブ灰色	—
635	74		鉦漳	3I	G2g6.g7	1面	井戸1	—	オリーブ黒色	—
636	74		鉦漳	3I	G2g6.g7	1面	井戸1	—	灰色	—
637	77		礎石	8A	H2i6	1面	1層	—	三角柱両端欠損	—
638	82		土師	3I	G2f7	2面	河川1	古墳中期	直径3cm、半壊	45
639	82		紅崖片岩	3I	F2i7	2面	河川1	古墳前期～中期	板状の片面はかなり摩耗	—
640	96		杭	13A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	芯持ち構材の先端を尖らす	—
641	119		杭	3I	G2b7	9面	12層	弥生前期	芯持ち構材を両端から加工	—
642	120		桃の種子	3I	G2b7	4面	11号墓南側周溝	弥生中期末～後期初頭	—	—
643	120		とちの実	3I	G2b7	4面	沼状遺構	弥生中期末～後期初頭	—	—
644	120		とちの実	10C	K2j10・L2a10	8面	河川6	弥生中期前半	—	—
645	120		どんぐり	10C	L2a9	8面	河川6	弥生中期前半	—	—
646	120		とちの実	10C	L2a9	8面	河川6	弥生中期前半	—	—
647	120		くるみ属	10C	L2a10	9面	溝35	弥生前期	—	—
648	120		くるみ属	10C	K2i9	9面	9層最下層	弥生前期	—	—
649	120		どんぐり	10C	K2i9	9面	9層最下層	弥生前期	—	—
650	120		くるみ属	11A	I2i7	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
651	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
652	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
653	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
654	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
655	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
656	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	5b層	弥生中期末～後期初頭	—	—
657	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑31	弥生中期末～後期初頭	—	—
658	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	—	—
659	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	—	—
660	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	—	—
661	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	—	—
662	120		桃の種子	11A	I2i6	4面	土坑30	弥生中期末～後期初頭	—	—
663	120		桃の種子	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末～後期初頭	—	—
664	120		桃の種子	14A	J2g7	4面	溝56	弥生中期末～後期初頭	—	—
665	77		延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7	初鋳造年907	—	完形
666	77		延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7	初鋳造年907,2枚付着	—	完形
667	77		延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7	初鋳造年907	—	95
668	77		延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7	初鋳造年907	—	95
669	77		延喜通寶	10C	K2j9	1面	溝7	初鋳造年907	—	60
670	82		加工木	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期?	杉材?両端に加工痕	—
671	82		加工木	3I	G2f7	2面	河川1	古墳前期?	板目取り、一端に加工痕	—
672	82		加工木	3I	F2j7	2面	河川1	古墳前期?	芯持ち構材の先端を加工、一端は潰れる	—
673	86		加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	芯持ち構材の先端を加工	—
674	86		加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	芯持ち構材の端部を截断	—
675	86		加工木	3I	G2d7	3面	河川3	弥生後期	芯持ち構材の側縁を杭状に加工	—
676	96		加工木	13A	J2a6	3面	河川1	弥生後期	芯持ち構材の先端を加工	—

付 章

巨摩遺跡出土の古墳時代前期の籠

— 出土例と保存処理について —

調査課第1係 専門調査員 藤田由里

巨摩遺跡3 I トレンチ第2面（古墳時代前期）水田畦畔内より竹製とみられる籠が出土した。本稿では各種の編物出土例から今回出土の籠をみていきたい。

1. 編物

編物とは『1本あるいは2本以上の細長い材料を用いて編み上げる手工。かご、むしろ、網、組ひも、布地などの種類があり、編む技術は人類のもつさまざまな技術の中では、もっとも早く発明されたものである。』¹⁾とある。この中から布地や組紐を除いて考えていきたい。

編み方には現代では様々な種類があるが、出土する編物には「網代編み」と「もじり編み」が中心にみられる。

「網代編み」とは縦条と横条を基本的には交互に潜らせて編んでゆく方法である（図1-1）。一方「もじり編み」とは縦条に横条を2本絡ませて編んでゆく方法である（図1-5）。また、網代編みの基本は1本越え1本潜り1本送りであるが、この数値が変化することによって様々な編み分けられる。これに加え、その条の太さ細さ等から「四つ目編み」（図1-3）、「箆目編み」（図1-2）、「六つ目編み」（図1-4）、「コイリング」（図1-6）等と呼ばれる。

「四つ目編み」とは最も簡単な網代編みのことで、縦条と横条の隙間が4つの目を配したように見える編み方である。「箆目編み」は縦条の間隔のみをあけて配置し、これと交差する横条を密に配置する組み合わせ方である。「六つ目編み」は大きな六角形と小さな三角形を編み目に持つ編み方である。この詳しい編み方は、次節で述べる。「コイリング」は横条上下2本を1本の縦条で交互にひっかけ、それをひとまとめにする。これを1単位とし、1単位のうちの横1条を別単位の横1条として絡めていく方法である。

出土報告例は世界各地からみられるが、日本では低湿地遺跡からすでに縄文時代以来からの出土例がみられる。出土数は少なくないが、多くの場合、断片であり、保管・保存が非常に難しい

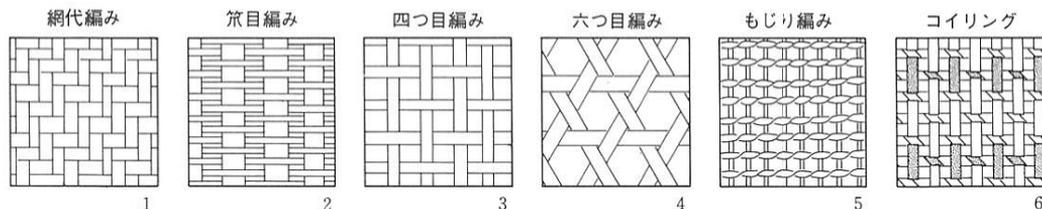


図1 編み目模式図

ために残せない場合が多い。

出土遺物から見た編物によって作られた道具の種類は、表1の通りであり、管見するところでは表2の出土編み物を見ることができる。

また、すでに網代編みに関しては、明治32(1899)年坪井正五郎によって網代圧痕のある土器から分類されている²⁾。坪井によれば53個体

の網代圧痕のある土器から、網代形編み物には7種類の編み方があるとしており、当時、坪井が実際に作成した編み方の写真が、『日本原始工芸概説』³⁾に掲載されている。

表1 出土遺物からみた編み物の種類

時代	編み物の種類
縄文	藍胎漆器 籠 編物
弥生	籠(土器を包む籠合) 笊 むしろ 釜 箕 編物
古墳	籠 箕 編物
7世紀	籠 笊 箕 釜
8世紀	籠 席 円座 網代 編物

2. 巨摩遺跡出土の籠

巨摩遺跡出土の籠は現在処理途中のために底部しか明らかではない。径約35cmの円筒形の六つ目編みの籠である(図3、写真1)。現代では六つ目編みは花編みと言われ、装飾的な編み方の基本となる編み方(図2)である。

巨摩遺跡の籠はおそらく表皮を残したままの幅1.0~1.5cmの竹条1本で編む。底部はまず3本の竹条を中央に正三角形が形成されるように組む。組んでできた正三角形の竹条を回しながら、一本ずつ増やしていき6本で六つ目底を作る。この六つ目が底の中心となる。底部から胴部の1行部分は同じ竹条で堅心に沿わせ、粹組を作っている。

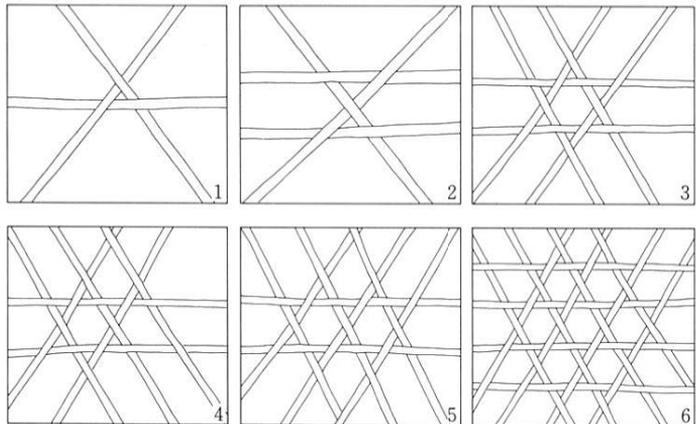


図2 六つ目の編み方

平城宮6AAC区S D 3035出土の籠(図4)は同様の技法がとられていると思われる例であり、時期は756年頃とされている。また、口縁部、胴部の仕上げは保存処理中のため明らかではないが、数本の竹条をあてがい、芯にしているようである。

3. まとめにかえて

表1・2には生活に密着していない資料、例えば滋賀県雪の山古墳から出土した鞆や正倉院宝物などは割愛している。この表から弥生時代の農耕文化の始まりとともに作成される編み物の種類も多様化していることが見受けられる。

生活に密着していない例を除外すると、このような六つ目編みの遺物は表2のように出土例は

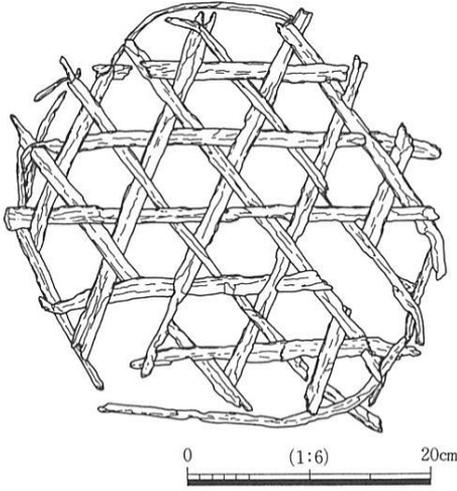


図3 巨摩遺跡出土の籠

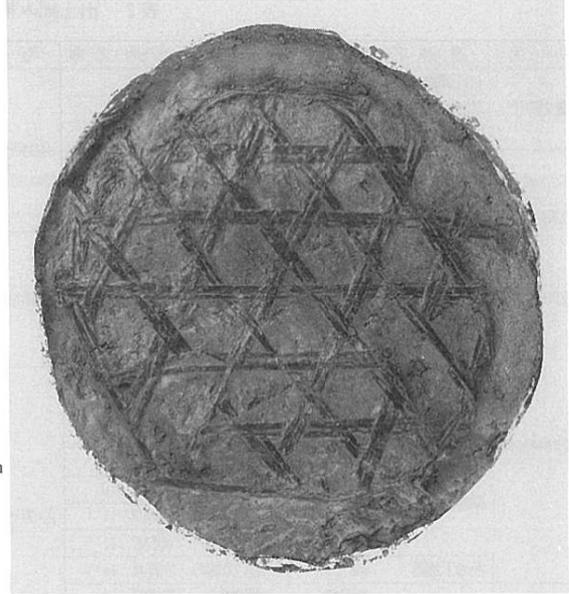


写真1 巨摩遺跡出土の籠 (S≒1/6)

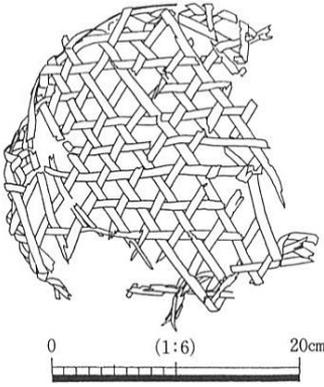


図4 平城宮出土の籠

少ない。これまでは奈良県纏向遺跡から出土した古墳時代前期の箕⁵⁾が、六つ目編みの製品としては最古の遺物であった。今回出土の籠はこれと同時期のものであり、六つ目編みの籠としては最も古い遺物ということになる⁶⁾。

現在、保存処理作業中であるが、処理後は様々な形で活用を望む。

注)

- 1) 「編物」『平凡社大百科事典』1972 P.345-347
- 2) 坪井正二郎 1899「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第14巻 第161号
- 3) 杉山寿栄男 1942『日本原始工芸概説』
- 4) 平城宮6AAC区S D3035出土の籠は竹条で円筒形に編まれた底部が残存している。竹条の幅は約0.7cm、底径約21cmである。『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所 1985
- 5) 石野博信・関川尚功 1976『纏向』榎原考古学研究所によるとこの箕は辻土壇4から出土しており、纏向3・4式の土器が共伴している。寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立榎原考古学研究所によると、実年代は3世紀後葉から4世紀中葉にあたる。
- 6) 巨摩遺跡3 I トレンチ第2面の古墳時代前期はおおよそ庄内式新段階から布留式中段階に相当すると思われる、寺沢薫1986によると実年代は3世紀後葉から4世紀中葉に相当する。

表2 出土編み物一覧

時代	遺跡名	種類(点数)	編み方	所在地	文献	時代	遺跡名	種類(点数)	編み方	所在地	文献	
縄文時代	山王遺跡	藍丹塗器	—	宮城県	1	弥生時代 後期	千種遺跡	籠	箆目編み	新潟県	33	
	岩田遺跡	籠	網代編み	山口県	2		宇津木向原遺跡	土器を包む籠	—	東京都	34	
	椎の木崎遺跡	籠	—	熊本県	3		臼奈遺跡	笠	—	大坂府	35	
縄文時代前期	曾畑遺跡	籠・笄(30)	—	熊本県	4		山前遺跡	笠	もじり編み	福岡県	36	
	真弦遺跡	籠類	もじり編み	石川県	5			籠	—	福岡県	36	
		編物(2)	もじり編み	石川県	5			編物	箆目編み	福岡県	36	
	鳥浜貝塚	籠類(2)	網代編み	福岡県	6			菅生遺跡	籠	—	千葉県	37
籠類(2)		もじり編み	福岡県	6	籠		簾状竹製品	—	千葉県	37		
縄文時代中期	筑野田遺跡	籠類	網代編み	滋賀県	2		古墳時代	井志遺跡	籠	六つ目編み	和歌山県	38
亀ヶ岡遺跡	藍丹塗器(7)	—	青森県	7	古照遺跡			簾状編物	—	愛媛県	39	
縄文時代後期	弁天池遺跡	籠類(2)	網代編み	東京都	8	湯新遺跡		籠	—	福岡県	40	
	布勢遺跡	籠	もじり編み	鳥取県	9	山前遺跡	籠	網代編み	宮城県	41		
		編物	—	鳥取県	9		籠	箆目編み	宮城県	41		
	栗谷遺跡	籠	網代編み	鳥取県	10		籠	網代編み	宮城県	41		
		編物	—	鳥取県	10		籠	箆目編み	宮城県	41		
	縄文時代後期	坂の下遺跡	籠(9)	もじり編み	佐賀県	12	古墳時代 前期	船田遺跡	土器を包む籠	—	東京都	1, 2
			籠類(2)	網代編み	青森県	13		白岩遺跡	—	—	静岡県	2
		土井1号遺跡	藍丹塗器片	網代編み	青森県	2		長岡京	—	箆目編み	福岡県	1
		石郷遺跡	藍丹塗器片	—	青森県	1		瓜生堂遺跡	籠	箆目編み	大坂府	1
		寺穴遺跡	藍丹塗器片	—	新潟県	14	鎌倉遺跡	笠	箆目編み	奈良県	42	
伊弉遺跡		藍丹塗器	網代編み	宮城県	2	笠		六つ目編み	奈良県	42		
荒室敷遺跡		籠類	網代編み	福岡県	2	籠(3)		網代編み	奈良県	42		
真福寺遺跡		藍丹塗器	網代編み	埼玉県	2	編物(2)		—	奈良県	42		
縄文時代後期	神郷下遺跡	藍丹塗器片24	—	愛知県	15	7世紀前半	穴大庵寺	笠	—	滋賀県	43	
	滋賀里遺跡	藍丹塗器片	—	滋賀県	16		7世紀後半	伊弉遺跡	笠(2)	—	静岡県	44
	岩田遺跡	籠類	網代編み	山口県	17	奈良時代		藤原宮跡	笄	—	奈良県	43
	原野敷遺跡	籠	—	東京都	18		伊弉遺跡	籠(7)	網代編み	静岡県	44	
	岡の平遺跡	籠	—	静岡県	19		—	箆目編み	静岡県	44		
	登呂遺跡	籠	網代編み	静岡県	20		平城宮跡	籠	—	奈良県	43	
	弥生時代	白岩遺跡	編物	—	静岡県	19	756頃	平城宮跡	籠	六つ目編み	奈良県	43
		箕田遺跡	—	—	三重県	21		770頃	平城宮跡	籠	六つ目編み	奈良県
			編物	—	三重県	21	784~794頃		長岡京跡	籠	六つ目編み	京都府
		深草遺跡	笄	—	京都府	19		席	—	京都府	45	
唐古遺跡		籠	—	奈良県	22	円座		—	京都府	45		
弥生時代前期		山石遺跡	笠	もじり編み	大坂府	23		編物	網代編み	京都府	45	
		鬼形川遺跡	笠	—	大坂府	24	円座	—	京都府	46		
		丁・柳ヶ渚遺跡	編物断片	コイルング	兵庫県	25	編物(3)	網代編み	京都府	46		
	福岡遺跡	籠	—	鳥取県	26	長志遺跡	籠	—	新潟県	47		
		籠類(5)	網代編み	愛知県	27	石上神土遺跡	籠	—	青森県	48		
	弥生時代中期	朝日遺跡	籠類(2)	網代編み	愛知県	27	伊弉遺跡	籠もしくは笄	—	静岡県	49	
		霊山寺遺跡	笠もしくは笠	—	滋賀県	1, 2	周防城城司遺跡	笄状編物	—	山口県	50	
			笠もしくは笠	—	大坂府	28	山王遺跡	笠	—	宮城県	51	
		亀井遺跡	籠	—	大坂府	29	平安京跡	編物	—	京都府	52	
			籠	—	大坂府	30	船場一向遺跡	笄	—	秋田県	53	
池上遺跡		籠(4)	網代編み	大坂府	31	年代不明	城輪遺跡	藍丹塗器	—	山形県	54	
瓜生堂遺跡		籠	網代編み	大坂府	1		高畑遺跡	藍丹塗器片	—	山形県	1	
里田京遺跡		籠	網代編み	長崎県	32		越中遺跡	編籠状製品	—	東京都	55	
		編物	もじり編み	長崎県	32		下曾我遺跡	笠	—	神奈川県	56	
		籠	網代編み	長崎県	32		納所遺跡	籠	—	三重県	19	
	籠	網代編み	長崎県	32	草千手堂遺跡		籠	—	広島県	1		
							大字印跡	編物	箆目編み	福岡県	57	
							横島山遺跡	籠	—	福岡県	58	

表2 文献

- 1 植松なおみ「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35 物質文化研究会 1980
- 2 渡辺誠「編み物の容器」『季刊考古学』第47号 雄山閣 1994
- 3 『椎の木崎遺跡試掘調査報告書』牛深市教育委員会 1989
- 4 『曾畑』熊本県教育委員会 1988
- 5 『真脇遺跡』能都町教育委員会 真脇遺跡発掘調査団 1986
- 6 『鳥浜貝塚』福井県教育委員会 1979
- 7 『亀ヶ岡遺跡』三田史学会 1959
- 8 『練馬区弁天池低湿地遺跡の調査 東京都住宅局』練馬区遺跡調査会 1989
- 9 『布勢遺跡発掘調査報告書』(財)鳥取県教育文化財団 1981
- 10 『栗谷遺跡発掘調査報告書2』福部村教育委員会 1989
- 11 『栗谷遺跡発掘調査報告書3』福部村教育委員会 1990
- 12 『坂の下縄文遺跡』佐賀県教育委員会 1971
- 13 保坂三郎『是川遺跡』中央公論美術出版 1972
- 14 『史跡 寺池遺跡』青海町 1987
- 15 『豊田市埋蔵文化財調査集報2』豊田市教育委員会 1975
- 16 『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡調査団 1973
- 17 『岩田遺跡』平生町教育委員会 1974
- 18 櫛 国男「竹籠を伴う壺形土器」『民具マンスリー』3巻 5・6号 1970
- 19 『出土木製品遺物の実態調査報告書 近畿・中国地方』元興寺仏教民俗資料研究所 1977
- 20 日本考古学協会編『登呂』東京堂出版 1978
- 21 『上箕田 鈴鹿市文化財調査報告第2冊』鈴鹿市教育委員会 1970
- 22 『京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊 大和唐古弥生式遺跡の研究』臨川書店 1943
- 23 『山賀(その3)』(財)大阪文化財センター 1984
- 24 『鬼虎川遺跡発掘調査概要1』(財)東大阪市文化財協会 1988
- 25 『兵庫県文化財調査報告書30』兵庫県教育委員会 1985
- 26 『福岡遺跡』(財)鳥取県教育文化財団 1993
- 27 『朝日遺跡2(本文編2・図版篇)』愛知県教育委員会 1982
- 28 『亀井』(財)大阪文化財センター 1981
- 29 『亀井遺跡II』(財)大阪文化財センター 1984
- 30 『亀井・城山』(財)大阪文化財センター 1980
- 31 『池上遺跡 第4分冊の2 木器編』(財)大阪文化財センター 1978
- 32 『里田原遺跡』長崎県教育委員会 1974
- 33 『千種 新潟県文化財報告書1・考古編』新潟県教育委員会 1953
- 34 『宇津木遺跡とその周辺 中央高速道八王子子地区遺跡調査団』八王子市教育委員会 1973
- 35 『巨摩・瓜生堂』(財)大阪文化財センター 1982
- 36 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第12集』福岡県教育委員会 1979
- 37 『上総菅生遺跡一昭和47年度第1期調査速報一』菅生遺跡調査団 木更津教育委員会 1973
- 38 『井辺弥生式遺跡発掘調査報告 社会教育資料24』和歌山市教育委員会 1965
- 39 『古照遺跡』古照遺跡調査団 1974
- 40 『福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査』福岡市教育委員会 1976
- 41 『山前遺跡 第10次発掘調査概報』多賀城市埋蔵文化財調査センター 1976
- 42 『纏向』橿原考古学研究所 1976
- 43 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1985
- 44 八木勝行「7世紀後半の釜一静岡県伊場遺跡出土一」『民具マンスリー』6巻 5・6号 1973
- 45 「長岡京跡左京第13次(7ANESH地区)発掘調査報告」
『向日市埋蔵文化財調査報告書第4集』向日市教育委員会 1978
- 46 「長岡京跡左京第51次(7ANESH-4地区)～左京二条二坊六町～発掘調査報告」
『向日市埋蔵文化財調査報告書第7集』向日市教育委員会 1981
- 47 『六日町文化財調査報告第2輯 長表遺跡』六日町教育委員会 1975
- 48 『石上神社遺跡発掘調査方報告書 青森県文化財報告書15』青森県教育委員会 1977
- 49 『伊場遺跡・遺物編I 伊場遺跡調査報告3』1978
- 50 『周防鑄銭司跡』山口市教育委員会 1978
- 51 『山王遺跡一第10次発掘調査概報一』多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991
- 52 『平安京三条西殿跡発掘調査報告 平安博物館研究紀要3』(財)古代学協会 1971
- 53 『出土木製品遺物の実態調査報告書 北海道・東北・関東』元興寺仏教民俗資料研究所 1978
- 54 『史跡城輪柵跡一昭和51年度発掘調査概要一』酒田市教育委員会 1977
- 55 宇田川 洋「編みカゴ状木製品」『貝塚 12』物質文化研究会 1974
- 56 『考古学資料室要覧 下曾我遺跡出土遺物』国学院大学考古学資料室 1973
- 57 『太宰府跡』九州歴史資料館 1977
- 58 『横限山遺跡』小郡市教育委員会 1974

参考文献

- 小林行雄 『続古代の技術』 1963
『木器集成図録 近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所 1993
岡 千鶴 『藤工芸 皮籐の華』 NHK出版 1994

保存処理日誌

以下の保存処理に関しては、山口誠治技師の指導のもとに藤田がおこなった。

- 94年4月 3 I トレンチF2j7地区、第2面古墳時代前期水田面より枠組のみが露出した状況で、出土し、周りの土ごと取り上げる。
- 8月 現場から底部が上面になって処理依頼がきたので、土を少しずつ退け、底部外面の籠目を明らかにする。
- 9月5日 処理を始める。
まずPEG4000の5%水溶液を塗布する。ひびには特に念入りに塗布した。以後5日間1日数回、PEGが乾いては塗布することを繰り返す。
- 9月12日 天地を逆にする。
①籠を囲むように枠を作る。
②新聞紙を短冊状に切り、PEG4000の5%水溶液に浸し、表面（底部外面）に張りつける。
③発砲ウレタンを新聞紙の上から流し、硬化させる。
④天地を逆にする。
⑤取り上げ時使用した石膏を割り、地表面（籠口縁部）をだす。
⑥籠胴内部の土を取り除いていく。
- 9月16日 口縁部が見え始める。
- 11月18日 籠底部内面近くに到達するが、多数のひびが発生しているのを発見する。これは籠底部内面とウレタンの間に空間ができたためである。
- 11月29日 籠胴部内面にPEG4000の30%水溶液をスプレーガンにより噴霧し、トマックNR50を塗布した後、自然乾燥させる。
- 12月1日 内面から籠底部内面の露出は困難と判断したため、外面のみの露出に変更する。アラルダイトGY252とマイクロバルーンを混合させ、約半分塗布したところでガラスウールを貼り、もう半分の混合液を塗布し、乾燥させる。
- 12月6日 再度天地を逆にし、底部外面をだし、PEG4000の50%水溶液塗布しながら乾燥させる。
- 以後1ヵ月間、ひびにPEG4000の50%水溶液と土を練り合わせ、埋めていく修復作業をしつつ、PEGを乾燥させては塗布することを繰り返す。以下、続行中である。